▶開発系統から見る傑作VF〈VF-1系〉

VFの始祖VF-1とその後継者たち

VF-1といえば、全ての可変戦闘機(VF)の始祖にして、人類が第一次星間大戦を乗り越えたことを語る上で欠かせない機体である。本機が第一次星間大戦での戦局は勿論、後続の機体に与えた影響は計り知れない。ここでは、VF-1の機体特性やバリエーション機の改修点、または後続機が受け継いだ点、受け継がなかった点などを例に、汎用主力VFの進化の過程を振り返っていく。

2000年代中盤〜後半

試作機 VF-0 フェニックス

開発元:ノースロップ・グラマン/ストンウェル/新星インダストリー

2004年12月　1号機完成

▲通常タイプ ZERO
VF-0A

▲性能向上型 ZERO
VF-0S

▲デルタ翼試験型 ZERO
VF-0D

2006年　試作開始

▲追加試作機 M
VF-X
開発元:ストンウェル/ベルコム/新中州重工/センチネル

熱核反応タービン・エンジンの完成

VF-0の開発において最も難航した点は、熱核反応タービン・エンジンの開発であった。しかしエンジンが完成すると、VF-0の名パイロットとして活躍したロイ・フォッカーがテストパイロットとして多大な貢献を果たしたこともあり、VF-1の完成まで機体開発は比較的スムーズに進行したと言われている。

オプション　VF-0用

▶VF-0用 リアクティブアーマー ZERO

▲VF-0用脚部 コンフォーマルタンク ZERO

オプション　VF-1用

◀GBP-1S プロテクター・ウェポンシステム 開発元:新中州重工 M

▲スーパーパーツ 開発元:新中州重工 M

▲火力増強型 スーパーパーツ 愛

▲大気圏脱出用ブースター M

▲VT-1 オストリッチ用スーパーパーツ 愛

2000年代末

VF-1 バルキリー

開発元:ストンウェル/ベルコム/新中州重工/センチネル

初の可変戦闘機のVF-1であったが、第一次星間大戦当時は別の機種を開発する時間的余裕に乏しかったこともあり、無数のバリエーション機の誕生を促した。これらは本機の汎用性の高さがなければ完成しなかったであろう。

2008年11月　量産1号機完成

▲量産タイプ M 愛
VF-1A

▲日本生産仕様 M
VF-1J

▲指揮官用改良型 M 愛
VF-1S

その他のVF-1バリエーション

▶YVF-1A
VF-Xの追加試作機のA型仕様。

▶VF-1B
頭部をS型用のものと換装したA型。現地改修機であるため、型式番号は正式なものではない。

偵察・哨戒用

▲偵察用改修機 愛
VE-1 エリントシーカー

第一次星間大戦後のVF-1バリエーション

▲銀河クジラ漁業用 D7
VT-1C オストリッチ

D7
▲船外補修用改造機 作業用バルキリー

D7
▲辺境惑星のパトロール隊機

▶VF-1X-plus
2020年代以降に、エンジンやアビオニクスなどを最新のものにアップデートしたVF-1の総称。

▶VF-1X++
新星インダストリーが2047年に少数生産したVF-1Xplusの発展改修型。主に素性を隠す必要がある特務部隊が運用した。

訓練用

▲複座型訓練機 M
VF-1D

▲複座型訓練機 愛
VT-1 オストリッチ

2010年代初頭〜2020年代

後継機の模索時期

▲VF-4の試作機 M
VF-X-4

その他のVF-1の後継機

▶VF-X-2
VF-1の競合機種の試作型。VF-1以上にOTMを取り入れていたが開発が遅れ、制式採用に至らなかった。

▶VF-X-3
VF-X-4との競合試作に掛けられた試作機。

▶VF-5
宇宙専用の機体。VF-11の導入が始まると同時に順次退役した。

空間戦闘用後継機 VF-4 ライトニングIII

開発元:ゼネラル・ギャラクシー

2012年2月　量産開始

◀量産タイプ FB
VF-4

▲後期量産タイプ 他
VF-4G

VF-3000ベースの発展型 VF-5000 スターミラージュ

開発元:新星インダストリー

2020年　量産開始

◀量産タイプ 他
VF-5000B

▲後期量産タイプ D7
VF-5000G

▲複座型量産タイプ D7
VF-5000T-G

▲VF-11の試作機 他
VF-X-11

汎用主力機不在の時期

この時期はVFの開発メーカーの合併や、新興メーカーの参入が見られる。そのためVF-1の後継機の開発はコンペ形式で行われ、部分的にVF-1を超える機体が多数生み出された。しかし、VF-1最大の長所である高い汎用性を受け継いだ機体はなかなか誕生せず、2015年の生産終了までVF-1は運用された。

◀大型化による発展型 他
VF-3000 クルセイダー
開発元:ストンウェル/ベルコム

2020年代末

汎用型の正統後継機 VF-11 サンダーボルト

開発元:新星インダストリー

2029年　量産開始

▲前機量産タイプ PLUS
VF-11B

▲後期量産タイプ 7
VF-11C

▲サウンドブースター搭載型 7
VF-11D改

▲個人用カスタム機 7
VF-11MAXL改

YF-19へ▶

EXTRA REPORT

関連事項

VF-1系の"影" SV-51

SV-51は統合戦争当時、VF-1の試作型にあたるVF-0のライバル機であった。本機を開発した反統合同盟は、統合軍に先んじてVF同士の戦闘を想定。そのためVF-0より1〜2年ほど開発は先行し、機体の技術的熟成がなされた結果、実質的に急造機に近かったVF-0を上回る性能を獲得した。統合戦争後も本機をベースとしたSV-52が開発・運用されるなど、機体の完成度は高く評価されており、反統合同盟が統合戦争に勝利していた場合、SV-51系統の機体が第一次星間大戦の主力となっていた可能性も否定できない。

◀エースパイロット用 カスタムタイプ ZERO
SV-51γ

▶量産タイプ ZERO
SV-51α

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶開発系統から見る傑作VF〈VF-1系〉

VF-0 フェニックス

VFというカテゴリを創設した不死鳥

可変戦闘機という概念を確立、実証した記念すべき機体。機体の構造、変形機構、エネルギー転換装甲はこの時点でほぼ完成しており、そのままVF-1へと受け継がれている。一方で、機体に見合うエンジンが未完成だったため、主機としてターボファン・エンジンが用いられるなど、VF黎明期ならではの問題点を抱えていた。

◀VF-0A

VF-X

VF-1の完成に貢献した試験飛行タイプ

VF-1の各種機構、空力モーメントのテストを目的とした試作機。この時点でVF-1の基本的なフォルムは完成していた。細部は開発の進行とともに、随時変化した模様。

VF-1 バルキリー

高い汎用性を備えた元祖VF

VF-0が抱えていた主機の出力不足という問題を、熱核反応タービン・エンジンを搭載することで克服。結果、VF-1は本格的に量産可能な初のVFとして完成した。その汎用性は非常に高く、後述するオプションの追加や小改造により、あらゆる任務に対応できた。

▼VF-1A

パーソナルカラーの機体も数多く存在した。また、生産時期によってアビオニクスや機体の細部に差異が見られる。

VF-1の特性
- 3形態への変形による汎用性の高さ
- エネルギー転換装甲の採用による既存の兵器を上回る防御力
- オプションの増設や小改造に対応できる機体キャパシティの広さ

VF-1の中でも、最も生産数が多いタイプであることから、曲技飛行に回された機体も少なくない。こちらはエンジェルバーズ仕様機。

■第一次星間大戦後のVF-1バリエーション

2030〜2040年代になると、新型のVFが次々と開発・採用されていったこともあり、旧式機と化した数多くのVF-1が民間へと払い下げられていた。特に辺境惑星では自衛用、あるいは銀河クジラ等への対抗策として有効に用いられた。

◀惑星ゾラ改修機
VT-1C オストリッチ
捕鯨用に改修されたVT-1。銀河クジラ捕獲のため、ハープーン型のガンポッドを装備している。

VT-1からの変更点
- 頭部ユニットの変更
- 背部・脚部ブースターの交換
- 前腕部他へのフックの増設
- ハープーン型ガンポッドの実装

▶作業用バルキリー
マクロス7の修理に用いられていた改造機。前腕が溶接機に変更されている。

◀辺境惑星のパトロール隊機
辺境の惑星では、2040年代でもVF-1が主力機として運用されていた模様。

VF-1用 オプション

高い汎用性を誇るVF-1であったが、決して万能兵器ではない。そこで、戦況や任務に応じるオプションパーツが開発された。これらはVF-1の戦果は勿論、後のVF開発にも多大な貢献を果たした。

◀スーパーパーツ

▲火力増強型
スーパーパーツ

変形対応型オプション

VFの特徴である可変機構に干渉することなく、その性能を向上させる。代表的なものは、推進器とコンフォーマルタンク、武装が一体となったスーパーパーツや、その火力増強型だろう。

主翼にもミサイルランチャーの懸架は可能であり、これらを一斉発射した際の火力は圧倒的であった。

◀GBP-1S
プロテクター・
ウェポンシステム

強行突入や単独迎撃に適したオプション。バトロイド時の近接戦闘における剛性を増すほか、デストロイドに匹敵する火力をVF-1に与える。

非変形対応型オプション

装備することでVFの特徴である変形が不可能になるタイプのオプション。汎用性を犠牲にする分、特定の機能を飛躍的に向上させる。使用後はデッドウエイトと化す場合が多く、パージされる傾向が強い。

▶大気圏外脱出用ブースター
VF-1単独での大気圏脱出を目的に開発されたブースター。使用後は自動操縦で打ち上げた基地へと帰還する。

VF-1 バルキリー 機体バリエーション

VF-1には一般的なA型以外にも、エースパイロット用、練習用といったバリエーション機が存在する。機体が高度にユニット化されていたため、こうした仕様の変更が比較的容易であったようだ。また生産地域によっても仕様に差異が見られた。変形機構の都合上、外見的には多少変わった程度の変更でも、実際にはエンジンの交換や電子機器の変更など、細部に至るまで手が加えられていた。

制式採用機 バリエーション

◀VF-1S
VF-1Aのライセンス生産を行ったノースロム社が開発した指揮官用モデル。一般機と比べると、頭部ユニットが火力と通信機能を強化したタイプに交換されている。

開発・生産:ノースロム
専用頭部生産:九星重工

専用の頭部ユニットは高い性能を獲得したものの高コストであった。そのため本機の生産数は少ない。

VF-1Aからの変更点
- 頭部レーザー機銃の増設(A型:1門→S型:4門)
- 通信機能の強化
- エンジンの換装による機動力の向上(FF-2001Dを採用)

◀VF-1J
JはJapanの意。日本で生産された火力強化タイプで、S型の頭部も生産した九星重工製の頭部に交換されている。後期生産分では、エンジン等にも改良が加えられた。

開発・生産:新中州重工
専用頭部生産:九星重工

A型と同じく機体のカラーバリエーションは豊富だが、コストの問題からA型と比べると生産数は少ない。

VF-1Aからの変更点
- 頭部レーザー機銃の増設(A型:1門→J型:2門)
- 電装系の改良(後期生産分より)
- エンジンのチューンナップによる性能向上(後期生産分より)

訓練機 バリエーション

▶VF-1D
機首ブロックと頭部ユニットを専用のものに交換したタイプ。コクピットが複座式になっている点が特徴。練習機であるものの、実戦にも耐えうる十分な性能を持つ。

VF-1Aからの変更点
- 頭部レーザー機銃の増設(A型:1門→D型:2門)
- 機首ブロックの変更によるコクピットの複座化
- 複座化、練習機化に伴う専用の飛行プログラムの導入

▲VT-1オストリッチ
ノースロム社が生産を行った機種転換訓練用の機体。こちらも複座型のコクピットを採用している。しかし、あくまで練習用の機体であるため、武装は施されていない。プロペラントの容量を増した、専用のスーパーパーツを有する。

VF-1Aからの変更点
- 機体各部への各種センサーおよびレーダーアンテナの増設
- 頭部ユニットの交換
- 機体の非武装化
- 機首ブロックの変更によるコクピットの複座化
- 複座化、練習機化に伴う専用の飛行プログラムの導入

偵察機 バリエーション

▶VE-1エリントシーカー
VT-1と同仕様の複座式の機体に、新中州重工開発の索敵・空中管制用パックを装着した電子戦用のバリエーション機。実戦ではSDF-1マクロスの目として活躍した。電子戦用の各種装備を追加したことで、機体形状はVF-1から大きく変化した。

機体の小改造と専用パックの装備だけで、VF-1は偵察機として生まれ変わったと言える。VF-1の汎用性の高さを物語る一例だ。

VF-1Aからの変更点
- 機体各部への各種センサーおよびレーダーアンテナの増設
- 頭部ユニットの交換
- 機首ブロックの変更によるコクピットの複座化
- 複座化、電子戦に対応するための飛行プログラムの導入

MRFとしてのVF-1

2010年頃までは、任務に合わせてVF-1以外の機種を選ぶことが事実上、不可能であった。そのため、VF-1のみであらゆるミッションをこなす必要があり、結果的にVF-1は歴史に残るMRF(マルチロールファイター)として人々の記憶に残った。

VF-1の後継機たち

その完成度の高さが災いし、VF-1の後継機種の開発は難航を極めた。第一次星間大戦後に完成した幾つかの後続機は機体特性に一長一短があり、真の意味での後継機の誕生は、VF-1に匹敵する汎用性を備えたVF-11の完成まで待たねばならなかった。

▶VF-4 ライトニングⅢ
宇宙空間における機動性を重視した後継機。戦闘力は40パーセント向上したものの、大気圏内での機動性はVF-1に及ばない。

VF-1との相違点
- ゼントラーディの技術の導入によるフォルムの変化
- 機体の大型化によるプロペラント容量と武装搭載能力の向上
- 内蔵武装の増加による火力の向上

▶VF-3000 クルセイダー
VF-1をベースに、機体を大型化させた発展機。蓄積されたVF-1のデータが活かされているため、VF-1の欠点を改善している。

VF-1との相違点
- 機体の大型化によるプロペラント容量と武装搭載能力の向上
- VF-1の変形機構の見直しによる機体構造の脆弱性の解消

▶VF-5000 スターミラージュ
VF-3000同様、VF-1をベースとした機体。同種のコンセプトのVF-3000より後発なため、機体の信頼性および完成度は高い。

VF-1との相違点
- 大気圏内での機動性の向上
- 高いステルス性の獲得
- 既存技術のブラッシュアップによる機体サイズの小型化

▶VF-11 サンダーボルト
大気圏内外問わず、高い性能を発揮した。VF-4とVF-5000の長所を全て備え、短所を克服した真の多目的戦闘機である。

VF-1との相違点
- 機体の大型化によるプロペラント容量と武装搭載能力の向上
- 高いステルス性の獲得
- 防弾シールドの装備

ゼネラル・ギャラクシー社の躍進とAVF計画

可変戦闘機(VF)の歴史において、2020年代～40年代は慌ただしい時期に当たる。VF-1 バルキリーを開発した航空機メーカーが合併した新星インダストリーの対抗馬として、ゼネラル・ギャラクシー社が台頭を見せ、熾烈な開発競争が展開されたためだ。両社の最も有名な対決は、次期全領域戦闘機開発計画、すなわちAVF計画におけるYF-19とYF-21のコンペティションだろう。どちらも当時の最新技術が惜しみなく投入されていたが、両社のVFにおける開発指針の違いが、機体特性およびコンペの明暗を分ける結果となった。また再設計機であるVF-171を含め、長期に渡り運用され続けたVF-17もこの時期に開発された機体である。

2030年代前半

2034年 開発開始

開発元:新星インダストリー

▲試作機 YF-19

2040年代

VF-19 エクスカリバー 機体バリエーション

2041年 制式採用

本機は圧倒的な機動力を誇ったものの、操縦性がピーキーという欠点を抱えていた。この問題は改良が重ねられた結果、本格的な量産タイプとなったB型の段階である程度解消された。E、F型では、機体形状の変更が施された結果、安定性が高められた。

制式採用機

▲初期量産タイプ VF-19A

▲後期量産タイプ VF-19F

▲指揮官用改良型 VF-19S

個人用

▲特殊仕様タイプ VF-19改 "熱気バサラスペシャル" (ファイヤーバルキリー)

改修機

▲センサー機能強化タイプ VF-19P

2050年代以前の機体バリエーション

▲エースパイロット用カスタムタイプ VF-19 ADVANCE

オプション VF-19系用

▲YF-19用 FASTパック

▲YF-19用 フォールド・ブースター

▲VF-19改用 サウンドブースター

▲YF-19用 大気圏内外両用ブースター

AVF計画によるイノベーション

AVF計画は、新星インダストリーの開発したYF-19と、ゼネラル・ギャラクシーのYF-21のコンペ形式で行われた。前者は既存技術を大胆にブラッシュアップし、極限まで機動性が追求され、後者は新技術がふんだんに盛り込まれた先進性が特徴であった。そして両機の開発において、アクティブステルスの進化やピンポイントバリアの小型化などの技術革新が進む成果を生んだ。

2040年代後半～2050年代末

VF-171 ナイトメアプラス 機体バリエーション

開発元:ゼネラル・ギャラクシー

VF-17の再設計機。高コストやパイロットの練度不足などで配備が進まないVF-19やVF-22の代替機として開発された。2050年代末には新統合軍の制式主力機として活躍した。

2046年 初飛行

◀量産タイプ VF-171

◀対バジュラ改造タイプ VF-171EX

◀偵察用改修機 RVF-171EX

▶偵察用改修機 RVF-171

オプション VF-171系用

▲アーマードパック

▲アーマードパック

ゼネラル・ギャラクシー社の台頭が意味するもの

第一次星間大戦以降、分散していたVFの開発メーカーの統合・整理が進められた。OTMの研究機関であったオーテックほか数社は2017年に合併し、ゼネラル・ギャラクシー社が発足する。同社はOTMのオーソリティーとして培ってきた、ゼントラーディの技術をふんだんに盛り込んだVFを次々と開発。地球側がゼントラーディの技術を駆使できるようになったことを示した。

2030年代後半

VF-17 ナイトメア 機体バリエーション

開発元:ゼネラル・ギャラクシー

パッシブステルス技術が駆使されたステルス型VF。コストは比較的高いものの、火力と機動性の高さが評価され、特殊任務機として運用された。

2037年 量産開始

▼指揮官用改良型 VF-17S

▼特殊仕様タイプ VF-17T改

▲量産タイプ VF-17D

オプション VF-17系用

▲VF-17用 スーパーパーツ

▲VF-17用 レドーム

▲VF-17用 フォールドブースター

▲VF-17T改用 サウンドブースター

2020年代前半

2022年 量産開始

開発元:ストンウェル/ベルコム

▲試作機 VF-X-10

▲量産機 VF-9 カットラス

2020年代末

2028年 量産開始

開発元:ゼネラル・ギャラクシー/メッサー

▲量産機 VF-14 バンパイア

2030年代前半

2034年 開発開始

開発元:ゼネラル・ギャラクシー

▼試作機 YF-21

オプション VF-22系用

▼YF-21用 FASTパック

▼YF-21用 フォールド・ブースター

2040年代

VF-22シュトゥルムフォーゲルII 機体バリエーション

開発元:ゼネラル・ギャラクシー

VF-17の後継となる特殊作戦機。VF-17を凌駕する機動性とステルス性能を有したが、同時にコストも上回ったため、生産数は少ない。

2042年12月 特殊作戦機として採用

▼量産機 VF-22

▼指揮官用改良機 VF-22S

YF-24へ▶

ネオ・スタンダードとなったYF-24の後継機

VF-19やVF-22の完成により、可変戦闘機(以下VF)の開発は一旦頂点を迎えた。だが、同時に数々の問題点が顕在化し、進化の袋小路へと入ってしまう。VFの高性能化が進んだ結果、戦闘機とは不可分の強烈なGが機械的な限界、あるいはパイロットの肉体的な限界を超えてしまったのだ。

しかし、この問題を解決する耐G装備であるISCとEX-ギア・システムの開発によって、VFの開発は新たなステージへと突入する。これらの技術を採用したYF-24は次世代のVFの在り方を決定づけた。また後続機に多大な影響を与え、その因子を受け継いだ機体が幾つも生み出されている。

関連事項 EXTRA REPORT

機体の多様化を促した工廠制度

2040年代以降は、各移民船団が工廠を持つことが当たり前となっている。また、マクロス・フロンティア船団内に存在するL.A.I社のように船団内の機械メーカーがVF開発に携わる例も少なくない。そのため同じ機種でも、船団ごとに差異が見られたり、無数のバリエーションが生み出される結果となった。また各移民船団がそれぞれの特色に合わせた機体を運用する傾向が強まった。

バジュラ戦役における、フロンティア船団のVF-25とギャラクシー船団のVF-27の対決は、この時期のVF開発の状況を端的に示している。

機体のマイナーチェンジは勿論、各種オプションも船団ごとに改修が加えられた。特に汎用性の高いVF-25はその種類が豊富であった。

2040年代初頭

▲試作機 YF-24 エボリューション

開発元:新星インダストリー/ゼネラル・ギャラクシー

2050年代後半

▲試作機 YF-25 プロフェシー

開発元:新星インダストリー/L.A.I

YF-24から分化した2機種

開発当時の最新技術が惜しみなく投入されたYF-24は、コンセプトの異なる2機種に分かれることとなった。かくして、常人が扱える機体であることを目指しつつ、より汎用性を高めたVF-25と、インプラント技術で身体能力を向上させたサイボーグパイロットの搭乗を前提とし、さらなる性能を求めたVF-27が誕生する。いわばこの2機種は兄弟機の関係にある。また、VF-25とVF-27の実戦運用が進んだ2050年代末にはYF-29が完成している。機体構造的にVF-25とVF-27の特性を併せ持つことに加え、フォールド・ウェーブ・システム(以下、F.W.S)を本格的に導入した初の機体となった。言うなれば一旦は別れたYF-24の因子が、それぞれブラッシュアップされて再びひとつとなり、画期的な機構を盛り込まれたことで野心作へと変化したのだ。こうして俯瞰すると2050年代は、まさにYF-24とその子孫の時代であったと言っても過言ではない。

2050年代後半

VF-27 ルシファー 機体バリエーション

開発元:ガルドワークス

▲量産タイプ VF-27β

▲スペシャルチューンタイプ VF-27γ

オプション VF-27用

▲VF-27用 スーパーパーツ

▲VF-27用 スーパーフォールド・ブースター

2050年代末

VF-25 メサイア 機体バリエーション

開発元:新星インダストリー/L.A.I

マクロス・フロンティア船団の次期主力機を目標に開発された機体。新星マクロス・フロンティア工廠と、L.A.I社の共同による設計修正を加えられて完成した。ISCやEX-ギア・システムを導入した初の量産機であり、政治的理由から新統合軍に代わって民間軍事プロバイダーであるS.M.Sが運用した。それまでのVFを遥かに上回る性能を発揮し、バジュラ戦役ではS.M.Sの主力として多大な戦果を挙げた。

哨戒・偵察用

▲偵察用改修機 RVF-25

制式採用機

▲量産タイプ VF-25A

▲指揮官用改良型 VF-25S

▲空戦能力改良型 VF-25F

▲狙撃用カスタム型 VF-25G

オプション VF-25用

▲SPS-25S/MF25 スーパーパーツ

▲APS-25A/MF25 アーマードパック

▲フォールド・ブースター (図のスーパーパーツは含まない)

▲VF-25用 トルネードパック

2050年代末

▲フォールド・ウェーブ・システム(F.W.S)対応型試作機 YF-29 デュランダル

開発元:新星インダストリー/L.A.I

オプション YF-29用

◀YF-29用 スーパーパーツ

2060年代初頭

▲フォールド・ディメンショナル・レゾナンス・システム(F.D.R)対応型試作機 YF-30 クロノス

開発元:S.M.S部署ウロボロス支社

関連事項 EXTRA REPORT

2040年代以降の技術革新

YF-24とその子孫を語る上で、以下の技術は欠かせない。特にISCの恩恵は大きく、無人戦闘機であるゴーストシリーズに匹敵する機動性を機体にもたらした。ただし、その中枢であるフォールド・クォーツは非常に希少なものであり、機体のコスト高騰の原因ともなった。

▼ISC

Inertia Store Converter(慣性蓄積コンバーター)の略。慣性を一時的に蓄積、徐々に解放することでパイロットを守る技術。

▼フォールド・クォーツを利用した技術

超高純度フォールド・クォーツを利用した、フォールド・ウェーブ・システムなどの画期的なエネルギー供給機構が実用化された。

▼EX-ギア

VFの操縦桿と耐G装備を兼ねたパワードスーツ。搭乗者の生存性を向上させる。

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶開発系統から見る傑作VF〈VF-17系／VF-19系／VF-22系〉

YF-19

既存技術の集大成として開発されたAVF計画の片翼

ピンポイント・バリア・システムと第三世代アクティブステルス・システムを導入した初のVF。機体そのものはブラッシュアップされた既存技術で構成されており、信頼性が高い。また前進翼により驚異的な大気圏内での運動性能を獲得。こうした機体の完成度の高さからYF-21との採用コンペに勝利した。

本機のテストは当初は難航したが、天才的な操縦センスを持つイサム・ダイソンがテストパイロットを務めるようになって以降、飛躍的に進んだと言われている。

YF-19／VF-19の特性
- 前進翼や空力制御装置の導入によって獲得した圧倒的な運動性能
- 超AI採用型アビオニクスや第三世代アクティブステルスの導入
- ピンポイント・バリアの採用とそれを応用した近接格闘戦能力の向上

VF-19 エクスカリバー

腕利きパイロットのみが乗ることを許された“聖剣”

YF-19の制式採用タイプ。試作機の優れた機動性を受け継いだが、同時に操縦の難易度が高い機体となった。またコストの高さという問題もあり、当初の次期主力VFというコンセプトに反し大量配備はされなかった。

◀VF-19A
初期生産型で、外観や性能はほぼYF-19と変わらない。やはり乗り手を選ぶ機体であることから生産数は少数に留まり、エースパイロット用の特殊作戦機として運用された。本タイプは地球統合軍第727独立戦隊VF-Xレイヴンズ所属のエイジス・フォッカー機が有名である。

YF-19からの変更点
- 量産に際し行われたカメラアイをはじめとするパーツの一部変更・再調整
- コクピットの補助席廃止

▶VF-19F
操縦性を改善するため、機体形状や機体制御OSに変更が加えられたモデル。そのため生産数も比較的多い。

VF-19Aからの変更点
- 搭載エンジンをFF-2550Fに変更
- 主翼の大型化
- カナード翼をはじめとする一部空力デバイスの撤廃

▶VF-19S
指揮官用の改良型。図はF型ベースのもので、それまでのS型機体と同じく頭部が変更されている。運用目的上、生産数は少ない。

VF-19Fからの変更点
- 搭載エンジンをFF-2550Jに変更
- 対空レーザー機銃を4門追加した専用頭部に換装

VF-X-10

GG（ゼネラル・ギャラクシー）ならではの先駆的なテスト機

VF-9の空力特性や機構を調べるために開発されたテスト機。前進翼や大型キャノピーを採用したことで生じた個性的なフォルムを有する。インテークは異物吸引防止のため回転式であった。

VF-9 カットラス

挑戦的な機体構造を有した野心作

小型の軽戦闘機というコンセプトで開発された機体。同時代のVFの中では、機体の軽量化もあって加速、上昇性能に優れており、大気圏内での空戦能力が高い。

VF-X-10からの変更点
- OTMの採用によるドラスティックな変形機構の採用
- 機体の軽量化とFF-2019エンジンの採用による高い機動性
- 機体サイズと変形機構に起因するペイロードの縮小

VF-14 バンパイア

堅牢な機体を誇る空の吸血鬼

VF-11と後継主力機の座を争ったVF。主力機としての採用は行われなかったが、ライセンス生産という形で制式採用が行われた。

VF-14の特性
- 大型機ゆえの航続距離の長さとペイロードの大きさ
- 機体構造の堅牢さとそれに起因する耐用年数の長さ
- 固定武装の豊富さ

VF-17 ナイトメア

敵に悪夢をもたらすステルス型重VF

VF-14のノウハウを元に開発された機体。拠点へのピンポイント攻撃をコンセプトとし、そのために不可欠なパッシブステルス機構を有する。

◀VF-17D
VF-17の中では最も生産数が多い標準型。機体は重量級であったが、主機としてVF-11のFF-2025Gエンジンの2倍の出力を誇るFF-2100Xエンジンを採用したため、結果として高い機動性を獲得。主にエリート部隊が運用した。

VF-17の特性
- 徹底した兵装の格納などで獲得した高いステルス性能
- 新型エンジンの採用による高機動性
- 内装火器の豊富さに起因する高火力

▶VF-17S
通信機能が強化された専用の頭部ユニットと、改良型のエンジンを採用した指揮官用タイプ。エンジンは約10パーセント推力が向上しており、機動性が向上している。

VF-17Dからの変更点
- 頭部対空レーザー砲の増設（2門→4門）
- 索敵、通信機能の強化
- 改良型エンジンへの交換

▶VF-17T改
サウンドフォースで運用されたカスタム機。複座型のVF-17Tをベースに、歌エネルギーの放出・増幅に対応すべく細部に渡って手が加えられている。

VF-17Dからの変更点
- 機体形状の変更
- 改良型のFF-2100Xエンジンを採用
- コクピットおよび操縦システムの大幅な変更

VF-171 ナイトメアプラス

汎用性を増したVF-17の再設計機

VF-17に2050年代の技術を盛り込んだ再設計機。ピンポイント・バリア・システムの導入やアビオニクスの改修により、扱いやすい機体に仕上がった。

VF-17からの変更点
- 再設計による機体の上下厚の削減
- ピンポイント・バリア・システムの採用
- 新型アビオニクスの導入による操縦性の向上

▶VF-171EX
バジュラに対抗するため、エンジン出力、耐G装備、武装などが大幅に強化された改良型のVF-171。VF-17系では事実上、最上位機と呼べる存在である。

VF-171からの変更点
- FF-2550Fエンジンの採用
- 新型エネルギー転換装甲の採用
- EX-ギア・システムの導入

▶RVF-171EX
VF-171EXに改良型イージスパックを装備した偵察・早期警戒用タイプ。QF-4000 ゴーストのコントロール機能を有する機体も存在する。

VF-171EXからの変更点
- イージスパック（レドーム+スタビライザーフィン）の装備
- 電子戦に伴うOSの変更

VF-19 エクスカリバー 改修機バリエーション

本機は新マクロス級での移民が進んだ時期の機体ということもあり、多くの移民船団で独自のバリエーション機が生み出されている。また本機を操縦できる者は必然的にエースパイロット、もしくはそれに準じる者に限られるため、優れた機体性能もあって伝説的な活躍を見せたパイロットも少なくない。

◀VF-19改
“熱気バサラスペシャル”
（ファイヤーバルキリー）
ロックバンド「Fire Bomber」のボーカリストである熱気バサラ用のカスタム機。外観やコクピットが大幅に変更されている。

VF-19Fからの変更点
- “口”がある専用頭部への換装
- 搭載エンジンをFF-2500Fに変更
- 操縦方法をギター型コントロールスティックに変更

◀VF-19P
辺境の惑星ゾラのパトロール隊に配備された固定武装強化タイプ。センサー系が強化された独自の頭部が採用されている。

VF-19Fからの変更点
- 透過型バイザーを採用した専用頭部への換装
- 時空共振スピーカーユニットの実装
- 脚部ベントラルフィンの増設

▲VF-19 ADVANCE
YF-19のテストパイロットであったイサム・ダイソンの専用機。ベース機はVF-19Eで、A型のパーツやYF-19の搭載AIが組み込まれている。

VF-19Eからの変更点
- 一部パーツをVF-19Aのものに変更
- アビオニクスの搭載AIをYF-19のものに変更
- VF-25用スーパーパーツの大型ブースターを流用

YF-19／VF-19用 オプション

機体の推力に余裕があるため、比較的大型のオプションが多い。またアクティブステルス技術の進歩により、装備した状態でもステルス性は維持される。

◀VF-19用
大気圏内外両用ブースター
戦闘可能時間の延長や、機動性の向上させるオプション。

▶YF-19用
FASTパック
コンパクトだが、宇宙での航続距離を大幅に向上させる。

▼VF-19改用サウンドブースター
サウンドエナジーを放射する2器の時空共振サウンドスピーカーを備える。自立行動も可能。

YF-21／VF-22用 オプション

機体の生産数がそもそも少数で、また技術的にもデリケートなためか、本機専用のオプションというものは少ない。

▶YF-21用
FASTパック
機能はYF-19のものとほぼ同様だが、ステルス性を維持するため極限まで小型化されている。

VF-17用 オプション

VF-17はペイロードと推力に余裕があるため、大型のオプションに対応することができた。これらを駆使することで幅広いミッションに対応した。

◀スーパーパーツ
大口径ビーム砲や大量のミサイルを装備した火力重視型。

▶VF-17T改用サウンドブースター
機能はVF-19改のものと変わらないが、出力はこちらが上。

VF-171EX用 オプション

バジュラと渡り合うため、急増ながら、これまでにないレベルの重武装・重装甲のオプションが用意された。

▶アーマードパック
ステルス機能は損なうものの、防御力を大幅に向上させる。

YF-21

新技術が多数導入されたもうひとつの片翼

AVF計画におけるYF-19の競合機。複合素材を使用したボディは形状変化が可能で、これを駆使することで空力の最適化や有機的な可変を行う。また独自の機構として、BDIという脳波操縦システム兼アビオニクスが採用された。

YF-21／VF-22の特性
- 新素材の採用により実現した形状変化型主翼の実装
- BDIと第三世代アクティブステルスの採用
- ピンポイント・バリア・システムの搭載

VF-22 シュトゥルムフォーゲルII

ゼネラル・ギャラクシー社が総力を挙げた特殊任務機

YF-21の制式採用モデル。外観はキャノピーとバトロイドのフェイス部を除けば、ほぼYF-21と変わらない。操縦システムもクセが強すぎるBDIが撤廃され、通常のものに変更された。性能と比例してコストも高かったため生産数は少ない。

YF-21からの変更点
- 機体形状の一部変更
- 兵装ステーションの小型化
- 操縦システムを通常のものに変更

開発系統から見る傑作VF〈YF-24ファミリー〉

YF-24 エボリューション

VFに革新をもたらした翼

2040年に発見されたバジュラとの交戦を想定し、開発された試作機。既存のVFを上回る戦闘能力を持つバジュラに対抗するため、同時開発された新技術であるISCやEX-ギア·システムが採用された。

YF-25 プロフェシー

次世代の標準たる"預言者"

L.A.I社主導で開発されたYF-24の発展型。本機でVF-25の完成に必要な各種機構や新技術の検証が行われた。また、高度な電子戦能力を備えており、実戦投入された記録も存在する。

VF-25 メサイア

移民船団の"救世主"としてのVF

▼VF-25A

対バジュラを視野に入れて開発·量産された初のVF。ピンポイント·バリア·システム、アクティブステルスといった既存技術に加え、ISCとEX-ギア·システムが導入されている。特にISCがもたらす耐G性能の高さは特筆すべきもので、新開発のエンジンと相まって、これまでのVFを凌駕する機動性を獲得した。また汎用性も高いことから、多くのバリエーションやオプションが生み出された。

本機はS.M.Sに優先的に配備された。その数は30機強と言われているが、予備機を除くと20機ほどが実戦投入された模様。その多くは、バジュラとの戦いにおけるフロンティア船団の防衛任務に回された。

VF-25の特徴
- 従来のVFを上回る耐G性能
- 無人戦闘機に匹敵する高機動性
- 各オプションに対応する汎用性の高さ

単眼のメインカメラや1門のレーザー機銃など、頭部の構成はこれまでの一般用VFを踏襲。

任務によってはスーパーパーツも装備。そのカラーリングは機体色に合わせられている。

VF-27 ルシファー

人間の限界を超えたVFのひとつの到達点

▼VF-27β

VF-25と同じく、YF-24を母体として開発された次世代型VF。マクロス·ギャラクシーの工廠、ガルド·ワークスが開発を担当した。基本的な機体構造や変形システムはYF-24を踏襲しているが、インプラント技術により肉体を機械化したサイボーグパイロットが操縦することを前提とした機体となっている。パイロットの脳波と同調するため完全な思考操縦や、従来の常識を覆す機動が可能。

制式採用機 バリエーション

▶VF-27γ
エースパイロット用のカスタム機。エンジンおよびアビオニクスが著しく強化されており、圧倒的な戦闘力を発揮する。

VF-27βからの変更点
- 各種センサーを強化した頭部への換装
- エンジン出力、推力偏向機能の強化
- 各種アビオニクスの強化

4基のエンジンが生み出す推力は凄まじいもので、ノーマル状態でもスーパーパーツを装備したVF-25に匹敵する機動性を見せた。

VF-27の特徴
- 脳波での操縦、遠隔操作が可能
- 主翼に補助エンジンを採用し、双発では不可能な機動を実現

VF-25 メサイア 機体バリエーション

VF-25はその性能もさることながら、生身の人間が扱える機体ということもあり、任務に応じた機体バリエーションが幾つか生み出された。中でもマクロス·フロンティア船団に駐留するS.M.Sのスカル小隊はこれらのバリエーション機で部隊を構成し、船団を襲うバジュラの群れを迎え討ったことで知られている。

制式採用機 バリエーション

▶VF-25S

頭部レーザー機銃の増設やエンジンの強化、編隊指揮用の支援プログラムの追加が施された指揮官用モデル。生産数は少ない。

指揮官用ということもあり、基本的に運用時は高コストなアーマードパックを装着する。

VF-25Aからの変更点
- 頭部レーザー機銃を連装型×2門に変更
- エンジン(主機)の出力を強化
- 大隊、戦隊指揮用の支援プログラムの実装

▶VF-25F

ドッグファイト向けにチューンされた機体。こちらもエンジンおよびアビオニクスが強化されており、A型よりも性能が向上している。

機動性が高いため、実戦ではチームの囮役や単騎での戦闘を行う機会も多かった。

VF-25Aからの変更点
- 頭部を照準装置を強化したものに変更
- エンジン推力および推力偏向機構の強化
- 火器管制システム、照準装置の改良

▶VF-25G

長距離からの狙撃を目的としたモデル。外見はノーマルのA型と変わりないが、頭部メインカメラに超望遠機能が追加されている。

運用の際は、狙撃に必要な幾つかの装備がまとめられたスナイパーパックを装着する。

VF-25Aからの変更点
- メインカメラおよびセンサー系の強化
- スナイパーパックの標準装備
- スナイパーパック運用のための各種調整

偵察機 バリエーション

▶RVF-25

索敵および電子戦を担う機体。イージスパック改を標準装備し、フォールド通信を用いたゴーストの遠隔操作機能が付加されている。

ゴーストは最大6機まで同時運用可能。裏方だけではなく、戦闘にも対応する。

VF-25Aからの変更点
- 高性能センサーを内蔵した専用頭部への換装
- イージスパック改の標準装備
- 電子戦に対応したOSの実装

VF-25·VF-27の後継機たち

▼YF-29 デュランダル

VF-25をベースに開発された試作機。F.W.Sの採用により、従来のVFとは次元の異なる性能を発揮した。

F.W.Sが生み出す莫大なエネルギーは、エネルギー転換装甲の性能や武装の威力向上に大きく貢献した。また推力の高さに合わせ、ISCも大幅に強化されている。

YF-29の特徴
- F.W.Sによる過剰なまでのエネルギー供給の実現
- フォールド·クォーツの多用によるISCの高性能化
- 主翼補助エンジンの採用による複雑な機動

▼YF-30 クロノス

S.M.Sの惑星ウロボロス支社が、YF-24をベースにゼントラーディの全自動兵器工廠を駆使して開発した試作機。

F.W.Sの改良型にあたるフォールド·ディメンショナル·レゾナンス·システム(以下、F.D.R)や、マルチパーパスコンテナといった独自の機構が盛り込まれている。

YF-30の特徴
- F.D.Rの採用による超高出力の獲得
- マルチパーパスコンテナの換装による高い汎用性
- 新型エンジン(FF-3001/FC2)の採用

VF-25用 オプション

VF-25のオプションの多くは、どの形態でも性能を最大限発揮できるよう設計段階から考慮されている。また従来の装備では見られなかった、空戦機能を強化する装備も開発された。

変形対応型オプション

▶SPS-25S/MF25 スーパーパーツ
機動性と火力を向上させる標準的なオプション。設備なしでパージ後の再装着が可能となっている。

◀APS-25A/MF25 アーマードパック
従来のアーマードパックとは異なり、装備したままの変形が可能。機体の火力と防御力を飛躍的に向上させる。

▶VF-25/TW1 トルネードパック
YF-29の技術面でのデータ収集用に開発されたオプション。主翼の可動式エンジンポッドが運動性を大幅に高める。

変形非対応型オプション

◀フォールド·ブースター
一度しかフォールドできなかった従来のものとは異なり、二度使用できる。つまり現在地と目的地の往還が可能。

VF-27用 オプション

▶スーパーパーツ
VF-27に通常稼動時のYF-29に肉迫する機動性を与える。背部ブースターは無人偵察機を兼ねている。

◀スーパーフォールド·ブースター
VF-25のものと同等のオプション。フォールド断層を超えてのフォールドが可能となっている。

YF-29用 オプション

▶スーパーパーツ
従来の機能に加えて、フォールド·ウェーブ·プロジェクターを搭載した対バジュラ決戦仕様の装備。

空力の影響がない大気圏外では、フォールド·ウェーブ·プロジェクターを常時展開する。

Mechanic Sheet メカニックシート

▶サイズ比較

ALL Sheet 02 A

機動兵器編

35m
30m
25m
20m
15m
10m
5m
0m

重兵隊バジュラ
30m
劇F

ケルカリア
約34m
M

デストロイド・モンスター
22.46m
M

ケーニッヒモンスター
(デストロイドモード)
約29m(頭上高)
F

デストロイド・ディフェンダー
10.73m
M

グラージ
16.55m
M

リガード
15.12m
M

バジュラ幼生(第二形態)
2.5m
F

地球人
1.8m

バジュラ幼生(第一形態)
0.3m
F

クァドラン・ロー
16.75m
M

ゼントラーディ人(一般兵士)
10m
M

VF-1J
12.68m
M

VF-19改
15.48m
7

VF-25S
14.53m
F

VF-0S
14m
ZERO

Illustration by Yukimasa Shijoh / Sashiba / (twinbell)Tokiko Yuzawa

※上図における可変戦闘機(VF)の全高は、全て「頭上高」となります。頭部の機銃やフィン等は数値に含んでおりません。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶サイズ比較

ALL Sheet 02 B

1,200m～8,000m

ステルスフリゲート
全長252.5m
7

マクロス7
全長約7,770m（バトル7含む）
7

バロータ艦隊旗艦宇宙空母
全長4,320m
7

ウラガ級護衛戦闘空母
全長約550m
7

重戦艦バジュラ
全長約4,500m
劇F

バトル7
全長約1,510m
7

富士山
高さ3,776m

メルトランディ大型戦艦
全長約5,000m
愛

ノプティ・バガニス5631
全長約4,000m
M

ケアドウル・マグドミラ10107
全長約3,000m
M

都市宇宙船アルティラ
全幅約8,000m
愛

バトル・フロンティア（要塞艦）
全長1,681m
F

SDF-1（要塞艦）
全長約1,200m
M

0 500 1,000m

Illustration by Sashiba

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶サイズ比較

200km～900km

ゼントラーディ工場衛星
全幅約220km(中心部)※1
M

モルク・ラプラミズ
全幅約500km
愛

月
半径約1,700km

日本列島

フルブス・バレンス級
全高約390～890km※2
M

マクロス・フロンティア
全長約15km
F

7 マクロス7
全長約7.77km

ゴル・ボドルザー
全幅約600km
愛

SDF-1(強攻型)
全高約1.2km
M

0 50 100km

※1…工場衛星は中心部の全幅が約200km。衛星全体の全長は約500kmにも及ぶ。
※2…フルブス・バレンス級は、各部を構成するユニットが自分生長するため、大きさが変化する(図は全高約390km)。

VFコクピットの変遷

▼VF-1S バルキリー

[初出：バンダイビジュアル「超時空要塞マクロス」 DVDコレクション DVD-BOXジャケット]

▼YF-21

[初出：バンダイビジュアル「マクロスプラス」 DVD-BOX Vol. 2 BOXジャケット]

▼VF-19改 "熱気バサラスペシャル"

[初出：バンダイビジュアル「マクロス7」 DVD-BOX インナージャケット]

コクピットという戦場

OTMという未知の技術によって誕生した可変戦闘機（VF）の発展の歴史は、VFの挙動からパイロットを守り、かつパイロットの意志を機体へ伝える役割を担う、「コクピット」の発展の歴史でもあった。ここでは、VFの発展史において、いくつかのエポックメイキングとなったコクピットを解説し、その目指してきたものを振り返る。

▶YF-19

[初出：バンダイビジュアル「マクロスプラス」 DVD-BOX Vol. 1 BOXジャケット]

▼VF-25F メサイア

[初出：バンダイビジュアル「マクロスF」 ゼントラ盛り Blu-ray Box インナージャケット ※掲載にあたり加筆]

Illustration by Hidetaka Tenjin

VFコクピットの変遷

2004 2008 2030 2034 2041 2057

原初のVF
VF-0フェニックス

最初期の可変戦闘機であるVF-0は、AI制御の統合操縦支援システムなど、当時の(非OTMの)最新技術が盛り込まれているものの、コクピットのレイアウト自体は、当時の航空機とさほど変わらない。むしろ同機の運用記録を元に、VF-1以降の機体のコクピットの仕様やレイアウトが煮詰められたと思われる。

拡張性も十分に備えており、急遽追加されたミサイルポッドなどの武装も、任意にコクピットで操作できた。

▼ファイター時

バトロイド形態では操縦席が90度回転するが、計器類はファイター形態から変化しない。

▼バトロイド時

現用兵器からの飛躍
VF-1 バルキリー

VF-0、VF-Xでの試験を経て量産化に進んだVF-1は、同世代の航空機のコクピットのレイアウトを踏襲しつつも、バトロイド時に変形時に各種情報を表示するモニタが起動するなど、VF独自の機構が盛り込まれている。一方で従来の航空機と同じ脱出シートの機構など、宇宙空間での生存性はまだ発展途上であった。

VF-1のコクピットの安全器具類およびパイロットスーツは、巨人たちとの戦闘には十分に対応できておらず、格闘戦などではパイロットに大きな負担をかけた。

▲バトロイド時

▼VF-1の射出座席は大気圏内を想定した設計で、宇宙空間での生存性は低かった。

▲ファイター／ガウォーク時

▲エマージェンシーシート

宇宙用VFとしての成熟
VF-11 サンダーボルト

宇宙移民時代に制式採用されたVF-11は、宇宙で運用される事を前提にコクピットの設計が進められた。全周囲モニタによるバトロイド形態での良好な視界の確保、生存性が向上した脱出ポッドなど、宇宙空間での活動に様々に対応した機構は高い評価を受けた。

▼バトロイド時

複数基が設置されたモニタには、機体各所の機器からの情報が表示され、緊急時のパイロットの判断に貢献した。

撃墜されてもコクピット部が脱出ポッドとして機能するという点は、前線で戦う兵士たちを安堵させたという。

▲VF-11Cのコクピット。宇宙空間での圧迫感を軽減できるよう、広めのレイアウトとなっていた。

▲ファイター時

有人機の極北
YF-19

機体性能を極限まで高めるという思想のもとに設計された機体。コクピットレイアウト自体は従来機とさほど変わらないが、各種機器やシートは高G機動に対応した設計となっている。また、高G下でも自在に機体を操れるよう、操縦桿の調整は非常に敏感になっており、熟達したパイロット以外には真っ直ぐ飛ばすことすら困難であったという。

操縦席後方に、補助座席を設置できた(モニタリング用に副操縦士を乗せることを想定した機構と思われる)。

◀バトロイド時

▼ファイター時

▲操縦者の足の周囲に設置されたモニタに機体下面の景色が投影されるという工夫により、視認性が向上している。

◀操縦桿

マンマシーン・インターフェースの入口
YF-21

機体性能を突き詰めた結果、操縦者と機体とをリンクさせるBDI(脳波感知)システムを備えるに至った機体。コクピットには操縦桿やモニタを備えるものの、それらはあくまで緊急用であり、通常は機体と一体化した操縦者が機体の全てを感知し制御するという異質な機構となっている。

パイロットはコクピットで精神統一を行い、自身の感覚を機体とシンクロさせることで自在な機動を可能とする。

▲BDI(脳波感知)システム

▲BDIシステム対応ヘルメット

BDIシステムの導入により、操縦者は身体を動かす必要がなくなり、結果として高機動時の身体の負担も軽減された。

唯一無二のコクピット
VF-19改 熱気バサラスペシャル

おそらく、VFの開発史において最も奇妙なコクピットが、このVF-19改“熱気バサラスペシャル”だろう。同機のコクピットには操縦桿やスロットルなどが存在しておらず、代わりにギター型のコントロールスティックで機体の制御とスロットルの調節、装備の起動を行う仕組みとなっていた。その上、パイロットである熱気バサラは、耐Gスーツを着用せずに高G機動を行っていたとのことで、およそ常識では計れない機体だと言える。

熱気バサラはこの操縦桿とは思えぬコントロールスティックを操り、統合軍のエース顔負けの高機動を行っていたという。

▶ファイター時

▼バトロイド時

◀▲VF-19改のコクピットレイアウト。シートは耐G性能よりも、「演奏しやすさ」が優先されていたという。

ISCという突破口
VF-25 メサイア

機体に生じたGを一時的にフォールド空間に蓄積することにより、人間の肉体の限界を超えた高G機動を可能にする画期的なシステム、ISC(慣性蓄積コンバーター)を搭載した機体。

VF-25には、ISCに加えて耐Gスーツと脱出装置を兼ねたEX-ギア・システムが採用されており、コクピット自体が新世代の技術の塊となっている。

ISCとEX-ギアでパイロットを保護するVF-25は、VFの機動を数段進化させた。

EX-ギアはパワードスーツとしても高性能を誇り、パイロットの生存性の向上に貢献した。

サイボーグという端末
VF-27 ルシファー

サイボーグ兵士専用の機体であり、ISCに加え、パイロットの肉体そのものの耐G性能を向上させることで、人間を超越した機動を可能としている。またBDIシステムの採用により、機体を自身の肉体の延長として操ることを可能としている。

BDIシステムで機体と接続されたパイロットは、自身の目を使わずとも周囲の情報を視認できる。そのため、VF-27のキャノピーは完全に装甲化されている。

サイボーグ兵士の搭乗するVF-27は生身の兵士を凌駕した機動と反応速度を誇る。

VF-27のBDIシステムは、機体を遠隔操縦することも可能となっている。

関連事項 EXTRA REPORT
複座機のコクピット

各世代のVFでは練習機や特殊任務用の機体として、複座型の機体が運用されている。基本的に複座型のVFは、航空機の伝統を踏襲し、前席が操縦を担当、後席が計器類の確認や各種システムの操作などを行う分担になっている。

一条輝が初めて搭乗したVF-1Dは訓練機であり、指導役が後席に座り、操縦を指導する。

従来の航空機よりも操縦が複雑化したVF-0は、複座型の導入も検討された。写真は電子戦用機VF-0D。

VF-25は、後部の補助席を展開することで複座にできた。写真のVF-25Gは歌手の歌を増幅して発振する任務のため補助席を使用している。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-9

ゼネラル・ギャラクシー社が生み出した初の量産VF

機体解説

ゼネラル・ギャラクシー社が開発した軽VFで、大気圏内での戦闘機動性が追求された多目的戦闘機。2018年に開発がスタートし、初飛行は2021年、翌2022年に量産が開始された。このタイムスケジュールからもわかるように、本機はVF-11が開発されるまでのVF混迷期に生み出された機体であった。

開発を担当したゼネラル・ギャラクシー社は、2017年にオーテック社を中心として設立された企業で、ゼントラーディ系の技術を多く取り入れたことでも知られている。VF-9は同社初の量産VFであり、後にVF-17の設計主任やYF-21の機体設計部長に抜擢されたゼントラーディ、アルガス・セルザーが設計に携わったことでも知られる。なお、テスト・パイロットはミリア・ファリーナ・ジーナス大尉（当時）であった。

［出典：MACROSS M3］

主要パイロット

ミリア・ファリーナ・ジーナス

マクシミリアン・ジーナス

データ

※データはファイター形態時のもの

全長▶11.2m
全幅▶11.6m
空虚重量▶7500kg FF-2020AG×2
エンジン▶新中州/P&W/ロイス FF-2019C×2
推力▶19,600kg（宇宙空間最大）×2
巡航最大速度▶マッハ2.7（高度10,000m）
武装▶マウラー ROV-25連装ビーム砲塔×1／35mmガトリング・ガンポッド×1

サイズ比較

VF-1J
VF-9

開発系譜図

▶ VF-9

運用記録

総合的には軽戦闘機のイメージが強いVF-9だが、低コストであることと、頑丈で整備性に優れる点が評価され、経済力の低い辺境惑星を中心に、主力戦闘機として多数が配備されていった。

また、第一次星間大戦以来のエースパイロット、マクシミリアン・ジーナスとミリア・ファリーナ・ジーナスが所属した特務部隊「ダンシング・スカル」に配備され、ミッションに応じて投入されていたことでも知られている。なおVF-9の開発段階でテストパイロットも務めたミリアは、ゼントラーディ系の技術が盛り込まれた本機の堅実さに好感を持っていたという。

標準武装

大気圏内での運用を想定した小型VFという独自のコンセプトで設計されたVF-9だが、武装面は他のVFと同様、ガンポッドとビーム砲(レーザー機銃)といった標準的なものだった。ただしビーム砲は、頭部ではなく肩部に連装タイプを搭載している。これは機体の小型化に伴い、頭部への搭載が難しくなったこと、連装化による火力の増強などが理由と考えられる。

マウラー社製のROV-25連装ビーム砲塔。口径は22mmである。バトロイド形態では、頭部ではなく右肩部に配置される。

ガウォークおよびバトロイド形態では、手持ち式として使用されるガンポッド。口径は35mmで、VF用としては比較的小口径である。

ファイターモード

大気圏内では、最大速度こそVF-1に劣るVF-9だが、VF-4を凌駕する戦闘機動性を発揮した(VF-9用のエンジンであるFF-2019Cは、VF-4用エンジン以上の出力を誇る)。これは小型軽量かつパワーウェイトレシオ(推力対重量費)に優れる機体特性や、YF-19に先んじて採用された前進翼、併設されたカナードなどによって達成されている。本機同様、空力を重視したVFとしてVF-5000が知られるが、これは比較的無難なブレンディッドウイングボディ(機体一体翼)を採用した機体で、前進翼とカナードを組み合わせたVF-9の翼配置はYF-19を先取りすると共に、ゼネラル・ギャラクシーの新進気鋭の社風を体現している。

▼マックスが搭乗した青いVF-9のファイター形態。コクピットのサイズから、VF-1よりさらに小型であることがわかる。

▲ミリアがダンシング・スカル時代に搭乗したVF-9。塗装はパーソナルカラーの赤。

▶機首付け根の下に連装ビーム砲を装備する。ビーム砲基部は、バトロイド形態時には右肩となる。

VFとしては比較的低速なVF-9であるが、運動性に秀でており、高度なドッグファイト能力を有する。

主翼は可変翼ではなく、変形機構を兼ねた折り畳み式。艦に搭載される際には、主翼を折り畳んで省スペース化すると思われる。

五面図

▲側面

▼上面

▲底面

▼前方

▼後方

前進翼とカナードという翼の配置はYF-19と同じだが、機体はコンパクト化されている。エンジン部は、主機とガウォーク／バトロイド形態での背部補助エンジンが一体化して配置されている。

ガウォークモード

VF-9のガウォーク形態の特徴は、機首の自由度が高い点とされる。一般的なガウォーク形態の機首は胴体と一体化され、特有の前傾姿勢もあって低位置となりがちである。だが、VF-9では機首が可動パネルを介して接続されており、上下左右に動かすことが可能となっている。

機体上部に配された補助エンジンは偏向推進器として機能し、脚部主機と併用することで優れた運動性を発揮する。

▶マックス機のガウォーク形態。各ブロックが展開され、胴体は主翼と基部パネル程度となっている。

▲ミリア機のガウォーク形態。機首がリフトアップされていることがわかる。連装ビーム砲は右肩部に移動。

バトロイドモード

VF-9のバトロイド形態は、胴体と比較して大型の手脚が特徴である。また、機首が胴体中央を構成するのはVF-1直系機と同じだが、複雑に折り畳まれた主翼とカナードが胸部装甲板を構成するという極めて独創的な構造を採用している(この主翼の折り方から、オリガミファイターのニックネームで呼ばれることも多い)。こうした独特の構造や、頭部ではなく右肩部に配置された連装ビーム砲といったVF-9独自の設計は、小型機に可変機構を盛り込むための工夫と言える。

ただし主翼の胴体装甲への転用は、翼下オプションの装備が難しくなるほか、連装ビーム砲の肩部装備はガンポッドとの併用を限定するといった問題も指摘されている。

頭部

ゼネラル・ギャラクシー系VFによく見られる、大型の頭部。ファイター／ガウォーク形態では機首後方を構成する。これはVF-4やVF-5000と似た配置である。

◀マックス機のバトロイド形態。ゼントラーディ系バトルポッド／バトルスーツ的なシルエットは、ゼネラル・ギャラクシー社系機の特徴と言える。

▶正面と異なり、背面は軽装甲部が目立つ。これは小型軽量化のための措置と思われる。脇部分には、後縁フラップを畳んだ主翼が見える。

三面図

脚部に繋がる機首両脇のパネルや、両肩を繋ぐ基部パネル、機首のみで構成された胴体中央が見て取れる。

変形シークエンス

ファイター➡バトロイド

▶主翼を繋ぐパネルを中心に、機首／脚部接続部と腕部ブロックが展開。機首は下方に移動する。

▼腕部ブロックが倒立して肩部ラインへ移動。補助エンジンはバトロイド形態の背部に折り畳まれる。

▲腕部ブロックが90度回転し、バトロイド形態の定位置へ。後縁フラップを折り畳んだ主翼胴体側は胸部となる。

▶主翼は3つのヒンジで折り畳まれ、胴体装甲になる。腕部ブロックは、連結パネルを中心に左右それぞれの腕部に変形。

ファイター➡ガウォーク

▲◀機首&脚部と補助エンジンを展開後、腕部ブロックが90度回転し、展開。主機二次元ノズルは足部となる。

◀バトロイド時

▶ガウォーク時

関連事項

EXTRA REPORT

試作機 VF-X-10

VF-9の試作機と考えられるのがVF-X-10である。非変形式の飛行テスト用と思われるが前進翼やカナード、広面積のキャノピーといったVF-9ファイター形態の特徴はこの時点で既に確立されていた。VF-X-10独自の機構としては、異物吸引防止用の回転式エアインテークが設置された。しかし、この回転式インテークは量産機に採用されなかった。

VF-1を大型化した 性能向上型可変戦闘機

CRUSADER

機体解説

VF-3000 クルセイダーは、ストンウェル・ベルコム社がVF-1の能力向上型機開発計画に提示した可変戦闘機(VF)である。本機は、VF-1を大型化することで性能向上と装備の充実を図り、同時にVF-1の豊富な運用データを基に改良を施すことで同機の欠点を解消している。その結果、本機は当初の予定通りにVF-1を凌駕する性能を獲得したが、ほぼ同時期に開発が進められていたVF-4 ライトニングIIIが制式採用されたために量産は見送られた。特務部隊「ダンシングスカル」で運用され、マクシミリアン・ジーナス(マックス)やミリア・ファリーナ・ジーナスが搭乗した機体が知られている。

[出典:MACROSS M3]

▼バリアブル・グラージ

主要パイロット

ミリア・ファリーナ・ジーナス
マクシミリアン・ジーナス

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶統合軍
全長▶15.5m
全幅▶16.1m
空虚重量▶11,950kg
エンジン▶新中州/P&W/ロイス FF-2450A熱核タービンエンジン×2
推力▶22,500kg(宇宙空間最大)×2
巡航速度▶マッハ3.1+(高度10,000m)
武装▶マウラー ROV-22×2/ハワード GU-11 55mmガトリング・ガンポッド×1/後退翼下兵装ステーション×6他

サイズ比較

VF-1J
VF-3000
20m 10m 0m

開発系譜図

VF-1 ▶ VF-3000

VF-3000

Illustration by Hidetaka Tenjin CG Works by Masato Takahashi

VF-3000 クルセイダー

運用記録

VF-3000の開発は、VF-1の後継機問題が浮上し始めた時期に、VF-1能力向上型機開発計画のプランのひとつとしてスタートした。しかし、VF-1の後継機としてVF-4が制式採用されたことで、本機の本格的量産化は断念され、少数が試験機として生産されるに留まった。その後は、試験機の運用データがVF-5000 スターミラージュの開発に反映されたほか、試験機の一部が特務部隊「ダンシングスカル」に配備されたと言われている(2020年頃のこととされる)。

標準兵装

機体の大型化を図ったVF-3000だが、武装についてはVF-1のそれを踏襲しており、ガトリング・ガンポッドとヘッドブロックの対空レーザー機銃を標準装備とする。主翼下兵装ステーションはVF-1では4基だったものを6基とし、火力の増強を図っている。

主武装は55mmガトリング・ガンポッド(ハワード GU-11)で、VF-1に装備されたものと同じ。ただし、銃口下部など細部のディテールが異なる。

ヘッドブロックは、左側に2連装対空レーザー機銃(マウラー ROV-22) 1基を、右側に大口径レーザー砲1基を装備した左右非対称の武装が特徴。

ファイターモード

可変後退翼構造を採用したVF-3000のファイター形態は、VF-1を彷彿とさせるフォルムが特徴で、同機をベースに設計されたことがわかる。

また、主機には新中州/P&W/ロイス製のFF-2450Aを採用しており、速力はVF-1を上回っている。

▲マックス機
ファイター形態の形状はVF-1に近いが、上部垂直尾翼は機体外縁に配され、VF-1に比べて全体の一体感と密度が増している。

▲下部尾翼が大型化している点が特徴で、4枚の尾翼がX字をなす構造となっている。

◀左右エンジンナセル上部と機体後部中央には、それぞれ2基ずつの補助ノズルを備える。

▲ミリア機
マックス機の青と同様に、ミリア機には彼女のパーソナルカラーである赤系を基調とした塗装が施されている。

機体バリエーション [出典:アドバンスドバルキリー]

「ダンシングスカル」とは別の部隊にて運用されていたVF-3000。細部のディテールや主翼、尾翼の形が異なる。

▶ダンシングスカルで運用された機体に見られる後部の補助ノズルが存在しない。

▲主翼は後縁の形状が大きく異なり、翼端側の張り出しがない。

◀機体底面はほぼ同じディテールとなっている。

▼正面から見た図。着陸時、下部尾翼は水平方向に可変する。

▲機体側面図。本機は複座機だが、1名でも運用は可能。

変形シークエンス(ファイター形態➡バトロイド形態)

機首部

機首レドームが前方に引き出され、ヒンジが露出。それを基点にレドームをコクピットブロック下方に折り畳む。

胴部

機体前部が折れ曲がって胴体となり、エンジンナセルの上半分が背部に移動する。

腕部

ヒンジで腕部ユニットが移動し、肩カバーが展開。尾部補助ノズルユニットが折り畳まれて手が露出する。

胸部

胸部カバーとなる機体上部装甲が引き上げられながら前方にスライドし、コクピットブロックの後部座席を覆う位置に移動する。

脚部1

脚部となるエンジンナセル下部は、ヒンジによって外側を回るようにして後方に展開する。

脚部2

ナセル側部のカバーが後方にスライドして折り畳まれた下部尾翼を隠す。同時に膝カバーとノズルが展開される。

バトロイドモード

VF-3000は単にVF-1をスケールアップしただけの機体ではなく、機体構造や変形機構に大幅な改良が加えられている点が特徴と言える。そのため、バトロイド形態には独自の構造が多く見られ、外観にもそれが表れている。バトロイドのフォルムはVF-1を連想させるが、コクピットブロックやレドームの防御力向上を目的とした多重装甲化などによって、全体的に重厚なシルエットとなっている。

◀マックス機

▼ミリア機

▶収納状態の主翼を省略したバトロイド後方。背部にはファイターの後部上面ユニットが折り畳まれて配置されている。

頭部

頭部は前方に張り出したカメラカバーや顎のようなパーツが特徴。

脚部

折り畳んだ下部尾翼は可変主翼基部の下部カバーで保護される。

VF-1との対比

バトロイド側面のVF-1との対比。重要部位を保護するための多重装甲によって、胸部の厚みが増している。

◀VF-3000 ◀VF-1

三面図

背面(中央)と側面(右)に見える斜線部分は、胴体と大腿部を連結するスイングアーム。VF-1から変形構造が大きく変化した部分のひとつで、外観以上に内部構造がVF-1と異なっていることがわかる。

機体バリエーション [出典:アドバンスドバルキリー]

「ダンシングスカル」とは別の部隊にて運用されていたVF-3000のバトロイド形態。背部や前腕部、脚部のユニット構成が異なる。

頭部

側部排気口スリットがなく、顎部など細部の形状も異なっている。

脚部

2枚の尾翼を収納し、補助ノズルを脚部側に配している。

関連事項

EXTRA REPORT

VF-3000B ボンバーバルキリー

VF-3000のバリエーション機で、機体後部に水平安定板と垂直安定板を組み合わせた尾翼を備える爆撃機仕様の機体である。 [出典:アドバンスドバルキリー]

▶ボンバーモード
機体前部やコクピットブロックにVF-3000の印象を残しているが、機首が長くシャープなフォルムとなっている。

◀バトロイドモード
横列双眼型のTVアイが特徴のバトロイド形態。前腕部や脚部の構造がVF-3000と異なっており、外観はよりスマートな印象を受ける。

Mechanic Sheet

メカニックシート

他 Sheet 03 A

▶VF-4G ライトニングⅢ／VF-5000B スターミラージュ／VA-3M インベーダー／VB-6 ケーニッヒモンスター

VF-4G ライトニングⅢ

VF-1の後継機で双発のエンジン部と機首ブロックで構成される3胴式の機体。独特の形状から「アロー」の愛称でも呼ばれた。G型はエンジン出力を向上させた発展改良型。2047年、アイドルグループ・ミルキードールズの奪還作戦「オペレーション・オルフェウス」に投入されたほか、特務部隊ダンシング・スカルでも運用されていた。[出典：MACROSS DIGITAL MISSION VF-X、MACROSS M3]

写真奥がVF-4G ライトニングⅢ。[MACROSS DIGITAL MISSION VF-X]

母艦アルゲニクスから発進直前のマックス機。[MACROSS M3]

▲バトロイド時でも短時間の低空飛行が可能である。カラーリングはマックス機。［MACROSS M3］

▼機首が特徴的なガウォーク形態。エンジンナセル上半分が腕部、下半分が脚部になる。

VF-5000B スターミラージュ

VF-1の基本設計を元に、一部ゼントラーディ系の技術を導入した機体。信頼性・耐久性に秀で、2020年後半頃よりVF-4から主力戦闘機の座を引き継いだ。特務部隊ダンシング・スカルは、2020年に当時最新鋭機であったVF-5000の護衛搬送任務を行っており、任務後には同隊でもVF-5000を運用している。[出典：MACROSS M3]

赤いパーソナルカラーを用いたミリア機。

▼大気圏内の機動性に優れ、上空援護と制空戦闘を担う。カラーリングはマックス機。

▶両腕と両脚にはマイクロミサイルランチャーが内蔵されている。カラーリングはミリア機。

VA-3M インベーダー

VA-3は地上攻撃専用のFCSを搭載した全領域攻撃機として開発された。大気圏内の低高度における機動性と安定性を重視して設計された機体であり、サバイバビリティに優れる分、速度性能には劣る。機体には多数のハードポイントを持ち、合計で19,820kgもの搭載量を有している。特務部隊レイヴンズにて運用され、淡水性の海が地表の90%を占める惑星エデン3での任務などに活用された。[出典：MACROSS VF-X2]

データ

全長▶16.20m　**重量**▶空虚重量13,330kg

エンジン▶新中州重工／P&W／ロイスFF-2020A熱核タービン×2　**最大速度**▶M2.2+

標準武装▶ビームガン×2／ハイマニューバミサイル×6／マイクロミサイルランチャー×12／魚雷(水中時のみ)

◀頭部は中央メインカメラの他4つの補助カメラを備えている。

▶アタッカー時の主翼下ポッドが腕部、機体後部が脚部となる。

▲M型は水上離着陸のため主翼下ポッドがフロートとして機能。

▶水上着水モード

▲着水時に機体を水面から浮かせるため、フロートである主翼下ポッドが支柱により伸長。

▼水中潜航モード

▲主翼先端を90度折り畳んで全幅を狭めるなど、潜水時は水の抵抗を減らす変形を行う。

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶VF-4G ライトニングⅢ／VF-5000B スターミラージュ／VA-3M インベーダー／VB-6 ケーニッヒモンスター

VB-6 ケーニッヒモンスター

HWR-00-Mk-Ⅱ モンスターのコンセプトを受け継ぎ、単独飛行と高速展開を可能とした可変爆撃機(VB)。VF並の展開力とデストロイドの大火力を併せ持つため、単独での長距離爆撃や小部隊での制圧任務などに用いられた。特務部隊レイヴンズにも配備され、ハイド・シティに逃げ込んだテロリストグループ「ブラックレインボー」の掃討任務に投入された。

[出典:MACROSS VF-X2]

鈍重な機体だが装甲は並外れて強固であり、その巨体は戦車を軽く踏み潰す武器と化す。

データ

全長▶29.78m　**重量**▶空虚重量101.900kg

エンジン▶新中州重工／P&W／ロイスFF-2025BX熱核タービン×4、新中州／ビガース電磁プラズマロケットエンジン・レールガン複合システム×4

最大速度▶M1.7+(高度10,000m)
M3.2(高度30,000m以上)

標準武装▶320mmレールガン4連装×1／対地対艦重ミサイルランチャー3連装×2／対空対地機銃ターレット×1／対空対地近接小型高機動ミサイル速射ランチャー×2

変形シークエンス

▼シャトルモード
レールガンの瞬電磁カタパルトをプラズマロケットに転用した推進機関により飛行する。

▲船体上部の両腕にあたるミサイルランチャーが展開、脚部である両翼は下に90度折れる。

▶腕・脚部の各関節の展開と同時に、船体に収まっていたレールガン部と船体底部を構成する給弾システム部が起きあがる。

▶重ガウォークモード
火力を遺憾なく発揮できる。モンスターの形状を受け継ぐが、そのサイズは原型機の2/3である。

▼レールガンが約90度起き、両肩全体が左右に90度展開。コクピットブロックの下降に合わせ、腰の回転ブロックが下方にせり出す。

▲頭部はコクピットが沈んだ前方にスライド、脚部の関節部分が展開する。ミサイルランチャーは180度回転し手首がせり出す。

▼デストロイドモード
ミサイル発射時は腕部を180度回転。接地面積が小さいため軟弱地盤では巨体が沈み込む。

VF-14

機体解説

ゼネラル・ギャラクシー／メッシー設計の重可変戦闘攻撃機。VF-4 ライトニングⅢの後継主力機を決める「ノヴァ・プロジェクト」にて、VF-11 サンダーボルトとの競合に敗れた機体である。しかし宇宙での航続性能に優れ、なおかつ頑健で整備しやすい機体であったため、一部の移民船団や辺境の移民惑星において重宝され量産に至った。特務部隊ダンシングスカルのマックスとミリアが搭乗したとされる。

[出典：MACROSS M3（ゲーム）]

開発系譜図

VF-14 ▶ VF-17

主要パイロット

マクシミリアン・ジーナス
ミリア・ファリーナ・ジーナス

データ

※データはファイター形態時のもの

全長▶19.58m
全幅▶15.60m
重量▶空虚重量12,600kg
エンジン▶新中州・ダイムラー FF-2770D熱核エンジン×2
推力▶52,500kg（宇宙空間最大推力）×2
高機動スラスター▶P&W・ダイムラー HMM-5C
機体強度▶+35.0G／−20.5G
巡航速度▶M3.8+（高度10,000m）
標準武装▶固定中口径ビーム砲（マウラー BC-27A）×2／内蔵ミサイルランチャーポッド（ビフォーズAAM-01S）×2／35mmガトリング・ガンポッド×1

サイズ比較

VF-1J
VF-14

エースに愛された超音速の吸血鬼

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶VF-14 バンパイア

運用記録

前述の通り、VF-14バンパイアは、VF-11との主力機争いに敗れた機体になる。不採用の理由は、1つには、当時のVFとしてはかなり大型の機体であったVF-14が、艦載機としての運用を前提とした主力機には不適格であったためと言われる(ファイター形態で比較すると、VF-4が全長14.9m、VF-11が15.51mと15m前後であったのに対し、VF-14は19.58m)。しかしながら、その大型の機体がもたらす航続距離の長さと、ペイロードの大きさ、それに頑健な機体構造は、高く評価され、移民惑星などでのライセンス生産という形で制式採用されるに至った。特に、ゼントラーディのパイロットからの人気は高く、マイクローン化したゼントラーディ人で構成される第5次新マクロス級超長距離移民船団(マクロス5)では、VF-14とその派生機である可変攻撃機VF-14が主力VFとして運用されていた。

また、統合軍特務部隊ダンシング・スカル隊にも配備され、同隊のマクシミリアン・ジーナス、ミリア・ファリーナ・ジーナスらによって運用されたとされる。

混成部隊であるダンシング・スカル隊の活躍を記録した映像より。左からVF-9、バリアブル・グラージ、VF-14。

標準装備

VF-14の標準的な装備は、35mmガトリング・ガンポッドと中口径ビーム砲2門、それに内蔵式のミサイルランチャーポッド2基になる。また部隊によっては、バトロイドの胸部のペイロード部に2連装レーザー機銃や、大口径ブラスター砲塔等を装備していた。

ガンポッドを使用するVF-14。搭乗者はダンシング・スカル隊のマクシミリアン・ジーナス。

◀中口径ビーム砲

本機の主力武装で、ファイター形態のインテーク上部、バトロイド形態の肩部に計2門設置されている。

昆虫型生物兵器とされる巨大生物と交戦するVF-14。2022年頃撮影された記録映像より。

コクピット

VF-14は変形の際に、機首部分が胴体後方に大きく移動し、バトロイドの背面にコクピットが位置することになる。バトロイドの中でもっとも頑健な胴体の、その一番奥にコクピットを配するこのレイアウトは、戦闘時にパイロットの生存率を高めるためだとされる。一方、ライバル機であったVF-11は、バトロイド形態でのコクピットが胴体前面に配置されているが、これは機体が大破した際、速やかにコクピットブロックを分離させ、撃墜後のパイロットの生存率を高めるためでもあった。運用時の頑健さを特に重視したVF-14と、(撃墜後も含む)あらゆる事態に備えた万能型のVF-11との設計思想の差がコクピットにも反映されていたと考えると興味深い。

バトロイド形態のコクピットブロック。キャノピー部は頑丈な装甲でカバーされ、耐弾性を更に高めている。

ガウォークモード

VF-14のガウォークモードは、左右のエンジンブロックの下半分が胴体の前方に移動しつつ、エンジンブロックの上半分が胴体後方に移動し、それぞれ、脚部、腕部に変形する。腕部が機体の最後方に位置している独特のレイアウトは、ガウォークでの格闘戦や、ガンポッドの取り回しに、多少の慣れが必要だったとも言われる。なおファイター形態では固定武装だった中口径ビーム砲は、ガウォーク形態においては肩の左右に移動したことで、フレキシブルに動かせたため、市街地などでの高速戦闘に重宝したとも言われる。

▶Fz-109A エルガーゾルン

右図はVF-14をベースにプロトデビルンが改造したFz-109エルガーゾルンのガウォーク形態。本機と同様、VF-14も、腕部は機体の最後方に位置する。

EXTRA REPORT 7 関連事項

Fz-109エルガーゾルン

バロータ軍が運用していたFz-109エルガーゾルンは、VF-14を独自に改造した機体である。全体に武装・装甲が強化されているが、元々推力に余裕のあったVF-14だけに、改造後も高い格闘性能を発揮していた。

バトロイドモード

VF-14のバトロイド形態は、胴体部分が大きく移動するのが特徴である。ファイター形態では後方を向いていたブロックが半回転して胸部を形成し、更にコクピットブロックが背面に移動、最後に機首が背面から前方に移動して頭部になるという、複雑な機構となっている。ガウォーク形態と同様、肩部の中口径ビーム砲が自在に稼働し、近接戦闘で威力を発揮したとされる。

▶カラーリングはマックス機。バロータ第4惑星調査船団を護衛したブルーライナセロス隊が用いていた機体は、形状が若干異なる。

◀背面からのショット。後のVF-19などと同様、主翼は太股の外側にセットされる。

バトロイド形態での空中機動は、高い推力を持つVF-14の得意とするところだったと言われる。

ファイターモード

VF-14のファイター形態は、VF-4同様、胴体の左右に推進器をレイアウトした三胴形式を採用している。その起伏の少ない胴体の形状に加え、主翼に可変機構を取り入れたVF-14は、大気圏内においてはどの速度領域においても低い空気抵抗と最適な揚力を獲得でき、良好な性能を発揮したとされる。なお、本機の薄い胴体形状や、内側に傾斜した垂直尾翼などはステルス性を考慮しており、本機で得られたステルス技術のノウハウは、後にゼネラル・ギャラクシーが開発したVF-17ナイトメアに継承されている。また VF-14は、大気圏内だけでなく、宇宙空間でも良好な性能を発揮し、搭載量の大きさに由来する長大な航続距離は、辺境での運用を主とする調査船団などで歓迎された。

▶右図の赤を主体とした機体は、ダンシング・スカル所属のミリア・ファリーナ・ジーナス搭乗機とされる。

生物兵器とのドッグファイトを行うVF-14マックス機。推力に余裕のある本機は、格闘戦でも高い性能を発揮した。

▶後方より。20世紀のステルス機、SR-71ブラックバードを彷彿とさせる、三胴形式の機体形状を誇る。

EXTRA REPORT 7 関連事項

VF-14(バロータ第4惑星調査船団仕様)

VF-14のバリエーションの中でも有名なものは、写真のバロータ3198XE第4惑星特務調査部隊の配備機体になるだろう。同部隊のVF-14は、標準装備の中口径レーザーをミサイルポッドに換装し、更に胸部に2連装レーザー機銃2門、頭部に小口径レーザー機銃2門を搭載した重武装仕様であった。

バロータ第4惑星に向かうVF-14部隊。各機は黒を基調とした塗装となっている。

バロータ第4惑星に上陸した調査部隊の記録映像より。バトロイドで警備中のVF-14。

バリアブル・グラージ

ゼントラーディのワンマン戦闘ポッド、グラージの発展系の機体。地球側の可変戦闘機と同様に、ファイター、ガウォーク、バトロイドの3形態に変形する。ゼントラーディの反乱分子が地球技術を得て開発した兵器であると言われているが、詳細は不明。2018年、反統合勢力が惑星クリストラニアの開発実験施設に対してテロ活動を行った際に投入され、特務部隊ダンシングスカルと交戦した。戦闘後、拘束された搭乗者モアラミア・ジフォンは、6歳のゼントラーディ人の少女であることが判明。その後彼女は、ダンシングスカル隊のマックス、ミリア夫妻の養子に迎えられ、また同隊の隊員ともなる。オリジナルのバリアブル・グラージは、原型機と同様ゼントラーディサイズのコクピットを持っていたが、マックス夫妻に引き取られたモアラミアがマイクローン化したのを受け、地球人サイズのコクピットの機体へと改修された。なお、のちにモアラミアは、反乱組織が行っていたゼントラーディ因子解析の実験体であったことが明らかになった。 [出典：MACROSS M3]

バリアブル・グラージのエネルギーシステムはデリケートであるらしく、扱いは容易ではないようだ。

養子となりモアラミア・ジフォン改めモアラミア・ファリーナ・ジーナスとなる。コールサインはパープルスカル。

⚠関連事項 EXTRA REPORT

ダンシングスカル

第一次星間大戦後、銀河に版図を広げた人類だが、それに伴い統合政府の支配に抗する無数の反乱勢力も生まれた。2014年、鎮圧部隊としてマクシミリアン・ジーナスとミリア・ファリーナ・ジーナスの2名で結成されたのが特務部隊ダンシングスカルである。2022年には養子として育てていたモアラミア・ジフォンを隊員に迎えるが、両親に依存する彼女を独り立ちさせるため2029年にマックスとミリアは部隊を離れ、モアラミアが任務を引き継いだ。

マックスのコールサインはブルースカル。ゼントラーディ人の子供モアラミアを養子に迎える。

ミリアのコールサインはクリムゾンスカル。ゼントラーディ人の先達としてモアラミアを見守る。

統合軍仕様

▼統合軍仕様に改修されたバリアブル・グラージ。ファイター形態の機首先端には、原型となったゼントラーディの戦闘ポッドと同様、センサーアイを備えている。

◀▲グラージに似たスタイルのガウォーク形態。左右のエンジンブロックが展開し、機体後方のエンジンブロック、脚部、腕部となる。

▶バトロイド形態。胴体が折れ、バトロイドの胸部、腰部を形成すると共に、胴体内に収納されていた頭部が露出して変形が完了する。

主要パイロット

モアラミア・ファリーナ・ジーナス

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶バリアブル・グラージ／ネオ・グラージ

ゼントラーディ仕様

ダンシングスカル隊と初遭遇した際の仕様。コクピット周り以外は、統合軍仕様と変化はない。

▼▶ファイター形態。原型となったグラージ同様、コクピットは装甲で覆われている。

▼▶ガウォーク形態。武装は機体上部の大型荷電粒子ビーム砲と、腕部に搭載されたインパクトガン2門。

▶バトロイド形態。肩部装甲周りの意匠が統合軍仕様とは異なる。左右のパワーハンドはガンポッドなども使用できた模様。

ネオ・グラージ

第一次星間大戦後、統合軍に回収されたゼントラーディ軍の戦闘ポッド「グラージ」を地球側の技術によって研究・改修した機体とされる。基本的には外観、変形機構共にバリアブル・グラージと共通しているが、両機の関係は不明（おそらくはネオ・グラージをベースに反統合勢力が改良した機体が、バリアブル・グラージかと思われる）。2040年のシャロン・アップル事件でシャロン・アップルにハックされ、YF-19と交戦したとの説もある。

［出典：MACROSS PLUS -GAME EDITION-］

▼▶ファイター形態。オリジナルのグラージが空戦機能を持たなかったのを、VFの技術の導入により克服している。

▲ガウォーク形態。両腕はインパクトキャノン×2が装備されており、パワーハンドは持たない。

マクロス13／CV-565／VCV-551 ヴァルハラⅢ

マクロス13

新マクロス級マクロス13の戦闘区画である超大型可変万能ステルス宇宙攻撃空母。次世代のマクロス艦の先行実験に投入されていたとされる。2050年頃に、地球圏を中心とした体制の確立を唱える統合軍内の一勢力ラクテンスによって運用され、反統合政府派の武装組織ビンディランスの鎮圧にも投入された。ミサイルを無効化するジャミングステーションを装備しており、強攻型の頭部に位置するブロックにてジャミングを統括している。 [出典：MACROSS VF-X2]

マクロス･キャノンは連続して発射可能であり、ビンディランス[illegible]隊にはビームを拡散させて攻撃している。

▲バトル13 強攻型

掌部分はマクロス･アタック時の強襲揚陸ゲートになっており、新マクロス[illegible]の戦闘区画の中でもより攻撃的な設計のようだ。

▲バトル13 要塞艦

アクティブステルスに移り変わる途上の艦で、パッシブステルスの形状にこだわらず、内蔵以外の武装が[illegible]舷に設けられている。

Mechanic Sheet
メカニックシート

マクロス13／CV-565／VCV-551 ヴァルハラⅢ

CV-565

統合軍第727独立戦隊VF-Xレイヴンズの母艦として運用されたステルス空母。特殊な任務が多いため、可変戦闘機のほかにも可変爆撃機など多様な機体を搭載している。ケーニッヒモンスターも配備しており、甲板の中央に専用エレベーターが設置されている。 [出典：MACROSS VF-X2]

4連ノズルにより、優れた巡航速度を誇る。艦底のバーティカルフィンは、高速巡航時には折り畳まれる。

ブリッジの前方にブリジット・スパーク（手前）とエイミ・クロックス（奥）、右舷側の3Dキャプコムにクララ・キャレットが勤務。

▲上面は20世紀の航空空母を思わせるシンプルなフォルムだが、艦底・艦尾部は同時代の統合軍ステルス空母と共通した、複雑な形状となっている。

VCV-551 ヴァルハラⅢ

統合宇宙軍に所属する強襲潜航母艦。単独での長距離フォールド能力を持ち、小型艦ながら6機（VF-1、VF-4、VF-11、VF-17、VF-19、VF-22）の可変戦闘機を搭載・運用できる特殊な構造をしている。特殊任務のために建造された艦であり、優れたステルス性能により敵最深部へ単艦で侵入、艦載機による急襲を行うというコンセプトで設計されている。2047年、反統合勢力に拉致されたアイドルグループ・ミルキードールズの救出作戦の母艦として運用された。 [出典：MACROSS DIGITAL MISSION VF-X]

▼ステルス潜航時の第一形態。全長120～150mほどの艦体はステルス性を重視した形状を有する。

ブリッジには艦長のほか4名のオペレーターが在籍。少数精鋭にて運用されている。

▲▶艦載機発進時の第三形態。格納庫を開き、艦尾に設けられた遠心カタパルトのシャフトによって艦載機を掴み、放り投げるようにして射出する。

◀ステルスを解除した臨戦態勢の第二形態。主砲である艦底部の三連装ビーム砲は左右に計240度旋回できる。

ハチェット級駆逐艦アンティムド

テロリスト集団ビンディランスが運用する駆逐艦。クジラ座タウ星系に集結するビンディランス艦隊を叩く特務部隊レイヴンズに襲いかかる。まるで武器庫のように重武装しており、武装ごとに形態を変化させて戦闘を行う。 [出典：MACROSS VF-X2]

▶第2段階
艦上部のレーダーアレイは折り畳まれ、ブリッジを二段式シェルターが覆う。艦前方の多連装大型ミサイルランチャーが開き、背面の隠蔽式4連装ビーム特砲がせり出す。

▼第3段階
前方のビームランチャーのほか、艦体に収納されていた火器がフルオープンとなる。

▲第1段階
増加装甲の多連射小型ミサイルのほか、艦前方と後方に備えたガトリング砲で攻撃する。

機動兵器アナベラ・ラシオドーラ

火星・木星間アステロイド内に建造中の基地、セレスベースに配備されている機動兵器。民間企業クリティカルパス・コーポレーション製で、壁面に6本脚で張り付き、基地から脱出しようとする突入部隊に立ちはだかる。 [出典：MACROSS VF-X2]

▼側面

▼前方

▼後方

関連事項

EXTRA REPORT

ヴァルハラⅢクルー

反乱ゼントラーディ軍に誘拐されたアイドルグループ「ミルキードールズ」の奪還作戦「オペレーション・オルフェウス」が発動され、その任に就いた強襲潜航母艦ヴァルハラⅢ。その乗組員は若いながらも有能な女性が多く、機動部隊をサポートする。

[出典：MACROSS DIGITAL MISSION VF-X]

ヴァルハラⅢのオペレーターは揃いの赤い制服を着用しているのが特徴である(ポワンのみ制服の上にエプロンを着用)。特務を帯びた機動部隊の任務遂行には、彼女らの適切な指示が欠かせなかった。

◀美保美穂
元マクロス7船団バトル7ブリッジ・オペレーター。バロータ戦役から3年を経た26歳。

◀カレン・アレン
大人の色気を漂わせる24歳のオペレーター。落ち着いた対応で機動部隊をサポートしていく。

▶ポワン・ホワン
10歳にしてオペレーターを務める幼い少女で、ぬいぐるみのピコタンが友人である。

▶ユーリ・ユイ
バルキリーの整備を任されている17歳の天才メカニック。機体の特性にも通じている。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶ハチェット級駆逐艦アンティムド／機動兵器アナベラ・ラシオドーラ／メルトランディ軍強襲鹵獲艦／ジャミングステーション

メルトランディ軍強襲鹵獲艦

メルトランディ軍の艦艇。SDF-1 マクロスの捕獲に投入され、全高は350～500mの大きさを誇る。

[出典：超時空要塞マクロス 愛・おぼえていますか(ゲーム版)]

▶後方

▲前方

中央誘導集束ビーム、ミサイルランチャー、パルスレーザー等で武装している。

▶側面

ジャミングステーション

ゼントラーディ軍の艦艇。艦内部に備えたジャミング・コイルによってリン・ミンメイの歌声を妨害する。

[出典：超時空要塞マクロス 愛・おぼえていますか(ゲーム版)]

▲オープン時

▲上面

◀クローズ時

上下にある引き込み式の旋回砲塔のほか、中央誘導集束ビーム、インパクトキャノン、プラズマキャノンを持つ。

EXTRA REPORT

関連事項

CV-565クルー

第727VF-X部隊レイヴンズの母艦には、エース級のパイロットだけでなく優秀な乗組員が集う。柔軟な思考の持ち主たちで、レイヴンズが統合軍の一組織ラクテンスに利用されていると知ったエイジス・フォッカーが、統合軍の暴走を抑えようと集ったビンディランス側についた際、母艦ごと合流している。

[出典：MACROSS VF-X2]

左から当麻陽、ギリアム・アングレート、エイジス、スージー・ニュートレット。いずれも凄腕のバルキリー乗りである。

◀ブリジット・スパーク

オペレーターたちのリーダー的な存在。男女から好感を持たれる大人の女性である。

◀クララ・キャレット

オペレーター歴1年の明るい新人だが、見えないところで努力を怠らない頑張り屋。

▲エイミ・クロックス

公私共に隙がなく、的確な指示を下す真面目なオペレーター。内面には情熱を秘めている。

フェイオス・バルキリー

統合軍の可変戦闘機技術とゼントラーディ軍のパワードスーツ技術が融合して誕生した可変戦闘機。第63254109ゼントラーディ外宇宙方面軍に、当時開発されたばかりのフォールド・ブースター装備のVFX-11を奪って逃走したゼントラーディ兵士がおり、これをきっかけに開発されたという。また後にはテロリスト集団ブラックレインボーのリーダー格ティモシー・ダルダントンが愛機とした。

[出典:MACROSS DIGITAL MISSION VF-X]

データ

全長▶16.25m　全高▶4.21m
全幅▶14.83m　重量▶空虚重量13,560kg
エンジン▶不明　推力▶不明
最大速度▶M6.8+(高度10,000m)、M26+(高度30,000m以上)
標準武装▶不明

▶バトロイド形態。ファイター時のエアインテークを含む主翼周辺が上半身、底部が下半身を成す。

▶ステルスを意識したファイター形態。そのためか廃棄熱の遮断を考慮した排気口となっている。

EXTRA REPORT

関連事項

ミルキードールズ

統合軍の次期防衛計画「サウンドプロジェクト」の要である5人組のアイドルグループ。リン・ミンメイの歌を研究して結成され、歌を通じて空間と時間を超えたコミュニケーションができる。A.D.2047年、地球統合軍の創立記念祭セレモニーにゲストとして招待されていたが、反乱ゼントラーディ軍により誘拐される。

[出典:MACROSS DIGITAL MISSION VF-X]

◀リアトリス
落ち着いた女性で面倒見が良く、グループのまとめ役である。メンバーの中では最年長の19歳。

◀モーリィ
男言葉を話すボーイッシュな少女。捕らわれていた際は大好きな漫画とお菓子に囲まれていた。16歳。

◀アオイ・ツワブキ
グループの中心的な存在。静かで口数は少ないが、秘めた歌エネルギーはメンバーの中で一番強い。14歳。

▶ビオレッタ
理知的なクールビューティーであり、熱くなり過ぎて歌が暴走しないように抑えとなるメンバー。18歳。

▶フリージア
マイペースで会話する、おっとりした性格。救出した際にガウォークを「ガチョウさん」と表現する。17歳。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶フェイオス・バルキリー／クァドラン・ノナ／グジャグラヴァン・ヴァー／ロークァル／ヴァンダル

クァドラン・ノナ

クァドラン・シリーズのひとつ。一般兵士用の量産タイプで、武装はローとほぼ共通である。

[出典：超時空要塞マクロス 愛・おぼえていますか(ゲーム版)]

▲胸部に中口径インパクトキャノン2門、両腕にレーザーパルスガン、大腿部とバックポッドに近接用高機動ミサイルランチャーを持つ。

グジャグラヴァン・ヴァー

テロリスト集団ブラックレインボーが運用する陸戦用歩行兵器。豊富な武装を有す四脚式戦車で、メインターレットには主砲の誘導ビーム砲のほか、連射グレネードランチャー、二重旋回式のプラズマブラスター等を備える。 [出典：MACROSS VF-X2]

ミサイルランチャーハッチ
誘導ビーム砲
レーザーバルカン砲
スモークディスチャージャー

▲メインターレット以外の武装も多く、機体前[illegible]にレーザーバルカン砲、機体後部に高機動ミサイルランチャー、前脚部にスモークディスチャージャーを持つ。

ロークァル

多惑星間企業クリティカルパス・コーポレーションが所持するステルス無人潜水艦。

[出典：MACROSS VF-X2]

▲両舷にあるミサイル倉が外側にスライドしてミサイルを発射する仕組みである。

▼正面

▼上面

ミサイル倉スライド

ヴァンダル

統合軍組織、ラクテンスの巨大ビーム攻撃砲艦。複数の対空旋回砲塔のほか、ミサイルランチャーで武装している。

[出典：MACROSS VF-X2]

▶航海形態時は後方に向けられている主砲身は、戦闘形態時に前方へ180度回転し、照準ヘッドとの間にビーム増幅帯を形成。ビーム集束誘導コイルから主砲を放つ。

▶戦闘形態

▶航海形態

YF-30

主要パイロット
リオン・榊

時の神の名を冠された未知数の最新鋭機

機体解説

YF-30クロノスは、民間軍事プロバイダー S.M.Sの惑星ウロボロス支社のスタッフが独自に開発した可変戦闘機である。はじめは新統合軍総司令部より開示されたYF-24 エボリューションの設計図が基本設計のベースになっていたが、途中から運用方針の革新により可変構造が大幅に変更され、全く別の機体となった。設計·開発を担当したのは、S.M.Sウロボロス支社長で、天才的エンジニアでもあるアイシャ·ブランシェット。機体内に任務に応じた装備を搭載できる大容量の「マルチパーパス·コンテナユニット」を標準装備しているのが最大の特徴である。

[出典:マクロス30 ～銀河を繋ぐ歌声～]

データ

所属▶S.M.Sウロボロス支社
全長▶18.84m
全幅▶15.62m
全高▶4.02m（主脚含まず）
全備重量▶8,106kg
エンジン▶新星／P&W／RRステージII熱核反応反応タービン FF-3001/FC2（宇宙空間最大推力2,110KN×2）、P&W高機動バーニアスラスター HMM-9、スラスト·リバーサー、3D機動ノズル装備
標準装備▶12.7mmビーム機銃×2／新型重量子ビームガンポッド×1／アサルトナイフ×1／マルチパーパス·コンテナユニット×1

開発系譜図

YF-24 ▶ YF-30

サイズ比較

VF-1J
YF-30

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶YF-30 クロノス

運用記録

YF-30開発計画、通称「YF-30プロジェクト」は、惑星ウロボロスにて進められ、2060年頃には飛行・変形の可能な機体が完成していたとされる。機体の制御AIには、YF-25プロフェシーに搭載されていた特別製のものが流用された。なお、制御AIの引渡しのためにYF-25をS.M.Sセフィーラ支部から運んできたパイロット、リオン・榊は、惑星を覆うフォールド断層の活発化によりしばらく帰投が不可能となったため、ウロボロス支社で働くこととなり、YF-30の試験にも協力した(本来のテストパイロットがテスト中の事故で重傷を負っていたため、アイシャにとっては渡りに船だったという)。なお、リオンによる試験運用の過程でエンジンのパワー効率を重視した結果、耐久性に問題が生じていたことが発覚し、エンジン周りの設計の見直しが行われたという。

YF-30には新機構フォールド・ディメンショナル・レゾナンスシステムを搭載。歌エネルギーを増幅し、濃密なフォールド断層の突破も可能となる。

本機の開発にあたっては、既存の技術に加え、惑星上にあるプロトカルチャー遺跡や、遺跡を守る守護兵器から回収されたパーツも投入されたという。

EXTRA REPORT
関連事項
惑星ウロボロス

惑星ウロボロスは、西暦2030年に発見された惑星であるが、惑星内での内紛が耐えず、2060年においても開拓はさほど進んでいないとされる。YF-30の開発がウロボロスで行われたのは、そうした状況が機密保持に向いていたためとも言われる。

ファイターモード

YF-30のファイター形態は、設計の元となったYF-24同様、クリップドデルタ翼が採用されている。非常にオーソドックスなフォルムであるが、惑星ウロボロスにある自動工場衛星が製造した精度・剛性の高いパーツを使用しているため、性能的には同時代のVFの中でも抜きん出ている。コクピットにはVF-25と同じEX-ギアシステムが搭載されており、高機動時にパイロットを保護する。

▲マルチパーパス・コンテナユニット内の搭載物や、コンテナユニットエジェクト時の重心や、空力中心変化に合わせて機体の制御を安定させるため、機体前部にカナード翼を装備している。

ガウォークモード

ガウォーク変形時には、主翼下面の左右にレイアウトされた腕部パーツが前方へ移動しつつ、カナード翼付近のパーツが折り畳まれて「肩部」を形成する。同時にエンジン部も前方に展開し、脚部となる。機体後部にレイアウトされた「マルチパーパス・コンテナユニット」は、ガウォーク形態でも運用が可能である。

ガウォーク形態でマルチパーパス・コンテナユニットのミサイルを発射するYF-30。敵勢力の拠点に低空から高速で侵攻する際に重宝されたという。

バトロイドモード

バトロイド形態では、マルチパーパス・コンテナユニットが頭部の後ろ側に水平に展開可能。マルチパーパス・コンテナユニットは、マイクロミサイルのみならず、補助推進機関や電子戦システムなど、様々な機能を持ったユニットを搭載できるのが特徴である。設計者のアイシャ・ブランシェットは、このコンテナユニットに絶大な自信を持っており、将来的にはこのユニットがVFに標準搭載されると豪語していたという。

▲武装は開発中の重量子ライフルを装備。連射モードと高威力の単射モードとに切り替え可能な兵装であった。

惑星ウロボロスで運用されたその他の機体

YF-25 (リオン機)

リオン・榊がS.M.Sセフィーラ支社から運んできた機体。VF-25の試作機。ウロボロス支社へ到着前に、敵対勢力の攻撃によって撃墜されるも、その後修理されて運用された。

VF-19 (アイシャ機)

アイシャが使用するVF-19の量産機で、カラーリングはピンク。未開発の地域が多いウロボロスでは、一般市民も足代わりにVFを活用している(バンデッドと呼ばれる無法者への自衛手段でもある)。

VF-11 (ミーナ機)

S.M.Sウロボロス支社に保護された少女ミーナ・フォルテの乗機としてアイシャが用意した機体。VFに乗り慣れていないミーナのために、操縦性を重視したチューニングが施されている。

VF-27 (リーロン機)

惑星ウロボロスのブリタイシティのハンターギルド代表を勤めるメイ・リーロンの乗機。サイボーグにしか操縦できないVF-27の、それもカスタム機であるVF-27γをなぜ彼女が所持しているかは不明。

YF-29Bパーツィバル (ロッド機)

新統合軍特殊部隊「ハーヴァマール」所属のロッド・バルトマーの乗機。YF-29デュランダルを改修した最新鋭機であり、ハーヴァマールのエースパイロットに配備されている。

YF-29 (イサム機)

時空間を超え惑星ウロボロスに転送されてきたシャロン・アップルが、同じく転送されてきたイサム・ダイソンに与えた機体。頭部はYF-19に似た形状のものに換装されている。

YF-29 (オズマ機)

時空間を超え惑星ウロボロスに顕現したオズマ・リーが搭乗。頭部はVF-25Sに似ており、レーザー機銃が4門搭載されている。

VF-171EX (ガネス機)

惑星ウロボロスを荒らしまわる"バンデッド"のガネス・モードラーの乗機。対バジュラ用標準兵装パックまで装備しているが、どこから調達したのかは不明。

EXTRA REPORT
関連事項
特殊マーキングのバルキリー

VFが乗用車並みの気軽さで活用されている惑星ウロボロスでは、新統合軍の払い下げの機体や、外装を改修したレプリカ機体(かのVF-0のレプリカ機もあったという)、果ては出自不明の最新鋭機まで、様々なVFが往来していた。そうしたバルキリーの中には、全身にイラストを施した、いわゆる"痛バルキリー"も見かけられた。

▲左からYF-29、VF-1、VF-25の"痛バルキリー"。ウロボロス支社の人間が運用していたとも言われる。

VF-X-7 ゴーストバルキリー

無人機ゴーストをもとに可変戦闘機として設計した機体。胴体はリフティングボディとなっており高速時に安定した揚力をもたらす。大型の4連ノズルのほか主翼にもバーニアを備え、大推力を生み出す。[出典:アドバンスドバルキリー]

◀主翼は垂直に折り畳まれて収納され、ガウォークにしては珍しく頭部が顕わになる。

▶ファイター形態。機首にはカナードを持つが、大気圏突入時は頭部の機銃と同様に収納される。

▶4連ノズルの下部が両脚となり、全体的に細身のシルエットであるバトロイド。

VF-X-11

AFTI(Advanced Fighter Technology Integration)の実験機。ブレンデッドウィングボディで、エンジンは機体上部に備わる。全長はVF-1 バルキリーより若干小さい。[出典:アドバンスドバルキリー]

VA-X-3

試作型の可変攻撃機で、長大な全幅を誇る全翼爆撃機。尾翼の上面と下面に4枚ずつ配された双垂直安定板により、高速飛行時の優れた方向安定性を実現している。[出典:アドバンスドバルキリー]

V-BR-2

超音速偵察爆撃機。ボンバーモードは両翼にエンジンを備えたVF-4に通じる三胴型で、機首には4枚のカナードを備える。全長はVF-1 バルキリーよりふた回りほど大きい。[出典:アドバンスドバルキリー]

EXTRA REPORT

関連事項

その他のバルキリー

"航空機としてのバルキリーが進化した姿"をコンセプトとした模型企画の「アドバンスドバルキリー」では、可変戦闘機の様々な可能性が描かれている。またアニメ誌に掲載されたアーマードガウォークや、アニメ誌の連載企画「マクロスタイムズ」で描かれたVF-X-4のガウォーク形態なども存在し、ゲームや模型などでは多くのバリエーションが展開されている。

▼アーマードガウォーク
VF-1Jに増加ウェポンを装備したイメージ。戦車の主砲のような二連装砲を備える。

スタンピードバルキリー

火力と運動性を高めたバルキリー。宇宙空間を想定しており、ブースターパックにはVF-25のトルネードパックにも通じるような高機動用のバーニアスタビライザーを持つ。[出典:アドバンスドバルキリー]

▲機首部の追加装甲にはレーダー波透過式の複合装甲が用いられ、機体下部にリバースノズルの付いた大型プロペラント・ドロップタンクを備える。

◀大口径の荷電粒子砲、35mm三連ガトリング砲などの携行火器のほか、両肩にミサイルポッドと両脚にクラスターミサイルポッドを持つ。

機体解説

「バンキッシュレース」とは、可変戦闘機(VF)によって行われる、人呼んで"銀河一過激なエア・レース"である。バンキッシュはかつて地球で行われていたエア・レースと同様、様々なコースを巡りゴールを目指す競技であるが、道中にはガウォーク形態限定の「ガウォーク・エリア」や、模擬弾を装填した武装で戦うことを許可された「フラッグ・エリア」など、VFの特性を最大限に発揮する必要のある特殊エリアが存在しているのが特徴である。新星インダストリー他のワークスチームと、個人参加のプライベーターらが、それぞれ改造したVFを投入し、技術と技量を武器に戦うバンキッシュは、2058年頃にブームの最初のピークを迎えたとされる。この当時のレースでは、各船団にて開催される年間10戦ほどの「船団カップ」を経て選抜されたレーサーが、「星天カップ」に参加し、優勝者「キング・オブ・バンキッシュ」を決定するという形式が採られていた。本稿では、2058年度のバンキッシュレースに参加していた代表的な機体を紹介していく。

関連事項 EXTRA REPORT

ファスケス

ファスケスとは、2058年度のバンキッシュレースが開催されていた当時に活動していた地球至上主義者による反新統合政府組織であった。2058年の船団カップにおいて、船団レースの開催地であったギャラクシー船団のリゾート艦レヴナがファスケスにより拿捕されるという事件が発生。この一件でファスケスとの間に因縁の出来た一部のバンキッシュレーサーは"義勇航空隊"として、S.M.Sらと共にファスケス拠点制圧任務に参加した。

▶ナレスワン
ファスケス総司令官で地球とその文化に心酔する地球至上主義者。現行の移民船団国家による自治体制を退廃と断じ、テロ活動を行う。

[出典:マクロス・ザ・ライド]

VF-19ACTIVE ノートゥング

VF-19EFを元にデータ収集用実験機としてS.M.SがL.A.Iから委託を受けて運用している機体。バンキッシュレースにも、データ収集の一環として投入されたものと思われる。翼端に装備された可変型ウィングレットは、YF-21に装備されていたOTM自動変形素材を使用しており、翼断面や翼型を状況に応じて変化させる。複雑な操縦系統を持ち、BDIシステムやインプラント技術によるサポート抜きに乗りこなすには、熟練のパイロットの手腕が不可欠である。

▶機体制御のために支援AI(愛称:ブリュンヒルデ)を搭載。なおパイロットのチェルシーはのちに試験運用中のYF-25プロフェシーに搭乗。

▲パイロット:
チェルシー・スカーレット

▲バトロイド形態。EX-ギアシステム搭載のノートゥングは、パイロットのチェルシーの身体能力の高さもあり、生身の人間のような挙動を見せたという。

SV-52γ オリョール

統合戦争当時の機体をレストアしたカスタム機。本来のSV-52は、最初期のVFであるSV-51の熱核反応タービンエンジン搭載型として製作された機体だが、本機はSV-52の資料が少ないこともあり、むしろ機体の外観はSV-51γに酷似している。コクピットやフレームは極力オリジナルのものが使用されているが、VF-17Dに使われていたエンジンを独自チューンして乗せており、VF-171に比肩する機体性能を発揮するという。

▶胴体中央の透明なパーツはバトロイド形態時の頭頂部。レース用の改造として頭部の固定武装を外し、センサー類を搭載している。

バトロイド形態。手にしているのはVF-11フルアーマード用の長砲身型高貫通ガンポッド。主翼上に搭載されているのは、加速用ジェット・ブースター。

◀パイロット:
マグダレーナ・ツェロナスカ

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶バンキッシュレース関連機体

VF-1X++ ダブルプラス

2047年に新生インダストリーが少数生産したVF-1X-Plusの発展改修型。第一次星間大戦以降に得られたOTMを使用した素材が用いられ、大幅な軽量化と強度の向上が図られている。さらに新型無人戦闘機用の試作エンジンに換装しており、AVF並みの爆発的な推進力を獲得している。

◀機体下面と翼型を中心とした空力性能の見直し、姿勢制御バーニアの増設などにより、過剰なまでに運動性に特化した機体となっている。

▲パイロット：ハクナ・青葉

VF-0改 ジーク

VF-1X++を失ったハクナが搭乗した機体。VF-0Aの残骸をベースとしているが、全体の約70%に当時の最新鋭機VF-25のパーツが投入されており、さらにVF-25と同等の出力を生み出すステージIIのFF-3001Aエンジンを搭載したことで、YF-27-5に匹敵する性能を発揮する。

▲人呼んで「VF-0の皮を被ったVF-25」。VF-0Aの機体がVF-25とほぼ同サイズであったこともあり、VF-25のパーツは容易に組み込めたという。

YF-27-5 シャヘル・♀(フィメール)

マクロス・ギャラクシー船団の可変戦闘機開発工廠"ガルド・ワークス"が開発した、新型機VF-27の試作機のひとつ。翼形状はYF-24に近いものとなっている。VF-22直系の発展型で、BDIシステムを進化させた操縦系統に加え、インプラント技術による脳直結型コントロールを採用している。

▼データ収集のため、雪天カップに"乱入"し、バンキッシュレーサーたちに格闘を挑んだ。

◀パイロット：マリス・ステラ

▲専用のビームガンポッドは、胴体下ではなく右主翼下面にセットされる。左翼下面には、ガンポッド用の反応炉ポッドを懸吊。

EXTRA REPORT 関連事項

バンキッシュレースの関係者

バンキッシュレースは、各参加チームに運営資金をもたらすスポンサーや、VFの整備を行うメカニックらに支えられている。また、銀河ネットワークはバンキッシュレースの独占放映権を獲得しており、ここから得られた収益が登録レーサーに分配され、チームの運営資金に充てられている。スポンサー、メカニック、撮影スタッフの誰もが、レースの重要な参加者と言えるだろう。

スポンサー

◀ファミリーレストランチェーン「スカイラブ」の社長ユエイン・ラウ。チェルシー・スカーレットに目をつけ、大々的なスポンサードを行っている。

整備技師

上は民間整備会社「ロビンズファミリー」のメカニック2人。チェルシー、ハクナの機体の整備を行う。

プレス

左は銀河ネットワークのキャスター、ローズ・グリューネシルト。その相棒のD・アイヴォリー(右)は取材用VFの操縦担当。

▶バンキッシュレース関連機体

YF-25 プロフェシー

L.A.I主導により開発された最新鋭可変戦闘機。VF-25の実戦耐用試験に先立ち、変形機構や性能試験、EX-ギアシステムのコントロールテストのために数機が生産された。アンジェ672によって強奪されたクァドラン・ローを鎮圧するため、チェルシー・スカーレットが搭乗。のちに対バジュラ用に試作された重装甲突撃パックSPS-25P/MF25（通称・パラディンパック）を装備し、反新統合政府組織ファスケスとの決戦に投入される。

▲パラディンパック装備のYF-25。手に持つランスは、本体の周囲にピンポイント・バリアを展開し打突性能を高める格闘戦用兵装である。

▶パイロット：チェルシー・スカーレット

VF-19EF カリバーン

フロンティア新星とL.A.Iが共同開発したVF-19Eのモンキーモデル。コクピットはEX-ギアシステムに換装してあり、VF-19の無茶な機動からパイロットを保護する。S.M.Sアポロ小隊に所属していた当時のチェルシー・スカーレットの搭乗機体で、武装は新型のGU-17Aガンポッドを装備。

VF-11B ノートゥングII

S.M.Sを除隊し、YF-25を返還したチェルシーがバンキッシュレース新シーズンで搭乗した新機体。船団パトロール部隊から払い下げられた中古機体3機から良好なパーツを集めて組み上げられた。AI「ブリュンヒルデJr.」の導入による機体制御系の向上、アクチェーターの調整による変形速度の向上など、各部がチューンされている。

VF-9E カットラス

バンキッシュレースの"覇王"ベルティエの愛機。大気圏内運用を重視した軽戦闘機で、最終型にあたるE型のエンジン性能は、VF-22とほぼ同等とされる。コントロールが難しく、事故が多発した機体ことから生産中止となっていたが、ベルティエはその高い技量により本機を難なく乗りこなしている。

◀パイロット：ニコラス・フランソワーズ・ベルティエ

VF-19A エクスカリバー

新星インダストリー・フロンティア星団支社のワークスチームが開発した機体で、同チームに所属する"隻腕のアイギス"ことオスカー・ブラウヒッチの愛機。VF-19AをベースにVF-19C、VF-19Pなどのデータを反映した機体である。マクロス7船団で運用されていたVF-19の改良試作機をレース用に転用したとの噂もある。

◀パイロット：オスカー・ブラウヒッチ

【出典：マクロス・ザ・ライド】

Mechanic Sheet
メカニックシート
バンキッシュレース関連機体

クァドラン・ロー

バンキッシュレースの「星天カップ」の会場に展示されていた、ゼントラーディのバトルスーツ。展示用に派手なカラーリングが施されている。ファスケスのパイロット、アンジェ672によって会場から強奪され、テロ活動に利用された。

◀パイロット：アンジェ672

VF-22HG シュヴァルベ・ツヴァイ

VF-22をギャラクシー社が改良した機体。原型機であるYF-21の「人体と機械の融合」というコンセプトに立ち返っており、脚部をパージしたリミッター解除モードも備える反面、インプラントの補助なしの操縦は困難とされる。アンジェ672が搭乗し、チェルシーと交戦した。VF-22HGは数機しか生産されておらず、アンジェ機は4号機で、ファスケスがギャラクシーの特務艦ごとを拿捕した。

クァドラン・アルマ

アンジェ672が、チェルシーとの最終決戦にて搭乗したバトルスーツ。銀河帝国分裂戦争最末期にキメリコラ工廠で設計されたクァドラン・シリーズの最上位機体のひとつとされるが、詳細は不明。アンジェ機は高速飛行形態への変形や、強力なバリヤーなどの機構を持つ。

ネオ・グラージ

ファスケスの司令官ナレスワンが搭乗していた機体。第一次星間大戦後、はぐれゼントラーディがVFの技術を取り入れて開発した可変戦闘ポッドをベースに、マクロス・コンツェルンが完成させたという、入り組んだ出自を持つ。グラージの高い運動性と高火力と、VFの長所とを兼ね備える。

◀パイロット：ナレスワン

VF-11C サンダーボルト・インターセプター

"守護神"アンソニー・クレメントの愛機でほぼ純正品のVF-11をベースとしたカスタム機。特殊バッテリーにより、バトロイド形態で短時間ピンポイント・バリアを展開可能。

◀パイロット：アンソニー・クレメント

VF-11D サンダーフォーカス

レースを解説するレポーター、ローズ・グリューネシルトとその相棒、D・アイヴォリーが搭乗する複座型のVF-11。軍の強行偵察機に匹敵する超長距離撮影機能を持つ。

前部座席がパイロット、後部座席がカメラマンシートとなっている。

▲パイロット：D・アイヴォリー

ADR-04-Mk.XV スーパーディフェンダー

デストロイド・ディフェンダーの再設計型で、両腕に40mmガトリング砲を装備する。ギャラクシー船団の防衛部隊に配備されており、船団を強襲したファスケスを迎撃した。

Illustration by Hidetaka Tenjin

SV-51

機体解説

反統合同盟陣営が異星人との戦闘を想定して開発した、史上初めての実戦型可変戦闘機（VF）。試験機でありながら急遽実戦に投入された統合軍陣営のVF-0 フェニックスとは異なり、このSV-51は初めから実戦での運用を考慮して設計·開発が進められた。そのため、実用性においてはVF-0を上回り、良好な操縦性と運用性を持つ機体として完成した。また、地球統合軍による後年のVFよりも一回り大型でありながら優れた高機動空戦能力を有し、当時の先行試作型量産機としては極めて完成度の高い機体として知られる。なお、本機にはエースパイロット用のスペシャルチューンド機であるSV-51γ（ガンマ）と、一般パイロット用のSV-51α（アルファ）のふたつのタイプが存在する。

●主要パイロット

D.D.イワノフ

●データ

※データはファイター形態時のもの

所属 ▶ 反統合同盟
全長 ▶ 22.7m
空虚重量 ▶ 17,800kg
エンジン ▶ アビアドビガテルD-30F6Xターボファンジェット（102.5kN、アフターバーナー時204.7kN）×2、VTOL用ファンジェット×2（バトロイド形態では補助リフトファンとして作動）
最大速度 ▶ M2.81（高度11,000m）
航続距離 ▶ 1,910km（マイクロミサイルランチャー·増漕タンク複合ポッド標準装備時）
上昇限度 ▶ 22,500m
武装 ▶ ミニガン（Gsh-231 12.7mm機銃）×2／55mmガンポッド×1（Gsh-371）／マイクロミサイルランチャー／増漕タンク複合ポッド×2／マイクロミサイル（ツロポフ SA-19M I/IR誘導）、SPO-15C360度パッシブレーダー警戒受信システム チャフ&フレアディスペンサー（APP-60）×1・アクティブステルス·システム（RP-51）／SWAGエネルギー変換装甲システム（SW-51）他

●開発系譜図

SV-51 ▶ SV-52

●サイズ比較

VF-1J
SV-51

反統合同盟が開発した史上初の実戦用VF

運用記録

スホーイ、イスラエル・エアクラフト・インダストリーズ、ドルニエの3社が共同で開発を行ったSV-51は、VF-0よりも1～2年早くスケジュールが進行したこともあり、統合戦争末期には実用段階に達していた。最終的な生産数は単座型が32機（うち12機が後にSV-52へ改修）、複座型が6機と言われ、その多くがマヤン島近海における異星人遺物奪取作戦に投入され、統合軍のVF-0部隊との間で史上初のVF同士の戦闘を繰り広げた。その際に戦力の中心となったのが反統合同盟のD.D.イワノフ、ノーラ・ポリャンスキーの両エースが運用したSV-51γで、ここで解説するイワノフ機は「シュワルベ（Schwalbe）1」のコールサインで呼ばれ、SV-51部隊の指揮を執った。

イワノフ機は統合軍艦隊への奇襲でSV-51部隊を率いただけではなく、常に先頭に立って戦場を駆け巡った。

統合軍のVF-0部隊を指揮したロイ・フォッカー少佐の操縦するVF-0Sと幾度となく激しい空中戦を展開した。

標準装備

固定武装の12.7mmミニガン2基とバトロイド時は携行武装になる55mmガンポッドが主な武装で、さらに増漕タンク一体型のマイクロミサイルランチャー2基を標準装備としていた。また、旧ワルシャワ条約機構軍の標準航空兵装の大半が装備できる仕様となっている。

増漕タンクに組み込まれたマイクロミサイルランチャー（ツロポフ SA-19M）はI/IR誘導方式で、装弾数は18発。

▼Gsh-371 55mmガンポッド

大口径の高初速機関砲で主力戦車の前面装甲をも貫通する。装弾数は120発で、予備弾倉1個を標準装備。

▼Gsh-231 12.7mmミニガン

主翼付け根（バトロイド時腰部）に装備された対人・対軽車輌用武装で、地上掃討などに用いられた。

コクピット

操縦装置は設計母体であるスホーイの影響を強く受けており、4系統アナログ式のフライ・バイ・ワイヤ（SDU-29 電子遠隔操縦装置）が採用されている。また、機体制御を司るCNIシステム（SAU-29）の下位プログラムとしてバトロイド制御用のSBA-29システムが組まれている。

VF-0と同じくホログラフィック型HUDを採用しているが、表示言語はロシア語が用いられていた。

ファイター形態時のコクピットの内部構造は、通常の戦闘機とほぼ同じ（写真はノーラ機）。

バトロイド形態時には前面パネルがスクリーンとして機能、広い範囲の視界をカバーする。

ガウォークモード

統合戦争以前、旧東西陣営の兵器関連企業や技術者チームが共同で対異星人用兵器システムの構想を練っていた時期があった。SV-51とVF-0は共に、その際に提案された「変形ロボット兵士」のデザイン案をベースとした設計となっており、このことから、両機の変形システムには共通項が多く見られる。結果、本機もVF-0と同じくガウォーク形態を変形の一形態として採用しており、実戦における運用法が模索された。また、本機のガウォークは折り畳みが可能な主翼構造を機動制御に利用している点が特徴で、鳥が羽ばたくように主翼を動かすことでホバリング時に高い機動性を発揮したのである。特に、マヤン島近海での作戦では洋上や密林といった様々な環境で戦闘が行われ、ガウォーク形態も状況に応じて頻繁に運用された。VF-0Sとの戦闘や統合軍空母アスカに対する奇襲などでも、本形態を活かして戦闘が行われている。

イワノフ機はガウォークで物陰に隠れ、ヘッドブロックを潜望鏡のように伸ばしてフォッカーの機体を確認して攻撃を行うという戦法も用いた。

統合軍艦隊への奇襲作戦では、ガウォークで空母アスカの甲板の下側に潜り込み、デストロイド・シャイアンの対空砲火を回避している。

▼赤い機種のパーソナルマークが描かれたコクピット後方の装甲板は、リフトファンカバーとして機能する。これはファイター形態でも同じである。

▲ファイターの機体後部が下方に展開し、ガウォークの脚部となる。バトロイドに変形する際には、脚部が大腿部を基点に180度回転し、膝が前方を向く。

▶ファイター時のガンポッドは機体下面中央の専用ラックにマウントされるが、ガウォーク形態への変形時に腕部で携行する。

▲主翼外縁のハードポイントにマイクロミサイルランチャー／増漕タンク複合ポッドを装着した状態でも変形が可能。

ファイターモード

SV-51の主機は、スホーイS-37に搭載されていたアビアドビガテル D-30F6をOTEC製超耐熱超軽量宇宙合金でチューンした通常型ターボジェットエンジンで、元になったエンジンに比べて数十%の出力向上を実現している。反面、燃料効率が悪く航続距離も短いため、ファイター形態では局地戦闘機に近い運用がなされた。かつてのスホーイ設計局の伝統を受け継いだ結果、高機動空中戦能力が追求されており、亜音速領域での優れた機動性は航続距離の短さを補って余りあるものであった。また、本機は機体底面に配置された2基のファンとメイン可変ノズルを利用することで、ファイターのままでもVTOLが可能となっている。これはVF-0には不可能な機動であり、SV-51の運用性の高さを際立たせていた。

限界領域での機体制御はシビアだが、空戦機動制御コンピュータによって高い運動性を発揮する。

航続距離の短さを補うため、SV-51専用に改装された潜水母艦からの発進を行うケースも多かった。

▼構造の簡易化と強度確保、軽量化のために折り畳み式の主翼を採用しており、VF-0とは大きく異なるフォルムを持つ。

▲上下2対の尾翼と、コクピット後方にはエアブレーキとしても機能する全動式カナード翼を有する。図は主翼外縁にマイクロミサイルランチャー／増漕タンク複合ポッドを装着した状態。

▼機体底面中央のやや前よりに2基のVTOL用補助ファンを備える。これは空戦機動やバトロイドの機体制御にも用いられる。

▲主翼は翼端にウィングレットを備え、計6箇所のハードポイントを有する。ただし、主翼を折り畳んだ際には内側の4箇所は使用不能となる。

バトロイドモード

統合軍による後年のVFに比べて一回り大型であったSV-51は、「異星人の戦闘ポッドやパワードスーツに対抗可能な兵器」という観点で設計されていた。それは各パーツの大型化と重量の増加を招き、慣性モーメントの増大と変形用アクチュエーターの出力不足により、VF-0に比べ変形時間がわずかに長くなっている。しかし、機体の大型化により重装甲という長所も獲得しており、その効果はエネルギー転換装甲（SW-51）を最大限に活用できるバトロイド形態で発揮された（エネルギーキャパシターとエネルギー転換装甲の性能はVF-0とほぼ同等とされる）。また、特徴的な主翼の収納構造によるバトロイドの独特なフォルムは、後年に開発されたどのVFにも見られないものであった。なお、イワノフ機は空中戦でもバトロイドに変形し、広範囲を射界に収める戦法を駆使していた。

バトロイドは死角に回った敵機への対応やミサイル迎撃など、空戦の最中にも用いられた。特にイワノフはこうした変則的な運用を得意としていた。

ヘッドブロックのバイザー部には収納式のシールドが備えられており、近接戦闘時にメインカメラを保護する構造となっている。

◀機体そのものは大型だが、胴体や四肢は細く、張り出した主翼を除けば外観はスマートである。左図は主翼を展開した状態。

▼折り畳まれた4枚の尾翼は、左右の前腕部側面に密着する。また、コクピットブロックは胴体中央部に位置する構造となる。

▶ファイターの機体下部中央ブロックが背骨のように背部に位置し、補助リフトファンがバックパックの機能を発揮する。

SV-51

Illustration by Hidetaka Tenjin

機体解説

反統合同盟に配備されたSV-51は、α(アルファ)型が一般兵士用として運用され、カラーリングの異なるγ型がエースパイロット用として運用された。γ(ガンマ)型はシュワルベ(ツバメ)のコールサインの2機が確認されており、それぞれ黒系統と赤系統のカラーリングとなっている。ここでは、ノーラが搭乗したγ型と、一般兵士用のα型について解説する。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属 ▶ 反統合同盟
全長 ▶ 22.7m
空虚重量 ▶ 17,800kg
エンジン ▶ アビアドビガテルD-30F6Xターボファンジェット(102.5kN、アフターバーナー時204.7kN)×2/VTOL用ファンジェット×2(バトロイド形態では補助リフトファンとして作動)
最大速度 ▶ M2.81(高度11,000m)
航続距離 ▶ 1,910km(マイクロミサイルランチャー/増槽タンク複合ポッド標準装備時)
上昇限度 ▶ 22,500m
武装 ▶ ミニガン(Gsh-231 12.7mm機銃)×2/55mmガンポッド×1(Gsh-371)/マイクロミサイルランチャー/増槽タンク複合ポッド×2/マイクロミサイル(ツロポフ SA-19M I/IR誘導)、SPO-15C360度パッシブ・レーダー警報受信システム/チャフ&フレアディスペンサー(APP-60)×1、アクティブステルス・システム(RP-51)/SWAGエネルギー変換装甲システム(SW-51) 他

開発系譜図

SV-51 ▶ SV-52

サイズ比較

VF-1
SV-51

主要パイロット

ノーラ・ポリャンスキー

反統合同盟の先陣を切る紅きエースパイロット機

SV-51γ(ノーラ機)

機体解説

SV-51のスペシャルチューン機、SV-51γは、2機の存在が確認されている。D.D.イワノフが搭乗した、シュワルベ・アン(Schwalbe1)のコールサインを持つ漆黒の機体、そしてノーラ・ポリャンスキーが搭乗した、シュワルベ・ドゥー(Schwalbe2)のコールサインを持つワインレッドの機体である。カラーリングとマーキング以外、一般兵士用であるSV-51αとの変更はない。

機体が有する圧倒的な空中での機動性能を活かし、地球統合軍に迫った。

ファイターモード

▶加速性能、旋回性能に優れたファイター形態。イワノフ機、量産機と同じく、ファイター形態でもVTOLが可能となっている。

VF-0と同じく、通常型ターボファンジェットエンジンを搭載しているが、信頼性では本機が上回る。

▲翼部の左右計6ヶ所にハードポイントを備える。主翼を完全に折り畳む際には、内側4ヶ所に設置された装備は排除しなければならない。

▲折り畳み式を採用した翼部は、非常に薄型となっている。だが、その強度は高く保たれていた。

▲機体の側面図。機首部分が細長く突き出ているのが本機の特徴で、全体的なフォルムもシャープになっている。

マーキング

機首(ノーズ)、主翼上部、垂直尾翼側面に描かれたマーキング。十字のマークと黄色のラインが特徴。

ガウォークモード

ドッグファイト中にもガウォークに変形することで、急な減速や方向転換が可能となっていた。

◀▼脚部と腕部を展開するガウォーク形態。主翼を可動させることで、空中での高い制御性を実現した。

空母アスカの甲板上に配備されたデストロイドを、海に蹴り落とす戦法も見られた。

バトロイドモード

▶空中でも変形が可能となっているが、変形アクチュエーターのパワーが不足気味であるため、VF-0に比べてわずかに変形時間が長い。

▼背部から見たバトロイド。VTOL能力を生み出す補助リフトファンが背部へとレイアウトされている。

バトロイドではガンポッドを多用し、正確な射撃で敵機を追い詰めることができた。

運用記録

ノーラが搭乗したSV-51γは、マヤン島周辺で繰り広げられた異星人遺物奪取作戦に投入された。空母アスカへの襲撃作戦では主力として参加したほか、燃料気化爆弾をマヤン島に投下、島を火の海としている。だが、直後に行われた統合軍VF-0Aとのドッグファイトの際、復活した「鳥の人」の攻撃に遭い、機体は消滅した。

工藤シンが操縦するF-14A+を圧倒的なスピードで翻弄し、撃墜している。

VF-0Aとのドッグファイトの最中、鳥の人が放ったビームが背後から襲い、機体は消滅した。

主翼展開時

▼主翼を展開した際の背部。機体の浮力・推進力を生み出すスラスターパーツが集中的に設置されているのがわかる。

◀バトロイドで主翼を展開した状態。空気抵抗を受けやすい人型でありながら、高い機動性を確保した。また、ホバリングも可能となる。

折り畳み式の主翼は、鳥のように羽ばたかせることができ、空中での優れた機体制御能力を担った。

主翼折り畳み時

▶主翼を折り畳んだ状態。狭い場所に潜入する際などに用いられる。この状態では飛行は不可能である。

VF-0Aを追ってマヤン島に降り立った際、主翼を折り畳んだ状態が確認されている。

ミサイル

主翼下のパイロンに設置されたミサイル。水上艦を一度の攻撃で撃沈することができた。

ミニガン

主翼付け根に設置されている12.7mm機銃。連射が可能で、牽制や迎撃など用途は広い。

SV-51α　量産機

反統合同盟の一般兵士用に生産されていたVFが、SV-51αである。基本性能、構造共にγタイプとの違いはなかったが、潜水艦からの水中発進が可能なタイプも少数ながら存在していたとの記録がある。このタイプは、防水、耐圧機能が付与されており、発進ドックに設置する関係から、主翼構造にも変化が加えられていた。その結果、最大で深度30m程度からの水中発進が可能であった。また本機をベースとして、後継機であるSV-52が開発されている。

潜水空母アウエルシュテットの発進ドックから出撃するSV-51α。

ファイターモード

▲▶SV-51α量産機のファイター(上)と、ガウォーク形態(右)。最も多く生産された単座型のほか、複座型もあったようだ。

ノーラやイワノフが乗るSV-51γと共に、アウエルシュテット内で整備と調整が行われていた。

ガウォークモード

EXTRA REPORT

関連事項

MiG-29

反統合同盟が、SV-51と並行して運用していた従来型の戦闘機、MiG-29。統合軍のF-14A+への対抗戦力として有効であった。

◀▲旧ソ連が開発した戦闘機で、格闘戦力においてはF-14A+を凌ぐとも言われるが、航続距離が短い。

SV-51γ(イワノフ機·決戦仕様)

SV-51決戦仕様とは、SV-51γの専用オプションであるジェット·ブースターを装着した状態を指す。これは、推力の増強による空戦機動性能や最大速度の向上と武装強化を図る装備で、コンセプトは後年の可変戦闘機(VF)のスーパーパーツに通じる。鳥の人事件の最終局面において、D.D.イワノフのSV-51γが本仕様で出撃した。

「鳥の人」が覚醒した際の戦いで、ロイ·フォッカーのVF-0S フェニックス特攻突撃仕様と死闘を繰り広げた。

イワノフ機はノーラを殺された怒りから「鳥の人」に挑みかかったが、返り討ちに遭い撃墜された。

ファイターモード

▶主翼上面の強化ハードポイントにジェット·ブースターを装着する。また、ブースターには専機のマーキングが施された。

▼主翼下にマイクロミサイルランチャー 増漕タンク複合ポッドを計4基と、中距離機動ミサイル「エイモス+」2発を装備。

▼ブースターは外殻の一部がSWAGエネルギー転換装甲で構成され、SV-51からのエネルギー供給で稼動する。

主要パイロット

D.D.イワノフ

イワノフ機はその優れた機動性をフルに活かし、「鳥の人」に肉薄した。

四面図

VF-0 フェニックスの特攻突撃仕様と異なり、ジェット·ブースターは正規のオプションであるため、そのフォルムには破綻は見られない。また、ブースター装着状態でのアクティブステルス性能も初期段階から考慮されており、その効果は非装備状態と同様である。

▶正面

▶側面

▶上面

▶底面

ガウォークモード

「鳥の人」との戦闘で、急上昇から急降下への高速反転機動にガウォークを用いた。

▲SV-51γ決戦仕様イワノフ機のガウォーク形態。主翼のオプション装備以外、ノーマル装備との違いはない。

▲ジェット·ブースターを装着する専用ハードポイントは、主翼中央の可動部上面に位置している。

▶エイモス+は対「鳥の人」用に装備された武装で、同部位に増漕複合ポッドを装備することも可能。

バトロイドモード

▶SV-51γ決戦仕様イワノフ機のバトロイド形態。ブースターはバトロイドの機動に干渉しない構造となっており、運動性も保たれた。

イワノフは、フォッカー機を相手にバトロイドによる空中戦を展開した。

▶バトロイド時には、主翼の可動構造を利用してブースターの推力方向を自由に制御することが可能である。

◀空中機動時には、脚部と背部の推力を高度維持に用い、ブースターで推進することも可能。

SV-51γ(ノーラ機・決戦仕様)

マヤン島における作戦の最終局面では、ノーラ・ポリャンスキーのSV-51γも決戦仕様で投入された。また、作戦には投入されなかったが、SV-51には決戦仕様のオプション以外にも、宇宙空間用スーパーパーツや衛星軌道への打ち上げブースターが存在したと言われている。

ノーラ機は因縁深い工藤シンのVF-0A特攻突撃仕様を執拗に付け狙い、激しいドッグファイトを展開した。

ブースター装備図

図はガンポッドと外縁ハードポイントの増槽複合ポッド以外の主翼下オプションを外した状態。

▼支柱
ジェット・ブースターは下図に示した支柱を介して、強化ハードポイントにジョイントされる。

▶ジェットブースターノズル
ジェット・ブースターのノズル部分。ノズルの周囲には推力偏向パネルが配されている。

ファイターモード

▼SV-51γ決戦仕様ノーラ機のファイター形態。決戦仕様が用意されたのは、ノーラ機とイワノフ機のみであった。

▶ブースターのエンジンはクリモフRD-35A/Rで、ターボファンジェットとラムジェットの2系統切り替え式である。

▼イワノフ機同様、エイモス+を装備した。ただし、通常は増槽複合ポッドを6基装備することが推奨された。

主要パイロット
ノーラ・ポリャンスキー

イワノフ機同様、その機動性能は高く、VF-0Aフェニックスと互角に渡り合った。

ガウォークモード

▼SV-51γ決戦仕様ノーラ機のガウォーク形態。増槽複合ポッドの色は薄いグレーで、イワノフ機とは異なるカラーリングとなっていた。

ドッグファイト中に急減速してバトロイドに変形したシン機に、ガウォーク形態で対応。

▼ジェット・ブースターには若干の燃料スペースがあるが、容量が小さく増槽複合ポッドを少なくとも4基は必要とした。

▶ノーラ機に装着されたジェット・ブースターの側面にも、イワノフ機のものと同じマーキングが施されている。

バトロイドモード

▶脚部に装備を追加したVF-0特攻突撃仕様とは異なり、主翼以外に追加装備はない。

▲決戦仕様ノーラ機のバトロイド形態。マイクロミサイル搭載の複合ポッドによって火力が向上し、戦闘能力が強化された。

▶主翼部にオプションパーツが集中して設置されるため、主翼が畳めなくなる。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-0S

統合軍初の可変戦闘機

機体解説

きたるべき異星人との戦いに備えて統合軍が開発を進めたVF（可変戦闘機）――その雛形にあたる試作機シリーズのひとつが、VF-0 フェニックスである。ASS-1由来のオーバーテクノロジー（以下OT）を取り入れてバトロイドとガウォークへの変形を実現した本機は、試作機ながら機動戦闘と白兵戦を両立するVFの基本性能を獲得している。熱核反応タービン・エンジンの開発が間に合わず、在来型のターボファンジェット・エンジンを主機とするなど、OT応用兵器としての完成度は決して高くはないが、VFの基礎を確立した意義は大きい。

主要パイロット

ロイ・フォッカー

データ ※データはファイター形態時のもの

- **所属**▶統合軍
- **全長**▶18.69m
- **空虚重量**▶16,191kg
- **エンジン**▶EGF-127ターボファンジェット改×2（主機）、新中州ARR-2ロケットモーター×3（副機）
- **最大速度**▶M2.74（高度11,000m）
- **航続距離**▶2,075km（背部コンフォーマルタンク標準装備時）
- **上昇限度**▶25,000m
- **武装**▶マウラー社製レーザー機銃×2／35mmガトリングガンポッド（ハワードGPU-9）／中距離空対空ミサイルAMRAAM2（レイセオン・ビフォーズAIM-200A I/ALH誘導）他

サイズ比較

VF-1J

VF-0

開発系譜図

VF-0 ▶ VF-X ▶ VF-1

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-0S フェニックス

運用記録

VF-0の開発は、ノースロップ・グラマンとストンウェル、新星の共同で行われ、2004年末に完成した1号機をはじめ6機が製造された。それらは2005年中にデータ収集任務を終える予定だったが、統合戦争において反統合同盟が試作VFを投入する事態を受け、統合軍は本機の実戦投入を決断。若干数を増産して実戦テスト部隊を編成することとなる。なお、本機は限りなくハンドメイドに近いために機体ごとの性能差が生じ(最大推力やスロットルの反応速度、システムの安定性など)、実戦艤装に当たっては総合的に優れた機体に編隊指揮システムを搭載し、指揮官機仕様のS型とした。

編成された実戦テスト部隊は統合軍空母アスカを母艦とし、開発に携わった技術者が出向して整備にあたっている。

慣熟訓練も半ばでマヤン島における異星人遺物の奪取作戦に投入され、反統合同盟のSV-51と激しい戦闘を展開した。

標準装備

マウラー社製レーザー機銃

固定武装としてバトロイド形態の頭部にマウラー社製レーザー機銃を装備する(2門)。内部スペースの問題から実弾火器の搭載が見送られ、OT導入によって小型化された本兵装を採用した。

ハワードGPU-9 35mmガトリングガンポッド

VF-0は既存の戦闘機用搭載兵器が流用可能だが、標準武装には外装式のハワード社製3銃身ガトリングガンポッドが採用された。複合重金属徹甲弾やAHEAD弾を装填可能で、発射速度は毎分60、1250、2500発の3段階に調節できる。装弾数は550発で、本体からの電力供給を受けて90馬力のモーターで駆動する。

コクピット

コクピットのレイアウトは従来型の戦闘機とさほど変わらないが、ホログラフィック型HUDや視線追尾式ポインティング・システム、AI制御の統合操縦支援システムなどの先進技術が多く盛り込まれている。

▼ファイター時

▲バトロイド時

ガウォークモード

ガウォーク形態はVF-0の初期テストにおいて不完全な変形が行われたことが元で誕生した。この形態は、ファイターとバトロイドの変形過程を補完する形態として有用性が認められただけでなく、VF（特にバトロイド）に慣れていないパイロットの養成においても概念理解のクッションとして役立った。実戦においては、攻撃ヘリに近い運用法が模索されることとなる。

ロイ・フォッカーはガウォーク形態の機動性を活かして高速での戦闘を行っている。小回りが効く特性を生かした運用法と言えるだろう。

◀脚部を展開することでホバリングが可能となり、低高度での安定性が向上する。また、ファイターからバトロイドへの変形時の隙を減らすとともに、変形途中で墜落する危険性も低減している。

◀バックパックと胴体にわずかなすき間ができる点がVF-1とは異なるが、腕部が展開して柔軟な戦闘が可能となるガウォークの構造はすでに確立されている。

▶頭部だけを展開してより広い範囲にレーザー機銃を発射することもできる。また、ファイター形態と違ってエネルギー変換装甲が機能するため、重戦闘ヘリに相当する防御力が見込める。

ファイターモード

ASS-1の研究によって高機動の戦闘ポッドが異星人の主力兵器のひとつと判明し、VFにも高い空戦能力が要求されたことから、VF-0は従来の戦闘機に準じた構造のファイター形態を有するに至った。その形状はのちのVF-1に酷似しており、技術の継承がうかがえる。なお、本形態ではエンジン出力の大半が飛行のために費やされるため、後述するエネルギー変換装甲は機能しない。

大気圏内戦闘機としての性能は当時の最新鋭戦闘機をやや上回る程度。ファイター形態は主にミサイルの射出のほか敵機の追尾などに使われた。

▶ファイターのフォルムはVF-1とほぼ同じで、可変翼構造を有する。機体上面には2基の補助燃料タンクがあり、燃料消費後は防弾装甲を兼ねる(投棄も可能)。

▼ファイターの操縦系には3系統デジタル式フライ・バイ・ワイヤを採用している。また、主翼下に左右計4基のハードポイントを備え、各種兵装を懸架できる。ミサイルは各ハードポイントに専用ラックで3発ずつ、合計12発搭載可能。

◀極限までチューンしたEGF-127 ターボファンジェット・エンジンを主機とし、ノズルは推力偏向式を採用。運動性に優れ、コブラなどの変則マニューバ飛行も可能。

バトロイドモード

VF-0のOT応用兵器たる所以は、バトロイド形態でもっとも効果的に機能するSWAG エネルギー変換装甲システムにその一端を見ることができる。電磁パルスを加えることで強度を増すOT由来の積層装甲を採用することで、本機はバトロイド時の強度不足と耐弾性の問題を克服している。なお、このシステムや駆動に要する電力は、エンジン出力を電力に変換することでまかなわれる。

本来は陸戦兵器に位置付けられるバトロイドだが、フォッカーは同形態で空中戦も演じており、ミサイルを迎撃するなどの多彩な運用を見せている。

▲肩の上面は変形構造の一部であるヒンジ型の胸部連結パーツで、変形の要となる。

▶VF-1に比べて大型なVF-0だが、バトロイド形態のフォルムはスマート。ちなみに髑髏のマーキングはロイ・フォッカーのパーソナルマークである。

▲下腕部はファイター時に脚部と密着するよう曲面状に成形されている。なお、この形態では出力の大半がエネルギー変換装甲に回され、戦車なみの防御力を発揮する。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-0S

攻防一体のバトロイド専用強化装甲

PHOENIX

● データ ※データはファイター形態時のもの

所属▶統合軍
全長▶18.69m
空虚重量▶16,191kg
エンジン▶EGF-127ターボファンジェット機×2（主機）／新中州ARR-2ロケットモーター×3（副機）
最大速度▶M2.74（高度11,000m）
航続距離▶2,075km（背部コンフォーマルタンク標準装備時）
上昇限度▶25,000m
武装▶マウラー社製レーザー機銃×2、35mmガトリングガンポッド（ハワードGPU-9）、中距離空対空ミサイルAMRAAM2（レイセオン-ビフォーズAIM-200A I/ALH誘導） 他

● 主要パイロット

ロイ・フォッカー

機体解説

可変戦闘機の試作機として、変形機構の導入に成功したVF-0だが、その一方で機体の脆弱性や火力不足が問題となっていた。その不足を補うべく、機体と合わせて開発された追加装備がリアクティブアーマーである。またVF-0には、出力の向上を目的とする特攻突撃仕様として、追加ブースターという形で無人機·ゴーストを装備したタイプも存在する。ここでは、後世のVFに追加装備という概念をもたらした原点とも言える、これらの追加装備について解説する。

● サイズ比較

VF-1J
VF-0

● 開発系譜図

VF-0 ▶ VF-X ▶ VF-1

VF-0S フェニックス

リアクティブアーマー装備

VF-0Sのオプション装備として用意されていたのが、バトロイド形態時専用のリアクティブアーマーである。機体の脆弱さを補うために開発された強化装甲で、腕部、肩部、胸部、腰部、脚部とその関節周辺を保護する。また敵ミサイルが着弾した場合、強化装甲の表面を内部の火薬で瞬時に吹き飛ばす構造を採用しており、機体本体へのダメージを大幅に減少させることが可能となっている。加えて攻撃力の強化も図られ、肩部、胸部にマイクロミサイルを内蔵。実際の戦場では、アスカに接近するSV-51を迎撃した際に使用された。

工藤シンの搭乗するA型と、フォッカーの搭乗するS型に本オプションが用意されていた。

空母アスカの内部に侵入したノーラ・イワノフのSV-51を、フォッカーは本オプションを装備したVF-0Sで一時後退させた。

肩部、胸部の強化装甲を展開し、内部のミサイルポッドを発射した状態。無数のミサイルでSV-51を牽制した。

▲各関節部にも強化装甲が施され、複数の敵機から一斉射を受けても耐えられる構造となっている。その分、運動性能や飛行性能は大幅に低下することとなった。

▶脚部の裏側や、背部スラスターの上部にも強化装甲が追加されている。背部からの敵襲に備えた装備である。

A 肩部

両肩に設置された大型の装甲。マイクロミサイルランチャーが内蔵されており、発射時には装甲が上方に展開する。

B 胸部

胸部の装甲内部にも、マイクロミサイルランチャーが内蔵されている。発射時には、装甲が中央に向け開く構造だ。

C 腕部

リアクティブ・アーマーパネルと呼ばれる、シールド型の装甲を設置。可動域が広く、頭部への攻撃もガードできる。

D 腰部

腰部装甲にはハンドグレネードが設置されている。マニピュレーターでラックから引き抜き、敵に投擲する。

E ジャンプ・ブースター

装甲の追加で増量した本体を支えるため、ブースターが追加されている。これにより、加速性はある程度確保できた。

F 後方センサー

後方から迫る敵機を捕捉するセンサー。本装甲装備時は機動性が低下するため、新たに設置されたと見られる。

EXTRA REPORT

関連事項

GBP-1Sとの関連性

VF-0Sのデータは重要機密として隠匿されたが、「防御力と砲撃力の強化」という、リアクティブアーマーの特性を引き継ぐ追加装備が、後継機のVF-1にも用意されていた。それがGBP-1S（プロテクター・ウェポンシステム）と呼ばれる全身装甲兵装システムである。リアクティブアーマーからの具体的な技術継承や繋がりは未だ定かになっていないが、強化装甲と固定ミサイルがセットになった構造などは共通しており、その関連性は否定できない。

M

バトロイドモード専用で、なおかつ特殊作戦を想定した構造は、リアクティブアーマーとGBP-1Sの共通点である。

▶GBP-1S
強化装甲が追加されている箇所もリアクティブアーマーと大差はないが、こちらは装甲を任意でパージできる。

M

特攻突撃仕様

反統合同盟の可変戦闘機SV-51に対抗するため考案されたVF-0Sの特殊仕様。高出力ターボファンジェットを搭載した無人偵察機「QF-2200 ゴースト」を追加ブースターとして装着したタイプで、装着に伴い、ゴースト本体のエンジンも増強され、VF-0Sから推力は20％向上した（アフターバーナーを使用すれば90％）。また、出力の余剰分を活かしてミサイルポッドやタンクを追加し、戦闘能力が強化されている。但し、空母アスカの乗員が突貫作業で改修したため、安定性は低下。その挙動はパイロットの技量に委ねられた。

特攻突撃仕様に改修されたフォッカー機のS型（奥）と、シン機のA型（手前）。現地改修のため、正式な形式番号はない。

ファイターモード

▶胴体部にゴーストが設置された。これにより、本体の重量バランスは以前に比べ悪化した。

▲アフターバーナーを設置したゴーストの装着により、加速性能も大幅に向上している。

VF-0Sのステルス性能はほぼ無効にされたほか、大幅に出力を強化したために、パイロットに対する負担が増している。

▼ゴーストに装備されていたマイクロミサイルランチャー5基はそのまま使用可能。また機体上面両側に新設したパイロンと、主翼下可変パイロンの計4箇所に8連汎用マイクロミサイルランチャーを、さらに主翼下の可変パイロン2箇所には中射程機動ミサイルポッドを備える。

ガウォークモード

ゴースト装着状態でも、ガウォークモードへの変形と運用が可能となっている。ファイターモードと同様、高い推力を維持できるが、ゴーストの配置は変形を考慮していないため、スラスターが不自然に後方へ突き出たレイアウトとなった。これにより、機体の運動性が低下したと推測される。

▶ファイターモードに比べて空気抵抗を受けやすい形状となるため、パイロットへの負担がさらに増している。

▲後方から見ると、ゴーストのスラスターが大きくせり出しているのがわかる。腕部、脚部の可動性は保たれていたようだ。

▼機体の両エンジンナセルには、ミサイルと燃料タンクを内蔵したスーパーパーツが装着されている。

バトロイドモード

人型形態であるバトロイドモードでは、ゴーストを背部にバックパックのように背負う形状となる。ゴーストの高い推力を活かして、敵機にガンポッドで攻撃を仕掛け、すぐに後退する一撃離脱戦法や、追加装備したミサイルポッドで遠距離から敵機を牽制するなど、戦闘方法の幅が広がっている。

▲ゴーストの装着により、バトロイドモードの特徴である高い運動性・汎用性は低下したと見られる。

▼ゴーストを装着したままの状態でファイター、バトロイドモード形態の可変は可能である。

▲安定性を省みない仕様から「殴りこみ」ヴァージョンとの別名を持つほか、シン機の最後の姿から「天使」ヴァージョンとも言われた。

VF-0A

急遽実戦に投入された、VF-1の前身機

VF-0Aの多くは鳥の人事件に投入された。その中でも工藤シンが使用した機体は、事件の最終局面において特攻突撃仕様で運用されたことで知られる。

機体解説

VF-0 フェニックスは、F-14系試作機群の後を受けて製作されたVFの試作機シリーズのひとつである。主機は従来型ターボファンジェットのオーバーチューン仕様で、エンジンのサイズや燃料スペースの問題により機体が大型化している。だが、変形機構やエネルギー転換装甲、アクティブステルス能力といったシステムは後に実用化されるVF-1 バルキリーと同等のものが搭載されており、以降のVF開発に大きな影響を与えた。各種試験や戦術研究に用いられたVF-0は本来、実戦を考慮していなかったが、反統合同盟がVF実験実戦部隊を編成中との情報により、急遽増産されると共に実戦用装備が施され、実戦テスト部隊が編成された。このVF-0A(A型)は、テスト部隊の主力となったスタンダードな仕様で、生産数もシリーズ中で最多を誇る。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶18.69m
空虚重量▶16,191kg
エンジン▶EGF-127ターボファンジェット機×2（主機）／新中州ARR-2ロケットモーター×3（副機）
最大速度▶M2.74（高度11,000m）
航続距離▶2,075km（背部コンフォーマルタンク標準装備時）
上昇限度▶25,000m
武装▶マウラー社製レーザー機銃×1／35mmガトリングガンポッド（ハワードGPU-9）／中距離空対空ミサイルAMRAAM2（レイセオン-ビフォーズAIM-200A I/ALH誘導）他

サイズ比較

VF-1J
VF-0A

開発系譜図

VF-0 ▶ VF-X ▶ VF-1

主要パイロット

工藤シン

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet
メカニックシート

VF-0A フェニックス

運用記録

2002年2月、対巨人類全環境対応型可変戦闘機試案の提出により、VF-0計画がスタートした。2004年12月に1号機が完成したVF-0は、本来実戦を想定しておらず、データ収集用に過ぎなかった。だが、反統合同盟がVFの実戦投入を準備中との情報を受けた統合軍はVF-0の増産を急ぐと共に、実戦仕様への改装と実戦テスト部隊の編成を進めた。こうして誕生したVF-0の実戦テスト部隊は、空母アスカに配置され、2008年の鳥の人事件に投入されている。これがVF-0の初陣であった。VF-0シリーズの中でも最も多く生産され、実戦テスト部隊にも多数が配備されたタイプが、基本型と言えるこのA型である。なお、あるデータによるとA型の推定生産機数は単座型24機、複座型4機(B型の可能性もある)、複座強行偵察仕様2機だという。また、このデータではS型は4機、D型の単座型6機、同複座型18機が生産されたとされているが、その信頼性は不明である。

反統合同盟のSV-51と死闘を繰り広げたVF-0は損耗率も高く、終戦時にはわずか数機しか残っていなかったとされる。

標準兵装

VF-0では、胴体下懸架用と手持ち式を兼ねるガンポッドと、頭部のレーザー機銃が標準兵装として採用された。また鳥の人事件での使用例は少ないが、主翼下に空対空ミサイルを装備するなど、VF-1と同等の装備形態を実現していた。

▲ハワード GPU-9　VF-0用のガンポッド。総弾数は550発で、ファイター形態でも使用可能。

◀レーザー機銃　OTMにより小型化に成功したマウラー社製のレーザー砲。A型は1門のみを固定装備する。

▶AMRAAM2(AIM-200A)　標準仕様の中距離空対空ミサイル。主翼下に最大12発搭載可能。写真はS型。

変形シークエンス

背部エンジンブロックの移動タイミングといったわずかな違いはあるが、VF-0の変形機構と過程はVF-1のそれとほぼ同じで、アクチュエーターや多数のヒンジ、可変翼などを駆使してファイター、ガウォーク、バトロイドの3形態に変形できた。最初期の変形機構だが柔軟性に優れ、ファイター形態で腕部を展開したり、バトロイド形態で主翼を開いたりすることも可能となっている。なお変形可能上限速度はマッハ1.7前後(特攻突撃仕様の場合)と言われるほか、変形所要時間は反統合同盟のVF、SV-51よりわずかに短かったとされる。

ファイターからバトロイドに変形する場合、エアブレーキと脚部を展開した後、胴体の展張と折り曲げを行うというプロセスが基本となる。これは機構、過程共にVF-1に酷似している。変形状況やエネルギーの伝達状況などは、コクピット内のディスプレイに表示される。写真はS型の変形過程。

ガウォークモード

試験中の事故で偶然発見されたと言われる形態で、垂直離着陸能力やホバリング能力を持ち、バトロイド形態よりも地上走行時の速度と安定性に優れている。ヘリコプターやホバークラフトに近いこのような能力は、脚部(エンジンナセル)を鳥脚状に折り曲げることで達成されているが、見た目と異なり空気流入に支障が生じてはいない。これはナセル前部に設置された補助ファンによるもので、ファンによる加圧と精巧な可変インテークシステムは、ガウォーク形態時における半開状態でも、充分な空気流入量を確保できた。これに加えてガウォーク形態は、エネルギー転換装甲を常時稼働させられた。強度はバトロイド形態に劣るが、ファイター形態時の4～5倍の防御力(重戦闘ヘリや軽装甲車両と同程度)を有していたと言われている。

ファイター形態では不可能な急制動やヘリのような変則的な機動、空中停止や軟着陸が可能。反統合同盟のVFとの戦闘でも使用された。

ガウォーク形態でもエネルギー転換装甲を稼動できたが、SV-51が装備する火器の直撃には耐えられなかった。

◀脚部を展開すると共に背部ブロックを機体上面に移動させるなど、VF-1とほぼ同様のガウォーク形態。ガンポッドが手持ち式となるため攻撃の自由度が高く、限定的だが腕部・脚部を用いた白兵戦も可能。

▼前傾姿勢が基本で、腕部と脚部が展開されたため胴体内壁が露出。図の主翼はフラップなどを下ろした高揚力状態で、翼下のハードポイントも確認できる。

▶ファイター形態時とは異なり、インテークのシャッターは半開状態となる。足部ノズルはファイター時より引き出され、ハの字状に開かれている。

ファイターモード

主に大気内戦闘における空力的な要求から、従来の戦闘機に近いシルエットを与えられたファイター形態。可変翼や二次元推力偏向装置、2基のEGF-127ターボファンジェット改などにより従来の戦闘機を超える機動／運動性を発揮する。反面、燃料消費が激しく、航続距離は機体上面両側のコンフォーマルフューエルタンク標準装備時でも2,075kmに過ぎなかった。また、VF-0Aには、大容量のエネルギーキャパシター(蓄電池の一種)が搭載されており、これを使用することでファイター形態時にエネルギー転換装甲を短時間有効とする「マイティウィング・モード」が可能であった。この機構はEGF-127改の発電能力を活かすためのものであり、以降のVFには見られないVF-0独自のシステムであった。

▶F-14の強い影響が見受けられるファイター形態。胴体中央のエアブレーキや、エンジンナセル側にガウォーク／バトロイド形態用のロケットブースターを持つなど、基本構造はVF-1と同じである。

▶単装式レーザー機銃を持つ頭部が、半没状態で機首付け根に位置している。空気流入量を最大にするため、インテークは全開となる。

二次元式推力偏向装置は、超音速域でも「プガチョフ・コブラ」などの特殊な機動を可能とした。

空母での運用を想定しており、カタパルトからの発艦も可能。着艦フックも備える。

ガンポッドは胴体下面中央に搭載する。左右腕部ユニットの間に接続される。

◀主翼位置は巡航時のもので、速度や発着艦時などの状況に合わせて自動的に変更される。機体上面左右の突起は燃料タンク、エンジンナセル側面に見える6つの小パネルは整備用ハッチである。

バトロイドモード

巨人型異星人との戦闘およびコミュニケーションを前提とした人型陸戦形態。バトロイド形態のVF-0は全出力の10%もあれば充分な陸戦能力を発揮できるため、残り90%はエネルギー転換装甲に使用される。これによりバトロイド形態の総合的な防御力は、ファイター形態の10倍前後(主力戦車と同程度)にまで向上している。バトロイドは陸戦に特化した形態ではあるが、背部推進器があるため限定的ながら空中戦も可能。その場合の戦闘活動時間は20分程度と言われる。ほかにもバトロイド形態は、頭部が完全に展開されることも特徴と言える。頭部には多数のセンサー類が装備されており、主要なものだけでも高ズーム比大口径ハイビジョンTVカメラ、ナイトビジョン、赤外線ポインター、レーザー測距ファインダー、レーザースポット追尾装置、IFF-Iデータリンク、超音波動体センサーなどがある。

A型の特徴である、単装レーザー機銃式の頭部。VF-1Aと異なり、カメラアイは上下にふたつが配置された複眼式となっている。

特攻突撃仕様のA型を駆った工藤シンは、空戦中にバトロイドに変形し、ノーラ・ポリャンスキー大尉のSV-51γ 決戦仕様を追い詰めた。

▲ほぼ完全に人型となり、ガウォーク形態以上の手脚の自由度を持つ。肩のヒンジプレート自体が動くため、腕部の可動域は特に広い。脚部エアインテークのシャッターは、スリット状に半開している。

◀主翼は折り畳まれて収納されている。背面ブロック中央には、ファイター形態用の着艦フックと思われるパーツが見られる。

バトロイド形態での空戦や垂直離着陸の例もある。この際、背部の主翼を展開することが多かった。

▶VF-0A フェニックス

特攻突撃仕様

VF-0A フェニックス特攻突撃仕様は、空母アスカにて急遽製作された強化改修タイプである。その仕様は、レーザー機関砲とガンポッド、コンフォーマルミサイル・フューエルタンクという正規装備をすべて装着した上で、無人偵察機「QF-2200 ゴースト」をブースターパックとして増設。さらに、機体上面、主翼下部に新設されたパイロンに複数のミサイルパックを追加したもので、攻撃力と機動力が大幅に高められている。安定性やパイロットの安全面を度外視した構造であるが、結果的に反統合同盟のSV-51と対等以上に渡り合える戦闘力を獲得した。

マヤン島の戦闘に参加した特攻突撃仕様は、ノーラ・ポリャンスキーが搭乗するSV-51γと激しいドッグファイトを繰り広げている。

「鳥の人」からサラ・ノームを救出しようとしたシンは、打撃を受けたゴーストのみを切り離し、鳥の人に接近を試みた。

ファイターモード

通常機に比べ推力は約20%増加。アフターバーナー使用時には実に90%増しとなった。

▲機体上部に設置されたゴーストは、AIやアビオニクス関係のほか、偵察用機器をオミットして軽量化が図られている。

◀▼機体上部と翼下のパイロンにB連装用マイクロミサイルを4基、主翼下のパイロンに2基の中射程機動ミサイルポッドが新たに設置されている。ゴースト本体のウイングやノズルの制御、ミサイルランチャーの制御もVF-0Aのコクピットで行える構造となっていた。

ガウォークモード

▶ゴーストを取り付けたまま、ガウォーク形態にも変形できる。その挙動は、ファイターよりも不安定になりやすかったと見られる。

ガウォーク形態でSV-51γを上部から脚部で踏みつけ、ダメージを与えた。

▲空戦機動コンピュータによる補正もあったが、基本的にその制御はパイロットの手腕に委ねられていた。

◀ゴーストの装備によって、後方にウェイトが集中する構造となっている。このあたりにも、改修が急であったことが窺える。

バトロイドモード

ファイター形態から減速してバトロイド形態へと変形、すぐにガンポッドを構えてSV-51γを攻撃した。

◀バトロイド形態では、ゴーストのターボファンジェットと本体のエンジンを最大限に駆使することで、約35%も重量の増した機体を制御できた。

▶戦闘能力と機動性に特化した改修から「殴り込み」とも、最後の姿から「天使」バージョンとも呼ばれている。

◀ファイター形態以外では、追加装備が充分に効果を発揮しないため、バトロイド形態での運用はあまり見られなかった。

Mechanic Sheet
メカニックシート

VF-0A フェニックス

量産機

VF-0Aは、工藤シンが搭乗した機体以外にも、量産機が存在する。マヤン島での戦闘でも、A型は空母アスカの主力VFとして複数機が搭載され、「鳥の人」を巡る争いに投入された。だが、本来は専用の整備による調整が不可欠なほど精密な機体であったため、マヤン島に投入された機体は、多くのトラブルに見舞われた。そのため、機体性能を最大限に駆使できたのはロイ・フォッカーや工藤シンなど一部パイロットのみであり、その他一般兵士が搭乗した機体は変形システムすら満足に使われることなく、反統合同盟のSV-51に敗れることも多かった。

ロイ・フォッカーが乗るS型と共に出撃したA型は、D.D.イワノフが搭乗するSV-51の攻撃をコクピットに受け、撃墜されている。

マヤン島に漂着していたシンが、SV-51の攻撃を受けて墜落したA型を発見。何とか作動した機体に乗り込み、反撃を仕掛けた。

バトロイドモード

▶マヤン島に墜落したA型のバトロイド形態。頭部にはD型と同様、マウラー社製のレーザー機銃を1基備えている。標準装備としてハワード製のGPU-9ガンポッドと、中射程空対空ミサイルを持つ。

▲サイドから見た図。トラブルを招きやすいため、変形システムはあまり多用されず、本形態の能力が発揮されることは少なかった。

▲頭上より

▼足裏より

ガウォークモード

▲ファイターからバトロイドへの変形が不完全に行われたために生まれた形態で、優れたホバリング能力を持つ。

▶ガウォークへの変形に至る細かい制御は、統合操縦支援システムが担当。パイロットの操縦をサポートした。

ファイターモード

▶最大限までチューンしたターボファンジェットエンジンを搭載したことで、優れた機動性を確保した。

F-14の基本構成を参考にしているのがわかる。

▶シンが搭乗したA型に付与された、特攻突撃仕様の追加装備のうち、QF-2200ゴーストのみを装着した状態。特攻突撃仕様は急場しのぎの改修であったため、その他のA型に適用されることはなかった。

EXTRA REPORT

関連事項

F-14A+

F-14A+はアメリカ製の戦闘機F-14をベースに、オーバーテクノロジーを一部使って性能を向上させた機体であり、統合軍の主力として用いられた。可変後退翼を採用しているのが特徴で、その基本構成は、VF-0やVF-1に受け継がれている。

シンはマヤン島に派遣された当初、F-14A+に搭乗していた。

▲▶複座式の戦闘機で、主な任務は艦隊防衛とVF-0など攻撃部隊の援護であった。

オクトス

複雑な変形システムを有する 反統合同盟版"デストロイド"

機体解説

反統合同盟勢力圏の国家に属する軍事企業体が、OTM情報を入手、さらに統合軍側が新型陸戦兵器デストロイドシリーズを開発中との情報を掴む、という流れの中で開発された兵器群——そのうちのひとつがオクトスである。潜水艦から強襲揚陸戦車に変形して陸戦も行うという複雑で大がかりな可変システムを有する本機は、意外にも順調に開発が進行し実用的な兵器として誕生。実戦において高い能力を発揮した。生産コストが高いことなどから製造は少数に留まったが、多少の故障があっても戦闘に差し支えない程の強靭さを持ち、戦場では多くの兵士の信頼を集めたという。

データ

- **所属**▶反統合同盟
- **全長**▶18.2m(潜水巡航形態)
- **全高**▶11.2m(陸戦四脚形態)
- **全備重量**▶55.15t
- **動力**▶水中用大容量燃料電池クラスター／陸上用ディーゼルターボエンジン×1(後期型は反応タービンエンジンに換装)
- **水中速力**▶最大40kt(後期型は45kt)
- **潜行深度**▶250m(設計耐圧限界375m)
- **陸上移動速度**▶歩行時最大45km/時、車輪走行時95km/時
- **武装**▶12.7mm連装ビーム機銃砲塔×1、ビフォーズ57mm多用途速射砲×1、8連装ミサイルランチャー×1他

統合軍の可変戦闘機に匹敵する変形システムを有するオクトス。潜水巡航形態では巡航のみならず格闘戦もこなし、陸戦四脚形態では森林地帯にも進入可能という高い機動性を発揮した。

開発系譜図

? ▶ オクトス

サイズ比較

15m
10m
5m
0m
VF-1J
ヒト
オクトス

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶オクトス

運用記録

ダイムラー・ハイパースペース社／ルビーン海洋工学中央科学局協同開発となるオクトスは、統合軍のデストロイド、シャイアンなどと同世代の兵器であり、2006年に1号機がロールアウトされた後、統合戦争終了時までに92機が生産された。小型反応エンジン開発以降に生産された後期型は、反応エンジンに換装することで運動性能が向上。さらにエンジンの余剰出力によってエネルギー転換装甲を稼動させることが可能となり、防御力も大幅に向上している。

海岸線付近を主戦場としたオクトスの姿は、マヤン島上陸作戦をはじめとする統合戦争の各戦線で度々確認されており、実戦においても高い戦闘力を発揮した。なお、統合戦争終結後は統合軍により生産が再開され、第一次星間大戦で製造ラインが破壊されるまでに更に28機が生産されている。

マヤン島の海岸まで一気に接近した後、陸戦四脚形態へと変形し、速やかに上陸を果たした。

反統合同盟上陸部隊の主力となったオクトス。その砲撃によりマヤン島は火の海と化した。

陸戦四脚形態

オクトスは武装として、コクピットブロック上に連装の12.7mmビーム機銃、コックピット右側に57mm速射砲、左側に水中でも使用可能な[illegible]連装ミサイルコンテナを装備。また、機体底部には対人機銃を備えるなど、陸戦時には四脚式の多脚砲台として稼働する。

A ビフォーズ57mm多用途速射砲
B 12.7mm連装ビーム機銃砲塔
C 8連装ミサイルランチャー
D 対人機銃

◀動く砲台と言える陸戦四脚形態のオクトス。四脚に整地高速移動用の車輪を備え、陸戦時は時速95kmでの車輪走行が可能だった。なお、後期型では馬力が向上したものの、陸上速度自体は変わらなかったようだ。

コクピット周辺

◀12.7mm連装ビーム機銃砲塔の下方に位置するコクピット。乗降時はハッチが観音開きとなる。なお、コクピット横には、さらに機銃をセットすることも可能だ。

▶側面から見た機体の一部。変形システムは複雑なものとはいえVFほどの精巧さを要求されるものではなかった。

潜水巡航形態

潜水巡航形態時には脚部が折り畳まれ抵抗の少ない涙滴型となる。主動力は大容量高性能バッテリーでウォータージェットを駆動。なお、反応エンジン装備の後期型は最大速力が上がり、航続時間の制限がなくなった。

▲潜水巡航形態時の艦体前部。陸戦四脚形態時に前脚となる部位は、重量物を保持できる馬力を備え、打撃用の武器としても使用できる大型のマジックハンドとなる。

◀潜水巡航形態時の艦体先端には、大型のカメラが備えられている。下部両サイドにサーチライトを備えたカメラ周辺は、変形時などには前後にスライドする。

▲▶統合軍がその優秀さを認め、統合戦争終結後も引き続き特殊部隊用として生産を続けさせていたオクトス。特に反応エンジンを装備した後期型は、装甲が複合装甲からエネルギー転換装甲となり生存性も高く、現場では好評だったという。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-0D

攻撃能力を強化したVF-0の派生機

PHOENIX

機体解説

試作型可変戦闘機(VF)、VF-0 フェニックスシリーズにおいて、VF-0A(A型)やVF-0S(S型)を超える攻撃能力を求めて開発された仕様が、このVF-0D(D型)である。本機はA型以上の高機動空戦能力とペイロードの増加、電子戦性能の強化を目的に設計されており、カナードとクリップドデルタ翼を組み合わせたクロースカップルドデルタ(複合三角翼)という特徴的な構造を採用している。それによって可変翼式のA型から機体特性が大きく変化し、ペイロードや航続距離が向上、A型、S型に比べて攻撃機としての性格が強い機体となっている。なお、ブルーを基調とするカラーリングが施されたこのD型は、工藤シンとエドガー・ラサールが搭乗した機体として知られる。

主要乗組員

工藤シン
エドガー・ラサール

データ

※データはファイター形態時のもの

全長 ▶ 18.69m
重量 ▶ 16,805kg
エンジン ▶ EGF-127ターボファンジェット改×2(主機)、新中州ARR-2×3ロケットモーター(副機)
最大速度 ▶ M2.62(高度11,000m)
航続距離 ▶ 2,400km(背部コンフォーマルタンク標準装備時)
上昇限界 ▶ 26,500m
武装 ▶ 固定武装:マウラー社製レーザー機銃×1、標準武装:35mmガトリングガンポッド(ハワードGPU-9)、中距離空対空ミサイルAMRAAM2(レイセオン－ビフォーズAIM-200AI/ALH誘導)(最大搭載数12発)、8連汎用マイクロミサイルランチャー(GH-28A) 他

開発系譜図

VF-0A ▶ VF-0D

サイズ比較

VF-1J
VF-0D

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-0D フェニックス

運用記録

VF-0はA型、S型が完成した後も、さらなる性能が追求されD型の開発が進められた。その後、A(S)型との最終コンペティションが行われたが、VF-0の実戦テスト部隊編成に伴い、実績による最終判定が必要と見なされ、D型もほぼ同数が生産されたと言われる。実戦テスト部隊に装備されたD型は機種転換用訓練機とされ、CVN-99 アスカIIを母艦として運用された。2008年の鳥の人事件では、一部の機体が反統合同盟のSV-51と交戦している。

空母アスカで待機中のD型。これらを用いて新人パイロットの機種転換訓練が行われた。

シンとエドガーのD型は、統合軍によるマヤン島の調査チームに護衛として同行した。

シン機はエイフォスの欠片を巡ってノーラのSV-51γと交戦するも、撃墜されている。

標準装備

D型の標準武装は他のVF-0と同じく、頭部のレーザー機銃と35mmガトリングガンポッドを基本とする。ただし、D型はA型、S型よりも最大ペイロードが20%ほど増加し、武装搭載能力に優れている。そのため、GH-28A 8連汎用マイクロミサイルランチャーを装備するケースもあった。

頭部のレーザー機銃はA型と同じく1基で、オクトスとの水中戦でも用いられた。

A型、S型と同じ主武装のGPU-9ガンポッドは、反動が大きいため失速や墜落の恐れがあった。

翼下に装備したミサイルを発射するシン機。標準的な空対空ミサイルを装備していた。

コクピット

D型は攻撃能力と電子戦性能が強化されているため、単座では十分な性能を発揮しきれないという統合軍の主張によって複座となった。ただし、開発チームは量産後に統合操縦・攻撃・航法支援AIを搭載することで、単座でも十分に運用が可能となると想定していた。

バトロイド時は後席が上となる。また、両方のシートに上面モニターが配されている。

D型の複座コクピット。前席がパイロット、後席がレーダー士官用で、前席のコンソールは単座型のものと同じである。

▲左2点がコントロールレバーで、右2点がスロットルレバー。スロットルレバーは可変コマンドの入力装置を兼ねる。

ファイターモード

D型のコンセプトのひとつが、ファイター形態時の低速域での高機動性である。そのために本機は面積の大きいクリップドデルタ翼を採用することで翼面荷重を抑え、亜音速領域での運動性の大幅な向上を実現している。また、最高速度こそA型、S型にやや劣るものの上昇力や航続距離では上回り、機内容積の余裕からフューエルフラクションが25%近くあることから(A型、S型は20%を切る)、航続距離にも優れる。

カナードとデルタ翼の特性を活かしたファイターの高い運動性がD型の特徴である。

空中給油を受けるD型の編隊。航続距離が向上したとはいえ、空中給油は必須であった。

エイフォスの欠片の奪取を図ったオクトスを阻止するため、ファイターで海に突入した。

▼主翼は前縁に切り欠き(ドッグツース)を持つクリップドデルタ翼で翼面積は広く、主翼構造関連の重量はA型よりも大きい。

▼エアインテーク上部に全動式カナード前翼を、下にミニカナードを備える。

▼主翼には速度に応じて可変する外翼を備え、接合部下に武装パイロンを有する。

▶尾翼はA型のようにバトロイド時のバックパック部ではなく、エンジンナセルの外縁部に取り付けられている。

ガウォークモード

D型は主翼構造こそA型と異なるが、機首や機体上面、エンジンナセルブロックはA型と共通で、ガウォーク形態もほぼ同じ構造となる。ただし、本機は訓練機として運用されていた側面もあり、実際にガウォーク本来の性能を発揮できていたかは疑問が持たれる。その中でもシン機は実戦でガウォークを多用し、同形態の柔軟な機動性を有効に活用していた。

機種転換直後はガウォークの機動制御に手を焼くパイロットが多く、シン機も演習で苦戦した。

シン機はエイフォスの欠片を確保して退避する途中でノーラ機に捕捉され、そのまま戦闘に及んだ。

▶ガウォークの上部外観。ガンポッドは右腕で保持する場合が多い。また、同形態では外翼が内側に倒れる。

▶VF-0の他のタイプと同様、エアインテークが半分閉じられてスリット状になる。

▼主翼前縁スラットとフラップ、エルロンが降りた状態。脚部はノズルが一段引き出されて開く。

▶腕部を省略した状態のガウォーク側面。ガウォーク時には基本的に前傾姿勢が取られる。

▶ガウォーク時には主翼をファイターの巡航時より約10度後退させた状態となる。

バトロイドモード

ファイター形態では高い運動性を生み出すD型のデルタ翼は、バトロイド形態においてはデメリットとなっている。翼面積が大きく収容時にかさばるため、A型、S型に比べるとバトロイドの運動性能の低下を招いたのである。それでも、エネルギー転換装甲を使用できるバトロイドは、格闘戦で威力を発揮すると考えられた。ただし、D型を運用したパイロットの練度不足から、実戦でバトロイドが有効に活用されたケースは多くなかった。

模擬戦でフォッカー機に組み伏せられるシンのD型。バトロイドは操縦が困難で、練度の差が如実に見られた。

▶頭部形状はA型とも異なる。また、コクピットカバーは単座型よりも下まで引き出される。

◀収容した主翼は機外に大きく張り出している。外翼は折り畳まれ主翼上面に密着する。

シン機はキャパシターの電力のみで稼動する「サイレント・モード」で水中戦を行った。

EXTRA REPORT 関連事項

A型、S型との関係

D型はA型の競合機種として開発され、実戦投入の時点で複座機が18機、単座機が6機生産された。また、単座機は既存機の老朽化に苦慮する海兵隊の要望により、VF-0C(C型)としてテストが行われたとも言われている。

VF-0S

S型は、A型の中でも品質の高い機体を改修したもので、生産数は4機とされる。D型との性能対比や関係はA型とほぼ同様である。

A型よりもわずかに高性能なだけだが、優秀なパイロットとの組み合わせで真価を発揮した。

VF-0A

一般的にVF-0して知られる機体で、計30機が生産されたという。上記のC型とは逆に、複座タイプのB型が試作されたと言われている。

実戦ではSV-51に苦戦を強いられたが、最終的にはA型のスタイルがVFの主流となった。

潜水空母アウエルシュテット

SV-51の運用を支えた 神出鬼没の潜水母艦

AUERSTEDT

艦体解説

2008年、統合軍と反統合同盟の一部残存勢力の間で勃発したマヤン島での"鳥の人"争奪戦は、統合戦争終結間近に行われた戦闘の中でも大規模なものであった。また、史上初めて可変戦闘機(以下、VF)同士の交戦が記録されたため、その歴史的/軍事的な意義も非常に高かったと言えるだろう。

アウエルシュテットは、この"鳥の人"争奪戦で反統合同盟が運用した潜水母艦である。旧ロシア軍が製造した超大型ミサイル原潜をベースに、反統合同盟が実用化したVF、SV-51の運用を想定した改造が各所に施されている。また、高度なレーダー網や魚雷などの武装も備え、物量では統合軍に劣る反統合同盟の前線拠点として活躍を見せた。

データ

所属 ▶ 反統合同盟	空虚重量 ▶ 調査中
全長 ▶ 約171m	エンジン ▶ 調査中
全高 ▶ 調査中	最大速度 ▶ 調査中
全幅 ▶ 調査中	標準武装 ▶ 魚雷発射管

開発系譜図

サイズ比較

水中を高速で移動できる潜水母艦の利点を活かし、速やかにマヤン島に接近した。主にSV-51の運用を想定していたが、デストロイドの運用も可能であった。

マヤン文明に精通したハスフォード教授やSV-51のパイロット、ノーラやイワノフらの「家」となった艦は、"鳥の人"の頭部パーツを奪取することにも成功した。

Mechanic Sheet

メカニックシート

潜水空母アウエルシュテット

運用記録

"鳥の人"争奪戦における反統合同盟の拠点となっていたアウエルシュテットは、反統合同盟の主戦力であったSV-51の運用を行った。艦は統合軍による捕捉を回避しつつ、マヤン島に接近。島周辺の海域に沈んでいた"鳥の人"の頭部パーツと、マヤン文明の「風の導き手」、サラ・ノームの身柄を奪取することに成功している。だが、サラが"鳥の人"を目覚めさせたことで頭部パーツが異常な反応を見せ、その影響で艦体が空中に浮かび上がる現象が起きた。

鳥の人の頭部パーツはアウエルシュテットの外壁を破り、同様に統合軍空母アスカから離脱した胴体部と合体した。

鳥の人の影響で空に浮いたアウエルシュテット。操作系統は正常に作動していたようで、SV-51の射出も行えた。

艦体構造

▼アウエルシュテットの後方図。艦首底部にデストロイド発進口が、艦尾上方には、カウンターメイジャー(艦体防御用兵器)を射出できる装置が備えられていた。

▲側面
フラットで丸みを帯びたフォルムが特徴的。艦首と艦中央下に設置された翼部は、電磁推進スラスターとなっている。

▲上面
艦の中央部に、SV-51を垂直に射出できるハッチが計12基設置されている。アウエルシュテットの最も大きな改修箇所と見られる。

▲▶スクリュー
艦尾に設置されたスクリュー部分。大きさの異なる複数のパーツが折り重なるように備えられた構造により、水中での高い推進力を獲得していた。

ブリッジ/武装

艦首にレイアウトされたブリッジには、敵拠点を捕捉するためのレーダーやシュノーケル型のスコープ、アンテナなどが複数設置されており、アウエルシュテットの頭脳となっている。ここで艦の航行や魚雷発射管などの射撃管制、そしてSV-51の射出なども管理していたと見られる。魚雷発射管は艦首下部にあり、魚雷本体の自動追尾機能を活かすことで、正確に標的を撃沈できた。

マオ・ノームが乗っていた木製の小船に向けて魚雷を発射。その高度な自動追尾機能で、船をたやすく撃破している。

◀ブリッジ
ブリッジの拡大図。先端が後方に延びるアンテナ、レーダー、先端にカメラが搭載されたスコープなど、情報機器が集約されているのがわかる。

▲▶魚雷
先端に設置されたカメラと超音波装置を駆使し、目標を自動で追尾する機能が備えられている。また末端部分にはスクリューを設置し、推進力を得ていた。

◀魚雷発射管
艦首に計6基設置された魚雷発射管。遠距離から敵を雷撃する際や、迫り来る魚雷や敵艦を迎撃するために使用された。

格納庫

アウエルシュテットの胴体部の大半は、SV-51の格納スペースとなっている。SV-51は、機首が上方を向く形で固定されており、迅速に射出が行えるシステムとなっていた。射出の際は、耐圧処理の施されたカプセルで機体を覆い飛び出す方式を採用しており、海中からの出撃も可能だった。これ以外にもデストロイド用の格納庫が機首に存在していたようだが、詳細は不明である。

SV-51の出撃時。艦に帰還させる場合には、アウエルシュテット自体が海上に浮上して回収する必要があった。

▶SV-51
オーバーテクノロジーを駆使して生産されたターボファンジェット搭載の可変戦闘機(画像はノーラ機)。ミサイルのほか、燃料気化爆弾を搭載、射出することが可能となっている。

SV-51出撃シークエンス

まず、機首を上方に向けて格納されているSV-51の機体を、ハッチごとに設置された射出カプセルが下部からスライドして覆う。その後、SV-51のエンジンを点火、出撃体制に入ると艦のハッチを展開、機体のエンジンを最大出力にして一気に加速し、垂直に艦から出撃する。なお、SV-51には、アウエルシュテットから水中発進ができる改修機が少数存在するようだ。

QF-2200D-A
QF-2200D-B

QF-2200D-B ゴーストもアスカに搭載された無人機。偵察行動を主な利用目的としていた。

地球統合軍の空母アスカに搭載されていたQF-2200D-A ゴーストは、反統合同盟との"鳥の人"争奪戦に投入された。

◀QF-2200D-A ゴースト

▲QF-2200D-B ゴースト

地球統合軍が用いた 無人戦闘・偵察機

機体解説

ASS-1の落下によって勃発した地球統合軍と反統合同盟の戦闘は、長期化の一途を辿っていた。戦闘の長期化によって優秀なパイロットを数多く失っていた統合軍は、その対策として、無人機の開発に乗り出した。そして完成したのが、自立型AIによる自動操縦と、母艦や有人機からの遠隔操作の双方に対応する無人戦闘・偵察機「ゴースト」である。反統合同盟との"鳥の人"争奪戦では、QF-2200D-A、QF-2200D-Bという2種のゴーストが空母アスカに搭載され、貴重な戦力として用いられた。

QF-2200D-Bは、統合軍初の可変戦闘機（以下、VF）のVF-0フェニックスの追加ブースターに転用された。

パイロットの肉体的限界を考える必要が皆無となったため、ゴーストは圧倒的な機動性能を確保することが可能となった。

Mechanic Sheet

メカニックシート

QF-2200D-A ゴースト／QF-2200D-B ゴースト

運用記録

QF-2200D-A、QF-2200D-Bの両ゴーストは、マヤン島での"鳥の人"争奪戦に投入された。QF-2200D-Aはアスカの防衛に用いられ、よりステルス性の高いQF-2200D-Bは、主に偵察行動を行ったとされる。またQF-2200D-Bは、VF-0フェニックスの出力強化仕様「特攻突撃仕様」の追加ブースターとしても利用された。

無人機ながら反統合同盟の有人機、MiG-29と激しいドッグファイトを展開している。

VF-0へのQF-2200D-B搭載は、アスカ乗員がSV-51対策として independent敢行したものである。

QF-2200D-A ゴースト

統合軍が開発した自立AI搭載型無人戦闘機で、最も初期に実用化されたタイプとされている。リフティング・ボディと機体後方の前進翼、機首上部に備えた垂直カナードなどによって高い機動性能を確保していた。

▲▼有人機であればコクピットとなる部分に、垂直カナードとセンサーⒶを設置。さらに後部ランディング・ギア付近に補助インテークⒷを備える。

▲QF-2200Dの底部はゆるやかに丸みを帯びたフォルムとなっている。この構造により、空気抵抗の低減に繋がっている。

QF-2200D-B ゴースト

2002年に量産が開始されたステルス無人偵察攻撃機。強力なターボファンジェットを搭載しており、最大で25Gを超える圧倒的な機動性を発揮する。武装として機首部にマイクロミサイルランチャーを備える。偵察に特化した長距離偵察型も生産された。

VF-0とドッキングしたQF-2200D-Bは、機首にセンサーを備えていない。

◀マーキング
QF-2200D-Bに施されたマーキングの一部。左はボディと主翼に施されたもので、右はエアインテーク用である。

▲▶QF-2200D-B後部の可変ノズル（写真上）と、VF-0本体の可変ノズルを駆使することで、トリッキーな機動が可能となる。

▲VF-0A特攻突撃仕様
（■部分がQF-2200D-B）

▶上面 QF-2200D-Bは、VF-0の垂直尾翼を主翼付け根に差し込んで固定している。

▼正面
QF-2200D-Bの機首に搭載されたマイクロミサイルランチャーも使用可能。

▼側面
VF-0A特攻突撃仕様では、機体制御系のアビオニクスを取り外しているため、QF-2200D-B単体の運用は不可能である。

◀底面
底部から見た本体。VF-0と接続されるBタイプは、偵察用装備を外している。

4面図
QF-2200DのBタイプが設置されたVF-0特攻突撃仕様の4面図。Aタイプと違ってセンサーを排除しているのは、軽量化の一環と思われる。

EXTRA REPORT

関連事項

QF-3000E ゴースト

西暦2009年に勃発したゼントラーディ軍との戦闘で運用された無人戦闘機。小型熱核反応炉をゴーストとしては初めて搭載し、宇宙での運用も可能となっている。

▲搭載されたAIが安定性を欠いたため、その運用はVFの支援機的な役割に留まっている。

Illustration by Hidetaka Tenjin

HWR-00-MkIP

モンスターの系譜に並ぶ 先行試作型デストロイド

●データ

項目	内容
所属	地球統合軍
全長	22.2m(砲先まで)
全備重量	252.5t
主機	ギャランドWT1001熱核反応炉(出力11500SHP)
補機	新中州重工CT6A熱核反応炉(出力380SHP)×2
最大歩行速度	20km(整地環境)
搭乗員数	3名
武装	ビガース40cm液冷式液体推薬キャノン砲×4/内蔵式レールガン×2

●サイズ比較

HWR-00-Mk I P
VF-1J

●開発系譜図

HWR-00-Mk I P ▶ HWR-00-Mk II

●機体解説

プロトタイプモンスターとも呼ばれるHWR-00-MkIP 先行試作型デストロイド・モンスターは、HWR-00-MkII モンスターの前身にあたる超重量級デストロイドである。人類が実用化した陸上非軌道兵器としては当時最大のもので、長距離砲戦能力に偏重した設計は後発のMkIIに共通している。その一方で、腕(マニピュレーター)を備える点が、MkIIとは大きく異なる本機の特徴となっている。

HWR-00-MkIP モンスター（先行試作型）

運用記録

HWR-00シリーズは、ビガースとセンチネンタルが共同で開発を進めた。試作型であるMkIPは、2007年2月にロールアウトしている。完全に機能するデストロイドとして組み立てられたのは1機のみであり、同機はマヤン島における異星人遺物奪取作戦に参加する部隊に投入された。これには、情報漏洩の危険性が少ない孤島での作戦を利用し、最終的な実戦テストを実施する目的があったと見られる。同じことは、他の開発セクションでも考えられていた模様で、結果的にマヤン島は、VF-0や反統合軍側秘蔵のSV-51も投入される、試作機の一大実験場と化していた。

脚部を有しているが、不整地では歩行もままならないほど運動性が低く、その欠点は後継機でも解消されなかった。

機体後部に設けられたレーザープレートは射撃時に機体を支えるための機構で、系列機にも受け継がれている。

機体構造/武装

MkIPの機体構造で最も特徴的な部分が、先端が折り畳み式の大型マニピュレーターとなった腕部である。これは弾薬運搬や射撃陣地整備などを想定して装備されたものだが、さらなる長射程や精密誘導兵器が要求されたことからMkⅡではミサイルランチャーに換装されている。それ以外の構造に関してはMkⅡとほぼ同じで、HWR-00シリーズの概要は本機の時点で固まっていたことがうかがえる。

▲胴体前部の正面（左）と左側面（右）。キャノン砲の砲身と腕部は省略されている。胴体先端にコクピットが位置する。

自走重砲の兵器特性を有した機体として試作された最初期のデストロイドであり、設計には未成熟な部分も多かったが、シリーズの試金石となった。

Ⓐビガース 40cm液冷式液体推薬キャノン砲

▶射撃前

▶射撃時

◀▲砲身などにOTM素材を導入して強度を高め、射程距離の大幅な延長と連続射撃性能を向上させている。

本機の主兵装で、最大射程は約160kmに及ぶ。監視衛星と連動した射撃管制システム「神の眼」とリンクすることで弾着誤差を平均10m以内に抑えることが可能。

▲給弾口

▶マヤン島での「オペレーション・イコノクラスム」発動時に投入されたHWR-00-MkIP。本体色は、おそらくはロールアウト時からこのままであろうミディアムブルー一色で、迷彩などは施されていない。反応弾を装填され、空母アスカ艦上から"鳥の人"の撃滅を試みている。

Ⓑ腕部折り畳み式大型マニピュレーター

腕部ユニットは先端が5本指の大型マニピュレーターとなっており、更に先端部には片側3基のレールガンも内蔵されている。右側の図は各指の可動部位の構造。マニピュレーターは精密作業用というよりも、砲の発射時に「何かに掴まっておく」ための、アンカー的なものであった。

▲収納時

▲展開時（マニピュレーターの各関節部分）

空母アスカで運用された際には、射撃時に腕部マニピュレーターで甲板を掴み、機体を固定した。

▲脚部ユニットの裏面を示した図。滑り止めのパターンは、後に量産されたMkⅡとは異なるが、ユニットの分割構造事態はほぼ同じと思われる。重量級のモンスターは、少々歩行するだけでも、滑り止めや足裏の装甲版が磨耗するが、空母アスカにはモンスターを浮かせられるクレーンが存在せず、足裏の整備に手間取ったと言われる。

EXTRA REPORT 関連事項

モンスターの開発系譜

HWR-00シリーズはMkⅠとMkIPを経てMkⅡで本格運用がなされたが、運用性の問題などから一時は兵器開発の本流から外れた。だが、VB-6 ケーニッヒモンスターによって復権を果たすこととなる。

■HWR-00-MkⅠ

MkⅠは設計自体はMkIPに先行していたものの、1号機のロールアウトは2008年と、MkIPよりも遅れる。当初は腕部を持たない仕様だったが、火力の増強を要求した軍部の意向を受け、翌月には両腕のミサイルランチャーを装備したMkⅡとして完成する。

■HWR-00-MkIP

ロールアウトのスケジュールから、MkIPがHWR-00シリーズ初の機体と見られる。1機しか生産されなかったことを鑑みても、実働データ収集用の試作機だったと考えられるだろう。

■HWR-00-MkⅡ

MkⅠからの仕様変更を経て、第一次星間大戦時に実戦投入されたタイプ。腕部をミサイルランチャーに換装することで火力と射程のさらなる向上を図っており、SDF-1 マクロスなどの可搬砲台として運用されたが、本流にはなれなかった。

■VB-6 ケーニッヒモンスター

HWR-00シリーズのコンセプトを受け継いだ可変爆撃機（VB）で、2030年代初頭に生産が行われた。シャトル、重ガウォーク、デストロイドの四形態に変形可能で、2059年の時点でも第一線で活躍していた。

Illustration by Hidetaka Tenjin

量産化が図られた試作型デストロイド

機体解説

ADR-03-MkⅢ シャイアンは、タイプ03と呼ばれる試作型デストロイドシリーズの中で唯一量産化された、近接対空型デストロイドである。タイプ04シリーズのMBR-04-MkⅥ トマホークとADR-04-MkⅩ ディフェンダーの中間的な兵器特性を有し、信頼性の高い武装と優れた生産性が特徴に挙げられる。その一方で、主機がタイプ04シリーズに搭載された小型熱核反応炉ではなくガスタービンエンジンである点や、2足歩行システムが脆弱で踏破性能が低いことなどが欠点となっている。それでも、実用に足る性能を発揮し、実戦配備が進められた。

データ

所属▶地球統合軍
全高▶9.87m
全備重量▶25.9t（GAU-12×2装備型）
メインエンジン▶クランス・マッファイ　ガスタービンエンジン AGT1200（出力1200SHP）
サブエンジン▶GE EM9G燃料発電機（出力450kW）
武装▶GAU-12 25mm5砲身ガトリング機関砲（対空用はAPSD弾使用）×2（またはRIM-116 RAM 4連装ミサイルランチャー×2）、7.6mm機銃砲塔
開発メーカー▶センチネンタル・クランスマン共同開発

サイズ比較

VF-1J
ADR-03-MkⅢ
ヒト

開発系譜図

シャイアン ▶ シャイアンⅡ

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶ADR-03-MkⅢ シャイアン

運用記録

ADR-03-MkⅢの開発は、タイプ04シリーズにも参画したセンチネンタル社とクランスマン社が共同で行い、武装の信頼性や生産コストの低さが評価されて量産化に至った。本格的対空デストロイドとして期待されたADR-04-MkXの量産化が難航する中、本機の量産配備は順調に進み、実戦でも十分な活躍を示した。統合戦争末期に勃発したマヤン島での軍事衝突では、CVN-99 アスカIIの艦載機として配備され、反統合同盟との戦闘に投入されている。

反統合軍同盟のSV-51が空母アスカを襲撃した際には、1機のシャイアンが脚部のローラーシステムと背部ロケットモーターを利用してSV-51に近接戦闘を挑むも、敵機の高速機動に振り回され、最終的に大破している。

統合軍機動艦隊を奇襲した反統合同盟の部隊を迎撃したが、SV-51の機動性に翻弄されてしまった。

アスカ搭載機の一部はマヤン島の防衛にもあてられ、上陸を図った反統合同盟のオクトスと交戦した。

機体構造1

ADR-03-MkⅢの機体構造は、タイプ04シリーズよりも未成熟であった。特に2足歩行システムは、ローラーシステムを搭載したものの、耐久性が十分ではなく歩行速度も遅かった。また、宇宙での運用や空挺作戦、ジャンプ移動のためにロケットモーターを装備している。このロケットモーターは、シャイアンの機体を数秒間とはいえ宙に浮かせられるほどの推力を誇っていた。反統合同盟のSV-51との格闘戦では、空母アスカの甲板から落ちたシャイアンが、ロケットモーターを起動させて海面すれすれで空中浮揚している(ただし、空中で体制を整えるだけで精一杯だったようで、SV-51に対し回避行動もとれぬまま撃墜された)。

マヤン島での戦闘においては、ガスタービンエンジンを用いた通常タイプのみならず、バリエーション機も投入された。非常用の燃料発電機を搭載した艦載型もその一種で、アスカIIの防衛に運用されている。

◀逆関節構造の脚部が特徴。背部ロケットモーターは実用性が低く誘爆の危険もあったことから、タイプ04シリーズでは廃された。

▶腕部
腕部ユニットは後部にVF-0 フェニックスと同型の手首パーツを、下部に精密作業用の収納式マニピュレーターを備える。

マニピュレーター
腕部の後方に装備しており、使用時にはユニットを回転させるシステムであった。

収納式マニピュレーター

機体構造2

03シリーズは、後の04シリーズに搭載された小型熱核反応炉が完成する以前に開発された機体であり、出力1200SHP級のガスタービンエンジンを搭載していた。全備重量20～30tクラスの03シリーズにとって、この出力で必要十分と判断されていたが、後にデストロイド用のビーム兵器が開発されると、03シリーズのエンジンではこれらの兵器を稼働させるには出力不足であったことが判明する。また、シャイアンは宇宙での活動や、不整地の踏破、投下作戦時の減速用などを想定したロケットモーターを背部に装備していた。しかし実用性が低いこと、ロケットエンジン部が脆弱であり実戦で被弾した際にロケット燃料に誘爆した事例があったことなどから、04シリーズでは廃止された。

◀頭部
頭部ユニットは通常、胴体に半没した状態であるが、ポップアップして角度を変更することも可能。

▶頭部左にはキューポラハッチが配され、背部に突き出した部分はヒートシンクである。

ロケットモーターでの自在な機動など、一部のパイロットは、シャイアンの多様な機構を使いこなしていた。

武装／装備

シャイアンの武装は既存の実体弾火器で構成される。これらの武装は信頼性は高いが、全装備は数分程度の戦闘で消耗するため、戦闘継続時間が短いのがネックであった。しかしながら、本格的対空デストロイドとして期待されたディフェンダーの量産配備の遅れもあり、統合戦争時の統合軍陣営の対空の要は、シャイアンが担うこととなった。

A GAU-12 25mm 5砲身ガトリング機関砲

主武装は腕部ユニットと一体化したGAU-12 25mm 5砲身ガトリング機関砲2基で、対空戦闘ではAPSD弾を装填する。数分程度の戦闘に耐えられる分の装弾数しか持たず、対空用としてはやや非力と評価された。

腕部ガトリング機関砲を発射するADR-03-MkⅢ。砲台として運用される場合、有線情報システムで母艦とリンクする。

肩部から先をRIM-116 4連装ミサイルランチャーのユニットに換装することも可能で、運用に応じて使い分けられた。

▶特殊機構として、無人の本機を対空システムの自動砲台として遠隔操作することも可能だった。

母艦の対空システムとして運用する場合も、分離するケースではパイロットが必要なため、原則的には有人で用いられた。

B 7.6mm機銃砲塔

股関節部には自衛用補助武装として7.6mm機銃砲塔1基を備える。歩兵が扱う小火器と同程度の口径で、対人用として想定されている。銃口が下方に向けられているのもそのためである。

C ローラーシステム

脆弱な2足歩行システムを補うため、脚部には高速移動用のローラーシステムを装備している。これは、機体開発時に地上機械化部隊と連携した長距離陸上移動も想定されていたためである。

踵のローラーが降りて接地し、つま先のローラーと連動して高速移動を行う。

EXTRA REPORT

関連事項

艦載型シャイアン

シャイアンは、艦船などの砲台として使われる場合、動力部と脆弱な歩行システムを保護するために、下半身を専用設計の装甲シェルターに収める。シェルター内には有線の情報システムや、動力供給用電源ケーブルのコネクターが設置されている。なお砲台として運用されるシャイアンの多くは、主動力のガスタービンエンジンが外され、非常用の燃料発電機のみを搭載した簡略型(艦載型とも)であった。この型は通常時は母艦からケーブル経由で動力を供給され、シェルターから出て活動する際は、内蔵バッテリーにより駆動し、30分程度の活動が可能であった。

艦載型は砲台として運用される際、機体保護のための装甲シェルターに配され、母艦から動力供給を受ける。

CVN-99

VF-0の実戦運用における母艦という重責を担った原子力ステルス空母

ASUKA II

主要クルー

アスカ艦長

艦体解説

CVN-99 アスカ(飛鳥)IIは、統合戦争期に運用された統合軍の原子力ステルス空母である。元は海上自衛隊初の通常動力型正規空母として日本での建造が計画された艦だが、日本の統合政府陣営加入によって所属が統合軍に移り、原子力空母として完成することとなった。その動力にはニミッツ級などに搭載されていたウェスティングハウス社製A4W原子炉を改良したA6W原子炉1基と蒸気タービン4基が採用されており、高効率の多翼型ハイスキュード・プロペラの4軸スクリュー推進を行う。さらに、VF-0 フェニックス開発計画のテスト用母艦に選ばれた本艦には、可変戦闘機(VF)やデストロイドといった新機軸の兵器群を運用するための改装が施されている。

データ

所属▶地球統合軍
全長▶276m
基準排水量▶38,200t
空虚重量▶調査中
乗員数▶調査中
エンジン▶ウェスティングハウス社 A6W原子炉×1 蒸気タービン×4
最大速度▶40kt
標準武装▶調査中

開発系譜図

? ▶ CVN-99

サイズ比較

SDF-1
CVN-99

VF-0の実戦運用という統合軍の未来を占う重要な役割を担い、異星人の遺物「エイフォス」を巡る反統合同盟潜水空母との争奪戦に臨むこととなった。

回収したエイフォスを奪取せんとする反統合同盟のSV-51部隊から奇襲を受けるアスカ。マヤン島における戦いでは、常に戦いの中心にあった。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶CVN-99 アスカⅡ

運用記録

統合戦争末期に米ニューポートニューズ造船所で建造されたアスカは、異星人遺物"エイフォス"奪取作戦へのVF-0の実戦テスト部隊投入を受けて、その母艦として航空機動艦隊を率いてマヤン島近海に出動した。また、遺物調査チームの移動基地としても機能し、同じく遺物の奪取を図って展開していた反統合同盟部隊と交戦している。さらに、エイフォスが活動を再開すると、「オペレーション・イコノクラスム」を発動して反応兵器による遺物の破壊を図ったのだった。

プロトカルチャー遺物の調査部隊の母艦としてマヤン島近海に派遣され、引き上げたエイフォスの一部を回収した。

覚醒したエイフォスの重力制御によって空中に浮く事態に陥りながらも、オペレーション・イコノクラスムを実行に移した。

艦体構造

▲側面

艦体側面はステルス形状を構成している。また、アイランド後方には格納庫のハッチが位置しており、通常は開放したままだが戦闘時には閉じられる。

▲上面

飛行甲板は4基の発進用カタパルトとアングルド・デッキを備える。ステルス性を考慮した平面形状が採られ、角形を組み合わせた甲板となっている。

カタパルト周辺には、試作型デストロイド・モンスターを固定する設備も確認された。

ブリッジ

ブリッジやレーダーシステムを備えるアイランドは、右舷中央に配置されている。原子力艦であるため煙突は持たず、後部にはCIWS(Close In Weapon System=近接防空システム)の役割を果たすデストロイドの回転ブースが併設されている。また、ステルス艦として設計されたアスカは艦全体にステルス構造を採用しており、アイランドも従来の航空母艦のものとは大きく異なる形状を有していた。単純な方形ではなく複雑な多面体で構成されており、本艦の設計思想がうかがえる特徴的な部位となっている。

アスカのブリッジはマヤン島に派遣された統合軍艦隊の中枢を担う部署だったが、エイフォスの覚醒には騒然となった。

◀ブリッジ内部

▼ブリッジ

◀アイランド上部にアンテナなどを配した複合マストを備え、外壁は傾斜がついたステルス構造を有する。また、ブリッジの窓はトラス構造の枠で補強されている。

◀デストロイドブース

アイランド後部ブースには対空型のデストロイド・シャイアンが配備される。通常はブース内から対空迎撃を行うが、必要に応じてブースを展開して離脱する。

格納庫

本艦はF-14A+やアベンジャーⅡ、シー・サージェントといった艦載機を運用するほか、VF-0やゴースト、デストロイドを運用するための設備を有している。格納庫にはVF-0の整備区画が増設され、開発メーカーから出向した技術者たちが[illegible]にあたっていた。回収したエイフォスを保管するスペースも確保されており、調査チームがその分析を行った。また、試作型デストロイド・モンスター1機が射撃テスト用に搭載されており、ブリッジ前方のエレベーターや周辺の甲板は、同機の重量に耐えられるよう強度の向上が図られている。

格納庫では中島技術主任を中心とする整備班がVF-0に携わり、マヤン島における実戦運用と並行して調整が進められた。

試作型デストロイド・モンスターが装填する砲弾として反応弾頭弾が搭載されており、対エイフォスに使用された。

U.N.SPACY

◀VF-0S

◀アスカを運用母艦として実戦投入された統合軍初のVF。ロイ・フォッカー少佐を隊長にスカル小隊が編成され、マヤン島の遺物争奪戦において反統合同盟のSV-51とVF同士の戦闘を繰り広げた(写真はフォッカー機)。

技術の融合が生んだ、マクロスのもうひとつの姿

SDF-1

ボドル基幹艦隊との戦いで航行不能となったSDF-1は強攻型のまま地上に着陸した。その後、着地点のクレーターが湖となり、SDF-1を中心にマクロス・シティが建設された。

戦後、修復されたSDF-1は新統合政府の拠点として運用された。しかし、2040年のシャロン・アップル事件では人工知能に制御を奪われるなど、騒動の種にもなっている。

機体解説

SDF-1 マクロスは、原型となったASS-1がもたらしたオーバーテクノロジー(以下OTM)と人類の技術のハイブリッドであった。そして、SDF-1のもうひとつの姿であるこの強攻型は、両者の技術融合を顕著に表した形態と言える。この形態は、ASS-1から引き継がれたブロック構造を利用して変形(トランスフォーメーション)を行うもので、改修時に付与された地球側の技術によって実現したシステムだった。また、この形態はあくまでも偶発的に生じた問題を解決して主砲を発射するための対応策にすぎなかったが、人型に近い形状を生かした「ダイダロス・アタック」の着想にも繋がった。そして、この変形構造と人型の強攻型はSDF-1の象徴となり、マクロスの名を冠した後継艦にも受け継がれていったのである。

データ

※データは要塞艦時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶約1,200m
運用慣性質量▶1,800万t
動力系▶OTMヒート・パイル・システム・クラスター
重力制御系▶OTMグラヴィティ・コントロールシステム
噴射推進系▶メイン・スラスター/OTMノズル・クラスター/バーチカル・スラスター/OTメイン・ノズル・クラスター/バーニア・スラスター/OTバーニア・クラスター
標準装備▶OTM艦首砲撃システム×1/OT誘導集束ビーム砲システム×8/OT超高速電磁レールキャノン×4/大型自己誘導対艦ミサイルランチャー/その他ロケット兵装、火器多数

サイズ比較

SDF-1(強攻型)
東京タワー

開発系譜図

··· SDF-1 ▶

主要クルー

ブルーノ・J・グローバル
早瀬未沙
クローディア・ラサール

2059年の時点においてもSDF-1は依然として新統合政府の象徴として健在だった。一時はバジュラの襲撃を受けたが、バジュラが撤退したため難を逃れている。

Illustration by Hidetaka Tenjin

SDF-1 マクロス

運用記録

SDF-1の強攻型は2009年3月に初めて運用された。当初、グローバル艦長は艦内への被害が予想されるトランスフォーメーションに否定的だったが、ブリタイ艦隊先行艦の攻撃を受けた際にやむを得ず変形を敢行、発射可能となった主砲で敵艦を撃沈した。その後も主砲が必要とされる局面で運用され、初めてダイダロス・アタックを行った土星宙域での戦闘や、地球直前での包囲網突破戦も本形態で臨んでいる。地球帰還後は強攻型で運用されるケースが多くなり、ボドル基幹艦隊との決戦にも本形態で参戦し、第一次星間大戦終結後はマクロス・シティのシンボルとなった。

初めてのトランスフォーメーションでは、艦内市街地に大きな被害を出しながらも強攻型に変形し、主砲の発射に成功している。

終戦後に発生したカムジン一派の反乱では、クレーター湖から浮上して主砲を発射。しかし、右舷に敵艦の特攻を受けて大破した。

関連事項 EXTRA REPORT

強攻型と対をなす「要塞艦」

強攻型と対をなすSDF-1本来の姿が、要塞艦と呼ばれる巡航形態である。これはASS-1の構造を継承した宇宙戦艦で、元来はこの形態のみで艦の機能は完結していた。強攻型が実用化されてからは、通常航行と防空部隊を中心とした戦闘などで運用された。

強攻型は不測の事態から生まれた形態であり、要塞艦がSDF-1の基本形と言える。しかし、主砲が撃てなくなったため、強攻型も併用された。

▲ASS-1の修復と改装は元の形状をほぼ残したまま行われ、要塞艦として完成した。上の図はダイダロスとプロメテウスのドッキング前。

機体構造

人型に近い外観を有する強攻型だが、結果的にこのような形態を取ったに過ぎず、人型兵器のような動作は考慮されていない。ただし、腕部に相当する両舷のドッキングモジュールはある程度の可動構造を有しており、ダイダロス・アタックを生み出す元にもなった(脚部推進ブロックの連結部もわずかに可動する)。また、本形態では主推進機関が進行方向に対して下方に向くと同時に重力制御も不安定となるため、航行能力が極端に低下する。この艦体構造は主砲を機能させるためだけに艦体ブロックを強引に組み替えたものであり、それによるデメリットも決して少なくはなかったのである。

強攻型の際には要塞艦の底部が前面となり、直立した状態で航行する。胸部に位置するサブ・リアクション・エンジンは逆制動に用いられた。

艦首主砲ブロックは前方に90度可動する。主砲はその状態での使用を想定していたようだが、垂直方向に固定したままでも発射は可能。

◀艦橋ブロックが頭部、ダイダロスとプロメテウスがそれぞれ右腕と左腕に相当する構造となる。

▼各ブロックの位置が大きく組み替えられているのがわかる。また、推進には背部の補助機関が用いられる。

変形シークエンス

強攻型へのトランスフォーメーションは、事故によってフォールドシステムとともに消失した主砲のエネルギーパイプを補うために考案された。トランスフォーメーションはメイン反応炉と主砲のエネルギーコンバータを連結させることを目的としており、両ブロックを隣接させるために艦全体を大規模に変形させる必要が生じたのである。

艦の中央を支点にして各ブロックが回転し変形が行われる。トランスフォーメーションをはじめて行った際には艦内市街地に甚大な被害が出た。

1

2

① 主砲砲身が軸方向に90°外側に回転して開く。

3

② 主砲・胸・脚を構成する両舷モジュールが、胸モジュールを中心として艦首側が起き上がる形で90°回転する。
③ 中央船体前半部が、艦尾側が起き上がる形で90°回転する。
④ ブリッジを含む中央船体後半部は、水平を保つ形で回転し、下部が起き上がった前半部後面と結合する。
⑤ プロメテウスとダイダロスは水平に旋回、前方に移動する。

4

⑥ 脚モジュールが下方に移動する。
⑦ 主砲が後下方にクランク移動する。
⑧ ブリッジとレーダーモジュールが中央に移動、結合する。
⑨ 肩モジュールが艦尾側が起き上がる形で90°回転する。
⑩ 肩の長砲身砲が旋回し上方を向く。
⑪ プロメテウスとダイダロスは艦首側が90°起き上がり水平位置となる。

Illustration by Akio Unuma

兵装

強攻型は、変形によって発射可能となる主砲のOTM艦首砲撃システムをはじめ、膨大な量の武装を搭載している。ただし、要塞艦とは武装の配置が異なり、全方位に火力を展開しやすい構造となっている(逆に一方向への火力の集中には適さない)。さらに、艦載機用弾頭を含めた多数の反応兵器を搭載しており、これはボドル基幹艦隊との決戦で使用された。また、ダイダロス・アタックや、全方位バリアを併用した突攻戦術のマクロス・アタックも、本形態特有の攻撃方法と言える。

艦体各部にはミサイルランチャーが内蔵されており、マクロス・アタックでは反応弾頭を装填してボドル基幹艦隊旗艦、フルブス・バレンス級内部で一斉発射を行った。

フォールドシステム消失後に発生したエネルギーを元にピンポイント・バリアを開発、後に全方位バリアへと発展した。

▲OT超高速電磁レールキャノン
肩にあたるドッキングモジュール基部には、大型の電磁レールキャノン2門(両舷で計4門)を備える。進宙式の時点では艤装が完全に完了しておらず使用できない状態だったが、後に発射可能となった。

▶砲撃姿勢
上は強攻型のOTM艦首砲撃システムの発射態勢で、展開した砲身の間にエネルギーを蓄積して発射する。

▶10連装ランチャー
艦体格納式の10連装ミサイルランチャーは、上下の角度変更と左右旋回が可能。再装填は艦内に収納して行う。

艦載機

SDF-1はVF-1バルキリーとデストロイドを艦載機として運用し、それらは両舷に接続したプロメテウスとダイダロスを母艦としていた。さらに無人戦闘機ゴーストも補助戦力として組み込まれていた。なお、強攻型の戦闘においては、デストロイド部隊がダイダロス・アタックの重要な役割を担った。

敵艦に突き刺したダイダロスの艦首からデストロイドが一斉射撃を行うダイダロス・アタックは、対艦迎撃の切り札として絶大な威力を誇った。

デストロイドの母艦となった右舷の強襲揚陸艦。ダイダロス・アタックでも活躍した。

▲ダイダロス

左舷ドッキングモジュールに接続された大型空母で、VF-1の運用母艦として運用された。

▲プロメテウス

▼VF-1 バルキリー
マクロスに多数配備された、可変戦闘機。量産機のA型や、指揮官仕様のS型などが存在する。

▶デストロイド
計5タイプのデストロイドが配備され、艦の防衛などにあたった。右は砲撃戦用のトマホーク。

艦橋

艦橋は前面が大窓となった大型構造物で、上部にはアンテナタワーを備える。強攻型へのトランスフォーメーションの際には、艦の中央に移動し、左舷側の深宇宙レーダーブロックとドッキングする構造となっている。内部には艦長をはじめとするメインスタッフが管制を行うブリッジが置かれたほか、ボドル基幹艦隊との戦いではリン・ミンメイが歌うステージも設けられるなど、艦の中枢としての機能を有していた。

強攻型の"頭部"にあたる艦橋ブロックは、管制機能が集中するSDF-1の頭脳と言える。正面から見て右側に深宇宙レーダーが設置される。

深宇宙レーダー

ブリッジは超大型艦の中枢とは思えないほど狭く、常駐するスタッフも少なかった。主砲の発射やVFなどの艦載機部隊との管制等もここで行った。

SDF-1

Illustration by Hidetaka Tenjin

●主要クルー

ブルーノ・J・グローバル

早瀬未沙

クローディア・ラサール

進宙式の当日、成層圏のゼントラーディ艦に向けて放たれたSDF-1の主砲は、やがて来る第一次星間大戦の火蓋を切ることとなった。

艦体解説

SDF-1マクロスは、西暦1999年に地球に落下した異星人(監察軍)の戦艦を人類の手で改修した艦である。本来は砲撃艦であったと推察されており、その艦体を流用したSDF-1は、全長約1,200mの艦体の前半部が丸々主砲ユニットとして機能する。また改修にあたっては艦の両弦に2隻のアームド級宇宙空母を接続し、砲艦と空母の双方の機能を持つ大型艦艇として運用することが計画された。実際には、進宙時の混乱によりアームド級に代わり揚陸艦ダイダロスと空母プロメテウスを接続することとなったが、「砲艦と空母の機能を持った大型艦」というコンセプト自体は、その後のマクロス級や新マクロス級の艦艇に引き継がれた。

人類を宇宙へ目覚めさせた“超時空要塞”1番艦

Mechanic Sheet

メカニックシート

SDF-1 マクロス

強攻型 機体構造2

強攻型において、艦橋は頭部、両舷に接続したダイダロスとプロメテウスは腕部、エンジンは脚部のように見える。ただし、強攻型は開発時より想定されていたものではなく、運用中に急遽生み出された形態で、いわゆる"人型"に見えるのは偶然でしかない。

▶右舷にダイダロス、左舷にプロメテウスが配置される。「ダイダロス·アタック」は、強攻型ならではの運用法だ。

▲背面に背負っている主砲は、前方へ展開しての発射も可能。主砲の可動は、いわゆる肩部が支点となる。

▲発射不能となった主砲を使用可能とするべく、強攻型としての運用が考え出された。強攻型となることで、主砲にエネルギーが伝達できるようになる(図は背面)。

トランスフォーメーション概念図

マクロス内のディスプレイに表示された概念図。フォールド·システムとエネルギーパイプを失ったことで、マクロス·キャノンの発射には変形によって主砲と反応炉を直結しなければならなくなった。変形時には、機首の主砲、およびエンジン部である船体後部が、船体中央を支点に回転。胴体中央も、艦橋部を水平に保ちつつ、艦尾側が起き上がるように可動し、強攻型に姿を変える。

要塞艦

SDF-1マクロスには、当初は左舷·右舷共に可変戦闘機(VF)等の運用のための宇宙空母アームドを接続する予定だった。だが、突然の異星人襲来により予定の変更を余儀なくされたマクロスは、フォールド時に巻き込んだダイダロス、プロメテウスを代用艦として接続した。

▼ダイダロス、プロメテウス未接続時の要塞艦形態。艦体の左舷·右舷共にアームド用の接続モジュールを有する。しかし、運用時、アームドが接続されることはなかった。

進宙式典のSDF-1マクロス。進宙後、左右両舷にアームド艦をドッキングする予定であった。しかし、第一次星間大戦勃発で計画は変更を余儀なくされる。

アームドはSDF-1マクロス用の宇宙空母となる予定であったほか、開発当初は宇宙戦闘機用の軌道ステーションとして運用される計画もあった。

▼要塞艦形態の底部。底部の船体中央部はトランスフォーメーション時、「胸部」となる。

▲後部から見た要塞艦形態。船体後部はトランスフォーメーションにより「脚部」となる。ちなみにこの「脚部」は、エンジン部であり、居住ブロックでもある。

▲要塞艦形態の後方部はエンジンブロックとなっている。全長約1,200m、質量1,800万tの巨大艦を支える推進力が備わる。

緊急発着口

緊急発着口

▲発着口内部より

ダイダロス、プロメテウスがドッキングした接続部は、緊急発着口となっている。そのため、VF用母艦未接続時でも、VFを運用することが可能であった。

要塞艦(プロメテウス·ダイダロス ドッキング時)

SDF-1マクロスはアームド艦の代用として、左舷にプロメテウス、右舷にダイダロスをドッキングして運用された。両艦は、VFはもちろん、デストロイドの運用をも補佐。さらに、「ダイダロス·アタック」なる攻撃も生み出すこととなった。

マクロス進宙式典時、南アタリア島に寄航していたプロメテウス。のちにダイダロスと共にSDF-1マクロスとドッキングすることとなる。

トランスフォーメーション時、ダイダロスとプロメテウスはドッキングアームと共に展開し、強攻型では左右の「腕部」となる。

▶ダイダロスとプロメテウスを接続したSDF-1マクロス。想定外の両艦とも接続可能なほど、ドッキングアームの汎用性は高かったようだ。

要塞艦三面図

艦体の左舷にプロメテウス、右舷にダイダロスを接続。左舷のプロメテウスは大型空母のため、強襲揚陸艦ダイダロスより幅広だが、ドッキングとその運用に問題はなかった。

▼底面

▼側面

▲上面

甲板

SDF-1マクロスの甲板にはデストロイドを配置可能。トマホークやディフェンダーを砲台として使用した。また、甲板の下には重力制御装置を搭載していたものの、これは地球発進時、重力制御装置だけが甲板を突き破り、空の彼方へと消えてしまっている。OTMの産物たるSDF-1マクロスだけに、その運用は一筋縄ではいかなかったのだ。

▼甲板

▼艦橋と前部甲板

甲板の後方に配置されたSDF-1マクロスの艦橋。艦橋の近くにモンスターも配置可能。トマホークやディフェンダー同様に砲台として運用できた。

甲板上の開閉ハッチより出撃するディフェンダー。デストロイドは右舷のダイダロスだけでなく、SDF-1マクロス艦内にも搭載されていた。

甲板にはミサイルランチャーも搭載。トマホークやディフェンダーなどのデストロイドと共に対空砲として敵機を迎撃した。

SDF-1マクロスの甲板には、ミサイルランチャーを装備しているほか、デストロイド用の開閉式ハッチを搭載。ハッチより顔を出したデストロイドは、砲台として敵を迎撃する。

▶重力制御装置

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶SDF-1 マクロス

ブリッジ／大展望室／大窓

SDF-1 マクロスのコントロールを担うブリッジは、要塞艦ではレーダーブロックと分離した状態でレイアウトされている。だが、統合軍によって急遽生み出された強攻型では、トランスフォーメーション時における干渉を避けるため、ブリッジとレーダーブロックが結合するシステムが採られていた。このほか、改修前に展望室として使われていたとされるスペースは大展望室に変えられるなど、地球人による運用に即した改修が各所に見られる。

レーダーやアンテナ類などの索敵装置、大型自己誘導対艦ミサイルランチャーなどの火器類、ブリッジや展望室などが外装部分に設けられている。

▼ブリッジ上部アンテナタワー

ブリッジの上部には、索敵や戦況の把握に用いられる大量のレーダー、アンテナ類が設置されており、本艦の航行管理に重要な役割を果たしている。強攻型では、要塞艦で左舷側の深宇宙レーダーと右舷側のブリッジがスライドし中央でドッキング、情報収集機能が集中する構造であった。

▼特設ステージ

大きな窓を備えたブリッジ部。下部の広いスペースは「ミンメイ・アタック」決行時に、リン・ミンメイ用の特設ライブ・ステージとして使用された。

▼外壁UP／大展望室周辺／大展望室

▼外装部に設置された大展望室。両サイドと前面がガラスに覆われ、周囲が見渡しやすい構造である。

展望室として、ブリッジクルーが休息を取る際などに使われた。

▼エアロック／大窓

大窓の横にエアロックが設置されており、このハッチから艦内に入ることが可能。非常時に使われたと見られる。

▼大展望室内部

大型ディスプレイやレーダーを備えた大展望室の内部。本来は監察軍の兵士（緑）の展望室だったようで、部屋への入り口も巨大となっている。地球人（青）は内部に階段などを設置、テーブルや椅子などを新たに持ち込み、使用している。

Mechanic Sheet
メカニックシート
SDF-1 マクロス

ブリッジ内部

SDF-1への改修の際に設けられたと見られるメインブリッジは、全長1,200mを誇る艦の中枢部でありながら極めて手狭で、内部で活動するブリッジクルーも基本的には6人に絞られている。だが、艦長が座るキャプテンシートのほか、航行管理や索敵、火器管制など、役割に応じたコンソールが機能的に設置され、少人数でも状況に合わせた艦の航行が可能となっていた。この効率的なブリッジ構造により、単艦でのゼントラーディ軍との戦闘にも対応できた。

可変戦闘機(以下、VF)の出撃管制や、艦のトランスフォーメーションの起動、主砲の発射も管理する。精密機器を守るためか、ブリッジ内は禁煙であった。

艦の航行のみならず、マクロス居住区に住む民間人への連絡や避難指示もブリッジを介して行われるなど、あらゆる面でマクロスの中核となっている。

メインブリッジ内部配置

艦長のグローバル以外、ブリッジクルーは女性で占められている。彼女たちの結束は強く、チームワークに優れていた。

ブリッジはそれほど広くないため、各クルーは肉声で艦長に情報を伝えることが可能であった。

▼ブリッジ前方より

▼ブリッジ後方より

Ⓐ キャプテンシート

ブルーノ・J・グローバル

艦長のグローバルが利用したキャプテンシート。艦の指揮を担う場所だけに、各所との連絡が速やかに行えるよう、各種通信機器が装備されていた。

Ⓑ 火器管制メイン・コンソール

クローディア・ラサール

艦の航行と火器管制を担当する主任オペレーター、クローディアが利用したコンソール。管制用に比べ、ディスプレイや連絡機器などが少ない。

Ⓒ 管制メイン・コンソール

早瀬未沙

主任航空管制官・早瀬未沙が利用した管制用コンソール。VFの出撃管制やVFパイロットへの指示、ダイダロス・アタックの起動指示なども行っている。

◀共通CRT／マイク

火器管制用、管制メインコンソールの上方には、共通のCRTディスプレイが設置された。また、通信用のマイクも共通である。

Ⓓ ブリッジシート

通信・レーダーオペレーターであるヴァネッサが利用したブリッジシート。正面に3Dプロジェクターコントローラーが設置されており、迅速な情報管理をサポートする。

ヴァネッサ・レイアード

Ⓔ Ⓕ ブリッジシート

艦内管制を行うシャミー、キムが使用したブリッジシート。キーボードなど付属品はなく、シンプルなシートとなっている。

シャミー・ミリオム

キム・キャビロフ

艦内軍事施設

SDF-1マクロスでは、司令部区画に属する各種施設と同様に、兵員や装備に関する様々な施設が艦内に整備されていた。前者がSDF-1の頭脳だとすれば、後者の施設は心肺機能に当たると言える。全長1,200mの巨体を持ち、その上に数万人が暮らす街すら持つSDF-1を問題なく機能させるにあたり、これらの施設とインフラが適切に整備されることは必須であった。

マクロスの航海においては、前線で戦うパイロットの慢性的な不足が悩みの種であったと言われるが、実際のところは後方で軍務を取り仕切る兵站部もまた、多様な艦内施設を潤滑に回せる人材が不足していたという。冥王星宙域にデフォールドして以降、兵員・物資の十分な補充もなしにゼントラーディ軍との相次ぐ戦闘に見舞われたSDF-1において、兵站の諸問題が深刻化せずに地球への帰還を成し遂げたことは、(途中、火星サラ基地で物資を得られる僥倖があったものの)奇跡と言ってもいいだろう。

膨大な内部スペースを有し、兵員や装備を管理する施設が充実していたSDF-1は、通常の艦艇とは比較にならない継戦能力を持っていた。

SDF-1の軍部の人材不足に対応するため、艦内には新兵の訓練施設も築かれた。人材不足を補うため、新兵で資質のある人間には、ごく短期間で尉官を与え、小隊を率いさせたという。

小型搬入用倉庫

艦外に面した物資搬入用倉庫のひとつ。進宙式の際に放置されていた一条輝のファン・レーサーを、ロイ・フォッカーが運び込んだ。図の奥に見えるハッチは艦外に通じており、南アタリア島に帰還しようとした一条輝とリン・ミンメイは、このハッチを開いてファン・レーサーを発進させた。

緊急用格納庫

プロメテウスをドッキングする前のごく短期間、艦載機を運用するため用いられていた区画。図左側の天井部に管制室が設けられており、床面に描かれた矢印は誘導路を示している。

スペースシャトル格納庫

連絡用スペースシャトルの発着場を兼ねる格納庫。シャトルへの乗降にはタラップ車を用いる。

フォールド・システム

SDF-1のフォールド・システム。進宙式の時点ではテストも済んでおらず、南アタリア島上空からのフォールドを強行した際にシステムは消滅。跡には時空連続帯のひずみによるエネルギーが発生した。

艦内基地ゲート付近

士官用宿舎などが設営された基地施設のゲート付近。基地は金網で一般区画と仕切られており、敷地内では訓練も行われる。

控室

出撃前のパイロットが着替えなどに用いる控室。ボドル基幹艦隊戦直前に輝が使った。

Mechanic Sheet
メカニックシート
SDF-1 マクロス

乗組員用宿舎

広大な艦内スペースを有するSDF-1では、士官、大隊長クラスの人間に個室が与えられたのはもちろん、実戦部隊に配属されたパイロットにも個室が与えられるなど(訓練段階では雑居部屋)、乗組員は恵まれた住環境を享受していた。これは、艦内のスペースに十分な余裕があったこともあるが、人材不足にあえぎ、過密なシフトが組まれた実戦部隊の各員に、少しでも快適な環境を与えようという心遣いもあったとされる。また、艦内の士官食堂は、バーカウンターに加えショーステージも備えられた豪奢な造りとなっており、士官や将官から好評を博していたという。加えてマクロス艦内には、食堂から歓楽街までが揃った街も存在しており、兵士たちの福利厚生は、通常の艦艇とは比べ物にならないほど充実していた。

一条輝が新兵の頃に住んでいた宿舎の外観。数階建ての集合住宅になっている。

クローディア・ラサールの部屋。通常の士官用の個室にはないキッチンが備えられており、あるいは、マクロス艦内の街に部屋を借りていたのではないかと推察される。

グローバルの部屋

艦長であるブルーノ・J・グローバルには、ふたつの部屋が割り当てられていた。上はマクロスの地球帰還後、艦長が統合軍本部へのレポートをまとめていた艦長室。右は通常の執務に用いられていた部屋である。

フォッカーの部屋

フォッカーに与えられていた個室。ガラスのテーブルやソファーなど、内装に凝っている。

未沙の部屋

早瀬未沙に与えられた私室。高級士官用の個室で内部は広く、観葉植物なども置かれていた。

輝の部屋

実戦部隊配属直後の輝に割り当てられた個室。高級士官用の個室に比べて内部は狭く、内装も簡素である。

第82士官食堂

A エントランス(左:内側/右:外側)

B レストラン内部

第82士官食堂のレストラン「クレーターズ・ベイ」の内観。アメリカンホテルのレストランを模した内装で明るい雰囲気だが、中央には緊急時に備えた情報ポールが設けられている。

▲士官用食器

C レジ及びクローク

手荷物預かり所を兼ねたレジは、レストランとクラブの両方に置かれている。カウンターには呼び出しマイクがある。

D 調理場

レストランに隣接する調理場。レストランはフルサービスで、中央が接客を行うウエイターの出入口となっている。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶SDF-1 マクロス

艦内施設

墜落戦艦ASS-1からSDF-1マクロスへの改修にあたっては、元々巨人サイズだった内装を、地球人が運用する宇宙艦とするために、徹底した改装が行われた。また、異星人の技術を流用することを考慮してか、艦内には本格的な技術開発ブロックが置かれ、専門の技術スタッフが常駐していた。SDF-1がフォールド・システムの事故により、冥王星軌道に出て以降は、OTMのさらなる解析とそれに伴う新システムの開発にあたり、技術部の提案する新装備を運用するための新施設も艦内に追加されていった。

専門のスタッフが任務にあたったこれらの施設は、艦内各所に分散して配置されており、SDF-1の規模の大きさを示している。

艦内スペースに余裕のあったマクロスでは、大小の会議スペースが設けられ、その後の地球の運命を決定する数々の報告と、それを受けての方針の決断が行われていった。

審問室

停戦使節としてSDF-1を訪れたエキセドル・フォルモとグローバルらマクロス首■陣が会見を行った■屋。

席の周囲には大型のスクリーンが設置されており、エキセドルがゼントラーディ軍艦隊の指揮系統を説明する■に活用された。

総合作戦室

作戦司令室の一室。ここで一条輝ら戦績著しい士官に対する統合軍チタニウム勲章の授与が行われた。

本来は名前の通り、将官クラスが集って作戦会議を行う部屋である。壁面には大型のスクリーンも設置されている。

コンピューター室

第一次星間大戦終結後に新設されたコンピューター室のひとつで、プロトカルチャーの研究が行われていた。

取調室

SDF-1に亡命してきたゼントラーディ軍のワレラ、ロリー、コンダらの処遇を巡る審議が行われた部■。

他の会議室よりも比較的手狭な室内となっている。右手奥には会議を記録する書記用の机が設けられている。

技術スタッフルーム

技術開発部門のスタッフが常駐した区画。フォールド事故以降も頻発する不測の事態に技術面で対応し、同時に未解析な部分も多かったSDF-1の調査研究を進めた。トランスフォーメーションやピンポイント・バリアといった新システムの実用化に貢献した。

EXTRA REPORT
関連事項
マクロス艦内喫茶室

マクロスの艦内の展望スペースに設置された士官用の喫茶室。マクロスの地球降下後は、地球の風景を眺望できるスペースとして、にぎわっていた。

奥のテーブルが置かれたフロアが喫茶スペース、手前は展望台となっている。

艦外から喫茶室を望んだところ。戦闘時には、喫茶室のガラスの壁面は装甲で覆われたと思われる。

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶SDF-1 マクロス

3Dシミュレーター付会議室

ゼントラーディ軍艦隊から脱出してきた未沙たちの報告書を検討する会議が開かれた部屋。図左はホログラムディスプレイ。右天井部がシミュレーターのコントロールルームとなっており、ゼントラーディ艦隊の規模の試算などに使用された。

◀会議室ドア

▼コンソールキーボード

ピンポイント・バリアルーム

ピンポイント・バリア・システムの実用化に伴い新設された、バリアの制御室。前面の大型スクリーンにSDF-1の状況が表示される。バリア・システム班のスタッフ3名(通称・ピンポイント・バリア・ギャル)がトラックボールでピンポイント・バリアを操作する。

レーダー探知室

SDF-1のレーダーシステムを制御する区画(レーダー管制室、レーダーコントロールルームとも呼ばれる)。ここで観測された情報はメインブリッジに転送され、レーダーオペレーターによって処理される。カムジン艦隊の砲撃の直撃により壊滅したこともあった。

バリアコントロールルーム

全方位バリア・システムのコントロールルーム。バリア・ジェネレーターの区画に張り出すように配置されており、床と手前側以外の4面がジェネレーター区画に面した窓となっている。

▲バリア・システム全景

バリア・ジェネレーターが上下に存在。非常時は右のコントロールルームが引き込まれ防護シャッターが閉まる。右図はシステムの一部。

関連事項

EXTRA REPORT

艦内の病院

広大な艦内スペースを有するSDF-1では、艦内に本格的な病院も建てられていた。右は、友軍のダイダロス・アタックの暴発により撃墜された一条輝が運び込まれた統合軍病院である。なおこの病院は市街地に侵入したクァドラン・ローと、マクシミリアン・ジーナス機との戦闘が行われた区画の付近にあったが、幸い施設への被害は軽微だった。

クァドラン・ローを追って病院の敷地内に着陸したマクシミリアン・ジーナス機。病院はクァドラン・ローの噴射によってガラスが割れた。

一条輝が運び込まれた病院の全景。建物の上部には統合軍マークが見える。右は意識不明の重体の一条輝に取り付けられた医療機器で、呼吸や心臓の鼓動などをモニターする模様。

一条輝が入院していた間に、スカル大隊隊長ロイ・フォッカー少佐は戦闘で重傷を負い、同じ病院に運び込まれたが、ほどなくして死亡した。

左図は統合軍病院の内装。当時の一条輝が尉官であったためか、かなり広めの個室が提供されていた。

ゼントラーディ軍の主力を担う ワンマン戦闘ポッド

機体解説

ゼントラーディ軍機動兵器の代名詞とも言えるワンマン戦闘ポッドが、このリガードである。歩兵部隊の戦力と生存性の向上を目的とした兵器で、圧倒的な規模を誇るゼントラーディ全軍に配備することを想定して生産性が重視されている。また、低コスト化を追求したことによって構造は極めて単純で、整備性にも優れている。その反面、システムを簡素化しすぎたために手動操作を必要とする部分が多く、ヌージャデル・ガーなどのバトルスーツに比べると性能は劣っている。それでも、本機はゼントラーディ軍の標準兵器として運用されており、第一次星間大戦においても最前線に投入されている。

ビーム砲やレーザー機銃を装備し、高い攻撃力を有した。格闘能力こそ持たなかったが、統合軍の兵器を圧倒する場面もあった。

歩行能力だけではなく、足底部の小型スラスターを使用することで短距離のジャンプや水中での移動も可能だった。

データ

※データは標準量産型のものです

所属▶ゼントラーディ軍
全高▶15.12m
全備重量▶37.0t
発動機▶エスベリベン熱核反応炉(出力1.3GGV)
標準武装▶中口径荷電粒子ビーム砲×2/小口径レーザー対人機銃×2/小口径対空機銃×2

サイズ比較

VF-1J
リガード

開発系譜図

▶ リガード

リガード

機体構造は単純だが、生産性を重視しているため、膨大な数が生産された。それらはゼントラーディ全軍に配備され、主力として運用された。

Illustration by Hidetaka Tenjin

運用記録

リガードの実戦投入が開始されたのは銀河帝国分裂戦争の初期と言われ、約50万周期前に改良が終了して以降、現在まで生産と運用が継続されている。代表的な生産拠点はエスベリベン■4432369ゼントラーディ全自動兵器廠で、全体では約3億もの自動兵器廠で量産が行われていたと言われる。大量生産された本機はゼントラーディほぼ全軍の歩兵部隊に配備され、主力として運用された。ただし、本機は飛行性能が低いため、惑星への侵攻作戦などでは空戦ポッドとの連携が必要であった。第一次星間大戦におけるSDF-1 マクロスとの攻防でも攻撃部隊の中核をなし、人類側の可変戦闘機(VF)やデストロイドと戦闘を繰り広げた。

重力下では歩兵に代わる陸上戦力として運用され、地球人類との初遭遇でも上陸作戦を展開した。また、宇宙でも戦力の中核を担った。

惑星上に展開する場合は、軌道上の艦艇から大型降下ポッドによって降下する。また、帰還する際にもポッドに回収される。

第一次星間大戦の終結後は、統合軍によって地球防衛戦力の増強のためのリガードの生産が図られ、工場衛星の奪取作戦が実施された。

機体構造

機体は卵形の胴体に逆関節の脚部を付けた特異な構造で、胴体部の左右と足底面に推進用ロケットを備える。コスト削減のために構造が簡素化されており、故障率が低い反面、耐弾性や剛性には欠ける。

胴体部は脱出ポッドとして機能し、脚部を切り離して単独での飛行が可能である。マクロスに潜入した「青い風」の3名が脱出する際に、鹵獲されたリガードの同機能を用いている。

▶機能が集中した胴体部を細い脚部が支える構造で、重心が高いため安定性は低い。そのため、地上戦において敵機と衝突したはずみで転倒することもあった。

▶歩行やジャンプに用いられる脚部は脆弱で、VFと接触しただけで破損することもあった。また、脚関節基部は破壊されると機体全体が行動不能に陥る欠点を抱えていた

▶足底部
足裏は踵の面積が大きい独特な形状となっている。推進用の小型スラスターが内蔵されている。

◀リガード(標準量産型)の三面図。胴体各部や脚部、踵などにパイロットのイニシャルや認識番号、所属部隊と艦隊名などがマーキングされる場合もある。

コクピット

リガードは胴体内スペースのほとんどをコクピットに割いているが、ゼントラーディ兵士のサイズに比べると内部は非常に狭い。構造を簡略化しているために手動式の部分も多く、「生身で歩くよりも疲れる」と評されるほどパイロットへの負担は大きかった。また、装甲も厚くなかったことから、生存性は高くはなかったようだ。

パイロットは標準宇宙服を着用して搭乗する。ただし、ゼントラーディ兵にとってコクピットは窮屈で、操縦性も低かったと言われている。

手分けをすればマイクローンサイズの人間でも操縦が可能であった。捕虜になった一条輝ら4名がゼントラーディ艦から脱出する際に操縦している。

▲コクピットは中央にメインスクリーンが位置し、その周囲に各種操縦機器が配置されている。上はマイクローンとの対比。

▶コクピットハッチは胴体背面に位置し、シートの背もたれと一体化している。コクピット同様、乗降口もかなり狭い。

▲上はコクピット後方を示した図。左右のレバーは操縦桿で、向かって左上には通信機器が設けられている。

◀パイロットの姿勢を表すコクピット断面図。やや屈んで座らなければならないため、疲労が大きかったという。

武装

リガードは中口径荷電粒子ビーム砲2基と小口径レーザー対地機銃2基、小口径レーザー対空機銃2基といった固定武装を備える。これらはエスベリベン熱核反応炉によって稼動するが、生産コストを抑えたことで主機出力は低くなり、それに応じて武装の威力も低下している。しかし、VFやデストロイドに対しては十分な火力を有しており、ゼントラーディ軍の物量もあって統合軍を苦しめた。

主武装は胴体前面に配された中口径荷電粒子ビーム砲で、直撃すればデストロイドの装甲も破壊できる。また、同じ場所に長時間照射すれば、マクロスの装甲隔壁を貫通することも可能だった。

リガード(標準量産型)の武装

各武装は胴体部に集中しており、砲身は取り付け基部にある程度の可動範囲を有している。また、基部ごと外して別のモジュールに交換することも可能で、任務によって装備を変更することもあった。

近接戦用自己誘導小型ミサイル

小型ミサイル装備型リガードに装備されるミサイル弾。ミサイルランチャーは1基につき12発のミサイルを装填可能で、標準量産型の火力不足を補うために設計された武装だったと考えられる。

近接戦用多弾頭大型ミサイル

内部に複数のマイクロミサイル(下)を内蔵した多弾頭式ミサイル弾(上)で、ランチャー1基につき2発が装填される。大型ミサイル装備型リガードに用いられ、弾幕による制圧射撃などに運用された。

バリエーション

ゼントラーディ軍に広く配備されたリガードは、標準量産型だけではなく用途に応じて様々なバリエーションが存在する。構造が単純で改造が容易だった点もバリエーションの展開が行われた理由と考えられる。基本的には、標準量産型を主力として、ミサイル装備型2種が後方支援につき、部隊全体の索敵を偵察型が行うという形式で運用されることが多かったと見られる。

地球人類との初遭遇において、南アタリア島に上陸したリガード部隊。偵察型や小型ミサイル装備型の派生機が編成されているのが確認できるが、全体の割合で見れば多くなかった。

ミサイルを斉射する小型ミサイル装備型リガード。前述のようにリガードは火力に不安を抱えていたため、その改善を図ったバリエーションが開発された。

▲偵察型(ワンマン偵察ポッド)
エクトロメリア第979972010ゼントラーディ全自動兵器廠で開発された、非武装の偵察型。全周風レーザーサーチャーやレーザー長距離センサーなど、複数の探知システムを備える。

▲小型ミサイル装備型
対空機銃を外して小型ミサイルランチャー2基を装備した火力向上タイプ。攻撃力と機動力のバランスが良く、兵士には好評だった。

▲大型ミサイル装備型
対空機銃を多弾頭大型ミサイルランチャー2基に換装したタイプ。火力支援を目的とした派生機だが、重量超過によって運動性が低下している。

格納方法

リガードはゼントラーディ軍の標準的な艦載兵器として運用され、艦内では固定台座を用いて格納された。ゼントラーディ兵士全員に行き渡ることを目的とした機体だけに、膨大な数が生産、配備されていた。そのため、格納する際には艦内設備を圧迫することのないよう省スペース化が図られていたと考えられる。

リガードは直立状態で15mを超えるため、パイロットの乗降も考慮して固定台座が用いられていたようだ。また、一条輝たちがリガードを奪って脱出を図る際、台座をよじ登ってコクピットに侵入した。

◀固定台座を用いて格納される際には、脚部を折り畳み座るようにして台座に連結される。脚部の可動範囲の大きさが分かる。

▶固定台座に連結した状態のリガード背面。パイロットは台座のステップを使ってハッチから搭乗する。

ノプティ・バガニス5631(ブリタイ艦)の艦内で出撃を控えるリガード部隊。固定台座は格納時だけでなく、出撃前の待機状態でも用いられた。

出撃前のカムジン・クラヴシェラ率いる部隊。グラージはリガードに似た構造のため、格納には同様の固定台座が用いられた。

ファン・レーサー

大空に美技を描く アクロバットカスタム機

FAN RACER

主要パイロット

一条輝

データ

所属	民間機	空虚重量	650kg
全長	調査中	エンジン	セラミックロータリーエンジン
全高	調査中		
全幅	調査中	最大速度	720km/h

開発系譜図

? ▶ ファン・レーサー

サイズ比較

VF-1Jバルキリー

ファン・レーサー

一条輝のファン・レーサーは、アクロバット仕様機である。マクロス進宙式典では、アクロバット・ショーに飛び入り参加し、即興とは思えない美技を披露した。

大気圏内専用の機体だが、SDF-1のフォールドで宇宙空間に放り出された際には、ブースターの燃料を噴射することで慣性飛行を行っている。

機体解説

統合戦争終結前の混迷期も、中小含め一部の企業では、民間用航空機の開発が続いていた。軍属前の一条輝が愛機としたファン・レーサーも、その一例と言えよう。輝用のファン・レーサーは、エンジンをより高性能なものに換装。さらにロケット・ブースターを追加したアクロバット仕様である。最大出力約660馬力超、最大巡航速度は720km/h程度と推測され、ブースター併用時には短時間なら時速1,080km以上を発揮したとされる。なお、同系のコミュニケーター仕様複座機としてファン・ライナーが存在する。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶ファン・レーサー

運用記録

スポーツ仕様の小型航空機であるファン・レーサーは、アクロバット・ショーやエア・レース用に開発された機体である。軍属前、アクロバット・チームに所属していた一条輝は、この機体を愛機とし、各地を巡業していたとされる。また、一条輝は移動手段としてもこの機体を使用しており、マクロス進宙式典に招待された際には、会場にファン・レーサーで乗りつけ、そのまま、"エンジェル・バーズ"のアクロバット・ショーに飛び入り参加し、会場を大いに沸かせた。

その後、マクロス艦のフォールドに巻き込まれたファン・レーサーは、一条輝とリン・ミンメイを乗せたまま、宇宙空間へ放出されてしまう。しかしロケット・ブースターを駆使し、何とかマクロス艦内に不時着した。その際、機体は大ダメージを負ってしまい、以後の運用は不明となっている。

式典中、観客の真上を低空飛行するファン・レーサー。このとき、操縦桿を握っていたのが一条輝である。彼は軍属前からあらゆる意味で目立つ存在であった。

ファン・レーサーに乗り込む一条輝とリン・ミンメイ。このあと、2人は宇宙遊泳、さらにマクロス閉鎖区画内でのサバイバル生活を経験することとなる。

機体構造

ファン・レーサーは前進翼を採用、さらに基本推進力となるプロペラは後部にあるなど、非常に珍しい形状の機体となっている。どちらも空気抵抗の減少を狙ったもので、高速性を考慮した構造と言えるだろう。コクピットは単座だが、一条輝はリン・ミンメイを搭乗させ、2人乗りでのフライトも敢行している。

マクロス艦への不時着時、ファン・レーサーは宙吊りに。一条輝とミンメイは、この機体をテント代わりに約一週間のサバイバル生活を余儀なくされた。ちなみに不時着した場所は、居住区の真下であった。

ロケット・ブースター

後部には6機のロケット・ブースターを搭載。ブースター使用時の最高時速は、短時間ながら推定1,080km/h程度とされる。

使用時は、フェアリングが外れて、ブースター部分が露出する。

コクピット

6機のロケット・ブースターは、ブースターコントローラーで各基個別に操作可能。アクロバットの演出用にスモークボタンがコントロールスティックに装備されている。

H ブースターコントローラー　I ブースタースロットル　J スモークボタン
K エンジンスロットル　L コントロールスティック　M 計器類
N フラップレバー　O マイク　P 脚レバー

内部構造

エンジンを含む主要部分は中央より後部に集中して搭載。コクピット背部は、貨物用ペイロードとなっている。

A ペイロード　B 燃料タンク　C ラジエーター
D エンジン　E エアインテーク　F ダブルファン
G ロケットブースター

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-1J

VF-1の火力強化仕様にして 軍人 一条輝、初の愛機

主要パイロット

機体解説

史上初の熱核反応タービン・エンジン搭載可変戦闘機であるVF-1バルキリーは、ストンウェル社、ベルコム社などの共同設計チームにより開発されたのちに、ノースロム社など数社においてライセンス生産が行われ、数々のバリエーション機が生まれた。いわゆるJ型と呼ばれるVF-1Jは、バルキリー開発プロジェクトにおいてエンジン開発を行っていた新中州重工生産の機体であり、末尾のJは日本エリア(J=JAPAN)で生産されたことを示している。このJ型は、従来の量産機であるA型の火力不足を補うべく、武装開発メーカーである九星重工製の新規頭部ユニットを採用。レーザー機銃2門を搭載した火力強化仕様となっている。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶14.23m
全高▶3.84m
全幅▶14.78m（最小後退角度時）／8.25m（最大後退角度時）
空虚重量▶13.25t
エンジン▶新中州重工／P&W／ロイス　FF-2001熱核タービンエンジン×2
推力▶11,500kg×2
最大速度▶M2.81（高度10,000m時）／M3.87（高度30,000m以上時）
標準武装▶マウラー レーザー機銃ROV-20×2／ハワード GU11 55mm 3連装ガンポッド×1

サイズ比較

VF-1J　ヒト　ゼントラーディ人

開発系譜図

VF-1

▶VF-1J バルキリー

運用記録

少数生産のJ型は、従来の量産機であるA型以上の火力を有することから、小隊長機や熟練パイロット用として配備されることも少なくなかった。そんなJ型には各パイロット用のカスタムカラーが施されたバリエーション機も多く見られ、中でも白地に赤いストライプがあしらわれた一条輝機は、認知度の高い機体と言えよう。一条輝は、訓練生時代からJ型を使用、さらに配属直後の新兵にもかかわらずカスタムカラー（白）のJ型を与えられる栄誉に浴した。彼は前歴がエアアクロバットのパイロットであり、さらに入隊以前に諸事情によりVF-1Dでの戦闘を経験したことから、即戦力として期待されての処置であったと考えられる。一条機は当初、スカル大隊23番機として登録され、バーミリオン小隊長（コールサイン『バーミリオン1』）時代まで使用された。

一条が最初に与えられたJ型はブリタイとの格闘戦で破壊された。その後、再び同型機が配備されたが、味方の流れ弾により墜落している。

標準装備

マウラー レーザー機銃ROV-20

VF-1に固定装備される小型パルスレーザー砲。J型は頭部両脇のターレットに各1門、計2門を装備しており、1門のみ搭載のA型よりも火力が強化されている。基本的には補助火器という位置付けだが、ガンポッドなどと同時に使用することで濃密な弾幕を展開可能である。

ハワード GU11 55mm3連装ガンポッド

VF-1シリーズのメインウェポンである機関砲ポッド。ファイターでは機体下部中央に固定、それ以外の形態では腕部マニピュレーターで使用する。55mmという大口径弾を高初速で発射するため、戦闘ポッド相手にも充分な威力を発揮する。装弾数は180発である。

コクピット

VF-1シリーズ共通のコクピットで、緊急脱出用の射出座席を搭載する。ファイター形態とガウォーク形態は旧来の戦闘機のそれに類しているが、バトロイド形態では完全密閉式となり、モニターを通して外部視界を得る。

◀バトロイド時
上面や側面にモニターがある。

座席（緊急射出時）▶

◀ファイター／ガウォーク時

ファイターモード

空中戦や宇宙戦で使用される速力に優れた戦闘機形態。初速を得たい発艦時にもとられるモードで、一条も土星宙域での初出撃ではファイター形態で出撃している。一条は、突飛な戦法を好んだ僚友のマクシミリアン・ジーナスと異なり、空中戦および宇宙戦では定石通りにファイター形態で戦うことが多かった。

一条機は火星大気圏内戦闘においてAMM-1ミサイルを使用、戦闘ポッドを撃破している。この際、ファイター形態で戦っていた。

▶白のカラーリングを基本に、胴体や主翼の赤いラインが映える上面。頭部以外は他のVF-1と同じであり、シルエット上の差異はない。

▼J型の特徴である頭部が、機首付け根に半収納状態でマウントされている。頭部にある2門のレーザーは飛行中にも使用できる。

◀バトロイド／ガウォーク形態において足部となる偏向ノズルなど推進系が集約された後部。

◀エンジン間のユニットは、腕部マニピュレーターである。ガンポッドは右前腕部に固定される。

ガウォークモード

地上戦での高速ホバリング移動や低空での低速飛行、機動性を保ちながら腕部マニピュレーターを使用する場合などにとられるモード。急減速や着艦時、不整地や狭い場所への着陸などでは、脚部のみを展開した準ガウォーク形態をとることもある。一条機はSDF-1マクロスが宇宙にフォールドしてから投入されたため、ガウォーク形態を地上で運用する機会はさほど多くなかった。それでもSDF-1やゼントラーディ艦へ着艦する場合に使用したほか、艦上を高速移動する際に選択するケースが見られた。火星基地では、敵部隊の中にガウォークで単身飛び込み、その機動性を活かして敵機を攪乱し、同士討ちを誘う戦法も見せている。

ゼントラーディ艦への肉薄時、艦上を移動する際にガウォークとなった。バトロイドで艦上格闘戦をするための繋ぎとしても利用された。

ブリタイ艦内部に突入し、通路を高速移動する際にもガウォーク形態が使われた。この際、翼下に吊下したAMM-1ミサイルで進路上の扉を破壊している。

▶脚部をホバリング用に展開し、バトロイド用推進器を上部に移動させた中間的形態。宇宙で任官した一条は、あまり使用しなかった。

▼腕部を展開しているためガンポッドの自由度が高まり、レーザー機銃と翼下兵装も同時に使用できる。

関連事項 EXTRA REPORT

人命救助にも利用された形態

一条は火星離脱時、早瀬未沙中尉を救助しつつ、自爆する基地から高速で遠ざかるため、ガウォーク形態を使用した。単座のVF-1Jで早瀬中尉を保護しながら移動するには、腕部を展開しつつも飛行可能なガウォークが最適だったためである。ちなみに一条はD型搭乗時にも、ガウォーク形態でリン・ミンメイを保護している。

J型は単座機であるためコクピットには1人しか乗れない。ガウォーク形態ならば、腕部マニピュレーターで人間を掴み、保護しながらの高速離脱が可能であった。

バトロイドモード

対巨人戦闘／陸戦用の人型形態。一条機はゼントラーディ艦内部への突入や、SDF-1上での対戦闘ポッド戦を度々行っているため、バトロイド形態を頻繁に使用することとなる。腕部マニピュレーターや脚部は、ゼントラーディとの肉弾戦だけでなく、ゼントラーディ艦侵入時の巨人用ハッチ開閉にも有効だった。

一条はJ型での初出撃時、バトロイド形態でゼントラーディ艦内部に突入している。この際、生身のゼントラーディ兵と遭遇したが、戦闘にはならなかった。

カムジン隊がSDF-1に肉薄した際には、バトロイド形態で艦上防衛戦を展開している。この際、カムジン機と交戦し、頭部左側部と左腕を損傷した。

ブリタイ艦侵入時、バトロイド形態でブリタイと白兵戦を演じた末、破壊されている。一条は射出座席で脱出を図ったが、シートごとブリタイに捕縛された。

▶完全に人型のシルエットとなったバトロイド形態。2009年10月のゼントラーディ偵察機との戦闘では、ガンポッドと頭部レーザー機銃を同時に使用した。

▲頭部

▶主推進器は背部ロケットとなる。飛行時ほどのパワーは必要ないため、熱核エンジンの余剰電力はエネルギー転換装甲に用いられている。

Illustration by Hidetaka Tenjin

機体解説

J型の一般機のカラーリングは、A型と同様にライトブラウンを基調としているが、一部のエースパイロットの機体には独自のカラーリングが施されている。その中でも天才・マックスの青い機体と、元ゼントラーディのエース・ミリアの赤い機体は、多大な戦果を挙げたコンビとして特に勇名を馳せた。ここでは、その両機の活躍について解説する。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶14.23m
全高▶3.84m
全幅▶14.78m（最小後退角度時）／8.25m（最大後退角度時）
空虚重量▶13.25t
エンジン▶新中州重工／P&W／ロイス　FF-2001熱核タービンエンジン×2
推力▶11,500kg×2
最大速度▶M2.81（高度10,000m時）／M3.87（高度30,000m以上時）
標準武装▶マウラー レーザー機銃ROV-20×2／ハワード GU11 55mm 3連装ガンポッド×1

主要パイロット

ミリア・ファリーナ・ジーナス

主要パイロット

マクシミリアン・ジーナス

戦場を駆け抜けた
青と赤のエースパイロット機

VF-1J

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-1J バルキリー

マックス機

機体解説

新中州重工製のJ型は工作精度が高く、品質が安定しており、機体ごとの性能のばらつきが少なかった。そのため、小隊長クラス以上の優秀なパイロットに与えられるケースが多かった。VFの操縦に関しては天才的な才能を持っていた"マックス"ことマクシミリアン・ジーナスが搭乗したVF-1Jには、彼のパーソナルカラーであるブルーの塗装が施されている。

天才パイロット、マックスへと与えられた、鮮やかなブルーを基調としたカラーリングのVF-1J後期型。彼の昇進に伴い、隊長機としても活躍している。

運用記録

マクロス地球帰還後に空母プロメテウスへと配備されたマックス機。マックスが小隊長となった頃から運用され、「リン・ミンメイ作戦」にも参戦し戦果を上げたとされる。また、第一次星間大戦後の紛争においても、ミリア機とともに2機1組の遊撃隊として活躍したと言われている。

青いマックス機と、真紅のミリア機。両機はともに新中州重工製のスーパーパーツを装備したスーパーバルキリーとしても運用されている。

関連事項 EXTRA REPORT

パーソナルカラーへのこだわり

恋に落ちてから間もなく、電撃的な星間結婚を果たしたマックスとミリア。バージンロード上を飛行した複座機のVF-1Dはブルーに塗装されていた。結婚式にパーソナルカラーで塗装した機体で臨むあたりは、VF乗りとしてのこだわりと言えるだろう。

バージンロード上を飛行する青いVF-1D。歴史的な結婚式の模様は、"人類"、"ゼントラーディ双方に中継された。

◀ボドル基幹艦隊との戦闘やオノギシティ工場街襲撃時など、対巨人戦闘において多用された形態。空中戦、宇宙戦ではファイター形態で敵に肉薄し、このバトロイド形態に変形して撃破するという戦い方が多かった。

◀▶バトロイドモード

▶空中、宇宙においては、定石通り速力に優れたファイター形態を使用。早瀬未沙の地球降下時などにも、シャトルの護衛としてこの形態で帯同した。

▲ファイターモード

▶中間的形態であるガウォークをあまり使用しなかったマックスだが、ゼントラーディ艦への潜入、着艦時など狭い場所での運用時には同形態を用いた。

VF-1J以前に搭乗していたVF-1Aでも、塗り分けパターンはA型一般機と同じものの、メインカラーはパーソナルカラーのブルーを使用していた。

◀ガウォークモード

ミリア機

◀マックス機とほぼ同様に、バトロイド形態へと変形して敵と交戦するケースが多かった。なお、2045年にシティ7のバトロイドカーニバルで発生した戦闘ではミレーヌが搭乗し、同形態で敵を撃破する活躍を見せた。

◀▶バトロイドモード

▶かつてはクァドラン・ローを愛機としていたが、戦闘機形態もそつなく乗りこなしたミリア。天才と言われるマックスとの並走飛行を苦もなくこなした。

▲ファイターモード

▶ゼントラーディ艦への潜入、着艦時などに使用した形態。また、シティ7の市街戦でミリアが搭乗した際は、同形態の機動性を活かして敵を攪乱した。

▲コミリアのコンテナ

◀ガウォークモード

機体解説

ボドル基幹艦隊との決戦を前に、マックス機とともに空母プロメテウスへと配備されたミリア・ファリーナ・ジーナス専用機。ゼントラーディ軍においては「エースのミリア」の名をほしいままにした実力もあってか、真紅の塗装が施された彼女の機体も、マックス機と同様にJ後期型である。

マックスとの間に生まれた娘、コミリア・マリア・ジーナスをコンテナに乗せて移動していたミリア機。他の機体にはない特徴のひとつだ。

運用記録

投降後、マイクローン化し地球統合軍のパイロットとなったミリアが搭乗したミリア機。マックスとの「天才コンビ」で「リン・ミンメイ作戦」や第一次星間大戦後の紛争などにも参戦し、多大な戦果をおさめている。ちなみに紛争時には、戦闘を繰り返す残存ゼントラーディ兵説得のため、愛娘のコミリアを乗せて出撃するケースも見られたという。

マックス機とともに2機1組の遊撃部隊としても運用されたミリア機。双方の機体能力、およびパイロット能力の高さゆえの編成であろう。

関連事項 EXTRA REPORT

30年後の運用

軍を退役した後も愛機を所有し続けていたミリアは、2038年に出発したマクロス7を中核とする第37次超長距離移民船団にも同機を帯同させ、バロータ軍との戦闘において自ら出撃した記録がある。真紅の機体はロールアウトから30年を経てなお、新たな敵との実戦を経験する稀有な機体となった。

7

30年後に再び実戦投入されたミリア機。ミリア、ミレーヌが搭乗した後、ガムリン・木崎が搭乗中に大破した。

▶VF-1J バルキリー

一般機

機体解説

VF-1の一般機タイプと言えば、ノースロム社製のA型が一般的であるが、生産数の少なかったJ型にも一般機タイプが見られた。武装開発メーカー九星重工製の特注モデルである、頭部に2門の対空レーザー機関砲を搭載したJ型は、A型以上の高い攻撃力を誇り、一般機と言えども火力強化仕様として扱われたようだ。第一次星間大戦開戦以降、マクロス艦などへの配備が確認されているがその絶対数は少なく、希少な存在だったと言える。

第一次星間大戦時のマクロス艦にもJ型一般機は配備されたが、生産数自体が少なかったため、限られたパイロットのみの使用となった。

他機種の一般機とほぼ同様のカラーリングがなされたJ型。なお、この一般機カラーはA型、D型でも使用されたことが確認されている。

VF-1A一般機との最大の相違点は頭部である。モニターカメラやレーザー機銃など、その形状は大きく異なる。

◀▶バトロイドモード

▲ファイターモード

運用記録

第一次星間大戦開戦以降、絶対数は少ないながらも様々な要所に配備されたJ型一般機。マクロス艦に配備されたJ型は、軍に入隊したばかりの一条輝の訓練機としても活用された。また、地球においても、守備部隊に組み込まれたJ型一般機の存在が確認されている。第一次星間大戦においてはゼントラーディ軍の攻撃を受け、数機がこれを迎撃。さらに大戦後のゼントラーディ人の暴動時には、バトロイド形態で暴徒を鎮圧し、その性能の高さを証明した。

急襲するゼントラーディ軍と、それを迎え撃つ統合軍。市街戦においては、バトロイド形態のJ型一般機がリガードと交戦する姿も見られた。

ビヨンの街で武装したゼントラーディ人が暴れた際、J型一般機は一条輝が乗るスパルタンと協力し、ヌージャデル・ガーを押さえ込んだ。

▼機体の全体的なカラーはA型の一般機と酷似しているが、主翼の中央にのびる白いラインは、J型の特徴である。

▼ガウォークモード

カラーリングはA型の一般機(写真)とほぼ同じため、特徴的な頭部が隠れるファイターやガウォーク形態時に機種を見分けることは難しい。

主要パイロット

一条輝

Mechanic Sheet
メカニックシート
VF-1J バルキリー

大気圏脱出用ブースター付バルキリー

主要パイロット
マクシミリアン・ジーナス

機体解説

地上から宇宙への打ち上げのため、機体後部に大気圏脱出用ブースターを装備したVF-1J。VFに装着すると18mを超える大型ブースターは推力22,500kgに及ぶロケットエンジン4×4基を内蔵し、短時間での大気圏脱出を可能とする。なお、分離後のブースターは自動操縦で基地に帰還する機能を備えている。

機体よりもはるかに大きいブースターを装備したVF-1J。打ち上げ時には、発射台として専用の大型車両が用いられる。

運用記録

第一次星間大戦後、同盟を結んだブリタイ艦に向けて早瀬未沙らを乗せたシャトルが飛び立った際、バルキリー隊もともに宇宙に向かった。バルキリー隊に組み込まれたVF-1Jのマックス機とミリア機も、宇宙進出のために大気圏脱出用ブースターを装備して発進。無事に宇宙へと上がり、シャトルに同行してブリタイ艦に着艦する姿が確認されている。

ブースターを装備した、マックス機をはじめとするバルキリー隊。ただし、バルキリーが単独で大気圏離脱を行うケースは稀だったようだ。

▼打ち上げ用大型車両

関連事項 EXTRA REPORT

VF-1Jの追加装備

装甲の弱さ、高出力エンジンに対する使用効率の低さなど、VF-1シリーズは様々な欠点を指摘されていた。VF-1Jも例外ではなく、それらの問題点を解決するため、追加装備を用いるケースが確認されている。一条輝は愛機のJ型に、陸上戦用に開発された追加装備「GBP-1S」を装備した「アーマードバルキリー」形態で哨戒任務を行い、敵と交戦している。同様に新規開発された追加装備としては、J型をライセンス生産した新中州重工の手による大気圏外用追加装備「スーパーパーツ」が存在。これを装着したVF-1シリーズは通称「スーパーバルキリー」と呼ばれ、第一次星間大戦後期からこの形態で運用されることが多かった。

◀VF-1J アーマードバルキリー

▲VF-1J スーパーバルキリー

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶VF-1J バルキリー

変形機構　ファイター形態 ➡ ガウォーク形態

ファイター形態からガウォーク形態への変形過程では、高速飛行からの減速とともに脚部、腕部の展開が行われる。変形機構にはおもに流体パルス・アクチュエーターシステムが採用されており、極めて高速で変形が行われる。なお、ガウォーク形態への変形後は安定化/歩行補助用に重心自動制御システムが使用され、空中/地上ともに安定した運用が可能となっている。

ちなみに機体の変形過程はVF-1JをはじめVF-1シリーズ共通である。

VF-1J
ファイター形態

■ 可変部位の名称(名称は基本的にバトロイド形態のもの)

- エアブレーキ
- 主翼
- 垂直尾翼
- 背面ブロック
- 脚部
- 腕部
- ガンポッド
- 胸部
- 胴部
- 頭部

1

■ 変形のための減速

高速で飛行する[illegible]ター形態からの変形のため、コクピット後方に位置する小型のエアブレーキの展開、主翼の前縁及び後縁フラップの展開、脚部の下方展張による減速が行われる。[illegible]お[illegible]先端[illegible]の[illegible]となる箇所に展開され[illegible]アブレー[illegible]となる。

2

■ 垂直尾翼の折りたたみと脚部の展開

脚部が降りきった状態で垂直尾翼が折りたたまれたのち、背面ブロックが動き出し[illegible]エアブレーキとなる。また、[illegible]定翼に位置する[illegible]VTOLノズルが噴射を続け、機体はさらに減速される。なお、小型エアブレーキは背部ブロックが[illegible]倒される前にたたまれる。

EXTRA REPORT

関連事項

VF-1の形態選択レバー

変形の際に操作する形態選択レバーは、VF-1Jのみならず VF-1シリーズ全機種共通のものとなっている。形態選択レバーは2種類あり、ファイター及びガウォーク形態時にはアームコントローラー横のレバーを使用。バトロイド時はコクピット内部の配置が異なるため、シート横のレバーを使用することになる。なお、どちらも「F」はファイター・レバー、「G」はガウォーク・レバー、「B」はバトロイド・レバーを意味する。

▼形態選択レバー
(ファイター、ガウォーク時)

B G F

形態選択レバー(バトロイド時)▶

Mechanic Sheet
メカニックシート
VF-1J バルキリー

■背面ブロックの変形
脚部のみを展開した準ガウォーク形態時、倒された背面ブロックがコクピット後方へロックされ、変形によるアンテナ効率の低減を補うため、補助アンテナが展張される。なお背面ブロックは、ガウォーク形態での推進用背部ロケットとして使用される。

■腕部の展開
機体下面にある腕部の展開の際には、パーツがめまぐるしく移動する。まず両腕は肩の基部ごと後退したのち、2つに分かれる。そこで90度向きを変えて前進し、正規の位置に収まる。また、脚部は腕部の移動に先駆けて一旦下に降ろされ、④の段階で元の位置に戻される。

①準ガウォーク形態時の機体下面後部。両腕部は脚部の間に平行して収納された状態となっている。ガンポッドはその中央に備え付けられているように見えるが、実際には右前腕部に固定されている。

②腕部および固定されているガンポッドが後方にスライドする。同時に、アクチュエーターによって機体下面と繋がれている脚部が、腕部展開のスペース確保のために一旦下方に降ろされる。

③スライドを終えた腕部が左右に分かれる。なお、腕部がスライドすることにより機体下面が剥き出しとなる。ガンポッド収納用の凹部は、カバーがせり出し塞がれる。

④肩部と機体下面を繋ぐジョイントを中心に両腕部が90度回転したのち、前方にスライド。脚部が引き戻される。腕部の使用が可能となり、ガンポッドはマウント状態が解除され右腕に握られる。

■腕部の構造と役割
VF-1シリーズの右腕部ハードポイントは5000ポンド(2.26t)ほどの懸架能力を持ち、ガンポッドだけでなくVF-1シリーズの機首もハードポイントに装着可能である。なお、ファイター形態時のガンポッドは両腕に挟まれているのではなく、グリップが右腕部のハードポイントに差し込まれている。さらに左腕部にはそれに対応する凹みが設けられているため、機体下面中央に据えることが可能となっているのだ。ちなみに、ファイター形態時のガンポッドは銃口が腕部の肘側を向いて固定されているため、ガウォークやバトロイド形態で使用する際は手で持ち直すことになる。

ロイ・フォッカーのVF-1Sは、VF-1Dの機首を右腕部に固定して戦場を離脱した。

ガウォークに変形した直後、ガンポットの銃口はこの時点では肘方向を向いている。

VF-1J ガウォーク形態
腕部の展開をもってガウォーク形態への変形は完了する。なお、自動変形モードでファイター形態からガウォーク形態に変形した場合は、1.5秒前後での変形が可能とされている。

変形機構　ガウォーク形態 ➡ バトロイド形態

バトロイド形態への変形では、胸部パネルが展開された後、脚部、胸部及び胴部の変形がほぼ同時に進行し、最終的に頭部と主翼の変形をもって人型の形態を成す。なお、バトロイドの関節駆動系には、基本的に超伝導/大トルクモーターと流体内パルスシステム・高速アクチュエーターが用いられており、特に瞬発力に優れる後者はバトロイドの機動性獲得に大きな役割を占めている。ちなみに機体の変形過程は、ファイターからガウォークの場合と同様にVF-1シリーズ共通のものである。

1

①胸部パネルがスライドして機体が前部、後部に分割され、胸部連結パーツが露になる。同時に、頭部の展開のために背面ブロック群が起き上がる。

胸部パネルの展開

[illegible]

裏面はバトロイド時に使用するサーチライトとなっている。

②胸部及び胴部に脚部を含む機体前部が底面方向に折り畳まれていくと同時に、胴部のキャノピー部分にカバーが降ろされていく。併せて、脚部の変形も始まる。

2

①アクチュエーターによって胸部下面と繋がれていた脚部が、下方に降ろされる。この動作自体はガウォーク形態での腕部の展開時と同様だが、ここではさらに機首方向へと180°近く展開する。

[illegible]

②展開が完了した後、両脚と胴部の連結が始まる。機首の左右シーカー部後部が取り付け位置となり、脚部と胴部は回転ヒンジでロックされる。この連結部が、バトロイドの股関節となる。

③脚部と胴部の連結後、脚部移動用パネルと脚部のロックが外され、パネルはアクチュエーターと共に胸部裏面に収納される。これにより両エンジンナセルは胸部から離れ、完全に足としての役割を果たすようになる。

アクチュエーターはバトロイドへの変形だけでなく、ガウォークへの変形時にも腕部とガンポッドの移動スペースを確保するために機能している。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-1J バルキリー

■胸部と腰部の変形

胸部と腰部の変形は、脚部の変形とほぼ同時に進行する。機体裏面では、前後部の基本ユニットが折り畳まれるまでの間に「脚部移動用パネルの収納」までを完了することになる。なお、[illegible]形態時に機体下面に位置していた銃座は胴部に連結されており、胸部と胴部の変形後にバトロイド頭部となる。

基本ユニットの折り畳み、脚部の変形、頭部の移動は、ほぼ同時に行われる。これほどの複雑な変形を短時間に完了させるには、オーバーテクノロジーの導入なくしては不可能であった。

①胸部連結パーツを中心に機体が折り畳まれていく過程で、脚部移動用パネルとアクチュエーターが胸部裏面に収納されていく。また、銃座が引き起こされていく。

②機体裏面の処理を終えた段階で、基本ユニットの折り畳みがほぼ完了し、バトロイドの「胴体」を形成する。なお、この段階でキャノピーカバーも完全に降ろされる。

■頭部と主翼の変形

引き起こされた銃座が、分割された基本ユニットの間を通り、胴体の頂点に移動する。メインカメラが正面を向き、[illegible]も可動し、バトロイドの「頭部」が完成する。ほぼ同時に、可変主翼が収納位置まで[illegible]

①分割された基本ユニットの間を通った銃座は、最終的にほぼ90度引き起こされるとともに、180度回転し、メインカメラを正面に向けて「胴体」上部に固定される。

②頭部が固定された後、レーザー機銃を頭頂部方向に移動。同時に、起き上がっていた背面ブロックなども元の位置に戻される。この時点で、基本機体ユニットは完全に折り畳まれた状態となる。

③バトロイド形態時には不要となる主翼が、収納位置まで畳み込まれる。なお、主翼下にミサイル等を装備している場合などには、主翼を展張位置に保つこともあったようだ。

VF-1J バトロイド形態

脚部インテークなどの閉鎖をもってバトロイドへの変形は完了する。なお、自動変形モードでガウォーク形態からバトロイド形態に変形した場合は、2秒弱での変形が可能とされている。

■変形の最終工程

バトロイドへの変形が終了した時点で、腕の付け根から脇にかけての[illegible]用シャッターが降ろされ、同じく脚部上端の[illegible]シャッターも[illegible]により閉鎖される。

グラージ

戦場の教訓が生み出した ゼントラーディ軍戦闘ポッド

機体解説

グラージはゼントラーディ軍のワンマン戦闘ポッドで、銀河帝国分裂戦争の戦訓を範として開発された格闘戦兵器である。前線で収集された戦闘データを反映して基礎設計が練られたため、実用性に優れておりパイロットの生還率も高い。また武装やオプションパーツが豊富に用意されており、ゼントラーディ軍主力機として採用されたリガードに比べて戦闘力が高い。主に高級指揮官機として運用され、西暦2009年の第一次星間大戦においても、カムジン・クラヴシェラの乗機としてその性能を十分に発揮した。

カムジンが愛用し、戦闘ポッド部隊の指揮官機として幾度となくSDF-1 マクロスを襲った。また、一条輝のVF-1J バルキリーと一騎討ちを演じたこともある。

多彩な武装を有し、リガードを遥かに上回る火力を有していた。パイロットであるカムジンの優れた操縦技術もあって、第一次星間大戦では高い戦果を挙げている。

主要パイロット

カムジン・クラヴシェラ

データ

全高 ▶16.55m
全備重量 ▶41.2t
発動機 ▶ロイコンミ熱核反応炉　出力3.9GGV
製造 ▶ロイコンミ第330048902ゼントラーディ全自動兵器廠開発
標準武装 ▶大口径インパクトキャノン×2／小口径インパクトキャノン×2／長射程荷電粒子ビーム砲×1／小口径レーザー対人機銃×2／近接戦用追尾ミサイル×6

サイズ比較

VF-1J
グラージ
ヒト

開発系譜図

▶ グラージ

Illustration by Hidetaka Tenjin

▶グラージ

運用記録

銀河帝国分裂戦争初期に起きた一大開発競争の終盤に登場したグラージは、派生機を生みつつゼントラーディ軍の主力兵器の一角を担った。だが、開発と製造を行うロイコンミ第330048902ゼントラーディ全自動兵器廠が28万周期前に監察軍の攻撃を受け、グラージ自動製造システムが崩壊。この影響でグラージは希少機種となっていった。

大気圏内外の運用能力を有し、重力下では二脚歩行とスラスターを用いたホバリングやジャンプ移動を併用する。

▼足裏
グラージの足の裏側の一部で、接地部位は4つのユニットから構成されている。

▼パイロット対比図

機体構造

グラージはリガードと同じ逆関節脚を有する戦闘ポッドである。カムジンの所有する機体は、3700周期前に開けられた兵器倉庫で発見された、状態の良いものだと言われている。

▲胴体後部と腰部、脚部にスラスターを備える。推力はリガードを上回り、機動性でも可変戦闘機(以下、VF)に引けを取らない。

武装

本機は、合理的な兵器レイアウトがなされた機体である。特に、広い可動範囲を有する腕部に2種類の武装を配する点は、柔軟な戦闘を可能とする長所であった。熱核反応炉の出力もリガードの3倍に相当し、火力は極めて高いと言える。

A 長射程荷電粒子ビーム砲
胴体上部に荷電粒子ビーム砲1基を装備する。長砲身で取り回しはあまり良くないが、360度の回転構造を有しており射界は広い。

B 近接戦用追尾ミサイル
胴体左右の腕部つけ根に3基ずつ、計6基のミサイル発射管を配している。内部には近接戦用追尾ミサイルが装填されている。

C 小口径レーザー対人機銃
胴体先端下部には2基のレーザー対人機銃を備える。形状や構造はリガードの同武装に酷似しており、補助武装の域を出ない。

D 大口径インパクト・キャノン
腕部武装ユニットの上部には、大口径インパクト・キャノンを内蔵している。本機の主砲に相当し、カムジン機もこの武装を多用した。

E 小口径インパクト・ガン
武装ユニット下部の砲口は小口径インパクト・ガンのもの。副砲にあたり、腕部の可動構造によって広い射界を確保している。

腕部の関節構造は決して頑丈ではなかったものの、武装ユニットでの殴打も想定されていたと考えられる。

両腕のインパクト・キャノンを同時発射するカムジンのグラージ。戦闘ポッドとしては重武装だった。

▲コクピットハッチ
胴体上面装甲がコクピットハッチを兼ねた構造で、乗降時には上方に展開する。

三面図

胴体は前後に長い形状で、逆関節の脚部がそれを支える。リガードよりも大型だが正面投影面積は小さいのが特徴。脚部先端にはワイヤーフックが内蔵されており、物資の運搬などに用いられる。

◀正面
◀背面
▶左側面

大型空戦ブースター

グラージには、専用のオプションパーツとして大型空戦ブースターが用意されていた。装着時には空戦ポッドに迫る大気圏内機動性を発揮し、VFを翻弄することができたという。

空戦ブースターを装備し、急襲を仕掛けるグラージ。

◀▶ブースターは4基のスラスターとスタビライザー、ミサイルランチャーを備える。

▲脚部をブースター内に収納する形で装着。本状態でも荷電粒子ビーム砲と腕部の可動域は確保される。

▼ランチャーカタパルト
発艦時にはランチャーカタパルトを用いる。下図はカタパルト接続状態で、各部の可動構造も示されている。

▼コクピット(コンソール)
コンソール正面に各種スクリーンや潜望鏡が位置している。

▼コクピット(シート／サイド)
コクピット内部の構造。操縦レバーは複数の操縦ワイヤーに繋がっており、レバーの動きに連動してワイヤーが前後に動く。

民間航空機

民間で利用された2000年代初頭の航空機

FAN LINER

ファン・ライナー
コミュニケーター／娯楽用の複座式小型スポーツ機。性能よりも外観を重視した設計で、デザインは有名デザイナーの手によるものだ。

主要パイロット
一条輝

機体解説

西暦2000年代初頭の民間航空機は、軍事技術の飛躍的な発展をもたらしたオーバーテクノロジーの影響をほとんど受けておらず、旧来のものから大きな進歩を遂げているわけではなかった。娯楽用小型機として開発されたファン・ライナーをはじめとする第一次星間大戦前後に見られた民間航空機群も、既存技術の範疇を越えないという点においては共通している。これらは、オーバーテクノロジーほどの最先端技術が当時の民間機において必要とされていなかったことの証明だと言えるだろう。

ミス・マクロスコンテストの優勝賞品として紹介されるファン・ライナー。当時のマクロスにおいては豪華な代物だった。

軽快な運動性を有するファン・ライナーは、スポーツ機としての「飛ぶ楽しさ」を追求した航空機だったと言える。

データ

所属 ▶ 民間機
全長 ▶ 調査中
全備重量 ▶ 調査中
エンジン ▶ VA-18ハイドロタービンエンジン
馬力 ▶ 500～600馬力
最大速度 ▶ 400～450km/h

開発系譜図

▶ ファン・ライナー

サイズ比較

VF-1J
ファン・ライナー

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶民間航空機

運用記録

ファン・ライナーは、2009年10月にSDF-1 マクロスで開催されたミス・マクロスコンテストで優勝賞品として用意された。機体はミス・マクロスの座を射止めたリン・ミンメイに贈られたのち、統合軍のパイロット、一条輝のプライベート機となった。

発進準備を行うファン・ライナー。スタッフと共に機体の傍らに立つのは、ミンメイの帰郷にパイロットとして同行した輝。

SDF-1 マクロスの地球帰還を祝うお祭り騒ぎの中、艦を飛び立ち横浜に向かった。この時には単独でSDF-1と横浜を往復している。

輝はミンメイに呼び出され、マクロス・シティとハイランダー・シティを行き来する■にファン・ライナーを用いている。

▶コクピット

◀▼コクピットは前席が操縦席の複座式で、キャノピーは大きく視認性が高い。左図は操縦席。

ファン・ライナー

ファン・ライナーはファン・レーサーと同系の機体で、フォルムやダクトファンに共通点が見られる。出力は500〜600馬力で、最大重量時でも時速500km前後の巡航速度を誇る。

◀機体中央にダクトファンを配した特徴的な構造で、空気抵抗の少ない流麗なフォルムだ。

▲ランディングギアを展開した状態の側面。コクピットブロックが機体前部の大半を占めている。

▼円錐状の後方部はエンジンポッドで、VA-18 ハイドロタービンエンジンが収められている。

◀機首と主翼の下面にランディングギアのハッチを備える。主翼には後退翼を採用する。

▼操縦席のコンソール側。計器板のほか、操縦桿やスロットルレバー、フットペダルが確認できる。

◀コンソール

フォッカー DVIIレプリカ ターボプロップバージョン

アクロバット・チームに所属していた頃の一条輝やロイ・フォッカーが愛機としたレーサー仕様の複葉機。第一次世界大戦時の傑作戦闘機フォッカーDVIIのレプリカである。機体色はフォッカーが黄系、輝が赤系だったようだ。

◀主翼のリブ(小骨)構造

◀20世紀初頭の複葉戦闘機を忠実にコピーした機体で、主機はターボプロップエンジンを搭載している。

▶機体側面と上部主翼、垂直尾■には矢じりのようなマーキングが描かれている。

ハワード LH-2000

シングルローター方式の小型ジェットヘリで、乗員は4名。SDF-1の進宙式典では、無数のLH-2000が式典を取材するために南アタリア島上空を飛行していた。

◀ローターブレードはメイン、テール共に4枚。また、メインローターブレードは機体サイズに比較して長めである。

◀機体前部がコクピットブロック、後部がエンジンブロックで、上部にエアインテークを配する。

VF-1S

指揮官仕様のハイスペックモデル

機体解説

VF-1 バルキリーの量産体制の一翼を担ったゾースローム社は、VF-1Aのライセンス生産を行う一方で、火力向上型の試作を進めた。のちにVF-1Sとして制式採用されたこのバリエーション機は、アビオニクスを強化した生産ブロック12以降のA型に新設計のヘッドユニットを装備し、さらにはエンジンをFF-2001Dに換装することで性能強化を図っている。また、優れた通信機能を有していたことから、本機は指揮官機として運用されることとなった。特に、エースパイロットとして名高いロイ・フォッカー少佐が搭乗した機体（通称「ロイ・フォッカー・スペシャル」）は、本機の代名詞とも言える活躍を記録している。

データ

所属▶地球統合軍
全長▶14.23m
全高▶3.84m
全幅▶14.78m（最小後退角度時）／8.25m（最大後退角度時）
空虚重量▶13.25t
エンジン▶新中州重工／P&W／ロイス FF-2001D熱核タービンエンジン×2
推力▶11,500kg×2
最大速度▶M2.81（高度10,000m時）／M3.87（高度30,000m以上時）
標準武装▶マウラー レーザー機銃ROV-20×4／ハワード GU11 55mm3連装ガンポッド×1

サイズ比較

VF-1J
VF-1S

開発系譜図

VF-1S

主要パイロット

ロイ・フォッカー
一条輝

Illustration by Hidetaka Tenjin

▶VF-1S バルキリー

運用記録

VF-1Sのヘッドユニットは各種試験で優れた結果を残したものの、高コストのために生産機すべてへの装備は困難だった。さらには主機の換装という問題もあり、S型の生産は少数に限られることになる。ユニットの生産はシステムの共通化を考慮してJ型のヘッドユニットを製造する九星重工が担当し、完成したS型は中・大隊のCAG機(指揮官機)として配備が進められた。SDF-1 マクロスにおける運用では、スカル小隊及び大隊を率いたロイ・フォッカー少佐機の活躍がもっともよく知られている。フォッカー機は進宙式におけるゼントラーディ軍との遭遇から、つねに前線に在り続け、多くの撃墜スコアを記録している。しかし、地球帰還後の戦闘中に被弾し、帰艦には成功したもののフォッカーは戦死。同機は部下の一条輝に受け継がれた。

進宙式でのスクランブル発進が初陣であり、セピア、モントなどの各小隊を率いて、フォッカー自身も10機以上を撃墜している。

ミリア・ファリーナ率いるクァドラン・ロー部隊との戦闘において、被弾しながらも敵を撃退するが、フォッカーは帰らぬ人となった。

標準装備

マウラー レーザー機銃ROV-20

VF-1Sは火力向上を目的に、ヘッドユニットのレーザー機銃(マウラー社製 ROV-20)を2連装2基の計4門に増設している。ターレットの構造はJ型とほぼ同じで、広い射界を確保している。

ハワード GU11 55mm3連装ガンポッド

他のVF-1系列機と同じく、ハワード社製のGU-11 55mm3連装ガンポッドを主武装としている。この武装は銃身先端上部に赤外線センサーと、尾部にファイター形態装着時の整流板を備える。

ファイター形態時の固定武装からバトロイドでの臨機応変な射撃まで、幅広い運用が可能。ただし、S型だけの差別化は図られていない。

コクピット

コクピットのレイアウトは他のVF-1系列機と共通だが、通信・指揮機能はシリーズ中でもっとも優れている。また、S型を含めたVF-1シリーズは機首がブロックごと排出される脱出システムを備えるが、フォッカーが戦死したケースでは、被弾の際に破片がコクピット内に入り込んだため、システムが有効に働かなかったと見られている。

メインパネルの左右に交信相手の映像が表示される。左端には変形用レバーがあり、初期型のスティックが採用されていたことがわかる。

アクセス・ハッチ

機首側面には点検用アクセス・ハッチが設けられている(VF-1シリーズ共通)。これは通常の定期メンテナンスに用いられるもので、パイロットが自分の搭乗機を整備する場合もあった。また、アクセス・ハッチ後方(統合軍マークの斜め下)には、パイロット搭乗用の引き込み式ステップが内蔵されている。通常はハシゴをかけてパイロットの乗降や整備が行われるが、緊急発進の際などに用いられた。

ファイターモード

VF-1Sでは反応エンジンが推力向上型のFF-2001Dに換装されており、系列機よりも優れた機動性能を有している。それがもっとも発揮されるのがファイター形態であり、フォッカーの卓越した操縦技術はその性能を十分に引き出していた。一方で、主機の換装はコスト増大の一因にもなり、それ故に本機は一握りのパイロットにのみ与えられた機体となっていたのである。

アクロバットパイロット上がりのフォッカーは乱暴にも見える豪快な操縦を得意とし、本機もその扱いに応える性能を示した。

▲S型のファイター形態ではレーザー機銃の回転ターレットが露出する。同様のターレット構造を有するJ型は回転部が半分ほど隠れるが、本機は機銃が2連装で完全に機外に出す必要があったためである。

◀白地に黄色と黒をあしらったカラーリングがフォッカー機の特徴で、尾翼には彼とスカル大隊のトレードマークである"ジョリー・ロジャー"がマーキングされている。

ガウォークモード

VF-1Sのガウォーク形態は、主機の換装による出力向上以外に他のVF-1系列機との機動性に違いはなく(それ自体は重要な相違点と言えるが)、ホバリングによる柔軟な機動性能を生かして主に地上戦で運用された点も変わらない。ただし、フォッカーはVF-1の前身であるVF-0 フェニックスのテストパイロットを務めた経緯もあって、他に先がけてVFに適応していた。そのため、VF-1の変形構造の特性を熟知しており、中間形態であるガウォークの扱いにも長け、他のパイロットに比べても効果的に運用していた。

◀ヘッドユニットの仕様を除き、S型のガウォーク形態に他機種との外観の違いはない。ちなみに機首部に記された001の数字は、スカル小隊の指揮官機を意味するフォッカー機の識別番号である。

進宙式の戦闘で墜落した一条輝のVF-1Dの救助に向かったフォッカー機は、ガウォークで市街地に降りた。また、同形態で市街戦も行っている。

着艦時や狭い場所に侵入する際に、脚部のみを展開するといった用例も、ガウォークの一般的な運用法に含まれる(厳密には本来のガウォーク形態ではない)。

バトロイドモード

VF-1Sに装備された新設計のヘッドユニットは、レーザー機銃が増設されているだけでなく、複合センサーも強化型のものに変更されている。このヘッドユニットはS型の要とも言える部位で、バトロイド形態の外観を印象付ける部分にもなっている。また、フォッカーはVF-1のバトロイド形態が巨大な異星人と戦うためのものであることを早い段階から十分に理解しており、同形態の格闘戦でも抜きん出た才能を発揮して戦果を積み上げていった。

フォッカー機には、バトロイド形態時にコクピットを保護するシャッターに尾翼と同じマーキングが施されている。これは他のエースパイロット専用機には見られない意匠だった。

フォッカー機は腕部に内蔵された作業用マニピュレーターによるVF-1Dの修理や、同機の機首ブロックを腕部にマウントするなど、バトロイドの機能を有効に活用していた。

一条輝が統合軍に入隊したのちは、彼をスカル大隊に加えてVFの戦いを叩き込んでいった。公私に渡る両者の関係は、フォッカーの死後、輝が彼のVF-1Sを受け継ぐ一因にもなった。

Illustration by Hidetaka Tenjin

機体解説

ヌージャデル・シリーズと呼ばれるゼントラーディ軍の普及型戦闘倍力服(パワードスーツ)の中で、現在確認されている最新のタイプが、このヌージャデル・ガーである。兵員に最大限の火力を与えるという用兵思想を基本コンセプトに、空間機動性と生存性が追求された本機は、戦闘ポッドとは比較にならないほどの優れた戦闘力と運動性を持つ機体として完成した。また、耐弾性を重視したシステムは故障率も低く、兵器として高い完成度を誇る。第一次星間大戦における運用例は主力戦闘ポッドのリガードほど多くないが、ゼントラーディ軍機動兵器群の一角を担う戦力として長く運用され、優れた性能を示している。

機体の性能に加え、高い運用性を有しており、戦闘ポッドと同様、ゼントラーディの戦力の中核を担った。

主要パイロット

カムジン・クラヴシェラ

データ

所属▶ゼントラーディ軍
全高▶16.40m
全備重量▶34.7t
発動機▶フレメンミック熱核コンバータ(出力2.4GGV)
標準武装▶調中口径速射インパクト・キャノン×1/短射程荷電粒子ビーム突撃銃×1/小型レーザー・マシン・ピストル×1/手榴弾各種、大口径中射程流体プラズマ・キャノン×1/■数種

サイズ比較

VF-1J
ヌージャデル・ガー

開発系譜図

▶ ヌージャデル・ガー

機動性と防弾性を重視した ゼントラーディ軍 パワードスーツ

ヌージャデル・ガー

運用記録

ヌージャデル・シリーズは銀河帝国分裂戦争初期に登場し、その中でも最後発の機種であるガー型は約50万周期に亘って、現在知られる仕様で運用され続けてきた。本機の開発と製造は、フレメンミック第772124921ゼントラーディ全自動兵器廠で行われ、ゼントラーディ軍各艦隊に配備が進められたと考えられる。第一次星間大戦で地球人[illegible]と接触したボドル基幹艦隊でも、本機の運用が確認されている。また、戦後に反乱を起こしたカムジン・クラヴシェラの一派も本機を運用していた。

ボドル基幹艦隊の地球総攻撃の際に確認されたヌージャデル・ガー。機体色はパープルとグレーで、かなりの数が投入されていたと見られる。

カムジンらはトラッド・シティのマイクローン装置の強奪を図った際などに本機を運用した。こちらはグリーンを基調としたカラーリングだった。

ゼントラーディとの比較

一般的なゼントラーディ兵士との対比図。パワードスーツに区分されているため、ゼントラーディ兵と比べてもそれほど大型ではない。

機体構造

防弾性と運動性を確保すると同時に兵員に大火力の火器を持たせるという設計思想は、結果として本機に宇宙服に近い形態を採らせることとなった。そのため、本機はゼントラーディ軍機動兵器の中でも特に人型に近い機体構造を有し、優れた白兵戦能力を発揮した。

防弾性とパイロットの生還率を重視した設計から、頑強な機体構造を特徴とする。また、VFを持ち上げるほどのパワーも有していた。

▶頭部と腰部を有した胴体と四肢を備え、同じ倍力服のクァドラン・ローに比べ、より人型に近い構造となっている。

◀空中での機動性だけでなく、地上でも高い運動性を誇った。

▲大型のバックパックやふくらはぎの部分に補助ブースターを備える点は、戦闘ポッドの設計に通じている。

▶足裏は中央とつま先、かかとの3ブロック構造である。

三面図

▼正面　▼側面　▼背面

左はヌージャデル・ガーの三面図で、側面図は腕部を省略している。頭部は左右に回転する構造で、中央のガラス部分がカメラアイになっている。また、大口径中射程流体プラズマ・キャノンは右肩後方に可動基部が位置しており、通常は図のような形で収納されている。

コクピット

ヌージャデル・ガーは肩部から先のマニピュレーターが交換式となっており、パイロットは両腕を前に突き出した姿勢で操縦を行った。そのため、本機は操縦する上である程度の習熟を必要とする扱いづらい兵器だった。それでも、窮屈な姿勢での操縦を強いられるリガードに比べれば、疲労度は低かった。それ故、リガード部隊の兵士からは羨望の眼差しを向けられることも多かったと言われる。

▼コクピットハッチの開閉構造。胸部上面装甲がコクピットハッチを兼ねており、展開する際には[illegible]体前縁のヒンジによって、装甲パネルが頭部ごと前側に開いてコクピットが露出する。

カムジンが搭乗したヌージャデル・ガーのコクピット内部。操縦性は戦闘ポッドよりも格段に上だった。

頭部は左右に旋回可能となっており、中央部はカメラアイとなっている。

▶コンソール周辺を後方から見た図。基本的には正面の操縦桿2本で制御を行う。頭部の内側には半球状のスクリーンが設置されている。また、コンソール側面は小型のハッチとなっており、外側に向けて展開し、[illegible]を出すことができる。

標準武装

火力の増強をコンセプトのひとつに置いたヌージャデル・ガーは、機体各所に搭載した武装を運用することで、それを達成しようとしていた。固定武装として、胸部に中口径速射インパクト・キャノンと背部に大口径中射程流体プラズマ・キャノンを1基ずつ装備する。なお後者は交換式で、ほかにも数種の武装に換装することが可能だったとされる。一方、携行兵装は主に小型レーザー・マシン・ピストルが運用された。短射程荷電粒子ビーム突撃銃や各種手榴弾も用意されていたとされるが、第一次星間大戦における運用例は確認されていない。これらの豊富な武装によって、本機は戦闘ポッドとは一線を画す戦闘力を獲得していたのである。

多彩な武装を運用可能なヌージャデル・ガーは、ゼントラーディ軍機動兵器の中でも高水準の火力を誇る機体であったと言える。

肘打ちでスパルタンを破壊するヌージャデル・ガー。人型であることを活かし、格闘戦用デストロイドにも劣らぬ高い白兵戦能力を発揮した。

パイロットの技量が顕著に表れる機体であり、トラッド・シティの戦闘では後ろ回し蹴りでバトロイドを破壊する機体もあった。

大口径中射程流体プラズマ・キャノン

背部に設置された可動式のプラズマ・キャノン。基部は右肩後方とバックパックの間に位置し、左肩の後ろに収納時の[illegible]定用フックを備えている。[illegible]砲身の武装で、砲身尾部が排気口となっている。他武装に換装する際には、基部から分解すると考えられる。

中距離戦用武装だが、近接[illegible]で用いられることもあった。

プラズマ・キャノンの[illegible]。収納状態から垂直に立ち上げ、砲口を前方に向ける。

中口径速射インパクト・キャノン

胸部ユニット前面に速射インパクト・キャノンを装備する。クァドラン・ローに装備された同系武装に比べるとやや大型である。

インパクト・キャノンと他武装を併用して弾幕を展開することもあった。

マガジンケース

腰部右にはマガジンケースを備える。レーザー・マシン・ピストルの予備弾倉や手榴弾を収納するためのものと推察される。

上面がカバーになった単純な構造で、サイドアーマーの代わりに装着される。

小型レーザー・マシン・ピストル

小型で取り回しが良く、接近戦から中距離帯の射撃戦まで幅広く運用された。デストロイドの装甲を破壊できる威力を備えている。なお、これはパワードスーツ用に開発された武装で、装甲宇宙服で使用することはできないとされる。

連射性能が高く、主武装として運用された。

▲側面から見た図。銃口の後ろの円形のパーツがマガジンと考えられる。

▼後方から見た図。速射性に優れ、幅広い距離帯をカバーできた。

スラスター

ヌージャデル・ガーは設計段階において、宇宙空間での移動能力と戦闘時の機動性が重視された。それを達成するため、バックパックには大型の推進エンジンが3基装備され、高い推力が付与されていた。また、脚部裏にも補助ブースターが3基ずつ設けられており、人型の柔軟な推力偏向機能と合わせて優れた運動能力を発揮した。大気圏内での飛行も可能であるが、空間機動性の点ではクァドラン・ローには及ばなかったようだ。

統合軍と空中戦を展開するカムジン一派のヌージャデル・ガー部隊。大気圏内飛行が可能なことから、高い運[illegible]性を誇っていた。

▶バックパックには武装などは内蔵されていない。複数のスラスターを搭載した大型推進機であった。

サイドノズル

バックパックの左右には、球形のサブスラスターを備える。下方に向けられたサイドノズルの構造はメインノズルとは異なり、一般的な円筒状となっている。

メインノズル

バックパックの中央下部に位置するメインノズル。複数の小さな噴射口を配した独特の構造を有する。大気圏内外両用の推進器で、戦闘ポッドを上回る推力を発揮する。

▲上は全力噴射を行うヌージャデル・ガー。機動性ではクァドラン・ローに及ばないが、推力は劣らなかった。

民間車両

西暦2000年代初頭に運用された 民間企業製の車両群

リン・カイフンが所有していた大型のスポーツカー。ASS-1が落下する前に生産されていた、超高級車である。

▼新中州重工 レッド・インペリアル99

▼GN キャディラーダ 2007

地球統合軍がVIPの輸送に使用していたリムジンタイプ。頑丈なボディを持つほか、内部の居住性も高く保たれている。

機体解説

SDF-1マクロスが進宙し、オーバーテクノロジーが導入され始めた西暦2000年代初頭になっても、自動車は近距離移動手段の主流であった。新中州重工やGNを最大手に、ノースロムやロイス、新星インダストリーなど、可変戦闘機の製造にも関わる名だたる企業が自動車部門を所有し、新型車を開発。リニア・モーター列車が普及した第一次星間大戦後も、様々な車両群が人類の足として活躍している。

南アタリア島の街ごと取り込んだSDF-1マクロスの内部でも、これら民間車両群が移動手段として活躍している。

CIVIL VEHICLES

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶民間車両

運用記録

ASS-1が落下する以前は、各自動車メーカーが競って新型車を開発するような時代であった。ミニカータイプや乗用車タイプは一般市民にも普及しており、マクロス進宙以後の混乱期においても、生活必需品として機能していたようだ。

地球上を走行する多数の自動車。無駄をそぎ落としたシンプルなタイプが主流であったが、スポーツカータイプも見られた。

新中州重工 レッド・インペリアル99

新中州重工の自動車部門が製造した高級スポーツカー。人類が大きな混乱に巻き込まれるASS-1落下以前に製造されたタイプ(1998～1999年型と見られる)で、前方に4輪、後方に2輪を備えている。車内の居住性にも優れる。

◀▲車高が低く、鋭角なフロントグリルが特徴である。機体上部中央には、ペリスコープ(潜望鏡)が備えられている。

操縦機構は、左ハンドルのマニュアルタイプ。内部は広く採られており、リアシートには3名が乗車できる。

GN キャディラーダ 2007

GN社が開発し、地球統合軍に納入された幹部輸送用の大型車で、8輪駆動式。統合軍所属であることを示すため、フロント・リアのナンバープレートと右ポールには准将のマークが、左ポールには統合軍のマークが付けられている。

ブルーノ・J・グローバル准将らを、マクロスの進宙式典会場まで送迎した。

乗用車

スポーツタイプの乗用車で、成人が2～5人搭乗できるスペースを持つ。細部のデザインやドアのオープン機構は車種によって異なっているが、フロントが鋭角となった流線型のボディと、6輪駆動式が当時の主流となっていた。

マクロス艦内を走行中にトランスフォーメーションに巻き込まれた乗用車。

▲▶ガルウイングタイプ1

▼▶ガルウイングタイプ2

▲▶4ドアタイプ

▶2ドアタイプ

ミニカー

乗用車と同様に普及していた、小型自動車。出力は乗用車に比べて抑え目と見られるが、シンプルかつ小回りの効く構造のため、街中での使用などに適している。セダン、ワゴン、単座、カーゴタイプなどが確認されている。

マクロスのトランスフォーメーションで宇宙外に吹き飛ばされたミニカー。

◀▼セダンタイプ

▼カーゴタイプ

◀▲ワゴンタイプ

▼▶単座タイプ

艦内民間企業タクシー

SDF-1 マクロス艦内で営業していた民間企業所有のタクシー。6輪式で、助手席と後部座席に合わせて3～4人の乗客を乗せることができる。民間人の輸送のみならず、突発的な呼び出しが日常茶飯事であった地球統合軍兵士たちが、それぞれの持ち場に移動するための手段として重用している。

▼タクシーの外観。6輪式となっている。車内は広く、居住性も高い。

一条輝は柿崎速雄、マクシミリアン·ジーナスらと中華料理店「娘々」で食事中、スクランブルが流れたためすぐさまタクシーを拾い、軍施設へ戻った。

▶リアには「MT-122」と書かれたナンバープレートが付けられている。

▼室内

▲タクシーの車内レイアウト。助手席と運転席のシートが連結しているタイプであった。

▼4ドアのセダンタイプで、ドアの上部はサッシレス仕様となっている。

一条輝ら統合軍兵が大挙して乗り込み、積載オーバーとなっていた。

民間用大型トラック

漁業関係の企業が運用していたと見られる大型トラック。南アタリア島近辺で運用されており、輝が乗ったVF-1Dが「娘々」に突っ込んだため、トラックに備えたワイヤーロープでVF-1Dを牽引した。

トラックの通り道を塞いだVF-1Dが行動不能となっていたため、2台のトラックでVF-1Dを動かし、道を空けた。

中華料理店「娘々」に突っ込んだVF-1Dを引っ張ったが、その力が強すぎたため、逆方向に機体が倒れてしまった。

◀6輪の大型車で、前方にある操縦席と助手席以外は荷台スペースとなっている。サイドにカジキマグロが描かれていることから、魚類の運搬に特化したトラックと見られる。

▶荷台スペースには、鮮魚を輸送するための水槽が設置されていたと見られる。後部下にワイヤーロープの取り付け口がある。

▼ワイヤーロープ

MBS TV中継車

SDF-1 マクロス艦内で開局、運営されていたTV局「MBS（マクロスブロードキャストシステム）」が所有するTV中継車。生放送や取材の際などに使用した車両で、後部には撮影用の機材が積み込める構造となっていた。

MBSは映画の撮影中に倒れたリン·ミンメイの病状を聞くため、リン·カイフンにインタビューを敢行。その様子を中継車を通じて放送した。

◀6輪車で、車体の右側面には「MBS」のロゴマークがあしらわれている。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶民間車両

クリーニング屋所有パネルバン

第一次星間大戦終結後、マイクローン化したゼントラーディ人のワレラ、ロリー、コンダの3人が働いていたクリーニング屋のパネルバン。荷台部分は、洗濯物を積み込むスペースとして活用されている。

大戦終結後、ワレラ、ロリー、コンダの3人は生活のためクリーニング屋に勤めた。

3人はバンを使って洗濯物を回収、クリーニング工場に持ち込んでいた。

◀6輪式の中型バンで、左側面には「CLEA_1 CLEANING」という屋号が入れられていた。

◀カゴ

▶後部ドアは観音式で、2～3人で洗濯物の積み込み、搬出を行う。

大型トレーラー

統合軍が運用していたと見られる大型トレーラー。運転席以外は積載スペースとなっており、クレーン車やデストロイドなどの運搬を行うことができた。

破壊されたデストロイドをフラットな荷台に固定し、運搬するトレーラー。大型兵器の運搬には欠かせない車両であった。

▲片側に16本、計32本のタイヤで重量を支え、移動する。低速運転が基本で、あまりスピードは出せない。

▼警告灯を車体の前後に備えるほか、運転席の左右に、安全確認のための人員が配置された。

トラック／フォークリフト／ゴミ拾いロボット

SDF-1 マクロスでは、戦闘やトランスフォーメーションによって被害を受けた街の修復のため、フォークリフトやトラックが大量に投入されていた。

▶フォークリフト

▼トラック

▶ゴミ拾いロボット

ゴミ拾いロボットは全自動式で、搭載されたAIが街に落ちているゴミを認識、設置されたマニピュレーターで回収する仕組みとなっていた。

関連事項

EXTRA REPORT

地球やマクロス艦内の自走式マシン

自走式コーラ販売機

全自動式のコーラ販売機。人間を認識すると4基のタイヤを使って自走し、ドリンクを薦める機能を持つ。

自走式写真現像機

自動撮影・現像機で、撮影した写真はその場で現像される。支払い方式は現金とクレジットカードの2種類。

自走式公衆TV電話

受話器を備えた自走式TV電話。他の自走式メカと同様、呼びかけるとその声に反応して移動する機能を持つ。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-1A

パーソナルカラー仕様のマックス専用機

マックスが配属されたスカル大隊バーミリオン小隊は、一条輝少尉のVF-1Jに柿崎速雄伍長のVF-1Aと、所属する機体がすべてパーソナルカラー機という珍しい小隊だった。

主要パイロット

マクシミリアン・ジーナス

機体解説

VF-1 バルキリーの量産計画は、SDF-1 マクロスの進宙に間に合わせるべく厳しいスケジュールの下で進められたために、品質管理が万全ではなかった。そのため、初期生産型は機体ごとにクオリティの差があり、標準的な量産タイプであるVF-1A（A型）でさえ、実のところは問題を抱えつつも実働に支障がない程度の機体だったと噂されている。しかし、このような風評を払拭する活躍をした機体も一部には存在する。マクシミリアン・ジーナス（マックス）伍長（当時）が搭乗したA型はその代表例であろう。本機は青と白のカラーリングパターンこそ一般機とは異なるが、その他の仕様は通常のA型と変わらず性能に差はなかった。しかし、マックスの傑出した才能により抜きん出た戦果を挙げ、若き天才の出現を広く知らしめたのである。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶14.23m
全高▶3.84m
全幅▶14.78m（最小後退角度時）／8.25m（最大後退角度時）
空虚重量▶13.25t
エンジン▶新中州重工／P&W／ロイス FF-2001熱核タービンエンジン×2
推力▶11,500kg×2
最大速度▶M2.81（高度10.000m時）／M3.87（高度30.000m以上時）
標準武装▶マウラー レーザー機銃ROV-20×1、ハワード GU11 55mm3連装ガンポッド×1

開発系譜図

VF-X ▶ VF-1 ▶ VF-4

サイズ比較

VF-1J
VF-1A

Mechanic Sheet
メカニックシート
VF-1A バルキリー

運用記録

このVF-1Aは、火星サラ基地の攻防戦後に新設されたバーミリオン小隊に配属となったマックス伍長に与えられ（コールサインは「バーミリオン3」）、初陣で7機を撃墜している。以降も小隊の一角を担い、早瀬未沙中尉と同小隊がゼントラーディ軍の捕虜となった際には、単機で脱出の糸口を作った。また、ミリア・ファリーナのクァドラン・ローを一騎討ちで圧倒するなど、彼が小隊長に昇進してVF-1Jに乗り換えるまでに多くの戦果を残している。

初陣となったカムジン艦隊との交戦では、最終防衛線の第2ブロックを守って戦った。独特の戦闘スタイルで、先任の一条輝を凌ぐ撃墜スコアを記録している。

ゼントラーディ軍に捕らわれた早瀬中尉を追い、小隊の僚機とともにブリタイ艦に潜入。生身のブリタイ・クリダニクに格闘戦を挑み、艦外に放り出した。

ゼントラーディのエース、ミリア・ファリーナに付け狙われながらもこれを返り討ちにし、SDF-1の艦内居住区に逃げ込んだ彼女のクァドラン・ローを艦外に追い出す活躍を見せた。

標準装備

レーザー機銃

単装レーザー砲（マウラー社製 ROV-20）を装備する点が、A型のヘッドユニットの特徴である。通常戦闘のほか、ブリタイ艦からの脱出を図るためにエアロックを破ろうとした際にも用いられた。

ガンポッド

VF-1系列機に共通する主武装として、ハワード社製GU-11 55mm3連装ガンポッドを装備している。この武装は両腕で保持して射撃を行うことがほとんどだが、マックス機は片手で扱うケースも多かった。

ブリタイ艦内で、柿崎機とともにガンポッドで威嚇射撃を行うマックス機。しかし、この際には長時間に及んだ戦闘行動のせいで、弾切れを起こしている。

コクピット

VF-1Aは生産が進められると同時に改良が加えられ、コクピット構造もブロック5以前とブロック6以降で大きく異なる。操縦系の主な改修点は変形レバーとコントロール・スティックの一体化で、マックス機は変形レバーが旧式だったことから、ブロック5以前の初期型と推察される。変形操作時に隙が生じるこのコクピット構造でも変形を自在に使いこなしたマックスの技量の高さがうかがえる。

▲キャノピー

コクピット正面コンソール上部にはHUDと後方投影用ミラースクリーンを備える。メインパネルが3面に分けられている点が初期型の特徴である。

◀バトロイド時

ファイターモード

VF-1Aはレーザー機銃が単装でS型とJ型に比べて火力でやや劣り、主機を推力向上型に換装したS型には速力の点でも一歩引けを取っている。それはファイター形態でも当てはまるが、マックス機は性能差を物ともせずに高速でのドッグファイトを展開した。逆に、その差は乗り手次第で簡単に覆るレベルでしかなかったとも言えるだろう。

無駄弾を撃つなという輝の指示に、マックスはレーザー機銃だけでリガードを撃墜して見せた。彼の優れた空戦技術を示すエピソードである。

◀青いパーソナルカラーは頭部と腕部、脚部に配されているためファイター形態では隠れがちであった。

ガウォークモード

マックスはガウォーク形態を巧みに使いこなし、ホバリングによる高速移動にとどまらない本形態の運用法を示した。ファイターからの変形による急制動や、無重力帯での変則機動など、マックス機が見せた機動は実に多彩であった。

ガウォークに変形して軌道を急激に変えることで、ミリアのクァドラン・ローからのミサイル攻撃を回避する芸当を見せた。

展開した脚部はマックスにとって可動スラスターに近いものであり、これを活用して誰にも真似できない変則機動を見せた。

ブリタイ艦内では、ガウォークで狭い格納庫を飛び回り、敵の追撃を逃れた。高度な機動だったことは言うまでもない。

僚機に続いてブリタイ艦の表層をガウォークで移動し、艦内への突入を図った。突入後はバトロイドに変形している。

バトロイドモード

マックスの常人離れした戦闘センスがもっとも発揮されたのが、このバトロイド形態であろう。初陣で複数のリガードに包囲された彼は、ファイターによる突破ではなくバトロイドでの近接戦闘を選び（彼曰く「振り回しやすいから」）、敵を軽々と殲滅している。また、その際に披露したのが「囮撃ち」と自ら命名した戦法で、初撃を見せ弾にして回避した敵を狙い撃つというものであった。輝のような一般的なパイロット（彼も優れた人材ではあったが）からすれば、その戦法は奇異に思えるほどだったのである。

ブリタイ艦で敵の捕縛を逃れたマックス機は、輝たちを救出するためにバトロイド形態で艦内に潜入。その際には周囲が暗かったため、肩部のライトを点灯した。

頭部ユニット

◀ヘッドユニットと腕部、脚部のカラーパターンが特徴的なVF-1Aマックス機のバトロイド形態。マックスは人型という本形態の利点を効果的に使いこなした。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-1A バルキリー

構造

VF-1は、バトロイド形態もさることながら、戦闘機としても優れた性能を持つ。最大の特徴は、状況に応じて自在に制御できる可変後退翼の採用である。亜音速での機動性向上、着艦時における減速補助などの利点があり、熱核タービンエンジンの搭載で得られた出力を巧みにコントロールできた。また、本機は飛行時の安定性を担保する水平尾翼を持たないかわりに、後方に2基備えた可動式ノズルとスラスター・ロール制御システムが、その役割を担っている。

大気圏内での高速飛行時においては、主翼を機体側に折り畳み、抵抗を減らす。機体の最大速度が得られるのは、後退角75度の時であった。

着艦時においては、後退角を20度に固定することで最大減速が可能であった。これによりスムーズな着艦を実現できる。

敵拠点への爆撃を行う際や、緊急性を伴わない移動時においては、安定性が最も高まる位置として、42度に翼を固定する。

四面図

▼サイドから見たVF-1A。機体フォルムはフラットな形状となっている。底部にはガンポッドを設置できる構造であった。

◀真正面から機体を見ると、機首の左右側にエアインテークが確認できる。

▶後方からの図。バトロイド形態時の腕部を挟み込むようにしてノズルが設置された。

▶可変後退翼の可動シークエンスを示した図（上半分が上部から、下半分が底部から見た図）。可動機構の採用により、低速時・高速時双方の安定性を獲得した。

着陸時

戦闘機の運用には、母艦からの発着やメンテナンス、パイロットの乗降などに応じた周辺パーツの存在が不可欠である。VF-1の各タイプには、着艦時の減速用エアブレーキを始め、発着用のランディングギアを3基持つほか、パイロット乗降用の引き込み式ステップが備えられている。ガウォークやバトロイドへの変形という複雑な機構を内包しつつ、これら既存の戦闘機と共通するパーツを採用したことで、スムーズな運用が可能となった。

SDF-1 マクロスに装着されたプロメテウスが、VF-1Aなど艦載機の母艦となった（写真は、VF-1Aマックス機）。

垂直尾翼の内部構造図。故障時やメンテナンスの際は尾翼を分離し、内部を調整することもあったと見られる。

▼母艦着陸時のVF-1A。ランディングギアはパイロットの任意で開閉できる。左図はキャノピーを開いた状態。

▶母艦に着艦する際は、キャノピー後方のエアブレーキを開いて減速する。

▶エアブレーキに加え主翼の後縁フラップを下方に展開し、減速の効果を得た。

▶着艦時のVF-1Aを後方から見た図。フラップとエアブレーキ双方を展開している。

▲乗降用ステップ
コクピットの真下に設置されたパイロット用の引き込み式ステップで、使用時に機体内から露出する構造となっていた。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-1A バルキリー

追加武装

ファイター形態におけるVF-1は、主翼下のパイロン部分に、ミサイルなどの追加兵装を設置することが可能となっていた。3連装のミサイルランチャー「ARROW」を計12発（最大で20発）、VF専用の対艦反応ミサイル「RMS-1」を6発（最大で8発）装着でき、戦闘力（主に爆撃能力）の大幅な向上に繋がった。

パイロンに設置できるミサイル各種は、戦況に応じて自在に換装できるのが特徴となっていた。

▶3連ミサイルランチャー「AAM-1 ARROW」を設置した状態。ガンポッドを取り外し、その部分にも6発の弾頭を追加することができた。

◀▲VF-1シリーズは可変翼を採用しているが、ミサイルランチャーは常に前方を向くような仕組みとなっていた。

ビフォーズ RMS-1

▲バルキリー用の対艦反応弾で、両翼のパイロンに計6発設置することができた。

▼対地、対艦攻撃のみならず、防空、自機の防衛にも運用できるのが特徴。全ミサイルを同一目標に発射することも可能。

▶ミサイルの設置時にはパイロンにジョイントを取り付ける。

▲ミサイル
発射後、後方部の翼を展開。高速で目標に到達する。

特殊運用

ゼントラーディ軍との戦闘では最前線に赴いたVF-1Aだが、中でもマクシミリアン・ジーナス搭乗機は、一条輝など仲間たちを救出するため、敵の母艦であるノプティ・バガニス5631内に潜入した記録が残されている。その時、VF-1Aは、ゼントラーディ軍兵士から軍服を奪取。機体に被せることでその正体を悟られないように行動した。

ゼントラーディ軍の軍服を纏うVF-1Aマックス機。この後の行動によって一条輝らを救出することに成功している。

▲軍服を纏ったまま走行するガウォーク形態。機体の可動性はかなり制限されたと見られる。

▶バトロイド形態では軍服とブーツを巧みに纏い、足首と手以外、機体が完全に隠れるような状態となっていた。

バトロイド→ガウォークへの変形（軍服着用時）

ホバリング走行での速度を得るため、マックスはバトロイドからガウォークへと変形を決意。変形前にまず帽子を取り外し、軍服のチャックを開放した。軍服をガウォーク形態における運用の妨げにならないようにしている。

▲マックスの咄嗟の判断によって軍服を着用。輝と早瀬未沙は、軍服のポケットの中に保護されていた。

VF-1A バルキリー

柿崎機

機体解説

バーミリオン小隊への配属に際して、柿崎速雄伍長(当時)が受領したのが、このVF-1A(A型)である。本機は一般的な量産機とカラーリングが異なるが、機体の仕様は通常のA型と同じである。なお、成績評定がAだったとはいえ、シミュレーション378時間、飛行時間66時間の新兵にパーソナルカラーの機体が与えられた経緯は定かでない。

バーミリオン小隊に配備された当初の柿崎機は、マクシミリアン・ジーナス(マックス)のA型同様、ブロック5以前の初期型だった。

運用記録

柿崎機は操縦技術に優れる一条輝やマックスの機体に比べて被弾や損耗が多く、ゼントラーディ軍の捕虜になった際にも、ブリタイ・クリダニクとの白兵戦で大破している。それでも、バーミリオン小隊の一翼を担い(コールサインはバーミリオン2)、多くの戦いを切り抜けた。だが、オンタリオ自治区の戦闘でSDF-1 マクロスの全方位バリアの暴走に巻き込まれ、パイロットと共に消滅した。

血気盛んな柿崎の性格故に、突出して危機に陥るケースも少なくなかった。だが、幾度となく機体を破損しながらも生還し続けた。

▼前脚

▶前脚にはカタパルトを用いるためのパーツを備える。先端のフックでカタパルト・スプレーダと連結する。

◀左はファイター形態のランディングギアで、機首の前脚。サスペンションを内蔵し、上下に伸縮する。

ランディングギアの機能は、プロメテウスの甲板カタパルトでの発艦時に用いられた(写真はJ型)。

主要パイロット
柿崎速雄

◀▼ホワイトとライトブラウンの機体色は一般機と同じだが、胴体と肩部の配色が逆で、胴体がホワイト、肩部がライトブラウンとなっている。

◀▶バトロイドモード

捕らわれた早瀬未沙を追って侵入したブリタイ艦内部で、ブリタイの不意打ちを受けて大破した。

▶ファイターモード

▲柿崎機はマックス機と同様に、ファイターの機体上面がほぼ白一色となる。なお、図はオプション未装備状態。

▶オンタリオ自治区上空における戦闘では、退避時にガウォークへの変形タイミングがわずかに遅れたことが命取りとなった。

▶ガウォークモード

ガウォークは敵艦に近接戦を行うケースなどで運用され、ブリタイ艦への突入時にも用いられた。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-1A バルキリー

一般機

機体解説

A型はVF-Xの増加試作機YVF-1Aをベースにラダー面積を増大させた、VF-1シリーズ最初の本格量産機である。その生産はストンウェル・ベルコム社とライセンス契約を結んだノースロム社が担った。大気圏内での運用を重視したアビオニクスを搭載したブロック4までの初期型と、補助スラスターの追加装備やアビオニクスの改良を施したブロック5以降の機体（Aプラスとも呼ばれる）に大別できる。

第一次星間大戦を通じて統合軍航空戦力の主力として活躍。その一方で損耗も激しく、増産と同時に順次改良が加えられていった。

運用記録

ゼントラーディ軍との初遭遇から一貫して統合軍主力VFとして運用されたA型は、特にSDF-1マクロスの艦載機として多くの戦闘に投入された。しかし、物量に勝るゼントラーディ軍に対しては劣勢に追い込まれるケースも頻繁に見られ、大きな被害を出している。また、第一次星間大戦終結後も治安維持やパトロール任務などに運用され、2015年末の生産終了以降は順次退役が進められた。

南アタリア島の市街地でゼントラーディ軍戦闘ポッドと交戦するA型。

▼頭部

▶ヘッドユニットのレーザー機銃（マウラー社製 ROV-20）が[illegible]装式である点が、A型最大の特徴。

▲レーザー機銃は前後に可動する構造で、バトロイド時は通常、やや後方に向けて固定されることが多い。

◀▶バトロイドモード

◀▶ライトブラウンとホワイトのカラーリングで、胴体がライトブラウンとなっている。スペック上はマックス機、柿崎機との差異はない。

アラスカの統合軍総司令部に配備されていたA型には、グリーンのカラーリングが施されていた。

▶ファイターモード

▲初期型とそれ以降の機体では重視された運用環境が異なったため、宇宙空間での機動性向上を図った後者がのちの主流となった。

▶A型の一般機がガウォークを用いるケースはさほど多くなかった。機能を使いこなせるパイロットが少なかったのもその一因であろう。

▶ガウォークモード

ガウォークで道路上をホバリング移動するA型。入り組んだ市街地ではガウォークが力を発揮した。

エンジェルバーズ仕様

機体解説

エンジェルバーズは2009年時点の統合軍に所属していた曲技飛行隊(アクロバット・チーム)で、5機編成の同部隊は当時の最新鋭機であるVF-1 バルキリーを運用していた。それらはVF-1A(A型)で統一され、カラーリングが異なる以外は一般機と仕様を同じくしている。ただし、曲技飛行が主な任務となるため、基本的にはガンポッドが装備されていなかった。

マクロスの進宙式典で曲技飛行を披露するエンジェルバーズ仕様のA型。機体後方には発煙装置で作った薄紫のスモークを引いているのが見える。

運用記録

エンジェルバーズ仕様機の代表的な運用例として知られるのが、2009年のSDF-1 マクロス進宙式典におけるエアショーの飛行展示である。この展示では、2番機と4番機が高度20mで時速950kmの速度を維持しつつ交差するなどの演目を披露した。なお、直後にゼントラーディ軍との遭遇戦に突入したが、同隊の機体が実戦に参加したかは不明である。

進宙式典のエアショーでは、垂直上昇から編隊をブレイクさせる演目に、当時はまだ民間人だった一条輝のファン・レーサーが乱入するハプニングもあった。

▼エンジェルバーズ仕様のA型の特徴は、白地に赤と青のラインが入った鮮やかなカラーリングにある。曲技飛行を主任務とする機体で、ファイター形態の運動性を駆使して華麗なアクロバットを見せた。なお、進宙式典のエアショーでは「最新鋭戦闘機」とだけ紹介され、ガウォーク、バトロイドを用いた演目は行われなかったようだ。

▶エンジェルバーズ仕様機の機体底面。A型の単装レーザー砲(マウラー社製 ROV-20)が確認できる。

▲▶エンジェルバーズ仕様機は基本的には非武装で、本来はエンジンナセルの間にマウントされるガンポッドも装備していない。展示飛行の際に用いるスモークは、ノズルに挟まれた機体後部中央から発生させるようで、発煙装置を装備していると考えられる。

VF-1 コンソール

VF-1シリーズのコクピット内配置とコンソールは、ブロック5以前とブロック6以降の生産機(仕様変更はブロック5からとする資料もある)で構造が異なっている。但し、型式による違いはなく、コクピット構造はA、J、S、D型の各バリエーションですべて共通のものを採用している。

新旧の仕様に共通する構造として、コンソール正面の多目的ディスプレイ(マルチプル・モニタリング・ディスプレイとも呼ぶ)の存在が挙げられる。

ブロック5以前のコンソールディスプレイ。ディスプレイは3画構造で一括表示も可能。左右にはバトロイド・アームコントローラーが見える。

コクピット(ファイター形態)

前方から見たブロック5までのA型コクピット。コンソール上にHUD、左右にバックミラーを備える。

◀▼シートベルト

▲▶コントロールスティック

図は初期型。上部カバー付を含めた3つのトリガーと、前側にウェポンセレクターレバーを有する。

コクピット(バトロイド形態)

バトロイド形態時のコクピット構造。コクピットブロックが垂直方向になり、内部機器もファイター形態時とは配置が変わる。左図前側に位置するのがメインスクリーンボックスで、アームコントローラーはボックスに付随する形となる。右はシート付近の拡大図で、シートの左右にはサイドスクリーンが位置する。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-1A バルキリー

VF-1 各コントロールレバー

初期のVF-1は、ファイターとバトロイド(及びガウォーク)形態でそれぞれに独立したコントロールスティックを設けていた。そのため、変形時には操縦桿とガウォーク、バトロイド用のアームコントローラーを持ち替える必要があり、機動性に支障をきたす原因となっていた。但し、この問題はブロック6以降の仕様変更機において、一体型コントロールスティックの採用により解消されている。

C コントロールレバー

スロットルレバーは、双発のエンジンに対応した2列のスライド方式。最前位置が逆噴射で、それ以外は前から順に最大200%、最小1～2%の範囲でエンジン出力を制御できる。

A バトロイド・アームコントローラー

◀バトロイド腕部を操作する機器。先端に親指を動かすボール・コントローラーを、スティック部分に他の指用のタベットを備える。グリップはゴムカバーで覆われている。

◀内部　◀左手用　▶右手用

B 形態選択レバー

▼右手用バトロイド・アームコントローラー脇には、各種スイッチを配した小型パネルが位置する。

▲形態選択レバーは左手用バトロイド・アームコントローラー脇に位置し、3形態用のレバーが並んでいる。

形態選択レバーは左から順にバトロイド、ガウォーク、ファイターと並び、レバーを下げた形態への変形が行われる。

EXTRA REPORT

関連事項

VF-X／VF-X-4

VF-1によって確立された可変戦闘機(VF)という兵器体系だったが、当時はVFの開発史全体から見れば黎明期にあたり、VF-1やVF-4の完成までには数え切れない試行錯誤があった。VF-XやVF-X-4はその証とも言える試験機であり、VFが兵器として熟成を重ねていく上での重要なステップとなった。

VF-X

南アタリア島における■発中のVF-Xの様子。外装は施されていないが、VF-1に通じる可変翼構造などが見て取れる。

▲▼VF-X試験飛行タイプと呼ばれる機体(VF-X1とも呼ばれる)。フォルムはVF-1に酷似しているが、頭部ユニットが設けられていない点など、細部の構造が異なる。ナセル側面のマーキングが試験機であることを物語っている。

●主要パイロット

ロイ・フォッカー

初めての試験飛行に臨むVF-X。テストパイロットはロイ・フォッカーが務め、徐々に本格的な試験へと移行していった。

変形のテストを見守るフォッカー。VF-Xは頭部、腕部ユニットが省略されており、バトロイドへの変形もできなかったようだが、脚部の変形は既にテスト段階に入っていたようだ。

VF-X-4

◀▲VF-1の後継機として、VF-X-3との競争試作にかけられた試作機。複数の仕様が存在し、のちの主力機であるVF-4 ライトニングIIIへと発展していった。

VF-4の開発に関わった一条輝が所持していたVF-X-4の模型。VF-4はこの機体をさらに洗練させる形で完成することになった。

クァドラン・ロー

高機動戦闘に主眼を置いたゼントラーディ婦人士官用バトルスーツ

機体解説

クァドラン・ローはゼントラーディ軍が高性能婦人士官向けに開発した機動戦闘倍力服である。軽装甲、高機動をコンセプトとする機体で、キメリコラ特殊イナーシャ=ベクトル・コントロールシステムの慣性制御能力と豊富な固定武装によって、優れた高機動戦闘能力を発揮、監察軍とゼントラーディ軍の双方に名を轟かせた。高い性能を持つ反面、操縦が困難で配備数も少ないなどの問題もあった。なお、肩がシルバーで塗られたこの機体は、「エースのミリア」の異名で呼ばれたボドル基幹艦隊直衛艦隊所属のミリア・ファリーナ一級空士長の乗機である。

腕部のレーザーパルス・ガンをはじめ、機体各所に様々な武装を搭載、リガードなどを遥かに凌駕する攻撃力を有していた。

バックパックの大型スラスターにより、VFに匹敵するほどの機動性を発揮した。

主要パイロット

ミリア・ファリーナ

データ

所属▶ゼントラーディ軍
全高▶16.75m
全備重量▶32.5t
発動機▶キメリコラ熱核コンバータ×2(出力2.11GGV×2)
慣性制御系▶キメリコラ特殊イナーシャ=ベクトル・コントロールシステム
標準武装▶中口径速射インパクト・キャノン×2、空対空高回転三砲身レーザーパルス・ガン×2、近接用超小型高機動ミサイルランチャー×4(携行弾数:126発)

サイズ比較

開発系譜図

Illustration by Hidetaka Tenjin

▶クァドラン・ロー

運用記録

クァドラン・シリーズの開発は、銀河帝国分裂戦争の末期に高性能婦人士官の実用化と並行して、キメリコラ全自動兵器廠で進められた。ロー型はその中でも初期に戦力化した機体であった。だが、システムが複雑で高品質だったことから、配備数は極めて少なく、空戦部隊のエースに装備される程度にとどまっている。絶対数が限られるため、ゼントラーディ軍全体から見れば本機の戦果はわずかだが、機体自体は高い評価を与えられている。特に、監察軍との戦いで無敵を誇ったミリアー級空士長の運用した機体は、第一次星間大戦においても使用され、本機の優れた性能を示した。

ミリア機はラプ・ラミズ直衛艦隊の中核として活躍した。SDF-1 マクロスへのスパイ潜入作戦では、単機で防衛網を突破し、スパイを送り込んだ。

マクシミリアン・ジーナス機に一騎討ちを挑んだミリア機は、劣勢に追い込まれてSDF-1艦内に入り込み、市街地で被弾。初めての敗北を喫することとなる。

◀一般機
ミリア以外の婦人士官が搭乗したクァドラン・ロー。ミリア機とは肩などのカラーリングが異なっている。

機体構造

胸部のみの胴体に巨大なバックパックと手脚がついた特異な機体構造が特徴である。これは、空間機動兵器に倍力服のシステムを組み合わせた設計コンセプトに由来し、兵器としては空戦ポッドに近い特性を持つ。

バックパックの大型スラスターによって、宇宙、地上を問わず優れた空間機動性を発揮した。

機動性を重視しているため耐弾性は高くはなく、ガンポッドの直撃で撃破されることもあった。

▲頭部には高速照準システムを内蔵している。また、ユニットはある程度の可動域を確保している。

▲肩部前面には噴射口があり、姿勢制御に用いられたと考えられる。

▲胸部の下に直接脚部を付けたような独特の構造を持つ。基本設計は極限までコンパクト化されている。

▶背部のバックパックは上部左右にミサイルランチャーを、中央に2基の大型スラスターを備える。

▲脚部は腿が極端に短く可動肢としてのバランスが悪いため、歩行には適さないと考えられる。しかし、空間戦闘を主とすることから、大きな問題とはならなかったようだ。

コクピット

クァドラン・シリーズは耐G能力に優れた高性能婦人士官用に開発された機体で、胴体部のコクピットも婦人士官の体形に合わせて設計されている。男性兵士が搭乗することも可能と言われるが、開発経緯を考えれば性能を完全に発揮するのは難しかったとも考えられる。また、コクピット内部は非常に狭く、パイロットは窮屈な体勢での操縦を余儀なくされた。

クァドラン・ローに乗り込むミリア。搭乗スペースの側部に見える穴に腕を通す構造となっている。

メインモニターの周囲には各種スイッチが配置されているが、操縦系の構造上、補助的な機器だったと考えられる。

▼メインモニター

メインモニターはパイロットの顔の前面を覆うように配置されている。また、サブウィンドウを表示することも可能で、ミリアがラプ・ラミズと交信する際に用いられた。

▼コクピットカバーを展開した状態のクァドラン・ローの胴体部。後頭部のアンテナはカバーの開放時にバックパックに干渉するため、機体内に収納される。

肩カバー
機体の肩部に位置するカバーは2重構造となっている。外部肩カバーは装甲を兼用し、内部肩カバーはコクピット内にパイロットを固定する役割を持つ。

◀▲外部肩カバー
外部肩カバーは装甲と噴射装置を兼ねたユニットで、先端のフックで機体に固定される。

▲内部肩カバー
内部肩カバーはパイロットの肩に密着して身体を固定する役割を果たす。内側はクッション状になっている。

パイロットの顔の横には小型のモニターが配されている。どのような情報を表示するものかは不明。

胸部内部カバー
コクピット前部には小型の内部カバーが位置し、閉鎖時には起き上がりパイロットの胸部を保護する。また、下図のコネクターはこのカバーの内側に連結しており、接続する際に引き出される。

カバー閉鎖手順
カバーの閉鎖は図の番号の順に行われる(❶はコネクターの接続)。開放する際の順序はこの逆となる。

コネクター接続基準
搭乗時にはパイロットスーツ胸部のプラグにコネクターを接続する。中央にある大型のメイン・コネクターを接続したあと、両脇のサイド・コネクターを付ける。

武装

固定武装としてインパクト・キャノンや3連装のレーザーパルス・ガン、高機動ミサイルランチャーといった豊富な火器を装備している。近・中距離での火力に優れ、運動性の高さもあって高い戦闘力を発揮した。

ガトリング式のレーザーパルス・ガンは、腕部に搭載されていることもあって広い射界を有し、ドッグファイトにおいて威力を発揮した。

バックパックと脚部に計4基のミサイルランチャーを内蔵しており、一斉発射で弾幕を展開するなどの運用法も見られた。

胸部のインパクト・キャノンは本機の武装の中ではもっとも火力が高い火器で、中距離での砲撃戦から近接戦闘まで、様々な局面で用いられた。

▲優れた機動性に柔軟な運用が可能な火力を付与することで、本機は高い戦闘力を獲得していた。

待機姿勢

母艦での格納時には、固定台座に座った状態の待機姿勢が取られる。同様の固定台座はリガードにも使用されていることから、ゼントラーディ軍では一般的な格納方式だったと考えられる。

コクピットカバーを開放した状態で格納され、パイロットは固定台座を足場にして機体に乗り込む。

◀固定台座を用いて待機姿勢をとるクァドラン・ロー。図の中央は一般的な身長のゼントラーディ婦人士官で、本機のサイズがうかがえる。

胸部カバーは開放したままでもある程度は機体を動かすことが可能で、発進直前までは開けておくことが多かった。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶クァドラン・ロー

M Sheet 04 B

標準装備

優れた機動性能を特徴とするクァドラン・ローは、複数のミサイルや火器類を装備している。主兵装は胸部の中口径速射インパクト・キャノンで、その破壊力は絶大であった。副兵装は手首に装備された3連装のレーザー・パルス・ガンで、広い射角と高い連射能力で様々な戦闘に対応した。このほか、牽制や拠点爆撃にも使用できるミサイルランチャーを背部と脚部に設置。これら固定火器の充実により、高機動性を活かした戦闘が可能となっている。

ミリア・ファリーナ専用機がマクシミリアン・ジーナスのVF-1Aと激戦を繰り広げた際も、固定火器群を駆使していた。

優れた機動性を活かして敵機に急速接近し、敵機を攻撃、その後すぐに現場から離れる一撃離脱戦法が可能となっている。

Ⓐ近接用小型高機動ミサイルランチャー

スラスターに隣接した背部ユニットと、両膝の外側に計4箇所設置されたミサイルランチャー。発射時はスライド式のカバーが開く。最大装弾数は、126基と推定されている。

▶超射程・超高機動ミサイル

Ⓑ中口径速射インパクト・キャノン

胸部に設置された固定火器で、2基の砲門から一斉射するのが通常である。攻撃範囲は狭いが、その分、絶大な破壊力を誇る。

本機の主兵装であり、一度の射撃でVFを撃破する破壊力を持つ。連射も可能で、敵拠点の破壊などにも有効であった。

Ⓒ高速回転式3砲身レーザー・パルス・ガン

両腕先端部に設置された、ガトリング式のレーザーガン。威力はインパクト・キャノンに劣るが、攻撃範囲が広く、接近戦にも対応する。

可動域の広い腕部の先端に設置されているため、正面から迫る敵だけでなく、サイドから攻め入る敵に対しても牽制・ダメージを与えることができた。

▼背部から見たクァドラン・ロー。大きく盛り上がった上半身に比べ、下半身がスタイリッシュな形状となっている。

Ⓓスラスター

機体の高機動性を支える、大型のスラスター。2基備えたスラスターの噴射口も大きくレイアウトされており、機体の急激な加速や方向転換を可能としている。

大型スラスターの設置によって、地上、宇宙の双方で高い機動性を発揮することが可能となっていた。

●各部マーク

▼撃墜マーク　▶イニシャル

機体ごとに複数のマークが付けられており、敵機の撃墜数を表すマーク(左)や、パイロットのイニシャルを示したマーク(右)などが存在する。

Mechanic Sheet
メカニックシート
クァドラン・ロー

一般機

運用記録

クァドラン・ローには、ミリアが搭乗した専用機のほか、カラーリングが異なる一般機が存在する。複数機で編隊を組んで行動するのが通常の運用法で、各機の連携を密にすることで高い戦闘力を確保した。対地球統合軍との戦いでも、統合軍のエース、ロイ・フォッカーに致命傷を与えるなど、活躍を見せた。

ミリア機と共に、統合軍のVFと戦闘を行うクァドラン・ローの一般機。連携攻撃によって、その機動性を最大限に活かすことが可能となっていた。

マックスとの対決を望んだミリアのサポートとして、複数の一般機が出撃。この際の戦闘でVF-1Sにダメージを与え、フォッカーの命を奪っている。

▲ミサイルのカバー部分などに、ミリア機とは異なりグリーンのカラーリングが施されている。

▶ミリア機ではブラックやライトブルーだった肩パーツや頭部周辺、手首などがグリーンになった。

ボドル基幹艦隊との戦闘が終結した後も、カムジン・クラヴシェラの蜂起に参加したラプ・ラミズの部下が一般機を運用している。

格納庫

ラプ・ラミズが指揮したケアドウル・マグドミラ10107には、クァドラン・ローの格納庫が設置されていた。格納庫内には待機スペースがあり、1隻につき30機程度の機体を格納することが可能となっていた。パイロットの乗降や簡単なメンテナンスはここで行われた。

格納庫からクァドラン・ローに乗降するミリア。メンテナンスを専門とする兵士たちが常駐し、機体の管理を担当していた。

▼出撃ハッチ

ハッチから出撃する、ミリアのクァドラン・ロー。ブリッジとディスプレイを通じて連絡ができた。

▼待機スペース

クァドラン・ローの待機スペース。一列に4機並ぶことが可能である。機体の待機時、メンテナンス時には、コクピットハッチは開けた状態で保管する。

関連事項 EXTRA REPORT

マイクローン輸送カプセル

マイクローン化したワレラ、ロリー、コンダをSDF-1マクロスに輸送したカプセル。ミリアがクァドラン・ローでマクロスに輸送している。

クァドラン・ローの手でマクロスの外壁を突き破り、カプセルを艦内に投げ入れた。

Illustration by Hidetaka Tenjin

ノプティ・バガニス5631

ブリタイが指揮した ボドル基幹艦隊所属の中型艦

艦体解説

ゼントラーディ軍ボドル基幹艦隊に所属する、第67グリマル級分岐ブリタイ艦隊旗艦が、ノプティ・バガニス5631である。通称「ブリタイ艦」と呼ばれる本艦は、艦隊指揮用に開発された戦艦であった。長期の作戦に耐えうることを想定した設計がなされており、ある程度の攻撃を受けても航行に支障が出ない優れた耐久性を獲得した。結果、一千周期に満たずに航行不能になるゼントラーディの艦が多い中、本艦はすでに出港から5万7千周期の間、運用され続けている。

主要クルー

ブリタイ・クリダニク

エキセドル・フォルモ

データ

所属▶ゼントラーディ軍
全長▶約4,000m
重量▶170,000,000t
動力系▶ウォーケリ・カタフィルラ ヒート・パネル・システムクラスター
重力制御系▶ウォーケリ・カタフィルラ グラヴィティ・コントロール・クラスター
超時空航行系▶ウォーケリ・カタフィルラ フォールド・システム・クラスター
噴射推進系メイン・スラスター▶ウォーケリ・カタフィルラ マクロ・ノズル・クラスター
噴射推進系バーニア・スラスター▶ウォーケリ・カタフィルラ バーニア・ノズル・クラスター
標準武装▶誘導集束ビーム砲システム×多数／対艦対空ミサイルランチャー×多数／艦載小型機動兵器×多数

サイズ比較

ブリタイ・クリダニクが指揮を執る戦闘艦として、地球統合軍との戦闘の最前線で運用された。

艦首の4つのパーツから広域通信ビームを発振する様子。これにより、距離が離れている友軍に対し、速やかに通信を行うことができた。

ノプティ・バガニス5631

運用記録

ブリタイ艦隊旗艦であった本艦は、監察軍を追跡中に、SDF-1マクロスや反応兵器を持つ地球統合軍と遭遇した。その後、ブリタイの判断により、艦はマクロスを執拗に追撃し、地球人の情報を得ようとする。その中でブリタイやエキセドルたちは地球人の文化に感化され、独断でマクロスとの停戦協定を締結。艦はマクロスと共闘し、ボドルザー司令率いる基幹艦隊と戦闘を行った。

ブリタイ艦隊旗艦として、多数の艦を統率し、マクロスと共闘したボドル基幹艦隊との戦いでも、最前線で運用された。

ボドル基幹艦隊との戦闘終結後、本艦は地球人でもコントロールできるように改修され、地球防衛の任務に就いた。

艦体構造

50万周期も続くゼントラーディ軍と監察軍による戦争の初期に開発された本艦は、ゼントラーディ軍の戦艦としては中型クラスである。円柱状の細長い艦体が特徴で、艦表面には多数の火砲を備え戦闘に対応する。内部にはリガードなど、小型の機動兵器を格納する広いスペースを有した。

マクロスのダイダロス・アタックを受けて艦首が大きく破損するが、その状態でも艦は問題なく航行することができた。

▶前方
艦フロント部に4点備えられているパーツは、広域通信ビームの発振器である。

▼側面
フォールド機能も搭載する艦の側面部。細長い艦首部分は、小型機動兵器の格納スペースとなっている。

◀艦首
正面から見たノプティ・バガニス5631。右の図は、ダイダロス・アタックを受けて艦の外装が破損した状態を示している。

▲後方
艦の推進力を得るスラスターパーツが、後方部に集中して設置されている。

武装

ゼントラーディ軍の艦艇には、艦隊戦に備えて多数の火砲が外装に取り付けられている。指揮艦用である本艦にも、高出力ビームを射出できる誘導集束ビーム砲や、対艦対空用のミサイル・ランチャーが多数設置されており、戦場の前線でも活躍できる優れた戦闘力を有していた。

大量に備えた誘導集束ビーム砲を駆使し、地球統合軍の戦艦や可変戦闘機を迎撃するノプティ・バガニス5631。

誘導集束ビーム砲

▼砲軸の中央部からのぞく円状のパーツがビーム発生器で、ここから発生したビームは、パーツ両端から伸びた誘導体で射出される。

▲艦の各所に設置されており、全て同構造となっている。

◀砲軸は回転機構を有し、敵機の動きに応じ砲口の角度を変更することができる。

◀2基の誘導体を通じて一条のビームが高速で射出されるシステムであった。

対艦対空ミサイル・ランチャー

▼ミサイル・ランチャーから発射されるミサイル。姿勢制御バーニア付きである。

▲対艦戦用に設置されたミサイル発射装置で、砲軸の回転機構はビーム砲と共通。

◀ミサイル発射時。ミサイルは連射可能で、敵艦の接近を防ぐだけでなく、敵ミサイルを迎撃することも可能となっている。

砲口露出シークエンス(誘導集束ビーム砲)

誘導集束ビーム砲の砲口露出シークエンス。通常航行時は装甲内に収納されており、使用時には図のように内部から砲全体が露出するシステムであった。

砲口露出シークエンス(対艦対空ミサイル・ランチャー)

対艦対空ミサイル・ランチャーも、ビーム砲と同様のシステムで、ランチャー全体が艦の表面に露出する仕組みとなっていた。

艦内設備

ゼントラーディ軍艦艇においては中型艦に分類されるノプティ・バガニス5631だが、その全長は約4kmにも及び、広大な艦内スペースには多岐にわたる設備や施設が設置されている。中でも、膨大な収容兵員の運用をサポートする艦載機関連設備や兵站システムは非常に充実しており、各所に大小様々な規模の格納庫や倉庫が設けられていた。

敵マイクローン捕獲作戦では、捕虜となった早瀬未沙の救出を図ったバーミリオン小隊の侵入を許し、艦内で戦闘が繰り広げられた。

中規模格納庫

艦内格納庫の中では中規模にあたる設備だが、実際には内部でガウォークモードのVFが飛行できるほどの広さがある。

◀空戦ポッドやリガード、大型降下ポッドを収容する格納庫で、下降班格納庫とも呼ばれる。ケルカリアなども収容されている。

中規模格納庫レイアウト図(俯瞰)

格納庫は艦外壁に面し、外壁側中央に大型エアロック(　部分)を、その右に小型エアロックを備える。

中規模格納庫ハンガーラック

大型エアロックの左に位置する、リガード用自動補給ハンガー。ブリタイに投げ飛ばされた一条輝のVF-1Jが突き刺さった。

中規模格納庫天井・壁面構成図

上部空間にはキャットウォークが配され、艦内側中央にはゼントラーディ用の扉がある。

中規模格納庫ハッチ周辺

天井にはハッチ(　部分)があり、宇宙に放り出されたブリタイが艦内に戻る際に使った。

艦内設備

ボドル基幹艦隊所属67グリマル級分岐ブリタイ艦隊の旗艦であったノプティ・バガニス5631は、長期の航行を想定した艦であった。艦内設備にも、多数のレーダーやディスプレイを備えた巨大なブリッジをはじめ、マイクローン調査システムといった、様々な任務に対応する機能、システムが備えられている。2009〜2010年の第一次星間大戦時にはこうした機能を活かし、SDF-1 マクロス追撃や、マイクローンの捕獲などの任務を遂行した。

統合軍の可変戦闘機(以下、VF)が潜入し、ブリタイらゼントラーディ人と戦闘を行ったこともある。

司令室

艦の頭脳と言えるスペースで、ブリタイ艦隊の指揮を執るブリタイ・クリダニクと記録参謀のエキセドル・フォルモが使用した。

ブリッジ

艦のコントロールを司るブリッジで、司令室と隣接している。最奥部に大型の航法図が設置されているほか、作戦卓が複数置かれていた。そのほか、大量のホログラムディスプレイを備える。

◀破壊された司令室
マックス搭乗のVF-1Aの突撃により、司令室にダメージを負った状態。スピーカーとマイクは無事だったが、ディスプレイとフロントガラスは破壊された。

司令室から指示を受け、艦の航行全般を管理した。少なくとも数十人がブリッジ部に常駐しており、航行や通信管制、戦闘時の射撃管制までをサポート。艦の効率的な運用を実現する根幹部であった。

会見室

ブリタイらが会見で使用した机と椅子。上はボドルザーが使用した特別席である。

ブリタイらが重要な会議や会見を行うために使用した部屋。地球人が「プロトカルチャー」ではないかという疑問を持ったボドル基幹艦隊司令長官のボドルザーが、一条輝や早瀬未沙ら、捕虜とした地球人たちを会見室の机の上に上げ、彼らの尋問を行っている。

通路／牢屋

▲通路
ブリッジや格納庫など、艦内設備を移動するために張り巡らされた通路の一角。天井には等間隔にライトが設置されている。

ゼントラーディが余裕を持って行動できるように、内部スペースも広く採られている。そのため、VFで艦内を移動することが可能であった。

▲牢屋入口

▶牢屋中

一条輝と早瀬未沙、柿崎速雄が入れられた牢屋。ゼントラーディ人に合わせたサイズで、右奥の箱はゼントラーディ用のトイレである。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶ノプティ・バガニス5631

エレベーター

▼内部

▶階層表示ユニット

複数の階層に分かれている艦内を移動するために設置されたエレベーター。右側にレイアウトされた階層表示ユニットの下に、操作レバーが設けられている。

トイレ／通路

艦内各所に設けられているゼントラーディ用のトイレ。便器から水が噴き出す仕様となっているため、紙は常備されていなかったようだ。本体下にあるのは、水洗用のペダル。上図はトイレの入り口を示している。

エアロック／出入りハッチ

艦の各所に設置されている、エアロック。左が宇宙から見たエアロックの外側で、ビーム砲などが周囲に備えられている。右図は艦内から見たエアロック。

◀外側

艦内と外部との連絡口となる出入りハッチで、エアロックも備えている。他の艦から物資やエネルギーなどを受け渡しする際に使用されていた。

▼内側

ゼントラーディ軍の拘束から逃げ出した一条輝と早瀬未沙が、ここで柿崎、マックスとの合流に成功している。

マイクローン・システム

通常、身長約12～13mのゼントラーディを、マイクローン（地球人）サイズに変換するシステムが置かれた部屋。専用のカプセルの中に入り、特殊な液体に浸かるこのシステムによって身体を縮小することができる。カプセルを含むシステム本体は非常に大きい。

ワレラ、ロリー、コンダの3名や、エキセドルらがこのシステムを利用し、自らの体をマイクローンサイズに縮小。前者3名は潜入調査のため、後者は停戦交渉の際に、それぞれマクロスを訪れている。

マイクローン調査用カプセル

マイクローンの調査用に使用されたカプセル室。巨大カプセル内に入れたマイクローンを、自動分析システムが分析し、壁面に設置されたディスプレイにその結果が表示される仕組みとなっていた。

Mechanic Sheet
メカニックシート
ノプティ・バガニス5631

艦内設備

小型武器庫

歩兵用の火器や予備弾薬が保管されている小規模な倉庫。部屋の隅にはマイクや通信機も設けられている。

脱走した一条輝と早瀬未沙が休憩のために一時的に潜伏していた。艦の規模からして、こうした倉庫は艦内の要所に点在していると思われる。

▼ビーム小銃

▲ゼントラーディ兵の標準装備となる小銃。上部グリップが照準器を兼ねる。

▶ストック上部にエネルギーカートリッジを装着する。ベルトは着脱可能。

▶武器庫でビーム小銃を保管するための銃架。壁に立てかける形で用いる。

▼大型ミサイル

▲ゼントラーディ軍艦艇のミサイルランチャーから射出される大型ミサイル。全長20m。

艦首倉庫

艦首部の大型倉庫。マクロス艦内に戦闘ポッドを送り込む作戦の際に、ダイダロス・アタックを打ち込ませた。

大通路

▼スピーカー
艦内の通路や格納庫などに設置されていた、連絡用のスピーカー。

艦の外壁に面して配されたゼントラーディサイズの大通路。外壁側には艦外を一望できる大窓が設けられている。

水没区画

機関室の下層にある一区画。本艦では駆動機関の稼働時に発生する熱を冷やすために冷却水を使用しているが、その冷却水が溜っていた。床から水面まではおよそ30cmである。

水没区画から機関室を見上げた図。機関部の各パーツがむき出しとなっていた。一条輝と早瀬未沙が本艦に拘束された際、この区画に迷い込んでしまった。

人の訪れないこの区画に、両名はしばらくの間とどまり、彼らの経験から推測されるゼントラーディ人の社会について、意見を交わした。

Mechanic Sheet
メカニックシート
ノプティ・バガニス5631

マイクローンカプセル発射装置

▲マイクローン化した兵士を収容したカプセルの射出システムで、ランチャーカタパルトが用いられる。

◀カプセルのハッチ部分。開閉部はマイクローンサイズとなっている。

▶カプセルは後部に4基のロケットノズルを有し、自力推進が可能。

実際にはカタパルトは使用されず、ミリア・ファリーナのクァドラン・ローが、マクロス艦内までカプセルを運んだ。

構造材

上部空間には各種のパイプ類と構造材が張り巡らされている。

リガード用台座

◀▼艦内にリガードを格納する際に用いる固定用の台座。ノプティ・バガニスに限らず、各艦艇に備えられている。

早瀬未沙らがノプティ・バガニスから脱出する際、台座を利用してリガードの操縦席に侵入することができた。

気密シャッター

艦外壁に内蔵されている緊急用シャッターで、外壁破損時に自動で閉じる構造となっている。

浮遊ディスク

◀▼連絡艇と併用される浮遊ディスク。2〜3人のゼントラーディを載せ、低速で飛行可能。

改修後の追加設備

第一次星間大戦終結後、統合軍への編入に際し本艦には、地球人類との共同運用を可能とする改修が施された。可変戦闘機などを運用するためのシステムが増設され、マイクローンサイズの管制設備や居住区も設けられた。

工場衛星奪取作戦において地球人兵士が乗艦し、ブリタイとの共同作戦にあたった。

▼バルキリー用エレベーター

◀▲艦上部甲板から格納庫に通じるVF用エレベーター。甲板上は人工重力で制御される。

◀エレベーターコントローラ
エレベーターの昇降を操作するためのゼントラーディサイズコントローラ。

▶マイクローン用ブリッジ
マイクローン用ブリッジ。自動走路の先端に管制席を2席備える。

▲ブリッジ対比
ゼントラーディとマイクローン用ブリッジの対比図。マイクは2基に減っている。

▲通路
艦内通路にはキャットウォーク状のマイクローン用自動走路が増設された。

EXTRA REPORT 関連事項
墜落大型指揮戦艦

第一次星間大戦には複数のノプティ・バガニス級が投入され、中には地球上に墜落した艦もあった。それらは復興途中で放置されていたが、反乱分子の温床ともなった。

▶放棄されて内部は荒れ果てていたが、自動攻撃システムは作動状態にあった。

◀艦首から地表に突き刺さった墜落艦。艦尾側は原形を留めており、艦の堅牢さを物語っている。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-1D バルキリー

M Sheet 05 A

VF-1D

VF-1Dは、一条輝の搭乗したVT-102が特に有名である。これ以外にもマクシミリアン・ジーナスとミリア・ファリーナの結婚式で、青く塗られたD型が使用されている(頭部はA型であったため、式典に合わせD型の機首ブロックに換装されたと思われる)。

機体解説

従来の戦闘機を操ってきたパイロットにとって、可変戦闘機(VF)という新機軸の兵器は容易には対応し難い代物だった。それ故、統合軍はVF-1 バルキリーの配備を急ぐのと同時に、訓練機としての運用を想定したVF-1のバリエーション機を用意した。それがこのVF-1D(D型)である。D型はVF-1A(A型)の機首ブロックを複座型コクピットのものに換装し、D型専用の飛行プログラムを搭載したタイプである。本来は単座で運用可能なVF-1を複座とすることで、指導教官を同乗させた訓練や、観測員を伴った強行偵察任務などの運用が可能となっている。また、それ以外の仕様はA型などの他バリエーションとまったく同じであり、実戦運用も十分に可能な性能を有している。

主要パイロット

一条輝

データ

※データはファイター形態時のもの

所属 ▶ 地球統合軍
全長 ▶ 14.73m
全高 ▶ 3.84m
全幅 ▶ 14.78m(最小後退角度時)/8.25m(最大後退角度時)
空虚重量 ▶ 13.25 t
エンジン ▶ 新中州重工/P&W/ロイス FF2001熱核タービンエンジン×2
推力 ▶ 11,500kg×2
最大速度 ▶ M2.81(高度10,000m時)/M3.87(高度30,000m時)
標準武装 ▶ マウラー ROV-20 レーザー機銃×2/ハワードGU11 55mm3連装ガンポッド

サイズ比較

VF-1J

VF-1D

開発系譜図

VF-X ▶ VF-1 ▶ VF-4

複座型コクピットのトレーナー仕様機

▶VF-1D バルキリー

運用記録

D型はパイロットの養成という運用目的上、VF-1シリーズの中でも最優先で量産が進められ、各地の訓練部隊に配備されたと言われる。SDF-1 マクロスにも同様で、進宙式では一般展示されていた。その中の1機(VT-102号機)は、当時民間人だった一条輝が搭乗し、ゼントラーディ軍との初遭遇戦に参加したことでも知られている。

VT-102は成り行きから輝が搭乗したまま戦闘に巻き込まれることとなり、[illegible]中にはぐれたリン・ミンメイを救助した。

コクピット

直列複座型コクピットがD型最大の特徴で、前席が操縦士、後席が指導教官や観測員のシートとなっている。また、コクピットの仕様変更に合わせて、飛行プログラムもD型用のものに入れ替えられている。なお、VF-1は機首ブロックが換装式のため、コクピット関連の仕様変更は短時間で行うことができる。

コクピット内部が拡張され、後席が[illegible]されていることを除けば、操縦系は他のVF-1シリーズと同じである。

輝は機体から落ちたミンメイを助けるため、落下中にキャノピーを開いて彼女を収容するという大胆な行動を取った。

▼キャノピーは前席と後席を同時に覆う一体型で、左は開放状態。下はキャノピーを閉じた状態で、他のシリーズ機に比べるとコクピットが後方に拡張されている。

ファイターモード

D型は通常量産タイプのA型がベースになっており、機首ブロックの換装で全長が約50cm長くなっているが、ファイター形態の機能はA型とほとんど変わりない。また、VT-102は輝にとって初めての機体だったが、訓練用であったためか、彼は支障なく操縦していた(彼が優れたアクロバット・パイロットだったことも大きい)。

展示機スポットに置かれていたVT-102は、機内にいた輝が正規のパイロットと勘違いされ、出撃することになった。

ゼントラーディ軍戦闘ポッドの攻撃を受けるVT-102。この衝撃で輝は気を失い、SDF-1との衝突コースに乗ってしまう。

◀VF-1シリーズに共通する可変後退翼構造を有する。主翼下面のオプション装備懸架用のハードポイントは訓練用のD型にも残されている。

▲複座型の機首ブロックに換装されているほか、機体前部の上面装甲の構造が他のバリエーション機と若干異なる。

◀キャノピーが大型化している以外には、他のバリエーション機とフォルムの差異はない。

▼ファイターの機体底面には、2連装レーザー機銃が確認できる。

ガウォークモード

機種転換訓練に用いられたD型において、ガウォーク形態は重要な意味を持っていた。パイロットにVFの特性を理解させる上で、この形態は必要不可欠なものだったからである。実際、フォッカーはVT-102のバトロイド形態に手を焼く輝に、操縦方法が戦闘機と大差ないという理由からガウォークへの変形を指示していた。輝がこの形態で機体を操っていたことは、戦闘機と似た操縦性の一端を示していたと言える。

南アタリア島の市街地に降下するガウォーク形態のVT-102。この直後、建物と衝突したが機体に大きな破損は見られなかった。

ゼントラーディ軍降下部隊のリガードに捕捉されたVT-102は、ガンポッドで応戦し、撃退に成功している。

▶VT-102のガウォーク形態を左後方から見た図。ガンポッドを左腕で保持しているが、実際には右腕で使用していた。

ミンメイを掴んだまま離脱を図ったが、被弾して左腕が脱落し、彼女を落としてしまう。

ガウォークで敵の攻撃を振り切ろうとするVT-102。ファイター的な運用と言える。

▶機体の各所に被弾の跡が見られるVT-102のガウォーク。機体上部のブースターユニットからは、引き込み式アンテナが展開される。

バトロイドモード

D型のバトロイド形態は、複眼式カメラと2連装のレーザー機銃(マウラー社製 ROV-20)を備えたヘッドユニットを特徴としている。また、同形態時にはコクピットの配置が垂直方向に変更され、前席が下、後席が上となる。輝が操縦したVT-102は、SDF-1との衝突コースを避けてバトロイドで市街地に不時着したが、航空機とはまったく異なる操縦系に戸惑い、歩行することさえできなかった。

バトロイドのVT-102を遠巻きに見守る南アタリア島の市民たち。その存在を知らなかった民間人に衝撃を与えた。

▼D型頭部

◀胸部ハッチ
左は胸部メンテナンスハッチを開放した状態。墜落や建物への衝突で異常を来したVT-102をフォッカー機が修理する際に用いた。

◀VT-102のバトロイド形態。ヘッドユニットのほか、胸部装甲とキャノピーカバーのデザインが他のバリエーションと異なる。

◀図は変形直後の状態で、ガンポッドは銃口を上にして前腕部にマウントされる。背部装甲などに被弾跡が確認できる。

バトロイドの肩から中華料理店「娘々」の2階にいるミンメイたちと会話する輝。機体の大きさがよくわかる。

歩こうとしてバランスを崩すVT-102。さらに姿勢を戻そうとして失敗し、中華料理店「娘々」に激突。建物を半壊させた。

◀▲バトロイド時のコクピットの展開構造。ヘッドユニットが前方に倒れてハッチが開き、支柱に支えられたシートがせり上がる。

EXTRA REPORT

関連事項

機首ブロック分離構造

VF-1シリーズの機首ブロックは、独立した生命維持システムや救難トランスポンダ、代謝低下システム、簡易救急医療システムを備えた脱出システムとして機能する。換装による仕様変更だけでなく、パイロットの生存性向上も重視して設計されていたのである。

機首ブロックを外部から分離させる場合には、ファイター機体上面左側のパネルを開いて操作する。

▼機首ブロックの分離構造(図はD型)。機体側に埋まった根元部分からブロックが分離する。

▼VF-1シリーズはガンポッド用ウェポンラックに機首ブロックをマウントして運搬することができる。

◀左はガウォークの機首ブロックマウント状態。機首ブロック尾部には固体ロケットモーターが備えられている。

輝とミンメイを乗せたVT-102の機首ブロックを腕部に取り付けるVF-1S。戦場に取り残された2人を救助した。

装甲システムを装着したバルキリーの近接戦闘能力向上機

アーマードバルキリー

データ

重量▶16.2t（装着時におけるVF-1Jの全備重量：34.7t）
兵装▶エリコーン GH-32 グレネード・クラッシャー×56
エリコーン GA-100 高速徹甲クラッシャー×6　ラミントン H-22T大型ハンドグレネード×6
※データはGBP-1Sプロテクター・ウエポンシステムのもの

サイズ比較

VF-1J
アーマードバルキリー
ヒト

開発系譜図

PWS-0X ▶ GBP-1S

主要パイロット

機体解説

3形態への変形によって高い汎用性を発揮した可変戦闘機、VF-1バルキリーも近接戦闘兵器としての脆弱性という問題点を抱えていた。それを解消すべく開発された装甲システムがこのプロテクター・ウェポンシステム GBP-1Sであり、装着したVF-1は「アーマードバルキリー」と呼ばれる。本システムは大量の武装を内蔵したプロテクターと補助ブースターで構成され、これを装備したバトロイド形態のVF-1は、耐弾性だけではなく攻撃力の大幅な向上も果たした。これにより脆弱性の問題は解消され、陸戦兵器として十分な性能を発揮できたのである。緊急時の排除が容易で柔軟性に優れていたため、パイロットからは高い評価を受けると共に、後年のVF兵装システム開発にも大きな影響を与えた。なお、ここではGBP-1Sを装着したVF-1Jを解説する。

Illustration by Hidetaka Tenjin

運用記録

VF-1 バルキリーは開発当初から、近接戦闘における脆弱性とバトロイド形態の出力過剰のふたつが問題点として挙げられていた。GBP-1Sは過剰な出力を利用して機体の脆弱性を解消するプランとして、VF-1と並行し新中州重工によって開発が進められた。完成後はVF-1の配備に合わせて相当数が基本装備として各部隊に与えられ、強行突入や単独迎撃といった作戦で運用された(一説には、2009年のSDF-1 マクロス進宙式で開催された南アタリア島航空ショーに、アーマードバルキリーが展示されたと言われる)。ただし、マクロスでは特殊任務以外でGBP-1Sの使用は許可されていなかったため、運用例は少なかったと考えられる。

▶プロメテウス所属部隊マーク
右はプロメテウスの所属部隊を示す部隊章で、腰部プロテクターの前面にマーキングされる。また、肩部や膝には機体番号が記される。

「青い風」のケルカリアがマクロスに接近した際には、一条輝少尉(バーミリオン1)がアーマードバルキリーに搭乗して単機で迎撃を行った。

ボドル基幹艦隊との戦闘では、マクロスの艦橋付近にGBP-1Sを装着したVF-1Aがファランクスと共に配備された。

GBP-1Sによる重装化は、バトロイド時に余剰となる熱核タービン・エンジンの出力を有効に活用するための仕様でもあった。

搭乗/装着方法

GBP-1Sの装着は通常、専用の作業区画で行われるが、非常時にはバトロイド同士で装着を行うケースもあったと言われている。また、パイロットは装着状態で待機する機体に搭乗した。

装着作業は台座の上で行われ、出撃時には台座がスライドして発進位置に移動する。また、発進直前までコクピットシートは機外に露出したままとなる。

機体構造

GBP-1Sはバトロイド形態に外装する方式で、頭部以外のほぼ全身を覆う構造となっている。装着時には機体重量が倍増するが、アフターバーナーと補助ブースターを併用することでホバリングやジャンプ移動も可能となっていた。

▶肩部の形状にはデストロイドとの共通性が見られ、全体的なフォルムもデストロイドに近いものとなっている。

外観と兵器としての特性が大きく変わるため、兵士たちからは「アーマードバルキリー」と呼ばれるが、正式名称はVF-1 バルキリーのままである。

▶背部補助ブースターはスーパーパーツのブースターユニットに形状が似ているが、より小型である。

四面図

上はアーマードバルキリーの四面図である。GBP-1Sの装着によって、機体のボリュームが増しており、デストロイドに近いシルエットとなっていることがわかる。

上はGBP-1S装着作業区画の乗降スペース付近。乗降用通路は機体に合わせて折れ曲がる仕組みとなっている。

待機状態のアーマードバルキリーにはエネルギー供給用のケーブルが接続されており、台座が移動する際に設備側のコネクタが外れる。

パイロットの乗降はバトロイドの方式がそのまま用いられる。機体上部に露出したシートが収納され、前方に倒れた頭部が通常位置に戻る。

武装

バトロイド形態のVF-1は、柔軟な戦闘力を有しているが、武装が豊富なデストロイドに比べると火力不足は否めなかった。これを解消するため、GBP-1Sはプロテクターに大量のミサイルやグレネードを内蔵し、火力を増強している。追加された武装がすべて火薬弾頭式の飛翔兵器なのは、瞬間での最大火力に優れることと、システムの排除を念頭に置いた低コスト化などが理由であった。なお、主翼は折り畳まれて固定されるため、翼下ハードポイントは使用できないが、ガンポッドと頭部レーザー機銃は使用可能である。

Ⓐ エリコーンGH-32 グレネード・クラッシャー

胸部10発、肩部11発×2、脚横8発×2、脚後4発×2の計56発が装備されている。下はこの兵装に用いられる弾体で、側面のスリットは高機動ノズル。また、肩部ウェポンベイには8発の大型弾の装填も可能。

▼胸部
▶脚部
▲肩部
◀超高機動マイクロミサイル

Ⓑ エリコーンGA-100 高速徹甲クラッシャー

両腕部プロテクターには3連装ランチャーを内蔵している。プロテクター後部の弾倉と合わせ、計6発の高速徹甲弾が装填される。また、側面のスリットは排気口となっている。

▲高速徹甲弾

Ⓒ ラミントンH-22T 大型ハンドグレネード

腰部プロテクターの側面には、大型ハンドグレネードが左右3発ずつマウントされる。

▼各部ランチャーのカバーを展開した発射状態。脚部グレネード・クラッシャーパックと腰部ハンドグレネードはケースごと分離できる。

各部のランチャーを一斉発射することも可能で、瞬間最大火力はデストロイドを凌ぐほどである。

武装などを見ても陸戦兵器としての傾向が強いシステムだが、宇宙空間でも性能は十分に発揮できる。

▲脚部グレネード・クラッシャーのうち4基は後方に向けて配置されており、全方位への火力展開が可能である。

排除方法

GBP-1S装着時には他形態への変形が不可能だが、プロテクターは一瞬で排除することが可能であった。武装を使用した後や大きく損傷した場合などに排除し、その後、VF-1で状況に応じた行動を取るといった、柔軟な運用が可能であった。

ケルカリアの迎撃に当たった一条機は、武装を撃ち切ったのち、破損したプロテクターを排除。その後、接近戦を行って敵艦を撃破した。

右はプロテクターを排除した瞬間を示している。弾切れや被弾などで機能が低下した場合、操縦席の左手のレバーを操作して排除を行う。また、各パーツは別個に有線接続され、特定のパーツだけを排除することも可能。

EXTRA REPORT 関連事項

アーマードパックの進化

GBP-1Sに代表されるアーマードパックは、VFの発展とともに進化を続け、主力機の追加装備として一般化していった。そして、火力と耐弾性の向上に伴う汎用性の欠如という問題も、可変機構に対応したアーマードパックの登場によって解消されることとなった。

7
VF-11 サンダーボルト用のAPS-11。GBP-1Sのコンセプトを受け継いだ重装化オプションで、火力と耐弾性の大幅な増強を実現している。

F
◀VF-25S
APS-25A/MF25を装備したVF-25S、通称アーマードメサイア。装着したままでも変形が可能。

フルブス・バレンス級

基幹艦隊の中枢を担う超巨大機動要塞

艦体解説

ゼントラーディ軍は、数十万から数百万隻規模の艦艇からなる基幹艦隊を数千単位で銀河系に展開しており、それら各基幹艦隊を統括する司令艦が、フルブス・バレンス級機動要塞艦である。本級は大規模艦隊を指揮・運営する機能と所属艦艇を維持する機能を有し、基幹艦隊の核としての役割を果たしている。第一次星間大戦においては、第118基幹艦隊を統括するフルブス・バレンス[illegible] ⅣⅡⅩⅠが地球人類と交戦した。

主要クルー

ボドルザー

データ

所属▶ゼントラーディ軍
全高▶約890km
全長▶約510km
運用質量▶約120京t
乗員数▶約20～100万人
主動力系▶ウォーケリ・カタフィルラ・ヒートパイル・メガクラスターシステム
重力制御系▶ウォーケリ・カタフィルラ・グラヴィティコントロール・メガクラスターシステム
推進系▶ウォーケリ・カタフィルラ・マクロ・ノズル・メガクラスターシステム
フォールド系▶ウォーケリ・カタフィルラ・フォールド・システム・メガクラスターシステム
兵装▶大出力誘導収束ビーム砲／対惑星用/対機動要塞艦用大型反応弾頭ミサイルランチャー／近接対艦ミサイル・ランチャー／対小型機動兵器用近接マイクロ・ミサイル・ファランクス各多数

開発系譜図

▼
フルブス・バレンス級

サイズ比較

地球
フルブス・バレンス級

フルブス・バレンス級 ⅣⅡⅩⅠ▶

フルブス・バレンス級は小惑星に匹敵する規模の機動要塞で、ゼントラーディ軍の大型[illegible]でさえ米粒に見えるほどの巨大さであり、捕虜となったマクロス乗員を圧倒した。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶フルブス・バレンス級

運用記録

フルブス・バレンス級は5,000隻程度が量産され、現在でも銀河系内で2,000〜3,000隻ほどが稼働していると考えられている。同級が統括する基幹艦隊の強大な単位戦力は言うまでもなく、同級自体も膨大な武装を備え強固な要塞として機能する。ただし、就役当初に存在した反応兵器は大半が使い尽くされたか、反応物質が半減期を過ぎて使用不能となっているため、現在は通常弾頭が用いられているという。運用は銀河帝国分裂戦争の最盛期から始まっており、艦齢は平均で10万周期を超え、30万周期に達する艦も存在する。約480万隻の艦艇を擁する第118基幹艦隊の旗艦であったフルブス・バレンス級 ⅣⅡXIは、その総攻撃によって地球を壊滅状態に追い込んだものの、SDF-1 マクロスの突入攻撃(マクロス・アタック)によって破壊されている。

ボドルザーの乗艦であるフルブス・バレンス級 ⅣⅡXIは、グランド・キャノンとリン・ミンメイの歌による艦隊の混乱の隙を突いたSDF-1のマクロス・アタックで撃沈された。

外観／エアロック周辺

表層は長期に渡る運用に備えて自己生長機能を有する複合積層装甲で、メガトンクラスの反応兵器の直撃にも耐える。その内部には複数の自動工場システムが組み込まれ、艦体の自己生長や所属艦艇の補修用資材の生産を担っている。なお、それらに必要な鉱物資源は周辺の惑星から調達され、輸送艦で運び込まれていた。

小惑星に匹敵する規模の要塞であり、内部にはkm単位のサイズを誇るゼントラーディ軍の艦艇が多数停泊できるほどの広大なスペースが存在する。

艦外殻には大推力の推進機関が分散配置されているが、あまりの大質量のため機動性はきわめて低い。

▲エアロック

▲エアロックの巨大通路

▲ブリッジ

司令センター

基幹艦隊の司令艦として設計されたフルブス・バレンス級には、他の艦艇よりも大規模な指揮設備が設けられている。なお、本級は艦隊に所属する兵士の休息施設を兼ねており、プロトカルチャーの母星を再現した250平方kmにもなる自然公園が存在したとも言われており、文化を失ったゼントラーディ軍にあって特異な存在だったようだ。

▶司令センター

▲司令長官私室

◀司令長官用シート

▼司令長官用コンソール

▲会議卓

▲会議卓シート

小型連絡艇

ゼントラーディ人のサイズに比べてもなお広大な艦内では、移動に小型連絡艇が使用された。ただし、本級の艦内を自由に行き来できる者は限られ、連絡艇も主に上級将校の移動に用いられた。

▲コクピット

護衛艦隊

本級には防衛戦力として統括下の基幹艦隊から護衛艦隊が派遣されていた。それらは第118基幹艦隊におけるラプ・ラミズ麾下の直衛艦隊のように、司令長官の特命を受けて別行動を取るケースもあった。

◀標準戦艦
護衛艦隊の主力はスヴァール・サラン級が担った。

▶直衛用ピケット艦
ゼントラーディ軍艦艇の中ではもっとも小型の部類に入る斥候艦。

Illustration by Hidetaka Tenjin

大気圏外用ブースター装着 VF-1

スーパーバルキリー

機体解説

大気圏内外での運用能力を求められたVF-1は、航空機の形状を保つためにプロペラントの搭載量を制限せざるを得ず、機動に大量の推進剤を要する宇宙空間では行動時間が低下する欠点を抱えていた。その問題を解消すべく開発された追加装備、スーパーパーツは、その運用効果の高さが認められ、第一次星間大戦中に急ぎ配備が進められた。この装備の中心である機体上部のブースター"FASTパック"から、このタイプのバルキリーは「FASTパック装備型バルキリー」(通称スーパーバルキリー)と呼ばれる。

大型ブースターをはじめとする外装ユニットの追加で性能の強化を図っており、航空力学の制約を受けない宇宙空間においては極めて有効な装備であった。

スーパーパーツを装備したままでも全ての形態に変形が可能で、運用性に優れていた。追加武装によって火力も増強されており、大幅な戦闘力向上を実現している。

主要パイロット

一条輝

データ

所属▶統合軍
全長▶14.0m
全高▶5.5m
全翼▶14.7m
空虚重量▶調査中
兵装▶マイクロミサイルポッド×2/マイクロミサイルランチャー×2
エンジン▶P&H+EF-2001
最大速度▶調査中

サイズ比較

VF-1
スーパーバルキリー

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶スーパーバルキリー

運用記録

VF-1の実戦運用に伴い、大気圏外における戦闘継続時間の短さという問題点が表面化すると、開発メーカーのひとつである新中州重工は、独自に対策を講じ、宇宙用追加装備スーパーパーツの試作に着手した。システムの開発は短期間で進み、完成とともに統合軍の制式採用を受けて逐次配備されていった。ただし、開発時期が第一次星間大戦の混乱期と重なるため、実戦投入の正確な経緯は判然としてない。しかし、大戦末期の宇宙戦力はFASTパック装備型が大半を占めており、2010年代の主力機となっていたことは間違いない。また、星間大戦を終結に導いたボドルザー艦隊との戦闘の際には、出撃したバルキリー隊のほとんどがスーパーバルキリーに換装されており、高い戦果を挙げている。

スーパーバルキリーは「ブービーダック」のコードネームで呼ばれ、地球行きのシャトルの救援任務で初めて運用された。

「ミンメイ・アタック」時には、隊長機、一般機を含めてほとんどのバルキリーがスーパーバルキリーに換装された。

エースパイロット専用機のスーパーパーツは、機体色と同じそれぞれのパーソナルカラーで塗装されたものもあった。

スーパーパーツ装備

機体上部に装備される大型ブースターユニットは、NP-BP-01 FASTパックと、換装可能なオプションのHMMP-02 マイクロミサイルポッドで構成されている。また、脚部にはCTB-04 コンフォーマルタンク/高機動スラスター、腕部にはNP-AR-01 マイクロミサイルランチャーが装備され、この装備全般をしてスーパーパーツと呼ぶ。

スーパーパーツ装備時には下腕部(機体下面)にもユニットが装着されるため、ガンポッドはその下部に接続される。

マイクロミサイル

ブースター部のHMMP-02 マイクロミサイルポッドは、1基につき24発装備し、4門のミサイル発射口を備える。腕部のNP-AR-01 マイクロミサイルランチャーには、両端に計3門の発射口が設けられている。なお、HMMP-02はブースターに連結されるモジュールのひとつで、用途に応じて異なる装備に換装することが可能である。

スーパーパーツで追加された武装によってミサイルの搭載量が増大し、バルキリーの火力と戦闘継続時間の向上が実現されることになった。

バーニアノズル

脚部に装着されるCTB-04 コンフォーマルタンク/高機動スラスターは、その名称が示す通りに反応エンジン用推進剤・冷却剤増槽と高機動バーニアを一体化した装備である。NP-BP-01が膨大な推進力を付与するモジュールであるのに対して、CTB-04は航続距離と機動性能の向上を図るシステムとなっている。バーニアノズルは1ユニットにつき5基が装備されており、姿勢制御を補助する役割を果たしている。

ユニットの各部にバーニアノズルを配置して複数の推力方向をカバーすることで、運動性の強化を図っている。

主推力はVF-1自体のスラスターとブースターでまかなわれ、高機動バーニアノズルは細かな機動を行う際に用いられる。

ファイターモード

スーパーバルキリーの特徴のひとつは、大型ブースターが生み出すファイター形態の爆発的な推進力にある。この大型ブースターは化学燃料式ロケットを用いており、反応エンジンに比べて低コストで済む。そうしたシステムの利便性も、スーパーパーツの普及を促した要因となっている。

スーパーバルキリーには、反応弾が追加装備されることもあった。反応弾は各形態で運用可能だが、モジュールの配置構造上、主にファイター形態で使用された。

▲▼FASTパック装備型VF-1Sのファイター形態。スーパーバルキリーにおいては、最も運用頻度の高い形態がファイターであった。

CTB-04 コンフォーマルタンク/高機動スラスターの装着によって、ファイター形態時のエンジン部は、スーパーパーツ非装備時に比べて下方に配置される。

▲FASTパック装備型VF-1Jのファイター形態。J・A・S型と各タイプのバルキリーにスーパーパーツの装着が可能であった。

ガウォーク/バトロイドモード

各形態への変形を妨げない構造はスーパーパーツの長所であり、VF-1本来の性能を損なうことなく運用が可能だった。宇宙空間での作戦行動を前提としているため、ガウォークの運用機会は少なかったが、スーパーパーツが追加装甲を兼ねていることから、バトロイドでの格闘戦にも適していた。

スーパーバルキリー特有の大推力はファイターのままで制動をかけることが難しく、急制動には脚部を前方に向けるガウォークの機能が用いられた。

◀▶FASTパック装備型VF-1Sのバトロイド形態。主翼への反応弾装備時もバトロイドの運用は可能である。その際は主翼は左右に開いたままとなる。

▲FASTパック装備型VF-1Jのガウォーク形態。腕部ミサイルポッドの運用には、ファイター形態よりも、バトロイド/ガウォーク形態の方が適していた。

Mechanic Sheet メカニックシート

スーパーバルキリー

Sheet 07 B

VF-1J スーパーバルキリー マックス機

機体解説

新中州重工製のFASTパックなど宇宙用追加装備(スーパーパーツ)を装着した、マクシミリアン・ジーナス搭乗のVF-1J スーパーバルキリー。エンジンや電装をチューンナップしたVF-1J後期型にFASTパックの出力が追加されたことで、機動力と攻撃力が向上。圧倒的な戦闘力を獲得している。第一次星間大戦の最終決戦で展開された「ミンメイ・アタック」の際に本形態で出撃したほか、大戦終結後の宇宙航行時には、スーパーパーツ装着状態で出撃するのが基本となった。

マックス専用のVF-1J スーパーバルキリーは、同じくスーパーバルキリー仕様となったVF-1J ミリア機と共に出撃する機会が多かった。

大戦終結後、FASTパックを装着して出撃するマックス機。スーパーバルキリー時に得られる機動性と攻撃力は、あらゆる状況で効果を発揮した。

ファイター

▲機体上部のFASTパックを中心に、マイクロミサイルポッドや高機動スラスターなど各所に追加装備したのが本仕様だ。

主要パイロット

マクシミリアン・ジーナス

ガウォーク

▶スーパーバルキリー仕様のVF-1J ガウォーク形態。腕部外側に装着されているのはマイクロミサイルランチャーである。

バトロイド

バトロイド形態でも、スーパーパーツの能力を最大限に活かすことが可能である。

VF-1J スーパーバルキリー ミリア機

機体解説

マックスとの星間結婚により地球統合軍に参加したミリア・ファリーナ・ジーナスが搭乗したVF-1Jのスーパーバルキリー仕様。マックス機と同じく、本体となるVF-1Jは後期型であり、性能や機能はほぼ共通と見られる。「エースのミリア」と呼ばれたミリアの搭乗もあって、本仕様も第一次星間大戦末期や、大戦終結後の紛争で多大な戦果を挙げた。また、2045年にも、マクロス7船団においてミリアの乗機として本仕様が運用された記録が残されている。

「ミンメイ・アタック」時に出撃したミリア専用のVF-1J スーパーバルキリー。マックス機と共に多数の敵機を撃墜した。

2038年に地球を出発した第37次超長距離移民船団(マクロス7船団)に帯同した本機は、ミリアやその娘であるミレーヌなどが搭乗している。

ファイター

▲ファイター形態のミリア専用VF-1J スーパーバルキリー。「ミンメイ・アタック」時には翼下に反応弾を搭載して出撃している。

主要パイロット

ミリア・ファリーナ・ジーナス

ガウォーク

◀ガウォーク形態でも、FASTパック以下追加パーツの装着によって、機体の運動性能が大幅に向上している。

バトロイド

ガンポッドのみならず、ミサイルを用いて戦闘を行った。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶スーパーバルキリー

VF-1A スーパーバルキリー 一般機

機体解説

VF-1シリーズの中でも、最もスタンダードなタイプであり、量産もなされたVF-1A（A型）のスーパーバルキリー。第一次星間大戦の末期に統合軍が行った「ミンメイ・アタック」時に見られた仕様で、大戦終結後、宇宙戦においては本仕様が標準となっていたようだ。J型やS型に比べてやや火力が不足しているなど、A型には問題点も多々あったが、スラスターやミサイルポッドを備えるスーパーパーツの装着により、そうした箇所を補うことができた。

「ミンメイ・アタック」時に見られたVF-1A スーパーバルキリー。本仕様のA型が大量に投入され、ゼントラーディ部隊と交戦した。

第一次星間大戦終結後は、VF-1Jの一般機仕様と共に、スーパーパーツを装着して出撃する姿が確認されている。

ファイター

▲スーパーパーツを装着した、ファイター形態のVF-1A。統合軍の主力機として運用された。

ガウォーク

工場衛星を奪取する作戦で、VF-1Jの一般機仕様と共に編隊を組んだVF-1A スーパーバルキリーが見られた。

▶ガウォーク形態のVF-1A スーパーバルキリー。脚部のみを機体の制御用に展開することもあった。

変形／排除シークエンス

VF-1シリーズでは、FASTパックをはじめとするスーパーパーツが、各部の可動域を損なわない状態で配置されている。そのため、スーパーパーツを装着した状態でも各形態への変形が可能となっていた。またスーパーパーツは、パイロットの任意で排除することが可能である。その際は、コクピットに設置された排除レバーを用いてパーツを排除した。

スーパーパーツ排除レバー

▼側面

VF-1シリーズのスーパーパーツ排除レバー（点線部分）は、メインディスプレイの右上に設置されていた。レバーを作動させることで、機体各所に設置されたスーパーパーツを排除することが可能となっていた。

脚部展開による減速（VF-1S）

パイロットが形態選択レバーをファイターから切り替える。

追加パーツを装着した脚部が展開、進行方向に向けられる。

脚部裏から一気に推力を進行方向に噴射し、急激にスピードを低下させた。

ファイター → バトロイド（VF-1J ミリア機）

パイロットがファイター形態からバトロイド形態にレバーを切り替える。

まず脚部と腕部が変形。その後、胸部、腰部が変形し、頭部が露出する。

主翼を折り畳み（反応弾装備時は展開したまま）、バトロイド形態へ移行。

パーツ排除パターン（VF-1S）

パイロットが排除レバーを稼動させ、スーパーパーツの排除が開始される。

FASTパック以下、機体各所のスーパーパーツが分離する。

本体から排除されたスーパーパーツは、そのまま廃棄される。

ケアドウル・マグドミラ10107

艦隊旗艦と突撃艦の機能を併せ持つゼントラーディ軍中型戦艦

データ

所属▶ゼントラーディ軍
全長▶約3000m
運用慣性質量▶1億30万t
動力系▶本体：ヴェルケル・ケッテレル　ヒートパイル・システム・クラスター
惑星突入艦：ケルシェ・ヴザール　ヒートパイル・システム・クラスター
重力制御系▶本体：ヴェルケル・ケッテレル　グラヴィティ・コントロール・クラスター
惑星突入艦：ケルシェ・ヴザール　グラヴィティ・コントロール・クラスター
超時空航行系▶本体：ヴェルロア・グザ　フォールド・システム・クラスター
惑星突入艦：ヴェルロア・グザ　フォールド・システム・クラスター
噴射推進系▶本体メイン・スラスター：ヴェルケル・ケッテレル　マクロノズル・クラスター
本体バーニア・スラスター：ヴェルケル・ケッテレル　バーニアノズル・クラスター
惑星突入艦メイン・スラスター：ケルシェ・ヴザール　マクロノズル・クラスター
惑星突入艦バーニア・スラスター：ケルシェ・ヴザール　バーニアノズル・クラスター
兵装▶誘導集束ビーム砲システム／対艦・対空ミサイルランチャー／艦載小型機動兵器、各多数

サイズ比較

開発系譜図

主要クルー

特殊な構造が注目されるが、ビーム砲やミサイルなどの武装が豊富で戦闘艦としても優れており、艦隊の中枢を担うに十分な性能を有していた。

第7空間機甲師団の旗艦のほか、ボドルザー直衛艦隊司令ラプ・ラミズもこの艦を運用した。なお、彼女の艦は紫色に塗装されていた。

艦体解説

ゼントラーディ軍が運用したケアドウル・マグドミラは、艦隊指揮を担う中型戦艦と惑星大気圏降下が可能な突撃艦というふたつの特性を併せ持つ。それを実現しているのが本艦特有の分離機構で、本体から切り離された艦首部分を大気圏突入艦として別個に運用することが可能となっている。他のゼントラーディ軍艦艇に比べ構造が複雑で脆弱性が目立つという欠点も指摘されたが、単艦での作戦遂行能力は非常に高く、遊撃や特殊任務を主とする小規模艦隊の旗艦として活躍した。中でも、カムジン・クラヴシェラ麾下の第118ボドル基幹艦隊第109分岐艦隊第7空間機甲師団の旗艦を務めたケアドウル・マグドミラ10107、通称「カムジン艦」の奮闘は広く知られている。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶ケアドウル・マグドミラ10107

運用記録

ケアドウル・マグドミラは、太古のプロトカルチャーによる銀河帝国分裂戦争の中期に登場した艦と言われており、ヴェルケル・ケッテレル第49377325ゼントラーディ全自動兵器廠惑星にて建造が続けられてきた。ただし、艦隊旗艦としての役割故にゼントラーディ軍艦艇の中では希少な存在で、ごく一部の艦隊でしか見ることはできない。第一次星間大戦における代表的な運用例は、「カムジン一家」として悪名高い第7空間機甲師団の旗艦と、ラプ・ラミズ率いる第118基幹艦隊(ボドルザー艦隊)の直衛艦隊旗艦が挙げられる。特に前者はSDF-1 マクロスと頻繁に交戦し、地球帰還直後のSDF-1に対して突撃艦を特攻させるという強引な戦法を披露している。なお、同突撃艦はSDF-1のダイダロス・アタックによって撃沈され、以降は分離軌道艦のみで運用されている。また、SDF-1と基幹艦隊との決戦では第7空間機甲師団と直衛艦隊の双方がSDF-1に味方し、両艦も戦闘に参加した。なお、戦後の処置については不明である。

太平洋上に着水したSDF-1に対し、カムジンは突撃艦で地球に降下して強襲を仕掛け、撤退の際に無人の突撃艦を特攻させた。

ブリタイに代わってSDF-1監視の任に就いたラプ・ラミズは積極的な戦闘行動を控えたため、乗艦も交戦の機会は少なかった。

外観／内部

▼▶突撃艦となる艦首部分は極端に尖った形状をしており、他のゼントラーディ軍艦艇のどれとも共通しない特徴的なフォルムを有する。また、艦のサイズはスヴァール・サラン級標準戦艦よりも一回り大きく、機動兵器の艦載能力にも優れている。

◀両舷下面がハの字型に開いた艦体形状は、本艦にのみ見られる構造である。艦尾にはメイン・スラスターに挟まれる形で、3基の大型降下カプセル射出口が設けられている。

カムジン艦▶ブリッジ
▶巨大なフロアに多数のスクリーンを配したブリッジの構造は、他のゼントラーディ軍艦艇と共通している。フロア奥の一段上に置かれた艦長室からはブリッジ全体が見渡せる。

▶ブリッジ作戦卓

▼カムジンのシート

分離突撃艦

▼▶分離突撃艦(惑星突入艦とも呼ばれる)は全長1,577mで、これだけでもSDF-1を超えるサイズを誇る。大気圏突入能力を有するだけでなく、強力な武装と艦載機運用能力も備えており、惑星上に戦力を展開する際の母艦として用いられた。

▲戦闘ポッド発進口

分離軌道艦

▼艦の本体である分離軌道艦(全長1,864m)は、突撃艦を惑星に降下させたのち軌道上にとどまり、必要に応じて戦力の回収に当たる。また、こちらのモジュールも十分な武装と艦載機収容能力を有している。ただし、分離後の艦首接合部は内部機構がむき出しになるため耐弾性が低く、艦の弱点となる。

▲分離後の艦首部

ゼントラーディ軍戦艦

ゼントラーディ軍を支える大型戦艦群

惑星揚陸強襲艦にカテゴライズされる全長3000mの大型艦キルトラ・ケルエール。強固な装甲を持つのが特徴である。

▼キルトラ・ケルエール

▲スヴァール・サラン

ゼントラーディ軍艦隊の主戦力である2000m級の戦艦スヴァール・サラン。耐久年数に優れる。

1500m級の中型砲艦で、ボドル基幹艦隊所属の艦が地球を攻撃している。

▼中型砲艦

▲ピケット艦

スヴァール・サランなどと共にボドル基幹艦隊に配備されている小型艦船、ピケット艦。

艦体解説

ゼントラーディ軍は、数十〜数百万単位の艦艇で構成された基幹艦隊を持つ。基幹艦隊は、ノプティ・バガニス5631やケアドウル・マグドミラ10107といった艦隊指揮用の艦をメインとして、戦艦や輸送艦、砲艦など、多彩な艦艇によって編成されている。3000m級のキルトラ・ケルエール、2000m級のスヴァール・サラン、1500m級の中型砲艦といった艦艇群は、これら基幹艦隊を構成するには欠かせない艦となっていた。西暦2009年、地球統合軍と遭遇したボドル基幹艦隊にもこれらの艦艇群が見られ、艦隊戦力の一翼を担っていた。

データ

キルトラ・ケルエール　**全長**▶約3000m　**運用慣性質量**▶1億5千万t

動力系▶ウォーケリ・カタフィルラ ヒートパイル・システム・クラスター

重力制御系▶ケルシェ・ヴザール グラヴィティ・コントロール・クラスター

噴射推進系▶メイン・スラスター：ウォーケル・カタフィルラ マクロノズル・クラスター

バーニア・スラスター：ウォーケル・カタフィルラ バーニアノズル・クラスター

武装▶誘導集束ビーム砲システム×17、対艦対空ミサイルランチャー×96、艦載小型機動兵器×多数

製造▶スプルトラ・シフド 第18899550 ゼントラーディ全自動兵器廠惑星

スヴァール・サラン　**全長**▶約2000m　**運用慣性質量**▶3950万t

動力系▶ゲテルマキュラ・ゾリア ヒートパイルシステム・クラスター

重力制御系▶ゲテルマキュラ・ゾリア グラヴィティ・コントロール・スラスター

超時空航行系▶シク・テルナケラ フォールド・システム・クラスター

噴射推進系▶メイン・スラスター：ウォーケル・カタフィルラ マクロノズル・クラスター

バーニア・スラスター：ウォーケル・カタフィルラ バーニアノズル・クラスター

武装▶誘導集束ビーム砲システム×多数、対艦対空ミサイルランチャー×多数、艦載小型機動兵器×多数

製造▶ゲテルマキュラ・ゾリア　第4146163〜53717550　ゼントラーディ全自動兵器廠惑星

サイズ比較

Mechanic Sheet
メカニックシート
ゼントラーディ軍戦艦

運用記録

キルトラ・ケルエール、スヴァール・サラン、中型砲艦という3種の艦艇は、ボドル基幹艦隊の一部として、SDF-1マクロスと戦闘を繰り広げている。前線での艦隊戦のほか、ノプティ・バガニス5631の防衛、小型機動兵器の出撃管理などを行っている。

ブリタイ艦隊の中核であったスヴァール・サランは、フルブス・バレンス級の護衛も担当した。

▲側面
円柱型の艦体を持つ。堅牢性を重視した構造のため、火力は他のゼントラーディ艦に比べて抑えられている。

キルトラ・ケルエール

惑星揚陸強襲艦であるキルトラ・ケルエールは、敵拠点を強襲し、兵員・兵器を投入することを想定している。そのため堅牢性は他の艦よりも高く、多少の砲撃であれば耐えることができた。また、前線に物資を運搬する役目を果たすなど、その運用範囲は広い。

ボドル基幹艦隊に多数の艦が配備されており、SDF-1マクロスとの戦闘でもその姿が確認されている。

▶後方
スラスターノズルが集中的に設置された後方部。上部には、大型降下ポッドなど艦載機の射出口がある。

▶正面
艦の下部には複数の武装を設置し、前方の敵に対して攻撃を仕掛けることができた。

スヴァール・サラン

ボドル基幹艦隊の中核をなす標準戦艦で、各所に備えた武装で敵艦や拠点を粉砕する。プロトカルチャー末期から開発されていたと言われる。

SDF-1マクロスとの戦闘では、ビームの一斉射でマクロスにダメージを与えた。

▼側面
ケアドウル・マグドミラ10107に近い形状で、艦首が細くなっているのが特徴である。

◀後方
左右2ヶ所にスラスターノズルを備えている。中央部は艦載機の射出口。

▲正面
艦首や艦の左右両側に砲門を複数設置しているのがわかる。

▼甲板
スヴァール・サランの甲板。攻撃時は、格納されている誘導集束ビーム砲システムなどの砲門が露出する。

▼通路
ゼントラーディ人の体型に合わせて作られた通路。壁には火器庫(右の扉部分)などが設置されており、緊急時に備えている。

中型砲艦

砲撃力に優れた艦艇で、艦首部分が上下に分離すると内部から主砲が露出、発射態勢となる構造であった。

▲カモフラージュ時
外装に森林を設置したカモフラージュ状態。カムジンが拠点としていた。

▼遠距離から敵艦や拠点を狙うために運用されていた。

▼サブ・コントロール・ルーム
多数の機器類と航路図が設置されたコントロール・ルーム。

ピケット艦

ピケット艦は、ゼントラーディ軍戦艦の中でも最も小型で、他艦のサポートや空戦ポッドの出撃管制を担っていた。

◀後部中央には空戦ポッドなどの発進口を備える。

▲ボドルザーが乗艦するフルブス・バレンス級の護衛艦隊に配備されていた小型艦。

MBR-04-MkⅥ

陸上戦力の中核を成す 砲撃戦用デストロイド

● データ

所属▶地球統合軍
全高▶11.27m（頭部まで）
全備重量▶31.3t
主機▶クランス・マッファイ MT828 熱核反応炉
主機出力▶2800SHP
副機▶GE EM9G 燃料発電機
副機出力▶450kW
標準武装▶マウラー PBG-11液冷式荷電粒子ビーム砲×2／ラミントン M-89 12.7mm空冷マシンガン×2／アストラTZ-Ⅲガン・クラスター×2（レーザー砲、25mm機関砲／180mmグレネードランチャー／火炎放射器）／ビフォーズ12連発近接自己誘導ロケット弾ランチャー×2／エリコーン対空自己誘導ミサイル6連発オプションパック×1

● サイズ比較

● 開発系譜図

● 主要パイロット

ダーン中尉

機体解説

MBR-04-MkⅥ トマホークは、オーバーテクノロジー(OTM)を応用した陸戦兵器群「デストロイド」で最も成功を収めたタイプ04シリーズを代表する機体である。型式番号のMBR(=Main Battle Robot)という略称が示すように、主力戦車に代わる人型歩行兵器として開発された本機は、砲撃戦を重視した大火力・重装甲の設計がなされている。対空能力には劣るが、後発の機体に引けをとらない多彩な武装を有しており、デストロイドシリーズの中でもトップクラスの火力を誇る。その反面、両腕部を固定武装化しているため格闘戦には不向きで、他機種との連携によって真価を発揮した。本機は可変戦闘機(VF)と対をなす陸上戦力の中核として運用され、第一次星間大戦におけるゼントラーディ軍との戦いで多大な戦果を残している。

2040年代には、老朽化した機体を作業用として民間に払い下げることもあった。マクロス7船団のシティ7でも、民間人が所有するトマホークが確認されている。

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶MBR-04-MkⅥ トマホーク

運用記録

MBR-04-MkⅥ トマホークの原型はタイプ04（MBR-04）と呼ばれる機体で、タイプ01から03までの試作を経て開発がスタートした。2002年5月に設計が開始され、翌2003年12月には試作へと移行。2007年2月にはタイプ04の初期型にあたるMkⅠが完成し、同年11月のMkⅥ、すなわち本機のロールアウトという流れで開発が進められた。また、タイプ04は機体設計に余裕があったことから、発展型の開発が並行して行われている（これが04シリーズと呼ばれる系列機の原型となる）。一方、演習で良好な結果を残したMkⅣ及びその出力強化型のMkⅥは量産に移行し、SDF-1マクロスには進宙の時点で相当数が配備され、一説には440機が搭載されたとも言われる。なお、SDF-1においては同艦の表層に展開して迎撃を行うなど、直援戦力として運用されることが多かった。

第一次星間大戦終結後は都市周辺などに配備され、治安維持にも従事した。ゼントラーディ人が問題を起こした際に出動することもあった。

機体構造1

MBR-04-MkⅥのベースとなったタイプ04の設計と開発は、ビガースとクラウラーの2社が共同で手がけた。その構造的特徴のひとつとして挙げられるのが、キャパシティの高さである。変形機構と汎用性を両立するために構造に余裕を持たせられなかったVFとは対照的に、タイプ04の機体構造には手を加える余裕が十分にあった。それが武装の搭載量や設計の発展性へと繋がり、タイプ04のバリエーション展開を促進することになった。本機はそうした特徴を重装化の方向に活かした例であり、デストロイドを象徴する火力と耐弾性を獲得するに至った。

ガン・クラスターのような複雑な内蔵火器を装備できた点も、機体の内部スペースに余裕があったからこそと言える。

設計においては耐弾性の強化も重視された。しかし、ゼントラーディ軍機動兵器の火器の直撃に耐えられるほどの装甲強度は有していない。

▲武装は上半身に集中しており、タイプ04の胴体ユニットが高い搭載能力を有していることがわかる。この特徴により大火力化を実現した。

▶背部左側の半球部は冷却材タンク。他のタイプ04系列機に比べて背部が張り出しており、火器の搭載にともなうシステムの大型化がうかがえる。

機体構造2

MBR-04-MkⅥは動力系に熱核反応炉と燃料発電機を併用しており、その最高速度は時速180kmにも達し、背部下方に備える2基のスラスターノズルによるジャンプ移動も可能である。また、腰部左右に冷却器と後方に排気口を備え、機体各部にはライトを設置するなど、地上での運用を想定した仕様が随所に見られる。

本来は陸上での運用を目的とした機体で、SDF-1の艦内に侵入した敵機動兵器と交戦したケースもある。ただし、その性能を完全に活かしていたとは言い難い。

▼正面　▼背面　▼側面

内部構造

タイプ04の各機種は、腰部から脚部に至るメインフレームをシリーズの共通モジュールとして使用している。このモジュールには熱核反応炉と歩行システムの駆動系が含まれており、デストロイドに投入されたOTMが集約されている。また、この共通化によって生産ラインの統合が図られることとなり、生産性と整備性の向上を実現した。さらに、この内部構造はバリエーションの急速な発展にも寄与したのである。

上は装甲を外した状態のタイプ04シリーズの内部モジュール。機体外部には各機種特有の機構が追加される場合もあるが、膝から下は装甲を含めて系列機全てに同じ構造が採用されている。

EXTRA REPORT 関連事項

MBR-04の変遷

初の実用型デストロイドとなるMBR-04-MkⅥの完成までには、実に7年以上の歳月を要し、複数の試作機が製作された。そのうちのひとつであるデストロイド・シャイアンは、統合戦争末期に先行量産が行われ、異星人遺物奪取作戦に投入された。

▶シャイアン
最初期のデトロイドで、空母アスカに配備された。頭部の形状や固定武装化した腕部などに共通点が見られる。

◀MBR-04-MkⅣ
左のMBR-04-MkⅣはMkⅥが配備される以前に運用されていたと思われる機体である。オプション装備の位置や腕部ビーム砲の形状が異なっているが、それ以外はMkⅥと共通する部分が見られる。

武装

MBR-04は、MkⅠの時点では固定武装はロケットランチャーのみというシンプルな機体だったが、火力の増強が図られた結果、多彩な武装を備える仕様となった。両腕部をビーム砲とする設計には格闘戦能力が低下するというデメリットもあったが、敵に接近される前に殲滅できるという演習結果が得られたことから、本装備が採用された（ロールアウト直前にモハビ砂漠で行われた実弾演習では、10数両の無人戦車を一瞬のうちに全滅させたとも言われる）。事実、本機は極めて高い攻撃力を誇っており、中距離砲撃戦においては他のデストロイドやVFを凌駕する性能を発揮したのである。

ダイダロス・アタックでは突入直後に一斉射撃を行う重要な役割を担い、火力の高さでSDF-1の切り札とも言える戦法に大きく貢献した。

重力下での砲撃戦が本来の運用法だが、SDF-1が置かれた状況ではその機会は少なかった。火星サラ基地での戦闘は数少ないケースと言える。

エリコーン対空自己誘導ミサイル6連発オプションパック

右肩には長距離対空ミサイルパックを装備する。これはオプション装備で、ユニット後部が装填ハッチとなっている。唯一の対空武装だが、弱点をカバーするには至っていない。

マウラー PBG-11 液冷式荷電粒子ビーム砲

前腕部全体が主砲にあたる荷電粒子ビーム砲で、砲身の根元に照準用TVアイを備える。両腕の照準装置は独立しており、それぞれが異なる目標を狙うことも可能とされる。

ラミントンM-89 12.7mm空冷マシンガン

◀テレスコープ

頭部には対人用の12.7mmマシンガン2門が内蔵されている。頭部後方にテレスコープを設けられているが、砲身の可動範囲はほとんどなく、補助武装の域を出ない。

ビフォーズ12連発近接自己誘導ロケット弾ランチャー

胸部ウェポンベイには近接用ロケットランチャーが装備されている。なお、ウェポンベイはロックアームで固定されており、分離も可能。

アストラTZ-Ⅲガン・クラスター

レーザー砲、25mm機関砲、180mmグレネードランチャー、火炎放射器を複合した火器システムで、使用時には砲身が前方にせり出す。

コクピット

MBR-04-MkⅥは2名の乗員で運用され、コクピットは胴体前部に位置している。頭部がハッチを兼ねており、前方にスライドして開閉する構造となっている。また、コクピットブロックは機体から分離させることも可能で、緊急時にはブロックのみを回収するようになっていたと考えられる。なお、頭部には2基のカメラアイを備え、上部のものはスリットに沿って可動する。下部カメラアイを覆う偏光シールドは、試作型および先行量産型は赤、量産型は緑と、反射する光の波長（色）が異なっていたと言われている。

◀左はハッチが開いた状態のコクピット周辺を上方から見たもので、シートのひとつが確認できる。パイロットの乗降時には、シートがせり上がって機外に露出する構造となっている。

パイロットは格納庫のタラップを用いて機体に搭乗する。また、非戦闘時には片方のパイロットがハッチから乗り出したまま指示を行う場面も見られた。

ZENTRADI POD

フォールド・システムを持たない兵器群の総称として「ポッド」が使われているが、その中でもケルカリアは高い戦闘力を持っていた。

▲ケルカリア

ゼントラーディ軍ポッド

ゼントラーディが所有する偵察用の戦闘兵器

主要クルー

青い風
(ワレラ/ロリー/コンダ)

艦体解説

ゼントラーディ軍は、その戦力として、フォールド・システムを持たない兵器類「ポッド」を多数所有していた。その1種で、司令部偵察ポッドに属する大型機動兵器がケルカリアである。大推力と重装甲を備える本機は、レドームを含む索敵装置を用いて偵察・諜報活動を行うだけでなく、装備された火器群を駆使して、敵防衛ラインを突破する役割を与えられていた。対地球統合軍との戦いでも、偵察部隊の中核をなす存在として配備され、可変戦闘機と激戦を繰り広げている。

伸縮可能な細長い着陸脚を備え、地表面での索敵行動も可能。50万周期にわたる監察軍との戦闘の初期に作られた兵器だと推測されている。

ノプティ・バガニス5631からリガードと共に出撃するケルカリア。高価な機体のため、各艦隊に十数機程度しか配備されていない。

データ

全長 ▶ 126.7m(航行形態時)
重量 ▶ 2,076t
動力機関 ▶ ボコムクシ熱核反応炉(出力16.8GGV×2)
推進器 ▶ ボコムクシ中型高推力熱核ロケットノズル×2
主探知器 ▶ 超長距離早期警戒ドップラーレーダー
副探知器 ▶ 重力波パッシヴレーダー
その他の探知システム ▶ 光学系、電磁波系、素粒子系各パッシヴ、アクティヴ両用クラスター
標準装備 ▶ 二重装長射程荷電粒子ビーム砲×2/近接戦用自己誘導ミサイル×12
製造 ▶ ボコムクシ第2117334ゼントラーディ全自動兵器廠

開発系譜図

? ▶ ケルカリア

サイズ比較

ケルカリア VF-1J

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶ゼントラーディ軍ポッド

ケルカリア

ケルカリアには、ドップラー式のレーダーをメインに、重力波を用いたパッシブレーダー、光学系・電磁波系のパッシブレーダーなど、距離や索敵手法の異なるレーダーを複数設置している。これらを状況に合わせて運用することで、高度な偵察行為が可能となっていた。また、標準装備として、荷電粒子を使ったビーム砲と、自己誘導ミサイルを設置。これらの火器群によって、敵拠点への先制攻撃や急襲を容易としたのである。

マクロスの艦内通信を傍受する偵察活動を、3名のスパイ(コードネーム「青い風」)が実行。男女が一緒に行動している姿を目にした乗員たちは驚きを隠せなかった。

偵察行動中にアーマードパック装備のVF-1Jと遭遇。応戦するものの、VF-1Jの突撃に遭い、乗員は脱出ポッドを使って艦から脱出した。

構造

ケルカリアは宙域での偵察活動を主としており、通常は脚部を折り畳んだ状態で運用する。フロント部にはビーム砲が、機体中央に索敵用レドームや探知器が、後方部にスラスターノズルがレイアウトされている。

◀▲宙域での航行状態。機体の左右に備える4基の脚部は、胴体に沿うようにして設置されている。

歩行シークエンス

惑星などの地表面で偵察・索敵活動を行う場合には、図のように脚部を展開し、歩行することも可能となっている。多少の段差は踏破できるが、機動性は鈍重である。

▼正面　▶背面

◀▲先端の収縮する4基の脚部によって機体を支える。敵拠点を定点観測する目的でも使用できた。

装備

▼二連装長射程荷電粒子ビーム砲

機体前方から迫る敵に対して使用されるビーム砲。連射が可能で、VF-1Jのアーマードパックを小破、パージさせた。

▼近接戦用自己誘導ミサイル

機体側面に設置された発射口から放たれる迎撃用ミサイル。誘導装置とスラスターを備えており、自動的に敵機を感知、追尾する。

▼探知器

◀胴体底部のハッチから出現する探知器。複数備えたアンテナやセンサーによって、より高度な情報収集が可能となる。

▲探知器の出現シークエンス。ハッチから探知器がせり出した後、折り畳まれているアンテナが左右に展開することで稼動状態となる。

▼レドーム

▶胴体上部に設置されたレドーム。使用時には、図のようにドーム部分が機体から上方にせり出す。

◀レドームの拡大図。ドームからレーダー波を発信し、情報を取得する構造であった。

内部

ケルカリアは、情報収集行動と戦闘行為を両立させるため、コンソールは機体のコントロールを司る操縦用、情報収集を司るオペレーター用、火器管制など戦闘を司る砲撃用に分かれている。そのため、機体の運用には最低3名による操作が必須であった。また、自爆装置や、乗員の生存性を向上させる脱出ポッドなどを備えている。

コードネーム「青い風」の3人(コンダ、ロリー、ワレラ)が搭乗し、ポッドを運用。3名が巧みに連携を取ることで、その能力を最大限に発揮した。

コクピットの内部図。上図の左奥が情報収集機関、手前が砲撃機関、右奥が操縦機関となっている。

▲表示パターン

情報収集用ディスプレイに表示される文字・図形パターン。ゼントラーディ文字が見てとれる。

ゼントラーディ軍ポッド

輸送用や降下艇として使用された大型ポッド。戦闘装備のリガードや同パイロットのほか、リガード用弾薬や備品一式を搭載できた。大気圏内外を問わず運用可能。

▼大型降下ポッド

▲回収機

2本のマニピュレーターで友軍や敵の機体を回収する。中央のサブアームは、引き込み用マジックハンド。アームや着地脚で大きく見えるが、本体は13.03mと空戦ポッドより小さい。

銀河帝国分裂戦争より伝わる戦術兵器

艦体解説

ゼントラーディ軍では、プロトカルチャーの星間共和国(銀河帝国)時代に開発された兵器を使用しており、戦術ポッドもその例外ではない。修理という概念のないゼントラーディ兵だけに、性能には個体差があったものの、戦局に合わせて多くのポッドが投入された。第一次星間大戦においては、偵察用のケルカリアのほか、戦闘用の空戦ポッド、輸送用の大型降下ポッド、回収用の回収機などが確認されている。ポッドは、小さいものでも全長20m以上、大きなものは100m以上もあり、その大きさは様々であった。

地球統合軍との初戦においてもポッドが投入され、地球への攻撃を担った。

空戦ポッドや大型降下ポッドは、大気圏突入、および脱出能力を装備している。

▲空戦ポッド

大気圏内において、マッハ6.3(高度1,100m[illegible])で飛行可能な戦闘機。高機動ロケットエンジン6門、補助ロケットエンジン3門を搭載、圧倒的な機動力を誇る。

サイズ比較

VF-1J
空戦ポッド
回収機
大型降下ポッド

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶ゼントラーディ軍ポッド

運用記録

第一次星間大戦における統合軍との戦いでは、その初戦からゼントラーディ軍ポッドが投入されていた。特に大量投入された空戦ポッドは、宇宙空間、さらに大気圏に突入し、VF-1と交戦している。また、大型降下ポッドも大気圏内へ降下し、リガードやグラージなどを地上へと運んだ。回収機は、第一次星間大戦勃発後、SDF-1 マクロスが漂流していた際に、早瀬未沙の搭乗していたES-11D キャッツアイを捕獲、母艦に持ち帰っている。

第一次星間大戦では、当初から空戦ポッドとVF-1とのドッグファイトが見られた。統合軍にとって、VF-1が未知の敵に通用することを実証する機会となった。

大型降下ポッドは地球へと降下。戦闘中は海中に潜伏し、撤退時には出撃していたリガードなどを回収した。

哨戒任務中のES-11D キャッツアイを鹵獲、母艦に戻る回収機。地球人を捕虜としたことで、初めて地球人とゼントラーディ人の接触が実現する。

空戦ポッド

大気内外両用小型戦闘機。全長20.6mと地球人から見れば小さくないが、ゼントラーディ用としては小型。しかしながら、大気圏突入から脱出まで戦闘可能と、かなりのポテンシャルを秘めている。

▶後方
メインロケット3門と補助ロケット3門、さらに推力偏向プレートが後方に確認できる。また、機体後部には、メインエンジンなどの動力部が搭載されている。

▲側面
サイドには2門ずつ高機動ノズルを搭載。サイドへの動きを補助する。宇宙などでは縦横無尽に機動力を発揮。

◀正面
機体下部には着陸スキッドを持つ。飛行時は機体内に収納される。

▼機体下面
正面には3連装ビーム砲を搭載。コクピットは前方にあり、パイロットは1名のみ。

ミサイル

機体に搭載された3門の連装ミサイルランチャーから発射されるミサイル。最大搭載数は不明である。

大型降下ポッド

衛星軌道からリガードなどの戦闘ポッドや物資を地上に輸送する際に使用するポッド。戦闘ポッドを回収し、再び衛星軌道まで上昇する能力を持つ。

全長94.8m、全高35.5m、全備重量1720tの大型ポッド。軍の兵站も担う。

▼底面
重力制御エンジンの他に緊急着陸・離床用の大推力ロケットエンジンを14基、胴体の周囲に沿って装備している。

▲上面
上面に対空用上部砲塔、底面に地表掃討用下部砲塔を備える。

着陸脚

機体には、4基の着陸脚を搭載。降下時は、折り畳まれている。一見細身だが、総積載時でも機体を支えられる耐久力を持つ。

リガードとの対比

機体前方のカーゴハッチから、戦闘装備のリガードを20～25機ほど収納できる。

回収機

機体の"修理"という概念のないゼントラーディだけに、機体大破時の兵士の救出や敵の捕獲などに使用されたと推測される。

▶後部には巨大バーニアとスラスターを装備。後部左右から出ている棒状のものは、着陸脚である。

▶機体構造はシンプル。これといった武装はない。機体前方に光学式カメラを備える。

敵である統合軍機を捕獲した回収機。最大でどれくらいの大きさの機体まで回収可能かは不明だが、基本的に1機のみしか回収できないようだ。

SDR-04-Mk XII

対空迎撃に特化したデストロイド

データ

所属 ▶ 地球統合軍
全高 ▶ 12.05m（サーチライト上端まで）
全備重量 ▶ 47.2t
メインエンジン ▶ クランス・マッファイ MT828 熱核反応炉(出力2,800SHP)
サブエンジン ▶ 新中州重工 CT03 小型熱核発電機(出力970kw)
武装 ▶ 短射程高機動 自己誘導ミサイルハワードSHiM-SHM-10 デリンジャーミサイル 22発ポッド×2／テクスコDA RDA-3C 電子系破壊用グレーザ・レーダ／大型三連可変集束レーザ・サーチライト
開発製造機関 ▶ SDF-1 マクロス艦内兵器廠 開発製造

サイズ比較

VF-1J
SDR-04-Mk XII

開発系譜図

▶ SDR-04-Mk XII

機体解説

SDR-04-Mk XII ファランクスは、SDF-1 マクロスの艦体防御のために開発された宇宙用のデストロイドで、ADR-04-Mk X ディフェンダーの姉妹機にあたる。SLV-111 ダイダロス内に積載されていたMBR-04系のデストロイドの修理・交換用部品と、新設計のボディ、兵器を組み合わせて製造された急造型のデストロイドで、ミサイルとレーダーを主軸としたシンプルな兵器構成となっている。

Illustration by Hidetaka Tenjin

▶SDR-04-MkⅫ ファランクス

運用記録

SDF-1マクロス艦内で、20機以上が製造されたファランクスは、大気圏外での艦体防御用として、ディフェンダーと共に投入されている。両腕の後部に搭載された2基の推進器のおかげで、宇宙での機動性は他のデストロイドよりも高かったが、高機動を求めた結果、ごく短時間で推進剤を使い切ってしまうという欠点が運用初期から指摘されており、実際に空間戦闘を行うことは稀だったようだ(むしろ推進器は、戦闘よりもミサイルを撃ちつくした後、補給に戻る際に重宝されたという)。また本機は量産性・拡張性に優れていたが、投入されたのが既に第一次星間大戦の末期だったため、確たる戦果を上げることはできなかった。しかしながら、ミサイルという「面」で艦体防御を行える本機が、要所でマクロスの防衛を支えていたことは事実であろう。

第一次星間大戦終結後も、地球統合軍の軍事基地などに防衛用として配備されていた。その機動性からか、宇宙だけでなく、地上でも運用されている。

第一次星間大戦の末期に投入され、他のデストロイドと共に「ミンメイ・アタック」に参加している。

機体構造

宇宙での運用と近接防御に特化した本機は、動力系の熱核化、照準、誘導送弾システムの簡略化により、シンプルな機体構造となっている。その結果、マクロス艦内でも量産できる体制が整い、システムが複雑なため配備数が伸びなかったディフェンダーの代役を果たした。一方で、熱核型の推進ノズルを採用したことで駆動時間が短くなっているのが欠点だ。

マクロス艦内の工場区画で製造に着手されたファランクスは、2009年7月にロールアウト。接近戦に難があるのが欠点である。

腕部を持たず、純粋な兵器はミサイルのみのため、弾数が尽きるとその運用性・戦闘能力は大幅に低下した。

▼後方から見たファランクス。腰部や背面上部にスラスターノズルを備え、機動性を支えている。

4面図

▼正面　▼背面　▼左側面　▼右側面

大型の上半身が特徴的なファランクスの4面図。MBR-04系のデストロイド歩行システムを用いているため、腰部や脚部の構造はトマホーク、ディフェンダーと共通である。新たに製造された上半身は、最低限の兵器と索敵装置、推進機関を装備したシンプルな構造となっている。

武装

ファランクスは、最大で22発が装填可能なミサイルポッドを2基、その他レーダー・システムを2種装備している。機体はキャパシティ的に余裕があったようで、各部隊ごとに頭部に武装やセンサーなどを追加し、性能の拡充が図られたという(こうした改造機では、ボドル基幹艦隊との決戦に投入された、頭部に追加装備を施した青色のファランクスが有名である)。なお、本機のレーダー・システムは胸部内からガンマ線を直接照射する方式で、最大出力で敵機に向けた場合、パイロットを焼殺することができたという。この機能は異星人との交戦時に限り使用を許可されていたが、ファランクスが格闘戦を行うということ自体稀であったため、この機能で戦果を挙げた記録は今のところ確認できない。

ファランクスの大多数はミサイル装備型だったが、装備やカラーリングが異なるタイプも確認されている。

Ⓐ短射程高機動 自己誘導ミサイル22発ポッド

大型推進ノズル(下図)一体型のミサイルポッド2基で、ハワードSHIM-SHM-10 デリンジャーミサイルを最大で44発設置できる。

ミサイルは2基のポッドから一斉射するのがスタンダードな使用法となっていた。

Ⓑ大型三連可変集束レーザ・サーチライト

縦方向に3基レイアウトされたサーチライト。ライトの基部は可動する仕組みで、頭上を探知することもできる。

◀▲▼宇宙空間での敵機の探査、照準装置として機能していた。

Ⓒテクスコ DARDA-3C 電子系破壊用グレーザ・レーダ

胸部に設置されたレーダ・システム。ガンマ線を直接照射する方式で、最大出力で使用すると、敵機コクピットの兵士にダメージを与えることもできた。

大戦後のファランクス

元々マクロスの艦体防御のために開発されたファランクスは、大気圏内での運用は想定されていなかったとされる。しかしながら、本機の生産性の高さは、第一次星間大戦終結後、戦力の拡充を求める統合軍にとっては重宝されたようで、トラッド・シティ、ハイランダー・シティなどの各都市に本機が配備されている。ただし近接戦闘には弱く、カムジン率いるゼントラーディの暴徒がトラッド・シティを襲った際は、防衛にあたったファランクス部隊が近接戦で壊滅するという惨状を呈した。一方でハイランダー・シティをゼントラーディの暴徒が襲った際は、一条輝大尉の立案により、催涙弾を装填した本機が遠距離から暴徒を砲撃し、その後の部隊の突入を容易にするという戦果を挙げている。

7

西暦2045年にシティ7内で開催された「バトロイドカーニバル」では、一般の居住民が所有していた機体が確認されている。

EXTRA REPORT 関連事項

ディフェンダーとの関連性

「SDF-1 マクロスの防御」というコンセプトは、元々ディフェンダーが担っていた。だが、ディフェンダーは高性能な代わりに運用性・生産性が共に低かったことから、最低限必要な武装と、極力シンプルにした機器類で構成されたファランクスが開発されることとなった。

▶ADR-04-MkX ディフェンダー
高角速射砲、エリコーンコントラベスシステムを搭載するデストロイド。

Illustration by Hidetaka Tenjin

ADR-04-MkX

機体解説

ディフェンダーは、OTMを利用して開発された統合軍の歩行兵器である。原型機であるMBR-04-MkⅠ(マークワン)で確立されたデストロイド歩行システムを発展させた機体で、エリコーンコントラベスシステムと呼ばれる高角速射砲を装備するのが特徴である。4門備えたこの速射砲は、対戦車砲クラスの大口径砲を毎分500発程度発射できる能力を保有する。2009年3月に機体がロールアウトすると、対空兵器として、ゼントラーディ軍との戦闘に投入された。

ゼントラーディ軍との戦争末期に複数機が投入された。だが、高精細照準システムの搭載などによって機体のコストが高く、量産化のネックとなっていた。

データ

所属 ▶ 地球統合軍
全高 ▶ 10.73m(アンテナまで)
全備重量 ▶ 27.1t
メインエンジン ▶ クランス・マッファイ MT828 熱核反応炉(出力2800SHP)
サブエンジン ▶ GE EM10T 燃料発電機(出力510kW)
武装 ▶ 高角速射砲 エリコーン 78mm 液冷高速自動キャノンTYPE966 PFG コントラベスセット×2
開発メーカー ▶ ビガース／クラウラー共同開発

サイズ比較

15m
10m
0m
VF-1J
ADR-04-MkX

開発系譜図

MBR-04-MkⅠ ▶ ADR-04-MkX

対空兵器を搭載した迎撃型デストロイド

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶ADR-04-MkX ディフェンダー

運用記録

マクロス艦内で運用されていたディフェンダーは、元々はSLV-111ダイダロスに搭載されていたものになる。同艦がSDF-1マクロスに接続されたことで、艦載のデストロイド系兵器であるMBR-Mk-VIトマホークやSDR-04-MkXIIファランクスと共に、運用されることとなった。ディフェンダーは主にマクロスの甲板上やブリッジ周辺に移動砲台として配備され、多方面から迫る敵に対する迎撃を行っている。

また、艤装作業が完了する前にゼントラーディとの戦闘に突入したマクロスでは、対空砲が未設置の砲座にディフェンダーを配備し、対空砲座代わりに運用するという措置もとられた。元々宇宙空間での超遠距離射撃を目標に開発されていたディフェンダーは、むしろこうした運用で真価を発揮できたとも言われる。

マクロスの甲板上に配備された複数機のディフェンダーが、上空から迫り来るゼントラーディ軍部隊を迎撃する様子。可変戦闘機(以下、VF)の後方支援も兼ねていた。

標準装備1

迎撃能力に特化していたディフェンダーの両腕部は、大口径砲としての機能に特化しており、マニピュレーターとしての機能は備えていない。また、二足歩行システムは持つものの、その機動性はVFのバトロイド形態と比べても鈍重であった。2010年1月頃のブリタイ艦隊との交戦時、マクロス側がダイダロス・アタックをしかけ、敵艦内にディフェンダー部隊が侵入したものの、敵戦闘ポッド部隊の待ち伏せにより、大打撃を受けたとの記録も残っており、最前線に積極的に投入するよりも、後方からの僚機の支援や、突出してきた敵の迎撃といった砲台としての運用が正道であると言える。

ダイダロス・アタックで、敵艦内に突入するディフェンダー部隊。記録によれば直後に敵の待ち伏せに遭い、相当数が大破した模様。

砲台として活用されるディフェンダー。後方には、同様に砲台として運用されているトマホークという、珍しい風景も見られる。

▲ディフェンダーの正面。胴体は回転機構を有し、様々な角度から接近する敵機にすばやく適切な射撃姿勢をとれた。

▲ディフェンダーの背部。高速弾の射撃に対応し、背部、腰部に大型の冷却ユニットを備えている。

標準装備2

ディフェンダーは、両腕部の大口径砲とそれを適切に運用するための長距離レーダー、精密照準システムという、きわめてシンプルなユニット構成となっている。なお、レーダーと照準システムの間に位置するコクピットは、それらの機器の発する強力な電磁波から操縦者を守るため、OTMの応用の技術で防護遮断されている。

戦闘ポッドの攻撃で大破するディフェンダー部隊。機銃などの近接戦用装備を持たないため、リガード数機の接近で、中隊規模の被害が出ることもあった。

宇宙空間での運用も可能で、可動範囲の広い腕部を駆使することで、高い迎撃能力を獲得していた。

4面図

ディフェンダー4面図(左側面の腕部はオミットしている)。上半身は腕部の大口径砲とその弾倉、投光機、レーダー、センサーなどがレイアウトされ、複雑な構成となっている。他方、下半身は脚部としての機能を優先してか、特別な装備・機構を持たない。

▶正面　◀左側面　▶背面　◀右側面

武装

ディフェンダーの装備する高角速射砲はエリコーン社が開発した78mm液冷高速自動砲が採用されている。この砲は開発当時の対戦車砲クラスの大口径弾を1砲身あたり毎分500発、4門合計で最大、毎分2000発発射することが可能であった。胸肩部は速射砲の弾倉ユニットが設置されており、さらに弾丸の装填数の多い大型タイプへと換装することができた。高性能の照準システムと、精密レーダーを備えたディフェンダーの対空砲座としての実用性は高く、トマホークやスパルタンのような最前線での活躍こそなかったものの、マクロスに肉薄する敵機を撃墜する迎撃機として信頼された。

給弾システム

ディフェンダーの給弾システムは照準システムと同様、非常に複雑な機構となっている。腕部の自由な可動を確保したまま、胸部の弾倉から、腕部の2門の速射砲へ、毎分500発の弾丸を送るという機構は、本機の開発において、もっとも難航した箇所であると思われる。

▶▼[illegible]肩部[illegible]に設置する弾倉パーツ(下)。2基の弾倉が供給されるダブルマガジン方式となっている。

◀実体弾の供給方式を示した図。マガジンから胸部、肩の回転リンク部を通っていく構造である。

▶長期戦や消耗戦に備えて、実体弾を通常の弾倉よりも増量した大型弾倉を取り付けることもできる。

エリコーン78mm液冷高速自動キャノンTYPE966 PFG

ディフェンダーの唯一にして最強の武装。大口径弾の初速は秒速3300メートルを誇り、超遠距離からゼントラーディの戦闘ポッドも容易に破壊できた。なお左右の砲は常に同一の目標を捕捉する機構となっており、左右で別々の目標を狙うといったことはできない。

▲ディフェンダーの足裏。主砲発射時の反動を抑える構造となっていた。

▲高角速射砲 砲身

2連装式となっている高角速射砲の砲身。胸部の弾倉から供給される実体弾を高速で射出することが可能であった。射程範囲も広く、その迎撃能力は高い。

照準システム

ディフェンダーの照準管制は、頭頂部のレーダー、胴体中央の照準カメラ、各速射砲に備え付けられた電子補正光学照準機(砲の中央の赤いパーツ)といった複数の電子機器からの情報を統合して行われる。宇宙空間での超長距離射撃も可能なこのシステムは、それゆえに非常に高額なものとなり、本機の量産化のネックとなっていた。また、メンテナンスにも手間がかかったという。

▲▶照準カメラ

胴体中央に設置された照準用の高精細カメラ。カメラはレールに沿って上下させることが可能となっている。

コクピット

頭頂部にレイアウトされているコクピット。パイロットは跳ね上げ式のハッチから潜り込むようにして搭乗する。

▶コクピットハッチのオープン時。内部にはモニターや機器類が多数備えられている。

関連事項

EXTRA REPORT

ディフェンダーのマーキング

第一次星間大戦当時のディフェンダーの映像では、腰部前面に「ハンマーと松明」のマークの描かれた機体が良く知られている。このマーキングはダイダロス所属部隊につけられるもので、それらの機体がマクロスの対空防衛を担った証であった。

MBR-07-MkⅡ

優れた機動力を有する 近接攻撃型デストロイド

機体解説

スパルタンは、近接格闘攻撃型のデストロイドである。センチネンタルとクランスマンの共同で開発された機体で、強力な発動機の採用により、副動力なしで全兵装の駆動が可能となっていた。さらに高機動も実現したが、動力伝達系のトラブルと発動機開発の遅延もあって、量産化への移行は遅れている。それでも重装甲ながら高い機動力を有していたことから、運用側から高い評価を得ており、かなりの数が第一線へと配備された。

データ

所属▶地球統合軍

全高▶11.31m

全備重量▶29.4t

エンジン▶グゲンハイマー DT2004 熱核反応炉

出力▶3200SHP

最大速度▶調査中

標準武装▶ビフォーズ12連発近接自己誘導ロケット弾ランチャー×2／アストラTZ-Ⅳガンクラスター（レーザー砲／32mm機関砲／180mmグレネードランチャー／12.7mmマシンガン／火炎放射器）×1／マウラー ROV-10対空レーザー機銃×2／格闘用クローハンド・ノーマンバンクスCH2-TYPED×2s

サイズ比較

VF-1J
MBR-07-MkⅡ
ヒト

開発系譜図

MBR-07-MkⅠ ▶ MBR-07-MkⅡ

▶MBR-07-MkⅡ スパルタン

運用記録

スパルタンはSDF-1マクロスの艦上防衛に配備されていたが、迎撃用の遠距離兵装を持たないため、滅多に出撃の機会はなかったようである。スパルタンがその真価を発揮したのは、第一次星間大戦終結後の騒乱期、ゼントラーディ人による暴動の鎮圧といった任務であった。統合軍のバルキリーパイロット一条輝も、当時ハイランダー・シティで起きたゼントラーディ人の暴徒を鎮圧するため、スパルタンに搭乗している。VFのバトロイド形態がスパルタンの設計思想を継いでいたこともあってか、本機はVFパイロットでも比較的扱いやすかったようだ。

2009年11月、カムジンの機動部隊が洋上のマクロスを襲撃。甲板に肉薄する戦闘ポッドに対しスパルタンが迎撃に当たった。

普段はVF-1シリーズを駆る一条輝であったが、暴徒と化したゼントラーディを止めるため、近接格闘攻撃型デストロイドであるスパルタンに搭乗した。

全高はVF-1バトロイドとほぼ同じ。歩行兵器開発計画によって誕生したスパルタンの設計思想は、VFのバトロイド形態へとフィードバックされた。

構造

統合軍の歩行兵器開発計画によって誕生したスパルタンは、人型兵器である。左右のアームはクローハンドとなっており、武器として扱える一方、物を掴むことや、巨人サイズのゼントラーディ人を抱えることも可能。腰部や手首は回転式で、無骨なシルエットだが、可動範囲は広い。

MBR-07シリーズは、2003年7月より開発開始。その1年2ヶ月前からMBR-04シリーズの開発が始まっていたため、本機は歩行兵器開発競争では2番手であった。

近接戦闘に優れた高性能機ながら、動力伝達系の発展の難しさもあって、バリエーション展開は極めて少ない機体となった。

▶エンジンカバー
背部の装甲は開閉式のエンジンカバーとなっている。高出力発動機のメンテナンス性を高めている。

▲コクピットハッチ
機体頭頂部にコクピットハッチがあり、パイロットはここから乗降を行う。

▶エンジンカバーの下には、ロケットノズルを搭載。スパルタンの機動力を高めている。また、肩下周辺にはテールランプなどもある。

四面図

▶正面 ▶背面 ▼左側面 ▼右側面

武装を備える胴体や、クローハンドを兼ねる腕部、機動性を支える脚部が大型であるが、それらを繋ぐ関節パーツや腰部、大腿部は極めてシンプルな構造だ。

コクピット

スパルタンのコクピットは単座式で、昇降は機体頭頂部のハッチから行う。コクピット内部は計器類、スロットルが並ぶ。左右前3つの大型モニターと前下方のサブモニターを搭載している。基本操作は左右のレバーで行いつつ、他のレバーやスロットルで出力などを調整する。格闘時の細かな動きの調節は、レバーについているボタンやアナログステイックで適宜行っていたようだ。なお、近接格闘などで瞬間的に加速することも多いため、操縦者は4点式のフルハーネスで厳重に固定される。

スパルタン操縦席の一条大尉（当時）。バトロイドによるゼントラーディとの格闘経験もある彼にとって、スパルタンは比較的なじみやすい操縦感覚だったようだ。

▲操縦席レイアウト。正面のモニターには、コクピットハッチ前方のペリスコープの映像が表示される。足元の映像は、サブモニターで確認する模様。

武装

スパルタンの主武装は、それ自体が近接武器である両手と、近・中距離射程の火器であった。高速機動で接近するゼントラーディの機動ポッドに対して、肩部のミサイルランチャー、胴部のガンクラスターの一斉射撃は効果的なカウンターとして機能したようである。ただし、機動力と数に優るゼントラーディの機動兵器との戦いでは、正面の敵機に肉薄する間に、他の敵機に背後から撃墜される、といったケースもままあり、なかなか活躍することができなかったようだ。なお一条輝の搭乗機が携行していたことで有名な、棍棒状の武器だが、これは生身の巨人に対し"手加減"ができ、かつ、戦闘ポッドにも有効打を与えられる兵器として現場で発案されたものだと思われる。

確保したゼントラーディ人を両脇に抱えるスパルタン。アームの腕力自体も武器であり、格闘戦を得意とした。

アストラTZ-Ⅳガンクラスター

胴体中央部には、レーザー砲、機関砲、火炎放射器を合わせたアストラTZ-Ⅳガンクラスターを搭載。普段は胴体内に収納されているが、中央のハッチが開くと、砲が出現する。

頭部

ROV-10対空レーザー機銃を2門搭載。上空の敵にも、ある程度対応できた。また、レーザー機銃の中央部にはTVアイが搭載されており、機体の射撃性能をアップしている。

肩部ミサイルランチャー

両肩にはビフォーズ12連発近接自己誘導ロケット弾ランチャーを装備。ミサイルはトマホークタイプと共通で、近接用ながら追尾性能を有したロケット弾を最大24連発できる。

金属棍棒

生身のゼントラーディ人を取り押さえるのに絶大な威力を発揮した武器。いわゆる電磁警棒として使用できる。

棍棒をなぎ払いリガードの脚部を破壊するスパルタン。致死性の武器の使えない暴徒鎮圧では、打撃武器による関節への攻撃は有効な戦術であった。

クローハンド

5本指のマニピュレーターは、物を掴むことはもちろん、拳を作って殴ることも可能。クローハンドも武器のひとつである。

暴徒の尻を叩き、悶絶させる一条機。"バトロイドで卵を掴める"と言われる熟練VFパイロットには、生身の人間を叩く力加減も心得たものであった。

関連事項

EXTRA REPORT

スパルタンのバリエーション

右図は2008年1月にロールアウトしたMBR-07-MkⅠ。胴体中央には内蔵式のガンクラスターを装備している。少数が生産され、後に全ての機体がMkⅡスパルタンに改装された。また第一次星間大戦後には、退役したスパルタンが民間に払い下げられ、マクロス7船団では、個人所有のスパルタンも確認されている。

2045年頃にシティ7で開催された「バトロイドカーニバル」で目撃されたスパルタン。作業用に改修されたと思しく、両腕が掘削ドリルになっている。

工場衛星

無尽蔵に戦力を生み出す超巨大プラント

データ

所属▶ゼントラーディ軍→地球統合軍
全長▶5～500km以上
全高▶調査中
全幅▶調査中
エンジン▶調査中
標準武装▶マイクロ・ミサイルポッド／ビーム機銃等

開発系譜図

工場衛星

サイズ比較

地球
工場衛星

ゼントラーディの生産拠点となる工場衛星群。工場衛星はその用途によって大きさが異なり、戦艦建造用の衛星などは全長500kmを越える。

ゼントラーディの膨大な戦力は、工場衛星の生産力によってまかなわれていた。リガードも供給が止むことはなく、無尽蔵に生産されている。

機体解説

修復という概念を持たないゼントラーディの戦力は、高度に自動化された兵器生産システムによって支えられていた。それが銀河系の各地に散らばる工場衛星で、周囲に資源採掘用ロボット船や倉庫衛星が集まってひとつの生産拠点を構成していた。さらに、20～50の工場衛星が一群をなし、ゼントラーディの各艦隊に戦力を供給していたのである。こうした工場衛星群は人類の太陽系外移民の道程でも発見されており、移民船団の生産力として吸収されると同時に、プロトカルチャーの歴史を現在に知らしめている。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶工場衛星

運用記録

ゼントラーディの工場衛星はプロトカルチャーの時代から稼働を続け、兵器を供給してきた。その全容は現在でも明らかになっていないが、リガードを生産するもので数百万、戦艦クラスの工場衛星でも数万が存在するほど(全盛期には数十万が稼働と推測)大規模なものであったようだ。また、基幹艦隊の母艦を建造する工場衛星も銀河系に数百が存在し、さらに工場衛星自体を生産するマザープラントが銀河系オリオン■内に存在するとも言われている。ただし、グラージを生産していたロイコンミ兵器廠のように、長い戦争の中で失われてしまったものもある。

第一次星間大戦後、戦力の増強を図った統合軍は、工場衛星接収を計画。約半年の間に行われた3回の奪取作戦で、20以上の工場衛星が統合軍の管轄下に置かれている。

第一次星間大戦終結後、統合軍は戦力増強、および防衛力増強のために工場衛星の奪取作戦を立案。ブリタイ・クリダニクが指揮する部隊が派遣された。

工場衛星外観

工場衛星の形状はさまざまだが、多くが大小複数の生産プラントを連結した構造を有する。サイズは生産する兵器によって異なり、戦艦建造プラントで全長約5kmだが、基幹司令艦用のプラントになると全長は約500kmにも及ぶ。その巨大さからも、生産力の高さがうかがえよう。

▲巨大隕石のような外観をした工場衛星。大小のプラントが連結することで、生産拠点となっている。

▲外装表面

ドックゲート／格納庫

工場衛星には艦艇を収容するためのドックゲートや格納庫があり、生産した兵器の搬出に用いられた。

▲ドックゲート

▲ゲート内

▲格納庫／発着ポート

生産工場

工場衛星の生産システムは規格化された兵器の量産を目的に設計されており、兵器を少しずつ改良する機能や限定的な自己修復能力も備えている。生産システムは変更が可能で、統合軍は奪取した工場衛星でVFやデストロイドのほか、地球再建用の建築資材などを製造し、さらに、戦艦用プラントでは超長距離移民船の艤装部品も製造している。また、ゼントラーディ兵士のクローンを生産する工場衛星も存在していたと言われている。

統合軍が接収した工場衛星の一部では、生産施設の劣化によって故障が頻発し、ラインが停止することも少なくなかった。自己修復能力が追いつかないものも多かったのだろう。

▲リガード生産ライン

▲組み立て中のリガード

▲作業用リングメカ

▲工場内移送システム

▲作業用リングメカ

フォールド装置

工場衛星の中にはフォールド装置を備えているものもあった。統合軍は接収した工場衛星をフォールド航行で地球と月の間のラグランジュポイントに移動させ、生産体制を整備した。また、フォールド装置を持たず、資源が豊富な宙域に固定されたものもあったとされる。

▲装置底部　フォールド装置の制御は統合軍が運び入れた設備を併用して行われた。

◀起動スイッチ

▶装置本体

護衛艦隊

工場衛星は防衛用武装を備えるが、それは宇宙塵の排除などに用いる程度のものだった。そのため、一部の工場衛星には護衛艦隊が配備された。

▶ダガオ艦
工場衛星のひとつを守備していたダガオ艦隊の旗艦。

◀標準戦艦
スヴァール・サラン級がダガオ艦隊の主力艦だった。

Illustration by Hidetaka Tenjin

轟音の重砲を放つ超弩級兵器

機体解説

陸戦兵器デストロイドの中でも一種異彩を放つHWR-00-MkⅡ モンスターは、圧倒的な火力を備えた、その名の通り"怪物"のごとき機体である。本機は巨大異星人が操る陸戦兵器との対決を想定して開発され、他のデストロイドを凌駕する巨体に多数の大型火器を装備している。その設計は重装甲·重武装を基本コンセプトとするデストロイドの範疇からも大きく逸脱しており、砲戦能力のみが追求された結果、運用に支障をきたすほどの運動性の欠如を招いている。本機の存在は、オーバーテクノロジーの入手を契機に表出した軍部の火力偏重思想を物語っている。

HWR-00-MkⅡは人類史上最大級の陸上非軌道兵器であり、その火力は第一次星間大戦当時の陸戦兵器の中でも間違いなくトップクラスだったと言える。

第一次星間大戦の終結後、新統合政府への反抗を企てたカムジン·クラヴシェラの一派に強奪されるという事態も起きている。

PLUS

老朽化した一部の機体は、2040年に「スーパー・ノヴァ計画」の性能評価試験で実弾テストの標的とされた。時代の転換期が生んだ怪物も、技術の進歩に取り残される結果となった。

7

2045年のシティ7にて、バトロイドカーニバルが開催された際は、第一次星間大戦時にマクロスのデストロイド隊に所属していた3人の元搭乗員の老人が操縦し、バロータ軍を迎撃しようとした。

データ

所属▶地球統合軍
全高▶22.46m
全備重量▶285.5t
主機▶ギャランド WT1001 熱核反応炉
主機出力▶11500SHP
副機▶新中州重工 CT8P 熱核反応炉
副機出力▶890SHP
標準武装▶ビガース 40cm 液体冷却式液体推薬キャノン砲×4／ライセオン LSSN-20G 3座装対地ミサイルランチャー×2

サイズ比較

開発系譜図

HWR-00-MkⅡ

HWR-00-MkⅡ モンスター

運用記録

本機の設計が始まったのは2000年12月のことで、2005年10月にようやく試作に移行した。当初の仕様(MkⅠ)では腕部にミサイルランチャーは装備されていなかったが、2008年にロールアウトした1号機は、さらなる武装の充実を図る軍の要求によって同年9月にMkⅡの仕様で完成することとなった。しかし、開発段階からすでに運用性が疑問視されていたこともあり、SDF-1マクロスが進宙した2009年時点では生産型2機が生産されたにとどまっている。SDF-1に搭載された機体は、のちのゼントラーディ軍との戦闘で一定の戦果を残した。また、それ以降に生産された機体はグランド・キャノンなどの拠点防衛に配備されたが、ほとんどがゼントラーディ軍の軌道砲撃によって破壊されたと言われている。

生産型は少なくとも6機が完成。SDF-1の艦内兵器廠でも生産が行われ、のちに1機が完成している。主に艦外に展開する移動砲台として運用された。

コクピット

本機の操縦は車長と操車員、機関・砲撃員の3名のパイロットによって行われる。規模は違えど、設計思想が戦車のような旧来の兵器に近いことや、超長距離砲撃を主体とする火器管制の複雑さが複数の乗員による機体制御の要因であろう。また、運用コンセプトが根本的に他の機動兵器と異なる点も、操縦系の差異となって表れている。

機体が大型で内部スペースに余裕があったため、コクピット内部はVFや他のデストロイドに比べるとかなり広い。

コクピット

機体構造1

HWR-00-MkⅡの型式番号は「Heavy Weight Robot」に由来しており、その意味通りの超重量級デストロイドとしての機体構造が特徴である。デストロイドの歩行システムに準じた脚部を有してはいるが、歩行用というよりもむしろ射撃時の姿勢保持のための機構に近く、陸上戦艦ないしは移動要塞を目指したコンセプトを表している。

整地面なら歩行による移動も可能だが、機動性は劣悪だった。SDF-1で運用されていた機体は、その自重で強襲揚陸艦ダイダロスの床面を破壊してしまうこともあった。

▶腕部の可動構造など、一部に他のデストロイドと共通する部分も見られるが、ほとんど別物と言ってもよい機体構造が特徴である。

▶本体のサイズに加えてキャノン砲が前方に大きく突き出しており、これを含めた全長は約40mにも及ぶ。

コクピットは胴体前部に位置しており、上部の赤く発光している部分が天井にあたる。また、特徴的な目のマーキングが施された機体もあった。

標準武装

単機で戦略爆撃をしのぐほどの火力を発揮しうる点がHWR-00-MkⅡの特徴であり、本機に装備された2種類の武装はともに長距離射撃を目的としている。一方、近接戦闘はまったくの考慮外で、防御用の武装さえ搭載していない。元より接近戦に対応できるだけの運動性を持ち合わせておらず、そのアンバランスな性能が護衛部隊との連携を必要不可欠なものとしている。しかし、軍にとってはその欠点を帳消しにするだけの破壊力が本機の有用性に他ならないと考えられたのかもしれない。

ビガース 40cm 液体冷却式液体推薬キャノン砲

胴体上部には、ビガース40cm液体冷却式液体推薬キャノン砲を4門(合計装弾数28発)備える。この砲にはオーバーテクノロジーが使われており、射程距離は最大で160kmにもおよぶ。また、4種類(榴弾、徹甲弾、対空弾、反応兵器)の専用弾頭が装填可能で、主に爆発力調整型反応弾頭弾が用いられたようだ。

ライセオン LSSN-20G 3座装対地ミサイルランチャー

腕部は、ライセオンLSSN-20G 3座装対地ミサイルランチャー(合計装弾数12発)となっている。これはMkⅡへの仕様変更の際に増設された武装で、300kmというキャノン砲を上回る最大射程を誇る精密誘導兵器であった。

胴体部のキャノン砲に可動構造はなく、胴体を動かして仰角を変える。その際には胴体内部に内蔵された油圧アームを併用して角度を変更する構造となっている。

対比図

HWR-00-MkⅡはその要求性能を満たすために肥大化し、同時期の兵器とは比較にならない機体サイズを有するに至った。全備重量は300t近くにおよび、一応の歩行は可能だったものの機動性は皆無だった。また、下の対比図からも本機の規格外の巨体は一目瞭然と言える。

▲対比図1

▲対比図2

機体構造2

HWR-00-MkⅡの開発はビガースとセンチネンタルが共同で手がけ、両社のデストロイド開発ノウハウが随所に見られる。なかでも砲撃戦に特化した設計が反映された機能が豊富で、機体各部に備える可動式の照準用カメラはその一例である。また、本機の装甲は他のデストロイドに比べても堅牢だが、重量の増加を招く要因ともなっている。

正面

脚部は多軸構造となっている。

背面

側面

下は各部の構造を示したもので、腕部は省略されている。脚部の可動構造やドーザーなど、特殊な機構が採用されていることがわかる。

▼胴体部側面

▼腕部側面

SLV-111

Illustration by Hidetaka Tenjin

マクロスの"右腕"となった 統合軍最新強襲揚陸艦

艦体解説

ダイダロスは、ASS-1が不時着した南アタリア島の周辺海域に配備された、地球統合軍の強襲揚陸艦である。デストロイドシリーズの搭載と出撃を主とした運用母艦で、敵拠点に接岸後、デストロイド部隊を速やかに展開させることが可能となっていた。だが艦は、マクロスが行ったフォールド時の暴走に空母プロメテウスと共に巻き込まれ、冥王星宙域に転移。そのため、艦尾を緊急改修してマクロスの右舷部に接続、そのまま艦の一部として運用された。

左舷部にドッキングされた攻撃母艦プロメテウスと共にマクロスの大きな防衛戦力となり、ゼントラーディ軍の猛攻に対抗した。

データ

所属	統合軍太平洋艦隊	空虚重量	調査中
全長	488m	エンジン	調査中
全高	調査中	最大速度	調査中
全幅	調査中	標準武装	調査中

開発系譜図

？ ▶ ダイダロス

サイズ比較

SDF-1
SLV-111
CVS-101

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶SLV-111 ダイダロス

運用記録

マクロスのフォールドに巻き込まれたダイダロスだが、幸いにして同艦は完全水密構造であったため、空気のない宇宙空間へフォールドアウトしても、乗員の大多数は無事であった。そのため、マクロスの右舷にドッキングされた後も、簡単な改修で宇宙空間での運用に対応できたようである。ダイダロスはマクロス艦上を防衛するデストロイド部隊の"家"として運用され、その堅牢な構造は、ゼントラーディ軍の度重なる攻撃に耐え続けた。また艦首を敵艦に突き入れる強襲攻撃「ダイダロス・アタック」は、第一次星間大戦を通じ、数隻のゼントラーディ艦艇を破壊しており、最終防衛ラインを突破された後のマクロスの最後の切り札として活用された。その後2012年のマクロス・シティ防衛戦において、カムジンの乗った中型砲艦の突撃に巻き込まれ、マクロスの右舷ブロックともども大破している。

マクロスを警護する「防人」のように配備されていたダイダロス（写真左）は、プロメテウスと共に冥王星軌道にデフォールドした。

フォールドで冥王星軌道に艦体が転移して以後、マクロスの貴重な戦力として活躍したダイダロスだが、敵戦艦の突撃に耐えることはできなかった。

ダイダロス・アタック

ダイダロス・アタックは、強襲揚陸艦として建造されたダイダロスの頑健な構造と、マクロスの防衛機構ピンポイント・バリアを利用した近接攻撃戦法である。発案者は、マクロスの航空管制官である早瀬未沙中尉であり、以来、彼女がダイダロス・アタックのオペレーションの指示を担当している。バリアを集中させたダイダロスの艦首を敵艦に突き刺し、敵艦内部で艦首ハッチを開放、待機していたデストロイド部隊の一斉射撃で敵艦を内部より破壊するという戦法である。一見、荒唐無稽な戦術ではあるが、マクロスとダイダロスを接続する右舷ブロックの突入するタイミングや、デストロイド部隊の展開する機会などはコンピューターによる入念なシミュレーションに基づいていたとされる。

ダイダロス・アタックは敵艦への突撃のみならず、敵艦による突撃へのカウンターとしても利用されることもあった。

機体構造

強襲揚陸艦であるダイダロスの艦体のほとんどは、デストロイドの格納スペースに充てられている。「箱」とでも言うべき艦の構造は、艦全体の頑健さにも繋がっており、ダイダロス・アタックによる敵艦への突撃を繰り返しても、艦全体のダメージは比較的軽微であったと言われる。なお艦体下部の数箇所に見られるフィンは、艦の「舵」であり、マクロスとのドッキング以降は、基本的に艦内に収納されていたようである。

▼敵拠点へのデストロイド揚陸を想定しているため、艦首前方に大型のハッチを備える構造となっている。

◀後方
艦尾は改修され、マクロスとのドッキングが可能となった。その他の部分は完成当時の構造を保っている。

ブリッジ

▼前面
▼後面

艦後方上部には、航海ブリッジ（左舷）と作戦ブリッジ（右舷）が別々に設置されている。これは艦の運用効率を上げるための手段と考えられる。

マクロスに接続後、早瀬未沙の発案で強固な艦体構造とピンポイント・バリアを利用した強襲攻撃「ダイダロス・アタック」が生み出された。

使用例

ゼントラーディ軍艦隊の猛攻を凌ぐため、早瀬未沙中尉の提案でダイダロス・アタックを初めて実行した。2000m級のスヴァール・サランに突撃し、まず敵艦の装甲を破壊。直後に、デストロイド部隊による一斉射撃を行い、敵艦を撃沈させることに成功した。

ダイダロス・アタックの弱点

ダイダロス・アタックは、基本的には敵の意表を突く近接攻撃であり、その戦法を知るものに対しては多用できない。実際、ブリタイ艦隊の記録参謀エキセドルは、マクロスの戦闘パターンを分析した結果、旗艦ノプティ・バガニスにわざとダイダロス・アタックを行うよう仕向け、艦首に待機させていた機甲部隊を逆にマクロス艦内に突入させるという作戦を成功させている。またアタックのタイミングを誤り、ダイダロスが敵艦を貫通してしまう場合もあった。

2009年11月の地球洋上での戦いでは、ダイダロスの艦首が突き抜け、周囲の機動部隊にミサイルが命中する被害を出した。

ほとんどの敵艦を撃沈できる「必殺技」ではあるが、攻撃をしのぎ切られた場合は、敵の侵入を容易に許してしまう諸刃の剣でもあった。

ハッチ

ハッチ開放シークエンス

①②③④⑤

艦首装甲を上部に展開したのち、3段階に折り畳まれた状態で格納されているデストロイド侵入用タラップが出現する。この構造により、敵陣のより奥深くにデストロイド部隊を投入できた。

▶一度に多数のデストロイドを上陸させるために、タラップは最大で7機のデストロイドが並ぶことができるスペースを持つ。

格納庫

ダイダロスの格納庫は二層式となっており、デストロイドの整備・補給・出撃を効率よく行うことができた。メンテナンスを行うため、屋根にはクレーンなども備わる。

庫内には、交換用のパーツも潤沢に用意されており、これらを用い、マクロス艦内にてデストロイド・ファランクスの開発も行われた。

◀艦首部分に格納庫スペースを持つ。あらかじめデストロイドの運用を想定したレイアウトとなっている。

EXTRA REPORT

関連事項

マクロスの「両腕」

マクロスの両舷には、宇宙空母アームドが設置される予定であり、ダイダロス、プロメテウスの設置はまったくの予想外であった。だが、強固な艦体構造とピンポイント・バリアを利用したダイダロス・アタックの考案もあり、ゼントラーディ軍との戦闘に欠かせない重要なパーツとなったのである。

デストロイド運用艦としての優れた構造も艦を大きく支えた。

▶右舷にダイダロス、左舷にプロメテウスを装備したマクロス強攻型。

◀本来、マクロスの両舷に装備される予定だったアームド級宇宙空母。

CVS-101

Illustration by Hidetaka Tenjin

艦体解説

CVS-101プロメテウスは、地球統合軍が可変戦闘機(以下、VF)の運用を行うために建造した超大型半潜水空母である。発着艦が同時に可能なアングルドデッキ、作業性に優れた開放式格納庫を採用し、約150機ものVFを運用する能力を誇っている。特に開放式格納庫の開口部は、宇宙空間ではVFの発着口としても使用が可能で、VFの迅速な展開に大きく貢献した。2009年2月、SDF-1マクロスのフォールドに巻き込まれ冥王星宙域に転移した同艦は、緊急措置としてマクロスの左舷に接続され、以降はVFの母艦としてマクロスの攻防の要となった。

データ

所属 ▶ 地球統合軍	エンジン ▶ 原子力
全長 ▶ 約512m	最大速度 ▶ 調査中
全高 ▶ 調査中	標準武装 ▶ ミサイル・ファルコン・スプリントシステム／RIM-116 RAM MK49ランチャー×4／20ミリバルカンファランクスCIWS
全幅 ▶ 調査中	
空虚重量 ▶ 調査中	

開発系譜図

▶ プロメテウス

サイズ比較

SDF-1
SLV-111
CVS-101

マクロスの主力戦闘機、VF-1が滑走路を使用して発進する様子。宇宙服を着用した作業員が発着艦を管理していた。

右舷ユニットのダイダロスのように艦体が攻撃ユニットとなることはなかったが、ピンポイント・バリアの展開は可能であった。

南アタリア島近海から冥王星付近まで飛ばされたプロメテウス。その際、密閉された水密区画以外で作業していた乗員は全て死亡した。

VFの母艦となった マクロスの“左腕”部ユニット

Mechanic Sheet
メカニックシート

CVS-101 プロメテウス

運用記録

ASS-1地球落下のおよそ6年後にあたる西暦2005年11月に空母プロメテウスは就航している。その後、2009年2月のマクロス進宙式典の警護のため、同艦は南アタリア島の海域に配備され、マクロスとゼントラーディ軍との戦闘に巻き込まれることとなる。冥王星宙域にてマクロスの左舷に接続されて以降、プロメテウスは150機強のVFを運用できる空母としての能力を遺憾なく発揮し、マクロスの防空戦力の拠点として機能した。度重なる補修を受けつつ第一次星間大戦を生き残った同艦は、カムジンが反旗を翻した第一次マクロス・シティ防衛線をも耐え抜いた。

非戦闘時はマクロス本体の居住区で待機しているVFのパイロットだが、戦闘が開始されると、各自、車両でプロメテウスに移動する。

第一次星間大戦を乗り越えたマクロスは、マクロス・シティの中心部に復興のシンボルとして置かれ、プロメテウスもそのまま残された。

艦体構造

▲▶前方
宇宙では、艦側面に設置された発進口からもバルキリーが出撃した。細長い艦底部にはスクリューと小型翼を備え、本来は艦の推進部として機能した。

▼後方
甲板はフラットで、艦載機の発着を最優先に考えた構造である。艦尾は、のちにマクロスとのドッキングポートとなった。

甲板を利用することで大量のVFを滞りなく出撃させることができた。戦闘機や輸送機など、VF以外の発着も可能である。

甲板上

VFのスムーズな発着を実現するための滑走路を持つ。また艦後方には、着陸するVFをワイヤーを使ってすばやく減速させるアレスティング・ワイヤーシステムが設置された。

▼アレスティング・フック

アレスティング・ワイヤーシステム▶

◀▼ブリッジ
艦の右後方に設置されているブリッジ。窓のように見える正方形のパーツはレーダードームの一部で、索敵用に使われた。

エレベーター

VFの運用を支える重要機関で、9基設置されている。VFを最大2機搭載するスペースを持ち、格納庫から甲板、甲板から格納庫へのVFの移動を担った。

艦体装備

半潜水型空母として洋上での運用を想定していたプロメテウスは、VFの発着に対応する大型の甲板を備えていた。艦の格納庫からエレベーターでVFを甲板上に移送できる機構のほか、VFの発着をサポートするカタパルトやアレスティング・ワイヤーシステムなどを持ち、円滑なVFの運用を可能としていた。また、防衛兵器として2種のミサイルシステムを装備。敵勢力への対応が図られている。

甲板サイド上方

Ⓐカタパルト・スプレーダ
VFのランディングギアを設置できるカタパルト。車輪部に付いたパーツでカタパルト本体に固定する。

Ⓑブラスト・デフレクター
VFの発進時に生じる、ジェット噴射の爆風を冷却し逃がすために備えられた装置。水冷方式となっている。

甲板サイド下方

Ⓐミサイル・ファルコン・スプリントシステム（超長射程対空ミサイル）
艦隊戦用のミサイルシステム。ただし、対ゼントラーディ戦では効果がなかった。

ⒷRIM-116 RAM MK49ランチャー（近接対空連射ミサイル）
戦闘機迎撃用として設置されたミサイルシステム。ミサイルの連射が可能である。

Ⓒエレベーター
VFを甲板上に移動させるエレベーターは9基備える。格納庫への扉は気密ハッチとなっている。

関連事項 EXTRA REPORT

プロメテウスの最期

2031年公開の映画『愛・おぼえていますか』でも、プロメテウスの姿は描かれている。だが、劇中ではSDF-1とはドッキングせず、ゼントラーディ軍が行った衛星軌道上からの攻撃で大破した状態で登場した。

一条■と早瀬未沙が、漂着した地球でダイダロスと共にプロメテウスの残骸を発見するというシーン。

通路

バルキリー発進用通路

VF用の通路で、バトロイドで歩行できるだけのスペースを確保していた。天井にはフックが設置されており、ファイター形態の機首などを吊り下げることもできたと見られる。この通路は艦首の出入り口に繋がっており、ここからの発進も可能である。

マクロスとの連絡通路

▼SDF-1 マクロス接続部

マクロスとのドッキングに伴い、プロメテウスの艦尾が改修され、連絡通路が整備された。

連絡通路内は車両で移動することが可能となっていた。

SJP-11

マクロスのドッキング部には検問所が建てられており、通行にはここをパスする必要があった。マクロス側の通路は、腕関節の可動に対応するフレキシブルな構造となっている。

格納庫／エレベーター

可変戦闘機（以下、VF）の発着を想定して開発されたプロメテウスの艦内には、VFの出撃やメンテナンス、パイロットの乗降などが行える格納庫が複数設置されており、150機以上のVFが搭載可能となっている。これら格納庫はエレベーターを通じて甲板上と繋がっており、円滑なVFの発着とその運用を実現していた。西暦2009年、期せずしてSDF-1 マクロスにドッキングして運用されることになったプロメテウスだが、対ゼントラーディ戦において、こうした効率的なVFの搭載・運用能力は最大限に発揮された。

VFの発着を管理する拠点として機能したプロメテウス。ゼントラーディの急襲など、緊急時にも速やかなVFの発着が可能となっていた。

エレベーター位置

右舷部に第1エレベーターを、左舷部に第2、第3エレベーターを設置している。エレベーターの下部には気密ゲートを備える。

第1格納庫（第2、第3エレベーター周辺）

第2、第3エレベーターの出入り口付近。出撃の決まったVFは、ファイター形態で格納庫からエレベーターへと移動する。格納庫は艦首、艦尾側が格納区画、そして第2、第3エレベーターがある中央部が整備区画として機能している。点線部は第2格納庫である。

なおこの区画は、開放区画となっており、宇宙空間での運用時には、区画内に空気は存在していない。そのため、整備員や管制スタッフは気密服を着用して各種作業に当たることとなる。慣れない気密服での作業用に、綿密な作業手順のマニュアルが作られたとされる。

気密服を着用したまま燃料補給、各種点検を行う整備スタッフ。艦内の人工重力により、作業自体は重力下と同様に行うことが可能だった。

エレベーターから艦外へと出て行くVF-1を見送る整備スタッフ。第一次星間大戦当時は写真のような気密服が一般的だった。

第1格納庫（第2エレベーター付近）

第2エレベーター付近から艦首方向を見た第1格納庫内部。VFを固定するためのフックのほか、天井には機首などを吊り下げて移動させるクレーンが設置されている。簡単な整備はここで行えたようである。また、パイロットは通常、この周辺でVFに乗降する。

プロメテウスの艦内は人工重力が働いており、海上での運用のように、波で揺れるということはなかったが、逆に人工重力の不調や、SDF-1の変形などの不慮の事態に備え、VF-1は重力下での運用時と同様、ワイヤーで固定されていた。

重力下での運用時と同様、待機時のVF-1の着陸脚には「車止め」が噛ませられている。

発進に備え、固定用ワイヤーを外されたVF-1。戦闘中にSDF-1が変形する際は、作業員総出で再固定の作業にかかったという。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶CVS-101 プロメテウス

第1格納庫エアロック

第1格納庫とSDF-1の居住区画とを繋ぐエアロック。ひとつのエアロック内には最大5人まで入ることが可能で、扉が閉鎖されるとエアロック内に空気が満たされる。使用時には、区画上部の警告灯が明滅する。

扉の開閉には区画中央のボタンを押す。奥は気密室になっており、扉を閉めた後に室内に空気が満たされ、空気のある区画へ移動可能となる。

緊急時には区画左右の壁面にある緊急ロックを引いて、扉を密閉する。

整備工場／艦内設備

格納庫やエレベーターといったVFの発着を担う設備だけでなく、プロメテウスにはVFの補修やメンテナンスを行う大規模な整備工場が設けられていた。そのほか、アーマード装備のVF用に備えられたシステムなど、多種多様なタイプが存在したVFを包括的に運用できる機能を有している。また、SDF-1 マクロスとのドッキングを実現するにあたり、艦の後方部が急遽改造され、マクロス居住区との連絡路が新たに作られている。

気密ブロック内に設置された整備工場。大型のクレーン車などが搬入されていたほか、天井にも整備用の作業機器が備えられていた。

装甲板の溶接、溶断などは、空気のある区画の方が効率的に作業できるため、損傷の激しい機体が優先的に運び込まれ、整備された。

整備工場

アーマードバルキリー乗降システム

VF-1の発着時、パイロットは基本的にはファイター形態で機体に昇降するが、バトロイド形態で固定されるアーマードパック装備時には、専用の昇降システムを用いられる。このシステムは、デストロイドの昇降システムを流用したものと思われる。

▶可動式通路

◀昇降機

可動式の通路を使うことで、アーマードパックを装備したVF-1に直接乗り込むことができた。

アームド

マクロス用に改修された 戦闘宇宙空母

ミサイルランチャーから反応弾を射出するアームド01（手前）。その奥に見えるのが、アームド02である。両艦はマクロスにドッキングすることなく撃破された。

艦体解説

アームドは、SDF-1マクロスとのドッキング機構を持ち、サブシステムとしての運用が期待されていた宇宙空母である。本艦は当初、宇宙戦闘機用の軌道ステーションとして開発されたが、途中でマクロス戦略システムの一環に組み入れられ、全面的な改修が施された。これにより、マクロスとの接続機構が付与されたほか、装甲板やビーム砲、ミサイルランチャーなどが増設され、戦闘力や推進力が向上している。2009年のSDF-1マクロス進宙式典の時点で3番艦まで就役し（8番艦まで進宙目前であった）、その直後に出現したゼントラーディ軍との戦いにも運用された。

ゼントラーディ軍の攻撃を受け、大破するアームド01の内部。艦載機として、VF-1の姿も見られた。

アームドとは、ARMD（Armaments Rigged-Up Moving Deck）の略で、武装を備えた移動甲板デッキの意味である。

データ

所属 ▶ 地球統合軍
全長 ▶ 430m
運用慣性質量 ▶ 17万4000t
動力系 ▶ オーバー・テクノロジー・アドバンスド、ヒートパイル・システム×2
重力制御系 ▶ オーバー・テクノロジー・アドバンスド、グラヴィティ・コントロール・システム
噴射推進系 ▶ オーバー・テクノロジー・アドバンスド、メインノズルクラスター　OTMN-3T×2、バーニア・スラスター　多数
火器 ▶ オーバー・テクノロジー誘導集束ビーム砲システム×5／大型対艦ミサイルランチャー×2／中型自己誘導対艦ミサイルランチャー×6／小型対空火器×多数
艦載航空機 ▶ ロッキー SF-3A ランサーⅡ／ノースロム QF-3000E ゴースト他
開発 ▶ 統合宇宙軍宇宙兵器廠

サイズ比較

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶アームド

運用記録

アームドの中で最初期に建造された1番艦アームド01と、2番艦のアームド02は、可変戦闘機(以下、VF)の試験飛行用ステーションとしても運用された。ここで艦が優れた汎用性を証明したため、数隻の宇宙駆逐艦と共に哨戒艦隊に加わることとなった。2009年、ゼントラーディ軍の襲撃を受けると、宙域に展開していた2隻が、艦載機のランサーIIなどを出撃させて応戦。だが戦力差が大きく、2隻とも撃破されている。

ゼントラーディ軍に対し、ミサイルランチャーや誘導集束ビーム砲を駆使して応戦したアームド01、02。だが、2度目の交戦で撃破された。

艦体構造

ラグランジュ5に建造された前線ステーションをベースに、ブリッジや武装群を増設し、戦闘にも対応する現状のスタイルとなった。内部構造はほぼ変更がなく、戦闘機用のハンガーと整備デッキはそのまま流用していたと見られる。

▶アームド01後方
後方部に設置されたスラスター部が、マクロスとのドッキングパーツを兼ねていたと推測される。

アームド02マーキング

艦体左側面と、艦上部に「02」のマーキングが付けられている。アームド01と同じ場所にレイアウトされていた。

▲アームド01底部
底部にも、ミサイルランチャーなどの兵器群や装甲が追加された。

▼▶アームド01前方
ブリッジが艦前部に設置されているほか、艦の両端には、スラスターも設置されているのがわかる。

マクロスでの運用予定図

予定されていたものの、実現はならなかったマクロスとのドッキング予想図。

武装

アームドへの改修時に設置された武装が、誘導集束ビーム砲と、大型・中型のミサイルランチャーである。これにより、本艦は艦隊戦にも対応する攻撃力を確保した。

ビーム砲システムは5基、ミサイルは大型対艦ミサイルランチャーが2基、中型自己誘導対艦ミサイルランチャーが6基設置され、多彩な攻撃が可能であった。

発射口

大型ミサイルの発射口は、艦上部に設置されている。使用時にはカバーが開く構造であった。

▼大型対艦ミサイル
艦上部から発射できる大型ミサイル。一度の攻撃で敵艦を撃破する驚異的な破壊力を持っている。バーニアを備えており、自動で目標を追尾した。

▲反応弾の一種で、ブリタイやエキセドルなど、ゼントラーディを驚かせるほどの破壊力を持つ。

大型対艦ミサイル発射シークエンス

1. カバーが開き、ミサイル本体が内蔵バーニアを使って浮上する。
2.
3. ミサイル内蔵のバーニアを最大噴射し、目標に対して高速で突撃する。

艦載機

アームドには、無人戦闘機のゴースト、有人戦闘機のランサーII、そしてVF-1も搭載されている。本艦はこれらの機の空母・司令部としても機能した。

アームドから出撃したランサーII。ゼントラーディ軍艦隊の砲撃に遭い、アームドの防衛と艦隊の壊滅に挑んだが、あっさりと撃破されてしまった。

▶ノースロム QF-3000E ゴースト
無人の小型戦闘機。アームド01には270機搭載されていた。

▶ロッキー SF-3A ランサーII
ビーム砲を2基備えた有人宇宙戦闘機で、アームド01には78機を搭載していた。

宇宙駆逐艦

宇宙軍戦力構想の中核を担う
初の熱核反応炉搭載艦

艦体解説

ASS-1の落着により、太陽系外で異星人同士の争いが起こっていることを知った人類は、統合政府を樹立し、防衛体制の強化を図った。その一環として開発されたのが、熱核反応ロケットエンジン搭載の宇宙駆逐艦である。宇宙駆逐艦は2003年4月、L（ラグランジュ）-5の工業ステーションにて建造が開始され、2年後の2005年3月に一番艦オーベルトが就役。以後、大量生産され、第一次星間大戦開戦時には相当数が配備された。簡略化された構造により量産性はもちろん、機動性にも優れた艦である。

データ

所属	地球統合軍	空虚重量	調査中
全長	調査中	エンジン	熱核反応ロケットエンジン
全高	調査中	最大速度	調査中
全幅	調査中	標準武装	対艦反応弾頭ミサイル／大口経固定ビーム砲

開発系譜図

宇宙駆逐艦

サイズ比較

SDF-1

宇宙駆逐艦

判明している艦名

- オーベルト
- ゴダード
- ツオルコフスキー
- アキシマ
- ミランダ

オーバーテクノロジーを応用したエンジン、反応弾装備と機動力、攻撃力は申し分ないが、軽量化に伴って装甲は薄く脆弱である。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶宇宙駆逐艦

運用記録

宇宙駆逐艦は一番艦以降、2005年6月に二番艦ゴダード、9月には三番艦ツオルコフスキーが就役。以後、来るべき異星人との交戦に備え、相当数の艦が建造された。しかし、宇宙駆逐艦は、2009年の第一次星間大戦を待たずに初陣を飾ることとなる。2005年9月、反統合軍組織によりハイジャックされた三番艦ツオルコフスキーは、火星からの帰還船団を攻撃。初めての砲火は、地球統合軍自身に向けられたのだ。この事態に対し、統合軍は二番艦ゴダードを派遣。反応弾で三番艦を撃沈し、事件を鎮圧している。ちなみにこのとき、二番艦の艦長を務めたのが、のちにマクロスの艦長となるブルーノ・J・グローバル大佐(当時)であった。

第一次星間大戦開戦時、宇宙駆逐艦は地球衛星軌道上を中心にかなりの数が配備されていたが、それらはブリタイ艦隊との初接触によって大損害を被ってしまう。ただし、反応兵器の運用によって、確認できるだけでも10隻以上の敵艦を撃沈しており、統合軍本部の想定以上の戦果を残したと言えよう。

そして、ボドル基幹艦隊の地球総攻撃では、残存する125隻の宇宙駆逐艦が応戦に当たったが、敵の圧倒的な戦力の前に、わずか5分で壊滅の憂き目に遭った。結果、宇宙駆逐艦は、月面アポロ基地の防衛任務に就いていた数隻のみが残ったとされる。

ボドル基幹艦隊の地球総攻撃時、残存艦隊となった125隻の宇宙駆逐艦が迎撃するも、圧倒的戦力差の前にわずか5分足らずで壊滅してしまった。

武装

中口径と大口径の固定ビーム砲各2門と対艦ミサイル18基を備える。対艦ミサイルに用いられた反応弾RB-5は、爆発威力を20～100ktの範囲で設定でき、最大威力ならば1発でゼントラーディ軍の標準戦艦を行動不能にすることが可能だった。

◀小型対艦ミサイル

▶六連装ミサイルランチャー(計3基)

艦体構造

全長は約200m。機動性に優れるが、装甲は宇宙艦艇としては脆弱であった。エンジンには反動推進クラスターシステム(熱核反応ロケットエンジン)が採用されている。これはマクロスの機関技術を解析してコピーしたものと言われる。

▼艦正面

- A ブリッジ ※最先端のタワー部分は、窓のない密閉型ブリッジとなっている
- B 小口径固定ビーム砲
- C 大口径固定ビーム砲
- D 背部六連装ミサイルランチャー
- E 巡航用エンジン
- F 戦闘用ブースターロケット

※通常は艦底の巡航用Eを、戦闘時や高機動を必要とする場合は、艦尾の戦闘用ブースターFを使用する

EXTRA REPORT

関連事項

地球統合軍宇宙軍

地球統合軍は、異星人との接触および交戦を想定し、宇宙軍を設立。ASS-1を修復改造し主力艦とするプロジェクトを開始する一方、この主力艦を根幹とする防衛システムの構築を図っていたとされる。当初の予定では、2011年を目処にマクロス、およびアームド01～08(01、02はマクロスにドッキング)、その他、相当数の宇宙駆逐艦を月およびラグランジュポイントに集結させ、哨戒任務に当たらせる予定であった。しかし、異星人との戦いは2009年に勃発。大艦隊を集結させる前に大戦へと突入し、宇宙軍の戦略構想はもろくも崩れ去った。ただし地球総攻撃時のボドル基幹艦隊は、総数500万隻を超える圧倒的な戦力を誇っており、仮に宇宙軍の構想通りの戦力が整っていたとしても、防衛システムが有効に働いたかどうかは疑問が残る。

■宇宙軍編成構想

- 戦艦 SDF-1マクロス(1隻)
- 戦艦 SDF-2メガロード(1隻)
- 宇宙空母 アームド 01～08(8隻)
- 宇宙駆逐艦(多数) ×α
- 艦載航空兵器
  - QF-3000E ゴースト
  - SF-3A ランサーII

QF-3000E

VFとの連携を想定した 統合軍戦闘機

統合戦争で深刻な人的被害を受けた統合軍にとって、QF-3000Eは重要な戦力となった。本機はゼントラーディ軍との初遭遇戦においても投入されている。

▼QF-3000E ゴースト

SF-3AはOTMが導入された兵器としては最初期の機体にあたり、反応推進システムOTMによる爆発的な加速力を武器とする大胆な設計の実用戦闘機である。

SF-3A

▲SF-3A ランサーII

機体解説

可変戦闘機（VF）の開発によって想定される異星人との交戦に備えた統合軍は、一方でVFの支援と連携を想定した低コスト兵器の開発を先行させた。その成果が、無人戦闘機QF-3000E ゴーストと、宇宙突撃戦闘攻撃機SF-3A ランサーIIである。ともにOTM（オーバーテクノロジーオブマクロス）が導入されたこれらの機体は、統合軍の戦術構想を支えると同時に、VF開発の基礎技術発展にも寄与した。そして、第一次星間大戦においてVFが脚光を浴びる中で、これらの兵器も着実な戦果を積み重ねていったのである。

QF-3000Eは大気圏内外両用の全領域戦闘機で、同じく全領域での戦闘能力を有したVF-1 バルキリーとの連携により優れた運用性を発揮した。

ゼントラーディ軍と交戦するSF-3A。初遭遇戦でアームド01、アームド02の艦載機が一撃離脱戦闘を試みたが、敵戦闘ポッドに捕捉され大きな損害を出した。

データ

QF-3000E ゴースト

所属▶地球統合軍

全長▶21.62m　**全幅**▶9.35m　**空虚重量**▶22.0t

標準武装▶マウザー55mm機関砲×6／ビフォーズ多目的ミサイル×12

SF-3A ランサーII

所属▶地球統合軍

全長▶13.2m　**全高**▶2.65m

空虚重量▶9.5t　**メインエンジン**▶熱核反応ロケット

標準武装▶ハワード長射程荷電粒子砲×2／ヒューズ反応対空ミサイル×6

サイズ比較

VF-1J

QF-3000E

SF-3A

開発系譜図

QF-3000E ▶ X-9

▶ SF-3A

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶QF-3000E ゴースト／SF-3A ランサーII

運用記録

2003年に原型機が初飛行、2004年末に量産が開始されたQF-3000Eは、マクロス戦略システムの一環を担って運用された。だが、第一次星間大戦の対ボドル基幹艦隊戦で大多数が失われ、戦後は100機余りしか残らなかったと言われる。一方、アームド宇宙空母の艦載機として開発されたSF-3Aは、宇宙軍の主力として対ボドル基幹艦隊戦までに1500機以上が量産され、戦後も運用が継続されたという。

プロメテウスのアングルドデッキから発進するQF-3000E。早瀬未沙が乗ったシャトルを護衛する任務などにも運用された。

QF-3000E

ノースロム社の開発による全領域無人戦闘機。OTMコンピュータシステムを搭載している。機体制御は半自律型人工知能と母艦（あるいは管制機能を有する母機）からの遠隔操縦によって行われる。

▲極超音速リフティングボディ構造が特徴で、VF-1よりも大型の機体である（最大離陸重量は31t）。

◀▲主推進機関は熱核反応エンジンで、開発中には冷却系の問題も生じた。なお、本機のエンジン問題や宇宙空間の機動特性は、VF-Xの開発に活かされた。

離陸の直後に垂直上昇を行うQF-3000E。無人機ならではの優れた機動性を活かした挙動である。

武装

A
B
A

A マウザー55mm機関砲

固定武装としてマウザー55mm機関砲を機体左右に3門ずつ、計6門内蔵する。有人用装備を必要としない無人機の特性と、ペイロードの大きさが、このような重武装を可能としていた。

B ビフォーズ多目的ミサイル

機体側部ユニットにはビフォーズ多目的ミサイルが計12基内蔵されている。通常はハッチを閉じた状態だが、発射時にハッチ後方が内側に引き込まれて発射口が露出する。

◀ミサイル発射口

ランディングギア

▲上はランディングギアと着陸フックを展開して着陸態勢を取るQF-3000E。ランディングギアは機体底面に3基が内蔵されている。

SF-3A

アームド宇宙空母の艦載機として開発された宇宙突撃戦闘攻撃機。オーテック社製の反応推進システムOTMを搭載し、完全な一撃離脱フライ・バイ戦闘を前提とした初期加速偏重の設計がなされている。

SDF-1の艦載機としても運用され、ボドル基幹艦隊との戦闘ではVF-1と共に突撃するSF-3A（写真右上）が確認された。

◀前面投射面積が小さく、対艦戦闘シミュレーションにおいては高い生還率を示した。

▲機首上部とビーム砲基部にバーニアベルト、機体後部左右に高機動バーニアノズルを備え、15G以上の回避運動が可能。

アームド宇宙空母から発進するSF-3A。発進後は最大加速で敵陣に突入し、一撃離脱ののちに推進剤を使い果たして慣性飛行に移行、母艦に回収される。

▲大推力熱核ロケットは10Gを超える加速性能を有し、最終到達速度は毎秒7kmに及ぶ。

武装

コクピット
A
B
D
C

A 捜索・照準用レーダ

機体上部にはパネル状の捜索・照準用レーダーを備える。このレーダーは角度を変更することが可能となっている。また、レーダー手前の機体上部にコクピットが位置している。

B 連装大型ビーム機関砲

ハワード長射程荷電粒子ビーム砲（出力750MW）。反応エンジン発電ブロックからのパワー供給で稼動し、突撃加速時以外は主砲キャパシターによる数回の減力発射のみ可能である。

C 大型ミサイル射出口

固定武装の大型ミサイルにはヒューズ反応対空ミサイル（0.5kt相当）を6発搭載し、機体側面に発射口を配している。ビーム砲と合わせた総合的な火力は非常に高い。

▲ミサイル

D 照準カメラ

目視戦闘は考慮されておらず、機首部に照準カメラを配し、コクピットを装甲で覆っている。その設計からは、一撃離脱のみに主眼を置き、ドッグファイトを想定していないことがうかがえる。

EXTRA REPORT

関連事項

グラナモ・スパイダー・バッグ

戦闘以外を担う宇宙作業艇も開発されており、4基の軽作業ハンドと1基の重作業ハンドを有するグラナモ・スパイダー・バッグがマクロス艦外での作業に従事した。

統合軍航空機

大空を翔る統合軍の航空戦力

機体解説

極めて高い汎用性を有する可変戦闘機(VF)は、実用化からほどなくして航空戦力の主役となった。しかし、VFはあくまで戦闘機の範疇にある兵器で、局面に応じた通常兵器との連携運用が継続されることとなる。特に早期警戒の分野は、専用の機材を搭載し、偵察に特化した機体の独壇場であった。第一次星間大戦前後の統合軍においては、ES-11D キャッツ・アイやEC-33B ディスク・センサーなどがその役を担い、戦場の目として活躍した。後年にはこれらの戦術的役割もVFに託されることになるが、当時は運用コストの面などを考慮して既存の技術によって開発された偵察機が選択されたのだった。こうした支援兵器の働きが、統合軍の戦術を支えていたのである。

▶グラモア ES-11D
早期警戒機キャッツ・アイ
大気圏内外両用の早期警戒機。優れた探査能力を有しており、主に索敵任務に運用された。

マクロスが火星のサラ基地に降下した際にはES-11Dが周辺警戒にあたったが、カムジンの部隊を発見できなかった。

ES-11Dは第一次星間大戦末期、ゼントラーディからの停戦使節の護衛にも参加した。

マックネル・ドグラー社製の偵察機EC-33B。偵察任務はもちろん、友軍機の管制や情報処理も行えた。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶統合軍航空機

運用記録

第一次星間大戦期の統合軍では、VFやデストロイドが主戦力として投入される一方、早期警戒機もそれらと連携する形で盛んに運用された。なかでもゼントラーディ軍の矢面に立たされたSDF-1 マクロスでは、早期警戒機が必要とされるケースが頻繁に発生し、ES-11D キャッツ・アイが偵察任務に就くことが多かった。主な運用例としては、放棄されていた火星サラ基地周辺の哨戒や、レーダー機能が著しく制限される小惑星帯の偵察などが挙げられる。また、大戦終結直後にはEC-33B ディスク・センサーのような早期警戒管制機の運用局面が増えることになった。ボドル基幹艦隊の総攻撃で地球上の軍施設がほぼ壊滅し、指揮系統が寸断されていたため、移動指揮所としての早期警戒管制機が重要となったのである。反乱分子の胎動も、その状況に拍車をかけていたと言えよう。

護衛のバーミリオン小隊とともに小惑星帯の偵察を行うES-11D。武装を持たないため、戦闘が想定される宙域での任務では護衛がつくことがほとんどだった。

関連事項

EXTRA REPORT

捕らわれたキャッツ・アイ

前述した小惑星帯の偵察任務では、ES-11Dがゼントラーディ軍のサンプル捕獲作戦の標的となる事態に陥った。このケースでは、ゼントラーディ軍の艦砲射撃でSDF-1の広域レーダーが破壊され、さらに戦闘で散乱した小惑星の破片によって近距離レーダーの効果も制限されていた。敵の動きを探るには偵察機を出すしかなく、それを逆手に取られたのである。また、敵機との交戦を想定してVF-1 バルキリーの一個小隊が護衛についていたが、これも陽動によって分断させられていた。手の内のことごとくを見透かされ、早瀬未沙中尉を乗せたES-11Dは敵に捕獲されてしまう。偵察機運用のセオリーが、ゼントラーディ軍の術中にはまる結果となったのである。

ゼントラーディ軍に追い込まれて小惑星の破片に衝突し大破したES-11Dは、ゼントラーディ軍の回収艇に捕獲される。

衝突事故で後部座席のパイロットは死亡。前部座席に搭乗していた早瀬中尉はかろうじて生き残ったが、敵の捕虜となった。

グラモア ES-11D 早期警戒機キャッツ・アイ

グラモア社が開発した早期警戒機(AEW)で、偵察機としては珍しく前進翼構造が採用されている。機体上部に円盤状レーダーアンテナ、機首下部に重力探知機を備え、通常索敵範囲は1,000km以上を誇る(宇宙空間索敵モードでは探知範囲がさらに拡大される)。また、主翼中央に推進剤タンクと一体化した宇宙用推進器を装備しており、大気圏内外での運用が可能だった。ECM用機や先導機としても活用された。

▲コクピット
分割式のコクピット構造で、前席にオペレーターが、後席にパイロットが搭乗する。右はオペレーター席のコンソールで、上部中央の円形レーダースクリーンが特徴となっている。

マックネル・ドグラー EC-33B ディスク・センサー

統合軍で運用されたマックネル・ドグラー社製の大型査察偵察機。大気圏内用早期警戒管制機(AWACS)としての性能を備え、機体後部のレーダーアンテナは1,000km以上の探知範囲を有している。機内には大型のモニタリングルームが設置されており、友軍機の管制や情報処理を行うことができる。また、不整地面への着陸も可能で、整備が進まない第一次星間大戦直後の地球における作戦行動で活躍した。

スカル中隊と編隊を組んだEC-33B。「チェシャキャット」のコードネームで中隊を指揮して反乱分子の捜索にあたり、空の司令部として大きな役割を果たした。

▲モニタリングルーム
❶モニタリングルーム。右側にはオペレータ席が、左右壁面上部にはモニターが並ぶ。❷未沙のコンソール。❸コクピット側から見たモニタリングルーム。

統合軍輸送機／航空機

統合軍が運用した
多種多様な航空機

▼SC-27 STAR GOOSE（スターグース）
SDF-1 マクロスに搭載されていたストンウェル社製のマイクロシャトルで、SDF-1 マクロス乗員の移送などに使われている。

▼VC-27 TUNNY（タニー）
ジェネラル・タイタニック社によって開発された大型VTOL輸送機。可動式のエンジンを4発搭載しており、VTOL飛行に対応する。

▶VC-33 MOM'S KITCHEN（マムズキッチン）
グラマー社製の小型VTOL輸送機で、SDF-1 マクロスの艦載機。2基の大型エンジンに加え、VTOL用ノズルを備えている。

ゼントラーディ軍の襲来時、シー・サージェントなどの戦闘ヘリがリガードと交戦するが、あっさりと敗北した。

▼ドラゴンII
マックネル・ドグラー社製の大気圏内用の戦闘機（図はロイ・フォッカー機）。主翼下のパイロンにミサイルを装備することができた。

機体解説

地球統合軍が運用する航空機群は、西暦2009年にゼントラーディ軍が姿を現した後も、その機体特性に応じて様々な任務に投入された。人員や物資を輸送・運搬する輸送機や大気圏脱出・突入を可能とするシャトル、大気圏内戦闘用のヘリコプターや航空機など、その種類は多岐に及んでいた。このうち、数種の輸送機やシャトルは、SDF-1 マクロスの艦載機として運用され、乗員の輸送などに使用されている。

輸送機を用いて早瀬未沙大尉やブルーノ・J・グローバル艦長といった要人を輸送する場合には、VFが護衛に就くことが多かった。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶統合軍輸送機／航空機

運用記録

オーバーテクノロジー(OTM)導入以前の技術で製造されたこれら航空機群は、第一次星間大戦以前から、地球統合軍の軍事力を支えていた。戦闘ヘリなどは対ゼントラーディ戦にも投入されたがなすすべなく敗れ、可変戦闘機(VF)にその役割を譲っている。一方で、輸送機やシャトルは戦場の後方でその性能を発揮している。

VTOL機構を持ち、場所を問わず容易に離発着ができる輸送機群は、第一次星間大戦中のみならず、終戦後も活躍した。

SC-27 スターグース

大気圏内外の往復が可能なマイクロシャトルで、SDF-1 マクロスに搭載されていた。VIP専用機で、シートには耐圧・耐放射シェルターを備える。

▼早瀬未沙が、地球統合軍本部との交渉に出向くために使用。敵襲を受けるが、一条輝らのサポートを受け地球へ帰還した。

▲大気圏内の飛行時には、機首底部に先尾翼が、主翼には小型の翼が出現する。

◀タラップ

▼ランディングギアは3基備えており、単独での着陸が可能となっていた。

VC-27 タニー

マムズキッチンに比べ一回り大きい輸送機。アラスカの統合軍総司令部からSDF-1 マクロスに物資などを輸送したとみられる。

◀▲機体の垂直離陸・着陸時は、左図のようにエンジンノズルを90度下方に可動させる構造となっていた。

VC-33 マムズキッチン

双発式のエンジンを備えた小型輸送機。SDF-1 マクロスのグローバル艦長と早瀬大尉を統合軍本部に移送した。

▲▶乗降用の扉は、機体左側にひとつレイアウトされているのみ。タニーと同様、エンジンノズルを下方に向けることで垂直離陸・着陸が可能となる。

アベンジャーII

L・V・T社が開発した艦上攻撃機。空母での運用を想定し、底部に着艦フックを備える。SDF-1 マクロスへの物資補給に使用された。

▲▶翼下のフックにミサイルを計40発、エンジン下部にも計2発装備することができた。

ドラゴンII

統合軍が第一次星間大戦以前に運用していた主力戦闘機。ロイ・フォッカーはカラーリングの若干異なる専用機(写真左端)を用いた。

◀▼2次元推力偏向ノズルとVTOLノズルを採用しており、高い機動性を誇る。30mmガトリング砲を装備。

戦闘ヘリコプター(シー・サージェント／コマンチェロ)

ツィオコルフスキー社が開発した戦闘用ヘリ。シー・サージェントは対潜・多用途艦上ヘリで、コマンチェロは戦闘・攻撃艦上ヘリである。

▼シー・サージェント

▼コマンチェロ

第一次星間大戦時、シー・サージェントは哨戒任務にも使用され、リガードと交戦。

関連事項
EXTRA REPORT

反統合同盟 カリョービン

◀▲反統合同盟が運用していた戦闘機で、型式番号はMIM-31。機首下に35mmガトリング砲を備える。

統合軍車両

軍の活動を補助する 様々な特殊車両

機体解説

オーバーテクノロジーの入手によって、統合軍の正面戦力は新たな技術と着想に基づく兵器へと置き換えられていった。しかし、新技術が統合軍の運用体系全てを革新したわけではない。特に、異星人と直接戦闘を行わず後方で戦力を支える兵站部門などでは、安価で信頼性の高い既存の軍用車両が運用され続けた。それらは非常に多様であり、統合軍という組織の巨大さを物語っている。

▼GN XM-3002 ジャンキー
大気圏内外両用の6輪バギー。前後に分割された車体は連結部で可動し、不整地面の走行に適している。

▲クラウラー DL-88 センチピード コンテナ仕様車
低重力下での走行も可能な大気圏内外両用重トラックで、開放式の荷台には複数のコンテナを搭載することができる。

荷台にはコンテナを積載する。また、非常に大型であるため、乗降用のハシゴやステップが設けられている。

SDF-1 マクロスが火星のサラ基地で物資の補給を行った際には、多くのジャンキーやセンチピードが運用された。

マクロス艦内では、多種多様な特殊車両が用いられた。広い艦内空間がそれらの運用を容易にしていたと言える。

第一次星間大戦の戦時下においては、市街地に小規模の戦闘車両部隊が配備される光景も日常的に見られた。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶統合軍車両

運用記録

第一次星間大戦当時の統合軍が運用した軍用車両は、兵站や治安維持を目的としたものが多い。これは陸上兵器の主戦力がデストロイドやバトロイドに移行し、戦車のような従来の装甲戦闘車両の戦力的意義が薄れつつあったことにも関係している。

特に、可変戦闘機(VF)とデストロイドの配備がいち早く進められたSDF-1 マクロスでは、それらを補助するためにさまざまな種類の艦載車両が運用され、必要に応じて艦内工廠での増産も行われたと考えられる。全長1.2kmにも及ぶマクロスの艦内ではあらゆる作業が大スケール化していたために、艦の運営を支える補助車両の重要性が増していたと言えるだろう。マクロスの艦載兵器と言えばVF-1シリーズを真っ先に思い浮かべるであろうが、これらの軍用車両もれっきとした艦載兵器として活躍していたのである。

広いマクロスの艦内には移動手段が整備されていない区画も多く、兵員の移動には小型車両などが頻繁に用いられた。

軍用車両が民間に払い下げられるケースも多く、ロイ・フォッカーは軍用の高速ジープを所有して非番時のドライブに愛用していた。

軍事車両①

これらはマクロスで運用された整備車両や連絡用車両で、用途に特化した特殊車両がほとんどである。ゼントラーディ軍との戦いにおいては、出撃が相次ぐVF-1部隊を支える裏方としてマクロスの戦力維持に貢献した。

◀▲センチネンタル M-299 シュガーフット

◀▼電源車

◀▲クレーン車

▶給水車

▼▶消火用タンク

▲▶牽引車

軍事車両②

テクノロジーが発達した統合軍においても歩兵の役割は重要であり、彼らをサポートするためのさまざまな軍用車両が存在する。なお、軍用給食車両などは戦災に見舞われた民間人の支援にもあてられた。

▼軍用給食車両

▲▶装甲車

▼GN XM-3002 ジャンキー

◀▲軍用ジープ

軍事車両③

治安維持や医療活動を担った軍警察(MP)や軍の医療機関には、専用の車両が与えられていた。これらはもっとも日常生活に密着した類の軍用車両と言える。

◀▼MP白バイ

▼統合軍救急車

SDF-1

人類が初めて手にした オーバーテクノロジー

Illustration by Hidetaka Tenjin

艦体解説

全長1.2kmに及ぶ巨大な戦闘構造物、SDF-1は、正確には人類自らの技術によるものではない。1999年、南アタリア島に異星人の宇宙戦艦(メルトランディ軍中型砲艦とされる)が墜落。オーバーテクノロジー（以下OTM)の塊であったこの艦を、統合軍の対異星人用兵器開発計画に基づき、およそ10年をかけて修復と改装を施したものがSDF-1(SUPER DIMENSION FORTRESS-1)である。これは墜落船から星間戦争の痕跡が発見されたことにより、来るべき異星人の襲来に対抗するための戦力が急遽必要とされたための措置であった。なお、中型砲艦のダメージが大きかったため、主砲、機関部など一部の流用にとどまっている。

主要クルー

ブルーノ・J・グローバル

早瀬未沙

クローディア・ラサール

データ

※データは要塞型時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶約1,200m
全幅▶約600m
全備質量▶約2,200万t
運用慣性質量▶約1,800万t
動力系システム▶OTMヒート・パイルシステム・クラスター
重力制御系システム▶OTMグラビティ・コントロールシステム
噴射推進系システム▶OTMノズル・クラスター／OTメイン・ノズル・クラスター／OTバーニア・クラスター
兵装▶OTM艦首砲撃システム×1／OT誘導集束ビーム砲システム×8、OT超高速電磁レールキャノン×4／大型自己誘導対艦ミサイルランチャー／その他ロケット兵器、火器多数

※OTM(オーバーテクノロジー・オブ・マクロス)、OT(オーバーテクノロジー)

サイズ比較

開発系譜図

※SDF-1はメルトランディ軍の墜落艦を修復したものである。

SDF-1マクロス

運用記録

アームド01·02との連結作業の途中でゼントラーディ軍の攻撃を受けたため、■装や性能試験が未完了のまま民間人を伴い出航せざるを得なかったSDF-1。さらにOTMによるトラブル(フォールド·システムの事故)の結果、太陽系外縁部への漂流を余儀なくされている。その後半年をかけて地球へ帰還した際にメルトランディ軍との戦闘により主砲が全損。修復が叶わぬままボドルザー艦隊と最終戦闘に直面したが、これをくぐり抜けた。

SDF-1の運航には直接要員だけで2万数千人もの人員を必要とし、関係者の家族やサービス要員を含めた場合は8万数千人——都市規模の人口となる。なお、大艦橋内部は地球の技術で新設されたブロックであり、メインブリッジでは艦長のブルーノ·J·グローバル以下、主任オペレーターである早瀬未沙、主任火器管制官であるクローディア·ラサール、3Dキャプコム担当のヴァネッサ·レイアード、艦内管制担当のキム·キャビロフとシャミー·ミリオムらが、艦の運用を担っていた。

ゼントラーディ軍の追撃を受けながら、SDF-1は地球への帰還を目指して単艦での航海を続けた。

兵装

主砲であるOTM艦首砲撃システム1門(図A)や副砲のOT超高速電磁レールキャノン4門(図B)など、OTMを用いた武装を中心に、ミサイルやロケット砲などの通常兵器(写真)も無数に備え、まさしく要塞並の高い火力を誇っている。

ブリッジ

艦の中枢であるブリッジは開放式の多層構造で、運行を統括するメイン·ブリッジ(艦長を含め6名で運用)と複数のサブ·ブリッジで構成される。また、前面には大型可動スクリーンを備える。

メイン·ブリッジ▶

◀艦内管制
マルチ·コンソール

艦載機

SDF-1は多数の艦載機を、アームド01·02を中心として運用し、敵機動兵器に対抗した。艦載機は主にバルキリーとデストロイドに大別され、前者は主に航空·宇宙戦に、後者は地上戦及び艦の直衛に運用される。これらは艦内の工廠で生産でき、損耗した機体の補充も進められていた。

宇宙空間でのバルキリーの離着艦は、フック·アームを用いたアームドの艦載機運用システムで行われる。

▼アームド01·02

アームドは対異星人計画の一環として、SDF-1のOTMを流用して開発された宇宙空母。バルキリー及び無人機QF-3000Eゴーストの母艦として左舷に1番艦、右舷に2番艦が接続された。

▲ゴースト

無人戦闘爆撃機であるゴーストは、主に強行偵察に用いられた。人体の耐G限界を無視した高い機動性を誇る。

◀バルキリー

VF-1シリーズはSDF-1で運用された可変戦闘機で、艦から離れた攻撃·迎撃任務に用いられることが多かった。

◀デストロイド
(左図:モンスター)
(右図:トマホーク)

陸戦兵器であるデストロイドは、艦が装備する火砲などの対空兵器と合わせて、SDF-1の防空戦力として運用された。

要塞型

SDF-1の巡航形態は要塞型と呼ばれ、動力系のヒート·パイルシステム·クラスター、重力制御系のグラビティ·コントロール·クラスター、超時空航行系のフォールド·システム·クラスターの各OTM機関によって稼働する(フォールド·システムは事故により消失)。また、噴射推進系にもOTMが用いられており、巡航システムのほとんどが墜落艦の流用である。なお、本形態でもほとんどの固定武装が使用可能であり、通常戦闘ならば十分に可能だが、OTM■首砲撃システムの発射には強攻型へのトランスフォーメーションを要する。

土星の衛星タイタン付近での戦闘では、ゼントラーディ軍大型戦艦が確認されるまでは要塞型で迎撃を行っている。

通常の対空砲火に加え、デストロイドが艦の表層に展開して対空戦闘を行う。しかし懐に入った敵機動兵器には脆かった。

艦内には大規模な市街区域が設けられ、5万8千人近くの民間人が生活していた。その構造は艦の巨大さを物語っている。

▼艦上面やや後部寄りに位置するのがブリッジで、両舷にはアームド01·02がドッキングアームを介して接続されている。

▼艦正面

◀艦尾に推進用のメイン·リアクション·エンジンと、艦下面中央に上昇用サブ·リアクション·エンジンを装備している。

強攻型

墜落船のモジュール構造を踏襲した(技術的にせざるを得なかった)SDF-1。この各部が独立した構造は■全体の生存性を高めると同時に、フォールド·システムの消失によって寸断されたOTM■首砲撃システムのエネルギーバイパスを再接続する解決案にも繋がることになる。それがトランスフォーメーションと称されるモジュールの組み換えであり、これによってSDF-1は強攻型と呼ばれる人型に近い形態に変形する。この機構は人類が独自に付与したものであり、SDF-1の大半を占めるOTMからは独立した機能だった。

本来、強攻型は艦首砲撃システムを使用可能とするための方策であり、主砲発射形態と呼ぶべきものである。なお、発射時は艦首が前方90度に展開する。

トランスフォーメーションの完了には3分間を要し、艦内市街地には警告のアナウンスとカウントダウンが放送される。

重力制御系が不安定だったことから、トランスフォーメーションによって艦内に被害が出ることも多かった。

◀主砲はミリア艦の砲撃を受けた際に大破し、ボドル基幹艦隊との決戦もこの状態で行われた。

◀▲強攻形態でも航行は可能で、大気圏脱出も行える。ただしモジュール組み換えによって推進系に悪影響を及ぼした結果、航行能力は低下している。

SDF-1

最後の人類を運んだ超時空の箱船

機体解説

2009年2月、冥王星宙域にデフォールドし、突然の航海を始めることとなったSDF-1マクロスは、フォールド時の損傷により、艦首砲撃システムへのエネルギー伝達が不能となった。これに対しマクロス軍部は、艦の各ブロックを組み替え、主反応炉から主砲への導線を確保することを発案し、実戦での主砲発射にも成功する。その後この"組み替え"は、「トランスフォーメーション」と命名され、艦の制式システムとされたが、作業の煩雑さや推進系への悪影響、艦内重力場や業務への被害などが生じるため、艦内各部門の評判は最悪であった。なお、組み替え後の形態は人型に近い独特のフォルムとなるが、軍部はこれを「強攻型」と命名し、運用上必須の形態であることを印象付けようとしていた。

主要クルー

ブルーノ・J・グローバル

早瀬未沙

クローディア・ラサール

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet
メカニックシート

SDF-1 マクロス

構造

SDF-1 マクロスの構造上の特徴は、オーバーテクノロジー（以下OTM）と人類の既存技術の混在にある。異星人の艦艇を修復して建造された本艦は、OTMの完全な解析がなされないまま改装が進められたため、運用が開始された時点でも把握できていない部分が多々あった。それを既存の技術によって補うことで、かろうじて運用できる状態になっていたのである。要塞型から強攻型へのトランスフォーメーションはその最たる例であり、原型艦のモジュール構造を人類の技術で組み替えるという強引な設計と発想は、不安定なOTMを御するためにあらゆる手段が採られた本艦を象徴していると言えよう。

トランスフォーメーションはOTMを利用しない人類側のシステムだが、それだけに問題も多かった。

本来は巨大な異星人用の艦艇だったため、人類が運用するにあたり、大艦橋内に人間サイズのブリッジが新設された。

SDF-1マクロス構造図

外部構造
- A 大艦橋
- B 主砲（OTM艦首砲撃システム）
- C 副砲（OT超高速電磁レールキャノン）
- D アームド01
- E アームド02

内部構造
- 軍事区域
- 一般区域（住宅街／食料生産ブロック）
- 一般区域（繁華街）

動力部
- メイン反応炉
- メインリアクションエンジン
- 上昇用サブリアクションエンジン／重力制御システム

▶要塞型

原型となったメルトランディ中型砲艦同様、艦首部分が主砲となっているが、艦載機母艦として両舷に2隻のアームドを連結した構造など、改修時に追加された部分も多い。

▶強攻型

人型に近い強攻型だが、あくまで主砲を発射するための形態に過ぎない。

大艦橋

SDF-1の頭脳である大艦橋は、下部中央に管制中枢たるブリッジを配し、その周囲にレーダー類を併設している。吹き抜け4階建のブリッジは、艦長や主任管制官が指揮を執るメインブリッジを頂点に、2箇所のサブブリッジで艦内各セクションを管轄する指揮系統が採られており、その能力は一軍の司令部にも等しい。なお、ブリッジ前面は大窓となっているが、OTM新素材の採用により、外部装甲板に匹敵する強度を誇っている。

ブリッジの周囲には、艦の目と耳となる超大型探知通信情報コンプレックスが配置されている。

▼全景

▼正面

◀ブリッジ俯瞰図

▼ブリッジ部正面アップ

- A メインブリッジ
- B サブブリッジ
- C 大型可動スクリーン（メインブリッジ用）
- D 大型可動スクリーン（サブブリッジ用）
- E ブリッジ部ウィンドウ

▶ブリッジ部アップ

ブリッジ構造

SDF-1 マクロスの大艦橋下部前面には、吹き抜けのスペースにメインブリッジと2つのサブブリッジが配置されている。メインブリッジのスタッフが艦全体の指揮と発令を行い、それに従ってサブブリッジが各部門を分担して管轄するというシステムが採られている。また、前面にはメインブリッジ用とサブブリッジ用の2基の大型可動スクリーンが設置されている。

ブリッジ側面図

Ⓐメインブリッジ
Ⓑサブブリッジ
Ⓒ大型可動スクリーン

▼ブリッジ

▲ブリッジ(後方) 上は左舷サブブリッジの上方から大艦橋全体を見たもの。メインブリッジは若干上方にあるため、この位置からは内部をうかがうことはできない。左下が左舷側サブブリッジ、右中央が上部サブブリッジで、それぞれにオペレーター用の機器が備えられている。また、大型可動スクリーンの基部がレール状になっており、前後にも移動可能であることがわかる。

ボドル基幹艦隊との最終決戦でリン・ミンメイが唄った際には、下方の大型可動スクリーンを水平位置に固定し、彼女が唄うためのステージとして利用している。

スクリーンの表示機能はスポットライトなどの演出にも用いられた。また、スクリーンはある程度の強度を有しており、ミンメイが乗っても問題はなかった。

▲ブリッジ特設ステージ

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶SDF-1マクロス

メインブリッジ

SDF-1の中枢であるメインブリッジでは、艦長以下6名のスタッフが艦内各部門の統合指揮に携わる。規模は大きくないが、SDF-1でもっとも重要な部署と言える。

メインブリッジでは早瀬未沙やクローディア・ラサールといった主任オペレーターが艦の運行を取り仕切る。

ブリッジ配置図

メインブリッジ
サブブリッジ①
サブブリッジ②

▲下部サブブリッジ

関連事項

EXTRA REPORT

臨時モニター・コンソール

艦内に設けられた臨時モニター・コンソール。「ミンメイ・アタック」時、リン・カイフンがステージ演出の操作を行うために使用した。

▲臨時モニター・コンソール

3面のスクリーンを備えるオペレータールームで、マネージャーのリン・カイフンがカメラ操作などを担当した。

メインブリッジ配置図

Ⓐキャプテンシート Ⓑ操艦メインコンソール Ⓒ航空管制メインコンソール Ⓓ3Dキャプコム Ⓔ艦内管制メインコンソール

Ⓐ キャプテンシート

ブルーノ・J・グローバル

艦長のブルーノ・J・グローバルが座る席だが、他のオペレーター席に比べると特に大型の機器は設けられていない。SDF-1の管制システムが高度に分化され、艦長の役割が戦略的思考や最終的な判断が主であることを表している。

Ⓑ 操艦メインコンソール

クローディア・ラサール

航法と火器管制を行うコンソールで、主任管制官はクローディア・ラサール。メインコンソール上方に設けられたオーバーヘッドコンソールは、角度を変えることもできる。シートはないが、折り畳み式の腰掛けが備えられている。

▲コンソール前方

Ⓒ 航空管制メインコンソール

早瀬未沙

航空隊の戦闘管制を担うコンソールで、早瀬未沙が主任管制官を務める(コールサインは「デルタ1」)。操艦コンソールと左右対称の位置に置かれ、基本構造も同じだが、メインコンソールの機器に若干の違いが見られる。

▲コンソール前方
▲オーバーヘッドコンソール内表示①
▲オーバーヘッドコンソール内表示②

Ⓓ 3Dキャプコム

ヴァネッサ

フロア外に張り出したスクリーンが特徴のCAPCOM(Capsule Communicator=通信担当官)用コンソールで、同時にレーダー監視も行う。主にヴァネッサ・レイアードが担当した。シートは前後にスライドが可能。

Ⓔ 艦内管制メインコンソール

キム/シャミー

メインブリッジ後部に2席が左右対称で配置されており、艦内管制を分担して行う。正面に9分割の大型スクリーンを備える。通常はキム・キャビロフが右舷側、シャミー・ミリオムが左舷側のオペレーターを務める。

Illustration by Hidetaka Tenjin

クァドラン・ロー

機体解説

女性だけの巨人族メルトランディは、独自の技術に基づく兵器を運用し、ゼントラーディに匹敵する戦力を構築した。その一例が高性能婦人士官用戦闘倍力機「クァドラン」シリーズであり、その高速高機動タイプが"ロー"である。本機は優れた空間戦闘能力を発揮してメルトランディの力をゼントラーディ軍、地球統合軍、両軍に広く知らしめた。中でもメルトランディ軍随一のエースパイロット、ミリア639が駆った真紅の機体は、多大な戦果をもって本機の性能を実証したのである。

主要パイロット

ミリア639

データ

所属▶メルトランディ軍
全高▶17.1m
全備質量▶33.6t
エンジン▶調査中
推力▶調査中
最大速度▶調査中
標準武装▶中口径速射インパクト・キャノン×2／高速回転式3砲身レーザー・パルス・ガン×2／近接小型高機動ミサイルランチャー×4（弾数126発）

サイズ比較

VF-1J
クァドラン・ロー
ミリア639
ヒト

開発系譜図

▶ クァドラン・ロー

メルトランディの誇る 高機動型バトルスーツ

クァドラン・ロー

運用記録

クァドランシリーズはメルトランディ軍の兵器の中では希少な部類に入り、実戦に投入されたロー型の機数は多くなかった。本機がシリーズの高級機に位置することも、そうした運用状況に影響していたと考えられる。それゆえ、本機の配備はモルク・ラプラミズ直属のミリア639などのエースパイロットを中心に行われていたと見られ、第一次星間大戦においても確認される交戦例はさほど多くない。しかし、少数でブリタイ艦に突入したミリア隊の活躍、また地上におけるマクロス艦への攻撃など、限られた運用で確かな戦果を残した事実が本機の性能を物語っていると言えよう。

ミリア639率いるクァドラン・ローの小隊がノプティ・バガニス5631の艦内に突入し、かく乱を行った。

地球に降下したSDF-1マクロスを追撃し、洋上でVF-1と機動戦闘を展開した。本機の重力下運用能力を示す事例と言える。

ミリア艦内におけるVF-1Sマックス機との戦闘。艦内の狭い通路でも、その機動力は健在であった。

ボドル基幹艦隊との決戦では、地球統合軍と共闘。マックスが駆る青のクァドラン・ローと共に戦場へと赴いた。

機体構造

腰部が省略された胴体に腕部と脚部を備えるクァドラン・ローの独特な機体構造は、本機の設計思想を表している。推進機関や各種武装などの機能を集中した胴体部に手足を加えることで、空戦ポッドと倍力機(パワードスーツ)の性能を両立させているのである。

メルトランディの体格に合わせたバトルスーツであると同時に、機動性を最優先とした空戦ポッドとしての特性が強い。

メインスラスター

クァドラン・ローの高い機動性を支えるのは、大型推進器2基の膨大な推進力と、特殊イナーシャ=ベクトル高機動装置である。両者の併用によって、本機は優れた空間機動性能を発揮し、大気圏内外問わず敵機を圧倒する機動力を誇った。

ノプティ・バガニスの艦内でミリア機が見せた縦横無尽な動きは、本機の空間機動性能の真骨頂とも言えるだろう。

ボリュームあるバックパックと内蔵された特殊イナーシャ=ベクトル高機動装置で高い機動力を発揮する。

▲背面にある胴体大の巨大なバックパックが特徴。ここから膨大な推進力と高機動が生み出される。

コクピット

メルトランディはバイオ光学技術を組み込んだサイボーグに近い存在であり、クァドラン・ローをはじめとする機動兵器の操縦にもその身体機能が活用されたようだ。胴体部に位置するコクピットに搭乗したメルトランディのパイロットは、身体に埋め込まれた光学神経を介して機体と直接リンクし、操縦を行ったと考えられている。ローの高機動力はこの操縦システムの産物であり、機体とパイロットの一体化という点において総合性能の向上に寄与していたと言えるだろう。

クァドラン・ローのコクピット内。パイロットが頭を動かす程度の余裕しかないため、サブモニターは視野を広めに確保されている。

コクピット内部

メインモニターと連動する頭部は高速照準システムになっており、クァドラン・ローに装備された各種火器の運用を制御する。正面メインモニターとパイロット顔面までの距離は極めて近いが、十分に情報を視認可能である。ショルダーガードの内側にはパイロットと直接データをやりとりするライト・ケーブルが張り巡らされている。

Ⓐメインモニター Ⓑサブモニター Ⓒヘッドレスト Ⓓヘッドレスト接触面 パイロット頭部

▲コクピット内部(正面より)

▲コクピット内部(斜め後方より)

▶ハッチ開放状態

ハッチの開閉。内部には、ショルダーガードやライトケーブルが見える。写真は一般機。

▼コクピット内部透視図

腕部制御装置

腕部の操作は触手状のケーブルを用いた制御装置で行う。パイロットの身体に埋め込まれた光学神経と連動し、その動きがフィードバックされる。

Ⓐセンサー・ベルト Ⓑリスト・センサー
Ⓒライト・ケーブル Ⓓフィードバック用トルク・パイプ

パイロットの手や腕に取り付けられた各種センサーは、腕部マニピュレーター以外に、各種火器や推進器の動作をも制御しているようだ。

腕部マニピュレーターは、パイロットの手の動きをトレース。"掴む""持つ""殴る"などの動作が可能であり、格闘戦もこなす。

▲腕部制御装置センサー部

▲腕部制御装置内部

標準装備

クァドラン・ローは機体各部に多数のミサイルと光学兵装を装備しており、極めて高い火力を有している。その攻撃力と機動性が人型機動兵器の範疇を超えるものであるからこそ、本機は空戦ポッドに近い兵器と評されるのだろう。ただし、兵装搭載能力と機動性を重視したためか軽装甲となっており、決して耐弾性に優れているとは言えなかった。それでもなお本機が高い戦果を残した背景には、アンバランスな機体特性を有効に発揮できるメルトランディ軍パイロットの水準の高さがあったのだろう。

近接小型高機動ミサイルやインパクト・キャノンなど、重装備を持つクァドラン・ローは、単機であっても、複数の敵機と互角以上に渡り合えるほどの戦闘力を誇る。

格闘装備

▼腕部

一見すると華奢な構造にも見える腕部だが、その外見に反して出力は高く、パイロットによってはヌージャデル・ガーの装甲を突き破るほどの格闘戦能力を示した。

▼脚部

脚部でゼントラーディ人の頭を踏み潰す様子。高機動に重きを置いて設計された本機の脚部は、歩行に適した構造とは言い難い。

火器装備

Ⓐ近接小型高機動ミサイルランチャー

背部ユニットの左右と両脚部の膝外側にある半球部分は、近接小型高機動ミサイルランチャー（計4基）である。装填されるミサイルの総弾数は126発で、発射時にはハッチがスライドして開く構造になっている。

ミサイルランチャーより発射される近接小型高機動ミサイルは、優れたホーミング性により敵を追尾する。

背部ユニットの左右に装備されたミサイルランチャー。その大きさから脚部以上のミサイル弾数を誇る。

▲ミサイルランチャー×4

▶近接小型
高機動ミサイル

Ⓑ中口径速射インパクト・キャノン

胸部に中口径速射インパクト・キャノンを2門装備している。胴体部に位置する固定兵装であり、射角が大きく制限されるため、ミサイルなど他の火器に比べると使用されるケースは、あまり多くなかった。ただし、破壊力は絶大である。

速射性に優れる反面、射角は狭い。ただし、破壊力は凄まじいものがあり、一撃で敵を撃破する。

Ⓒ高速回転式3砲身レーザー・パルス・ガン

両下腕部には高速回転式3砲身レーザー・パルス・ガンを備える。名称の通り速射性に優れ、高速戦闘を旨とする本機に適した火器だったと言える。また、取り回しの良さから接近戦でも頻繁に用いられた。

両腕部に装備されたレーザー速射砲。機体の高機動を活かしたヒット&アウェイなど、あらゆる局面で重宝された。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶クァドラン・ロー

マックス専用機

運用記録

ミリア639とのドッグファイトの後にメルトランディの技術によって巨人化したマクシミリアン・ジーナス(マックス)は、パーソナルカラーのブルーに塗装されたクァドラン・ローを駆ってボドル基幹艦隊との戦いに参加した。このマックス機やミリア機は、塗装が異なるだけで一般兵のロー型と仕様は同じである。ただし、彼の場合は地球人の男性だったことから、内装や表示システムの一部に改修が加えられた可能性が高い。

主要パイロット
マクシミリアン・ジーナス

マックスがクァドラン・ローに搭乗できたのは、彼がメルトランディの技術に基づいて巨人化を行ったからであった。

マックスはミリアと共にボドル基幹艦隊との決戦に臨んだ。慣れないシステムを容易に使いこなした彼の才能がうかがえる。

一般機

運用記録

クァドラン・ローと言えば真紅のカラーリングが施されたミリア639の専用機が有名だが、一般兵用の多くは薄紫に塗装された機体だった。これらは前述したように性能面でミリア機と違いはなく、搭乗したメルトランディ兵もミリア639ほどではないにせよ高い技量を持つパイロットたちだったと考えられる。投入された絶対数が少なかったことと、ミリア639の戦果が飛び抜けていたことが、一般機を目立たなくさせていたのだろう。

概してパイロットの腕は良いが、耐弾性に劣る機体のため一度の被弾で撃墜されることもあった。

総じて戦闘能力に長けたパイロットが搭乗したが、敵艦内部への強行突入という危険な任務では犠牲も出している。

ボドル基幹艦隊との戦いでは、リン・ミンメイの歌に感化された残存機がゼントラーディと協力して戦う場面が見られた。

ヌージャデル・ガー

ゼントラーディ軍の高性能パワードスーツ

機体解説

ゼントラーディ軍の主力機動兵器は、リガードなどの戦闘ポッドと、その上位機種に相当する戦闘倍力服(パワードスーツ)に大別できる。そして、後者の代表例が50万年前の開戦当初から運用が続けられてきたヌージャデル・シリーズであり、その最新型にあたるヌージャデル・ガーは空間機動性と火力、耐弾性を兼ね備えた機体として知られる。背部に配した3連推進器や威力に優れる固定武装が特徴で、半生体組織を採用した操縦系によって巨人族の戦闘力を引き出す性能を有している。第一次星間大戦においては、メルトランディ軍のバトルスーツ、クァドラン・ローと激しい戦いを繰り広げた。

データ

所属▶ゼントラーディ軍
全高▶16.8m
全備重量▶36.8t
推力▶調査中
武装▶背荷式中射程流体プラズマキャノン×1／中口径速射インパクトキャノン×1／小型レーザーマシンピストル×1

サイズ比較

VF-1J
ヌージャデル・ガー
ヒト

開発系譜図

unknown ▶ ヌージャデル・ガー

主要パイロット

カムジン03350

▶ヌージャデル・ガー

運用記録

ヌージャデル・ガーは第一次星間大戦においては、対人類、対メルトランディの双方で主力として運用された。特に、SDF-1マクロスとの攻防において、ヌージャデル・ガーは様々な戦果を挙げている。土星宙域での戦いでは、SDF-1艦内への強襲に成功。「同艦内にマイクローンがおり、しかも男女が同じ場所にいる」という情報を持ち帰り、第一次星間大戦の行く末に一石を投じることとなった。また、木星宙域においては、ヌージャデル・ガー部隊によるマイクローンのサンプル捕獲が成功しているが、これは精密なマニピュレーターを持つ本機が、SDF-1側の機体を破損させることなく確保できたことが大きいと言える。

SDF-1に侵入するヌージャデル・ガー。数機が艦内市街地への侵入に成功し、その情報をブリタイ7018の元に持ち帰った。

マイクローン捕獲作戦では、ヌージャデル・ガー部隊が土星近辺でVT-1とシャトルを拘束し、一条輝らを捕虜とすることに成功した。

機体構造

ヌージャデル・ガーは、頭部と四肢を備えた人型に近い本体に、大型の推進器と多数の姿勢制御用の高機動バーニアを配した構造となっている。また、前線における耐弾性と、生還率の向上を考慮した設計がなされている。

しかしながら、バルキリー、デストロイドといった地球側の機動兵器に対しては、本機の防御力でも充分とは言えなかったようで、記録映像ではSDF-1の防衛部隊に撃墜、あるいは相討ちとなるヌージャデル・ガーの姿も多々見られた。

リガードとは異なり四肢を備えているため白兵戦能力が高く、特殊任務にも対応できる優れた運用性を誇った。

▶記録映像では肩部パーツ他の塗装がダークイエロー系のものとダックエッググリーン系の2種が確認できる。

SDF-1艦内で戦うヌージャデル・ガー。宇宙空間での機動性を重視した設計だが、大推力によって重力下でも優れた機動性を発揮する。

◀人型を形成するパーツが明確に分けられた宇宙服のようなフォルムが特徴である。

▶一般的なゼントラーディ兵の身長が本機の腰関節の位置に達する程度で、機内スペースの余裕はほとんどないことがうかがえる。

◀機体背面(左)と左足裏(下)の構造を示したもの。ふくらはぎの部分に見える3つの穴は高機動バーニアのノズル。

▶背部の3連推進器は2基の可動式スラスターとメインスラスターを組み合わせた構造で大推力を誇る。

武装

本機は大火力の固定武装と、取り回しの良い携行武装を併用することで、近接戦闘において優れた戦闘力を発揮した。ただし本機は長射程の兵器は装備されていないという弱点を持つ。そのため、土星宙域でのSDF-1防衛部隊との戦いでは、味方のリガード部隊が長射程のミサイルを装備したVF-1の目をひきつけ、その間にヌージャデル・ガーを中心とする別働隊がSDF-1に肉薄するという作戦が取られていたようである。また、本機は格闘戦能力もそれなりに高く、カムジン03550の搭乗機体は腕部による打撃でロイ・フォッカー少佐のVF-1Sバルキリーの頭部を大破させている。

A 背荷式中射程流体プラズマキャノン
背部ユニットに中射程流体プラズマキャノンを備える。基部は右肩後方に位置し、発射時には砲身を前方に展開する。可動域は上方向にも確保されている。

B 中口径速射インパクトキャノン
胸部には短砲身の中口径速射インパクトキャノンを装備している。プラズマキャノンのような可動構造を有していないため、射界はやや制限される。

C 小型レーザーマシンピストル
標準携行武装として、速射性に優れた小型レーザーマシンピストルを運用した。また、ゼントラーディの歩兵用火器を携行した機体も確認されている。

レーザーマシンピストルはミサイル迎撃にも用いられ、火力はさほど高くないものの幅広い運用性を発揮した。

◀小型レーザーマシンピストルを正面から見た図。保持した状態では、マニピュレーターが大きく隠れる。

レーザーマシンピストルを連射するカムジン03350のヌージャデル・ガー。多彩な武装が本機の特徴のひとつである。

関連事項 EXTRA REPORT

別装備のヌージャデル・ガー

記録映像によれば、土星宙域での戦いで、SDF-1艦内を強襲したヌージャデル・ガーの中には、通常の兵装の機体に混じって、背部にプラズマキャノンの代わりに6連装ミサイルポッドらしき武装を装備した機体も散見される。

赤丸で囲ったのがその機体。他の記録には見られないところから、配備数の少ない兵装だったと思われる。

コクピット

本機は、耐弾性と生還率向上のため、胸部に配された操縦桿を通じて両腕部を遠隔操作する方式を採っている(これは、操縦者の腕で腕部を直接操作するよりも、操縦桿で操作した方が、腕部の可動範囲をより広く確保できるという制御上の都合もあると思われる)。また本機には、半生体組織を利用した神経系による直接制御も補助システムとして搭載されており、パイロットは生体コネクターにより機体と直接的に接続される。操縦スペース内では、操縦者は生体部品に半ば埋もれるように固定されているが、これは本機が機動力を全開にした際のGから操縦者を保護する役目も果たしていると思われる。

ノプティ・バガニス5631を襲撃したミリア639のクァドラン・ローと交戦するヌージャデル・ガー。この戦闘ではミリア機の前に甚大な被害を受けたが、あくまでパイロットの技量の差であり機体性能に大きな開きはなかったと見られる。

▶頭部は単眼のモニター・アイとアンテナを備え、ある程度の上下方向の可動域を有する。

◀ハッチ開放時
パイロットが上半身を固定する部分に肉質クッションやパイプなどの生体部品が確認できる。

▶内部
神経系による直接制御は、過剰フィードバックによるパイロットと機体の神経的損傷を防ぐ設計となっている。

◀側面
パイロットの搭乗状態を側面から見た図。胸部スペースに腕を出して操縦桿を握る。

▶コクピット(コンソール)
左は頭部の内側を左後方から見た図で、右は前方から見た図。パイロットのヘルメット正面にスクリーンが位置する。

民間車両

マクロス艦内で用いられた 個人所有の車両群

リン・カイフンが所有していた2人乗りのスポーツカーで、前輪よりも後輪が大きいタイプ。後部にエンジンブロックを備える。

主要使用者
リン・カイフン

▲ルノー A510

機体解説

全長1,200kmにも及ぶSDF-1 マクロスには、多数の民間人が暮らしていた。艦内には居住区となる広大な市街地が築かれており、ひとつの巨大都市として機能していたのである。民間車両群は、鉄道など他の交通網を持たないマクロス居住区の移動にとって不可欠なツールであった。大半がガソリン式ではなく、水素エンジンを用いた低公害車だったと言われ、大気汚染が死活問題となる密閉空間での使用にもフィットしていた。車種はミニカーからスポーツカーまで、多種多彩なものが確認されている。

ルノーA510は、マクロスのトップアイドルであったリン・ミンメイのマネージャー、リン・カイフンが移動用に使っていた。

ゼントラーディ軍のパワードスーツ、ヌージャデル・ガーの襲撃と、マクロスの強攻型へのトランスフォーメーションで飛ばされる車両群。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶民間車両

運用記録

民間車両群はオーバーテクノロジー(OT)を用いていなかったと見られ、基本的な機能に関しては地球で製造・運用されていた車両と同様だったようだ。マクロス艦内でも車の販売が行われており、居住民にとって必需品であったことがうかがえる。マクロスの強攻型へのトランスメーションに備え、停車時にはワイヤーを使って車体を固定する必要があるなど、マクロス居住区ならではの配慮も必要であった。

トランスフォーメーションによって重力方向が変化する艦内。ミニカーがワイヤーによって固定されているのがわかる。

新型自動車の販売も行われており、人通りの多い繁華街では3D映像を用いた広告が打たれていた。

ルノー A510

ルノー社製の2シーター。搭乗席の後方に積載スペースを備えたシンプルな作りである。車体上に整流フィンを兼ねる複合情報アンテナ・カメラを備えており、走行をサポートしている。

▼サイド

▲上部に見える円状のパーツが複合情報アンテナ。車高は成人男性の身長よりも低く抑えられている。

▲曲がる際には前輪ブロック全体が旋回する構造。フロントタイヤを囲むカバーパーツ上にライトが設置されている。

車両内部

▼運転席

◀正面

▼後部スペース

シフトレバーの形状からマニュアル車と見られる。ハンドルの奥のコンソールは全面スクリーンとなっており、車体情報などを確認できたと見られる。シートの後側は積載スペース。

乗用車

短距離移動に適したミニカータイプだけでも数種類が確認されているほか、2～4人乗りのセダン(乗用車)やスポーツカー、積載スペースの広い大型乗用車なども普及していた。

ミニカー

▲タマゴ型のフォルムが印象的なミニカータイプ。車幅も狭く、小回りが利く仕様となっている。

▼▶3輪タイプのほか、フロントガラスが助手席と分離したタイプも見られた。

オープンタイプスポーツカー

▲▶屋根のないオープンカーで、なおかつ巨大なリアウイングを備えたスポーツタイプ。

乗用車

▲▶スタンダードな乗用車で、フロント部が突き出たウェッジシェイプのボディが特徴である。

スポーツカー

◀ルノーA510以外にも、マクロス居住区では様々なスポーツカーが確認されている。

大型乗用車

▶4人以上が搭乗できる大型タイプ。小回りが利かない分、多くの荷物を積み込むことができる。

都市宇宙船アルティラ

人類創造のヒントを秘めた プロトカルチャーの巨大都市船

アルティラの大部分は既に廃墟と化していたが、残されていた数々の遺物を目にした未沙と輝は、ありし日の人々の暮らしに思いを馳せるのだった。

艦体解説

プロトカルチャーは、男性で構成されたゼントラーディ、女性で構成されたメルトランディという2大勢力を創造した異星人である。かつて一大星間文明を築き、約50万年前に滅んだとされる彼らが遺した痕跡のひとつが、巨大都市宇宙船アルティラであった。アルティラは、ゼントラーディとメルトランディが激しく対立していた世界を再びひとつにするため、一部人民が建造した移動都市だという。彼らは融和の場所として地球に辿り着くが、両者の対立は地球にも及んだため、住民たちは一時的にアルティラを海中に隠し、宇宙へと脱出する。そのまま住民たちが戻ることなく永きに渡り本体は海底に沈んでいたが、西暦2009年、ゼントラーディ軍の出現、早瀬未沙、一条輝ら地球人との接触を機に巨大都市は海上に浮上したのだった。

▼側面

ALTIRA

データ

所属▶プロトカルチャー
全長▶約8,000m
重量▶調査中
推力▶調査中
エンジン▶調査中
標準武装▶調査中

サイズ比較

Mechanic Sheet
メカニックシート
都市宇宙船アルティラ

都市外観

アルティラの構造は、多重人工大地円盤状船体と呼ばれる。多数の建築物が建ち並ぶ上部は、バリアと人工重力によって制御されており、常に一定の環境で生活することが可能となっていた。

異星人が住居として使用していたと見られる建物。ドーム状の屋根を持つのが特徴である。

◀都市景観

曲線が印象的に使われた、アルティラの高層ビル群。中央奥に見えるのが、宇宙船全体の航行と管理を行う管制センターである。未沙と輝が発見した時には、都市はほぼ廃墟に近い状態だったが、その複雑かつデザイン性に富んだ構造から、プロトカルチャーが文化的に非常に高いレベルにあったと想定できる。

艦体構造

アルティラの中心システムとなっていたのは、都市部の中心に位置する管制センターだと見られる。全高100mを超えるタワーが頂上部に設置されていたこの巨大な建造物には、宇宙船全体の航行や制御を司り、フォールド通信システムも備えていたマスター・コンソール、さらにプロトカルチャーからのメッセージが込められたホログラム・プロジェクター・ヘッドなどが設置されていた。西暦2009年、未沙と輝が管制センターの内部へと侵入した際には、フォールド通信システムとホログラム・プロジェクターがアクティブな状態となっていた。未沙はフォールド通信システムをコントロールしてマクロスに連絡を取ることに成功。さらにプロジェクターに記録された異星人からのメッセージによって、プロトカルチャーとゼントラーディ人、メルトランディ人の起源を知ることとなった。

管制センター内部にあるフォールド通信システム。未沙がマクロスに通信を取り終わった瞬間に使用できなくなった。

異星人が残した映像の中には、アルティラのシステムや形状を詳細に解説した図も挿入されていた。

▼タワー部司令テラス

管制センター頂上部のタワー。タワー下の円盤状スペースは、アルティラの司令部となっている。長年、海中に沈んでいたため、珊瑚があちこちに付着していた。

▼ホログラム・プロジェクター・ヘッド

ホログラム・プロジェクター・ヘッドには、プロトカルチャーのマークらしきものと音声が記録されていた。

▼センター全景

管制センター内の全景。中央にホログラム・プロジェクター・ヘッドが備えられ、その周囲を囲むようにしてマスター・コンソールなどが置かれた。

▼マスター・コンソール

マスター・コンソール部分の拡大図。フォールド通信システム内蔵のコンソール以外にも、複数の情報機器が設置されていた。

EXTRA REPORT

関連事項

プロトカルチャーとその文化

アルティラの浮上で、人類はプロトカルチャーの存在を知った。建物や椅子の大きさから彼らはその創造物である巨人族とは異なり、人類とほぼ同等のサイズであったと見られるが、言語や文字はゼントラーディ人のものに似ていたようだ。

未沙はゼントラーディ人の言語や文字をある程度理解できたため、異星人のメッセージも解読できた。

◀図形

フォールド通信システムに表示された図形。リアルタイムで状況を表示できるものだったと見られる。

▲文字

図形に近い構造の、プロトカルチャー文字。一部は既に解明されていたゼントラーディ人の文字と共通するため、アルファベットや数字に置き換えることができた。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-1S バルキリー

Sheet 02 A

VF-1S

天才パイロットの駆る青きスカル1

機体解説

戦史に名を残すエースパイロットの傍らには、必ず愛機の存在がある。天才パイロットと称されたマクシミリアン・ジーナス少尉(マックス)も、第一次星間大戦でロイ・フォッカーに代わってスカル小隊の隊長に就任したのち、自らのパーソナルカラーを施したVF-1S バルキリーを駆ってエースの名に恥じぬ働きを示した。ただし、彼の愛機となったVF-1Sは他のS型と同じく、出力や指揮通信機能のみが強化された指揮官仕様機であり、カタログスペックにおいてはA型との差はわずかであった。にもかかわらず、本機は他のパイロットが搭乗する機体とは明らかに異なる活躍を見せている。それは、マックスの操縦技術の高さと、S型の機体性能のわずかなアドバンテージが、相乗されて表れた結果だったと言えるだろう。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶14.23m
全高▶3.84m
全幅▶14.78m（最小後退角度時）／8.25m（最大後退角度時）
空虚重量▶13.25t
エンジン▶新中州重工／P&W／ロイス FF-2001熱核タービンエンジン×2
推力▶11,500kg×2
最大速度▶M2.81（高度10,000m時）／M3.87（高度30,000m以上時）
標準武装▶マウラー レーザー機銃ROV-20×4／ハワード GU11 55mm3連装ガンポッド×1

開発系譜図

▶ VF-1 ▶

サイズ比較

VF-1J
VF-1S

主要パイロット

マクシミリアン・ジーナス

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶VF-1S バルキリー

運用記録

VF-1Sは元々、部隊指揮官クラスの優秀なパイロットに優先して配備されていた機体で、マックスの前任にあたるロイ・フォッカーもS型に搭乗していた。しかし、フォッカーがゼントラーディ軍との戦闘で未帰還となると、代わってスカル小隊を預かったマックスにもS型が与えられることとなった。

同じく行方不明だった一条輝少尉が生還を果たしたのちも、マックスはスカル小隊の隊長を務めたが、地球帰還直後のメルトランディ軍との交戦で、マックス機はミリア639のクァドラン・ローと接触。同機と激しいドッグファイトを繰り広げた末に、敵艦のフォールドに巻き込まれて消息を絶った。

洋上から接近するメルトランディ軍に対し、マックス機以下のスカル小隊はデルタ編隊で迎撃に向かった。

ミリア機とのドッグファイトでは何発か被弾したものの、戦闘に支障が出るほどの損害ではなかった。

ミリア機を追跡して敵艦のエアロックに侵入。この戦闘後、マックスは愛機と共に敵艦のフォールドに巻き込まれてしまう。

標準装備

レーザー機銃

ヘッドユニットに火力向上のためにマウラー社製ROV-20レーザー機銃を4門(2連装2基)装備し、A型からの火力増強が図られている。また、このデバイスはECM下の光学通信にも用いられる。

ファイター形態での飛行中にヘッドユニットを展開して側方を攻撃するという、難しい機体制御を要する戦法を見せた。

ランチャーポッド

主武装としてハワード社製55mm3連装ガトリング・ガンポッドを装備する。これをメインウェポンとする点は他のVF-1系列機と同じで、使用頻度と併せて考えても火力に大きな開きはなかったと言える。

空中戦のさなかにバトロイドに変形してガンポッドを使用する独特の戦法は、マックスの非凡な操縦能力を示している。

コクピット

コクピット構造はA型と同じだが、統合フライトコンピュータには編隊指揮支援用プログラムがインストールされている。このプログラムは、編隊各機の飛行および戦闘状況やパイロットのバイタルデータなどをモニターし、さらには僚機や母艦との通信管制を補佐する機能を有している。

▲コクピット

▲コクピット内部

▲スロットル・レバー

▲サイドスティック

ファイターモード

メルトランディ軍との戦闘では、大気圏内だったことからスーパーパーツは用いられていない。それでもクァドラン・ローと互角の空中戦を演じており、本機ファイター形態の空戦能力の高さがうかがえる。ちなみに、製造時点で完成品質の高い機体が優先的にS型へ換装されたとも言われている。

メルトランディに対して洋上で迎撃を行ったため、マックス機もファイター形態をメインにして空中戦を展開した。

複雑なマニューバや急降下からの引き起こしによるミサイル回避など、マックスの高い操縦技術が随所に見られた。

ガウォークモード

SDF-1 マクロスが宇宙を航行していた際にはガウォーク形態の有用性はさほど高くなく、減速などにしか用いられなかった。本来の用途が見込めるはずの地球帰還後も、SDF-1が着陸したプロトカルチャーの都市遺跡が洋上にあったことから、ファイターの方が実用的という状況だった。しかし、ガウォークのホバリング性能は洋上でも有効であり、平面機動に関してはファイターよりも柔軟な本形態のメリットは、メルトランディ軍との戦闘においてマックス機が実証していたと言える。

ミリア機からのミサイル攻撃に対し、マックス機はガウォークを横滑りさせて回避している。

高速で交差した敵機を反転追尾するなど、小回りが利くガウォークの特性を活かした機動が見られた。

バトロイドモード

マックスが天才パイロットと呼ばれた要因のひとつに、VFの変形機能を効果的に使いこなしたことが挙げられる。空戦機動にバトロイド形態の近接戦闘を絡めたトリッキーな操縦術は彼の才能を示す好例であり、それはミリア639のクァドラン・ローとのドッグファイトでも発揮されている。また、敵艦の狭いエアロック内部でミリア機と格闘戦を行うなど、バトロイドの性能を限界まで引き出していた。なお、マックス機はこの格闘戦の末にミリア機と相討ちとなって大破したと見られている(両名とも生存)。

洋上戦闘では主翼にUUM-7マイクロミサイルポッドを装備し、クァドラン・ローを迎え撃った。

S型用頭部のアップ。ゴーグル部分には複合センサー・カメラ、マスク部にはレーダー・センサードームが搭載されている。

メルトランディ軍でも屈指のエースとして知られるミリア639用の艦として、戦闘の最前線で運用された。

ミリア艦

ミリアに与えられた特殊任務用の高機動艦

主要クルー

ミリア639

艦体解説

ミリア艦は、メルトランディ軍特別任務隊所属のパイロット、ミリア639が指揮を執る中型砲艦クラスの艦艇である。大型の推進器を2基備えたことによる高機動性・加速性が特徴で、宇宙戦闘機並みの運動能力を実現していた。戦闘艦としても優秀で、艦首の高出力短射程誘導集束ビーム砲を用いることで、単独でも対艦戦が可能となっている。ミリアは軍の最高意思決定機関である生体光学ホログラフィックコンピュータ「モルク・ラプラミズ」から指令を受け、本艦を駆使してゼントラーディ軍やマイクローンとの戦いに臨んだ。

艦隊を組まず、単独で運用されることを前提とした艦で、偵察や探索、敵拠点の急襲などの特殊任務に適していた。

主砲となっている高出力短射程誘導集束ビーム砲の発射によって、マクロスの主砲を破壊することに成功している。

データ

所属	メルトランディ軍	エンジン	調査中
全長	約1,800m	最大速度	調査中
全高	調査中	推力	調査中
重量	調査中	標準装備	高出力短射程誘導集束ビーム砲

開発系譜図

? ▶ ミリア艦

サイズ比較

SDF-1
ミリア艦

運用記録

ミリア艦は、メルトランディ軍の主要指揮艦隊とは別系統の特殊任務隊に所属する艦として、単独での航行が許されていた。特殊任務隊の中でも本艦は重用されており、「モルク・ラプラミズ」から直接、プロトカルチャー遺跡の奪取指令を受けていた。当初は統合軍とゼントラーディ軍双方に攻撃を仕掛けていたが、ミリアがマクシミリアン・ジーナスと意気投合したことで統合軍と共闘。ゼントラーディ軍の旗艦ゴル・ボドルザー撃破のために攻撃を行ったとみられる。

ミリア艦(または同型艦)が、主砲起動状態でゴル・ボドルザーに突撃。その後、艦内でビームを放ち、大打撃を与えた。

エアロック／通路

バトルユニットの発着口となっていたエアロックと通路。ここでミリアの搭乗するクァドラン・ローとマックスの搭乗するVF-1Sが交戦した。

表示パターン

艦内のディスプレイに表示されたパターン。三角形、四角形を組み合わせたシンプルな図形と、プロトカルチャー文字とも異なる文字が表示されていた。

機体構造

ミリア艦は、艦尾に大型の推進器を設置、艦首にはビーム砲とその発射を補助するパーツが備えられている。形状的には艦首が細長く、艦尾が厚いフォルムとなっており、この設計思想は他のメルトランディの艦艇などとも共通していた。また、ブリッジや格納庫は中央ブロックに集められている。

◀▲艦体後部、側面から見た図。左右に2基設置された大型の推進器が、機体の高機動性・加速性を生み出している。

主砲閉鎖時

ビーム砲の発射をサポートする艦首パーツは、上図のように可動し、ビームの砲口を閉鎖することができる。戦闘を伴わない移動時にはこの形態となる。

▲ミリア艦後方図。後方中央に見える開口部は、機動兵器の格納口である。

▲ブリッジ
艦上部中央に設置されたブリッジ。「モルク・ラプラミズ」と連絡を■る司令部はこの内部に設置されている。

ブリッジ

ミリア艦の航行は、軍の兵器システムや艦を管理するホログラフィック情報ネットワークによって制御されていたと言われる。ブリッジ内は複数のブロックに区分けされており、戦況に応じた作戦行動が可能となっていた。

ミリア艦のブリッジ内部。左奥にある縦長のディスプレイに「モルク・ラプラミズ」を投影し、指令を受けていた。

◀メインブリッジ

ブリッジ内の中央司令塔。主にミリア639がここで指■を執る。左図の先端から放出されている2本の線は、「モルク・ラプラミズ」を■すレーザーコネクタである。

格納庫

艦中央に設置されたクァドラン・ローの格納庫。ミサイルを自動で充填する器具など、多彩なメンテナンス設備が整えられていた。

ミリア639やマックスも、ここでクァドラン・ローに搭乗、出撃体勢に入った。

ゼントラーディ軍艦艇

ゼントラーディ軍第425基幹艦隊の旗艦となる機動要塞。約500万隻とも言われる大艦隊を有しており、約12万周期の間、メルトランディ軍と戦い続けている。

▲ゴル・ボドルザー

ゼントラーディ軍 第425基幹艦隊を束ねる 超巨大機動要塞

艦体解説

ゴル・ボドルザーは、ゼントラーディ軍第425基幹艦隊の旗艦で、超大型生体司令コンピュータ「ゴル・ボドルザー」が中心となった戦艦である。本艦は約12万周期を超えて運用されており、「ゴル・ボドルザー」自身も同様の年齢を重ねている。外装・内装共に有機的であり、ゼントラーディ軍の所有する兵器の中で、ある程度の自己修復能力を有する唯一の艦である。また、全幅600kmとサイズも圧倒的である。艦首には主砲ゴルグ・ガンツ砲を搭載し、同クラスの機動要塞すら一撃で撃沈するほどの破壊力を持つ。

生体司令コンピュータ「ゴル・ボドルザー」。要塞の維持と制御には不可欠な存在となっている。

機動要塞の艦首に搭載されている主砲ゴルグ・ガンツ砲。ラプラミズ艦隊の機動要塞をも一撃で破壊した。

サイズ比較

地球

ゴル・ボドルザー

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶ゼントラーディ軍艦艇

運用記録

約12万周期もの間、メルトランディ軍との戦闘に運用されており、西暦2009年には地球周辺にてラプラミズ艦隊と交戦した。その際、地球人とも遭遇し、基幹艦隊が捕らえた捕虜を機動要塞内に収容している。しかし、この地球人との接触が仇となり、メルトランディとの交戦中、第425基幹艦隊に内紛が勃発。反乱者側と地球統合軍の合同部隊によって生体司令コンピュータを破壊されたために撃沈した。

地球へと降下した艦は、一旦、地球側と和平を結ぶ。だが、短期間で条約を破棄し、メルトランディ軍共々、地球を滅ぼそうとした。

SDF-1 マクロスが内部に侵入。一条輝の駆るVF-1Sに生体司令コンピュータを破壊された。「ゴル・ボドルザー」の死は、要塞の壊滅を意味した。

機体構造

全幅600kmと小惑星クラスのサイズを有する。約500万隻の艦隊を指揮する中枢基地として運用できた。土台となる艦体の上に、巨大な球状の物体が付随しており、艦橋としての役割を担っているようだ。

▶艦首にある"目玉"のような箇所は、機動要塞の主砲となるゴルグ・ガンツ砲。圧倒的な破壊力と射程距離を誇る。

外装

◀外甲板
地球側の兵器と一線を画す有機的な外装が特徴的である。ゼントラーディ人に修復の概念はないが、この機動要塞は自己修復機能を備えている。

▶司令区画／外甲板
球根のような形状の司令区画（左図）。内部は「ゴル・ボドルザー」が鎮座する。右図は、ノプティ・バガニス5631が不時着した外甲板部分である。

艦内／ブリッジ

機動要塞の内部は、外装以上に有機的であり、まるで生物の体内のようである。艦内は広大であり、各ブロックへは艦艇などで移動する。

メインブリッジは「ゴル・ボドルザー」の足元に設置。捕虜や指揮官の謁見にも使用する。

艦内

▲要塞内の中央船殻。そのコア部分であるブリッジには、生体司令コンピュータ「ゴル・ボドルザー」が鎮座している。

ブリッジ

▲ゴル・ボドルザーのブリッジ。「ゴル・ボドルザー」は通常のゼントラーディ人の約10倍以上の体躯を持つため、巨大な空間となっている。下方には、一般兵用のメインブリッジも設置。

関連事項

EXTRA REPORT

崩壊するゴル・ボドルザー

反逆者ブリタイ7018のノプティ・バガニス5631による攻撃で外壁を破壊された要塞は、SDF-1 マクロスの侵入を許した。その結果、生体司令コンピュータの「ゴル・ボドルザー」を直接攻撃され、超巨大要塞は崩壊してしまう。自己修復機能を備える要塞だが、全てはコアとなる「ゴル・ボドルザー」の制御があっての能力であった。

▲「ゴル・ボドルザー」を失ったことで、フォールド・システムが暴走し、艦体各所が個々に転移、崩壊していった。

VF-1Sの攻撃で頭部を破壊された「ゴル・ボドルザー」は消滅。直後、要塞は内部から崩壊を始めた。

完全沈黙した機動要塞。「ゴル・ボドルザー」なしでは、一切の活動が不能であった。

ゼントラーディ軍艦艇

地球を襲撃した 多彩な艦艇群

▶重攻撃機
メルトランディ軍への対艦攻略用に運用していた高機動機。複座式で、1人が操舵を、もう1人が砲撃を担当した。主砲は誘導集束ビーム砲。

▲軽輸送艇
艦隊旗艦や強襲揚陸艦など、ゼントラーディ軍が運用している艦艇間の物資・人員の移動に用いられた小型輸送艇。戦闘能力は皆無に等しい。

▼ブリタイ艦艦載連絡艇
ブリタイ7018が指揮を執るノプティ・バガニス5631の艦載機として使われていた人員輸送用の小型艇。ビーム砲やマイクローン用特殊カプセルを備える。

艦体解説

西暦2009年、ゼントラーディ軍第425基幹艦隊所属のブリタイ7018アドクラス艦隊が、SDF-1 マクロスを通じて地球人類と接触した。この艦隊は、司令官であるブリタイ7018が乗艦するノプティ・バガニス5631を旗艦として、強襲揚陸艦や標準戦艦などのほか、重攻撃機や輸送艇など、その役割に応じた多種多様な艦艇で編成されていた。これらは元々、対立していたメルトランディ軍との戦闘を想定していたが、地球統合軍との戦闘にも用いられ、その力を発揮している。

曲線を用いたフォルムがゼントラーディ軍艦艇の特徴。鋭角なラインが特徴的であったメルトランディ軍の艦艇群とは正反対である。

第425基幹艦隊にも多数のゼントラーディ軍艦艇が配備されていた。のちにブリタイ艦隊が地球側についたため、同士討ちも行った。

ZENTRADI SHIPS

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶ゼントラーディ軍艦艇

運用記録

地球統合軍と接触したブリタイ艦隊の艦艇群は、メルトランディ軍や地球統合軍と対峙、激しい戦闘を繰り広げた。また、軽輸送艇を用いてリン・ミンメイなど地球人類5名を捕虜としたことが、地球の文化を知るきっかけとなった。

文化を知ったブリタイらは地球統合軍との共闘を決意。ゴル・ボドルザー率いる第425基幹艦隊と争った。

重攻撃機

全長83m、全幅49mの小型高機動戦闘機。誘導集束ビーム砲を備えた兵器としては最小サイズである。このほか、旋回式砲塔による対空防御能力なども高く、対艦戦でもその能力を発揮した。

▼機体左右に備えた巨大なスラスターが、高い機動性能を生み出していた。

▼正面

▼側面

▲機体前面中央に設置されているのが誘導集束ビーム砲。コクピットは機体上部の右側に、旋回砲塔は機体上部の左側に設置されていた。

軽輸送艇

人員・物資の輸送に特化していた非戦闘用の艦艇で、全長は250m。防衛用として小口径の対空レーザー砲塔を装備している。大型の格納庫・貨物倉を備えており、フル装備のゼントラーディ人を最大25名運搬できるほか、大型戦闘兵器の輸送も可能だった。

▼側面

◀格納庫
格納庫の後部ハッチ部分(上)と、後部ハッチ側から見た内部(下)。そのスペースは広い。

◀ハッチ
後部ハッチは二層式で、ハッチバック式の外装が展開したのち、内蓋が開く仕組みだった。

ブリタイ艦艦載連絡艇

ブリタイ艦に乗せられていた小型連絡艇。宇宙で捕獲したミンメイとリン・カイフンを、軍司令ゴル・ボドルザーの下へ運ぶ際に使用されている。

▶側面

ブリタイ7018とエキセドル4970が、ミンメイら捕虜を連れてゴル・ボドルザーに向かった。

艦載連絡機のコクピット。中央に設置されたのがマイクローン用特殊カプセル。

▲マイクローン用特殊カプセルにミンメイとカイフンは入れられ、輸送された。

艦艇群

▶強襲揚陸艦
ゼントラーディ軍艦艇の中では、ブリタイ艦(ノプティ・バガニス5631)に次ぐ全長約3,000mクラスの戦艦。内部に多数の戦闘ポッドや小型艇を格納する。

▶標準戦艦
2,000mクラスの戦艦で、ブリタイ艦隊の中でも配備数が多い主力艦。強襲揚陸艦と同様、誘導集束ビーム砲を主武装とするほか、ミサイルランチャーを各所に備える。

▶中型砲艦
1,500mクラスの戦艦で、機動性を重視している。装備する誘導集束ビーム砲は、艦体を上下に分割することで内部から砲塔が出現し、発射体勢となる仕組み。

▶ピケット艦(写真手前)
斥候艦とも言われる、艦隊前衛で活躍する500mクラスの艦。カラーリングは緑が主体の艦のほか、黄が主体の艦もあった。

対比図

ゼントラーディ軍(右)とメルトランディ軍(左)は、ゴル・ボドルザーやモルク・ラプラミズら全長500kmを超える各軍旗艦を除き、全長500~3,000mクラスの艦を中心に隊を編成していた。このほか、多彩な戦闘ポッドや小型輸送艇などが両軍で運用されていた。

ピケット艦
中型砲艦(ミリア艦)
高速巡航艦
大型フリゲート
標準戦艦
輸送艦(強襲揚陸艦)
艦隊旗艦(大型戦艦)

艦隊旗艦(大型戦艦)
輸送艦(強襲揚陸艦)
標準戦艦
中型砲艦
ピケット艦
重攻撃機
SDF-1 マクロス(地球統合軍)

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-1A

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶14.23m
全高▶3.84m
全幅▶14.78m（最小後退角度時）／8.25m（最大後退角度時）
空虚重量▶13.25 t
エンジン▶新中州重工／P&W／ロイス FF-2001熱核タービンエンジン×2
推力▶11,500kg×2
最大推力▶M2.81（高度10,000m時）／M3.87（高度30,000m以上時）
標準武装▶マウラー レーザー機銃ROV-20×1／ハワードGU-11 55mm3連装ガンポッド×1他

サイズ比較

VF-1J
VF-1A

開発系譜図

VF-X ▶ VF-1 ▶ VF-4

主要パイロット

一条輝
マクシミリアン・ジーナス
柿崎速雄

機体解説

第一次星間大戦において、対ゼントラーディおよびメルトランディ戦の主力となったVF-1 バルキリー。そのVF-1シリーズの中で、一般パイロット用として生産と配備が進められた標準量産タイプがこのVF-1A（A型）である。特に、単艦で地球を目指す航海を余儀なくされたSDF-1マクロスにおいては、A型は防空戦力の中核をなす兵器として活躍することになった。そうしたA型の代表として広く知られているのが、一条輝、マクシミリアン・ジーナス（マックス）、柿崎速雄らが搭乗したスカル小隊の所属機だった。それぞれのパーソナルカラーで彩られた3機のA型は、ロイ・フォッカーのVF-1S（S型）に率いられて翼を並べ、異星人の脅威からSDF-1を守ったのである。

SDF-1防衛の中核を担った
標準量産機

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶VF-1A バルキリー

運用記録

SDF-1におけるVF-1運用の基本は4機のVF-1で1小隊を編成するというもので、隊長機のS型と3機のA型でVF小隊が構成されるケースが多かった。また、A型は宇宙空間ではスーパーパーツを装着した状態で運用され、ストライクを使用するS型とは装備が異なっていた。なお、スカル小隊に所属したA型は一条機(機体番号「011」)と柿崎機(同「012」)、マックス機(同「013」)の3機で、フォッカーが戦死したのちはマックスが小隊長としてS型に搭乗、A型は2機となった。

A型はスカル小隊以外の部隊でも主力として運用され、SDF-1防衛の重要な役割を担った。

コクピット

VF-1のコクピットは複座式を除き各タイプで共通しており、内部スペースが非常に狭い点が特徴である。コクピット内コンソールにはヘッドアップディスプレイ(HUD)が設けられておらず、各種情報はキャノピーの内側に立体表示で投影される方式となっている。また、着座位置が高くパイロットには広い視界が確保されていた。

A型の機首部コクピット周辺の外観。着座したパイロットとキャノピーの間にスペースの余裕がほとんどないことがわかる。

A型のコクピット内の様子。キャノピー正面にターゲットマーカーなどが表示されている。

パイロットの着座姿勢を示す、ファイターおよびガウォーク形態のコクピット内部図。パイロットはやや後傾姿勢でシートに座る。

正面から見たコクピット内部。キャノピーは内側にカーブしていることがわかる。

▲バランサーノズルを展開した状態のエジェクションシート。

ファイターモード

SDF-1の艦載兵器の中でも迎撃機的な運用がなされたVF-1は、ファイター形態で戦域に突入し、ミサイル迎撃を逃れた敵機を格闘戦(ドッグファイト)で掃討するという戦法を多用した。しかし、変形機構を小さな機体に搭載したVF-1は、機内容積の余裕がきわめて少なく、多量の推進剤を要する宇宙空間での運用に難を抱えていた。そのため、宇宙空間におけるA型は基本的にスーパーパーツを装備して運用された。

スーパーパーツを装備したA型(スカル小隊一条機)。主翼下にはミサイルを懸架する。

主翼端やナセル部ユニットの高機動バーニアノズルによって、優れた機動性を発揮した。

柿崎機はSDF-1の地球帰還後に発生したメルトランディとの初遭遇戦で撃墜された。

スーパーパーツの装着作業中のA型一般機。任務に応じて出撃前に換装を行っていた。

▶ノーマル状態のファイター形態(図はスカル小隊・柿崎機)。大気圏内ではこの状態で運用される。

▼機首側面と右主翼上面には、機体番号がマーキングされている。

◀機体後部のノズルは上下に推力偏向を行う2次元ノズルとなっている。

◀ファイター形態の機体底面。A型の特徴である単装レーザー機銃が確認できる。

◀スーパーパーツ装備のA型。ブースターノズルは可動式で推進方向を調整できる。

▼ブースターにはマイクロミサイルポッドを内蔵、高い火力を有する。図はスカル小隊・一条機。

▲ガンポッドはバトロイド時腕部ユニットの下部に装着される。

▶ナセル側部の増漕ユニットには高機動ノズルが装備されている。

ガウォークモード

SDF-1の航海では地上戦が発生するケースが少なく、ガウォーク形態の持つ優れた重力下特性(ホバリング性能や高い安定性)が発揮される機会がほとんどなかった。だが、ファイター形態からの逆加速や急転換に脚部の変形構造を用いる場合があり、ガウォークの機能は部分的に活用されていた。また、一条機はSDF-1内に侵入した敵機の排除を試みた際に、艦内の市街地をガウォークで移動している。重力制御が効いた入り組んだ地形ではガウォークの運動性が有利に働いていたのである。

敵部隊との交差戦闘で、ガウォークで逆加速をかけつつミサイルを発射する一条機。

一条機は重力制御が切れたSDF-1艦内で、ガウォークのホバリング機能を使って滞空した。

重力制御が切れた艦内を落下するリン・ミンメイをガウォークで救助した。

◀A型(柿崎機)のガウォーク形態で、右腕部が省略されている。同形態時にはバックパックからアンテナが展開される。

▶ガウォーク形態を後部下方から見た図。脚部と腕部が変形したことで、機体下面の内部構造が一部露出している。

ガウォークの機能を活かせば、制動をかけると同時に機体を反転するといった機動も可能となる。

バトロイドモード

巨人サイズの異星人との白兵戦などを想定して採用されたバトロイドへの変形機構は、VF-1に陸戦兵器としての側面を与えた。しかし、前述のようにSDF-1におけるVF-1の運用では地上戦が起こるケースが少なく、バトロイドは宇宙空間での近接戦で多用された。特に、マックスはA型に乗っていた頃から高度な操縦技術を発揮しており、ドッグファイト中にバトロイドに変形してリガードから敵兵を引きずり出すなどの戦闘行動を見せた。

バトロイドでリガードの装甲を剥がし、ゼントラーディ兵を引きずり出すマックス機。

一条機は土星軌道の戦闘でSDF-1のブリッジに肉薄した敵機を撃破し、艦の危機を救った。

▲A型のスーパーパーツ装備状態バトロイドの背面。ブースターには部隊章などがマーキングされる。

▲バトロイド時の前腕部先端はセンサーになっている。背部、腕部、脚部のスーパーパーツは一瞬で分離が可能。

▶頭部

単装レーザー機銃(マウラー ROV-20)と単眼式の複合センサーカメラが特徴のA型のヘッドブロック。

EXTRA REPORT

関連事項

VF-1J アーマードバルキリー

土星軌道の戦闘では、SDF-1直衛部隊の中にVF-1J(J型)のアーマードバルキリーが確認されている。しかし、J型はこれ以外の運用例は知られておらず、配備数は少なかったと見られる。

J型のアーマードバルキリーは、デストロイドと共にSDF-1の防衛にあたった。

カラーバリエーション

A型のカラーリングはサンドブラウンを基調としたものが一般的だが、スカル小隊の所属機は白地に黒のラインと各パイロットのパーソナルカラーを施した独特のカラーリングを採用している。

▶マックス機

▶柿崎機

◀▶マックス機はブルー、柿崎機はグリーンのパーソナルカラーを配している

ノプティ・バガニス5631

圧倒的耐久性を持つ ブリタイ艦隊旗艦

第425基幹艦隊は、ブリタイ7018の旗艦であるノプティ・バガニス5631以外にも、多くの指揮艦級戦艦を保有する。

艦長
ブリタイ7018

主要クルー
エキセドル4970

艦体解説

ノプティ・バガニス5631は、ゼントラーディ軍第425基幹艦隊所属、ブリタイ7018アドクラス艦隊司令の旗艦である。指揮艦級4,000m戦艦で、高い戦闘力と広範囲への通信性能も有する。二重船殻構造を採用した艦の表面には、数mほどのアンテナやビーム砲を無数に設置。また、甲板など随所に破損箇所が見られるが、これはゼントラーディ人に修理の概念がないため。ブリタイ7018と共に幾多の戦場を戦い抜いてきたことの証明でもある。

ブリタイ7018アドクラス艦隊司令の旗艦であるノプティ・バガニス5631。地球人との戦闘では、マクロス艦を追跡した。

巨大な艦体には、無数の火砲を備える。また、艦体の半分以上は誘導主砲となっており、圧倒的な火力を有する。

データ

所属 ▶ ゼントラーディ軍
全長 ▶ 約4,000m
全備質量 ▶ 1億94万t
標準武装 ▶ 中央誘導集束ビーム砲／誘導収束ビーム砲／対艦対空ミサイルランチャー他多数

開発系譜図

▶ ノプティ・バガニス5631

サイズ比較

SDF-1
ノプティ・バガニス5631

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶ノプティ・バガニス5631

運用記録

第一次星間大戦においては、ゼントラーディの地球侵攻の先陣として参戦したと推測され、その後、SDF-1 マクロスを追撃した。リン・ミンメイなど地球人を拿捕することに成功し、捕虜をボドルザーの下へ送還する際は、メルトランディ■隊に遭遇して戦闘を行っている。最終決戦では、ブリタイ7018がリン・ミンメイの歌に触発され、ボドルザー率いるゼントラーディ軍第425基幹艦隊と決別。彼の旗艦もまた、地球統合軍の「ミンメイ・アタック」に加わった。

大戦末期、地球人側として戦ったノプティ・バガニス5631。「ミンメイ・アタック」に参加し、マクロス艦を援護した。

艦体構造

地球人の想像を絶する大きさを持つ、指揮艦級4,000m戦艦。円柱状の細長い形状が特徴で、内部には主砲を備える。巨大な艦体には、無数のレーダーと共に、多数の火砲も装備。また、リガードのほか、多くの機動兵器を格納しており、空母的な役割も持つ。

▼艦は内部に無数の船殻を有する構造を採用。この構造が、本艦の強度や耐久性を生み出していると推測される。

◀■正面の四隅にある丸い突起部は、全て広域通信ビームの発信機。4,000m級の戦艦だけに、その大きさは相当である。

▲円柱状の細長い形状がわかる艦体側面。後部には、大推進力を得るスラスターを設置。また、フォールド機能も搭載している。

▼主砲展開時

◀▲■導主砲口開放時のノプティ・バガニス5631。艦体が上下に開き、主砲を放つ。艦前方の半分以上が誘導砲身となっており、強力なエネルギー砲を発射する。

甲板

巨大な艦体の表面には、無数のレーダーや火砲を備える。火砲には、誘導収束ビーム砲や対艦対空ミサイルランチャーなどがある。

ブリッジ

ノプティ・バガニス5631のブリッジは、身長10mを超えるゼントラーディ人が悠々と行き来できる大きさを持つ。戦闘にも対応した艦だけに、運用には多くの兵員を必要としている。上方には大量のホログラムディスプレイが設置されているほか、艦の航行を指揮する指令室も設置されており、コンソール要員が8人配備されていた。

指令室

司令のブリタイ7018と参謀であるエキセドル4970記録参謀が指揮を執る指令室。メインブリッジの後部上方にあり、ブリッジ全体を一望できる。

メインブリッジ

◀全景

有機的な形状のメインブリッジ。戦況を逐次把握できるよう、複数の通信コンソールや10基以上のホログラムディスプレイを備える。後部上方から突き出ているカプセル状の部屋は指令室である。

◀指令室内部

メインブリッジの後部上方に設置された指令室前方(左)と、後方のコンソール■(右)。コンソール要員用の席はあるが、ブリタイ7018とエキセドル4970に固定席はない。

船殻部

艦内の中空部には球状の船殻が無数に連なっており、それぞれの船殻が格納庫や船室となっている。中空部は小型艦が航行できるほどの広さがある。手前に見えるのは、ミリアのクァドラン・ローが脱出時に開けた穴である。

▲船殻部

巨大ゲート

外壁の巨大ゲートは艦外に通じている。

それぞれの船殻は管状の通路で繋がり、エアロックで隔てられている。ゼントラーディ軍艦艇の規模と特殊な構造を示す一例と言える。

船室

輝たちとは別に移送されたリン・ミンメイとリン・カイフンが収容された船室。船殻のひとつだが、格納庫とは構造やサイズが異なる。左に見えるのは2人を運んだ移動カプセルで、右には隔壁を突き破ったVT-1の機首部が確認できる。

艦内設備

艦隊指揮を想定して設計されたノプティ・バガニス級は、戦艦としての性能に優れるだけでなく、情報の分析と処理に関する艦内設備も充実していた。特に、SDF-1 マクロスの対処にあたったノプティ・バガニス5631(通称「ブリタイ艦」)では、それらの設備が一条輝らマイクローンの調査に活用されることとなった。

マイクローンのサンプル捕獲を命じられたブリタイ7018は、捕虜にした一条輝たちを尋問するなど艦内で調査を行った。

分析室などで精査された情報は、メインブリッジのホログラムスクリーンに投影できる。

分析室

ブリタイ艦の内部に設けられた分析室のひとつで、部屋の中央に分析卓が位置している。ここではSDF-1艦内への強襲で入手したミンメイ人形の分析が行われた。

分析卓

▲ミンメイ人形が置かれた分析用のテーブル。周囲に配されたモニターには対象の情報が映し出される仕組みとなっている。

ミンメイ人形を調べる際には、重武装の兵たちが取り囲む騒ぎとなった。

分析室

▼捕獲した輝たちの尋問を行った艦内分析室のひとつ。奥に輝たちが閉じ込められた分析カプセルが位置し、その周囲には情報を表示するスクリーンが配されている。

部屋はさほど広くなく、分析カプセルの反対側は気密ハッチとなっている。

◀床面
カプセルの床面は複雑な紋様となっている。

◀カプセル本体
分析カプセルは卵型で、外殻は透明。複数の支柱で空中に固定されている。

▼分析装置

上はブリタイ艦内で使用された分析装置。無数の調査端末で分析を行う。調べられているのはタバコの自動販売機である。

艦内通路

捕虜の移送にはゼントラーディ兵がついたが、メルトランディの侵入によって輝たち3人の逃走を許した。

ブリタイ艦内の通路。巨人サイズで、捕虜の移送には移動カプセルが用いられた。左手には気密ハッチが見える。

▲ハッチ

▼▶移動カプセル

◀移動カプセルは浮遊して自走する。また、先端部にはセンサーを備える。

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶ノプティ・バガニス5631

格納庫

中型戦艦に相当するノプティ・バガニスは高い艦載機搭載能力を有しており、艦内には無数の格納庫が存在していたと見られる。そのうち、ここで解説するのは小隊級格納庫である。

ブリタイ艦内に侵入したメルトランディ軍の突撃部隊は格納庫にも達し、ゼントラーディ兵との間で戦闘が行われた。

小隊級格納庫レイアウト

左は捕虜となった輝たちの機体が保管されていた小隊級格納庫の配置図。3基のターンテーブルと、壁面にはゲートとエアロックを備える。

格納庫内はバトルスーツが機動戦闘を行えるほどの広さがあり、艦の規模がうかがえる。

リガード駐機スポット

壁沿いにはリガードを駐機させる椅子状のスポットが設けられている。リガードは脚部を折り畳んで駐機する。

全景

小隊級格納庫は船殻と呼ばれる球状ブロックの上半分を利用したもので、内部は半球の構造となっている。船殻の下半分(床下)には補機類が内蔵されている。

VT-1、VF-1Sの置かれた場所

輝とフォッカーが乗っていたVT-1とVF-1Sは、手を加えられることなく格納庫の片隅に置かれていた。

格納庫のメインゲート

▲メインゲート／天井

◀▲左下に見えるメインゲートは重攻撃機が出入りできるほどのサイズで、ブリタイ艦内の中空部に通じている。また、天井部分には様々な形状の複数のライトが設けられている。

サブターンテーブル

重攻撃機が載せられているのがサブターンテーブルで、手前に見えるのがメインターンテーブルである。艦載機の出撃時に用いられる設備とみられる。

クァドラン・ローが格納庫に侵入した際に、輝のVT-1は重攻撃機の陰に隠れて難を逃れた。

ブリタイの私室

ブリタイの私室全景。部屋の中央にコンソールとスクリーン、シートがあるだけの簡素な作りで、ゼントラーディの活動様式がうかがえる。

ブリタイはSDF-1で行われた和平会見の中継を私室で内々に見物した。

▼シート

シートの背もたれには身体に接続されるケーブル状の器官が確認できることから、これが単に座るだけの家具でなく、何らかの機能維持に関係した装置であるとも考えられる。また、シートの後方の壁面に並んだ楕円状の部分は室内を照らすライトで、部屋を一周するように複数のライトが埋め込まれている。

▶スクリーン

室内中央のコンソール上部には大型のスクリーンが設けられている。傍受した外部の映像を映すことも可能で、ブリタイは地球人類のTV映像をこのスクリーンで観覧したが、本来は作戦成功まで禁止されていた行為だった。

メルトランディ軍艦艇

モルク・ラプラミズ

メルトランディの全艦隊を指揮する大型移動要塞

艦体解説

女性のみで構成されたメルトランディ軍の拠点として運用されていたのが機動要塞モルク・ラプラミズである。複数存在すると言われるラプラミズシリーズの一番で、全幅約500km、全高約270kmというサイズは、ゼントラーディ軍の拠点であった機動要塞ゴル・ボドルザーに匹敵する。艦内中枢の司令部に設置された生体光学ホログラフィック・コンピュータ「モルク・ラプラミズ」は、メルトラン大艦の意思を司る最高意思決定機関となっており、艦隊の方針は全てここで決められた。

ゼントラーディ軍に対抗するため、地球の衛星軌道上に姿を現したモルク・ラプラミズ。薄い層が幾重にも重なる特殊な構造とフォルムを有する。

内部の司令塔に、生体光学ホログラフィック・コンピュータ「モルク・ラプラミズ」が位置している。メルトランディ軍の方針を決定、指揮していた。

サイズ比較

地球

モルク・ラプラミズ

モルク・ラプラミズ

モルク・ラプラミズは、メルトランディ軍の拠点かつ最高意思決定機関として、長年に渡って機能していたと見られる。そして西暦2009年、地球人類(マイクローン)とプロトカルチャーの存在が明らかになると、その遺跡の奪取を狙い、ミリア艦を派遣するなどした。同じくマイクローンとプロトカルチャーの奪取を狙っていた永遠のライバル、ゼントラーディ軍とも激戦を繰り広げる中、地球衛星軌道上で行われたゼントラーディ軍との艦隊戦でゴル・ボドルザーが放った主砲が直撃し、モルク・ラプラミズは消滅した。

ゼントラーディ軍に対抗するため、大量の艦隊を前方に配備するモルク・ラプラミズ要塞。要塞自体は後方から艦隊の指揮を執った。

ゴル・ボドルザーから放たれた主砲の直撃に耐えられず、モルク・ラプラミズは宇宙の塵と化した。

艦体構造

艦体は半生体構造で、「モルク・ラプラミズ」を包むように薄い層が増殖していった結果、本形状となった。薄い層の一枚一枚が独立しているほか、自己再生能力を持ち、一部が破損しても再生が可能となっている。この構造により、中枢機関である「モルク・ラプラミズ」の破壊は極めて困難となっていた。

▶俯瞰図

▶右後方から要塞を俯瞰した図。規則性なく積み重ねられた薄い層は日々進化し、その形状を変えているようだ。その他の構造に関しては不明な点が多い。

◀背面から見た要塞全景。フォールド機能を持ち、任意の場所に移動できる。■拠点のゴル・ボドルザーは主砲を持つが、本要塞が武装を持つかは定かでない。

内部構造

要塞艦内も、薄い層が幾重にも重なった特異な構造となっている。生体光学ホログラフィック・コンピュータ「モルク・ラプラミズ」が位置する司令部のみ、その詳細が解明されており、部下に指示を出すプロジェクターが見られるほか、「モルク・ラプラミズ」の背部に大きな光板が設置されていた。メルトランディ艦隊の意思の代表とも言える「モルク・ラプラミズ」はここから要塞の全システムを管理・運用するだけでなく、各戦闘部隊に指示を出し、ゼントラーディ軍と長年の間、戦闘を行ってきたのである。

▼「モルク・ラプラミズ」

「モルク・ラプラミズ」■、全身が立体として表示されている。■部から下は完全に透けており、単体での移動は不可能であったと思われる。

▲モルク・ラプラミズ内・「モルク・ラプラミズ」
要塞の中心に設置されていた司令部。外観と同様、薄い板状の層が「モルク・ラプラミズ」を取り囲むように存在している。

旗艦直属のミリア639に対し、「モルク・ラプラミズ」はプロトカルチャーの遺跡奪取を命令した。

ゴル・ボドルザーの主砲が直撃し、消滅していく「モルク・ラプラミズ」。ゼントラーディ軍の前に屈した瞬間となった。

メルトランディ軍艦艇

抜群の連携度を誇った 巨大女性達の艦艇群

ゼントラーディ艦が曲線を多用したフォルムであるのに比べ、メルトランディ艦は鋭角なフォルムとなっている。

▼大型戦艦
メルトランディ軍内でも最も大きな艦艇であり、その全長は5,000mにも及ぶ。細長く伸びる艦首が特徴である。

◀標準戦艦
メルトランディ艦の中では最もスタンダードなタイプで、戦場への投入数も多かったと見られる。艦体下部に誘導砲を備える。

▲ピケット艦
偵察や索敵任務に用いられた艦で、そのサイズは約500mと小型である。

▲大型フリゲート
標準戦艦よりも一回り小型で、旗艦防衛などを行うタイプ。艦体が4基のユニットに分離した構造となっている。

ラプラミズ艦隊に所属した一部の艦は、ミリア639率いるミリア艦隊と合流し、ゴル・ボドルザー艦隊との最終決戦では地球統合軍と共闘した。

機体解説

メルトランディは、遺伝子操作によって創造された女性型バイオノイドである。人工生体と光学神経、合成骨格、外部装甲皮革から構成されているほか、脳神経とエネルギー代謝にレーザー工学を用いたことで、高い運動能力と筋力を獲得していた。メルトランディ軍の艦艇にも、彼女たちの肉体を形成するものと同様の技術が組み込まれており、それらは他の兵器システムと共にホログラム情報ネットワークによって管理されていた。これにより、極限まで精密な艦隊連携が可能となり、第一次星間大戦でもゼントラーディ軍を大いに苦しめている。

基本構造は各艦とも同じであるが、その形状や大きさは役割に応じて異なっており、対ゼントラーディ戦にも様々な艦が投入された。

サイズ比較

SDF-1
大型戦艦
強襲揚陸艦
標準戦艦
大型フリゲート
高速巡航艦
中型砲艦(ミリア艦)
ピケット艦

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶メルトランディ軍艦艇

運用記録

西暦2009年、メルトランディ軍はプロトカルチャーの遺跡である都市宇宙船アルティラ奪取を目指す傍ら、長年対立するゼントラーディ軍とも戦闘を繰り広げていた。ゴル・ボドルザー艦隊と会戦を行ったラプラミズ艦隊の多種多様な艦艇群は、旗艦モルク・ラプラミズの防衛を担った。だが、ラプラミズ艦隊の所属艦は、ゴル・ボドルザーの主砲「ゴルグ・ガンツ砲」の直撃を受け、モルク・ラプラミズごと消滅してしまった。

一部の艦はSDF-1マクロスやブリタイ艦隊と連携して「ミンメイ・アタック」に参加、ゴル・ボドルザーに迫った。

ピケット艦

偵察に適した艦で、小回りが利く。非力かつ小型のため、艦隊戦では不利な局面に陥ることが多かった。横幅が狭いフォルムは標準戦艦と似通っている。

▼側面 ▶正面

⚠関連事項 EXTRA REPORT

長射程中型砲艦

メルトランディ軍の中型砲艦に、長射程砲を取り付けた派生艦。その中の一隻がゼントラーディ軍の攻撃で大破したため、地球軌道上に放棄されたと推定される。それが地球へ降下し、SDF-1 マクロスのベースとなった。

▲全長約1,500mで、艦首に長射程誘導集束ビーム砲を、艦体各所に副砲や防御火器を装備する。

▼SDF-1 マクロス

人類はOT(オーバーテクノロジー)が搭載された中型砲艦の残骸を回収、技術を解析してSDF-1マクロスを建造した。

標準戦艦

横幅が狭い板状のフォルムが特徴となっている。艦体下部に対艦戦用の誘導砲を備えるほか、艦首や艦体中央上部、誘導砲の後方など各所にアンテナを設置していた。

ゴル・ボドルザー艦隊と行った地球軌道上の戦いでは、ラプラミズ艦隊の主力として多数の同型艦が運用されていた。

▼側面 ◀正面

大型戦艦

上下にスラスターを配置した標準戦艦とは対照的に、左右にスラスターを配置し、横幅が広く採られた大型艦。艦体上部にブリッジを備えているのがわかる。

ミンメイ・アタックに参加した時の大型戦艦(写真左奥)。多数のビーム砲やミサイルで一斉射を仕掛けた。

▼側面 ◀正面

大型フリゲート

左右に大型スラスター2基を、下部にもスラスターと誘導砲らしき大型砲塔を設置したタイプである。正面から見るとT字型の独特な形状となっているのが特徴。

地球統合軍、ブリタイ艦隊と共にゴル・ボドルザー本体に突撃したものの、爆風で飛ばされる大型フリゲート艦。

◀正面 ▲側面

高速巡航艦/強襲揚陸艦

高速巡航艦は後方に大型の格納庫を備えるタイプで、その全長は大型フリゲートよりも小さい約2,500m。強襲揚陸艦は敵基地への突撃・上陸作戦を担う艦であり、その全長は4,000mと、大型戦艦に次ぐ大きさを誇る。

SDF-1 マクロスを主力とする地球統合軍艦隊、ゼントラーディ軍のブリタイ艦隊と共闘し、ゴル・ボドルザー艦隊に迫った高速巡航艦と強襲揚陸艦。

高速巡航艦

◀正面 ▶後面 ◀側面

強襲揚陸艦

▶正面 ▼側面

Illustration by Hidetaka Tenjin

VT-1/VE-1

運用を限定したVF-1の複座仕様機

▶VE-1 エリントシーカー

機体解説

VF-1 バルキリーはパイロット1名で全ての機体制御が可能な単座仕様機だが、運用目的によっては機首ブロックの換装などで複座機への仕様変更を行ったバリエーションもあった。その一例が、非武装の複座型訓練機、VT-1 オストリッチである。機種転換訓練を目的に開発された本機は、機体各部に各種センサーやレーダーアンテナを配し、大気圏外では専用スーパーパーツの装備（この形態は「スーパーオストリッチ」と呼ばれる）を前提とすることで、訓練時における運用性の向上が図られている。また、VT-1と同じ複座仕様機には、早期警戒機のVE-1 エリントシーカーも存在する。こちらは複座仕様機にEWACシステムを搭載したバックを装備した機体で、SDF-1 マクロスの眼として活躍した。

データ

※データは本体のみのファイター形態時のもの（両機共通）

所属▶地球統合軍
全長▶14.23m
空虚重量▶調査中
エンジン▶新中州重工／P&W／ロイス FF-2001熱核タービンエンジン×2
推力▶11,500kg×2
最大速度▶M2.81（高度10,000m時）／M3.87（高度30,000m以上時）

開発系譜図

VF-1 ▶ VT-1

VF-1 ▶ VE-1

サイズ比較

VF-1J
VT-1
VE-1

▲VT-1 オストリッチ（スーパーパーツ装備状態）

主要パイロット

一条輝

VT-1 オストリッチ／VE-1 エリントシーカー

VT-1 オストリッチ

運用記録

VT-1はノースロム社が生産を担当し、SDF-1マクロスにも配備が進められた。太陽系外縁からの航海を余儀なくされたSDF-1においては、スーパーパーツ装備状態での運用が基本だったと見られ、一条輝がリン・ミンメイを同乗させて無断使用した際にもスーパーパーツが装備されていた。なお、同機の機体番号は「VT-102」だった。

ミンメイを元気づけようとした輝が無断で持ち出した。彼女を乗せて土星のリング近辺に向かい、土星の虹を作って彼女を喜ばせた。

捜索に来た早瀬未沙らの連絡艇と共にヌージャデル・ガー部隊の襲撃を受け、ゼントラーディの捕虜となってしまう。

敵艦から脱出する際にフォールドに巻き込まれて崩壊した地球に飛ばされ、SDF-1と再会するまで単機で各地を放浪した。

コクピット

VT-1やVE-1に採用されている機首ブロックは、縦方向に大型化することで内部スペースを確保し、複座型コクピットをレイアウトしている。前席は単座型と同じコンソールで、後席はバックミラーを省略して大型ディスプレイを採用している。また、後席にも通常の操縦系が配置されており、前後どちらのシートからでも操縦は可能である。

◀複座型コクピットを後方から見た図。後席は前席より着座位置が高い。

▶後席を中心としたコクピット内観。脱出シートは通常のVF-1と共通。

敵機の接近警告に驚くミンメイ。各種情報がキャノピーに投影される方式は通常のVF-1に共通している。

VT-1の前席コンソール中央に位置するディスプレイのレーダー表示。ディスプレイはタッチパネルとなっている。

◀キャノピーの展開構造。前後席ごとの分割方式ではなく、一体式となっている。

▶コクピットのバトロイド時レイアウト。左は単座型。

バトロイドモード

従来の兵器には存在しなかった人型形態に習熟するための訓練用であり、頭部には固定武装の代わりにレーダーが備わっている。

▶左右非対称であるレーダーアンテナ型の頭部を持ち、複座になっているほかはVF-1と形状に差違はない。

ファイター／ガウォークモード

VT-1は訓練機としての運用目的から、コクピット以外にも細部に改修が施されている。最も大きな改修点は非武装化だが、他にもセンサー機能の強化などが挙げられる。なお、本機はブロック5以降の後期生産機をベースにしていたとされる。

地球へのデフォールド直後にスーパーパーツを排除するVT-1。大気圏内ではデッドウェイトとなるため、未装備状態で運用される。

崩壊した地球を調査した際には、主にガウォークで用いられた。風雨を避けるため、機体からテントを吊るして張ることもあった。

▶ノーマル状態のVT-1ファイター形態。大型化された機首ブロックと、主翼端の探知システム(膨らんだ部分)も改修点のひとつ。

▲主翼の可変後退翼構造や、上下方向の2次元ベクタードノズルは通常のVF-1と共通。全体的なフォルムにも大きな違いは見られない。

▲ノーマル状態ファイターの機体下面。頭部モジュールに相当するレーダーアンテナは飛行時の空気抵抗となるため、折り畳んで収納される。

◀主翼下面にはミサイル用パイロンを設置するためのハードポイントが確認できることから、非常時には武装化も可能だったと考えられる。

▶ノーマル状態のガウォーク形態。VT-1は機首が縦方向に大型化した影響で、通常のVF-1のように尾翼と背面ブロックを折り畳めなくなっている。そのためガウォーク、バトロイド形態では、背面ブロック、尾翼は機首の付け根を取り囲むような状態に畳まれる。

◀ガウォークを後方から見た図。腕部を収納しているが、展開することも可能。敵艦内では腕部を使って隔壁を破壊している。

スーパーパーツ装備

VT-1専用スーパーパーツは新中州重工の開発によるもので、ブースター（FASTパック、NP-BP-T1)とコンフォーマルタンク(NP-FB-T1)、腕部ユニット(NP-AU-T1)で構成される。これらは主にプロペラントの増量に主眼が置かれており、武装は施されていない。

全力噴射を行うスーパーパーツ装備VT-1。訓練のためにプロペラント搭載量が強化されており、宇宙空間での航続距離に優れる。

スーパーパーツの各部には姿勢制御用バーニアが装備されており、訓練機でありながら通常のVF-1にも遜色ない機動性を発揮する。

ガウォークで急制動をかけてヌージャデル・ガーを振り切るVT-1。非武装で反撃できなかったため、輝は機動性を活かして敵機から逃れようとした。

▲脚部エンジンナセルに装着されるコンフォーマルタンクは、ユニット上下が膨らんだ形状となっている。

▲翼端灯の周囲のふくらみの内部には探知システムが組み込まれている。主翼端の2つの穴は姿勢制御用バーニア。

◀ブースターを装着した状態の機体上面(図はガウォーク形態)。ノズル前方にも姿勢制御用バーニアを持つ。

▲ブースターのノズルは全方向に可動する。また、通常のスーパーパーツのブースターユニットとは異なり、前部の換装はできない。

▲図は機首下部のレーダーアンテナを展開した状態。スーパーパーツ装備状態でも、バックパックと尾翼は、機首後部を囲むように畳まれる。

▲上はファイター形態の駐機状態を示したもの。着陸脚は省略されているが、下の円が接地したタイヤを意味する。

▶スーパーパーツ装備状態ガウォーク。コンフォーマルタンクは通常のスーパーパーツのものとは姿勢制御用バーニアの構成が異なる。

▶スーパーパーツ装備状態ガウォークを後方から見た図。腕部は収納したままだが、展開構造はVF-1と同じ。

▲▶エンジンポッド上部に装着されるユニット側面の穴がブースター取り付け部。右図は右ブースターに設けられたアンテナ。

VE-1 エリントシーカー

VT-1と同仕様の複座機に索敵･空中管制用パックを搭載した機体。パックはレドーム(APS-201監視レーダー内蔵)を装備したブースター（NR-BP-E3)と、通信中継用HF、VHF、VLF各種アンテナを装備した腕部コンテナ(右腕がNR-SR-E3、左腕がNR-SL-E3)、側方監視レーダー搭載のエンジンナセル部追加増槽(NR-FS-E3)からなる。なお、同パックの開発は新中州重工が担当し、電子機器装備の開発にはビフォーズ社が参加している。

◀ファイター形態
機体上部の回転式レドームと下部の大型アンテナが特徴。ブースター側面には眼を模ったマーキングが施されている。早期警戒機としてだけでなく、電波妨害や逆探知といった電子戦の能力にも優れる。

SDF-1に接近する敵艦の位置情報を測定するVE-1。優れたレーダー性能を活かし、母艦や艦載機部隊の誘導などにも運用された。

土星近辺の戦闘では、VE-1からの情報を基にして、SDF-1が自動追尾装置を作動させ主砲を発射。敵艦の撃沈に成功している。

▶バトロイド形態
通常のVF-1とは一線を画す外観が特徴のバトロイド形態。レドームが頭部上方に移動し、下部アンテナが左腕の一部となる。頭部も一般機とは全く異なるモジュールに換装されていることがわかる。

エースパイロットにのみ許された、火力向上仕様のスーパーパーツ装備機

VF-1S

機体解説

スーパーパーツを装備したVF-1は、一般に"スーパーバルキリー"と呼称される。そのスーパーバルキリーの背部マイクロミサイルポッド一基を連装ビーム砲に換装し、さらなる火力強化を目指したタイプが"ストライクバルキリー"である。ただし、スーパーパーツのみの場合に比べて運用コストがかさむため、本装備の使用は指揮官機用のVF-1Sに限られていた。また、VF-1Sの頭部の照準装置が連装ビーム砲との相性が良かったことも本装備がS型専用になった要因のひとつとされる。なお、このカラーリングの機体は一条輝中尉がボドル基幹艦隊との戦いで搭乗したものである。

VF小隊は、ストライクバルキリー1機とスーパーバルキリー3機で構成されていた。写真はスカル小隊。

多数の火器を装備し、高い攻撃力を誇るストライクバルキリーだが、その全てを効果的に運用するには高い操縦技術が必要であった。

データ ※データはファイター形態時のもの

所属 ▶ 地球統合軍
全長 ▶ 14.23m
全高 ▶ 5.5m
全幅 ▶ 14.78m(最小後退角度時)／8.25m(最大後退角度時)
空虚重量 ▶ 調査中
標準装備 ▶ GU-11ガンポッド／HMMP-02マイクロミサイルランチャー／UUM-7 マイクロミサイルポッド ビフォーズHMM-01／連装ビーム砲RÖ-X24／マイクロミサイルランチャーNP-AR-01他

サイズ比較

主要パイロット

一条 輝
ロイ・フォッカー

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-1S ストライクバルキリー

運用記録

SDF-1 マクロス配備のVF-1 バルキリーは、宇宙空間で運用する場合、通常はスーパーパーツを装備した。その際、隊長機のVF-1S ストライクバルキリーと、3機のスーパーバルキリーで一個小隊を編成するケースがほとんどであった。また、高い攻撃力を有する本機は特殊任務にも投入されたと言われる。中でも一条輝中尉が搭乗した機体は、ボドル基幹艦隊との戦いにおいて単独で敵旗艦中枢に突入し、ゴル・ボドルザーの撃破という戦果を挙げたことで知られている。

一条機はロイ・フォッカーのコールサイン、「スカル1」を受け継ぎ、ボドル基幹艦隊との最終決戦に参加した。

SDF-1に随伴して機動要塞ゴル・ボドルザーの内部へと侵入し、単機で最深部に突入。ボドルザーを撃破した。

追加装備

ストライクバルキリーでは、スーパーバルキリーにおける右側の背部ブースターユニットのマイクロミサイルポッドが連装ビーム砲に換装されている。それ以外にスーパーバルキリーとの変更点はなく、GU-11 ガトリング・ガンポッドや頭部レーザー機銃などの本体の標準装備も同様である。

ボドル基幹艦隊との戦闘では反応弾を搭載した。一条機はこれを用いてゼントラーディ軍艦艇を撃沈している。

マウラーRÖ-X24 連装ビーム砲
連装高出力ビーム砲はスーパーパーツの右ブースターに装着される。基部には複合センサーを備え、後方は冷却ガスの排気口となっている。推進燃料を流用した化学反応エネルギーでビームを発生させる。

HMMP-02 マイクロミサイルランチャー
左側のブースターには、スーパーバルキリーと同様、マイクロミサイルランチャー(HMMP-02)が装備される。先端の左右に4箇所の発射口がある。

NP-AR-01 腕部追加装甲マイクロミサイルランチャー
腕部にはマイクロミサイルランチャー(装弾数は2×3発)を内蔵した装甲ユニットを装備する。ユニット後部には排気口を備える。

UUM-7 マイクロミサイルポッド ビフォーズHMM-01
主翼下面のハードポイントには、マイクロミサイルポッド(装弾数は前方5×2発+後方5発)を左右1基ずつ装備する場合が多い。

ファイターモード

ストライクバルキリーのファイター形態は、上部の大型ブースター(NP-BP-01)と脚部コンフォーマルタンク/高機動スラスター(CTB-04)により、宇宙空間で高い機動性を発揮する。スーパーバルキリーも同等の性能を有しているが、本機がベテランパイロット向けの仕様だったこともあり、実戦ではストライクバルキリーの方が高い性能を発揮したと言われる。

一条機が突入した敵機動要塞の内部は非常に広大で、ストライクバルキリーの大推力が存分に発揮された。

一条機は機動性に優れるファイターの性能を生かし、砲火が飛び交う通路を突破して要塞中枢部を目指した。

◀連装ビーム砲を装備した左右非対称の外観が特徴。ブースターと腕部装甲ユニットを装着するため、尾翼は折り畳まれている。

▲スーパーパーツのブースターは大型の化学燃料式ロケットで、膨大な推進力を発揮する。また、脚部ユニットには複数の高機動バーニアが設けられている。

▲ファイター時のガンポッドは腕部ユニットの下面に装着される。ブースター部の髑髏のマーキングはスカル小隊の部隊章で、機首の「001」は1番機を示す。

▲駐機状態のストライクバルキリー。翼下ハードポイントにマイクロミサイルポッドと大型ミサイルを搭載しており、一般的なフル装備状態である。

▶右図は機体と各モジュールの内部構造を示したもの。また、ガンポッドやミサイルポッド、ミサイルなどの内部機構がわかる。

ガウォークモード

スーパーパーツを装備したVF-1は大推力ゆえに高機動時の機体制御が難しく、急激な方向転換などは脚部エンジンを可変させて行うことが多かった。スーパーバルキリー同様、元々宇宙空間での運用を前提としているストライクバルキリーにおいては、重力下環境に適したガウォーク形態の運用価値が相対的に低く、同形態は機動制御などに用いられた程度である。しかし、急制動を行った後に攻撃に転じる戦法などには、ガウォーク形態が用いられることが多かった。

スーパーパーツの搭載によって機体重量が増加したため、通常装備のガウォーク形態ほどは重力下での運用に向いていないとされる。

敵集団との交差戦闘では、ミサイル斉射直後にガウォークで急制御を行い、敵機と相対速度を合わせて迎撃に移るケースが多い。

機動要塞に突入した一条機は、狭い通路内でガウォークを巧みに使って対空砲火を回避した。

バトロイドモード

スーパーパーツはVF-1の変形機構を阻害しないため、装着したままでもガウォーク、バトロイド形態への変形が可能であった。中でもバトロイド形態は、主に敵バトルスーツとの格闘戦などに用いられた。連装ビーム砲はバトロイドでも使用可能だったため、スーパーバルキリーよりも高い攻撃力を発揮した。ただし、連装ビーム砲は高機動バーニア用の推進燃料を流用するため、戦闘継続時間の関係上、ベテランパイロットでなければ効果的な運用が困難であったと言われる。

▶コクピットの装甲にも部隊章が描かれている。また、連装ビーム砲は約90度可動する構造で、バトロイド時でも射界を確保している。

一条機はボドルザーを攻撃する際に、バトロイド形態で全ての武装を一斉に発射し、火力を集中して撃破に成功した。

敵機動要塞に突入したSDF-1は低速で内部を進攻し、随伴した一条機はバトロイドでブリッジ付近の防衛を担当した。

要塞中枢への突入直前、ブリッジに敬礼する一条機。単独任務を任された点から、実戦で鍛えられた彼の力量がうかがえる。

一条輝は、単機でのゴル・ボドルザー撃破という偉業を成し遂げた。彼は対ボドルザー戦終結の功労者となった。

▶頭部
VF-1Sのヘッドユニットは横長のゴーグル状複合センサーが特徴で、「顔」の下半分にあたる部分にはレーダー・センサー・ドームが内蔵されている。

▲スーパーパーツの装着によって、背面のフォルムは大きく変わっている。なお、背部ブースターと脚部エンジンを併用して移動する。

EXTRA REPORT 関連事項

エースの乗機となったストライクバルキリー

指揮官機として運用されたストライクバルキリーにはトップクラスのパイロットの多くが搭乗し、大きな戦果を残したと言われる。一条輝機以外にも、ロイ・フォッカー機などが特に知られている。

▶ロイ・フォッカー用
フォッカー機のカラーリングは胸部のラインが黄色で、ブースター部のスカル小隊部隊マークが黒となっている。

スカル小隊の隊長として活躍したフォッカーは、酒に酔ったまま戦闘を行い、敵機を撃墜するなどの武勇伝を持つ。

ファイター形態同様、バトロイド形態でも高い戦闘力を発揮した。敵艦に潜入する際には、パーツを外すなど、臨機応変に対応している。

EXTRA REPORT

デストロイド

マクロス艦の火力を補う 二足歩行兵器

▶モンスター
デストロイドシリーズ最大の機体。陸上戦艦とも言える巨大な体躯と、圧倒的な火力を備える。歩行システムを持つが、運動性は低く、基本的には砲台として運用された。

▶トマホーク
デストロイドシリーズとして初めて実用化された機体がトマホークである。両腕はビーム砲となっているため、格闘戦能力こそ低いが、射撃能力は高い。

▶ディフェンダー
マークワン(MBR-04-MkI)の発展機として開発された対空用デストロイド。宇宙空間での超遠距離射撃を想定した照準システムを備える。

◀スパルタン
デストロイドシリーズの中でも格闘戦に特化した珍しい機体。副動力なしで全ての兵装が稼働できる高出力を備え、重装甲と高機動を両立させている。

機体解説

異星人の宇宙艦ASS-1の墜落によって、オーバーテクノロジーを入手した人類は、人間の5倍以上の身長を持つとされる未知の敵に対抗すべく、巨大歩行兵器デストロイドの開発に着手した。兵器開発には、当時の有力軍事メーカーが参入。SDF-1 マクロス進宙式前に数種類のデストロイドシリーズがロールアウトしている。また、デストロイドシリーズ開発時に培った二足歩行システムのノウハウは、VF-1のバトロイド形態へと活かされた。第一次星間大戦勃発後、デストロイドシリーズの各機は、主にマクロスの砲台として活躍することとなった。

サイズ比較

VF-1J
HWR-00-MkII
MBR-04-MkVI
ADR-04-MkX
MBR-07-MkII

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶デストロイド(モンスター/トマホーク/ディフェンダー/スパルタン)

運用記録

SDF-1マクロスに搭載されたデストロイドシリーズは、主に艦の砲台として運用された。特にモンスターは、ビガース40cmキャノン砲の圧倒的な破壊力を活かすため、艦首付近に配置された。その他、トマホーク、ディフェンダーなども艦体の各所に配置され、対空砲としての任務を果たしている。格闘戦に特化したスパルタンは砲台ではなく、マクロス艦内の防衛や整備などに駆り出された。

デストロイドシリーズは、SDF-1マクロスの砲台として、迫り来るゼントラーディ軍を迎撃した。

デストロイドシリーズは、艦内に侵入した敵機迎撃のためにも配備。さらに整備用メカとしても使われた。

HWR-00-MkII モンスター

ビガース社、センチネル社で共同開発した巨大デストロイド。空前絶後の超巨大陸上非軌道兵器で、2足歩行システムを備えている。だが、その機動性自体は鈍重のため、固定砲台として運用されている。

▼陸上用としてはあまりに巨大すぎる兵器のため、その有効性が軍部でも疑問視された。結果、その生産数はごく少数であったと見られる。

データ
全高▶22.46m
全備重量▶285.5t

マクロス艦橋の近くで、ビガース40cmキャノン砲を放つモンスター。砲弾は核弾頭を含め、4種類用意された。

MBR-04-MkVI トマホーク

デストロイド初の実用機、MBR-04-MkIの発展型。火力重視の二足歩行機で、ビガース社、クラウラー社で共同開発した。腕部のビーム砲のほか、肩部にロケットランチャーなどを備えている。

▲トマホークの両腕部は本機の主砲となるマウラー社製PBG-11液冷式荷電粒子ビーム砲となっている。

データ
全高▶11.27m
全備重量▶31.3t

圧倒的な戦力のゼントラーディ軍に対し、SDF-1マクロス甲板上で砲撃を行うトマホーク。

ADR-04-MkX ディフェンダー

MBR-04-MkI開発時に獲得したデストロイド歩行システムの発展的運用のひとつとして、ビガース社、クラウラー社で共同開発した対空用兵器。宇宙空間での遠距離射撃能力を備える。

▲両腕に備えた高角速射砲は、4砲身で毎分2000発(1砲身あたり500発)の78mm砲弾を発射できる。

データ
全高▶10.73m
全備重量▶27.1t

マクロス甲板上で、高角度速射砲を放つディフェンダー。VFのサポート機として運用された。

MBR-07-MkII スパルタン

歩行兵器開発競争の2番手として、センチネル社とクランスマン社が共同で手掛けたデストロイド。主動力カゲンハイマーDT2004熱核反応炉により、圧倒的な高出力を実現した。

データ
全高▶11.31m
全備重量▶29.4t

▲他のデストロイドと異なり、両腕には火器ではなく、格闘用クローハンドを装備。機動力も高い。

◀アストラTZ-TV ガンクラスター
胴体内部に格納された複合兵装。レーザー砲、機関砲、グレネードランチャー、火炎放射器を備える。

SDF-1 マクロスに搭載された
非戦闘用の宇宙艇・車両

SDF-1
マクロス艦載機

小型の連絡艇で、大気圏外での航行用に開発された。戦闘への対応力は低いが、その出力、機動性能は高水準となっていた。

◀RC-4E ラビット

●主要パイロット
早瀬未沙

機体解説

西暦2009年、ゼントラーディ軍と交戦を続けていた地球統合軍の宇宙戦艦SDF-1マクロスには、主力となる可変戦闘機(以下、VF)以外にも、多彩な艦載機が搭載されていた。宇宙で運用できる艦載連絡艇(カッターと呼ばれる)RC-4E ラビットや、様々な建設業務などに用いられた大型クレーン車などが積み込まれており、戦闘以外のあらゆる場面で艦のサポートを行ったのである。これらの艦載機は軍の業務を円滑にするだけでなく、艦内で暮らす人々の生活を支えていた。

RC-4E ラビットの操縦席内。右側の操縦席に座る早瀬未沙が主に操縦を担当し、左側に座るリン・カイフンは操作に関与しなかった。

一条輝が操縦するVT-1 オストリッチを追いかけるが、そこに現れたヌージャデル・ガーによって鹵獲されてしまった。

●データ

所属▶地球統合軍
全長▶約14m
全高▶調査中
空虚重量▶調査中
エンジン▶調査中
武装▶——(派生機として軽武装型、長距離レーダー装備型有)
操縦定員▶2名
乗客定員▶6名

●サイズ比較

VF-1J
RC-4E

Mechanic Sheet
メカニックシート
SDF-1 マクロス艦載機

運用記録

RC-4E ラビットは、大気圏外での艦と艦との連絡や人員の輸送、VFへの連絡などを担っていたと見られる。対ゼントラーディ戦においては、土星付近にて無断出撃を敢行した一条輝、リン・ミンメイ搭乗のVT-1 オストリッチを制止する目的で、早瀬未沙が運用している。一方、大型クレーン車は、SDF-1 マクロス艦内を襲撃したヌージャデル・ガーによって破壊された居住区域を復旧すべく、複数が投入されていた。

操縦席

▼操縦席は並列に2席設けられており、どちらのコンソールも同様の機能を備える。上方には周辺状況確認用のディスプレイを設置。

▲前方から見た操縦席。後方にあるキャビンや備品庫とは障壁で仕切られている。

◀操縦席とキャビンの配置図。キャビンは前後2列に設置されており、1列に最大3人を搭乗させることが可能であった。

RC-4E ラビット

RC-4E ラビットは、長距離航行を想定しており、多量の推進剤を搭載しているのが特徴である。最高速度時には、戦闘機並の加速性能を発揮することができた。その能力を活かすため、長距離レーダー型や軽武装型などが誕生した。

◀底部から見た図。左右に設置された縦長のパーツは、緊急着艦時用の大型緩衝脚である。

後方に4基のスラスターノズルを備えることからも、本機が大型の推進剤を積み込んでいるのがうかがえる。機体上部にはセンサー、アンテナを設置。

◀底部に脚部を備えた本機は、そのフォルムから「ラビット」の名称がつけられた。

キャノピーの上部に設置されているのは、装甲キャノピーバイザーである。

大型クレーン車

地球統合軍が用いていた建設作業機器の一種で、延伸自在のクレーンを用いて高所での作業が可能となっている。クレーンの先端には作業用のゴンドラが設置されており、複雑な作業をスムーズにこなすことができた。また、スタンドによって車両を地面に固定することも可能である。

大型クレーン車は、戦闘やトランスフォーメーションによって破壊されたSDF-1 マクロス艦内の整備を担っている。

地球統合軍の軍司令部を修復するクレーン車。操縦に1名、ゴンドラに1名、地上での指揮役に1名が就いていた。

◀車両後方に設置された大型クレーンを延伸した状態。クレーンの基部は回転式となっており、その作業範囲は広い。

▲クレーン先端の拡大図。大型のマニピュレーター、作業用ゴンドラ、サーチライトなどが設置されている。

◀▲走行時は、左図のようにクレーンを折り畳んだ状態となる。上図は、クレーン使用時に車両を固定するスタンドで、前方、後方に計4基設置されている。

宇宙空母アームド

超弩級戦艦の両翼を担う 艦載兵力ステーション

データ

所属▶地球統合軍
全長▶約450m
全幅▶約220m
全備質量▶174,000t
動力系▶O-T発展型反応炉システム×2
重力制御系▶O-T発展型重力制御システム×1
噴射推進系▶O-T発展型主複合ノズル×2
火器▶O-T誘導集束ビーム砲×2／他多数
艦載機▶VF-1バルキリー262機、QF-3000Eゴースト66機、他多数

サイズ比較

SDF-1
ARMD

開発系譜図

ARMD

▲アームド01

艦体解説

SDF-1 マクロスが度重なる異星人との交戦を潜り抜けることができた要因のひとつに、艦載機部隊の効果的運用と奮戦が挙げられる。それを支えたのが、SDF-1の艦載機母艦として機能した宇宙空母アームドである。この艦は本来、ラグランジュ・ポイントや静止衛星軌道上に配備される宇宙戦闘機用の浮台、リグとして建造されたものだが、地球へ落下した異星人艦の修復計画の進行に伴い、SDF-1の艦載機運用プラットフォームへの転用が行われ、同艦の攻防の要としての役割を果たした。

SDF-1が落身創痍の戦いを強いられる中でも被害を免れ、艦載機運用の中枢として機能した。

全長1.2kmのSDF-1に比べると小型に見えるが、通常空母を凌駕するサイズと収容能力を誇る。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶アームド

運用記録

SDF-1戦略システムにおける艦載兵力ステーションとして、急遽、宇宙戦闘機用リグを改造する形で建造されたアームドは、2008年12月にSDF-1とドッキング。SDF-1戦略システムの一部となった。移民船としての側面も持っていたSDF-1は、南アタリア島で5万人の移民を収容しつつ、最終艤装作業を進め、2009年2月の進宙式典に臨んだが、式典中に異星人(ゼントラーディ人)の襲撃を受け、空母プロメテウスからSDF-1援護のために発進したバルキリー隊もろとも、緊急フォールドを敢行する。以後、太陽系外周から地球への帰還を果たすまで、アームドはその艦載機運用能力を如何なく発揮し、ゼントラーディ、メルトランディ両軍の攻撃を退けた。「ミンメイ・アタック」においては、SDF-1の両翼としてボドル旗艦に突入。武装を一斉発射し、旗艦の撃破に貢献した。

VF-1はフック・アームに懸架された状態で搬出され、誘導標識の指示に従い発艦を行う。

アームド自体にもミサイルなどの武装が施されており、ボドル旗艦への突入時に用いられた。

艦隊構造

▼▶扁平な艦体形状が特徴で、上面は艦載機が展開しやすいようにフラットな構造をとっている。推進機関や動力系にはオーバーテクノロジーが用いられているが、艦体は極めて単純な構造であり、SDF-1に合わせた急ごしらえの艦という事情を物語っている。

▲アームド02

ドッキングモジュール

▼▶宇宙戦闘機用リグからアームドへの改修にあたって、本艦にはさまざまな機構が付加された。管制用ブリッジや装甲、帰投不能となった艦載機を回収するための推進系、そしてSDF-1と連結するためのドッキングモジュールである。このモジュールは艦後部に設けられ、SDF-1側舷のドッキングアームを接続する構造となっている。ちなみに、アームドは切り離しての単独航行が可能だが、地球への帰還行においてそのようなケースは確認されていない。

▲▶モジュールの接合部に沿ってドッキングアームを左右にスライドさせることが可能である。

アームド配置図

SDF-1の左舷に1番艦のアームド01が、右舷に2番艦のアームド02が接続される。01と02の甲板レイアウトは左右逆になっており(01はブリッジが右舷に、02は左舷に位置している)、この配置がシステム統合構想の発案時点から決定されていたことがうかがえる。

Illustration by Hidetaka Tenjin

SDF-2

人類移住計画 第一陣の旗艦となった メガロード級1番艦

機体解説

人類が宇宙に旅立つための方舟とも言われたメガロード級超長距離移民船メガロードO1。人類播種計画を担って銀河へと漕ぎ出した最初期の移民船である。大規模宇宙移民の母船として設計された本船は、長期航行能力と居住性に重きを置いており、SDF-1 マクロスで得られたノウハウが生かされた。収容可能人員は約2万5千人とSDF-1から大幅に減っているが、これは本級が長期航行に備えて物資搭載量を高めたためで、居住設備は格段に進歩している。一方で最低限の武装しか持たず船体の剛性も低いため、戦闘には適していない。本船の使命は人類の種を守ることにあったのである。

マクロス・シティを出発したメガロードO1は、銀河系中心への長い航海に就くこととなった。

艦長はSDF-1の主任管制官として実績を挙げた早瀬未沙大佐(のちの一条未沙)が務めた。

データ

所属▶統合軍
全長▶1,770m
全高▶調査中
全幅▶調査中
全備重量▶3,030万t
エンジン▶調査中
推力▶調査中
最大速度▶調査中
標準武装▶調査中

開発系譜図

SDF-1 ▶ SDF-2

サイズ比較

SDF-1
SDF-2

艦長

早瀬未沙

SDF-2 メガロード01

運用記録

メガロード01は当初、地球製宇宙戦艦SDF-2として、2003年11月に建造を開始されていた。本来は2013年竣工、2014年運用開始を予定していたが、2009年に勃発した第一次星間大戦の影響で建造は一時中断されることとなる。終戦後、人類播種計画が浮上したことで、2010年6月より移民船として建造が再開され、同時に本船を核とする移民船団の編成も進められていった。その後、メガロード01を旗艦とした第1次超長距離移民船団は2012年9月に地球を出発し、銀河系中心方面への航海に就いた。だが、2016年7月に銀河系中心近傍に到達したところで、同船団からの通信は途絶してしまう。この謎の失踪が、以降の人類移住計画に影響を与えることを恐れた新統合政府は、事態の公表を避け、第1次超長距離移民船団は、いまだ航海の途上にあるとしたのだった。

建造に並行してVF-1の後継機VF-4 ライトニングの開発も進められ、メガロード01に艦載機として随伴した。

第1次超長距離移民船団には、メガロード01のほかゼントラーディ艦艇や統合軍戦闘艦が組み込まれた。

艦隊構造

メガロード01の艦体前半部は、フレームとスクリーンで覆われた都市区画となっているのが最大の特徴である。都市は閉鎖サイクルの長期居住システムを備えており、また、艦内に物資の備蓄・生産区画を十分に確保したことで、乗員は余裕ある生活を送ることができたという。ただし、そうした構造から加重限界は低く、運動性と加速性能にも欠けているとされる。

▲前面

艦橋部は艦体と分離しており、2本のアームで支持される構造となっている。

▲正面外殻

主砲システムに替えて船首から中央部分にかけてを巨大なグラスエリアとし、変形機構も廃している。

ブリッジ前面はSDF-1と同じ大窓構造が採用されている。

建造初期の完成予想図

メガロード01の原型にあたるSDF-2は、「メガロード」の艦名を冠するマクロス級2番艦として計画された。SDF-1マクロスの修復と平行して建造が進められたSDF-2は、SDF-1の修復によって得られた技術的フィードバックが十二分に盛り込まれていった。SDF-2の建造は、月面にある統合軍アポロ基地地下工廠で行われたが、これは全長1620m、運用慣性質量2070万t（計画当初の予定）もの巨体を誇るSDF-2の開発・建造にあたり、地球の1/6の重力である月面が都合が良かったためである。結果として、SDF-2は第一次星間大戦の戦禍を免れ、終戦後に移民船メガロード01に改装されることで、人類播種計画の速やかな遂行に貢献することとなった。なお、メガロード01への改装にあたっては、第一次星間大戦でのSDF-1の運用から得られたデータや、ゼントラーディ軍からもたらされた技術などにより、宇宙戦艦の技術レベルが大幅に躍進したこともあって、艦体の大部分は新規設計となり、SDF-2の面影は主推進機の外装や指揮管制ブロックに多少の面影を残す程度となっている。

▶SDF-1の技術的フィードバックを受けて開発された純地球製の艦で、単艦での長期間作戦行動を目的とした。シルエットはSDF-1に近いが、より大型化している。

▼後方

▼側面

EXTRA REPORT

関連事項

人類播種計画

人類播種計画は、巨人族ゼントラーディとの戦いを経験した人類が、人類という種の生き残りのため宇宙に生存の場を求めた、大規模移民プロジェクトだった。その実案としては、移民船団を編成し、銀河系の各方面に派遣することを骨子としている。計画では、超長距離移民と近距離移民を並行して行うことで円滑な進行とリスク分散を試み、個々に生存圏を探索していくものとされた。こうした宇宙移民は以降も活発に進められ、人類は銀河へと急速に活動圏を広げていくことになる。

宇宙移民は初期の頃から一般にも広く喧伝され、船団への参加者が募られた。

7

計画の中核をなす移民船は技術進歩によって機能が高度化し、移民船団の規模も拡大していった。

Illustration by Hidetaka Tenjin

三胴型構造を特徴とする VF-1バルキリーの後継機

機体解説

VF-1 バルキリーの後継機として開発が進められたVF-4ライトニングⅢは、宇宙空間における機動性能に重点を置いた設計がなされた可変戦闘機(VF)である。設計に際しては、従来のオーバーテクノロジーに加えてゼントラーディ系の技術も導入されているため、VF-1とはかけ離れた特徴的な三胴型の機体構造となっている。これは機体容積の増大にも繋がり、プロペラント容量や武装搭載能力が増強され、VF-1よりも戦闘力が40%向上していると言われる。大気圏内での機動性能にやや問題を抱えていたが、移民船団などの宇宙航空隊に配備され、2020年代における統合軍の主力戦闘機を務めた。特に有名な機体が、第1次超長距離移民船団に配備された一条輝の乗機である。

VF-4

主要パイロット

一条輝

データ

※データはファイター形態時のもの

全長▶16.8m
全幅▶12.65m
全高▶5.31m
空虚重量▶13,950kg
エンジン▶新中州重工/P&W/ロイス社製FF-2011熱核タービンエンジン×2(推力:14,000kg×2)
バーニア▶P&W HMM-1A
最高速度▶M3.02(高度10000m)/M5.15+(高度30000m以上)
標準武装▶大型ビーム砲×2/長射程ミサイル×12/他

サイズ比較

VF-1J
VF-4

開発系譜図

▶ VF-4 ▶

VF-4 ライトニングIII

運用記録

VF-4の開発は、試作機VF-X-4とVF-X-3の[illegible]作で始まった。しかし、第一次星間大戦で地球が壊滅状態となり、軍施設とともにVF-X-3が消失。一方消失を免れたVF-X-4はVF-4へと発展し、完成した(開発中の機体には、試作1号機のVF-X-4V1や、増加試作型のVF-4A-0などが存在)。2012年2月に生産が開始され、同年9月に出航したメガロード01に配備されたほか、統合軍宇宙航空隊の主戦力として運用された。また、特務部隊「ダンシングスカル」にエンジン出力を向上させたG型が配備されたという。2022年の生産終了までに8245機が生産され、2030年以降のVF-11 サンダーボルト登場まで、宇宙戦力の中核を担った。

VF-4を装備したスカル隊がメガロード01に配備され、一条輝が隊長を務めた。

ダンシングスカルで運用されたVF-4Gのマクシミリアン・ジーナス(マックス)搭乗機。

標準装備

VF-4の標準装備は、大型ビーム砲2基と半埋め込み式の長射程ミサイル12基で、ともにエンジンナセルに内蔵されている。武装の大半をオプションに頼っていたVF-1シリーズとは異なり、本機はこれらの固定装備を主武装としている点が特徴である。

Ⓐ長射程ミサイル
長射程ミサイルは、機体に半ば内蔵された形で搭載されていた。総弾数についてはいくつかの説がある。

Ⓑ大型ビーム砲
大型ビーム砲はエンジンナセル上部ブロック(バトロイドの腕部に相当)に内蔵されている。このブロックは取り外すことも可能で、大気圏内用軽装状態では外して運用されたとも言われる。

コクピット

意欲的な機体設計が試みられたVF-4だが、コクピットの仕様に関して言えば、従来のVFから大きく変わってはいない。コクピットはシート右にコントロールスティック、左にスロットルレバーを配した構造で、単座式のシステムとなっている。

コクピット内の正面コンソールには、大型のメインディスプレイが配され、さまざまな情報が表示されている。

VF-4Gのコクピットに座るマックス。内部奥側に見えるのがコントロールスティック。キャノピー下には撃墜マークが刻まれている。

コクピットでGに耐えるマックス。内部はシンプルな構造で、シートの背もたれはパイロットスーツのバックパックが収まるようになっている。

ファイターモード

宇宙空間での運用を重視して設計されたVF-4は、独特の三胴構造によって機体容積を確保し、ファイター形態の航続距離や機動性向上を図っている。反面、大気圏内での飛行性能はVF-1に比べて優れているわけではなかった。そのため、大気圏内用主力機は後発のVF-5000 スターミラージュとなり、本機は宇宙空間をメインに運用された。宇宙に限定すれば、本機の性能はVF-1を遥かに凌駕しており、主力を担うに十分な性能を発揮したのである。

機首カナードや補助翼を装備するが、大気圏内飛行性能は十分とは言えず、その本領は宇宙空間における機動性能にあった。

VF-4マックス機のファイター形態。下に並んで飛行しているVF-5000と比べると、ややサイズが大きいことがわかる。

メインノズルは2次元ノズルになっており、上下方向への推力偏向機能を有する。

▶VF-4のファイター形態(図は一条機)。機体の左右にエンジンナセルを配した三胴構造で、主翼面積は小さい。

▼主翼とナセル部ベントラルフィンは、高速飛行時にそれぞれ下方と上方に傾斜する可変構造を有している。

▼▲エンジンナセル上部の垂直尾翼が内側に傾斜しているのは、レーダーの反射をそらすための構造である。

▶VF-4G マックス機

▲ダンシングスカルで運用されたVF-4Gのマックス機。ほかの専用機と同様に、青系のカラーリングとなっている。

▶VF-4G ミリア機

▲こちらは同部隊で運用されたミリアのVF-4G。カラーリングは赤系の単色で、機体色以外の仕様はマックス機や通常の機体と同じである。

ガウォークモード/バトロイドモード

本機はVF-1とは異なる変形システムを採用している。エンジンナセルが脚部となる構造こそVF-1と同じだが、ナセルの上部ブロックが腕部を構成するなど、各部の構成は独特で、特にバトロイド形態にその傾向が色濃く表れている。なお、本機はナセル上部ブロックを大気圏外用大型ブースターに換装可能だったとされるが、その場合には腕部がない状態となる。

▲VF-4のガウォーク形態(左腕部は省略した状態)。内翼底部から大腿部が引き出され、脚部を展開する。

▶背部にはファイターの機体後部に相当するラムウィングノズルが見える。これはファイター時にエアブレーキとしても機能する。

▲VF-4のバトロイド形態。コクピットブロックが胴体に水平に収納されるなど、個性的なパーツ構成となっている。

▶VF-4G マックス機

▶VF-4Gマックス機のバトロイド形態。バトロイド時の大型ビーム砲は前腕部に位置し、広い射界を確保できる。

◀VF-4G ミリア機

◀こちらはバトロイド形態のVF-4Gミリア機。肩部に主翼と尾翼を残した独特なシルエットが特徴である。

変形シークエンス

胴体

胴体部の変形。ノーズコーンが折れ、後方にスライド。頭部の展開した胴体上部が前方にスライドし、コクピットブロックに被さる。胴体後方下部が下に折れて前方にスライドし、腰部となる。

腕部/脚部

ナセル上部ブロックに半収納されていた上腕部と手部が展開し、畳まれていた肩部前後のカバーパネルが降りる。

脚部の展開構造。機体底面の大腿部と連結したナセルが下方に降り、膝関節が前方にスライドすると同時にシャッターが閉まり脚部を構成する。

関連事項 EXTRA REPORT

VF-4の試作機

試作段階のVF-X-4は、開発期間短縮のためにVF-1とのパーツの共通化が図られた。VF-X-4V1では35%もの比率でVF-1のパーツを流用していたが、その割合はVF-4A-0で25%程度まで抑えられている。そうした努力によって、VF-4の配備はメガロード01の出航に間に合ったのである。

▲VF-X-4と伝えられる試作機。三胴型の機体構造はVF-4と同じだが、カナードがなく細部も異なる。

▲全体的にVF-4よりも丸みを帯びたフォルムで、エンジンナセルのベントラルフィンも設けられていない。

VF-X-4の模型を手にする一条輝。VF-4の試験飛行に際しては当時のエースパイロットの意見が取り入れられたと言われ、彼もそこに関与していたとされる。

illustration by Hidetaka Tenjin

YF-19

フォールド・ブースターを用いた単独フォールドをはじめ、まさに次世代のVFと呼ぶに相応しい性能を備え、それまでのVFを遥かに凌駕する革新的な試作機だった。

7

数年後には、本機の構造を簡略化した量産型、VF-19 エクスカリバーが開発された。一般パイロット向けのデチューン機だったが、高い性能を誇った。

驚異的な機動性を誇るAVFの先駆け

機体解説

次期全領域戦闘機(AVF)を選定する「スーパー・ノヴァ計画」において新星インダストリーが提示した試作機が、このYF-19である。同社の傑作汎用機、VF-11 サンダーボルトの設計を発展させつつ、前進翼を採用して大気圏内での運動性を追求した機体で、アクティブ・ステルスやピンポイント・バリア・システム、単独フォールド機能といった従来のVFとは一線を画す機能も有している。競合機となったYF-21に比べると野心的なコンセプトには欠けるが、熟成した技術に基づいた過激な設計によって、並みのパイロットには扱いきれないほどの機動性能を誇った。技術的ブレイクスルーを果たしたAVFの先駆けとしての意義は大きく、同時に有人可変戦闘機の限界に挑んだ設計思想は後年においても高く評価された。

主要パイロット
イサム・ダイソン

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶18.62m
全高▶3.94m
全幅▶14.87m
空虚重量▶8.75t
エンジン▶新星／P&W／ロイス FF-2200×2
推力▶64.700kg×2(宇宙空間瞬間最大)／56.500kg×2(大気圏内瞬間最大)
最大速度▶M5.1(高度10.000m)/M24+(高度30.000m)
標準武装▶マウラーREB-30G 対空レーザー砲塔×1／マウラーREB23 半固定レーザー機銃×2／ハワードPBS-03F 戦闘機搭載用ピンポイント・バリア・システム×1／ビフォーズ 全領域高機動マイクロミサイルクラスター／ハワードGU-15 新型標準ガトリングガンポッド

サイズ比較

VF-1J
YF-19

開発系譜図

VF-11 ▶ YF-19 ▶ VF-19

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶YF-19

運用記録

2034年に開発が始まったYF-19は、2機の飛行試験用原型機と1機のアビオニクス地上試験用機が製作され、2040年には惑星エデンのニューエドワーズ基地におけるYF-21とのコンペティションに投入された。当初はピーキーな性能ゆえに事故が多発し、ヤン・ノイマン設計主任を中心とした開発チームを悩ませた。しかし、イサム・ダイソン中尉がテストパイロットになると、それまでの停滞を払拭する好結果を出す。プロジェクト中止の事態に陥ると、ゴーストX-9との対決を望むイサムに持ち出され、地球のマクロス・シティで「シャロン・アップル事件」に遭遇することとなった。

「スーパー・ノヴァ計画」のコンペでYF-21と熾烈な競争を繰り広げ、高い評価を得たことで、のちに制式化されることになった。

「シャロン・アップル事件」では、シャロン型AIに制御を奪われたSDF-1 マクロスと対峙し、その暴走を食い止めることに成功している。

標準装備

マウラーREB-30G 対空レーザー砲塔

モニターヘッドユニットには、固定武装の対空レーザー砲塔（マウラー社製REB-30G）1基を装備している。VF-11を設計の基礎にしているため、ファイター形態では機体上部に露出する構造となっており、後方に対して迎撃、牽制を行う武装として用いることができる。

ハワードGU-15 新型標準ガトリングガンポッド

携行武装には、ハワード社のGU-15 新型標準ガトリングガンポッドを採用している。ストック部分が弾倉になっており、シールド裏に予備弾倉を備える。また、排莢口は銃身中央右側に位置する。

コクピット

コクピットの構造は従来のVFからさほど変わってはいない。ただし、内部の足元がスクリーンとして機能することで視認性の向上が図られている。また、本機は1人乗りだが、コクピット後部に非常用の補助シートを展開することも可能で、イサムが地球に乗り込んだ際にはヤンが同乗した。

◀操縦桿

▶スロットルレバー

ファイターモード

前進翼とカナード前翼を採用したファイター形態は、特に大気圏内での運動性に優れる。しかし、その性能を前進翼特有の不安定さを利用することで引き出す設計は、操縦性の著しい低下を招くこととなった。また、開発後期には熱核バーストタービンエンジンが新中州重工/P&W/ロイス製のFF-2500Eに換装され、出力の向上が扱いにくさに拍車をかけていた。しかし、それらによって得られた高機動こそが、本機の武器だったのである。

▶主翼は可変式で、高速飛行時や格納時には後方に折り畳むことも可能。また、胴体前縁左右にはマウラー社製REB-23 半固定レーザー機銃を内蔵している。

イサムはYF-19が作る飛行機雲で空に竜鳥を描いてみせた。これは複雑な機動の賜物であり、いかに本機の運動性が優れていたかがわかる。

▼ノズルはVF-11とほぼ同じ構造の2次元スラストベクタードノズルで、上下への推力偏向機能を有する。また、ファイター時のガンポッドは機体下部のエンジンナセル間に装着される。

▶機首には気圧制御ガスの噴出ノズルを備える。これは周囲の気流に圧力差を発生させる機構で、高仰角時の姿勢制御に効果を発揮する。また、機首左右には複合センサーを備える。

ガウォークモード

YF-19はハワード社製PBS-03F 戦闘機用ピンポイント・バリア・システムを搭載しており、ガウォークとバトロイドでその使用が可能となる（出力の6割を必要とするため、ファイター形態では基本的には不可）。これにより本機のガウォークは、従来のVFに比べて防御力が格段に向上している。

▶ガウォークのフォルムはVF-11に近いが、変形構造が大幅に異なる。肩関節から腕部にかけてがより大きく張り出しており、主翼に被さった状態となっている。なお、腕部が干渉する場合には主翼を後退させる。

▼胴体下部中央に見えるのはバトロイドの背部補助スラスター。また、脚部が展開されると同時に垂直尾翼は折り畳まれる。なお、脚部にはチャフディスペンサーが内蔵されている。

▼機体後部にはバトロイドの背部を構成するユニットが位置し、VF-11では露出していたヘッドユニットが半分隠れている。また、主翼は基部の先端だけで胴体に連結した状態となっている。

市街地での戦闘を想定したテストでは、障害物の多い地形で軽快な機動を披露した。安定性はともかく、運動性には優れていたと考えられる。

地球におけるYF-21との一騎討ちでも、ファイターからガウォークに変形して地上戦へ移行するといった実戦的な運用が見られた。

バトロイドモード

YF-19の開発においては、VF-1 バルキリーで確立されていた変形システムの再構築が試みられた。その結果、変形時間はVF-11から20%短縮されている。また、従来のVFではコクピットが胴体正面に配置されていたが、本機は胴体内部に格納される構造となり、パイロットの生存性が大幅に向上している。さらに、前述のピンポイント・バリア・システムはバトロイドでも使用可能で、腕部マニピュレーターにバリアを展開して殴打するといった運用も行われた。このように、本機のバトロイドは既存のVFとは比べ物にならないほど強靭だったのである。

バトロイドのヘッドユニットの整備風景からは、内部構造の一部を見て取ることができる。トライアルではさまざまなデータが収集され、逐一検証が進められていった。

テストパイロット同士の個人的な諍いが、バトロイドでの殴り合いに発展する場面もあったが、その乱暴な運用に耐えうる性能を有していた。

YF-21とのドッグファイトでは、空中戦の最中にバトロイドへと変形し、ミサイルを迎撃しつつ反撃に転じるといった高度な機動を見せた。

▲胸部中央に位置するファイターの機首部分が特徴的なバトロイド形態。コクピットは機首方向を上にして胴体内部に収納されており、腰部周りの構造も従来のVFとは大きく異なっている。

◀▲変形構造が見直された結果、背部ユニットが大型化している。腰部後方にあるのは、ファイターの胴体前縁部装甲である。なお、主翼は折り畳まれて脚部に付随する構造となっている。

※左図は腕部を取り外した状態。

Illustration by Hidetaka Tenjin

YF-19

機体解説

YF-19は「スーパー・ノヴァ計画」において新星インダストリーが提出した試作機で、同時にその追加装備も開発された。従来のパーツより小型化されたFASTパックや、VF単体でのフォールドを可能としたフォールド・ブースターがそれにあたる。ここではこれらの追加装備に加え、高速戦闘時の形態や複座機として運用する際の後部シートについて解説する。

数々の新装備で次世代の基礎を築く

主要パイロット

イサム・ダイソン

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶18.62m
全高▶3.94m
全幅▶14.87m
空虚重量▶調査中
エンジン▶新星/P&W/ロイス FF-2200×2
推力▶64.700kg×2（宇宙空間瞬間最大）／56.500kg×2（大気圏内瞬間最大）
最大速度▶M5.1（高度10.000m）／M24+（高度30.000m）
標準武装▶マウラー REB-30G 対空レーザー砲塔×1／マウラー REB23 半固定レーザー機銃×2／ハワードPBS-03F戦闘機搭載用ピンポイント・バリアシステム×1／ビフォーズ全領域高機動マイクロミサイルクラスター／ハワードGU-15新型標準ガトリングガンポッド

サイズ比較

VF-1J
YF-19

Mechanic Sheet
メカニックシート
YF-19

FASTパック装備

機体解説

YF-19専用の追加武装ユニットとして開発されたFASTパックは、従来のVFのスーパーパーツに比べて小型である点が特徴である。これは本機のステルス性能を損なわないための仕様で、コンフォーマルタイプのオプション装備として設計されている。そのため、従来のVF用FASTパックよりも空力特性に与える影響が少なく、装着したままでも大気圏内での運用が可能となっている。なお、YF-19本体のハードポイント（各4,500kgまで懸架可能）は、宇宙空間長距離航行時の増槽・特殊装備にも用いられる。

機体に密着するコンフォーマルタイプのため、YF-19の特徴である大気圏内での高機動性は損なわれにくい。また、装着したままの大気圏突入も可能である。

本体エンジンナセル側面のウェポンベイを使用する際には、上縁支持架でユニットを展開する。このように、本体の性能に干渉しにくい設計が特徴である。

運用記録

FASTパックはYF-19と並行して開発が進められ、YF-21とのトライアルにおいて運用試験が行われた。しかし、ゴーストX-9の完成によって「スーパー・ノヴァ計画」の中止が決まると、その決定に異議を唱えたイサム・ダイソン中尉とヤン・ノイマンがYF-19を強奪して地球の警戒網を突破するという事態が発生。この際、YF-19はFASTパックを装備した状態で奪われ、エデンから追撃してきたYF-21との交戦に及んだ。なお、FASTパックはこの戦闘中にすべての部位に被弾し、投棄されている。

トライアルでは腕部に装着する追加武装ユニットのテストも行われた。これは通常、FASTパックには含まれないが、高い攻撃力を有したオプション装備だった。

YF-21との激しい戦闘で側面ユニットに被弾しながらも、即座に切り離して誘爆による被害とデッドウェイト化を防ぎ、本体への影響を最小限に留めた。

ファイターモード

▲バトロイド時の肩部アーマーになるFASTパックユニットは、機体上部の気流制御ユニット後部のエンジンナセルに密着するように装備される。

▲FASTパックのユニットは機体上部とエンジンナセル側面の計4基で、装備状態でもフォルムはほとんど変わらない。ただし、上部尾翼がやや低い位置に移動する。

▲エンジンナセル側面ユニット（　部分）／肩部アーマーユニット（　部分）
エンジンナセル側面ユニットには高機動バーニアが2基ずつ備えられている（点線部分）。FASTパック装備時の機体重量増加による機動性の低下を補うために用いられる。

▲マイクロミサイルランチャー
側面ユニットはマイクロミサイルランチャーを内蔵しており、　部に発射口を有する。

バトロイドモード

▶VF-1など多くのVF用スーパーパーツに見られる背部ブースターユニットは存在せず、推力は本体に依存する。

▲肩部アーマー
肩部側面を保護するように小型のアーマーが配されている。このユニットには武装は施されていない。

▲バトロイド形態では肩部アーマーユニットがやや目立つものの、ファイターと同じく基本的なフォルムにはほとんど変更はない。

高速戦闘時

前進翼を後方に折り畳んで胴体に密着させたこの形態は、主翼の空気抵抗を極限まで減らすことで大気圏内の高速飛行を可能としている。本形態ではほぼ胴体だけで揚力を発生させており、2次元ベクタードノズルや気流制御ノズルなどによって機体の姿勢制御を行う構造となっている。ただし、通常の前進翼構造よりもさらに安定性に欠けるため、実際に運用されるケースは少なかった。また、本形態は母艦への格納時に用いる場合もある。

YF-19は通常の形態でも既存のVFを凌駕する速力を有しており、わずかだがYF-21を上回る。そのため高速飛行形態を用いる機会は少なかったと見られる。

▶主翼を胴体とほとんど平行になる位置まで後退させ、翼形を変化させる。また、機体上部の空気流を調整するため、垂直尾翼が内側に倒れる。

▲主翼の制御システムが使用不能となるため、機体制御においては後部メインノズルの機能が大きな役割を果たす。

▶右の状態ではFASTパックを装備しているが、未装備の状態でも高速飛行形態をとることは可能となっている。

フォールド・ブースター装着時

YF-19は、VF用試作フォールド・ブースターを用いて単独フォールド航行を行う性能を有している。このフォールド・ブースターは新中洲重工/オーテック製FBF-1001Aで、同水準の性能を持つYF-21と共用となっている。ただし、AVF開発計画の時点では片道20光年の航行性能しか保証されておらず、未成熟のシステムであった。しかし、のちに改良が施され、2040年代末にはシステムの信頼性やフォールドの精度向上が果たされている。

イサムがYF-19を強奪して地球に向かうことを見越し、ヤンがフォールド・ブースターを取り付けていた。それを使ってフォールドを行い、追撃ミサイルをかわした。

▲フォールド・ブースターは4基のパイロンで機体上部に固定する。FASTパックが小型なのは、ブースターに干渉しないためでもある。

▶機体上部中央にフォールド・ブースターを装備する方式はYF-21も同様で、以降のVFにも継承されていった。

▶フォールド・ブースター単体
曲線的なデザインや内部構造が覗く透明カバーなど、VFとは異なる技術系統が窺える。

後部シート／脱出ポッド

本来は単座機のYF-19だが、コクピット後部には非常用の補助シートを備えており、複座機として運用することも可能である（機能自体はすべて前席のメインコクピットで制御できる）。イサムが地球に向かった際にはヤンがこの補助シートに座り、ナビゲートを務めた。しかし、ヤンがシャロンの歌に洗脳されたため、イサムによってシートごと機外に放出された。

▲後部コクピット
上は補助シートのコンソール周り。前席と同様の計器類を備えるほか、簡易キーボードも設けられている。

補助シートは単座状態では前方向に倒されているが、使用時に起こされて上のような構造になる。なお、キャノピーは前後に分割して開く。

▲補助シート

YF-19に同乗したヤンは、後部コクピットから地球への突入プランを指示し、シャロンを止める手段を探るなど、イサムの活躍を支える働きをした。

▲後席射出後
後部シートを脱出機構で射出したのちは、外れた後部キャノピー部分がシャッターで閉じる。

▶射出シート
シートの構造は前後とも同じで、操縦桿付きのアームレストやフットペダルごと射出される。

変形シークエンス(ファイター形態 ➡ ガウォーク形態)

YF-19の可変機構は、その前身である可変戦闘機VF-11のシステムをベースとしつつ、前進翼など機体構造の変化に沿ったリニューアルが施されている。ファイター形態から腕部、脚部パーツが展開することで完了するガウォーク形態への変形も簡略化・効率化が図られており、VF-11と比較すると、変形にかかる時間が約20%短縮された。これにより、交戦中での形態変更がより容易となり、戦法の幅を拡げることに成功している。

1 変形のための減速

A 急速に機体を引き起こす
B 減速のための噴射

変形を行う際には、ファイター形態では底部に折り畳まれている脚部を展開させる。その後、足首に設置されたスラスターを逆噴射して機体を減速させ、同時に機体を引き起こす。これにより、後方ブロックの変形が可能となる。

2 後方ブロック変形

A 後方ブロック30度程度上方へ
B かかとパーツ展開

後方ブロックのシールド裏に格納されている腕部パーツを展開するため、肩部のジョイントパーツを後方ブロックごと上方へ傾ける。一方で足裏のかかとパーツを展開し、二足歩行が可能な状態に移行する。

3 腕部変形

A 両肩部、腕部展開する

2基の腕部パーツを、肩関節と胴体部のジョイントを基点にして左右に展開する(この際、シールドは左腕部に付随)。ここで肘関節、マニピュレーターが可動できる状態となる。ガウォーク形態では主翼、機首が変形することはない。

4 ガウォークモード

A ガンポッドを保持 B 腕下ろす

ガンポッドほか、各種武装をマニピュレーターで保持し、ファイターからガウォークへの変形が完了する。変形に要する時間は1秒に満たず、その間に敵襲を受けるリスクは極めて少ないものとなった。ファイターへの変形も同様に短時間で行える。

変形シークエンス(ファイター形態 ➡ バトロイド形態)

ファイターからバトロイド形態への移行には、腕部と脚部の変形のみならず、主翼、機首、腰部、頭部など各主要パーツの変形も必要となる。その分、可変システムも複雑化し、パーツ単位でひねりや回転を入れざるを得なかった。だが、新星インダストリー社による全面的なシステムの見直しが図られたことにより、変形にかかる所要時間はファイターからガウォーク形態と同様、VF-11と比較して約20%短縮されている。

1 変形のための減速

A 急速に機体を引き起こす
B 減速のための噴射

ファイターモードから折り畳まれた脚部を引き起こし、スラスターを逆噴射して減速する。ここまでの流れは、ガウォークへの変形と同様である。

2 機首/脚部変形

◎ 腰部機構詳細

腰部の可変部を拡大した図。胴体底部から腰パーツが露出する。一方、後方ブロックは、背骨パーツを軸にして起き上がり、コクピットのキャノピー部の上にかぶさる。

A 起き上がった後方ブロックがキャノピーをまたいでかぶさる
B 機首折る
C 腰パーツ起こす
D 機首下部パーツ折れる
E 翼カバー前にひねる
F 翼後方へ可変

減速を終えると、腰パーツが露出し、脚部が股関節まで完全に展開される。この際、脚部に付随した主翼パーツは折り畳まれる。また、機首は先端が分離して腰部へと移行する一方で、後方ブロックが持ち上がり、胸部・背部を形成する。

3 肩部/脚部変形

首カバー

◎ 腕部/背部機構詳細

腕部、背部機構を後方から捉えた詳細図。背骨パーツが「支柱」となってファイター時の胴体が上下に分離、人型が形成されるシステムである。

背骨パーツ
腰パーツ

A 機首パーツに胸部がかぶさる
B カナード翼畳む
C 肩、腕、左右に展開
D 頭部起きる

後方ブロックがコクピットを覆って胸部、背部を形成すると、次にガウォークへの変形時と同様に肩部が展開し、腕部が露出する。同時に、ファイター時の胴体中央から頭部パーツが起き上がる。

4 頭部変形/バトロイドモード

◎ 頭部機構詳細

カバーを開き、内部に格納された頭部が起き上がった状態。この後、アンテナの向きを調節しながら、頭部自体も180度回転させる。

A 肩部水平にひねる
B 腕下ろす
C 頭部起き上がってから回転
D 手首が出てガンポッドをつかむ

頭部を回転させると同時に肩部にひねりを加えることでバトロイド形態への変形が完了する。バトロイドからファイターへの変形も、同様の手順をさかのぼることで可能となっている。

バトルスーツ

はぐれゼントラーディの駆る戦闘用パワードスーツ

VF-11Bサンダーボルトとの戦闘では、あっという間に駆逐された。バトルスーツの中には、銃剣によって貫かれた機体もあった。

機体解説

バトルスーツは、クァドラン・ローやヌージャデル・ガーなどに代表される戦闘倍力服の一種である。辺境宇宙に残存していたはぐれゼントラーディたちの搭乗機として確認されているが、銀河帝国分裂戦争時より使用されているものか、もしくは移民惑星の反乱時などに自主開発されたものかは定かでない。そのスペックも不明だが、VF-11Bとの戦闘から推察する限り、特出した性能はないと考えられる。

兵士の身体能力を飛躍的に向上させる戦闘倍力服。第一次星間大戦後も、辺境宇宙で戦いを続けるゼントラーディ兵たちが使用していた。

データ

所属▶なし
全高▶約20m
全備質量▶調査中
エンジン▶調査中
推力▶調査中
最大速度▶調査中
標準武装▶調査中

サイズ比較

バトルスーツ
VF-1J
ヒト

開発系譜図

▶ バトルスーツ

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶バトルスーツ

運用記録

バトルスーツは、はぐれゼントラーディによって運用されており、2040年、辺境宙域のアストロイドベルトをパトロール中の統合宇宙軍部隊が遭遇している。この時、ほぼ小隊同士の小さな戦闘であったが、イサム・ダイソン中尉の操縦する当時の統合軍主力戦闘機VF-11Bを前にバトルスーツは歯が立たず、全滅させられている。第一次星間大戦後、はぐれゼントラーディによる抵抗や反乱は各所で起こっており、この戦闘もそのひとつであった。

VF-11B サンダーボルトとの戦闘では、相手の背後を取る機体もあるなど、イサム機以外の統合軍機とは互角の戦いを見せていた。

格闘戦においては、バトロイド形態のVF-11Bに対してマウントポジションを取るなど、一旦は優勢となったものの、最終的には撃破された。

構造

その構造は、第一次星間大戦時にゼントラーディ軍の戦力として活躍したバトルスーツと大差はなく、全体的なシルエットはヌージャデル・ガー、武装はクァドラン・ローに近いものがある。腰部、脚部にスラスターを装備、機動力を支える。

▲飛行時
ゼントラーディの兵器は、汎用性が高いものが多く、クァドラン・ロー同様に、おそらく大気圏内の重力下においても飛行可能であったと推測される。

▶背面
背中のバックパック、膝裏や股下などにもスラスターを搭載。スラスターの数から、ヌージャデル・ガー以上の機動力を誇る可能性がある。

武装

胸部のメインガン、腕部のアームガン、そして背部と胸部に搭載された近距離狙撃ミサイルが、バトルスーツの主な武装となっている。辺境宙域で繰り広げられた対VF-11B戦では、機体各所に設置されたこれらの武装をその特性に応じて使い分け、戦いを進めている。

VF-11B サンダーボルトを追撃するバトルスーツの大量のミサイルだったが、その機動力を前に全弾回避されてしまう。

ミサイルポッド

クァドラン・ローの背部に装備されていたものを彷彿とさせるバトルスーツのミサイルポッド。かなりの量のミサイルを装弾可能と推測できる。

バトルスーツが放つミサイルは、追尾システムを装備。クァドラン・ローに装備されたものと同様の近接用超小型高機動ミサイルである可能性がある。

アームガン

◀排莢
実弾発射後、排莢口より排莢される。そのサイズから実弾の大きさが伺い知れる。

アームガンはあくまでも副砲であり、牽制用などに使用された。

左右の腕に1門ずつアームガンを装備。アームガンは実弾兵器であり、胸部の主砲に対して、副砲として使用される。腕部の大きさから、総弾数は数発程度であろう。

メインガン／近距離狙撃ミサイル

胸部には、メインガン3門と近距離狙撃ミサイルを装備。近距離狙撃ミサイルは、ミサイルポッドのもの同様に追尾能力を備える。

スターラーホエール

STELLAR WHALE

エデンの港湾部に着岸した際には、全長約700mの船体をクレーン型のパーツを用いて固定していた。

リゾート惑星と地球とを結ぶ 観光用の宇宙豪華客船

艦体解説

地球と移民星を繋ぐ連絡船の運航は、西暦2020年代から開始されたと言われている。移住星の開発が進み、住環境が安定した西暦2030年代になると、観光船の運航も盛んとなった。スターラーホエールも、移民星との連絡船として運用された宇宙豪華客船である。

スターラーホエールは、地球から半径100光年以内程度の惑星までの航行に対応する艦で、フォールド航行システムを有する。内部にレストランやショッピングモールを備えており、快適な船旅を提供することができた。

宇宙空間を航行するスターラーホエール。地球からはフォールド航行を3度行い、約3〜4日程度でエデンに到着する。

エデンの港湾部から発進したスターラーホエールは、底部のスラスターを用いて浮上し、大気圏離脱に向けてさらに加速した。

データ

全長▶約755m
全高▶約116m
全幅▶約149m
空虚重量▶約22000t
主反応炉▶新中州/ロイス　RD/2020A×8
主駆動系▶ゼネラル・ギャラクシー　重力制御推進メガクラスターGG-10PL×16
フォールド・エンジン▶新中州/コンチネンタル　FS-L-D22×8
補助推進系▶新中州/P&W/ロイスFF-2001P(FF-2001熱核タービンエンジンの民生用デチューン仕様)×32
乗組員定員▶300名
乗客定員▶3500名

サイズ比較

SDF-1
スターラーホエール

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶スターラーホエール

運用記録

30日〜60日程度の無寄港航行が可能なスターラーホエールは、西暦2040年代に観光地として人気の高かった惑星エデンと地球を繋ぐ定期連絡・観光船のひとつである。ヴァーチャル・アイドル「シャロン・アップル」のプロデューサーであったミュン・ファン・ローンが、シャロンのコンサートが開かれた惑星エデンを離れ、地球に向かう際に使用している。

惑星エデンの港湾部から離水するスターラーホエール。大気圏内外での運用が可能で、発進は水上からも行える構造であった。

スターラーホエールの客室内。3列シートながら座席自体のスペースは広々としている。ミュンは窓側の座席に座っていた。

▶マスト・アンテナ
船体上部に設置されていたマスト・アンテナ類。フォールド航行・通常航行を管理するのに欠かせない機器である。

構造

スターラーホエールは、軍用艦とは異なり、観光客の安全と快適性を最優先した設計となっている。そのため、開発元の新中州重工以外にも、洋上豪華客船の設計を手がけるメイヤー社、シーメンス社の技術者が建造に協力していた。

▼上面

▲曲線を多用したなだらかなボディが特徴。フォールド時の不快な感覚を和らげるため、船体の強度が高められていた。

▲側面
船首からマスト、アンテナ部にかけてが客室・居住区となっている。内部には乗組員、乗客、店舗従業員を含めて最大で4500人程度が乗船できる。

▶ドーム
船体上部のドームなど透明部には、移民母艦などの透明天蓋にも使われている特殊合金「ハーキュライト」が使われていた。

◀底面
底部にはスラスターノズルが備えられており、発進時に青白く発光する構造となっていた。

客室内部

スターラーホエールの客室。シートには非常用の生命維持装置が組み込まれている。

客室外観

客室は複数階層に分かれている。また、多数のガラス窓が設置されており、景観を楽しむことができる。

関連事項

EXTRA REPORT

マクロス・シティヘリ

ミュンなど、「シャロン・アップル」の主要関係者をマクロスに輸送したヘリコプター。テールローターを持たないタイプ(ノーター式)である。

▲内部

ヘリ内のスペースは狭く、操縦席と副操縦席を合わせて最大6名までしか搭乗できなかった。

▶側面
ヘリの外観とプロペラ。ノーター式を採用したことで騒音が軽減し、パイロットの負担も軽くなっている。

ミュンは前方の座席に乗り、マクロスへと移送された。

▶後部
カウンターノズルが設置された後方部には、垂直尾翼とその補助翼、ランディングギアが備えられている。

▼正面

▼プロペラ基部

Illustration by Hidetaka Tenjin

YF-21

脳波による機体統御を可能にしたゼネラル・ギャラクシー社のAVF開発コンペ参加機

●主要パイロット

ガルド・ゴア・ボーマン

●開発系譜図

VF-11 ▶ YF-21 ▶ VF-22

●サイズ比較

VF-1J

YF-21

機体解説

統合軍の次期全領域戦闘機（AVF=Advanced Variable Fighter）開発計画「スーパーノヴァ計画」のコンペティションに、ゼネラル・ギャラクシー社が送り出した試作機。OTMを積極的に取り入れるとともに、ゼントラーディ系の技術である、パイロットの脳波による完全制御を可能とする革新的なBDI（Brain Direct Image）システムを搭載し、まさに次世代の可変戦闘機と呼ぶに相応しい機体だった。同機の開発計画はアルガス・セルザー機体設計部長が中心となって進められ、運用時には設計主任であるガルド・ゴア・ボーマンがテストパイロットを務めた。ちなみに両名はともにゼントラーディ人（後者は地球人とのハーフ）である。

●データ　※データはファイター形態時のもの

所属▶統合軍
全長▶19.62m
全高▶4.04m
全幅▶15.36m
空虚重量▶9.55t
エンジン▶新中州重工／P&W/ロイス FF-2450B熱核タービン
推力▶65,200kg×2（宇宙空間瞬間最大）／41,200kg×2（大気圏内瞬間最大）
最大速度▶M5.06+（高度10,000m）／M21+（高度30,000m以上）
標準武装▶エリコーンAAB-7.5 超小型対空レーザー砲塔×1／マウラーREB-22 半固定ビーム砲×2／ハワードPBS-03F 戦闘機搭載用ピンポイント・バリア・システム×1／ビフォーズBML-02S 全領域マイクロミサイル速射ランチャー×4／ハワード・ゼネラルGV17L カートレス・ガトリング・ガンポッド×2

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶YF-21

運用記録

コンペティションの舞台、惑星エデンのニューエドワーズ基地に配備され、ガルドを中心としたゼネラル・ギャラクシー社の開発チームにより運用されたYF-21。BDIシステムによる「パイロットと機体の一体化」という発想において既存機種との明確な差別化が図られたが、同システムは極めてデリケートであり、精神のフィードバックに失敗した際には、機体制御が失われることさえあった。なお、BDIシステムの問題点や生産コストの高さなどの欠点を指摘されコンペには敗れた同機だが、性能自体は高く評価され、2042年に制式化。特殊作戦機VF-22として少数が配備された。

惑星エデンのニューエドワーズ基地において性能評価試験が行われ、BDIシステムによる機体制御の驚異的な威力を実証してみせた。

無断出撃したYF-19を追撃し、空中戦を展開。さらにはシャロン・アップル事件にも遭遇し、暴走したゴーストX9と交戦している。

標準装備

エリコーンAAB-7・5 超小型対空レーザー砲塔

固定武装として、バトロイドの頭頂部にあたる部位にエリコーンAAB-7・5 超小型対空レーザー砲塔を1門装備している。本体の接続部が可動して射角を変更でき、ファイターおよびガウォーク形態時には後方用対空レーザー砲として機能する。主に牽制に用いられた。

ハワード・ゼネラルGV17L カートレス・ガトリング・ガンポッド

携行武装のハワード・ゼネラルGV17L カートレス・ガトリング・ガンポッドは、機体下面——バトロイド時腰部パネルのハードポイントに接続される。銃身後部は射撃時のガス排出口になっている。2基装備。

コクピット

パイロットは身体をシートに固定して精神集中を行い、機体をコントロールする。火器管制を含めた操縦のすべてをBDIシステムによる脳波制御で行うため、操縦桿やキャノピーは緊急用のものでしかない。独特の形状をしたヘルメットはBDIシステムの端末である脳波感知システムを兼ねる。

◀脳波感知システム

ファイターモード

ファイター形態時の特徴は、OTMを応用した新式複合素材による可変主翼にある。これはパイロットの意思をフィードバックして翼断面形状や翼面積を変化させられる画期的なもので、機動性の向上に大きく貢献している。ただし、この主翼構造は非常に複雑で量産に適さず、生産コストも高くなるという欠点があった。こうした構造はBDIシステムとあわせてYF-21の高性能の根幹を成すと同時に、採用競争でYF-19の後塵を拝する一因にもなったと言える。

パイロットのイメージにあわせて自由自在に形状を変える主翼によって、YF-21は従来機を凌駕する精妙な高機動を可能としていた。

▶機首には上下2、左右各2、計6基のマルチモードセンサーを備える。機体上面のひし形ハッチはマイクロミサイルランチャーの発射口で、尾翼の付け根には、ビームガンの砲口が露出している。

▼機体下面を覆うパネルはハードポイントとなっており、ガンポッドやFASTパックを装着できる。なお、機首下面の四方に見える穴は高機動バーニアのノズルである。

◀3次元可変ベクタードノズルによって推力方向を様々に変更できる。なお、主翼は高速時に下方に角度を変え、尾翼は内側へ折り畳まれる。

ガウォークモード

従来のVFは変形機構の効率化などの観点から、主推進機関をバトロイド形態の脚部に配したものがほとんどだった。しかし、YF-21はエンジンブロックと脚部を分離した設計が採用され、ガウォーク形態の構造も既存のVFとは大きく異なっている。ただし、ホバリングによる地表の高速移動というガウォークの基本コンセプトを外れるものではなく、性能の差こそあれ本機のガウォーク形態の機能も従来機とほとんど変わらない。

YF-21のガウォーク形態の性能は、YF-19とのトライアルにおいても高く評価された。旧来の概念に囚われない斬新な設計が、確実な成果として実を結んでいたのである。

地球におけるYF-19との戦闘においても、ガウォークの運用が確認されている。入り組んだ市街地での高速戦闘は、その真価が発揮されたケースだったと言える。

▼ガウォーク形態ではエンジンブロックがバトロイド時と同じ位置まで前進する。尾翼は変形時に腕部に付随してシールドとなる。

▲エンジンと脚部が独立しているため、ガウォーク形態で脚部を展開してもエンジンブロックは水平位置を維持したままとなる。そのため、フォルムも従来のVFとは大きく異なる。

▼エンジンブロック下面のシャッター状の部分がホバリング用のノズルで、メインノズルの偏向パネルを閉じることで推力を下面ノズルに回す設計となっている。

バトロイドモード

YF-21のバトロイド形態はゼントラーディ軍のバトルスーツ、クァドラン・ローをイメージさせる外観が特徴で、本機にゼントラーディの技術が導入されていることを如実に示している。事実、バトロイド時の姿勢制御には、クァドラン・ローのキメリコラ特殊イナーシャ=ベクトル・コントロール・システムの改良型が用いられていた。また、独特の変形機構も高性能を実現する一因となっており、模擬戦やYF-19との格闘戦において優れたポテンシャルを発揮。バトルスーツから受け継いだ設計の実用性を証明していた。

バトロイド形態の格闘戦性能は特筆すべきもので、機体強度にも優れる。ビルを突き抜けて奇襲を行うという規格外の運用にも耐える性能を示した。

ピンポイント・バリアはマニピュレーター部に展開することも可能で、その状態で敵機を殴打する白兵戦も想定されていた(YF-19も同様の機能を有している)。

バトロイド形態での空中戦も可能だったが、評価試験においてはBDIシステムの不調によるものと見られる事故を起こし、墜落寸前イサム・ダイソンが操縦するVF-11に救助されている。

▼バトロイド形態の背部にメインノズルが位置するのが特徴。変形時にはインテークと補助キャノピーはカバーが閉じ、主翼は背部ユニットの内側に折り畳まれる構造となっている。

▲頭部ユニットの後部には複合センサーを装備。また、足裏にはガウォーク形態でも機能する補助VTOLノズルを備えている。

◀腕部シールドはピンポイント・バリアの併用を前提としている。エンジンの出力の制約により、バリアはバトロイド形態でしか運用できない。

Illustration by Hidetaka Tenjin

追加装備が生み出すさらなる機動性

機体解説

YF-21はスーパー・ノヴァ計画においてゼネラル・ギャラクシー社が提出した試作機だが、その追加装備であるFASTパックやフォールド・ブースターは、コンペティターである新星インダストリーのYF-19と類似している。ここではこれらの追加装備に加え、本機ならではのリミッター解除モードや高速戦闘時の形態について解説する。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶統合軍
全長▶19.62m
全高▶4.04m
全幅▶15.36m
空虚重量▶調査中
エンジン▶新中州重工／P&W/ロイス FF-2450B熱核タービン
推力▶65,200kg×2（宇宙空間瞬間最大）／41,200kg×2（大気圏内瞬間最大）
最大速度▶M5.06+（高度10,000m）／M21+（高度30,000m以上）
標準武装▶エリコーンAAB-7.5 超小型対空レーザー砲塔×1／マウラーREB-22 半固定ビーム砲×2／ハワードPBS-03F 戦闘機搭載用ピンポイント・バリアーシステム×1／ビフォーズBML-02S 全領域マイクロミサイル速射ランチャー×4／ハワード・ゼネラルGV17L カートレス・ガトリング・ガンポッド×2

サイズ比較

VF-1J
YF-21

主要パイロット

ガルド・ゴア・ボーマン

YF-21

FASTパック装備

YF-21は両腕部と腰部パネル（ファイター形態時ではそれぞれ尾翼下方と機体下面に位置）に計4基のハードポイントを有し、それぞれに4,000kgまでのオプションを装備可能となっている。このハードポイントはウェポンステーションとしての機能と追加ブースターの装着を想定しており、トライアルではFASTパックシステムと呼ばれる専用オプションが準備されていた。

外装オプションによる性能強化というコンセプトはVFが誕生した当初から存在しており、独創的なアイデアではない。ただし、このFASTパックはYF-21の特異性に即した設計がなされ、それ以前の機種のスーパーパーツとは異なる点も多い。中でも目を引くのは、装着時でもフォルムがほとんど変化しないほどの小型化であろう。ステルス性を重視する本機にとって、（アクティブステルス性能を有するとはいえ）追加装備の大型化は好ましいものではなく、密着化、小型化が図られたのである。

◀▼FASTパック装着時のファイター形態。上方からは、後部ハードポイントに装着されたモジュールの一部しか見えず、全体的なフォルムはほとんど変化していない。

▼機体下面を覆うFASTパックは整流カバーを兼ねる。側部にはマイクロミサイルランチャーを2基ずつ（計4基）を備える。

▲ガンポッドはFASTパックに半ば埋め込まれた状態で装備される。装着位置はファストパック未装備時とほとんど同じである。

◀バトロイド形態への変形時、後部側面のパーツは尾翼に付随した状態で下腕部に移動する。また、機体下面に装着されたパーツはそのまま腰部パネルとして機能する。

※上図は腕部を取り外した状態。

無断で出撃したYF-19を追撃する際に装備された。同機とのドッグファイトで一部のパーツに被弾したが、切り離して誘爆を防いでいる。

フォールド・ブースター装着時

統合軍が提示した次期全領域戦闘機（AVF）の要求仕様の一項目に、単独でのフォールド実現がある。無論、VF単体でその性能を満たすことは不可能であり、フォールド自体は外装の小型フォールド・ブースターによって行われる。ただし、長距離フォールドを可能とする処理能力と航行に耐えうる耐久性を備える点は、従来のVFから飛躍的に進歩したAVFとしての特徴と言える。なお、小型フォールド・ブースターはYF-19と同じ新中州/オーテック製のFBF-1000で、背部の特殊装備用ハードポイントに装着される。競合機と同じブースターが用いられている理由は、オプションとしての汎用性を鑑みた結果であろう。

▲▶フォールド・ブースターはパイロンを介して機体上面のハードポイント（エンジンナセル間）に装着され、フォールド完了後は投棄する。

フォールド・ブースターを装備したYF-19を追跡できるのは、同等の性能を有するYF-21のみであり、本機にもブースターの使用が許可された。

リミッター解除モード

YF-21の特徴のひとつとして、極端なまでに機動性能に偏重した設計思想が挙げられる。それは、AVFという新分野に、ゼネラル・ギャラクシー社が冒険心を以て挑んだ証左であり、BDIシステムやOTM応用の可変翼に技術的な結実を見ている。そして、機動性偏重の極みとも言えるのが、リミッター解除モードだった。

従来のVFがバトロイド形態の脚部にメインエンジンを搭載しているのに対し、YF-21は胴体部にエンジンブロックを配置しており、脚部は独立している。つまり、YF-21のファイター形態において、脚部は腕部とともにデッドウェイトとなる。その不要部位を排除して軽量化し、機体の限界性能を引き出す機能がリミッター解除モードである。このモードによって、本機は他のVFをはるかに凌駕する高機動戦闘能力を発揮し得た。しかし、それは人体の限界を超えるGをパイロットに強いる危うさを伴っていたのである。

▲▶腕部と脚部を排除するYF-21

シャロン・アップル事件の際、暴走した無人機、ゴーストX9に、この形態で体当たりをかけ撃墜したが、パイロットのガルドは、強烈なGにより死亡している。

▼▶肩から先の腕部全体が切り離され、インテーク側面の連結部は整流カバーが閉じられる。また、腕部に付随するV字尾翼も同時に投棄される。

▼脚部が排除された機体下面の状態からは、大幅な軽量化がなされていることが窺える。また、露出したガウォーク時のホバリング用ノズルは機動制御に用いられたと考えられる。

高速飛行時のYF-21

並外れた機動性を得られるリミッター解除モードだが、パイロットを死に至らしめる危険がある以上、安易に使えるものではない。だが、それを抜きにしてもYF-21は従来のVFを上回る機動性と加速性能を有していた。その一助となったのが、OTM理論を応用した新式複合素材による可変翼構造である。その新技術によって飛行状態に応じて主翼の断面形状や面積を自由に変更する機能を得ていた本機は、可変翼にパイロットの意識をフィードバックし、その時々に最適の形状を選択することで、優れた飛行性能を実現していたのである。

▼▶高速飛行時には主翼を下方に折り、V字尾翼を胴体側に倒す。主翼の下反角を大きく取って復元性を低下させる（安定性を落とす）ことで、高速域での機動性を向上させる狙いがあったようだ。

評価試験ではミサイルの雨をすり抜ける卓越した機動性を披露。相対速度があまりに速すぎたために、近接信管が作動しないほどであった。

変形シークエンス(ファイター形態➡ガウォーク形態)

BDI(Brain Direct Image)システムを搭載し、脳波による完全制御を目指した試作機YF-21は、そのフォルムのみならず、変形機構も斬新なものとなっている。ファイター形態からガウォーク形態への変形では、底部全面を覆うパネル内から脚部が展開する構造や、ガウォーク形態への変形時、エンジンポッドの前進に合わせてVTOLノズルがスライドしつつ展開するメカニズムなど、他の可変戦闘機には見られない機構を有している。

◀▲YF-21のファイター形態底部。脚部が底部パネルで完全に格納されているため、フラットなフォルムとなっているのが特徴である。

1 脚部の変形

A 下面の脚部カバー左右に開く

脚部がももから90度内側にひねって収納されている

2 脚部、腕部の変形

A 腕部は1段下がって外へ回る
B 脚部が下方へ移動
C 90度ひねって収納されていた脚部が前を向く
D 足首部分が延伸する

3 脚部、腕部の変形

▼腕部

腕部回転の前は、肩パーツは主翼の下面に隠れている

A 腕部が前に回る
B 肩部先端から手部とビームの銃口が延伸する
C 脚部の膝関節が曲がる

4 エンジンポッドの可動

VTOLノズル/エンジンポッド

A エンジンポッドが前進
B それに伴いVTOLノズルがスライドしつつ展開

腕部を下ろしてガウォーク形態となる。エンジンブロック下面のVTOLノズルに推力を回すことで、ホバリングを行うことが可能となっている。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶YF-21

変形シークエンス(ガウォーク形態➡バトロイド形態)

本機のガウォーク形態からバトロイド形態への変形では、キャノピー部分と主翼・エンジンポッド部分が分割される。前者が胸部と頭部を、後者が背部を構成することで、バトロイド形態へと変形する。また、バトロイド形態での運動性を保つため、可変用アクチュエーターアームが2基使用されている。主翼が背部内側に折り畳まれたそのフォルムはスタイリッシュなもので、ゼントラーディ軍が開発したバトルスーツ、クァドラン・ローを彷彿とさせる外観となっている。

▼YF-21のガウォーク形態は、エンジンポッドと脚部が独立しており、機体上部が後方に長く伸びているのが特徴である。

1 各部の変形

A 機首部分が起き上がる
B 腰部と脚部が下方に移動
C 機体下面のカバー(部分)が開き、コクピット下とジョイントする

胸部と頭部の分割部分
胸部の回転部分

2 脚部の変形

A 背中のブロックが約90度後方に倒れる
B 主翼は180度折れ曲がり、内側に収納される
C 頭部、後ろに倒れる
D インテークカバー閉じる
E キャノピーカバー閉じる

可変用アクチュエーターアーム
腰の回転部分

▶腰部とエアインテーク部を繋ぐ可変用アクチュエーターアームの存在により、バトロイド形態での運動性が保たれている。

関連事項

EXTRA REPORT

緊急用マニュアル切換レバー

▼コクピット

コクピット正面に備るコンソール部のメインディスプレイ下に、緊急用のマニュアル切換レバー(部分)が設置されている。

BDIシステムを搭載し、脳波でのコントロールが可能なYF-21だが、緊急用としてマニュアル切換レバーが設置されている。パイロットのガルド・ゴア・ボーマンは、テスト飛行時に一度レバーを使おうとしている。

▲▶カバーを開くと、内部に緊急レバーが設置されている。これを操作することでコントロールがマニュアルへと切り替わる仕組みだった。

レバー切り替えシークエンス

1 手を近づけると自動的にカバーが開く
2 ロックを親指ではね起こし、起動状態に
3 レバーを引くと操作がマニュアルへ
4 レバーを離すと、カバーが自動的に閉まる

惑星エデンの乗り物

当時の最新技術が導入されたエデンの一般車両群

▶イサムのバイク

●主要使用者
イサム・ダイソン
ガルド・ゴア・ボーマン

YF-19のテストを行っていた統合軍のパイロット、イサム・ダイソンが使用していた2人乗りの大型バイク。

▶ガルドのスポーツカー

YF-21の開発主任・テストパイロットを務めたガルド・ゴア・ボーマンが所有する、2人乗りのスポーツカー。

機体解説

西暦2013年11月に発見された惑星エデンは、人類に適した生活環境を持つ移民星であった。その居住性の良さから、地球統合軍の重要な拠点となった一方で、都市開発も迅速に進み、西暦2040年には、観光スポットとして高い知名度を誇っていたのである。惑星内の交通網も高度に整備されており、居住者や観光客がストレスなく過ごせるように整備されていた。バイクや自動車も、住民の交通手段として不可欠な「足」であり、用途に合わせて多数の車両が惑星内を走行している。また、スピードや制御性にこだわったスポーツカーや、派手な装飾が施されたリムジンなども使われており、個人の嗜好や権威を示す文化的側面も持っていた。

Mechanic Sheet

メカニックシート

惑星エデンの乗り物

運用記録

イサムのバイク、ガルドのスポーツカーは、どちらもプライベート車で、エデンで一般に売り出されていた既製品だと思われる。2人の主な移動手段として使われ、イサムは統合軍の同僚であるルーシー・マクミランをバイクでドライブに連れ出し、ガルドは想いを寄せるミュン・ファン・ローンに会うため、スポーツカーを走らせた。また、病院のバイクは、試作機のテストで重傷を負い入院していたイサムが、病院から抜け出す際に勝手に持ち出したものである。そのほか、リムジンは、ミュンとシャロン・アップルをライブ会場まで乗せたVIP専用車だった。

エデンの街を疾走する乗用車の数々。この時代の車輌は、車輪がなく、リムに駆動機関を搭載したリムドライブ方式がスタンダードになっていた。

エデン住民の足として、バスやタクシーなども見られる。写真は一般的なバスで、車体側面にはライブ間近のシャロン・アップルの広告が入れられていた。

▶病院のバイク

試作機のテストで重傷を負ったイサムが、入院先の軍立病院から持ち出したバイク。シート後方にバッグがあり、救命機器などが積み込まれていたと見られる。イサムとガルドの喧嘩に巻き込まれ、ガルドに車体を■みつけられている。

▼リムジン

ミュンとシャロン・アップルを、ライブ会場まで輸送したリムジン。VIPの輸送に使われる車輌と見られ、居住性は高いようだ。車輌は細長いフォルムとなっているが、タイヤは4輪のみで、いずれもリムドライブ式となっている。

▶イサムのバイク

◀▼イサムの2人乗り大型バイクは超伝導モーターを用いたタイプで、燃費効率や機動性・加速性に優れていた。

▼ガルドのスポーツカー

◀ガルドのスポーツカーは、屋根のないオープンカータイプとなっている。リアタイヤがフロントタイヤよりもかなり大きいのが特徴。

▼速度を最優先したスポーツタイプであるため、運転者のスペースは必要最低限のもので、居住性はそれほど高くない。

▲車体のフロント部にはエアロパーツを備えるなど、スピードを重視したセッティングが施されていた。

▼▶病院のバイクであることを示すため、赤十字がフロント、リア、側面に入れられた。

エンジン下に取り付けられたスタンド。小型だが、重い本体を支える。

▼イサムのバイクと同様、リムドライブ方式が採用されている。

EXTRA REPORT

関連事項

ウルトラ・ライトプレーン

ウルトラ・ライトプレーンは、ハイスクール時代のガルドが製作した軽飛行機である。プロペラとウイングで浮力を得る人力機で、ガルドの同級生だったイサムがパイロットとなり、飛行実験を行っていた。

イサムとガルドが自転車を漕いで加速し揚力を発生させ、飛行に成功した。

ガルドが製作した軽飛行機のひとつ。エデンに多数暮らす生物、■鳥（サウロ・バード）を模した機首部が特徴的であった。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-11B

VF-1の後を継ぐ 主力可変戦闘機の傑作

機体解説

VF-1バルキリー以降の可変戦闘機(VF)は、運用環境を限定した機体がほとんどで、多目的戦闘機と言えるほどの完成度を持つ機体は少なかった。その壁を打ち破りVF-1の正統後継機とも言うべき存在となった機体が、このVF-11サンダーボルトである。本機は、火力や操縦性、整備性などのあらゆる点に優れ、高い総合性能を示すと同時に大気圏内外を問わない汎用性も備えていた。また、VF-1に比べてひと回り大型で機内容積や搭載重量が大きかったことから、運用目的に応じたバリエーション展開も容易であった。中でも、初期生産型であるVF-11Aのエンジン推力を向上させたVF-11B(B型)は、統合宇宙軍の主力機として長期間運用された名機であり、VF-11シリーズを代表する機体として知られている。

U.N.SPACY

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶15.51m
全幅▶11.2m
空虚重量▶9,000kg
エンジン▶新星/P&W/ロイス FF-2025G×2
エンジン推力▶28,500kg(宇宙空間瞬間最大推力)×2
補助エンジン▶高機動バーニア・スラスター P&W HMM-5B
巡航速度▶M3.5+(標準大気圏内高度10,000m時)/M8.2+(高度30,000m以上時)
戦闘上昇限度▶42,000m(衛星軌道への進出時は大型ブースターを使用)
武装▶後方対空パルスレーザー砲×1/多目的ガンポッド・チャフ&フレアディスペンサー×2/防弾シールド×1(バトロイド時標準装備)/大気圏外用スーパーパーツ取り付け可能(マイクロミサイルランチャー×4装備)/他オプション兵器多数

サイズ比較

VF-1J
VF-11B

主要パイロット

イサム・ダイソン

開発系譜図

▶ VF-11 ▶

Mechanic Sheet

メカニックシート

VF-11B サンダーボルト

運用記録

VF-11は、治安維持等に運用されていた既存機種の老朽化を受け、新星インダストリーで開発がスタートした。試作型VFX-11の試験運用などを経て、2030年には大量生産と実戦配備が行われた。一方、本機の登場によってVF-4ライトニングⅢをはじめとする従来の主力機は第一線を退いた。また、初期生産型のA型は少数のみで、量産体制は早い段階でエンジン性能の向上と最適化などが図られたB型へと移行した。B型はVF-11系列機で最も多く生産され、2040年代には移民船団や各地の移民惑星にも配備された。

移民惑星などに配備されたほか、宇宙辺境での治安維持などにも運用され、ゼントラーディの残党と交戦した事例も報告されている。

惑星エデンにおいて実施された次期全領域戦闘機(AVF)開発計画「スーパー・ノヴァ計画」では、各種テストのサポート機として運用されることもあった。

武装

固定武装として後方対空パルスレーザー砲1門と防弾シールド1基、チャフ・フレアディスペンサー2基を備え、標準武装に多目的ガンポッド1基を装備している。これ以外にもスーパーパーツなどの各種追加装備が多数開発された。

銃剣やシールドといった白兵戦を意識した武装が特徴で、敵パワードスーツなどとの格闘戦を想定していたことがうかがえる。

▼▶30mm6連ガンポッド
多目的ガンポッドの銃身先端下部には収納式の銃剣を備える。また、銃身上部は弾倉となっており、装甲ごと交換する。

▶対空パルスレーザー砲
対空パルスレーザー砲は、ファイター形態時に機体上面に露出し、後方警戒用の武装として機能する。

コクピット

乗員は複座式のD型以外は1名で、コクピット構造も従来の単座式VFとほとんど同じである。シート正面にメインディスプレイとバックモニターが、右手側には総合システムチェックパネルが配されている。また、キャノピーは機首側がすぼまった形状で、広い視野を確保する。

バトロイド時のコクピットは背面以外がモニターパネルで囲まれる。また、ファイター時ヘッドアップディスプレイ(HUD)はキャノピー投影式を採用している。

シート右に操縦桿、左にスロットルレバーを備える。スロットルレバーはバトロイド時に起きる仕組みとなっている。

ファイターモード

ファイター形態の特徴はカナード前翼と可変主翼で、大気圏内外を問わない高い機動性と運用性を発揮した。なお、カナード前翼の採用については、最高速度が低下するため議論が紛糾したが、開発中に発生した統合政府首席補佐官拉致事件で、カナードを採用したVFX-11が救出作戦を成功させたことから、採用が決定したという経緯がある(その際のパイロットは、かのミリア・ファリーナ・ジーナスであった)。

カナード前翼により大気圏内では高い機動性を発揮し、パイロットによっては複雑な曲芸飛行も可能だった。

▲エンジンナセル側面の菱形ハッチはチャフ・フレアディスペンサーの射出口である。

▶カナード前翼は可動構造を備える。また、コクピットの左右には高機動バーニアを2基ずつ装備する。カナードの後ろ(エアインテークの上部)はセンサーとなっている。

▲主翼は大気圏内の高速飛行時には後退する。また、主翼前面にはライトが設けられている。

▶機体下面中央にはガンポッドを装着するハードポイントを設置。図はエアインテークが開いた状態で、宇宙空間では閉じられる。

◀機体上面の補助スラスター前部装甲はエアブレーキとして機能する。機体後部のエンジンノズルは2次元スラストベクタードノズルで上下に可動する。

ガウォークモード

既存機種に代わってVF-11が主力機の座を獲得した要因のひとつに、環境に左右されない高度な運用性が挙げられる。VF-4やVF-5は宇宙空間での運用に重点が置かれ、VF-5000は大気圏内での性能を重視していた。これに対し、本機は優れた汎用性を誇ったVF-1以来の多目的戦闘機として設計されており、高い水準の総合性能を有していたのである。それはガウォーク形態にも当てはまるものであった。特にガウォーク形態では腕部が展開されるため、防弾シールドが使用可能となるといった点からも本機の運用性の高さがうかがい知れる。なお、本機の設計を発展させる形で開発されたYF-19のガウォーク形態は、本機の同形態と非常に似た構造を有する。これは本機の設計がAVFの雛形となるほど優れていたという証明とも言えるだろう。

基本的には重力下での運用を想定した形態だが、小回りが利くことから、パイロットによっては宇宙空間での戦闘に用いたケースもあった。

「スーパー・ノヴァ計画」における性能評価試験の最中にYF-21がトラブルを起こして墜落しかけた際には、イサム・ダイソンが操縦する追跡機がガウォーク形態でYF-21を支え、軟着陸を試みている。

▼防弾シールドを兼ねるファイター形態上面の装甲が左腕部に付いて外れるため、ヘッドユニットが露出する。

▲腕部と脚部の展開構造はVF-1のそれに近いが、胴体部の変形システムが変更されているため全体的なフォルムは大きく異なる。

▼ガウォーク形態の下方からは、胴体内部のジョイント構造などが確認できる。

▲2基の補助スラスターはガウォーク形態においては推進装置として機能する。なお、この角度からはヘッドユニットの収納構造がわかる。

バトロイドモード

VF-11のバトロイド形態はVF-1と似たシルエットを持つが、その構造は大きく異なっている。特に胴体部と背部の補助スラスターポッドなどには、VF-1やその設計を踏襲したVF-5000などとの設計思想の違いが見受けられる。また、銃剣付きのガンポッドを標準装備としていることからもわかる通り、本機は従来のバトロイドに比べ、近接戦能力にも重点が置かれていた。本機の特徴的な性能は実戦でも裏付けられており、パイロットからも高い信頼を得ていたのである。なお、バトロイドは本機で初めて装備された防弾シールドを最も効果的に使える形態で、耐弾性も飛躍的に向上したと言える。

銃剣はパワードスーツの装甲を貫通するほどの強度を有し、白兵戦で効果を発揮した。ガンポッドと一体化している点でも運用性に優れていた。

短時間であればバトロイドでも高度を保ったまま滞空が可能である。YF-21とニアミスを起こした際には、変形して急制動をかけ衝突を免れた。

▲ヘッドユニットの形状や全体的なフォルムは、VF-1Aを連想させる。なお、カナードは収納されず胸部の装甲板となる。

▲マーキングが施されたキャノピーカバーは通常閉じられた状態だが、任意で開くことも可能となっている。

◀主翼は折り畳まれて背部内側に収納される。また、シールド裏面にはガンポッドの予備弾倉が装備される。

VF-11B サンダーボルト

大気圏外用スーパーパーツ

VF-1 バルキリーの兵器特性と戦術的役割を忠実に継承したVF-11 サンダーボルトは、オプション装備による機能拡張という設計思想も同時に受け継いだ。VF-11専用に開発されたスーパーパーツも、VF-1で着想されたFASTパック装備型バルキリー（通称スーパーバルキリー）のコンセプトを踏襲したオプションであり、大気圏外作戦能力向上を目的としている。パーツの開発はVF-11本体と同じく新星インダストリーが行い、宇宙空間で本機が運用される場合にはほとんどのケースでこのオプションが装備された。なお、スーパーパーツを装備したVF-11は、VF-1にならい「スーパーサンダーボルト」とも呼ばれた。

スーパーパーツを装備したVF-11は優れた空間機動性を発揮した。その性能はゼントラーディ残党との交戦などでも実証されている。

バトロイド形態でもスーパーパーツの機能はまったく損なわれず、ゼントラーディ軍バトルスーツを圧倒する戦闘力を実現した。

▲高機動バーニアノズル／マイクロ・ミサイルランチャー
ユニット前部にマイクロ・ミサイルランチャー（ヒューズHMMM-Mk6）が組み込まれ、上面に左右各4基の発射口を備える（点線部分）。また、先端下部とノズル付近に高機動バーニアを有する。

▲チャフ・フレア射出口／高機動バーニアノズル
脚部プロペラントユニットにも複数の高機動バーニアが配されている。中央やや後ろにはチャフ・フレアディスペンサーの射出口が位置している（点線部分）。

本機を操縦したイサム・ダイソン中尉はチャフ・フレア弾（写真の赤い光点）を駆使し、ミサイルの弾幕を回避して引き離す機動を見せた。

ファイターモード

▶機体上部に2基のブースターユニットとエンジンナセル側面にプロペラントユニットを装着する構成は、スーパーバルキリーと共通している。

▼スーパーバルキリー（VF-1）とは異なり腕部ユニットがないため、機体下面のフォルムは未装備状態とほぼ変わらない。

▲ブースターユニット（MP-SP-09）は片側2基のブーストスラスターが特徴。また、スーパーパーツ装備時にはブースターユニットに干渉する上部尾翼を収納する。

バトロイドモード

▶スーパーパーツがコンパクトなため、正面から見たバトロイドの外観は通常時と大きく変わらないが、機能は大幅に強化される。

▲スーパーパーツを装備することでバトロイド形態時の運動性も強化され、格闘戦性能が向上する。ブースターユニットの正面に見えるスリットはマイクロ・ミサイルの排気口である。

▶バトロイド時のブースターユニットは本体の補助スラスターを覆うように位置する。なお、同ユニットのマイクロ・ミサイルランチャーは任務に応じて別パックへの換装が可能。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-11B サンダーボルト

大気圏内用固体燃料ブースター

「スーパー・ノヴァ計画」においては、VF-11Bが追跡観測機などのサポートを担うことが多かった。しかし、VF-11Bはあくまで現行機の水準を逸脱するVFではなく、桁違いの性能を有する試作AVFに肩を並べることは困難だった。そこで活用されたのが、この固体燃料ロケットブースターである。この装備は速度を引き上げることのみを目的としており、戦闘機としての運動性が皆無になる代わりに爆発的な推進力が得られる。極めて偏った機体バランスになる上、燃焼時間も約5分と短いため、通常の運用には適していなかった。

▶ブースターは機体の上下に2基装備される。この時、対空レーザー砲はブースターに干渉しないように砲身を寝かせる(発射は不可能となる)。

YF-21の演習を追跡・記録するため、ロケットブースターを装備した3機のVF-11Bが随伴した。そのうちの1機にはイサムが搭乗。

イサム機はYF-21が回避した演習用ミサイルに巻き込まれたが、外れたロケットブースターが囮となったことで、ミサイルの追尾を辛くも逃れた。

◀左図は上部ロケットブースターの接続方式を示したもの。左右対の支持架で機体から浮かせるようにして固定される。

▲支持架(上部)

▲上下にブースターが設置されることで推力のバランスを取っているが、イサムは上部ブースターが外れた状態でもミサイルを回避した。

▲ノズルは円形の単純な構造で、偏向機能は有していない。直進することだけを想定した装備のため、運動性は極端に低下する。

未装備状態とは比較できないほどの大推力を発揮するが、それでもYF-21に追いつくほどの速度ではなかった。

▲下部ブースターの支持架がひとつしか見えないのは、前側の支持架が1基であるため。後ろ側の支持架は左右1対である。

◀下部ブースターはエンジンナセルのすき間に収まるように固定される。そのため、ガンポッドは装備できなくなる。

EXTRA REPORT

関連事項

無人機の運用

当時の統合軍主力として多数の機体が生産されていたVF-11 サンダーボルトには、無人機も存在する。無人化に際して機首の構造・形状に手が加えられているが、スーパーパーツを装着できるなど、その基本的な航行性能や拡張性は保たれていたようだ。ゴーストX-9の戦闘性能を測るテスト時において、スーパーパーツを装着した無人機仕様のVF-11が出撃し、標的として利用されている。

標的とわかりやすく認識させるためか、「ターゲット・ドローン」と同じく、オレンジにカラーリングされた。

操縦用のAIシステムには優秀なものが搭載されたと見られる。だが、ゴーストX-9に次々と撃破された。

▼ブースター分離の瞬間

イサム機がミサイルを回避した際、機体に過度なGがかかり、ブースターの分離を招いた。

▶VF-11B サンダーボルト

変形シークエンス(ファイター形態➡ガウォーク形態)

VF-1の後継機であるVF-11B サンダーボルトだが、その変形システムは、機体構造の変化に応じて、新たなものとなっている。ファイター形態の後部が腕部を構成する部分は変わりないが、胴体の上で肩部を回転する構造などは、本機ならではである。このスムーズな可変システムは、のちにYF-19へと受け継がれた。

1 変形のための減速

A ガンポッドを後方へスライド
B 高速飛行時は一度、エアブレーキを開いて減速

2 各部の変形

A フラップ下げる
B 前縁スラット引き込む
C 両脚を前下方に折る
D 90度回転して両肩、腕を起こす
E 尾翼を脚内へ回転収納

2+ 大気圏内外ブースター装備時の変形

A 両肩、腕部を水平回転
B 背中のブースターごと後部を折る
C 腕部セット後、後部の位置を元に戻す

回転ヒンジ

3 肩部、腕部の変形

A 起こした肩と腕を180度水平回転
B 右腕にセットされていたガンポッド、180度回転して前を向く

4 各部の変形

A 肩ブロックを90度ひねりつつ、腕部を前にセットする
B 手部が出てグリップを握る
C ガウォーク用の整流カバー出現
D 腕部を90度ひねってシールドを外に向ける

◀原型機VF-1では主翼の下に肩部がレイアウトされているのに対し、本機では主翼の前にレイアウトされている。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-11B サンダーボルト

変形シークエンス(ファイター/ガウォーク形態➡バトロイド形態➡ファイター形態)

VF-11Bは、ガウォーク、ファイターの両形態からバトロイド形態へと移行することができる。ファイターからバトロイド形態へと移行する場合、エンジン部は曲がらずにそのまま脚部を構成するシステムである。バトロイドからファイター形態へと変形する際は、ジャンプしながら機首を上に跳ね上げると同時に、頭部や胸部を後ろに倒す構造となっている。これにより、3形態すべての変形が瞬時に行えるようになっていた。

1 ガウォークからバトロイドへの変形

▲ガウォーク形態

A ガウォーク時用の整流カバー引き込む
B 腰ブロック回転
C キャノピーカバー上下から閉じる
D 主翼が折れて後方へ

1-1 ファイターからバトロイドへの変形①

▲ファイター形態

A 機首ここから折れる

A 機首が折れる
B 腰、脚ブロック回転して下へ
C 主翼と上部のポッドブロック90度下方へ折る
D 両腕部を肩から180度前方へ回転

2 バトロイド形態

A 頭部、水平回転して前を向く
B 主翼可変して畳む
C インテーク防御カバー閉じる

1-2 ファイターからバトロイドへの変形②

A 後ろを向いていた頭部が回転
B 手部が出てガンポッドのグリップ握る
C 両腕部バトロイド位置へ

3 バトロイドからファイターへの変形①

A 主翼の裏面

A 両腕部を後方に(気流に流される感じで)
B 脚部の尾翼後方へ
C 機首を前方に起こす
D キャノピーカバー開く
E 頭部を180度後ろへ

4 バトロイドからファイターへの変形②

◀ファイター形態

A 脚部二次元ノズル飛行モードへ
B 主翼開く
C 主翼、背部のポッドブロック起こす
D 腕部を収納
E 機首を前方にロック

Illustration by Hidetaka Tenjin

X-9 GHOST

新統合政府が唱える新宇宙秩序に基づき、人間が身を危険に晒す必要がある有人戦闘機に代わる戦力として、計画が進められた。

X-9はYF-19、YF-21との空戦で、機体のリミッターを外し有人機の限界を超えた機動を行ったYF-21に撃墜された。

機体解説

ゴーストX-9は、VF(可変戦闘機)などの有人機に代わる主力化を実現すべく開発された、大気圏内外両用無人戦闘機である。生身のパイロットという制限がないことを利用した驚異的な機動性と火力を有し、次期全領域可変戦闘機(AVF)をも凌駕する性能を誇った。さらに、本機はシャロン型人工知能(AI)、すなわちシャロン・アップルのデータを応用した完全自律制御型AIを搭載しており、QF-3000Eをはじめとする従来の半自律型AI搭載ゴーストとは比較にならないほどの戦闘力を発揮した。

データ

所属▶地球統合軍
全長▶調査中
全高▶調査中
空虚重量▶調査中
エンジン▶調査中
最大速度▶調査中
標準武装▶レーザー砲×5、ハイマニューバミサイル、スーパーパーツ(ブースター×2、マイクロミサイルランチャー×4)

サイズ比較

VF-1J
X-9

開発系譜図

QF-3000E ▶ X-9 ▶ AIF-7S

完全自律人工知能を搭載した進化型無人戦闘機

Mechanic Sheet メカニックシート

▶ゴーストX-9

運用記録

極秘裏に開発が進められていたゴーストX-9は、バーチャル・アイドル、シャロン・アップルに使用されたAIのデータが反映され、従来以上の判断能力を備えるに至った。その後の模擬戦闘において、期待された成績を残したX-9は、統合軍の次期主力戦闘機として制式採用が内定する。だが2040年3月、地球のマクロス・シティで開催された星間大戦終結30周年記念式典において、X-9は暴走したシャロン・アップルのAIに制御を奪われ、地球に到達していたYF-19、YF-21を襲撃し、YF-21との交戦の末に撃墜された。人工知能の暴走という事態を重く見た統合軍は、X-9の採用を見送ることとなった。

ゴメス将軍を中心とする統合軍上層部主導の下、地球で極秘に開発が進められ、テストにおいても良好な結果を収めた。

有人試作戦闘機であるYF-19、YF-21と行った戦闘では、AVFたる両機を引き離すほどの機動性を発揮している。

機体解説

ゴーストX-9は、次期主力戦闘機として開発されたこともあり、スーパーパーツなどのオプションパーツ類の運用も想定して設計がなされていた。大気圏外ではVFと同じく、武装と追加ブースターを兼ねたスーパーパーツを装備して運用される予定であった。

関連事項 EXTRA REPORT F

X-9の後継機

シャロン・アップル事件により制式採用を見送られたゴーストX-9だが、その後、自律行動を抑制した後継機AIF-7が開発され、制式採用された。AIF-7は、2050年代には機動部隊の中核を担うまでになるが、一方でパイロットの練度の低下などの影響も及ぼしている。

▶2059年時点でのAIF-7シリーズの最新鋭機、AIF-7S。製造・運用コストが低いことも各移民船団には好評である。

機体構造

機体構造は極超音速リフティングボディが特徴で、主翼面積は小さいが十分な揚力が発生する。また、パイロット保護機能を排したことで軽量化がなされ、高機動性能を限界まで発揮できた。

▼無駄を削ぎ落とした、シンプルなフォルムを持つ。コクピットなどが張り出していない分、空力的にも非常に洗練されている。

非可変機だが大気圏内外の運用能力を有し、無人機だからこそ実現できた高機動性能は、究極の戦闘機と呼ぶに相応しい水準だった。

▼機首にセンサーシステムを内蔵し、機体尾部に主翼とベントラルフィンを配している。

発進態勢に入るゴーストX-9。星間大戦終結30周年記念式典において、大々的に完成披露が行われる予定であった。

▼主翼は可動式で、宇宙空間の機体制御や大気圏内の高機動時に最適な位置へシフトする。

▲機体後部がエンジンブロックで、尾部に3基のスリット状ノズルが並んだ構造である。

スーパーパーツ装備時

ゴースト用のスーパーパーツは、機体上面に、2基の武装コンテナ兼ブースターを装備する。シャロン・アップル事件では、スーパーパーツはYF-19、YF-21に急接近するためにのみ使用され、本格的な空戦を行う前にパージされている。これは、大気圏内での空戦になったため、スーパーパーツが高速機動の妨げになるとAIが判断したものと思われる。

◀スーパーパーツのユニット側面には内蔵ミサイルランチャーの菱形ハッチが位置する。

▼スーパーパーツは機体後部の左右に2基が装着される(　部分)。スリット状の部分がブースターノズル。

YF-19、YF-21とはスーパーパーツ装備状態で接敵し、交戦中にチャフの散布と同時にパーツを切り離している。

武装

ゴーストX-9は、固定武装としてレーザー砲5基と、無数のハイマニューバミサイルを装備している。特にレーザー砲は、照準の精密さと発射速度の速さがX-9の高速機動と相性が良く、模擬戦闘で良好な成績を残す一因となった。またX-9はコクピットなどの有人用の装備を搭載する必要がない分、機体の容積は武装のペイロードに充てられており、当時のVFに比べ小型のフォルムを誇りながらも、スーパーパーツ装備のVF並の高い火力を実現していた。

機首の左右と下部に備える5基のレーザー砲は、それぞれを単独で使用できるだけでなく、集束させることも可能である。

ハイマニューバミサイル射出口

▶射出時

▲▼垂直格納型のランチャーには29発のハイマニューバミサイルを装填。発射方向は前後15度に調整できる。

4面図

スーパーパーツ装備状態のゴーストX-9の4面図。スーパーパーツはゴーストX-9と統一性を持たせたデザインで、やや偏平な形状となっている。また、装着時にはパーツ後部が機体上面と密着する。

▼側面

▶正面

◀底面

◀後方

8発全翼巨人爆撃機

FLYING WING

AVF開発計画に投入された全翼型の巨大爆撃機

全長は約70~80mで、全長が約12~13mのターゲット・ドローンを複数懸架可能である。

機体解説

地球統合軍の次期主力可変戦闘機を決定するAVF開発計画(スーパー・ノヴァ計画)は、惑星エデンを舞台に進められていた。本計画では、新星インダストリー社製のYF-19、ゼネラル・ギャラクシー社製のYF-21という2機の試作機が、実戦さながらの性能実験を繰り返し、次期主力機の座を争っていた。その性能実験に支援機として投入されたのが、8発全翼巨人爆撃機である。

8発全翼巨人爆撃機は、その名の通り、胴体や機首を持たず、翼部だけで構成された全翼機の特徴を持つ。その結果、翼下のスペースが広く採られており、ミサイルだけでなく、複数の戦闘機をも懸架できる構造となっていた。この能力を活かし、模擬戦用無人機「ターゲット・ドローン」の母艦として運用された。

本機で移送されたターゲット・ドローンは、YF-21との模擬戦に投入された。

統合軍所属の機体で、そのカラーリングはブラックとなっている。

データ

所属	▶ 地球統合軍
全長	▶ 約70~80m
重量	▶ 調査中
駆動機関	▶ 調査中
搭載機	▶ ターゲット・ドローン×4

サイズ比較

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶8発全翼巨人爆撃機

運用記録

本機は、ガルド・ゴア・ボーマンが操縦するYF-21の性能実験に参加し、模擬戦用の無人機「ターゲット・ドローン」を翼下に懸架し、試験空域まで移送した記録が残されている。懸架した戦闘機を戦闘空域に移送、分離後は、二次被害を避けるためすぐに演習空域を離脱する必要があった。

5機の8発全翼巨人爆撃機がYF-21の性能実験に投入され、模擬戦用無人機の輸送を担った。

本機の運用によって、ターゲット・ドローンが試験空域まで自力で飛行する必要がなくなった。

艦体構造

本機は、旧来からの全翼機の特徴を踏襲している。通常の戦闘機に比べて全幅が長く採られているほか、凹凸の少ない流線型のフォルムとなっていた。これにより空気抵抗を最小限に抑えることができ、大型ながらも、それなりの機動性を確保できたようである。また、戦闘機の懸架用に、4基のフックが翼下に設置されていた。

▲前方
翼部の両端が、機体後方に回り込むように折れ曲がっているのも本機の特徴。これは機体の安定性を確保するための工夫と見られる。左翼下に懸架されているのがターゲット・ドローン。

▶側面／底部
機体側面（上）と、機体底部（下）を示した図。側面や底部にも目立った凹凸がなく、すっきりとしたフォルムであるのがわかる。レーダーなどに反射する部分が少ないため、ステルス性能にも優れていたと見られる。

ターゲット・ドローン

YF-21の性能実験に投入された戦闘機が、ターゲット・ドローンである。遠隔操作が可能な無人機で、機首にビーム砲を持つほか、翼部に6基のミサイルを搭載することが可能であった。YF-21の敵弾回避能力と空戦能力を判定するため、20機の機体が投入されている。

YF-21の敵弾回避能力を確かめる手段として、新型のハイマニューバ・ミサイルを搭載して出撃、YF-21に対し射出している。

ミラード・ジョンソン司令の指示で20機のターゲット・ドローンがYF-21に迫るも、次々と撃墜された。

主翼の両端に2基、内側に上下2対のミサイルを設置することができた。機首下部にはビーム砲が備えられている。

▶ターゲット・ドローンの底部。大きく膨らんだ底部中央に、安定翼を2枚備えているのがわかる。

▶真正面から見た機体。機首にセンサーパーツを備える。

▶後方から見た機体。底部中央にスラスターパーツを備えているのがわかる。

輸送用フック

▼8発全翼巨人爆撃機との接続時。機体の胴体上部に備えたフックを立ち上げ、パイロンに引っ掛ける構造であった。

▼8発全翼巨人爆撃機との接続

8発全翼巨人爆撃機との接続を解除し、単独飛行に移行するターゲット・ドローン。機体上部のフックも収納される。

マクロス7

マクロス7船団の守護を担った、超大型ステルス攻撃宇宙空母

ピンポイント・バリアの多数展開など堅牢な防御機構を持つ。しかしゲペルニッチの放つ衝撃波には耐え切れず、バトル7はバロータ第4惑星にて大破した。

高速直進性や超長距離での主砲の照準精度は空母モードが勝る。一方で強攻型は、各部に配された推進器により、近接戦闘での機動力に優れている。

●艦長
マクシミリアン・ジーナス

●主要クルー
エキセドル・フォルモ

▲バトル7（強攻型）

機体解説

バトル7は、新マクロス級移民船7番艦「マクロス7」の戦闘区画にあたる、バトル級超大型可変万能ステルス宇宙攻撃空母である。トランスフォーメーションによって運用性の向上を果たした第一世代型マクロス艦のコンセプトを受け継ぐと同時に、都市宇宙船の機能を切り離し戦闘艦としての性能のみを追求することで、突出した戦闘力を獲得している。また、第一世代型マクロス艦よりも一回り大きなサイズでありながら、強力なアクティブステルス機能によるステルス性能も付与されている。さらには膨大な艦載機搭載能力を誇った本艦は、実戦においても優れた総合戦闘力を発揮し、移民船団の防衛戦力の要として活躍したのである。

●データ　※データは空母モード時のもの

所属▶統合軍
全長▶約1,510m（強攻型時全高1,177m）
全備質量▶約7,770,000t（空虚重量6,250,000t）
標準装備▶OTEC製艦首砲撃システム×1／OTEC・ゼネラル・ギャラクシー製ステルス隠顕式収束エネルギー砲塔多数／CIWSビフォーズ製ビーム・ファランクス多数／対惑星・対艦隊用超長射程反応弾頭／対艦・対ミサイル用高機動迎撃ミサイルシステム／艦載用ピンポイント・バリアシステム 他
艦載機▶戦闘機450機、攻撃機250機、爆撃機9機、偵察機60機、輸送機18機、連絡機12機

●サイズ比較

●開発系譜図

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶マクロス7

運用記録

バトル7は、新マクロス級移民船7番艦マクロス7を構成する戦闘艦として2038年に進宙し、第37次超長距離恒星間移民船団の中枢であるシティ7に随伴した。本艦は、船団に随伴する統合宇宙軍の指揮と、移民船団全体の航行管理を行う重要な艦でもあった。2045年にマクロス7船団がバロータ軍と遭遇すると、護衛艦隊の中心となって船団の防衛に当たるが、プロトデビルンとの最終戦闘で大破している。

対プロトデビルン戦の最終局面において、単独でバロータ第4惑星に降下し、サウンドバスター作戦によってゲペルニッチの封印を図った。

対ゲペルニッチ戦で大破し、一時はクルーの退艦を余儀なくされた。戦後は、シティ7とドッキングした状態で修復作業が進められた。

関連事項

EXTRA REPORT

武装及びガンシップとの比較

大口径エネルギービーム砲や小口径ビーム・ファランクス、大・中型対艦反応弾頭ミサイル、近接防御用ミサイルといった武装を無数に備える。それらはステルス化のため内蔵式となっている。

バトル7最大の武器はマクロス・キャノンだが、それ以外の通常武装も充実しており、高い火力を有している。

▲バトル7強攻型とガンシップの対比図。ガンシップだけでも通常の戦闘艦を超えるサイズであることがわかる。

強攻型

バトル7の強攻型(通称「BIG-M」)は、主砲を撃つために急遽考案されたSDF-1 マクロスの同形態とは異なり、設計段階から取り入れられた形態である。この形態では、内蔵された武装が全て展開され、高い近接戦闘能力が発揮される。また、ガンシップ(マクロス・キャノン)を手持ちで射撃可能となり、射角を自在に変化できるようになる。そのため、対艦隊戦などの大規模な戦闘では、主に本形態で運用された。

主に強攻型で使用されるマクロス・キャノンは、たった一発で艦隊規模の敵に大打撃を与えるほどの威力を有する、バトル7の切り札だった。

惑星ラクス軌道上の交戦では、地表降下と同時にマクロス・キャノンを発射。しかし、戦闘後は射撃姿勢のまま行動不能となった。

▼バトル7の強攻型は、第一世代型マクロス艦の同形態に比べて、より人型に近い形状となっている。空母型艦首が把握システム(手部)に変形する点も、その特徴を示している。

▶腕部は重力下でもガンシップを水平に保持することが可能。

◀両前腕部に位置する空母型時の前部甲板は、盾として用いられる。そのため、通常の複合装甲に加え、エネルギー転換装甲が使われている。

▲右肩部付け根の後方に位置するユニットは、ガンシップのホルダー。また、菱形の肩部は防御盾としても機能する。

▶ガンシップのホルダーは基部が可動し、水平位置から約100度まで角度を変更できる。その状態で発射も可能。

▶右はガンシップを背部ホルダーに装着した状態。ピンポイント・バリアを装備しており、短時間であれば全周囲バリアも展開できる。

空母モード

通常の航行形態にあたる空母型は、ステルス面構成の艦体形状が特徴である。これは本艦があまりにも大型のため、アクティブステルス機能だけではステルス化が困難だったことから、ステルス性を補うための形状である。また、同形態は2段式の飛行甲板によって、優れた艦載機展開能力を発揮した。

通常はシティ7とドッキングしたまま空母モードで運用される。戦闘時も、護衛艦隊と艦載機群で戦力が間に合う場合には、変形を行わずに空母モードのままでいるケースが多かった。

ガンシップ

バトル7の艦首砲撃システムをなすガンシップは、突撃砲艦としても単独で運用が可能。また、機能や出力は大きく制限されるが、単独でマクロス・キャノンを発射することもできる。

▲艦首マクロス・キャノンはエネルギー消費が激しく、単独では2〜3回の使用が限界である。

▲下部のグリップは折り畳み式。手持ち射撃モードではバトル7からエネルギーが供給される。

ガンシップはフォールド航行も可能な有人艦だが、実戦ではバトル7に付随するシステムとして運用されるケースがほとんどだった。

▲空母モードという名称が示す通り、艦体上面がフラットな飛行甲板となっている。また、後部甲板の左舷側にはアングルド・デッキが設けられている。

▼右舷下方から見た空母型。ステルス性を高めるために武装のほとんどは内蔵式とされ、シンプルなフォルムとなっている。

▶空母モードでは、後部甲板のスペースを空けるために、ブリッジが右舷側に寄った位置に固定される。

▲後部甲板は二重構造となっており、下部の区画は主発着場を兼ねた半与圧の整備エリアとなっている。

▶ガンシップは艦体下部中央に挟むようにしてドッキングする。ガンシップを除いた艦体構造は双胴艦に近い。

▼空母としても高い機能を有しており、戦闘機や航空機をはじめ、数百機の航空、航宙機の搭載と運用が可能である。

▲艦首に突き出るガンシップ下部は、バルバス・バウ(球状艦首)を連想させる。艦体下部中央の突起は強攻型の腰部末端。

変形

戦闘力向上のためにトランスフォーメーションを取り入れたバトル7は、第一世代型マクロス艦よりも高度な変形構造を有する。ただし、変形には時間を要するため、タイミングの見極めが重要だった。

変形機構はSDF-1マクロスから格段の進歩を遂げており、大気圏突入の最中にトランスフォーメーションを行うことも可能だった。

中央胴体／ガンシップ／脚関節／腕関節

変形シークエンス

◀空母モードから強攻型への変形の場合、まずガンシップが下方に分離し、前部甲板が中央から分離して左右に展開される。

❶トランスフォーメーション開始

❷腕部と脚部の変形

▲腕部の変形と同時に後部甲板が中央胴体と分離し、左右に展開しながら下方へ降ろされる。また、その際アングルド・デッキは畳まれ、ブリッジも中央に移動する。

❸トランスフォーメーション完了

▶ガンシップと胴体の接続ケーブルが切り離され、艦首が変形した把握システムでグリップを保持。脚部が降りて変形が完了する。

Illustration by Hidetaka Tenjin

マクロス7

機体解説

バトル7は、新マクロス級超長距離移民船団の防衛部隊の中核を担う艦にふさわしい火力、防御力、艦載機搭載量を誇る、超大型可変万能ステルス宇宙攻撃空母である。その運用の中枢となるブリッジは、かつてのSDF-1のやや手狭とも言えたブリッジから大きく様変わりしており、艦の隅々にまで指示を行き渡らせるのみならず、周囲の艦船とも密な艦隊行動が取れるキャパシティを与えられている。また、バトル7の1,500mの巨躯には複数の艦載機のカタパルトが設置されており、複数の部隊が平行して運用できたのも強みであった。なおバトル7は通常、都市船であるシティ7(全長約6km)とドッキングしており、合体時の全長は約7,770mにも達する。

▲バトル7(空母モード)

宇宙の大海原に分け入った 可変ステルス空母

バトル7 ブリッジ

新マクロス級移民船マクロス7の戦闘艦バトル7は、SDF-1 マクロス同様に変形機構を有する巨大艦であり、戦艦形態の空母モードから、主砲マクロス・キャノン発射時の人型形態である強攻型へとその姿を変える。ブリッジの配置はそれぞれの形態で異なり、空母モード時では通常艦のように甲板上の高所に位置し、強攻型ではいわゆる人の頭部にあたる位置に移動する。ただし、ブリッジ内部はどちらの形態においても形状を変えることはなく、四重構造のままである。

空母モード時は、20世紀の軍艦同様に甲板上にブリッジが配置されている。レーダーだけでなく、視認性も重視されていることがわかる。

ブリッジ構造

▲側面　側面から見たブリッジ。四重構造となっていることがわかる。

▲上方　上方からのブリッジ全景。2～3層目はサイドに広がっている。

◀▲ブリッジ全景
ブリッジは、メインブリッジを最上層に四重構造となっている。最上層からは2～3層目の状況がある程度、視認できるようになっていた。

A メインブリッジ

艦長をはじめ、オペレーターなど主要クルーはメインブリッジに、また、参謀であるエキセドルも、ゼントラーディ人サイズのまま顔を出せる構造であった。

後方から見たメインブリッジ。3つのオペレーター席は、左からサリー・S・フォード、美保美穂、キム・サンローラン(サウンドフォース出撃時はDr.千葉)の席である。

B C D 第2～4階層

ブリッジの第2～4階層には、大型ディスプレイや情報機器を備えたサブオペレーター席などがあり、マクロス7の運用を補佐する。

▼マックス用コンソール

マクロス7の艦長であるマクシミリアン・ジーナス用のコンソール。いわゆる艦長席である。主砲使用時にコントロールデスク本体が艦長席の床から上昇し、その後、主砲の引き金が露出する仕組みだった。

▶主砲引き金

バトル7 格納庫／カタパルト

バトル7のブリッジ前部は、精鋭部隊専用のカタパルトとなっている。カタパルト下はそのまま格納庫となっており、中には管制室や消火システムなどが備わっている。バロータ戦役当初、このカタパルトからは金龍率いるダイヤモンドフォースが出撃していたが、のちにドッカー率いるエメラルドフォースが使用するようになった。

ブリッジ前部のカタパルト。3機小隊が同時に出撃可能である。当初はダイヤモンドフォース、のちにエメラルドフォースが使用した。

カタパルトはプラズマ加速装置で、高速で機体を射出する。出撃時には、前方にガイドライン、ガイドビーコンが投影される。

ダイヤモンドフォース格納庫

ブリッジ前部のカタパルトへと繋がる格納庫。機体は三角形を描くように配置され、上写真の前方より右側はガムリン機、左側はドッカー機(のちにフィジカ機)、後方に金龍機と並んでいる。

後方から見たダイヤモンドフォースら精鋭部隊の格納庫。上方には消火システムが備わる(半球状の設備)。また、右端上方には管制室(点線部分)もあり、部隊の運用を支える。

格納庫発進シークエンス

1. 格納状態
2. カタパルトにプラズマ発生
3. ポール部分発光(着色部分)
4. 機体浮上
5. ゲートオープン
6. カタパルト上昇
7. ガイドライン投影
8. 発進

通常VF格納庫

バトル7は、VF-11 サンダーボルト、VF-17 ナイトメア、VF-19 エクスカリバーなどを艦載機として搭載。艦載機用の格納庫、及びカタパルトを備える。カタパルトは複数あり、スクランブル時の各機発進を円滑に行うことができる。

サウンドフォースのためのサウンドブースターを射出するカタパルト。サウンドブースターの射出は、Dr.千葉が操作する。

VF用の格納庫。バトル7には、ジャミングバーズ用のVF-11D サンダーボルトなども搭載されている。

格納庫はバトル7の甲板へと繋がっており、そのまま出撃可能である。ただし、プラズマ加速装置などの装備はない。

マクロス7

バロータ戦役を戦い抜いた 新マクロス級7番艦

艦長
マクシミリアン・ジーナス

市長
ミリア・ジーナス

艦体解説

第37次超長距離移民船団の旗艦マクロス7は、新マクロス級移民船の7番艦にあたり、バトル級可変ステルス攻撃宇宙空母のバトル7と、都市船シティ7の2艦で構成されている。自力航行とフォールドが可能な宇宙構造物としては、2040年代の時点で最大級を誇った。マクロス7船団の中心となり航海に臨んだ本艦は、やがてバロータ軍やプロトデビルンとの戦いに巻き込まれてしまう。なお、本項では主にシティ7を解説する。

旗艦としてマクロス7船団を率いると同時に、市民たちの生活の中心として機能したが、戦いによって苦難を強いられた。

通常はバトル7とシティ7がドッキングした状態で航行するが、戦闘時に必要と判断された場合にはバトル7が切り離される。

データ

所属 ▶ 地球統合軍
全長 ▶ 約7,770m（パワープラント／約0.8km、シティ7／約5km）
全備重量 ▶ 約77億7777万t（出発時）
乗員数 ▶ 約35万人（2045年現在）
主動力 ▶ OTMマクロス熱核反応エンジンマトリックス
主推進機関 ▶ OTMマクロスヒートパイルクラスターシステム
フォールド・エンジン ▶ OTMマクロスフォールドエンジンクラスターシステム

サイズ比較

SDF-1
マクロス7

D83-07

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶マクロス7

運用記録

2038年に地球を発ったマクロス7は、2045年にバロータ軍と遭遇し、交戦状態に陥った。さらに、シティ7が敵に単独フォールドさせられ、一時的に船団とはぐれる事態にも見舞われる。しかし、度重なる戦いを切り抜け、航海を続けた。

艦体構造

マクロス7の特徴はバトル級と都市宇宙船が連結した構造にある。これは戦闘区画と居住区画を明確に分けることで移民船の機能分化を図ったもので、新マクロス級移民船に共通する構造である(艦によって細部に差異は存在する)。また、この艦体構造はアイランド・クラスター級にも受け継がれた。

▶平面図(シェルを取り去った状態)

▶シェル上面図

◀シティ7のドームは上から見ると卵型で、表面には「星の手線」と呼ばれる交通網が張り巡らされている。

▶上は真上から見たシェル、下はシェルダウン時の正面とオープン時の後面。シェル内側には空のホログラムが投影される。

▶シティ7のドームを防護するシェルは開閉式で、最大で約90度の角度まで展開することができるが、通常は半開きの状態で固定されている。

▼正面図

▶バトル7とシティ7の両方がフォールド機関を有し、動力パイプを介してシステムを連動させることもできる。

▲側面図

▲後面図

シティ7

シティ7は全長約6kmにも及ぶ超大型宇宙船で、船体の大半を占めるドームの内部に居住空間が構築されている。また、移民惑星に到着した際には海洋浮遊都市として機能するように設計されている。

シティ7単独での防衛システムは貧弱で、直衛戦力は不可欠だった。それ故、ダイヤモンドフォースに防衛が任された。

▶シティ7底部

▼アクショ

▲バトル7を分離させたシティ7単独の状態。シェル表面には防衛システムを備えたバルジや、市長センターなど突出したビルのカバーが配されている。

シティ7の底部、左舷ドッキングベイに接続されているのが、船団未登録エリアのアクショ。熱気バサラが居を構えていた。

◀底面にはバトル級2隻を収容、整備可能なバキューム・ドックを有し、2重の防護シャッターも備える。

◀船首はバトル7とのドッキングシステムを有したパワープラントで、上下に伸びたフィンは放熱システムである。

Illustration by Hidetaka Tenjin

Fz-109

機体解説

マクロス7船団を幾度となく苦しめたバローター軍の主力可変戦闘機（VF）が、Fz-109 エルガーゾルンである。本機はゼネラル・ギャラクシー社製の重戦闘攻撃機VF-14シリーズが原型と推定され、さらにプロトデビルンが独自に有していた未知のテクノロジーが導入されている。その結果、当時の統合軍主力VFであるVF-11C サンダーボルトを凌駕する性能を発揮した。なお、ここでは指揮官用のFz-109F（以下F型）を解説する。

未知の技術が導入された バロータ軍 主力可変戦闘機

データ

※データはファイター形態時のもの

- **所属** ▶ バロータ軍
- **全長** ▶ 20.08m（バトロイド時全高：17.11m／レーザー機銃含まず）
- **全幅** ▶ 19.97m
- **空虚重量** ▶ 13,200kg
- **エンジン** ▶ 新中州／ダイムラー FF-2770D×2
- **エンジン推力** ▶ 55,000kg（宇宙空間瞬間最大推力）×2
- **補助エンジン** ▶ 高機動バーニア・スラスター P&W／ダイムラー HMM-5C
- **巡航速度** ▶ M4.5+（標準大気圏内高度10,000m時）／M21+（高度30,000m以上時）
- **戦闘上昇限度** ▶ 無制限（地球クラスの惑星なら衛星軌道までの進出が可能）
- **武装** ▶ レーザー砲塔×4／後方大口径ブラスター砲塔×1／後方3連装レーザー砲塔×1／マイクロミサイルランチャー×8／中型ミサイルランチャー×2／多目的ガンポッド×2／他オプション兵装多数

サイズ比較

VF-1J

Fz-109

開発系譜図

VF-14 ▶ Fz-109

主要パイロット

ギギル

運用記録

Fz-109は2045年のマクロス7船団との接触において当初からバロータ軍の主力として運用され、F型はその中で前線指揮を担っていた。特に、マクロス7の調査を任されたギギルが搭乗したF型は、一般兵が搭乗したA型に比べ優れた性能を誇示した。同機はギギルが独断専行した末にダメージを負ってしまうことも多かったが、初戦ではダイヤモンドフォースのVF-17D(ドッカー機)に対し、スピリチア吸収システムを使用し戦闘不能に陥れる戦果を挙げている。

ギギルが熱気バサラの異常なスピリチアに興味を持ったことから、戦況を顧みずにバサラのVF-19改(ファイヤーバルキリー)を執拗に付け狙う場面もあった。

ギギルが戦場でのスピリチア収集を好んだため、F型も前線で運用されるケースが多かった。

ガウォークモード

Fz-109は通常のVFと同じ3形態の変形構造を有している。だが、主戦場が宇宙だったためか、ガウォーク形態の運用機会は少なかった。

急制動をかける際、ファイター形態から脚部のみを変形させる機動は見られた。

脚部／足裏

▶F型の脚部と足裏。踵部分が2ブロックに分かれる特徴的な構造で、この部位は原型機とされるVF-14とも異なっている。

ファイターモード

Fz-109のF型は一般仕様のA型に比べてエンジン推力が向上しており、大気圏内巡航速度もA型のM4.2+からM4.5+まで上昇している。ギギルはマクロス7船団の防衛ラインの最深部まで一気に突貫し、その後バトロイド形態での格闘戦を行うという戦法を得意としていたが、これを可能にしていたのは、本機の強靭な推力であったと言えよう。

強力な主機に加え、機体各所に補助推進器を備えるエルガーゾルンは、高速かつ立体的な機動を得意とした。

▶主翼が小さく、エンジンナセルが張り出した特徴的なフォルムである。メインノズルは3次元ベクタードノズルである。

◀▲エンジンナセル側面や機首上下面にある十字状の部分は高機動バーニア。ガンポッドはバトロイド時には脚部となるエンジンナセル内部のホルスターに格納され、格納時も主翼下の銃口から発射することが可能。

武装

武装の搭載量に余裕のあったVF-14をベース機としているFz-109は、機体各所に豊富な武装を内蔵している。F型は頭部と肩部に各2基のレーザーガンを装備しているほか、胸部に大口径ブラスターを装備している。また、肩部のマイクロミサイルランチャーは、A型の4基から8基(片側4基)に増設されている。機体底部の内装兵器庫にも中型ミサイルを多数搭載するなど、火力面が強化されている。更に本機を特徴付ける武装が、バトロイド形態の頭部に装備された、スピリチア吸収システムである。敵機に肉薄し、パイロットに一定時間光線を照射することでスピリチアを奪うこの装備は、発動時に機体が無防備になるという弱点を持つが、本機の持つ高い機動性と豊富な武装は、そうした無防備になる瞬間を可能な限り減らすことに貢献していた。

頭部にスピリチア吸収システムを装備する。射界の関係からか、バトロイド形態で用いられる場合がほとんどだった。

バロータ軍の攻撃が本格化すると、ギギル機は小艦隊と連携し、指揮を執りながら戦闘する場面が見られるようになっていった。

▲エンジンナセル下部の内装兵装庫は、中型ミサイルを4発×2列分内蔵している。2本のアームによってハッチが開く構造である。

▶ミサイル搭載時

▼▶中型ミサイル

▲開閉パターン

コクピット

コクピットの基本レイアウトは地球側のVFと大きく変わらないが、細部の形状は異なる。また、F型は操縦桿の配置や構造などがA型とは異なっている。

◀キャノピー部
Fz-109は装甲キャノピーを備え、F型は3箇所のカメラアイスリットが配されている。

バトロイドモード

統合軍側VFのバトロイド形態に比べ、Fz-109の同形態は頭部と肩部が大きい異質なフォルムを有している。F型では上半身に4基のレーザーガンが装備されているのが特徴であった。

◀▲角のようなレーザーガンが特徴のF型のバトロイド。左肩部に指揮官機を示すストライプ、右肩部後方に機体番号がマーキングされる。

▲F型の上半身と、側面から見た頭部。胸部に大口径ブラスターと3連装レーザー機銃が確認できる。

EXTRA REPORT

関連事項

エルガーゾルンの原型機

プロトデビルンがエルガーゾルンのベース機として用いたとされる、バロータ3198XE第4惑星特務調査部隊のVF-14については、詳細な資料が発見されていない。VF-14はダンシング・スカル隊で運用されていた細身の機体が有名であるが、関係者の証言によれば、特務調査部隊のVF-14は、エルガーゾルンと似た重厚なシルエットの機体で、独自に改良された仕様であったことが推測される。

◀▼特務調査部隊仕様のVF-14(推測図)。胸部に4門、頭部に2門のレーザー砲を備える。

Fz-109 エルガーゾルン

一般機（Fz-109A）

機体解説

バロータ軍の主力機として用いられたFz-109の一般機（Fz-109A、以下A型）は、ギギルらが搭乗した指揮官機（Fz-109F、以下F型）と比較すると、頭部、肩部、胸部のレーザー砲などがオミットされているか、もしくは砲門数が抑えられている。機体の外観やコクピットの構造も、F型とは若干、異なっていた。これらはA型が生産性を重視した機体だったためと見られるが、スピリチア吸収装置の標準装備や、ファイター、ガウォーク、バトロイドの3形態をスムーズに移行できる可変システムなど、プロトデビルンの優れた技術がフィードバックされており、機体性能を引き上げている。結果、原型機となるVF-14からは大きくスペックが向上し、統合軍の主力機であるVF-11C サンダーボルトを圧倒して見せた。

地球統合軍が培ってきたVF開発技術と、プロトデビルンの技術が融合したことで完成した機体である。

VF-11C サンダーボルトのコクピットをつかみ、スピリチア吸収するA型。この機能が本機の特徴だ。

バトロイドモード

四肢が大きく、威圧的なシルエットが特徴。マニピュレーターも、内側に湾曲した獣のようなフォルムとなっている。また、機体サイズも統合軍製VFに比べ大きく、格闘戦でも力を発揮した。

◀脚部、肩部が重厚なフォルムを持つのに対し、可変システムの根幹となる胸部や股関節部はシンプルな形状である。

▼肩部や脚部装甲には曲面が多用されている。また、腰はベクタードノズルが2基に分裂した形状となった。右肩後ろにあるのは機体番号である。

歌で戦いを止めようとする熱気バサラのVF-19改に対し、複数機で格闘戦を挑むこともあった。

武装／コクピット

A型には、肩部のマイクロミサイルランチャーと脚部のミサイルランチャーをはじめ、胸部にレーザー機銃と大口径ブラスター、脚部の装甲内には2基のガンポッドといった、多彩な武装が備えられた。こうした武装を巧みに使い分けることで統合軍のVFを翻弄し、スピリチア吸収装置の有効範囲まで速やかに接近したのである。また、スクリーンを正面、上方、側面に計5面備えたコクピットには、スピリチア吸収装置専用のコンソールが備えられるなど、プロトデビルン独自の改良が加えられている。

ファイター形態では主にミサイルランチャーを、バトロイド形態ではレーザー機銃やブラスターも駆使し、戦闘を行った。

Fz-109Aのコクピット内部。コクピット自体が脱出ポッドとなっており、緊急時には機体から切り離すことができた。

▲肩部
F型に設置されていた肩部先端のレーザー砲はオミットされた。中央のマイクロミサイルランチャーはA型にも装備されている。

▲頭部
F型では側頭部に設置されていたレーザーガンがA型では外され、シンプルなフォルムとなっている。

▲胸部
右胸にレーザー機銃、左胸にはブラスターを装備。レーザー機銃はF型、A型共に設置されているが、A型の砲口は2門と、F型より1門少なくなっている。

▼コクピット（シート側／ディスプレイ側）

Fz-109のA型は、F型では別々となっていた操縦桿と各種レバーがひとつにまとめられ、シンプルな操作体系となっている。シートやケーブルも簡略化されており、量産を考慮した構造と言える。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶Fz-109 エルガーゾルン

運用記録

Fz-109は、バロータ軍の主力機として大量に配備され、マクロス7船団を襲撃した。A型は主に集団で連携しながら行動し、頭部に設置されたスピリチア吸収装置を用いて、統合軍兵士の戦闘意欲を次々と奪い去っている。F型に比べてエンジン、推力面では劣っていたようで、VF-17D ナイトメアなど、マクロス7船団の高性能機種には撃破されてしまうことも多かった。だが、Az-130A パンツァーゾルンが主力機として大量配備されるまで、バロータ軍には欠かせない基本戦力であり続けた。

複数機が連携し、集団攻撃を行うA型。統合軍の主力であったVF-11Cサンダーボルトも、この作戦に苦しめられた。

ファイターモード

細長い機首と、バトロイドモードでの重厚な外観とは異なるフラットな形状を持つファイター形態。機体後部の3次元ベクタードノズルを駆使することで、高い旋回能力を獲得している。戦場ではミサイルランチャーの一斉射により、敵VFの接近を阻んだ。

▲▼F型とはキャノピーの形状が若干異なる程度である。機体後方の敵に対し、ビーム機銃とブラスターを使用することが可能。

ガウォークモード

機体の最後方に肩部がレイアウトされているため、腕部が主翼よりも後ろ側から展開されるのが特徴である。この形態では、ガンポッドを主武装として戦闘を行うことが多い。だが、バトロイド、ファイター形態に比べて使用頻度は低くなっていた。

◀主翼と肩部が干渉しない構造となっている。ガンポッドは両腕に持たせることが可能で、攻撃力を大幅に強化できた。

▲▶肩部が最後方にあるため、機首までの距離が大きく離れているのがわかる。

EXTRA REPORT

関連事項

VF-14 バンパイア

Fz-109のベース機となった統合軍製VFが、VF-14 バンパイアである。メガロード01に搭載されたVF-4 ライトニングの後継機と言われており、その外観や基本構造などを受け継いでいる。統合軍のバロータ星調査部隊が運用したとの記録があり、バロータ星に潜入した際に機体がプロトデビルンに奪取され、Fz-109へと改修されたと見られる。

統合軍艦艇を防衛しつつ、バロータ第4惑星に向けて出撃したVF-14 バンパイア。相当数が量産されていた。

▶VF-14 バンパイア

図は特務部隊ダンシングスカルにて運用されたVF-14。バロータ星調査部隊が運用していたVF-14とは外装や武装がやや異なる。主武装として、頭部と肩部にビーム砲を計3門備えている。

他

▶マクシミリアン・ジーナス搭乗機

他

▲ミリア・ファリーナ・ジーナス搭乗機

ガンポッド

バトロイド形態時の主武装として用意されていたのが、マニピュレーターで指持するガンポッドである。非戦闘時は脚部のホルスターに内蔵されている大型の重火器であり、その連射性能と取り回しの良さから重宝された。このほか、形状が異なる2丁の火器をドッキングすることで威力を強化できる重ブラスターも確認されている。これは試作であったため、使用された回数は少なかった。

スピリチア回収を目的とするFz-109にとって、ガンポッドはVFを迅速に無力化するために必須の武器であった。

腕部

◀▼ガンポッドを操作するマニピュレーターは感圧センサーを持ち、細かな制御が可能である。

ショック端子

感圧センサー

試作ブラスター

ガンポッド

▲ガンポッドの砲身。グリップはセンターとフロントに2つ備える。

◀後方

◀側面

◀ストック

▶マガジン

近〜中距離の射撃に適した火器であった。

ホルスター

銃口

右脚のすね部分はガンポッドのホルスターとなっており、使用時には装甲パネルが開き、ガンポッド本体がせり上がる。内蔵時も銃口から射撃可能。

◀接続状態
銃口が大きく、先端に探索レーダーと照準センサーを持つ火器が前方に、銃口の小さい火器が後方となる。

◀ビームを射出できる2タイプの火器。砲身をドッキングさせることで重ブラスターとなり、攻撃力が向上する。

▼側面

▲後方

脱出ポッド

Fz-109は機体が制御不能となった場合に備え、コクピットが脱出ポッドとなる機構を持っていた。

VFの攻撃で致命傷を負ったギギルが、脱出ポッドで戦場を離脱する瞬間。そのままシティ7に不時着した。

▲脱出ポッドは円盤型で、飛行するためのスラスターを持つ。停止する際には着陸脚を用いる。

◀側面

▼対比図（人間）

◀着陸脚

変形シークエンス（ファイター形態➡ガウォーク形態）

Fz-109は、他のVFと同様、ファイター、ガウォーク、バトロイドという3つの形態を持つ。ファイター形態からガウォーク形態への可変機構はシンプルなもので、脚部、腕部の変形が主である。

1 脚部の変形

A 脚部パーツが90度下に折れる

2 脚部・腕部・主翼の変形

A 腕部が下に折れる
B 脚部と主翼ブロック全体が前方にスライド、さらに内側へと移動する

3 肩部の変形➡ガウォーク形態へ

A 肩ブロックを90度ひねる

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶Fz-109 エルガーゾルン

変形シークエンス(ファイター形態➡バトロイド形態)

丸みを帯びた特異な機体フォルムを持つFz-109は、ファイター形態からバトロイド形態への変形において他のVFと大きく異なる機構を採用していた。ファイター形態の機体後部が前方に起き上がって胴体部となるほか、機首も取り付け軸を中心に回転して背部を形成する仕組みであった。また、機首先端が頭部へと移行する機構も、2つのヒンジを用いた複雑なシステムを採用しており、本機の特徴ともなっている。

1 腕部・脚部の変形

A 腕部と脚部パーツが分離
B 腰部のヒンジが下に曲がる

2 腕部・胴体部の変形

A 中央にある胴体後部が起き上がる
B 両腕部を90度下へ
C ヒンジを軸に腰部パーツが回転
D 機首が下に折れ、両脚部の間をくぐって後方へ

3 胴体部・背部の変形

A 機体全体を90度起こす
B 機首が背部に回り込む
C 背面パネルがへこむ
D 肩ブロックが90度起き上がる

機首ヒンジ
脚部の回転中心

4 腕部・肩部・脚部の変形

A 中央胴体が180度前に折れ、胸部を形成
B 機首が畳まれる
C 肩ブロック90度外側に開く
D 主翼を後ろに畳む
E 可変翼で少し後ろに流す

5 頭部・肩部・腕部・脚部の変形

A 頭部の軸を胴体上に
B 頭部の角度を調整
C ミサイルが起き上がる
D 腕部が90度ひねって前を向く
E マニピュレーターが展開
F つま先、かかとを開く

バトロイド形態

一般機であるA型のバトロイド形態。指揮官用であるF型も変形機構はほぼ同様だが、F型のみ装備する胸部レーザーガンが回転し上を向く。

シティ7航空機・車両

市民の治安を守る 都市宇宙船の装備

◀シティポリスマシン
シティ7の警察機関であるシティポリスが運用したティルトローター機で、飛行モードとパトロイドモードへの変形機構を有する。図は地上用で、ローターを換装した宇宙用も存在する。

機体解説

マクロス7船団では、治安を守るためにシティポリスと呼ばれる警察機関が置かれ、専用の装備を運用して職務にあたった。そのひとつが、小型可変機のシティポリスマシンで、変形による汎用性が特徴の多目的機であった。移民船団が巨大化し、払い下げの可変戦闘機（VF）やデストロイドが一般市民にも普及していた当時にあっては、警察機関にもこのような高度な装備が必要とされたのである。

シティポリスマシンはパトカーや可変装甲車などと連携し、シティ7を中心とした船団の防犯や治安維持を担った。

変形機構を有したシティポリスマシンは、腕部でオプション火器を運用することも可能で、敵VFに立ち向かう場合もあった。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶シティ7航空機・車両

運用記録

シティポリスの職務は防犯や犯罪捜査といった一般的な警察機関の役割と同じで、シティポリスマシンは平時にはシティ7内外のパトロールにあたった。しかし、重大な暴力活動には火器を装備して対応する場合もあり、バンパイア事件に端を発するバロータ軍のシティ7潜入では迎撃に運用された。また、シティ7に来襲したプロトデビルン・シビルに初接触したパトロール機のパイロットが犠牲になるケースもあった。

シティ7内で活動するバロータ軍に対応すべく運用されることもあったが、軍用機との性能差は埋め難く、大きな損害を被った。

◀▼コクピット

◀▲機首が球形コクピットになっており、乗員は2名。シートとコンソールはアームで浮いた状態に固定される。

▲▶ハンドル

シティポリスマシン

2基のダクトファンを有するティルトローター機(回転翼を傾けることで垂直離着陸を行う機体)。VTOLモード、高速飛行モードの飛行形態と機体後部を展開した3輪パトロイドモードに変形が可能である。また、飛行モードで腕部のみを変形させて展開することもでき、携行火器を運用できる。

▼高速飛行モード

▲腕部を収納し、高速での飛行が可能となる形態。機体下部には回転灯とサーチライトを備える。

▼通常飛行モード

▲▼機体上部にはパトライトを備える。また、機体尾部に位置する姿勢制御用バーニアは全方位に噴射が可能。

◀▼3輪パトロイドモード

◀腰ブロックを90度下方に向け、前脚を展開して3輪状態となる。ダクトファンの支柱は折り畳まれる。

統合軍装甲車／装甲戦闘車

統合軍が運用した装甲車で、ひとつは車体上部にレーダードームを備えた高速6輪車、もうひとつは履帯駆動の装甲戦闘車である。前者はプロトデビルンとの最終戦闘でバトル7からの退艦に用いられた。

▼装甲車

▲▼前輪の直径が人間とほぼ同じサイズに達する大型車で、車体側面と後部にハッチを備える。ただし、武装は施されていない。

▼装甲戦闘車

▲4連装砲塔やドーザーブレードを備える装甲車両で、履帯は一対となっている。歩兵戦闘車と考えられる。

◀車体上部のレーダードームは車幅を超える直径の巨大なもので、基部を介して接続される。

▲レーダー基部

パトカー

シティポリスで使われたパトカー。バンパイア事件やテロリストによるシティオフィスジャックなど、さまざまな事件で治安維持に奔走した。

▲▶直線的な形状の4輪車。上部にパトライトを備え、側面には「POLICE」の文字が記されている。

シティ7内を疾走するパトカーの集団。バロータ軍やプロトデビルンの襲撃には無力だったが、シティポリスの地道な活動を支えた。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-19改

機体解説

VF-19改――通称ファイヤーバルキリー――は、マクロス7船団でのVF-19の制式採用にあたって先行試験運用された改造機である。操縦性や安定性を重視したVF-19とは対照的に、その試作機であるYF-19に近い機体バランスに基づいて調整されており、■型機譲りの高性能を有している。さらに、その優れた機体性能以上に本機を特徴づける点が、「唄うこと」に主眼を置いた設計にある。搭乗者の■を伝えるためのスピーカーやオーディオといった音響システムが搭載された本機は、■エネルギーの検証機という側面も有していたのである。そして本機は、ロックグループ“Fire Bomber”のボーカリスト、熱気バサラに託され、プロトデビルンとの戦いの中でその真価を発揮していくことになった。

主要パイロット

熱気バサラ

データ

※データはファイター時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶18.47m
全高▶調査中(バトロイド15.48m センサーフィン含まず)
全幅▶14.92m
空虚重量▶8,400kg
エンジン▶新中州／P&W／ロイスFF-2500F×2
推力▶82,500kg×2(宇宙空間瞬間最大推力)
補助エンジン▶高機動バーニア・スラスター P&W HMM-6R
最大速度▶M5.5+(高度10,000m時)／M25+(高度30,000m以上時)
上昇限度▶地球クラスの惑星では宇宙空間まで進出可能
武装▶防弾シールド×1／中射程高機動ミサイル×12／戦闘機用ピンポイント・バリア・システム／スピーカーポッド射出用ランチャーポッド×1／高性能オーディオ・システム／スピーカー・システム／ライトアップ用プロジェクター・システム 他

開発系譜図

▶ VF-19 ▶ VF-19改

サイズ比較

銀河に歌を響かせた真紅のバルキリー

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-19改

宇宙を震わせた超時空のサウンドユニット

機体解説

プロトデビルンとの戦いが激化する中、熱気バサラとその愛機VF-19改は、民間協力隊サウンドフォースとして、統合軍に協力することとなった。同隊の編成直後、その専用装備として配備されたのが、サウンドブースターである。サウンドブースターは、プロトデビルンへの対抗手段となりうる「歌エネルギー」を、より効率的な「サウンドエナジー」へと増幅・変換するシステムを装備した機体であり、VF-19改と合体し、時空共振サウンドエナジースピーカーを展開することでその真価を発揮する。なおこれは、あくまでサウンドエナジーを発振するための装備であり、VF-19改の機動性を向上させるものではない。また本装備には武装も施されていない。

通常の運用では、まずVF-19改が先行して戦場に到着し、バトロイド形態に変形。直後にサウンドブースターが飛来し、VF-19改と合体するという流れが一般的であった。

VF-19改のファイター形態にサウンドブースターを装備した珍しい形態。2046年2月頃、ガビルに憑依されたガムリン大尉の制止にサウンドフォースが向かった際に確認されている。

サイズ比較

VF-1J
サウンドブースター
VF-19改

主要パイロット

熱気バサラ

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-19改 エクスカリバー“熱気バサラスペシャル”

VF-19改 エクスカリバー用サウンドブースター

マクロス7特殊技術班（通称プロジェクトM）によって開発されたサウンドブースター1号機。左右のボディにはサウンドオーラ増幅発振システム、先端部には時空共振型サウンドエナジー発振システムが搭載されている。主動力は2基の巡航用熱核ジェットエンジン（VF-11用のエンジンを改装したもの）であるが、これに加え2基の化学燃料ロケット・モーターを装備している。このロケット・モーターは、先行しているバサラの元に速やかに移動するためのもので、ジェットとロケットが同時稼動時の最大飛行速度は大気圏内でマッハ7を超える（幸い本機は無人機であるため、このような無茶な加速も可能であった）。ロケットの燃料は約3分で全燃するが、実際の運用時は、燃料が尽きるほどの距離を飛行することはなかったようだ。

データ

全長▶11.83m
全幅▶15.41m
空虚質量▶7,800kg
運用標準質量▶10,500kg
エンジン▶新星／P&W／ロイスFF-2025F熱核タービンエンジン×2、新中州重工CR-S32H化学燃料ロケット・モーター×2（スクランブル時のみ併用）
推力▶25,500kg×2（FF-2025F宇宙空間瞬間最大推力）、17,500kg×2（CR-S32H）
補助エンジン▶高機動バーニア・スラスター P&W HMM-6B
機体設計強度▶プラス44.5G、マイナス25.0G
緊急速度（標準大気内高度10,000m）▶マッハ7.2＋（CR-S32H併用緊急最大速力）
最大速度（標準大気内高度10,000m）▶マッハ4.2＋（熱核ジェットのみ）
高高度最大速度▶マッハ29＋
離着陸距離▶0m（VTOL可能）
戦闘上昇限度▶無制限
海面上昇率▶77,000m/min
戦闘行動半径（大気内）▶ほぼ無制限
乗員▶無人／リモートコントロール制御（非常時はAI自己制御）
装備▶固定兵装なし／全自動ドッキングシステム／時空共振型サウンドエナジー発振システム／大出力サウンドエナジー変換増幅システム×2

▲胴体部中央は複合センサー。通常はDr.千葉、あるいはバサラ機から遠隔制御を行うが、ジャミング等で制御不可能な場合は搭載AIの判断でドッキングシークエンスを行う。

バトル7の専用カタパルトから発進。スクランブル時の大気圏内最大飛行速度はマッハ7を超えるものの、燃料消費が激しいため最大速度は約3分しか維持できない。

▼双胴ボディ両翼の可変後退翼はドッキング時に折り畳んで収納される。一方、尾翼は正面を向いてサウンドの共振プレートとして使用される。

サウンドブースタードッキングシステム

▼VF-19改 肩部前面

▼ドッキングシステム

▲ハッチカバー開く

▼サウンドブースタードッキング時

▲肩当てパネル裏側

▼VF-19改 背面

Ⓐドッキングシステム
Ⓑドッキングシャフト

まずエアブレーキを兼ねて中央胴体部が90°回転、肩当てパネルが開く。その際重力圏であれば降下時にVTOL用バーニアを噴射。最後にドッキングシャフトが伸び、VF-19改の肩部と背面に連結する。

▲ドッキングシャフト

サウンドブースターセット時

VF-19改がサウンドブースターとドッキングした状態。ブースターの装着により歌エネルギー、通称サウンドビームの照射が可能となる。バサラ機用サウンドブースターは大出力のサウンドエナジーコンバーターを2基装備しているため、サウンドエナジーの増幅発振を非常に高いレベルで行える。しかしながら、システム起動には最低でも10万チバソングという高出力のサウンドエナジーが必要であり、Fire Bomberのボーカリストである“アニマスピリチア”＝熱気バサラだからこそ可能な機体運用であった。

主に対プロトデビルン戦において運用された。ガビル&グラビル襲来の際に初めて実戦投入され、プロトデビルンに対抗できる高い性能を示した。これはパイロットである熱気バサラの歌エネルギーを十二分に発揮できるキャパシティを備えた機体であることの証明でもある。

サウンドブースターシステムOPENモード

サウンドブースターシステムCLOSEモード

プロトデビルンを撃退できるサウンドビーム。しかし、歌を聴かせることで相手が撤退してしまうため、ボーカリストである熱気バサラにとっては不本意であったようだ。

サウンドビームはマインドコントロールを解く効果もあり、洗脳されたバロータ兵の救出に大きな成果を上げた。その際、ビームを拡散させて照射している。

バトロイド時コクピット▶

◀▲ファイター／ガウォーク時コクピット

サウンドブースターシステム運用に合わせてコクピットが改装されており、パイロットシートにはサウンドエナジー変換システムが組み込まれている。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-19改 エクスカリバー "熱気バサラスペシャル"

各部構造

熱気バサラが運用していたVF-19改は、原型機であるYF-19の基本構造を受け継いだ機体である。しかしながら、本機は搭乗者である熱気バサラの歌エネルギーの実証機ともなっており、特徴的な形状のフェイスプレートなど、他の可変戦闘機(VF)には見られない機構が多数見られる。

「歌エネルギー」の実証機であり、バサラの意向により武装をほとんど持たなかったVF-19改だが、その基本性能はYF-19並に優れていた。

フェイスプレート

▼▶オープン時

◀▲クローズ時

セパレートタイプのゴーグルを備えるなど、人■の顔のような形状である。図のように、「口」の部分を閉じることも可能である。

マニピュレーター

▲▼指機構

◀▲マニピュレーターの内部には、ハードカバーに包み込まれるようにして、センサー内蔵のソフトパッドが搭載されている。

◀掌部

バトロイドモード乗降ハッチ

◀バトロイドモードでもパイロットが乗り込めるように、■部の後方にはハッチ開閉用のレバーとパネルを備える。

▶レバーを操作することで装甲ハッチが開き、パイロットの乗降が可能となる。

ハッチ開放パネル

◀後方からハッチ■放パネルレバーを見た状態。まずパネルを操作後、レバーを回転させてハッチを開く。

ハッチ開放レバー

着陸脚&ウェポンベイ

▲ウェポンベイ

▲機体底部には、ファイターモードで着陸するための着陸脚を前後に3基備えている。また、ミサイルなど■装格納用のウェポンベイが左右に2基設置されていた。

リトルロック射出システム

◀▼ミサイルは左図のように格納されており、使用時にはハッチが開いた後、ミサイル先端が前方を向く。下図はミサイルの固定装置である。

◀ウェポンベイにリトルロック射出システムを搭載した状態。左右各6発のミサイルを発射できる。

変形シークエンス(ファイター形態➡ガウォーク形態)

VF-19改の変形シークエンスは、ほぼYF-19のものをそのまま引き継いでいる。だが、ガウォーク時にカバーが下に折れ、センサーフィンが起き上がる頭部や、形状と位置が異なる垂直尾翼の変形などは、VF-19改オリジナルのシステムとなっている。

❶ ファイター形態

❷ 各部の変形

A 機体後部全体が約30度傾く
B 脚部が折れ曲がって逆関節へ

❸ ガウォーク形態

A 垂直尾翼折り畳む
B 腕部折れて定位置へ
C 頭部センサーフィン起き上がる
D 肩ブロック90度回転して開く
E ガンポッドスライドして定位置へ
F 手が出る

Mechanic Sheet
メカニックシート

VF-19改 エクスカリバー"熱気バサラスペシャル"

オプション装備

「歌エネルギー」の実証機となった本機だけに、通常のVFには搭載されないようなスピーカーユニットを各所に装備している。オプション兵装にも、サウンドエネルギーコンバーターを装備したサウンドブースターのみならず、超大型のスピーカーポッド発射装置「ガンポッドγ」が用意されるなど、バサラの歌を聴かせるための装置が充実していた。

歌を聴かせることに主眼が置かれたVF-19改にとって、プロトデビルンに歌を伝えるスピーカーやオーディオシステムは重要であった。

肩部スピーカーユニット

▲▶バサラの声とサウンドを聴かせるための特殊装置。肩部装甲が上下に展開されるとスピーカーが前後に出現する構造であった。

▲肩部前面、後面に設置されたスピーカーユニット。ライトアップ用の投光プロジェクターも設置されている。

ガンポッドγ

▲ランチャー部とスピーカーポッドγで構成されたスピーカー射出システム。全長はVF-19改の全高を超える。

セキュリティロック▼

◀▲ガンポッドγをVF-19改が支持した状態。セキュリティロックを引き抜き、機体の肩をランチャー部底部のショルダーパッドに合わせ、右のマニピュレーターでトリガーを操作する。

発射展開シークエンス

1. ▲ランチャー部とスピーカー部を分離した状態でVF-17T改レイ・ビヒーダ機に設置、戦場に運搬する。
2. ▲VF-19改にランチャー部を託した後、レイ機がスピーカー部をランチャー部にドッキングさせる。
3. ▲スピーカーをランチャー部にセッティングした状態。ランチャー内部に見えるのは第一段ロケット。
4. ▼発射後、敵艦体突入寸前で第1段を切り離し、第2段ロケットを噴射させる。
5. ▲敵艦に着弾後、サウンド・コーン・スピーカーが巻き出すように広がる。
6. ◀艦体に取り付くと、6基のアンカーと充填剤によりスピーカーは固定される。また、サウンド・コーン・スピーカーが広がると同時に、先端のベネレクター・コーンが外れる。

仮装形態(VF-1)

バサラとミレーヌが出演したドラマ「リン・ミンメイ物語」では、戦闘シーンを撮影するため、バサラの乗機であるVF-19改をVF-1に仮装した。この形態では、劇中の設定を再現するため、機体上部と脚部にスーパーパーツが装備されている。

Fire Bomberの人気沸騰に一役買ったドラマ「リン・ミンメイ物語」で本仕様は使われ、「ミンメイ・アタック」を再現している。

◀▼底部、後方部から見た図。スーパーパーツはパイロットの意思で排除が可能である。

▶機体上部と脚部にスーパーパーツを追加したことで、改修せずともVF-1に近い外観を得た。

Az-130A

バローター軍が独自改良したFz-109の姉妹機

データ

※データはアタッカー形態時のもの

所属 ▶ バローター軍
全長 ▶ 17.78m
全高 ▶ 17.73m(バトロイド形態時、肩の機銃含まず)
全幅 ▶ 22.15m
空虚重量 ▶ 15,500kg
エンジン ▶ 新中州・ダイムラー FF-2770D×2
巡航速度 ▶ マッハ4.0+(大気圏内)
エンジン推力 ▶ 55,000kg(宇宙空間瞬間最大推力)×2
武装 ▶ 35mm旋回機関砲×2/3連装ビーム砲×2(バトロイド時は胸部砲)/後方連装レーザー砲塔×1(バトロイド時は胸部砲塔)/マイクロミサイルランチャー×4/中型ミサイル内装ランチャー×2(各8発ずつ)/多目的ガンポッド×2(アタッカー時脚部エンジンポッド内に収納)/オプション兵装×多数

サイズ比較

VF-1J
Az-130A

開発系譜図

VF-9 ▶ VF-14 ▶ Az-130A

機体解説

地球統合軍製のVF-14 バンパイアを回収、バローター軍が独自に改良を加えた可変攻撃機がAz-130A パンツァーゾルンである。丸みを帯びたフォルムが特徴の機体であるが、基本のフレーム構造や変形システムはほぼ原型機のままであり、同じくVF-14を原型としたFz-109 エルガーゾルンの姉妹機と言える。重装甲・重武装の上、主翼の再設計やエンジン推力の向上が図られており、大気圏内での空戦性能はFz-109やVF-17 ナイトメアを凌ぐほどの性能を発揮した。

主要パイロット

バローター軍兵

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶Az-130A パンツァーゾルン

運用記録

プロトデビルン·ガビルの復活と同時期に彼の指揮下でマクロス7船団との戦闘に投入されたAz-130A。Fz-109とは役割を異にし、スピリチアの吸収よりも純粋な戦力として運用された。特に、実弾を防御できないサウンドフォースのサウンドバリア対策として、ミサイルを豊富に備えるAz-130Aが適任だったようである。VFの特性とバロータ軍独自の技術がミックスされた本機は大気圏内での高機動性に優れ、その高い戦闘能力をマクロス7船団相手に証明した。

実戦においては、複数機が内蔵ミサイルを一斉射撃することで、広範囲に制圧力を発揮するという戦法を得意としており、多数のマクロス7防衛部隊がこの攻撃の犠牲となった。

複数のバリエーション機があったと見られるが、統合軍との戦闘では一般兵用とされるA型が戦場に投入された。

Fz-109 エルガーゾルンと同様、プロトデビルン側の未知のテクノロジーが大幅に導入された高性能機である。

機体構造

アタッカーモード

高速移動が可能な戦闘機形態。大型の機首には、長距離対艦ミサイルと大出力レーダー、下面には対地攻撃用のセンサーが搭載されている。

▶後方より。バトロイドモードの胸部ビーム砲は、アタッカーモードでは機体下面に後方に向けてレイアウトされる。このモードでも砲の使用は可能だが、実用性は乏しかったと見られる。

側面／上面

大型の主翼を備えているため、全長よりも全幅が広い。両エンジンポッドのホルスターには砲口を持ち、収納したガンポッドでの射撃も可能となっている。

▲▼重厚なフォルムからも見て取れるように各部の設計強度が高く、頑丈な機体に仕上がっている。

▼カナードは上反角がついており、機首両脇に35mm旋回機関砲を2基持つ。

バトロイドモード

アタッカーモード時の特徴的な機首が背部に回り、頭部を形成する人型形態。胸部にビーム砲を、肩部と脚部にミサイルを備えている。

バロータ第4惑星で、統合軍のガムリン·木崎がバロータ軍から機体を奪取して味方の脱出を手助けしたほか、スピリチア吸収システムの解明にも繋がった。

◀頭部、胸部の拡大図。対地攻撃用レーダーの下にメインカメラ部を備える構造を持つ。

コクピット

原型機VF-14のコクピットは、ゼントラーディー軍の戦闘ポッドを参考に設計されたと言われている。Az-130Aのコクピットのシートには、パイロットのモニタリング用の機材とおぼしき多数のパイプが繋がれている。

パイロットは洗脳されたマクロス5船団の防衛隊であり、パイロットスーツは、防衛隊用を踏襲している模様。

▲操縦桿

▼スロットル

武装

主武装であるガンポッドは、スピリチア吸収システムを搭載したバロータ軍仕様のものとなっている。ガンポッドは両脚部内ホルスターに計2丁収納されており、バトロイドモードへの変形後に脚部装甲が展開し、ガンポッドが射出される仕組みである。

▲グリップを畳んだガンポッド収納形態。エルガーゾルン用ガンポッドより銃身が長い。左は脚部ホルスターを展開した状態。

Az-130Aの実戦においては、距離をとってのミサイルによる制圧射撃の後、接近してのガンポッドによるドッグファイトが主戦法であった。

変形シークエンス

1

Ⓐエンジンポッドが腕、足に分離　Ⓑ旋回機関砲が下を向く
Ⓒ左右の腰ヒンジが下へ曲がる

2

Ⓐ中央後部が折れ曲がり、前へ立ち上がり胸パネルとなる
Ⓑ中央機体部起きる
Ⓒ腕が肩と分離して下りる
Ⓓ脚部が下方へ
Ⓔ機首が折れ曲がり脚部の間を通り後方へ

3

Ⓐ胸パネル、胴体パネルと重なる
Ⓑ背面がへこむ
Ⓒ脚部、定位置へ
Ⓓ機首、背部へ起き上がる

4

Ⓐ機首背中へセットされる
Ⓑ肩が90度ひらく

5

Ⓐ頭部が2段階に折れて定位置へ
Ⓑ肩のショック·コーン90度後方へ
Ⓒ胸が開く
Ⓓ主翼後ろに畳まれる

6

◀バトロイド形態

マクロス7船団航空機

マクロス7船団で運用された多彩な航空機群

チルト式のダクテッドファンを4基備えた、大出力タイプの輸送ヘリ。コクピットはシティポリスマシンと共通のものとなっている。

▼輸送ヘリ

アンテナ、カメラを備えた取材用のヘリ。シティ7に拠点を構えるTV局が所有しているものである。

◀報道ヘリ

機体解説

西暦2038年に地球を出発し、銀河系を航行していたマクロス7船団。船団を構成する約1,000隻の艦には、軍人・民間人を含めて100万人以上が暮らしていたとされる。その艦と艦との移動には宇宙空間ハイウェイ「ミルキーロード」が整備されていたが、艦内の飛行や惑星での運用を想定し、多種多様な航空機が開発・運用されていた。その中でも、チルト式のダクテッドファンを用いたヘリコプターは複数が生産されており、物資・人員の移動のみならず、巨人サイズのゼントラーディ人の運搬や、報道用に特化した機体が確認されている。

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶マクロス7船団航空機

輸送ヘリ

大気圏内での物資輸送用に用いられたヘリコプターで、大型のチルト式ダクテッドファンを4基設置しているのが特徴である。このダクテッドファンは可動式で、進行方向にダクテッドファン部を傾けることで、高速飛行が可能だった。本体はコクピットとフレームのみのシンプルな構造で、物資の輸送時にはコンテナごと機体底部に設置する。エキセドルの輸送時には、頭部と胴体を吊り下げるコードとモニターを備えた専用ユニットを底部に設置した。

シビルの目覚めと共に出現した謎の遺跡が「プロトカルチャー」に関するものだと考えたエキセドル。彼は自らその遺跡を調査するため、輸送ヘリを運用した。

▼チルト式ダクテッドファンを90度傾けた高速飛行モード。発生した推力が全て進行方向に伝わるため、飛行スピードが向上する仕組みだった。

エキセドル輸送ユニット装着時

▼▶エキセドル輸送用のユニットを装備した状態。ユニットに備えられた多数のワイヤーが、エキセドルの肩と頭部に設置される。

◀上方からヘリを見下ろした図。エキセドル輸送用のユニットは本体中央部のジョイントに設置されているのがわかる。

◀▶ワイヤー類とエキセドルのアップ図。ワイヤーは、エキセドルを懸架できる優れた耐久力を持っている。

報道ヘリ

TV局所有のヘリコプターで、2基のチルト式ダクテッドファンによって推力を生み出している。報道・取材用の機器を多数設置しているのが特徴で、コクピット下と機体底部にそれぞれ可動式のカメラとマイクを、機体上部に電波送信・受信用アンテナを備えていた。こうした機構により、迅速な情報収集とTV局への素早い情報発信が可能となっており、重大事件発生の際に多用された。

◀機体後方から見た図。尾翼にもダクテッドファンを備えた構造によって、優れた旋回能力を獲得している。

Fire Bomberが行ったゲリラライブを取材する際に運用され、TV番組「Coffee Break」内で、ライブの様子が生中継された。

EXTRA REPORT

関連事項

TV局が用いた航空機／航宙機

マクロス7船団に情報や娯楽を提供しているTV局では、報道ヘリ以外にも、その用途に応じた多彩な航空機、航宙機を保有していた。TV飛行船は、大型のディスプレイを2基設置したタイプで、重要な情報を広く伝えたり、広告用途にも使われたようだ。また、宇宙での撮影用に、小型の宇宙艦の中に編集スタジオを備えたスタジオ船なども保有し、幅広い環境での取材・撮影に対応した。

テレビ映画「リン・ミンメイ物語」のクライマックスとなる「ミンメイ・アタック」の撮影を行うため、数隻のスタジオ船と多数のカメラが用いられた。

▼スタジオ船
細長く突き出た艦首の先端にコクピットが設置されていた。胴体部にスタジオ設備があり、監督などスタッフが撮影を見守っていた。

▼TV飛行船
ディスプレイは左右両側に設置された。機体側面には、「M.B.S. T.V」の文字が描かれているのがわかる。

▶機体前部には、地上を歩く通行人の注目を浴びるように「顔」も描かれている。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-11MAXL改

プロトデビルンに敢然と立ち向かった歌姫の写し身

機体解説

ミレーヌバルキリーの愛称を持つVF-11MAXL改は、民間協力隊サウンドフォースのメンバー、ミレーヌ・フレア・ジーナスの専用機としてチューニングされた機体である。本機は特殊戦向けにオーダーメイドで数機が生産されたVF-11MAXLにサウンドシステムを搭載したもので、パイロットであるミレーヌの要望を反映した改修も施されている。他のサウンドフォース専用機と同じく武装は必要最低限のものだが、当時を代表する高性能機VF-17Dナイトメアに匹敵する総合性能を有し、プロトデビルンとの戦いでも大いに活躍している。

主要パイロット

ミレーヌ・フレア・ジーナス

データ

※データはファイター時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶15.48m
全高▶測定中(バトロイド時11.24m)
空虚重量▶7,900kg
エンジン▶新星 P&W ロイスFF-2099A改×2
推力▶41,500kg×2(宇宙空間瞬間最大出力)
補助エンジン▶高機動バーニア・スラスター P&W HMM-7Y
巡航速度▶M4.1+(標準大気圏内高度10,000m時) M22+(高度30,000m以上時)
戦闘上昇限度▶地球クラスの惑星なら衛星軌道までの進出が可能
武装▶内蔵式スピーカー・システム、ランチャーポッド、レーザー機銃×2、内蔵式マイクロミサイルランチャー×4

開発系譜図

▶ ▶ VF-11MAXL改

サイズ比較

VF-1J
VF-11MAXL改

Mechanic Sheet
メカニックシート
VF-11MAXL改　ミレーヌ専用機

運用記録

歌の軍事利用を企図した統合軍は、極秘計画「プロジェクトM」を立案。その一環として、歌を武器とする可変戦闘機の開発に着手した。その結果、新中州重工とマクロス7特殊技術班の手によって誕生したのが、VF-19改、VF-17T改、VF-11MAXL改の各機である。これら3機は、ロックバンドFire Bomberのメンバーをパイロットに起用したサウンドフォースに配属され、本機VF-11MAXL改は、ベーシストのミレーヌ専用機として運用された。Dr.千葉が開発したサウンドエネルギーシステム、サウンドブースターを追加装備した本機は対プロトデビルン戦の切り札として奮闘し、最終決戦ではサウンドバスター作戦の中核を担う見事な活躍を見せた。

ガビルが農場艦サニーフラワーを占拠した際にその場に居合わせたミレーヌは、サウンドブースターを失いながらも撃退に成功した。

バサラ機抜きのサウンドフォースでゲペルニッチとの戦いに挑んで奮戦するも、戦闘の途中で中破して戦線を離脱することとなった。

標準装備

レーザー通信システム

頭部には大きな改修が加えられており、特殊合金一枚板から叩き出した女性的なフェイス・プレートが特徴である。また、頭部レーザー機銃は装備されず、レーザー通信システムのみを備える。

▲VF-11MAXL改　▲VF-11C

ランチャーポッド

VF-19改と同じく、スピーカーポッドを射出するランチャーポッドを装備している。機体サイズに合わせてVF-19改のものよりも小型化されており、銃口など各部の形状も異なっている。

▲ランチャーポッド

コクピット

コクピットは他のサウンドフォース専用機と同じくサウンド・スティックコントロール（スティックはベースギター型）が採用されているが、原型機が違うためコクピット構造はやや異なる。なお、シートはのちにサウンドエナジー変換バックパック組み込みタイプに変更されている。

▲シート＆コントロールスティック

ファイターモード

VF-11MAXL改のベースとなったVF-11MAXLでは、主機をVF-16の次世代型熱核バーストタービンエンジンに換装し、翼形状の変更によって耐久性と空力特性の向上が図られた。本機のファイター形態はその設計を受け継いでおり、ウィングレットを備えたクリップトデルタ翼が最大の特徴となっている。また、次世代エンジンの装備によってスーパーパーツなしでも高い宇宙航行能力を発揮する。

ファイター形態ではスピーカー·システムが上向きになり効果が弱まるため、戦闘時はスピーカーが正面を向くバトロイド形態が多用された。

▼デルタ翼への変更によって空力特性が強化されており、海面上昇率44,500m/minという性能を誇る（VF-11Cは28,500m/min）。また、VTOL機能も有している。

▼▶エンジン強化にともない、機体設計強度は+27.0G/-16.0Gと、VF-11Cから大幅に向上している。また、主翼前縁にはレーザー機銃を内蔵している。

◀機体形状はVF-11Cから大きく変わっているが、機首カナード翼は残されている。右主翼上面にはミレーヌのパートナー、グババをモチーフにしたハート型のパーソナルマークが描かれている。

ガウォークモード

唄うことを第一とするサウンドフォースの性質上、VF-11MAXL改は戦闘中にガウォーク形態を用いるケースは少なかった。ファイターで移動してバトロイドに変形して唄う、というプロセスの一部としては見られたが、同形態をメインに戦う場面はほとんどなかった。しかし、惑星ラクスで行動した際には移動手段として同形態を頻繁に用いており、その特性は生かされていたと言える。また、同形態に限らないが、本機はVF-17Dと比較すると上昇力と機動力に優れ、武装と強度は劣っている。

サウンドフォースが結成された当初は、ガウォークでコンビネーションの訓練を行うこともあった。しかし、各機の連携が取れず、ミレーヌ機もバサラ機と激突する始末だった。

惑星ラクスに初めて降下した際や、マクロス7を飛び出したバサラの捜索に向かったときには、重力下の行動だったことからガウォーク形態を多く用いている。

◀主翼形状は異なるが、ガウォークへの変形機構はVF-11Cのそれとほぼ共通している。ファイター時に機体上面後部に位置する装甲板が左腕に付随して、シールドとなる。

▼腕部と脚部の展開機構もVF-11Cのガウォーク形態に準じているが、全体的に細身で曲線的なフォルムのため、外観の印象は原型機と大きく異なっている。

▼脚部が機体下方に展開し、バトロイド形態のバックパックを構成する部分が胴体側に残る。後部中央に突き出しているのは、ヘッドユニットの後頭部である。

バトロイドモード

VF-11MAXL改のバトロイド形態は、女性を模した外観が最大の特徴と言える。このデザインはミレーヌの要望によるもので、フェイス・プレートと胸部、腎部、脚部の外板プレートは超高級スポーツカーのカロッツエリアに特注して製作されたものだった。それだけに完成度は高く、本機を芸術品の域に達していると評する者もいたという。そうした外観の評価は別にしても、本機が特殊戦機に匹敵する性能を有していたことは事実で、対プロトデビルン戦においてそれを実証している。

VFらしからぬ華奢なフォルムと白にピンクというカラーリングから、戦場ではバサラ機に並んで一際目を引く存在だった。

VF-11Cで標準装備となったシールドは本機にも採用されており、ミレーヌも器用に使いこなしていた。なお、シールドの形状はVF-11Cとは大きく異なる。

両脚の腰部外側には新たに連装マイクロミサイルランチャーを内蔵している。基本的な構造はVF-19改のものと同じだが、装填されるミサイルはやや細めである。

▼スピーカーCLOSE時

▲内蔵式スピーカー・システムは胸部に位置し、使用時にカバーが開く。基本のレイアウトはVF-11Cと同じだが、女性的なデザインだけでなくクリップトデルタ翼の導入など細部に変更が加えられている。

▼バトロイドでは主翼を折り畳んでバックパックの一部とする。また、背部にはサウンドブースターのドッキングシステムを備える。

◀他のサウンドフォース専用機以上に擬人化の進んだフォルムは、本機が特殊な経緯で開発されたことを如実に物語っている。

VF-11MAXL改

歌声を時空に轟かす サウンド・エネルギー発振システム

プロトデビルン・グラビルとの戦闘では、バサラ機と共にグラビルのエネルギーフィールドを中和したサウンドフラッシュ現象を起こすなど、Dr.千葉さえも予測しなかった性能を示した。

サウンドブースターはサウンドフォースが出撃した後、Dr.千葉の指示で発進する。サウンドブースター搭載のラムジェット・ブースターによる加速で、速やかにランデブーが行われる。

データ(サウンドブースター)

所属▶地球統合軍
全長▶10.2m
全幅▶10.18m
空虚重量▶6,250kg
標準運用質量▶8,150kg
エンジン▶新星／P&W／ロイスFF-2550J×2、マクロス7技術班試製FF-2550J付属ラムジェット・ブースター×1（大気圏内およびスクランブル時に使用）
補助エンジン▶高高機動バーニア・スラスター P&W HMM-7
推力▶61,500kg×1（FF-2550J、宇宙空間瞬間最大出力）、29,700kg×1（ラムジェット・ブースター、最大推力では約2分30秒で燃料を消費）
機体設計強度▶プラス45.0G、マイナス35.0G
緊急速度▶(標準大気内高度10,000m)マッハ7.9+（ラムジェット併用緊急最大速力）
最大速度▶(標準大気内高度10,000m)マッハ4.5+(熱核ジェットのみ)
高高度最大速度▶マッハ29.5
離着陸距離▶0m（VTOL可能）
戦闘上昇高度▶無制限(地球クラスの惑星なら衛星軌道上のミレーヌ機とランデブー可能)
海面上昇率▶79,500m/min
戦闘行動半径▶(大気内)ほぼ無制限
乗員▶無人／リモートコントロール制御(非常時はAI自己制御)
装備▶固定武装なし／全自動ドッキングシステム／時空共振型サウンドエネルギー発振システム／大出力サウンドエネルギー変換増幅システム×1

サイズ比較

VF-1J
サウンドブースター
VF-19改

機体解説

VF-11MAXL改用のサウンドブースター2号機は、全3機が開発されたサウンドブースターの中でも、最も小型軽量の機体である。サウンドオーラ増幅装置や時空共振型サウンド・エネルギー発振システムなど、基本的な構造は1、3号機と同じだが、サウンドエネルギー変換増幅システムは1基のみ搭載されている(他の2機は2基搭載)。エンジンユニットはVF-19S用のFF-2550Jをデチューンしたもので、最大速度、機動性はサウンドブースター3機中で最も優れている。

主要パイロット

ミレーヌ・フレア・ジーナス

Illustration by Hidetaka Tenjin

▶VF-11MAXL改 ミレーヌ専用機

サウンドブースターセット時

サウンドブースターは、歌エネルギーを3次元空間で効率良く引き出すサウンドエネルギーシステム(サウンドエナジー変換システム)の効果を増幅する装置である。サウンドフォース専用機の追加装備として、Dr.千葉を中心とするマクロス7特殊技術班によって開発が進められ、マクロス7船団が惑星ラクスに滞留した際に実用化された。

サウンドブースターシステムOPENモード

サウンドオーラ増幅装置とサウンド・エネルギー発振システムを内蔵した2基のパネルが、可動アームによって180度回転し機体の左右に展開される。他の2機に比べるとシステムの展開方法が大きく異なる。

▲サウンドブースター
VF-11MAXL改用サウンドブースターは、ウィングレットを備えた全翼機といったフォルムが特徴。前部中央には複合センサーを備える。また、VF本体にはなかった統合軍のエンブレムがマーキングされている。

VF-11MAXL改の背部中央とサブバーニアユニットの左右に計5基のドッキングシステムが配されており、ブースター下面の対応したドッキングシャフトと連結する。

▲ドッキングシステム

サウンドブースターシステムCLOSEモード

ブースターはVF-11MAXL改の背面に密着する形でドッキングする。また、パネルを収納した状態では本体の背部サブバーニアがブースターで隠れるため機能が制限される。CLOSEモードでは尾翼も畳まれる。

関連事項

EXTRA REPORT

VF-11MAXL改の変形機構

VF-11MAXL改の変形機構は、原型機であるVF-11のそれを踏襲しているが、主翼が幅広のデルタ翼となったため、バトロイドへの変形時には主翼部が大きく移動し、背部ユニットを構成する行程が加わっている。またVF-11はバトロイドへの変形時、露出した頭部が180度回転するが、VF-11MAXL改ではその行程はなく、代わりに頭部が露出した後、フェイスガードが展開する。

1. 機首とその後方が展開し、胸部、腰部を構成していく。
2. 腕部ユニットが展開し、頭部が露出す
3. フェイスガードが展開。
4. 主翼が折り畳まれ変形が完了。

新コクピット

サウンドエナジー変換システムの完成に合わせて、各サウンドフォース専用機のコクピットは同システム対応型に換装され、VF-11MAXL改のコクピット構造も大きく変化した。従来のコクピットからの大きな改修点はサウンドエナジー変換バックパックが組み込まれたシート周りで、前面コンソールなどそれ以外の構造はほぼ変更されていない。この改修を機に、サウンドフォース各機が発揮する歌エネルギーは飛躍的に増大することとなった。

サウンドエナジーシステムを作動させることに初めて成功したのがミレーヌだった。システムは実験段階だったが、この成功でサウンドフォース機へと搭載された。

システムを通して生み出されたオーラフィールドは、機外だけでなくパイロットの周囲にも発生する。また、その色は唄う人間の感情によって異なる。

▶エネルギー変換バックパック
コクピットシートから分離し、バックパックとなる。また、バックパックは肩と脇のアームでパイロットの身体に固定される。

▼コクピット(ファイター/ガウォーク形態時)

▼サウンドエナジー変換バックパックがシートと一体化して背もたれになる。

▲サウンド・スティックを自在にコントロールできるだけの広いスペースが採られている。

◀パイロットから見た改修後のコクピット。ベース型サウンド・スティックがアームでバックパックに繋がっている。

▼コクピット(バトロイド形態時)

バトロイド時のコクピットレイアウトも、改修前とほとんど変わらない。バトロイドへの変形に合わせコクピット内部が90度回転してパイロットの水平方向を維持し、密閉状態のキャノピー前面に外部を映す複数のスクリーンが展開される。

フォールド・ブースター

VF-11MAXL改をはじめとするサウンドフォース専用機は、2040年代初頭のスーパー・ノヴァ計画で実用化が図られたフォールド・ブースターを用いての単独フォールド性能を有していた。ただし、バロータ軍やプロトデビルンに狙われるマクロス7船団からサウンドフォースが離れるわけにはいかず、このフォールド・ブースターが運用されることはほとんどなかった。数少ない運用例としては、辺境惑星に向かったバサラを捜索した際に用いたケースが挙げられる。

フォールド・ブースターの形状や構造は、スーパー・ノヴァ計画で開発されたもの(FBF-1000)とほぼ同じ。4本のパイロンで機体に接続される。

歌エネルギー探知器が反応した謎の歌声を探して船団を飛び出したバサラを追い、レイたちと共にフォールド・ブースターを使って辺境惑星に向かった。

▶サウンドブースターの上面ハードポイントにフォールド・ブースターが接続される。VF-11MAXL改本体に直接装備できるかは不明。

◀▶VF-11MAXL改は元々スマートな機体だが、ブースター2種を装備するとかなりのボリュームとなる。

FBz-99G

機体解説

FBz-99Gは、鹵獲したマクロス5船団の機体をベースとして、バロータ軍が独自の改造を加えた大型可変戦闘機である。その原型は2042年から配備が始まったノースロム社製の可変戦闘爆撃機VAB-2シリーズのタイプD、ゼントラーディ人パイロット用改修機と推定される。地球統合軍が培ってきた開発技術とプロトデビルンの未知の技術が融合した本機は、多数の兵器を搭載しており、原型機のコンセプトに沿って進化した機体であった。

データ

※データは重爆撃機形態時のもの

所属 ▶ バロータ軍

全長 ▶ 18.18m

全高 ▶ 22.95m（重バトロイド時）

全幅 ▶ 37.81m

空虚重量 ▶ 22,600kg

エンジン ▶ 新中州重工／ダイムラー FF-2200G×4ロイス／ダイムラー FR-60C熱核ロケットエンジン×2（重バトロイド時機動補佐用）

巡航速度 ▶ M3.8+（大気内）

推力 ▶ 52,500kg×4（FF-2200G）／24,600kg×2（FR-60C）

武装 ▶ スピリチアスパーク砲×1／スピリチア吸収ビーム砲×1／隠顕式対空ビーム砲×4／パルスビーム砲×2／マイクロミサイルランチャー×22／ロータリーミサイルランチャー×2／肩部ミサイルランチャー×2／他

サイズ比較

VF-1J

FBz-99G

20m　15m　10m　5m　0m

主要パイロット

ガビル

開発系譜図

VAB-2D ▶ FBz-99G

統合軍戦闘爆撃機をベースとした
指揮官用大型可変戦闘機

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet
メカニックシート

FBz-99G ザウバーゲラン

運用記録

FBz-99Gは2045年12月頃、バロータ軍の可変戦闘機部隊の指揮官機として戦線に姿を現した。以降、数度に渡りマクロス7船団を急襲し、サウンドフォースやダイヤモンドフォースらと交戦。その圧倒的な火力で船団の戦闘機部隊を苦しめた。なお、確認された機体は現在のところプロトデビルンのガビル専用機のみであることから、同機は指揮官クラスのパイロットに与えられた高級機であり、機体数はそれほど多くなかったものと推測される。

プロトデビルンのガビルが駆るFBz-99Gは、洗脳したマクロス5船団の兵士たちを率い、幾度もマクロス7船団を急襲した。

プロトデビルンとして生身でも高い戦闘能力を有するガビルだが、戦いに対して独自の美学を持っていたため、FBz-99Gに搭乗して戦闘を指揮することが多かった。

ファイターモード

「戦闘爆撃機モード」とも呼ばれる形態。元々ステルス爆撃機として設計されたVAB-2Dの豊富なペイロードを利用し、無数のビーム砲とミサイルランチャーを装備している。複数の高出力レーザーを同時に発射できるだけの出力は、プロトデビルンの未知の技術によるものと推測される。

主翼上の大型インテークが特徴的な機体は、大型ながら大気内外の運動性、最大速度ともVF-11と同水準の能力を有していた。

▲大型の翼とW型の翼後縁が特徴的。底部には脚部、腕部などが収納され非常にフラットな状態となる。

機体構造

武装

Ⓐスピリチアスパーク砲
コクピット後方に配置された本機独自の新兵器。パイロットであるガビルのスピリチアエネルギーをエネルギー光弾として発射する。

Ⓑ隠顕式対空ビーム砲
シェルター型インテーク上部に各2門ずつ収納されている対空ビーム砲で、アームによって自在に向きを変えられる。

Ⓒマイクロミサイルランチャー
両翼に各11門ずつ備え付けられたマイクロミサイルランチャー。バトロイド形態時は、肩部側面に設置される。

Ⓓパルスビーム砲
機体底部の、マイクロミサイルランチャーの裏に位置する内蔵式ビーム砲。バトロイド形態時は腕部より発射可能となる。

Ⓔロータリーミサイルランチャー
機体底部に位置し、通常は収納されているミサイルランチャー。重バトロイド形態時は、露出した状態で胴体に設置される。

コクピット

他のバロータ軍VFと比べ、幅が広めのコクピットブロック。プロトデビルンであるガビルに合わせた仕様のためか、触角を思わせるセンサー類が配置されている。

バトロイドモード

「重バトロイドモード」とも呼ばれる形態。パイロットのガビルは、戦場では主にこの形態でドッグファイトを行っていた。非常に大柄で、VF-19のバトロイド形態の約1.5倍の頭頂高を誇る。両腕部内にパルスビーム砲を内蔵しているためか、VFの基本兵装であるガンポッドは装備していない(元々ガンポッドの運用が想定されていないとも推察されるが、あるいは操縦者のガビルの"美学"によりガンポッドを携行していないのかもしれない)。可動するメインノズルを利用し、空中静止や垂直上昇などのガウォーク的な立体機動も可能であった。

サウンドフォースには通常兵器が有効だったため、多彩な通常兵器を持つFBz-99Gは彼らにとって天敵とも言える存在となった。

隠顕式対空ビーム砲など多種多用な兵器を搭載。さらに最大60tを超える追加兵装を計6基のハードポイントに装備することが可能であった。

▼重バトロイド形態時のエンジンブロックや兵装は肩部周辺に集中する。なお、メインノズルは下方に向けてVTOL噴射も可能。

変形シークエンス(戦闘爆撃機形態➡重バトロイド形態)

1
戦闘爆撃機形態より
Ⓐエンジン前方のパネル折る
Ⓑマイクロミサイルランチャーを後方へスライド

2
Ⓐ頭部せり上がる Ⓑ腰と脚を下方に曲げる
Ⓒサブノズル露出 Ⓓエンジン後部80度折れ曲がる
Ⓔ主翼下方に折る

3
Ⓐミサイルランチャー回転しながら露出
Ⓑ上腕部収納シャッター開く Ⓒ腕部下ろす Ⓓ手首部、延伸

4
Ⓐ肩ブロックせり上がる Ⓑ対空ビーム砲露出
Ⓒスピリチアスパーク砲起き上がる Ⓓインテークカバー閉じる
Ⓔ胸部一段下方へ Ⓕ腰前面パネル展開 Ⓖ脚部スライド·延伸
Ⓗ指露出 Ⓘ頭部起き上がる
重バトロイド形態へ

シティ7民間車両

マクロス7船団で利用された船内外兼用車両

▼トレーラー型シャトル
車体後部が大型のカーゴとなっているトレーラー型シャトル。カーゴ部分はバトロイド形態のVFを搭載できるほどのスペースを有している。

主要使用者
レイ・ラブロック

▶トラック
曲線的なデザインが特徴の船内外兼用トラック。車体の後部に可動式のノズルを備え、その他にも複数のロケットノズルを配している。

▲大型トレーラー
民間用の貨物車としては最も大きな部類に入るトレーラー。牽引車の大きさもさることながら、トレーラーの巨大さが特徴である。

船団内をシームレスに移動できる手段として利用された。特に貨物車は物流を担い、移民船団の維持に貢献した。

宇宙用バイクはホビーから生活用途まで幅広く用いられた。バイカーの中には、危険走行を行う者もいた。

▲宇宙用バイク
スポーツタイプ(ヨーロピアンタイプ)の宇宙用バイク。後部にバーニアを備え、宇宙と路面走行の双方で優れた操縦性を発揮する。

主要使用者
レックス

機体解説

マクロス7船団では、船団内の各艦を行き来するために宇宙艇の機能を備えた車両が主な交通手段となっていた。その種類は実に多彩で、大型車から小型二輪車まで、用途に応じた様々な車両が利用されていた。ここで解説する民間用貨物車と宇宙用バイクもその一部であり、これらが宇宙空間ハイウェイ「ミルキーロード」を行き交う様は、マクロス7船団の盛んな都市活動を物語っていると言えるだろう。

Mechanic Sheet
メカニックシート

シティ7民間車両

運用記録

船内外兼用車両は、宇宙艇などと共にマクロス7船団の交通を担った。用途に合わせて車両をレンタルできるショップも存在し、Fire Bomberのレイ・ラブロックは、熱気バサラのVF-19改と共に船団内を移動するためトレーラー型シャトルを借りることもあった。一方、宇宙用バイクは熱気バサラと懇意にしていた女性バイカー集団「Teamレックス」が愛用。メンバーによってそれぞれタイプの異なるバイクが確認されている。

Fire Bomberはスリースターでのライブや「リン・ミンメイ物語」の撮影に向かう際にトレーラー型シャトルを利用した。

トレーラー型シャトル

窓がない密閉式の牽引車とトレーラーを組み合わせた船内外兼用車両。Fire BomberはこのシャトルでバサラのVF-19改を運んだが、スリースターのライブではFz-109 エルガーゾルンがレンタル車に突っ込み、大破している。

▼図は船内走行時のタイヤを出した状態で、宇宙空間ではタイヤを車内に収納する。

カーゴ部分

▼展開時

大きな積載スペースを持つカーゴは、上部が2重ハッチとなっている。側面下部中央には、搭載された宇宙用バイクを車外に出すためのハッチとアームが設けられている。

カーゴ内部

◀コンソールパネル

▶エレベーター

▲カーゴ内部にはバトロイドモードのVFを支えられる可動パネルを備える。また、側面にはバイク用のエレベーターと操作用コンソールがある。

キャビン

キャビンは前側に操縦席と助手席がレイアウトされている。後部にはシートやテーブル、モニターがあり、5～6人程度を収容できる。

▲コンソール

大型トレーラー／トラック

大型トレーラーはスリースター～シティ7間などで利用されていたもので、トラックはFire Bomberのライブ機材を運ぶためにスタッフが用いた。貨物車ひとつを取っても多種多様な車両が存在していたのがわかる。

▶大型トレーラー

◀▼バンパーの高さが人間の身長とほぼ同じという巨大な車両で、カーゴのサイズも桁外れである。

◀トラック

◀▲後部に可動ノズルとホイールに姿勢制御用ロケットノズルを備え、底部には着地用ノズルを有する。

宇宙用バイク

Teamレックスのバイクは操縦性を重視したヨーロピアンタイプ（前傾姿勢で乗る形式）で、トレーラー型シャトルに車載されていた一般用は、スクータータイプである。

▼レックス用

▼▶下図はレックス用バイクのハンドル。右図はバーニア周辺のアップ。

▼ミケ／コレット用

▼バーマン／ティム用

▲宇宙用バーニア

▲▶一般用

シティ7民間車両

Fire Bomberのプロデューサー、アキコが所有していたスポーツカー。

▼アキコのスポーツカー

▼ミレーヌのオープンカー

ミレーヌのスポーツカーで、丸みを帯びたボディが特徴である。

ガムリンが所有する屋根付きのスポーツカーで、大型のリアウイングが特徴。

▲ガムリンのスポーツカー

宇宙空間を走行できる ミルキーロード対応型車両

機体解説

複数の大型艦艇で編成された第37次超長距離移民船団マクロス7（マクロス7船団）では、人々が移動に乗用車を用いた。この時代に使われていた標準的な乗用車は、宇宙空間ハイウェイ「ミルキーロード」にも対応しており、艦内の移動だけでなく、艦と艦との移動にも使われた。民間人が所有する乗用車も大半がミルキーロード対応型となっており、その利便性は非常に高いものとなっている。

ミルキーロード対応型は、時代に合わせて進化した新たな自動車と言える。

操縦には免許が必要だが、ミレーヌは10歳で免許を取得している。

主要使用者

ミレーヌ・ジーナス　ガムリン・木崎　北条アキコ

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶シティ7民間車両

運用記録

マクロス7船団内では、商業用、民間用、軍事用として多数の車両が使われた。民間用はスポーツカータイプ、ワゴンタイプなど、そのデザインや機能も多彩で、単なる移動手段ではなく、ひとつの文化として成立していたようである。

艦内では通常のエンジンを、宇宙空間ではロケットエンジンを使用する方式となっている。また、底部にVTOL用のスラスターノズルを備えるのが特徴である。

ミレーヌのオープンカー

フェリーニ社製のオープンカーで、マクシミリアン・ジーナスが、娘のミレーヌの誕生日にプレゼントしたもの。軽量小型なライトウェイトスポーツカー。

◀正面

▼後部

▲▶車体各所に宇宙空間用のバーニアを設置。また、雨天時や宇宙空間ではキャノピーでシート部を覆う。

趣味がドライブであったミレーヌの愛車として、シティ7を駆け回る姿が確認されている。

ガムリンのスポーツカー

ガムリン・木崎が愛用するスポーツカーで、ガルウイング方式を採用している。車内には後方確認用のモニターも設置。

ガムリンがプライベートの足として使用。ミレーヌとのデートにも用いた。

▼底部
底部に設置されている円形のパーツは、飛行用のスラスターだ。

内部構造

天井部やバックミラー、ダッシュボード部分にモニターを設置。後方や周囲の状況を瞬時に確認できるシステムが積まれている。

◀ステアリング

▼天井部

▶ドア

◀車内

アキコのスポーツカー

北条アキコが所有するスポーツカーで、仕事とプライベート双方で利用した。小型で小回りの利くタイプとなっている。

▲底部

▶後部

売れっ子プロデューサーの移動手段として運用された。

スポーツカー

4～5人乗りのスポーツカー。モニターと車載電話を備えた仕様である。

◀車内
この時代の乗用車は左ハンドルが主流で、本車両も左側に設置されている。

ワゴン

6～7人が搭乗できるタイプで、荷物の運搬にも適している。こちらも様々なタイプが運用されていた。

◀ワゴンB

▶ワゴンB内部

レイ・ラブロックが所有するワゴンは、Fire Bomberの移動手段でもあった。

◀ワゴンC内部

◀ワゴンA

▼ワゴンA内部

▲ワゴンC

EXTRA REPORT

関連事項

スピリチア吸収装置付きワゴン

プロトデビルンが人類のスピリチアを奪うために使用した改造車両。専用のスピリチア吸収装置を装備している。

▼吸収装置

屋根からスピリチア吸収装置が露出する仕組みで、ミレーヌらのスピリチアを狙った。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-17T改

機体解説

Fire Bomberのレイ・ラブロックとビヒーダ・フィーズが搭乗するサウンドフォースの特殊仕様機が、このVF-17T ナイトメア改(以下、VF-17T改)である。複座型練習機のVF-17T ナイトメアをベースに改造が施された本機は、サウンドフォース専用機として必要なサウンド・ジェネレーターや大気圏内用スピーカー・システムなどを標準装備していた。さらに、本機に搭載されたサウンド・ジェネレーターは同部隊のバサラ機やミレーヌ機のものに比べて大出力かつ大容量で、2機に問題が生じた際にはこれをカバーすることを想定した設計であった。また、VFとしての基本性能はベース機であるVF-17Dとほぼ同等だったが、頑強な機体構造によって優れたサバイバビリティを誇る機体でもあった。

データ

所属▶地球統合軍
全長▶16.13m
全高▶調査中(バトロイド時全高:15.65m)
空虚重量▶12,200kg
エンジン▶新中州／P&W／ロイスFF-2100X×2
エンジン推力▶59,500kg×2
補助エンジン▶高機動バーニア・スラスター P&W HMM-6D
巡航速度▶M4.0+(標準大気圏内高度10,000m時)／M21+(高度30,000m以上時)
戦闘上昇限度▶地球クラスの惑星なら衛星軌道までの進出が可能
武装▶内蔵式スピーカー・システム／スピーカー・ガンポッド標準装備／中口径ビーム砲×2／内蔵式マイクロミサイルランチャー×4

サイズ比較

VF-1J
VF-17T改

開発系譜図

VF-17D ▶ VF-17T ▶ VF-17T改

主要パイロット

レイ・ラブロック
ビヒーダ・フィーズ

バサラとミレーヌを支えた サウンドフォースの要

▶VF-17T ナイトメア改

運用記録

ゼネラル・ギャラクシーとマクロス7特殊技術班によって改造が行われたVF-17T改は、サウンドフォースの隊長に任命されたレイの乗機とされ、ビヒーダも同乗した。前線では、フォーメーションを指示すると同時にバサラ機とミレーヌ機をサポートすることが多く、精神操作を受けたバロータ軍兵士やプロトデビルンに効果を示すボーカルの2機に比べ、目立った戦果は挙げていない。だが、バロータ星系第4惑星への突入作戦をはじめとする激戦の中にあって隊の一角を守り続けるなど、サウンドフォースに欠かせない機体であった。対ゲペルニッチ戦でも隊で唯一無事に帰還し、サバイバビリティの高さを証明した。

民間協力隊の所属機のためか扱いは比較的自由だったようで、Fire Bomberのライブでディスプレイされることもあった。

対ゲペルニッチ戦ではビヒーダのドラミングだけで歌エネルギーを発生させ、グラビルを退けてミレーヌ機の危機を救っている。

標準装備

サウンドフォース専用機への改造にあたり、多目的ガンポッドがスピーカー・ガンポッド(ランチャーポッド)に換装され、頭部レーザー機銃が廃された。ただし、ベース機のVF-17Tの固定武装である中口径レーザービーム砲と内蔵式マイクロミサイルランチャーは装備されたままとなっている。

通常兵器は一度も用いずに、バサラ機とミレーヌ機のサポートに徹した。ときにはスピーカーポッドγ(ガンマ)を運搬する役割も担った。

▲スピーカー・ガンポッド
スピーカー・ガンポッドは手持ち式ではなく右脚部に収納され、ファイター形態の機体下面右に砲口が露出する。右図はシャッターが閉じた状態。この構造はベース機のVF-17と同じである。

▶中口径レーザービーム砲
バトロイド形態の手首下に中口径ビーム砲を内蔵している。変形構造上、ファイター形態では機体後方を向いた状態となるが、前後どちらに向けても発射できる(前方発射時にはヒジ部分のカバーが開く)。レイ達が使用したという記録はない。

コクピット

コクピットは複座式で、前席がレイ用のキーボード型のサウンド・スティックコントロール、後席がビヒーダ用のドラム型のサウンド・プレートコントロールという2種類の操縦系を採用している。基本的には前席のレイが操縦を担当したが、後席からの機体制御も可能である(サウンド・プレートの設計は難航したと言われる)。また、のちにサウンドエナジー変換バックパックが組み込まれたシートへと改装されている。

◀サウンド・スティックコントロール

▶サウンド・プレートコントロール

ファイターモード

VF-17T改のファイター形態は、VF-17シリーズの特徴であるステルス性を重視したフォルムを踏襲しており、ベース機とほぼ同じ形状である。また、各種装備の追加によって機体重量が増大しているが、エンジンをVF-17Sと同じ改良型のFF-2100Xに換装することで機動性を確保している。

▶複座型コクピットを有するため、VF-17シリーズの単座機に比べて機首部分が大きくなっている。主翼根元の機体側面に空いたふたつの穴は、マイクロミサイルランチャーの発射口である。

実際の運用では、他のサウンドフォース機と同じように、戦場に急行するための高速移動形態として用いられることが多かった。

◀機体下面は凹凸を極力減らした形状で、スピーカー・ガンポッドの砲口も通常はステルス兼整流シャッターが閉じられている。また、大気圏外ではインテークハッチを閉じる。左図はエアインテークが閉じた状態。

▲▶偏平なフォルムはレーダーからの隠密性を高めるためのもので、尾翼を持たない点も特徴のひとつ。主翼は可変構造を有する。

▶メインノズルはベクタードノズルで、左右に可動する構造となっている。なお、本機はVTOL(垂直離着陸)機能を有する。

ガウォークモード

VF-17シリーズは肘部にレーザービーム砲を備えることから、ガウォーク形態でも腕部を折り畳んだ状態で運用されるケースが多い。VF-17T改は肘部のレーザービーム砲を使用したケースはなかったが、系列機同様、ガウォーク形態では腕部を折り畳んだまま運用されることがほとんどだった。スピーカー・ガンポッドを用いる際には腕部を展開する必要があるが、本機がガンポッドを使用するケースは少なく、サウンドフォースにおいてはガウォーク形態の必要性自体が他形態に比べて低かったとも考えられる。

▼主翼と上部ユニット(バトロイド形態でのバックパック)は後方に突き出したまま固定される。なお、腕部を折り畳んだ状態では、マニピュレーターは展開されない。

▲脚部を展開し、肩部ブロックを反転させて腕部を前方に移動させる。VF-17の一般仕様機はこの形態で肘のレーザービーム砲が使用可能だが、VF-17T改はバロータ軍との戦いでもビーム砲を使用しなかった。

ガウォークでコンビネーションの訓練を行った際には、ビヒーダが勝手に操縦して転倒、さらにビルに激突する場面も見られた。

他の機体に見られるガウォーク形態本来の運用がなされることは少なく、ファイターからの急制動や変形の中間形態として扱われるケースが多かった。

惑星ラクスでガビルが率いる部隊の攻撃を受けた際に被弾して飛行不能となった本機は、ガウォーク形態で不時着し、難を逃れている。

バトロイドモード

バトロイド形態は、サウンドフォース専用機に共通する人間の顔のようなフェイス部と、VF-17シリーズから受け継いだ重装甲が特徴である。機体設計強度も+33.5G/−18.0Gと高く、サウンドフォース専用機の中でも突出した強度を誇った。また、バトロイドに変形して初めて胸部の内蔵スピーカー・システムが機能することから、この形態で戦闘に参加、つまり演奏することがほとんどだった。

サウンドフォースの結成式で披露されたVF-17T改。他の2機に比べると地味ではあるが、「顔」を持つVFが並んだ様は壮観であった。

重装甲が特徴だが、後方で僚機のフォローに務めたことや、レイが高い操縦技術を有していたことから、実際に被弾するケースは少なかった。

▼VF-17T改　▼VF-17D

◀▲VF-17の一般仕様機と比較して、頭部形状が大きく異なるほか、スピーカー・システムを搭載するため胸部が大型化している。また、肘部分の形状もわずかに変更されており、肩部内のバーニア・スラスターも廃されている。

▲右膝部内側にあるのが、スピーカー・ガンポッドの砲口である。

▲ファイター時の機体後部と主翼からなるバックパックには、サウンド・ブースターのドッキングシステムが設けられている。

VF-17T改

バサラとミレーヌを支えたサウンドフォースの要

機体解説

サウンドフォースの専用機として改造されたVF-17Tナイトメア改は、機体内に搭載されたサウンドジェネレーターにより、単機でサウンドエナジーを生み出すことが可能であった。しかしながら同機の投入の時点でバロータ軍との戦闘が激化していたこともあり、VF-17T改は常に追加装備であるサウンドブースター 3号機が帯同する形で運用されていた。サウンドフォースのバックアップを担当していたVF-17T改は、サウンドエナジーを発生させる機会は少なかったが、バロータ軍との最終決戦において大破した僚機を守るため、VF-17T改のコパイロット、ビヒーダ・フィーズがドラミングのみでサウンドエナジーを発生させる姿が目撃されている。

サイズ比較

主要パイロット

バロータ軍との最終決戦において、大破したミレーヌ機をかかえ、サウンドエナジーを発生させるVF-17Tナイトメア改。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-17T ナイトメア改

サウンドブースターセット時

VF-17T改は、サウンドブースター3号機とドッキングできる。その際には、時空共振型サウンドエナジー発振システムや2基の大出力サウンドエナジー変換増幅システムが使用可能となり、重量増加で機動性は低下するものの、VF-17S並みの水平速度を発揮できる。また、サウンドエナジー変換増幅システムの出力は3機の中で最も大きい。

VF-17T改のサウンドブースターはゼネラル・ギャラクシー社とマクロス7特殊技術班の共同開発。惑星ラクス滞留時に実用化された。

対ゲペルニッチ戦でオーラフィールドを発生させるVF-17T改。バサラとミレーヌを欠くも、サウンドフォース機で唯一帰還を果たした。

▲サウンドブースター
サウンドブースターの中では最も大型で、翼部外側に化学燃料ロケット・モーター（新中州重工製CR-F60A）2基と、翼部内側に熱核タービンエンジン（新星/P&W/ロイス製FF-2025F、VF-11のものを改装流用）を備える。

▲前方から見た図。エンジンナセルには小型の外翼を2枚ずつ、底面中央には複合センサーを備える。

▲上面先端部にも複合センサーを設置。翼部外側ナセルにはベクタードノズルを、内翼にはフラップとエアブレーキ兼用の2次元型ジェットノズルを装備した。

サウンドブースターシステム OPENモード

▼▶双胴式のエンジンナセル先端部が分割されて腰部に接続し、ナセル基部側と共にサウンドエナジー発振システムのスピーカーとして働く。また、ブースター側のエンジン4基は本体の推進装置として機能する。

サウンドブースターは大気圏内では熱核ジェットエンジンで、宇宙では熱核ロケットによる飛行が可能となった。

VF-17T改用サウンドブースターは、強度面においてバサラ機、ミレーヌ機を上回るものとなっている。

サウンドブースターシステム CLOSEモード

▲▶ドッキング時にはブースターの中央胴体部がVF-17T改の背部に密着した状態となる。また、CLOSEモードではサウンドエナジー発振システムがナセル側に一体化したままだが、その他のユニット配置はOPENモードと同じである。

ドッキングシステム

◀左はVF-17T改の背部、右はサウンドブースターのドッキングシステムの拡大図。ドッキング時にはブースターの中央胴体部が90度引き起こされ、展開されたシャフト（青色部分）を介し接続される構造であった。

新コクピット

サウンドエナジー変換システムが完成、搭載されたことにより、レイとビヒーダの乗るVF-17T改の複座式コクピットも、他のサウンドフォース機と同じく、システムの運用に対応したタイプへと改修された。基本的なレイアウトに関しては改修前と同じだが、シートの背もたれにあたる部分がエネルギー変換バックパックを備えた仕様となっており、取り外しも可能となっている。また、その分離構造自体はVF-19改、VF-11MAXL改のものと共通の規格を採用していた。

コクピット全景

▶後方から見た新コクピット。システムの搭載により、シート形状が大きく変わっている。前席にあるサウンド・スティックコントロールの支持アームも確認できる。

サウンドエネルギー変換バックパックの基本的な構造はVF-19改やVF-11MAXL改のものと同じだが、細部は異なっておりサイズもやや大きい。

前席（レイ・ラブロック専用席）

▲レイの体型に合わせて設計されたと見られ、彼の身体にフィットしたコクピットとなっている。これにより、演奏及び機体コントロールがスムーズに行える。

◀機首側から見た前席のレイアウト。シート座面の形状が変更され、前部にレバーが追加された。また、シート左側のコンソールブロックの構造も変わっている。

▶シート後方から見た前席レイアウト（サウンド・スティックは省略）。キャノピーや足元のスクリーン、メインモニターパネルの配置は改修前と変わらない。

VF-17T改のコクピットからサウンドブースターの起動操作を行うレイ。サウンドブースター各機の操作システムは、VF-17T改から管理できるように設定されていた。また、レイたちは軍の機材であるバックパックをFireBomberのライブで使うこともあった。

後席（ビヒーダ・フィーズ専用席）

▲後席側のバックパックは、身長が2mを超えるビヒーダの体型に合わせて設計されているためサイズが非常に大きく、胸当て部分の形状も異なっている。

◀機首側から見た後席のレイアウト（前席は省略）。

▶シートを取り囲むフレームに、デジタルドラムセットを模したサウンド・プレートコントロールが配置されている。シート後方の円形機器は[illegible]である。

後席のビヒーダは操縦をレイに任せてドラム演奏に集中することが多かった（構造上は後席からでも機体のコントロールは可能となっている）。対ゲペルニッチ戦でミレーヌが負傷した際には、ドラミングだけで歌エネルギーを発生させ、モニターしていたDr.千葉を驚かせた。

統合軍艦艇をベースとした
バロータ軍の大規模艦隊

全長4,000m超の大型空母を旗艦とするバロータ艦隊。スピリチアの供給源であるマクロス7船団を狙い続けた。

◀艦隊旗艦宇宙空母

艦体解説

かつてプロトカルチャーを壊滅に追いやったものの、バロータ星系に封印されたプロトデビルン。復活した彼らはバロータ星系調査団と護衛のブルーライナセロス隊、さらにバロータ星系に移住を開始していたメガロード13の乗員などを洗脳して操り、バロータ軍を編成した。戦闘可能な人員だけでも数十万人規模とも言われるバロータ軍は、統合軍機をベースに改修した大小500程の艦船で、大規模な艦隊を編成。艦隊旗艦宇宙空母に常駐するゲペルニッチを最高司令官とし、プロトデビルンが生きるために必要とする生体エネルギー「スピリチア」の奪取に乗り出した。

A.D.2045年、マクロス7船団と遭遇した彼らは、工作員を派遣するなど小規模な作戦行動を開始。のちにマクロス5船団をも取り込んで大規模化した艦隊は、惑星ラクスにおいてマクロス7船団との大規模な艦隊戦を展開した。

サイズ比較

SDF-1
艦隊旗艦宇宙空母
新鋭巨大空母
バトロイド大型輸送母艦
突撃艦
標準戦列戦艦
高速遊撃巡宙艦
前衛フリゲート艦

判明している艦種

- 艦隊旗艦宇宙空母
- 新鋭巨大空母
- バトロイド大型輸送母艦
- 突撃艦
- 標準戦列戦艦
- 高速遊撃巡宙艦
- 前衛フリゲート艦

バロータ艦隊

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶バロータ艦隊

艦隊旗艦宇宙空母

もともとはバロータ星系移民を大規模な外敵から守るために設計、建造された、シティ7の半分ほどもある超大型艦隊指揮戦闘空母。単艦で大規模な艦隊に匹敵する攻撃力、戦艦並みの機動力と加速能力を備え、単独で小規模の(と言っても1,000隻以上となる)ゼントラーディ艦隊を殲滅する能力がある。

10ギガトンクラスの反応弾頭24個を搭載した対艦隊用超大型反応弾頭ミサイル8基を主力兵装とし、マクロス・キャノン8門を主砲として装備。他にも多数のビーム砲や近接ミサイル・ファランクスを各所に備えている。また、可変戦闘機を500機以上運用可能であり、これは通常規模の正規宇宙空母2〜3隻に相当する。

500程で構成される艦隊を率いる艦隊旗艦宇宙空母。なお、最高司令官ゲペルニッチが搭乗する同艦は「ゲペルニッチ艦」と呼称されることもある。

●データ
全長▶4,320m
運用質量▶3億2,000万t
瞬間最大加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
標準武装▶対艦隊用超大型反応弾頭ミサイル×8　他多数
艦載機▶400〜500機程度

▲U字型とも言える特異な形状。指揮、動力系システムは艦体後部中央に集中しており、左右に伸びた艦隊前部が巨大なドック兼艦載機射出口、格納庫となっている。

◀艦体後部中央にあるブリッジ。その下部には、主力兵装の対艦隊用超大型反応弾頭ミサイルと攻撃用主砲システムが配置されている。

▼ブリッジ内部

▲最高司令官であるゲペルニッチが搭乗する、特異な意匠が施されたブリッジ内部。優れた艦隊統合指揮システムを設置しており、数百隻規模の艦隊の戦闘指揮が可能である。

新鋭巨大空母

バロータ軍が戦争最終局面で投入した新型の宇宙空母。バロータ軍は各戦闘艦に可変戦闘機を搭載していたが、最終的には専用空母の必要性を認め、急遽建造されたのが同艦である。

1,000mを超える大型艦であり、反応ミサイルランチャーや大口径ビーム砲、近接ミサイル・ファランクスなどを多数装備した同艦は、空母ながら重巡洋艦クラスの火力を有している。なお、200機程度の可変戦闘機を搭載運用するが、両舷に4基ずつの開閉式スクランブル・カタパルトデッキを備え最大24機の可変戦闘機を同時に射出することが可能であり、搭載数全機200機を展開するまで20分程度しかかからない。

●データ
全長▶1,356m
運用質量▶250万t
瞬間最大加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
標準武装▶反応ミサイルランチャー　他多数
艦載機▶可変戦闘機160〜200機程度

▲◀ブリッジのほか、反応ミサイルランチャーや大口径ビーム砲といった主力兵装が艦体前部に集中しており、艦体中央〜後部はスクランブル・カタパルトデッキとなっている。

▼カタパルト

開閉式の大型スクランブル・カタパルトデッキ。それぞれ可変戦闘機が同時に3機発進可能となっており、他の艦にはない艦載機展開能力を発揮する。

▶正面から見た艦体。ちなみに後部下半部はエンジン区画、上部は格納庫区画となっている。

▲艦尾噴射口

ギギル艦

「ギギル艦」として知られるこの突撃艦は、標準戦列戦艦の設計を基に総合性能の強化を図った艦である。エネルギー転換装甲を2重とし、大型ビーム砲を装備するが、運用重量が原型艦の倍以上になり、当初予定していた原型艦用エンジンの強化型では満足な速力を確保できなくなった。また、要求される出力も増大したため、新規設計のエンジンを採用した結果、原型艦の3倍を超える運用重量の大型艦となっている。優れた性能を有しているが、標準戦列戦艦の10倍以上という高コスト故に生産数は少なく、バロータ軍の保有数は12隻だったとされる。

艦隊を率いるギギル艦。小規模艦隊の指揮機能も有しており、バロータ軍の切り札として運用され、マクロス7船団に対しては先鋒として投入された。

●データ
全長▶864m
運用質量▶60万t
瞬間最大加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
標準武装▶大口径砲(大型ビーム砲)×2/ミサイル×多数
艦載機▶60～80機程度

◀艦首マーク

▼▶艦後方の上半部が格納庫区画で、尾部開放部は格納庫のオープン式ゲートである。格納庫区画の下側がエンジン区画となっている。

ブリッジ

上がブリッジ内部の前方、下が後方を示した図。正面に窓兼用の大型スクリーンと、その対面に艦長席が位置し、床面に埋め込み式のオペレーター席が並んでいる。

▲艦体は直線多面体構成のステルス設計で、武装はほとんどが内蔵式となっており、艦側面中央には大口径砲のレンズ部が露出している。

◀艦首に艦載機発進口を、前上部にイージス・ヘッドと呼ばれる大規模センサーを配している。また、艦後部の上下に位置するフィン状の構造物は放熱板である。

標準戦列戦艦

バロータ軍の主力艦として運用される量産型戦艦で、バロータ軍艦艇に共通する板状に配したエネルギー転換装甲を特徴としている。大量生産によって生産コストが抑えられており、運動性能などは同時期の地球側艦艇の平均的な水準に等しい。一方、当初のバロータ軍が専用空母を保有していなかったこともあって、本艦には最大40機程度の可変戦闘機を運用できる性能が付与されており、2～3隻が共同作戦を行うことで正規空母に相当する艦載機展開能力を発揮した。なお、バロータ軍は57隻の標準戦列戦艦を保有していたと言われている。

マクロス7船団と艦隊戦を行うバロータ軍標準戦列戦艦。大規模艦隊を構成する戦力としての運用から、単艦での陽動任務まで、幅広い局面で用いられた。

●データ
全長▶600m
運用質量▶18万t
瞬間最大加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
標準武装▶主砲×2/副砲×多数/対艦大型ミサイル×多数
艦載機▶30～40機程度

◀艦首の艦載機発進口や艦体後部の放熱板は、突撃艦に継承された設計を窺わせる。

◀艦首艦載機発進口は大型機用となっている。また、艦体の前半分が板状構成の装甲で覆われている。

▶艦尾の開放部は、上が非常シャッターを備えた格納庫ゲートで、下がエンジン区画の推進ノズル。

武装

A 主砲
主砲は発射口が艦体側面のやや後方寄りに位置しており、偏向フィールドでビームをねじ曲げて照準を行う。

B 副砲
艦体前部左右に4基ずつの副砲を備える。発射方法や発射口のみが露出した構造は主砲と同じである。

C ミサイル
艦前方下部はスライド式のミサイル弾倉で、後ろから順にせり出し、1基につき9発の対艦大型ミサイルを内蔵する。

D カタパルト
艦前方上部はFz-109 エルガーゾルンなどの通常艦載機用カタパルトで、後部から順に1機ずつ発進する構造。

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶バロータ艦隊

高速遊撃巡宙艦

航行性能を重視した設計の軽宇宙巡洋艦で、バロータ軍艦艇の中でも最高の速度を誇る。フォールド・システムも強化されており、1回のフォールド航行の到達距離が長く、再フォールドを短時間で行えるだけの出力の余裕もある。また、武装と装甲はサイズに比して優れており、強行偵察や諜報任務、特務部隊の潜入工作といった幅広い用途に対応可能である。なお、同艦は計92隻が運用されていたと言われる。

データ

全長▶366m
運用質量▶3万2500t
瞬間最大加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
標準武装▶主砲×2／副砲×4／ミサイル×多数
艦載機▶12～16機程度

▲艦体構成は標準戦列戦艦に近いが、よりスマートな形状で艦首と艦尾の開口部はなく、艦載機運用能力は落ちる。

◀艦前部には標準戦列艦などと共通のミサイル、艦載機射出機構を備える。曲面構成の艦体構造は、旧世代のステルス艦であることを示している。

▶ブリッジ拡大図

▲艦体の左右側面に主砲1基と副砲2基ずつを配しており、各砲の構造は他のバロータ軍艦艇と同様である。

バトロイド大型輸送母艦

バロータ軍の主力輸送艦で、43隻が運用されていたと言われる。貨物として最大100機程度の可変戦闘機を運搬する性能を有し、さらには駆逐艦クラスの戦闘力と、巡洋艦に随行できる水準の速力とフォールド航行能力を兼ね備えている。そうした性能から戦闘艦としての運用にも十分に耐えうる反面、艦内スペースの多くを貨物区画に割いているためか、艦載機運用能力は他のバロータ軍艦艇に劣っており、総合的な戦闘能力もやや低い。

データ

全長▶684m
運用質量▶19万5000t
瞬間最大加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
標準武装▶主砲×2／副砲×6／ミサイル×多数
艦載機▶3～4機程度(自衛用。貨物としては最大100機程度)

▶他の艦艇とは異なり、板状の装甲を上下で分けて配置した構造が特徴。上部がカタパルト、下部がミサイル庫になっている点は共通している。

▼艦体後方の上半部を納庫区画、下半部をエンジン区画とする設計は他の艦艇と同様だが、格納庫区画のスペースはより大きく確保されている。

◀艦体を正面から見た図。ステルス性が考慮され、菱形の断面構造を採用している。

前衛フリゲート艦

バロータ軍の多用途軽駆逐艦。同軍で最も多く生産されている艦艇で、294隻が運用されていたとされる。このサイズの艦艇としては武装と装甲、機動性のバランスに優れる。さらに、2機(最大3機)の可変戦闘機を搭載、運用できることから万能性も高く、様々な任務を遂行する能力を有している。艦隊規模の運用から小規模の偵察、索敵、護衛、情報活動まで、あらゆる用途に投入され高い運用性を示した。

データ

全長▶168m
運用質量▶1500t
瞬間最大加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
標準武装▶主砲×2／副砲×4／高機動連射ミサイルランチャー×2／対艦大型ミサイル×多数
艦載機▶2機(最大3機)

▼▶他の艦艇と同じく、艦体後方上半部が格納庫、同下半部がエンジン区画となっている。艦体中央下部には対艦大型ミサイルの射出機構を備える。

▲前方

◀ビーム砲／高速ミサイルランチャー
艦体中央側面にビーム砲(主砲、副砲)と高機動連射ミサイルランチャーが集中して配置されている。小型艦でありながら武装が豊富で火力に優れ、惑星ラクス軌道上の戦闘などの大規模艦隊戦でも活躍した。

VF-22S

スーパー・ノヴァ計画から生まれたYF-21の制式採用機

機体解説

次期全領域可変戦闘機(AVF)開発計画「スーパー・ノヴァ計画」で開発されたYF-21を原型とする機体で、コンペティションでYF-19に敗れながらも高性能を示したYF-21の基本設計を忠実に受け継いでいる。一方で、原型機の特徴のひとつでもあったBDI(Brain Direct Image)システムは大幅に簡略化されており、有視界の手動操縦に対応したシステム変更がされている。また、ほぼ同時期に制式採用されたVF-19 エクスカリバーに比べて大型なことから武装搭載量に優れ、VF-19を凌ぐポテンシャルを持つとも言われる。バロータ軍との戦いで運用されたマクロス7船団のマクシミリアン・ジーナス(マックス)とミリア・ファリーナ・ジーナス専用のVF-22Sは、パイロットのネームバリューとそのカラーリングから、特に有名である。

データ

※データはファイター形態時のもの

全長▶19.62m
全幅▶15.36m
空虚重量▶9340kg
エンジン▶新中州重工/P&W/ロイス FF-2450B熱核タービンエンジン×2
エンジン推力▶65200kg×2(宇宙空間瞬間最大)
補助エンジン▶高機動バーニア・スラスター P&W HMM-6J
巡航速度▶M5.07(標準大気圏内高度10000m)/M22+(高度30000m以上時)
戦闘上昇限度▶地球クラスの惑星なら衛星軌道までの進出が可能
武装▶マウラー REB-22 収束エネルギー機銃×2/オーテック XX-2C 大出力収束エネルギー砲×1/ハワードPBS-03F戦闘機搭載用ピンポイント・バリア・システム×1/ストンウェル/ロイスB-6標準内装パレット×3/ビフォーズ全領域高機動マイクロミサイルクラスター BMM-24/YF-21&VF-22S専用内装兵器パレット B-21A×4/多目的ガンポッド ハワードBP-14D×2

サイズ比較

VF-1J
VF-22S

主要パイロット

マクシミリアン・ジーナス
ミリア・ファリーナ・ジーナス

開発系譜図

VF-14 ▶ YF-21 ▶ VF-22

Illustration by Hidetaka Tenjin

▶VF-22S シュトゥルムフォーゲルII

運用記録

VF-22はVF-17 ナイトメアに代わる特務作戦用の機体として少数の生産が承認され、2042年に制式採用された。マクロス7船団でも試験的にライセンス生産が行われ、マックス専用機として2機(1機は予備機)が工場艦で生産された。同機は「オペレーション・スターゲイザー」における█拠点最深部への単独突入など(作戦時のコールサインは「ブルーゲイザー」)、作戦の切り札的な運用がなされた。また、予備機には最終決戦でミリア・ファリーナ・ジーナスが搭乗している。

マックス機は「オペレーション・スターゲイザー」の降下部隊が壊滅状態となった段階で、単機で敵中枢の撃破を敢行した。

マックスとミリアのVF-22Sはプロトデビルンの首領ゲペルニッチとの最終決戦に参加し、昔と変わらぬ連携を披露している。

標準武装

VF-22Sの武装はYF-21と同様で、固定武装として対空レーザー砲塔1基と半固定式のビーム砲2基を装備している。また、機体下面の収納式ウェポンベイには、高機動マイクロミサイルクラスターを始め、各種兵器パレットを収納できた。

▶多目的ガンポッド
ハワードBP-14D

▲YF-21と同様のカートレス・ガンポッドを2基装備する。ファイター形態時には機体底部に本体の半分が収納される。

「オペレーション・スターゲイザー」では、敵中枢に対して攻撃を行うために反応弾を使用している。

物量を誇るバロータ軍との交戦においては、マイクロミサイルが効果的に用いられた。

コクピット

操縦系のBDIシステムが簡略化されたことに伴い、コクピット構造も一般的なVFに近いシステムに変更された。なお、本機のBDIシステムはサブコントロールシステムとして機能し、高いGのかかる空戦機動時に火器制御やチャフ、スモークの使用などを補助した。

▼バトロイド時
バトロイド変形時にはコクピットブロック全体が90度回転する。

▲ファイター/ガウォーク時
試作機のYF-21に比べてコクピット内部の構造も大幅に変更され、シート周りのスペースも広く確保されている。

BDIシステムが簡略化されたため、性能を引き出すには高いパイロット能力が要求された。

ガウォークモード

VF-22はエンジンブロックと脚部が独立したYF-21の機体設計が踏襲され、ガウォーク形態もエンジンブロックが本体側に残る独特の構造を受け継いでいる。この構造はメインエンジンの推力の効率的な使用を可能にしており、従来のVFの同形態に比べて機動性に優れる。ただし、マックス機が運用されたケースでは高速戦闘を行うことが多かったため、ガウォーク形態を用いる場面はほとんどなかった。これは通常であればガウォーク形態を用いるような地形においても、ファイター形態のままでの高速移動を可能としたほどのマックスの高い技量によるところが大きい。

▶マックス機
エンジンブロックが機体後部に残るガウォークの構造は、YF-21と変わらない。ちなみに、機体色のブルーはVF-1系のマックス専用機よりも水色に近い色合いとなっている。

▶ミリア機
有視界戦闘に対応するため、キャノピー部分が拡大されている(マックス機も同様)。ミリア機も同じVF-22Sなので、カラーリングが異なる以外の仕様は同じである。

マックス機はバロータ第4惑星の戦闘でもガウォーク形態を用いず、バトロイドへの変形時などで見せただけだったようだ。

ミリアがバトル7からサウンド兵器を持ち出そうとした際、着艦時の制動にガウォークを利用している。

◀ベクタードノズルのパネルを閉じることで、後部下面のシャッター状ノズルにホバリング用の推力が送られる。

▼機体下面のカバー(ガンポッドを収納した部分)が左右に展開し、ホバー移動時にエアクッションの役割を果たす。

ファイターモード

YF-21と同型のエンジンを搭載したVF-22Sは、原型機と同等の出力を有している。さらに本機の場合、BDIシステムの簡略化と関連センサー█の排除による軽量化がなされており、それによってファイター形態の水平飛行速度と機動性能が向上している。無論、その性能を十全に発揮するためには、パイロットの強靭な体力と高度な操縦技術が必要となる。

マックス機は洞窟内という狭いスペースにもかかわらず、敵迎撃システムからの攻撃を軽快な機動で回避した。

最終決戦においても優れた機動性を発揮し、ゲペルニッチやゴラム、ゾムドの攻撃を全て回避している。

▶三次元可変ベクタードノズル
3枚のパネルで構成された3次元可変ベクタードノズルを採用している。

▼ミリア機
ミリア機は彼女がバトル7艦長代行を務めた際に、予備機を強引に再塗装し自分の専用機にしたものである。

▲マックス機
カラーリングはマックスのパーソナルカラーである青をベースに、白いラインが施されている。フォルムはYF-21とほぼ同じである。

▶ファイターの機体下面に収納されたガンポッドは、ステルス飛行時には銃口部のシャッターを閉じる。

▲上はガンポッド銃口部のシャッターが開いた状態。

▼YF-21と同じく、大気圏内高速飛行時には主翼を下方に折り曲げ、尾翼を機体内側に倒す。これにより安定性は低下するが、高速でも機動性を維持できる。

▲YF-21の形状を受け継いだフラットな構造の機体下面には、ガンポッドやマイクロミサイルの収納式ウェポンベイを備える。

バトロイドモード

BDIシステムを介して自分の身体を動かすようにバトロイド形態を操ることが可能であったYF-21とは異なり、BDIシステムを簡略化したVF-22は従来のVFと同じく基本的にはマニュアルで操縦した。BDIシステムの簡略化には、コスト削減やメンテナンス性の向上といったメリットもあるが、その背景には無人兵器の制式採用を狙うAI兵器推進派の圧力——ゴーストX-9を撃墜したYF-21の採用が、無人機不要論を引き起こす可能性を危惧していた——があったとされる。結果、BDIシステムを制限された本機だが、ゼントラーディ系技術の導入によって、高い格闘戦能力を発揮したYF-21のバトロイドの特性は受け継がれている。

敵拠点中枢で反応弾の発射後に退路を断たれたマックス機は、バトロイドに変形して包囲を突破しようとした。

サウンド兵器の装着も可能で、死期が迫ったと勘違いしたミリアがマクロス7船団の人々への感謝の気持ちを伝えようと、歌を披露するために用いたこともある。

◀マックス機
ヘッドユニットのフェイス部はYF-21のモノアイタイプから2段式のゴーグルタイプに変更されている。それ以外にYF-21からの大きな変更はない。

▶ミリア機
ミリア機のフェイス部もマックス機と同じ。なお、バトロイド時にはキャノピーの透明部分にのみ防護シャッターが下りる構造となっている。

◀3次元可変ベクタードノズルはバトロイド時でも推力の偏向が可能で、優れた機動性を生み出した。

▲足裏にはガウォーク形態でも用いられる補助VTOLノズルが内蔵されている。

▶腰部パネルはガンポッド収納部が膨らんだ形状で、YF-21とはやや異なっている。

VF-11C

2040年代の統合軍を代表する主力可変戦闘機の改良型

機体解説

VF-1 バルキリーに続く名機として挙げられるVF-11 サンダーボルトは、改修を施されて長年に亘り統合軍の主力可変戦闘機(VF)の座にあり続けた。そのバリエーションのひとつにあたるVF-11C(C型)は、VF-11B (B型)を改良したタイプで、2040年代から本格的な運用がスタートした。C型は、操縦性、整備性の良さといったVF-11の特徴はそのままに、航行用電子装備(アビオニクス)の更新によって運用性の向上が図られている。B型からの機種転換が順次進められた本機は、長距離移民船団などの主力機として、第一線で運用されている。

データ

※データはファイター形態時のもの

項目	内容
所属	地球統合軍
全長	15.51m
全幅	11.2m
空虚重量	9,000kg
エンジン	新星／P&W／ロイスFF-2025G×2
エンジン推力	28,500kg（宇宙空間[illegible]最大推力）×2
補助エンジン	高機動バーニア・スラスター P&W HMM-5B
巡航速度	M3.5+（標準大気圏内高度10,000m時）／M8.2+（高度30,000m以上時）
戦闘上昇限度	42,000m（衛星軌道への進出時は大型ブースターを使用）
武装	後方対空パルスレーザー砲×1／多目的ガンポッド／チャフ&フレアディスペンサー×2／防弾シールド×1（バトロイド時標準装備）／大気圏外用スーパーパーツ取り付け可能（マイクロミサイルランチャー×4装備）／他オプション兵装多数

サイズ比較

VF-1J
VF-11C

開発系譜図

VF-11

主要パイロット

金龍
ガムリン木崎

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-11C サンダーボルト

運用記録

C型はB型の実戦配備と並行して開発が進められ、2040年になってようやく第一線の部隊への配備が開始された。本機の代表的な配備先として、第37次超長距離移民船団(マクロス7船団)が挙げられる。なお、同船団が地球を出航した2038年の時点ではB型が主力機だったことから、航海の途中でC型の量産と配備が始まったと考えられる。また、2045年に発生したバロータ軍との戦闘では、C型がマクロス7船団の戦力の中核を担っていた。しかし、バロータ軍VFの性能と物量には敵わず、大きな被害を出している。

バロータ軍の襲撃に対しては、船団の最外縁を守る第一次防衛ライン の戦力として運用されることが多かった。

「オペレーション・スターゲイザー」では、大気圏内用スーパーパーツを装着した機体が投入された。

標準武装

C型は固定武装の後方対空パルスレーザー砲1基と、B型とは異なるガンポッドを標準装備している。また、脚部ウェポンベイには大型ミサイルを搭載可能で、「オペレーション・スターゲイザー」では敵拠点の中枢を攻撃するための反応弾が装備された。

▼多目的ガンポッド

C型のガンポッドはB型のGU-15とは違い銃剣を装備していない。細身で銃身上部が弾倉になっている。

武装の構成は標準的で、ガンポッドが主兵装となる。本機の性能を引き出し、バロータ軍VFを圧倒するほどの活躍を見せたパイロットもいた。

専用スーパーパーツのブースターユニットには、マイクロミサイルランチャーを備える。上はそのミサイル弾。

コクピット

コクピットの構造はB型と同じで、シート正面にメインディスプレイと左右に各種補助機器が配されている。また、VF-11はコクピットブロックが脱出ポッドとして機能する。

キャノピーを開いた状態のC型のコクピット。キャノピー後部のアクチュエーターで開閉する。

バトロイド時には、シート前方に複数のモニターパネルが展開され、視界を確保する。

被弾した際にはコクピットブロックがキャノピーごと本体から分離し脱出ポッドとなる。

ファイターモード

VF-11Cのファイター形態の特徴として、他のVF-11シリーズ同様、カナード前翼と可変式主翼による高い機動性が挙げられる。また、大気圏外で運用される場合は、基本的に専用のスーパーパーツを装備する。大気圏外用とは別に、大気圏内用スーパーパーツも開発され、特殊作戦などに用いられた。なお、バロータ軍との戦闘においては、本来の機動性を発揮することなく撃墜されることも多かった。これは、マクロス7船団のVF部隊の練度が低かったためとも考えられる。

▶脚部にはチャフ&フレアディスペンサーを内蔵する。脚部スーパーパーツはプロペラントユニットである。

▼ガンポッドの装着方式や高機動バーニアの配置はB型と同じである。図はインテークカバーが閉じた状態。

▲スーパーパーツのブースターユニットに内蔵されたマイクロミサイル射出口は、B型では片側4基だったが、C型では2基となっている。

◀ブースターユニットのスラスターノズルが角型になっている点も、B型用スーパーパーツからの変更点として挙げられる。

▶右はランディングギアの展開状態。前脚には着陸灯とカタパルトフックが備えられている。

マクロス7船団とバロータ軍の交戦は宇宙空間で発生するケースが多く、大半はスーパーパーツを装備した状態で出撃している。

惑星ラクスではノーマル状態で運用されたが、高い機動性を発揮するまでもなく撃破される機体が続出した。

プロトデビルンとの最終決戦となったバロータ星系第4惑星の戦闘でも、降下部隊の主力として奮戦した。

バトロイドモード

バトロイド形態の構造にB型からの変更は見られない。キャノピーカバーが変更された程度で、機体そのものの性能に限れば(アビオニクスの更新によって総合的な性能は向上しているが)、B型とほぼ同じである。ただしC型では、標準装備のガンポッドから銃剣が取り除かれており、この仕様変更はB型のガンポッド(GU-15)が高コストだったことに起因しているとも考えられる。これによってC型の近接戦闘能力はB型に比べると低下している点は否めず、実際にマクロス7船団における運用でもバトロイドで近接格闘戦を行ったケースはほとんど確認されていない。バトロイドは主に、乱戦時にガンポッドなどの射界を広く確保するために用いられることが多かったようだ。

C型での再量産にあたって改修が施されたスーパーパーツは、コストダウンのためかマイクロミサイルランチャー(HMMM-Mk6)の射出口が左右それぞれB型用の4基から2基に減らされている。これによりB型のスーパーサンダーボルトに比べて連射速度が劣るものの、基本性能に大きな違いはなかったと考えられる。

ガムリン・木崎中尉が搭乗した際にはバトロイドで複数の敵VFを撃退しており、十分な性能は有していたと言える。

惑星ラクス軌道上の戦闘では、金龍大尉の機体がバトロイドで敵艦内部に突入し、反応炉の破壊に成功している。

バトロイドやファイターに比べると、ガウォーク形態の運用は少なく、惑星ラクスでプロトデビルンの捜索時に用いられた。

▶スーパーパーツを除けば、背部の形状はB型から変更されていない。シールド裏面には予備弾倉が装着可能。

▲上はスーパーパーツを装着したスーパーサンダーボルトのバトロイド形態。キャノピーカバーの変更に伴い、B型にあったマーキングも省略されている。

▲ブースターユニット上端には高機動バーニアを備える。前面スリットはマイクロミサイルランチャーの排気口。

右はバトロイド時の足裏ノズル。スーパーパーツ装着状態で、脚部ユニットの高機動バーニアが見える。

バトロイドのマニピュレーター部分は手の甲がハードカバー、手の平がセンサー内蔵ソフトパッドとなっている。

レドーム装備型

VF-11は搭載重量の大きさが特徴のひとつで、任務に応じた様々なオプションパックを装備できた。レドーム装備型はその一例で、本機が電子戦や偵察用の機体として運用できるだけの汎用性を有していたことを示している。また、レドーム装備機には、スーパーパーツやガンポッドも装着されており、標準装備機ほどではないが実戦にも耐えうる仕様だったと思われる。

◀レドームを装備したC型。ブースターユニットの上に大型の円形レドームを装着する。

▲レドームは支柱で機体上面中央に装備され、ブースターユニットとは干渉しない。

バロータ軍によってシティ7がフォールドさせられた際に、レドーム装備のC型が捜索機として投入された。

シティ7の捜索には多くのレドーム装備機が投入され、情報収集を行った。

2040年代の統合軍を代表する
主力可変戦闘機の改良型

機体解説

VF-1よりひと回り大型の機体であるVF-11は、機内容積、搭載重量の余裕があるため、特殊任務の際には、主に追加パーツを装備することで、様々な用途に対応した。元々汎用性を重視して機体の設計が行われたVF-11だったが、これらの外付けのパーツによって、偵察型、電子戦型、攻撃力増強型など、汎用性よりも専門性が求められる特殊任務にも対応できるようになった。中でも、VF-11の全身に装甲ユニットを装備したフルアーマード・サンダーボルトは、単機で戦艦をも撃墜しうる攻撃力を有する機体として、高い評価を受けた。

主要パイロット
金龍

VF-11C

Illustration by Hidetaka Tenjin

▶VF-11C サンダーボルト

フルアーマード・サンダーボルト

戦闘機的な機体特性に起因するVFの陸戦能力の不足を補うことを目的とした、専用のプロテクト・アーマー装備のVF-11を「フルアーマード・サンダーボルト」(型式番号:APS-11)と呼ぶ。バトロイド形態のほぼ全身を覆う装甲ユニットには、マイクロミサイルやグレネード、連装ビーム砲を備え、圧倒的な火力と防御力を発揮する。マクロス7船団においては惑星ラクス軌道上の戦闘などで運用され、ダイヤモンドフォース金龍大尉の最期の乗機にもなった。

マイクロミサイルランチャーを一斉発射する金龍のフルアーマード・サンダーボルト。彼は出撃準備中の05号機に強引に乗り込み戦場に出た。

金龍機はバトル7のトランスフォーメーションを援護するため、装甲ユニットを分離して敵艦に突入。自機もろともに敵艦を撃破した。

◀VF-11本来のスマートなフォルムから一転して、重厚な外観となる。その耐弾性は非常に高く、ガンポッドクラスの火器の直撃にも耐えうる。

▲フルアーマード時の重量増加に対応するため、専用の大型ブースターユニットを装備する。ブースターは装甲ユニット分離後にも残すことが可能。

マクロス7船団の危機を救うため、病み上がりの体でありながら制止を振り切って出撃した金龍のフルアーマード・サンダーボルト。

長砲身型高貫通ガンポッド

▲フルアーマード装備機が携行する試作型長砲身型高貫通ガンポッド。砲身前部にマルチセンサーを備える。

▼側面／後方

▲砲身の上部が大型弾倉で、予備は携行しない。グリップ上のユニットは駆動パワーパック。あまりに大型であるため、新兵には扱いきれない。

武装

A 肩部ミサイルランチャー
肩部ミサイルランチャーには片側5発×3列、計15発のヒューズHMMM-Mk6 マイクロミサイルが装填されている。

B 胸部ミサイルランチャー
胸部ミサイルランチャーは9発×2のHMMM-Mk6を装填している。ミサイルハッチはそれぞれ機体内側に向けて開く構造。

C 連装ビーム砲
肩部ユニットの連装ビーム砲はエネルギーパック一体型で、20発程の連続発射が可能。回転軸を有し、切り離しもできる。

D シールド
フルアーマード機には通常の防弾シールドではなく、リアクティブアーマー装備の大型シールドが装備される。

E 手持ちグレネード
腰部装甲ユニット側面には手投げ式グレネードを片側3発ずつ備える。なお、金龍機では用いられていない。

◀▶装甲ユニットのミサイルハッチを全開放した状態。ブースターユニットにもマイクロミサイルランチャーを有する。

◀肩部カバー　◀胸部カバー

F ブースターユニット
ブースターユニットは大重量に最適化されているため、装甲排除時にはスーパーパーツ装備機を凌ぐ機動性を発揮する。

G 脚部ミサイルランチャー
脚部装甲ユニットのミサイルランチャーは前後に分割されており、HMMM-Mk6を6発ずつ装填している。

大気圏内スーパーパーツ

VF-11 サンダーボルト用に開発された大気圏内用スーパーパーツと、それを装備したVF-11C(C型)。VF-11はカナード前翼を装備することで高い大気圏内機動性を実現している。本オプションは火力の大幅な増強と同時に、出力強化によって優れた運用性を発揮することが可能となっている。

バロータ星系第4惑星への強襲作戦「オペレーション・スターゲイザー」で運用された、大気圏内用スーパーパーツ装備のVF-11C。

「オペレーション・スターゲイザー」に参加した12のVF隊のほとんどが大気圏内用スーパーパーツ装備VF-11Cで編成されていた。

ジェットブースター

▲機体上部左右に装着される、マイクロミサイルランチャー内蔵のジェットブースター。上部にエアインテークを、先端の上下にミサイルの発射口を備える。

武装コンテナ

▲エンジンナセル側面に装着される武装コンテナは、ユニット中央部分の装甲パネルが開閉式のウェポンハッチとなっている。また、尾部には後方用マイクロミサイルランチャーを配している。

武装

▲マイクロミサイル
スーパーパーツのマイクロミサイルランチャーに用いられるミサイル弾。先端に小型の高機動バーニアを備える。

▶防弾シールド
防弾シールドはVF-11の固定装備で、大気圏内用スーパーパーツ特有の装備ではない。スーパーパーツにほぼ干渉なく扱える。

ファイターモード

▲大気圏内用スーパーパーツを装備したVF-11Cのファイター形態。各ユニットの装備部位は、大気圏外用スーパーパーツと同じである。

▼大気圏内では機体下部のエアインテークのシャッターを開いた状態で運用される。

▲▼スーパーパーツは空気抵抗を考慮した流線型の形状。ジェットブースターのノズルは上下方向に推力偏向が可能。

◀スーパーパーツ装備機の機体下面。スーパーパーツ装備時には、尾翼は収納される。

「オペレーション・スターゲイザー」では、母艦から惑星に降下する際に射出カプセルを用いている。

バトロイドモード

◀大気圏内用スーパーパーツ装備のバトロイド形態。ブースターユニットが大気圏外用のものより大型なため、全高はやや伸びる。

▶ブースターユニットのベクタードブーストスラスターノズルによって、高い運動性を発揮する。

▲ブースターユニット先端部の中央には、センサーを上下1基ずつ備えている。

VF-11D改

戦場に歌を運んだ複座の特務機

データ

※データはファイター形態時のもの

- **全長** ▶ 16.02m
- **全幅** ▶ 11.2m
- **空虚重量** ▶ 11,200kg（専用スーパーパーツ含む）
- **エンジン** ▶ 新星／P&W／ロイスFF-2025S×2（2025Gのチューン型）
- **エンジン推力** ▶ 31,700kg（宇宙空間瞬間最大推力）×2
- **補助エンジン** ▶ 高機動バーニアスラスター P&W HMM-7
- **武装** ▶ 大気圏内外両用ジャミングバーズ専用機専用スーパーパーツ（マイクロミサイルランチャー、時空共振型サウンドエナジーシステム一式、サウンドエナジー変換システム）／多目的ガンポッド（スピーカーポッドも射出可能）×1／防弾シールド×1／チャフ&フレアディスペンサー×2

開発系譜図

VF-11 ▶ VF-11D改

サイズ比較

VF-1J
VF-11D改

主要乗組員

ジャミングバーズ

機体解説

対プロトデビルン用の戦力として結成された音楽戦闘隊ジャミングバーズの専用機。複座型VF-11Dを改装した機体で、20機が生産された。ジャミングバーズ隊員は戦闘機を操縦できないため、統合軍パイロットと共に搭乗する。エンジンをライトチューンし、バーニアシステムもVF-19量産機用のものに変更したことで推力が向上している。さらにカナードも大型のものに再設計しているが、大気内における巡航速度、機動性はVF-11Cに比べやや劣るようだ。

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-11改 サンダーボルト ジャミングバーズ専用機

運用記録

VF-11D改を運用したジャミングバーズは、民間人ということもあり、激戦区からやや引いた位置での援護に終始していた。このため同隊は、被撃墜数0ながら目立った戦果はなしという、いささか期待外れの結果に終わった。ただし、ジャミングバーズの周囲に配された部隊の士気高揚には繋がったと言われる。余談ながらジャミングバーズの一般公開時には、メンバーの千歳・リップルがレオタード姿で愛機の前でポージングしたことで、彼女の前に殺到したカメラ小[illegible]が将棋倒しになり、100名ほどが負傷する事故が発生した。この一件は、長らく"ジャミングバーズの最大戦果"と[illegible]揄されたという。

軍によるジャミングバーズのお披露目の様子。ジャミングバーズメンバーと共に、VF-11D改が紹介された。

期待された活躍こそできなかったVF-11D改だが、撃墜された機体はなく、性能は決して低くないことを証明した。

プロトデビルンとの最終決戦後、バロータ星系第4惑星に着陸するVF-11D改(写真右上)。運用上、本機がガウォーク形態をとることは非常に稀であった。

ファイターモード

時空共振型スピーカーシステムを搭載した大気内外両用スーパーパーツを搭載したファイター形態。このパーツは標準固定装備であり、サウンドフォース機用のサウンドブースターのようにパーツのみでの飛行はできない。パーツの強制排除は可能。

▲前方より見たファイターモード。コクピットが複座型で、後部座席にジャミングバーズ隊員が搭乗する。

▶インテーク部分は開閉式。大気圏内ではインテーク部分を開放した状態で飛行する。

▲VF-11D改は、通常のVF-11よりもカナード翼が大型になっている。

▶脚部コンフォーマルパーツは、宇宙空間用プロペラントタンク、高機動バーニアシステム、マイクロミサイルランチャーを一体化。

▲大気圏内外両用スーパーパーツ

[illegible]部分が、時空共振型スピーカーシステムとブースター、プロペラントタンクなどが搭載された大気圏内外両用スーパーパーツである。

バトロイドモード

サウンドブースターを開放する必要性から、ジャミングバーズによるこの機体の運用は「ファイターモードで前線まで移動、その後バトロイドモードに変形し、フォーメーションを組む」という流れが基本となっている。そのため本機がガウォークモードで運用されることは非常に稀であった。ファイターモードからバトロイドへの変形は、原型機のVF-11同様スーパーパーツを装備したままでも可能で、かつ短時間で変形を終えることができた(変形時間の短縮は、ガウォーク形態を経由しないため、[illegible]部・脚部が同時にバトロイドに変形できたことも一因であった)。スーパーパーツのエンジンは、搭乗者の生命維持を優先した結果、緊急時に安定した加速で最大推力で離脱できるチューンドとなっている。スーパーパーツ装備時の本機の燃料搭載量は、最大で5分間の最大推力での機動を行えたが、これは戦場からマクロス7へと帰還するのに十分であった。

ファイター形態からバトロイド形態への空中変形。当然、ガウォーク形態への変形も可能である。ジャミングバーズのメンバーは、主にバトロイド状態の機体で唄う。

ジャミングバーズ隊のバルキリーフォーメーション。戦場では、ドッカー率いるエメラルドフォースがジャミングバーズ隊の警護を担当していた。

バロータ軍司令官、ゲペルニッチとの最終決戦にも出撃。時空共振スピーカーシステムを開放して立ち向かった。

◀バトロイド形態では、コクピット、そしてインテークのシャッターが閉じる。左腕には、防弾シールドを装備する。

▲背中にはスーパーパーツの高機動バーニアを備える。防弾シールド裏には、ガンポッドのスペア弾装をストックする。

サウンドブースター OPEN時

歌エネルギーの出力増大により、時空共振型スピーカーシステムが起動。ユニット上部が開き、スピーカー部が出現する。簡易型のため、サウンドフォース機と比較すると出力は劣る。

▶サウンドブースターは、時空共振型サウンドエナジーシステム一式とサウンドエナジー変換システムを一体化している。

コクピット(ファイター時)

◀機首部分はVF-11Dのトレーニング用複座型を流用。前席がパイロット操縦用で、後席はジャミングバーズ隊員用となっている。

▶後部座席

◀▼サウンドエナジー変換システムに対応した後部座席は、キャノピーが二重となっている。サウンドエナジー変換システムは簡易型で、サウンドフォース機と比較すると、最大出力は低めに設定されていた。

▼前席に設置されているパイロット操縦用のスロットル。スロットル各部に射撃スイッチなどを備える。

▲キャノピー OPEN時

コクピット(バトロイド時)

左後方から見たジャミングバーズメンバー用のコクピット。バトロイド時、各方向にモニターが配置される。

バトロイド時のコクピット。点線部分はコンソール用のトラックボール(左)、サウンドスピーカーのボリューム装置(右)である。

ジャミングバーズ用の座席は、パイロット席のほぼ真上に位置する。

VF-17

ステルス性能を追求した特殊作戦用重VF

Illustration by Hidetaka Tenjin

主要パイロット

ガムリン木崎
金龍

データ

※データはファイター形態時のもの

- **全長** ▶ 15.63m
- **全幅** ▶ 14.18m
- **空虚重量** ▶ 11,950kg
- **エンジン** ▶ 新中州／P&W／ロイスFF-2100X×2
- **エンジン推力** ▶ 59,500kg（宇宙空間瞬間最大推力）×2
- **補助エンジン** ▶ 高機動バーニア・スラスター P&W HMM-6B
- **巡航速度** ▶ M4.2+（標準大気圏内高度10,000m時）／M21+（高度30,000m以上時）
- **戦闘上昇限度** ▶ 地球クラスの惑星なら衛星軌道までの進出が可能
- **武装** ▶ レーザー砲×2／4連装対空レーザー砲塔×1／中口径ビーム砲×2／ゼネラル・ギャラクシー製MC-17A 40mm7銃身ガトリングガン×1／マイクロミサイルランチャー×4／他オプション兵装多数

サイズ比較

VF-1J
VF-17

開発系譜図

VF-14 ▶ VF-17 ▶ VF-171

機体解説

VF-17はゼネラル・ギャラクシー社が開発した特殊作戦用の重可変戦闘機で、「ナイトメア」のペットネームを持つ。敵拠点へのピンポイント攻撃など、当時の主力機であるVF-11 サンダーボルトでは困難な任務を想定して開発された機体で、通常装備のままでも、スーパーパーツと各種兵装を装備したVF-11を上回る戦闘力を有する。また、その運用目的からステルス性能が重視されているが、機体設計には高精度のアクティブステルス技術（YF-19、YF-21にて実用化）がまだ導入されていないため、外形は多面体ステルス構成となっており、「ステルスバルキリー」とも呼ばれる。シリーズ中でもっとも生産機数の多い標準的なタイプがVF-17D（D型）で、D型以上の性能を求めた改修機として、VF-17S（S型）が開発された。なおマクロス7船団では、VF-17はダイヤモンドフォース専用機として運用されている。

VF-17 ナイトメア

運用記録

VF-17の開発はゼネラル・ギャラクシー社が単独で行った。最初期のA型は予定していたエンジンの開発が間に合わず、出力不足のFF-2009Eを搭載したため少数の生産に留まり、そのアビオニクスを改良したC型も量産には至らなかった(この間に機種転換訓練用の複座機T型が開発された)。VF-17が本来の性能を獲得したのは、C型に予定していたエンジンを搭載したD型からで、続いてここで紹介するチューン機のS型が開発された(各型合計の総生産機数は718機)。

マクロス7船団に所属する直衛局地戦闘隊ダイヤモンドフォースでは、隊長機のS型とD型2機の3機小隊で運用された。

ダイヤモンドフォースのS型は金龍大尉の乗機(コールサイン「D1」)だったが、彼の戦死後はガムリン・木崎大尉が搭乗した。

標準装備

任務の性質上高い攻撃力が要求されたVF-17は、豊富な武装を有している。それらはステルス性を維持するために全てが内装式とされ、ガンポッドもファイター形態では機内に収納される。

主翼付け根に4基のマイクロミサイルランチャーを内蔵しており、他の兵装パックにも換装が可能(上はミサイル弾)。

多目的ガンポッド(MC-17A)もステルス形状をしており、他機種に比べて大型な点も特徴である。

MC-17Aは銃身上部が弾倉となっており、専用のモジュールに換装することで大出力ビーム砲としても運用できた。

コクピット

VF-17はステルス機としての機体形状の制限からキャノピーが小さく、それを補うためにコクピット内部の足元にスクリーンを配置していた。また、スロットルレバーをコクピット外枠に配するなど、内部のレイアウトも通常のVFとは異なっていた。

◀ファイター時コクピット
逆三角形のメインパネルが特徴で、キャノピーはバトロイド時にスクリーンとなる。

左はバトロイド形態時のコクピット開閉構造。胸部ユニットが持ち上がり、コクピットブロックが露出する。

射撃を行う際にはメインパネルのモニターにロックした敵機を表示し、照準を合わせる方式となっている。

ファイターモード

ファイター形態はステルス性を重視した機体形状のために空力特性に劣り、大気圏内での運動性は高くなかった。しかし、新型の熱核タービンエンジン(FF-2100X)を有しており、宇宙では高い性能を発揮した。また、S型はエンジンが改良されており、D型より10%ほど推力が向上している。

ファイター時の最高速度はスーパーパーツを装着したVF-11を上回り、宇宙空間においては高度な機動性を有していた。

ガンポッドはファイター時に機体内部に収納され、発射時には砲口部のシャッターを開く。その他にも豊富な兵器を装備する。

▶偏平な三角形のフォルムが特徴。機首や翼端、腕部ユニットに複数の高機動バーニア(P&W HMM-6B)を内蔵している。

◀機体下面右側にガンポッドの砲口が位置しており、ハッチはステルス兼整流シャッターとなっている。

▲メインスラスターの噴射口はベクタードノズルで、左右に推力を偏向することが可能となっている。

▼ファイター形態では機体上部に対空レーザー砲塔(S型は4連装)が露出する。

▶主翼には可変翼構造が採用されている。根元に2基ずつのライト兼センサーを備える。

マクロス7船団のダイヤモンドフォース所属機は、ファイターでの発進に可動式のリニア・カタパルトを用いた。

ガウォークモード

VF-17はファイター形態での空力特性が低く、特に超低空での格闘戦能力に劣っていた。そのため、大気圏内では主にガウォーク形態で運用され、高速戦用と格闘戦用の2種類のガウォーク形態で対処するように設計されている。こうした仕様はVF-17のみに見られるもので、本機の特殊性を表していたと言える。

惑星ラクスでプロトデビルンのグラビルがマクロス7船団を襲撃した際には、ガウォークでグラビルに応戦した。

ガウォーク時には脚部を逆関節にすることもできる。片腕だけを変形させることも可能。

▶他のVFのガウォーク形態と比べて、やや扁平なシルエットとなっている。この形態でもステルス性を維持しようとした結果だと思われる。

◀高速戦用モード。バトロイド時には肘に収納される中口径ビーム砲を使用するため、主翼上面に腕部を畳んで、砲身を露出させている。腕を伸ばせば、格闘戦用モードとなる。

バトロイドモード

VF-17はペイロード確保のために機体の大型化を図り、同時にバトロイド形態のエネルギー転換装甲も強化していた。こうした設計によってアーマード・バルキリーに匹敵する耐弾性を獲得しており、バトロイド形態では高い格闘戦能力を発揮した(設計にはVF-14バンパイアで得た大型機の開発ノウハウが活かされたと言われる)。また、マクロス7船団のダイヤモンドフォースに配置された機体には出力を20%向上させる改修が施されており、船団で運用された他のVFとの差別化が図られていた。

バトロイドは耐久性に優れ、グラビルの衝撃波に耐えるほどの強度を誇った。

重バトロイドに分類されるが動きは機敏で、高速連続反転機動を可能とするほどの運動性を有した。

▶S型は頭頂部に後方センサーを備える。また、腕部の中口径ビーム砲は双方向に発射可能で、手首部分だけではなく、肘部砲口も使用できる。

▶小口径レーザー砲2基が胸部に位置する。また、左脚内部にはガンポッドの予備弾倉などが収納されている。

◀バトロイドは重厚なフォルムが特徴で、外観通りの重装甲を誇る。前腕部装甲はシールド代わりに用いられた。

▲頭部
S型のヘッドユニットには4連装対空レーザー砲塔が装備され、索敵・通信機能も強化されている。

▲腕部
マニピュレーターもステルス構成で設計されており、掌部にはセンサー内蔵パッドが設置されている。

▲脚部
足裏ノズル周辺の構造は他のVFとさほど変わらないが、踵も尖った形状となっている。

VF-17D(一般機)

機体解説

重可変戦闘機VF-17シリーズの中で最も生産数が多く、同シリーズの標準型とも言えるのがVF-17D(D型)である。A型およびC型は開発の遅れにより暫定的なエンジンが搭載されていたが、このD型でようやく新型の熱核タービンエンジンFF-2100Xを2基搭載。アビオニクスにも改良が加えられ、単機あるいは極少数による特殊任務に対応可能な本来の性能を獲得した。

大推力の熱核タービンエンジンにより、大気圏外においてもオプションパーツなしでの完全な運用が可能であった。

有人機としてはトップクラスの高い性能を有していたためか、特殊な任務を帯びることも多い機体だった。

データ

※データはファイター形態時のもの

- **開発メーカー**▶ゼネラル・ギャラクシー
- **全長**▶15.63m
- **全幅**▶14.18m
- **空虚重量**▶11850kg
- **エンジン**▶新中州重工／P&W／ロイスFF-2100X×2
- **エンジン推力**▶55000kg(宇宙空間瞬間最大推力)×2
- **補助エンジン**▶高機動バーニア・スラスター　P&W　HMM-6B
- **機体設計強度**▶プラス33.5G、マイナス18.0G
- **巡航速度(標準大気圏内高度10000m)**▶マッハ4.0+
- **戦闘上昇限度**▶無制限(地球クラスの惑星なら衛星軌道までの進出可能)
- **武装**▶レーザー砲×2／連装対空レーザー砲塔×1／中口径ビーム砲×2／多目的ガンポッド×1／マイクロミサイルランチャー×4(他の兵装パックに換装可能)／オプション兵装多数

運用記録

VF-17は、シリーズ全体の総生産機数が718機と少なく、各移民星、移民船団等で運用するVFとしては配備数がごく僅かだった。同シリーズの標準機であるD型も、少数のエリート部隊に配備されるに留まっている。そのうち、D型を2機擁したマクロス7船団所属のダイヤモンドフォースは船団のエース部隊として活躍。バロータ軍との戦闘においてD型の真価をいかんなく発揮した。

ダイヤモンドフォースに配備されたD型には、ガムリン・木崎、フィジカ・S・ファルクラムらが搭乗した。

惑星ゾラ近辺で暗躍するロスチャー商会が闇ルートで販売していた統合軍のVF-17は、機体色がオリーブグリーンだった。

ファイターモード

▶機体上面に配置された腕部には、レーダー波の反射をコントロールするためと思われるアームナセルを装備。ステルス能力を追求した形状となっている。

主要パイロット
ガムリン・木崎

▶ステルス性を考慮し、突起物は機体上面に配置。脚部も90度回転させて収納することで、機体が極力薄く平らになるような形状制御が施されている。

ガウォークモード

▶他のVFとは大きく異なる独特のフォルムとなっている高速戦用のガウォーク形態。広範囲な射界を持つ中口径ビーム砲は、対地対空両面で威力を発揮する。

◀脚部の向きが特徴的だが、従来型の逆関節とすることも可能である。

バトロイドモード

▶アーマードバルキリーのように重厚なバトロイド形態だが、2門のレーザー砲塔を持つ頭部はすっきりとしたフォルムになっている。

◀武装、装甲、重量から重可変戦闘機のカテゴリーに種別される機体だけあって、背部のシルエットは肉厚なものになっている。

背部のバーニアはステルス性を高めるために内蔵式となっているが、状況に応じてノズルを外部に露出させることもできる。

ガンポッド

▼▶VF-17 ナイトメア用に製造された多目的ガンポッド(MC-17A)で、7砲身ガトリング式。脚部収納時は、ふたつに分割したストックが180度回転し、砲身を挟み込むストック・フォールディング状態となる。

▲ストック・フォールディング状態

▼射出システム(右脚部)

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶VF-17 ナイトメア

VF-17S(ミリア機)

機体解説

ダイヤモンドフォース隊長の金龍がスピリチアを吸収され戦線を離脱した際、その乗機をシティ7の市長であるミリア・ファリーナ・ジーナスが赤く塗り直すよう指示し、自身の乗機としたもの(のちに再度塗り直され、ガムリンの乗機となる)。コールサインも金龍の「D1」を継承している。かつてエースの名を欲しいままにした彼女は、高い技量が要求されるVF-17Sを難なく乗りこなしバロータ軍と渡り合った。

「乗りこなせるのは私しかいない」と豪語したミリアは見事にVF-17Sを操り、ギギル率いる敵部隊と交戦した。

多少のピンチに陥ったミリアだったが、かつての教え子であるガムリン・木崎と共闘し見事に敵部隊を退けた。

主要パイロット

ミリア・ファリーナ

バトロイドモード

「市民を守るのは市長の仕事」と言い、搭乗者不在のVF-17Sを乗機としたミリア。かつてエースパイロットだった彼女は、本機の想像以上のパワーを気に入ったと豪語している。

ファイターモード

隠密性を重視した特務機ながら、ミリアの意向で赤く塗り直された機体。その理由も「目立つように」という機体のコンセプトを無視したものだった。

フォールド・ブースター

VF-17は、AVF開発計画時に設計されたVF用フォールド・ブースターを用い、単独でフォールド航行を行う能力を有していた。当時の同装備は未成熟で長距離での使用は危険と判断されていたが、ダイヤモンドフォースがこれを使用し、航行を成功させている。

ダイヤモンドフォースは賭けとも言える航行を成功させた。

▼機体上部中央にフォールド・ブースターを装着。YF-19やYF-21よりも少ない2基のパイロンで固定するが、その後部は若干機体から張り出す形状となる。

フォールド・ブースター

▲AVF開発計画において試作されたものとほぼ同様の、VF用フォールド・ブースター。VF-17による航行自体は成功したが、ブースターの損傷は非常に大きかったようだ。

▲アームナセル間に装着されたフォールド・ブースター。なお、ダイヤモンドフォースのフィジカが割り出した航行成功の確率は50%に満たなかった。

レドーム装着タイプ

機体上部に大型のレドームを装備した、VF-17の早期警戒・管制・索敵タイプ。シティ7がバロータ軍によって強制的にフォールドさせられた際、その行方の手がかりとなる痕跡を探索するため、ダイヤモンドフォースの各機が使用した。

レドームを装備し探索任務に当たったVF-17D。

▲レドームを装備することで、電子索敵能力を強化したVF-17。ただし、機体そのものの配備数が少なかったためか、レドームを装備したVF-17が見られることはほとんどなかった。

▲機体後部からやや前傾した支持架の先に設置されているレドーム。大きさはさほど変わらないものの、そのディテールは当時の主力機VF-11用のレドームとは大きく異なっている。

多数の機体が探索に当たったが、シティ7の転移先の手がかりとなる石片を発見したのはガムリンのVF-17だけだった。

機体解説

優れたステルス性能と高い攻撃力が共存したVF-17 ナイトメアは、装備を追加せずとも大気圏外での運用が可能である。だが、プロトデビルンなどの強敵に対応する目的で、さらなる武装強化と航続距離の延伸を可能とするスーパーパーツがオプションとして用意されていた。この装備は、マイクロミサイルランチャーを設置したウェポンコンテナと、大口径ビーム砲を備えたエアインテーク付きブースターで構成されている。これらを装備した状態でもファイター、ガウォーク、バトロイド3形態への変形は可能で、VFとしての優れた汎用性は保たれたままとなった。

優れた機動性を発揮するファイター形態。ステルス性能よりも攻撃力が重要となる作戦では、スーパーパーツを装着した状態で戦場に投入された。

スーパーパーツ装備時のバトロイド。大気圏内でもその性能は十分に発揮できたと見られる。

運用記録

スーパーパーツは、ガムリン・木崎率いるダイヤモンドフォース隊所属のVF-17に装備された。「オペレーション・スターゲイザー」では、プロトデビルンの眠る洞窟に急襲を仕掛け、マイクロミサイルランチャーの一斉射などでガビルに迫った。また、ゲペルニッチとの最終決戦でも使用され、その高い攻撃力でマクロス7船団の防衛に尽力している。パーツを装備・運用した回数は少ないものの、重要な局面では欠かせないVF-17の「切り札」であったと言えるだろう。

洞窟付近でガビルと戦闘を行った際には、マイクロミサイルランチャーを打ち切ったあと、コンテナを排除している。

ゲペルニッチとの最終決戦では、スーパーパーツに加えてスピリチア吸収システムを装備した状態で出撃した。

スーパーパーツ

ファイターモード

ウェポンコンテナとして設置された2基のミサイルランチャーは主翼下部に、ビーム砲は機体上部にレイアウトされた。また、ブースターの増強によって、機体全体のボリュームが通常時に比べ増している。

◀エアインテーク付きブースターは、レーダー反射断面積の小さい形状である。これにより、スーパーパーツ装備によるステルス性能の低下を最小限に抑えている。

◀ファイター形態では、脚部が機体内に収納されるため、脚部に装着されていたスーパーパーツは主翼の下へと移動する。この状態でもマイクロミサイルランチャーは使用可能。

バトロイドモード

バトロイドモードでは、大口径ビーム砲が肩部上に、マイクロミサイルランチャーは脚部にレイアウトされる。これにより、単機でも複数の敵に対応することが可能となった。

◀マイクロミサイルランチャーが露出した状態。ミサイルを全て発射した後はデッドウェイトとなるため、切り離し機構が備えられている。

▶サイドから見た図。スーパーパーツの設置によって、特に脚部が膨らんだフォルムとなり、重厚な印象を受ける。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-17 ナイトメア

変形機構

ステルス性能を得るために特殊なフォルムとなっているVF-17は、その変形機構にも独自の発想が加えられていた。特にファイター形態においてその独自性が顕著に現れており、まず通常のVFでは機体下部中央に設置されることが多い両腕部が機体上部にレイアウトされている。また、脚部が機体に対して90度回転する機構を有し、できるだけ機体がフラットになるような工夫がなされていた。これにより、機体の特性であるステルス性能を遺憾なく発揮したのである。

1 ファイターから脚部の変形

A 両脚エンジンブロック、90度内側にひねる
B 脚部、後方に少し突き出る

2+ ガウォークの完成

A 腕部を左右に展開。レーザービーム砲がせり出す
B 脚部下ろす

2 脚部・機体後部・頭部の変形

A 後頭部の整流カバー引きこむ
B 両脚ブロック、腰から180度回転
C 機体後部、180度折れる

3 腕部・胸部の変形

左側・肩部裏面

A 肩ブロック、90度外へ開く
B 肩ブロック、180度ひねる
C 胸部ブロック、約45度起き上がる

4 頭部・腕部・胸部・主翼の変形

A 頭部180度回転　B 腕部回転して定位置へ
C コクピット90度起き上がり、胸部内に隠れる　D 可変主翼畳む

5 バトロイドの完成

A 手首出る

VF-19

YF-19の制式採用によって生まれた、高性能可変戦闘機の量産モデル

●主要パイロット

ドッカー

●データ　※データはファイター形態時のもの

所属 ▶ 地球統合軍
全長 ▶ 18.47m
全幅 ▶ 13.52m
空虚重量 ▶ 8,620kg
エンジン ▶ 新星／P&W／ロイスFF-2550X×2
エンジン推力 ▶ 68,950kg×2
補助エンジン ▶ 高機動バーニア・スラスター P&W HMM-7
巡航速度 ▶ マッハ5.1+(標準大気内高度10,000m)
高高度巡航速度 ▶ マッハ25+(高度30,000m以上)
戦闘上昇限度 ▶ 無制限(地球クラスの惑星なら衛星軌道までの進出が可能)
武装 ▶ レーザー砲×2／後方対空ビーム砲×1／後方対空レーザー機銃×4／防弾シールド×1／高機動マイクロミサイル×12／多目的ガンポッド×1他

●サイズ比較

VF-1J
VF-19

●開発系譜図

YF-19 ▶ VF-19 ▶ YF-24

機体解説

次期全領域可変戦闘機(AVF)開発計画「スーパー・ノヴァ計画」のコンペティションに勝利したYF-19を制式採用した量産機。ここで解説するVF-19S(S型)は、次期主力機に制式採用されたVF-19の一般機であるF型に指揮官機としての改修を加えたバリエーション機で、索敵通信能力や武装の強化、エンジンの改良などが施されている。また、F型と共通する特徴として、機体構造を大幅に簡略化すると同時にエンジンを出力の安定したタイプに換装することで、原型機YF-19の高すぎる機動性能を抑えている。こうした仕様変更により、本機は一般のパイロットでも十分に操縦可能でありながら、従来の主力機を凌駕する総合性能を持つVFとして完成した。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-19 エクスカリバー

運用記録

「シャロン・アップル事件」の影響などで「スーパー・ノヴァ計画」は一時的に凍結された。しかしのちに再開され、YF-19がコンペに勝利、「VF-19 エクスカリバー」として制式採用されることになった。本機は複数のバリエーションが生産されたことでも知られるが、本格的な量産体制に移行したのはF型の開発以降とも言われる。マクロス7船団では2045年から逐次生産が進められ、当初はエメラルドフォースの専用機として配備されることとなった。なお、隊長機のS型はドッカー大尉が運用し、「E1」のコールサインで呼ばれた。

マクロス7船団では量産に先がけて実地テストが行われた。このテスト機はエメラルドフォース所属機とはカラーリングが異なっていた。

VF-19を運用したエメラルドフォースは、サウンドフォースの護衛やオペレーション・スターゲイザーなどで活躍した。

標準装備

武装の基本的な配置はYF-19と同じで、ピンポイント・バリア・システムも搭載されている。なお、S型はヘッドユニットに連装式の対空レーザー機銃2基(計4門)が増設されており、F型よりも高い火力を持つ。

脚部には高機動マイクロミサイルを6発ずつ内蔵している。他の兵装パックとの換装も可能であった。

▲多目的ガンポッド
ガンポッドはYF-19に装備されたハワードGU-15に形状が酷似しているが、細部が簡略化されている。

▶後方対空ビーム砲
後方対空レーザー機銃
頭頂部に小口径ビーム砲を、側頭部にレーザー砲(レーザー通信システム兼用)を2門ずつ備える。

コクピット

コクピット構造はYF-19のものをほぼ踏襲しており、足元の内壁がスクリーンとして機能する点も同じである。また、高性能AIの支援によって操縦性の向上が図られている。

コクピットのシステムに大きな変更はないものの、操作性はYF-19から大幅に改善されている。

右はメインコンソールモニターのロックオン表示パターン。

▲レイアウトや内部機器の構造などは、YF-19から引き継がれている。

▶バトロイド時のコクピット内部。パイロットを中心とする全方位がモニターでカバーされている。

ファイターモード

ファイター形態の最大推力はYF-19よりも高く、原型機を上回る最高水平飛行速度を発揮した。その一方でスロットルのレスポンスが抑えられており、高機動性能をあえて低下させることで一般パイロットでも扱えるようにバランスが調整されていた。S型ではエンジンが新星／P&W／ロイス製FF-2550Xに換装されており、新星／P&W／ロイス製FF-2550Jを搭載したF型に比べて大気圏内飛行速度が向上している点も特徴である。

原型機の持つ高い機動性を抑えてもなお、当時の主力機であるVF-11 サンダーボルトを上回る機動性を有していた。

▶主機の換装による重心の移動と気流制御技術の向上に伴いカナード前翼が廃されている。コクピット後部には高機動バーニアが設けられた。

▶主翼形状が大きく変更されており、デルタ翼と前進翼を組み合わせたような形となっている。

▼メインノズルは原型機と同じ推力偏向式2次元ベクタードノズルで、上下に可動する。

▼YF-19と同じくアクティブステルス機能を有する。また、ナセル下部のベントラルフィンは廃されている。

エメラルドフォースがバトロイドによる戦術を多用したためか、ファイター形態は主に長距離移動などの際に使われた。

YF-19よりも飛行時の安定性に優れており、オペレーション・スターゲイザーでは狭い渓谷の間を縫うように飛行している。

ガウォークモード

VF-19シリーズの変形機構はYF-19のそれをほぼ同じ形で受け継いでおり、本機のガウォーク形態の構造も原型機とほとんど違わない。重力下におけるホバー移動に代表されるガウォークの運用法も同様で、マクロス7船団が惑星ラクスに不時着した際には、エメラルドフォース所属のVF-19も本形態を度々用いている。ただし、他の形態に比べると使用頻度は低かったようである。

惑星ラクスに降りたバサラたちを追跡してバトル5の艦内を移動した際にガウォーク形態を用いた。(写真奥)

宇宙空間でガウォーク形態が運用されることは少なかった。変形時の中間形態として見られる程度だったようだ。

その他のガウォーク形態の利用法としては、VTOL機能を生かした不整地での離着陸が挙げられる。

▲YF-19系列機の特徴である主翼の上側から腕部を展開させる構造は、本機でも見られた。

▼展開された脚部の推力と機体各部の高機動バーニアによって、高い機動性を発揮した。

▶ガウォーク形態では腕部を展開させる必要上、機体後部がやや斜めに持ち上がった状態となる。

◀尾翼は脚部に密着するように折り畳まれる。

バトロイドモード

VF-19はピンポイント・バリア・システムの採用によって装甲の簡略化が可能となったことから、大型の機体でありながら軽量で、機動性と防御力の両立に成功している。バトロイド形態はその特性がもっとも顕著に表れており、エメラルドフォースでも本形態が多用されたようだ。特に、混戦が多かったバロータ軍との戦いでは、状況に応じて柔軟な対応が可能となる本形態を用いることがほとんどだった。

ピンポイント・バリアは防御用の装備だったが、YF-19と同じく、掌部に展開して格闘戦を行うことも可能であった。

エメラルドフォースでは、バトロイドで密集して火力を集中させる戦法が多く用いられている。

オペレーション・スターゲイザーや対ゲペルニッチ戦ではスーパーパーツを装備して戦った。

▲左右に張り出した肩部装甲の内側や背部ブロックには、複数の高機動バーニアが配されている。

▶YF-19と同じく、主翼が折り畳まれて腰部に連結される。連結部の先端には内蔵式レーザー砲を備える。

◀エメラルドフォース専用機のS型には青地に黄色のラインが入ったカラーリングが施された。またS型は頭部形状がF型とは異なる。

大気圏内外両用ブースター

VF-19エクスカリバーには、オプションとして大気圏内外両用ブースターが用意された。これは、機体上面のブースターユニットとナセル側面の武装コンテナで構成される装備である。原型機のYF-19でも同様の部位に追加装備が開発されていたが、それとは形状やサイズが異なっている。アクティブステルス技術の進歩で外装ユニットの形状制限が緩和されたことや、ブースターユニットの基本性能の向上が求められたことなどが再設計の理由とされる。

マクロス7船団においては通常の戦闘で使用されることは少なく、オペレーション・スターゲイザーなどで運用が確認された。

最終局面となった対ゲペルニッチ戦でも、大気圏内外両用ブースターとスピリチア吸収システムを装備したドッカーのS型が活躍した。

ブースターユニット

ブースターには、上部に大気圏内用エアインテークが、先端部の左右に計4基のマイクロミサイルランチャーが装備されている。

武装コンテナ

エンジンナセル側部に装着される武装コンテナは、側面ハッチが展開して搭載武装を発射する構造となっている。

バトロイド時レイアウト

可変システムの構造により、バトロイド形態時にブースターが肩部先端に位置する珍しいタイプ。なお、ブースターはYF-19の肩部アーマーユニットよりも大型化している。

ファイターモード

▶ブースターユニットの構造はVF-11の大気圏内用ブースターと同じだが、エアインテークの形状などが異なる。

▼ブースターユニットは涙滴状で、機体上面の凸部(バトロイド時の肩部)に密着するようにして装着される。

▲VF-11の大気圏内用ブースターとは異なり、本機のブースターノズルは推力偏向機能を持たない。

▶武装コンテナは主翼下のエンジンナセル側面に装着される。これは一般的なユニット配置と同様だ。

バトロイドモード

▼大気圏内外両用ブースターを装備したS型のバトロイド形態。肩部にブースターが位置した特異なフォルムだ。

▲ブースターはバトロイド時にも推力機関として機能し、重力下において優れた機動性を発揮した。

▶腕部を省略したブースター装備バトロイドの側面図。本形態ではブースターが直立した状態となる。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-19 エクスカリバー

VF-19F エクスカリバー

VF-19F(F型)は、VF-19 エクスカリバーの量産型である。S型との違いは、ヘッドブロックの武装が変更された点にある。スペック面においては、S型よりエンジン推力に優れる反面、巡航速度と海面上昇率でS型に劣っている。総合的に見るとS型より性能はやや低いものの、従来の主力機であるVF-11との差は歴然で、新世代のVFと呼ぶに相応しい性能を有している。

データ ※データはファイター形態時のもの

全長▶18.47m
全幅▶13.52m
空虚重量▶8,850kg
エンジン▶新星/P&W/ロイス FF-2550J×2
エンジン推力▶78,500kg(宇宙空間瞬間最大推力)×2
補助エンジン▶高機動バーニア・スラスター P&W HMM-7
巡航速度▶M5.0+(標準大気内高度10,000m)/M25+(高度30,000m以上時)
海面上昇率▶65,000m/min
標準武装▶レーザー砲×2/後方用対空レーザー機銃×1/防弾シールド×1/高機動マイクロミサイル×12/多目的ガンポッド×1/戦闘機用ピンポイント・バリア・システム/オプション兵装多数

その高い性能から次期主力機に選ばれ、マクロス7船団では制式採用に先がけてエメラルドフォース隊によって運用された。

ファイターモード

主要パイロット
オルテガ/マシューズ

▶ラインの色と機体上部の武装が異なる以外に、S型と外観上の違いは見られない。

▲対空用の小口径ビーム砲1門となり、火力は低下。ノズルは2次元ベクタードノズルである。

小口径ビーム砲/内蔵式レーザー砲

固定武装は後方対空小口径ビーム砲1門と、ストレーキに配された内蔵式レーザー砲2門である。

▶機体底面はS型との差異はない。ノズル根元のラインはバーニアスリット(S型も同じ)。

ガンポッド接続図

ガンポッドの接続方式を示した図。収納した両腕部にガンポッドのグリップ側を挟むように接続する。

ガウォークモード

◀F型のガウォーク形態。可変システムの構造上、S型と同じく機体後部が斜めに持ち上がる。

▲▶ガウォーク形態となったF型の機体下面。展開した脚部ノズルや背部ユニットの推力で、ホバー移動や滞空を行い、戦闘にも対応した。

バトロイドモード

▲F型のバトロイド形態正面。腕部には防弾シールドを備えるなど、S型と共[illegible]の構造となっている。

▲▶背部ユニットと肩部内側に複数の高機動バーニアを備えており、柔軟かつ優れた運動性能を実現。

頭部形状

頭頂部の小口径対空ビーム砲は、[illegible]自体は2門から1門に減ったが、S型に装備されているものと同種の武装と見られる。

マクロス7船団

100万人規模の移民を支える総合的機能を有した大型艦群

▲海洋·リゾート艦リビエラ

艦体解説

2038年に地球を出航したマクロス7船団は、長期の宇宙航行を想定した生活環境の総合的な向上·改善がなされた移民船団である。同船団においては100万人規模とも言われる移民の生活を支えるべく、生産、研究、娯楽などに特化した機能を持つ6つの大型艦が随行し、その中核をなしている。海洋·リゾート艦、工場艦、農場艦、アミューズメント艦、研究実験艦、統合軍訓練艦はそれぞれ全長約6,300～3,500mという巨大なもので、船団の中心的な居住地となっているシティ7にも匹敵する大きさである。なお、6つの艦はそれぞれ固有の機能を有しているものの、前線に立つことは想定しておらず、戦闘能力はないに等しい。そのため船団の最奥部に位置しているだけでなく、各艦の艦首や船体前部にはステルス護衛戦闘空母、あるいは護衛用フリゲート艦がドッキングして艦の護衛にあたっている。

判明している艦名

- ▶海洋·リゾート艦リビエラ
- ▶工場艦スリースター
- ▶農場艦サニーフラワー
- ▶アミューズメント艦ハリウッド
- ▶研究実験艦アインシュタイン
- ▶統合軍訓練艦ビギンヒル

6つの艦とマクロス7は船団の中でも安全な最奥部に位置している。各艦はミルキーウェイと呼ばれる宇宙空間の交通網で結ばれ、容易に行き来ができる。

サイズ比較

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶マクロス7船団

海洋・リゾート艦リビエラ

巻き貝のような特異な外観を有し、中央部には直径3,600mにおよぶ人工海洋を湛える大型艦。人工海洋で養殖、飼育された新鮮な海洋生物を移民艦隊に供給しているほか、海洋設備の一部を高級レジャー施設として開放しているため「リゾート艦」とも呼ばれている。10km以上続く海岸の一部には高級リゾート「リビエラ」が広がり、ホテルやカジノ、別荘などが立ち並び海水浴客でにぎわっている。ちなみに、「リゾート」という性格上からか、配属されている軍の女性オペレーターは美人ぞろいであるとも言われている。

艦体上面は透明なドームで覆われている。無数のサーチライトが投射されるなど、外観的にはリゾート施設の色合いが強い。

▼船体の周囲には、9枚のフィンが張り出している。最長600mほどのフィンは、放熱と人工海洋の環境調整システムである。

▲艦首には護衛戦闘空母CV404 URAGAがドッキングする。ドッキングベイ横の港は、スターポート（星の港）と呼ばれている。

▲艦体下面の突起物は、深海生物研究用の高圧タワーであり、加速時の海洋の安定、海流の制御、水温と水圧の制御なども司る。

データ

全長▶約6,300m（護衛空母含まず）
運用質量▶約107億t
乗員数▶約100,000人
瞬間最大加速▶0.45G
エンジン▶オーテック／センチネル インパルス・ドライブ・クラスター
フォールド・エンジン▶オーテック／新中州／ゼネラル・ギャラクシー 超大質量用フォールド・システム・クラスター（重力場制御システム付属）
設備▶リゾート施設／マリンパーク／水族館／海洋生物研究所等

工場艦スリースター

大型反応炉を中心に各種コンビナート、工場群、工場職員のための団地ブロックなどが組み合わされている大型工場艦。実用一点張りの設計がなされたため、もともと反応炉や加工ブロック、タンク、推進システムなどがむき出しで配置されていたが、頻繁な設備の改造増築にともない、ますます雑然とした外観となりつつある。移民艦隊が必要とする様々な製品を産み出す本艦は、宇宙塵や小惑星、航路近くの恒星系より回収した資源を精製加工し、小さい物は日用雑貨から、大きい物は可変宇宙戦闘機、宇宙戦艦まで作り出す能力を持っている。

中央上部の大型特殊反応炉、下部の超大型タンクを中心に設備が整えられた艦体。その特徴的な外観は要塞のようでもある。

▶艦首には護衛用フリゲート艦が接舷待機する。向かって右側の港は大型資材搬入口、左側は大型製品搬出口となっている。

▼稼動時には強力な反応炉の排熱処理のため、艦体後部から、厚さ数ミリながら全長15kmもの放熱フィルムを曳航する。

THREESTAR HEAVY INDUSTRY INC.

データ

全長▶約5,500m（放熱フィルム含まず）
運用質量▶約59億5,000万t
乗員数▶約150,000人
瞬間最大加速▶0.45G
エンジン▶オーテック／センチネル インパルス・ドライブ・クラスター
フォールド・エンジン▶オーテック／新中州／ゼネラル・ギャラクシー 超大質量用フォールド・システム・クラスター（重力場制御システム付属）
設備▶特殊反応炉／他工場動力用補助反応炉／資源備蓄用兼製品格納用大貨物室／超大型タンク等

アミューズメント艦ハリウッド

マクロス7船団において、情報・通信システムの集合体として機能する球状の艦。艦体表面はフェイズドアレイアンテナパネルで覆われている。一方、空洞の多い内部には直径数百mから最大1,000mにも及ぶテーマパークが点在しており、一般市民の憩いの場としても機能していた。

武装を備えていない艦を護衛するため、艦首には護衛戦闘空母CV406がドッキングされている。

ジェットコースターを備えた遊園地のほか、ハリウッドの名に相応しく、本格的な撮影所もある。

データ

全長▶約3,500m(護衛空母含まず)
運用質量▶約5,300万t
乗員数▶約5万人
瞬間最大加速▶0.55G
エンジン▶オーテック／センチネル インパルス・ドライブ・クラスター
フォールド・エンジン▶オーテック／新中州／ゼネラル・ギャラクシー 超大質量用フォールド・システム・クラスター(重力場制御システムが付属)
設備▶アミューズメント設備多数(テーマパークなど)／多重回線フォールド通信システム／重力場センサー／超長距離通常レーダー／逆探知システム／超高速コンピュータ情報解析センターなど多数

▼エントランス

▲艦尾に設置されているハリウッドのエントランス。ミルキーロードで他の艦と繋がっている。

▼側面

▲艦の上部、底部に通信探知システムを集中的に設置。また、民間、軍の情報処理施設を備える。

▼後方

▲▶強力な多重回線フォールド通信システムを有しており、銀河ネットワークの中継も行っている。

▲娯楽艦としての機能もあるためか、艦体は多数備えたサーチライトできらびやかに演出されている。

統合軍訓練艦ビギンヒル

ウエストポイント級移動支援母艦の7番艦にあたる艦で、マクロス7船団の中核大型の中では、唯一の軍用。訓練施設や前線司令部や各軍艦への補給機構、小型艦の修理施設、兵器の開発工廠など、軍事関連関係の施設が揃っている。また、艦自体に自衛用の武装を備えるのも特徴のひとつだ。

艦首には、ステルス護衛戦闘空母CV-412「アバディーン」がドッキングしている。

設備が充実していたため、ガムリン・木崎などVFパイロットたちの訓練場所として機能していた。

データ

全長▶約3,500m(護衛空母含まず)
運用質量▶約331,500万t
エンジン▶オーテック／センチネル インパルス・ドライブ・クラスター
フォールド・エンジン▶オーテック／新中州／ゼネラル・ギャラクシー 超大質量用フォールド・システム・クラスター
設備▶補給用ドッキングポート多数／艦載機発着ポート／対空ミサイルランチャー多数／対空レーザーファランクス多数

▶地球統合軍のマークが艦前方に設置。訓練艦と呼ばれるように、艦載機発着施設や士官学校もある。

▶上部に位置する最大の区画は第1演習キューブと呼ばれ、VFの市街地戦演習場を備える。

▼側面

▲「アバディーン」とのドッキング部の下に、小型艦の補給用ドッキングポートを備える。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶マクロス7船団

研究実験艦アインシュタイン

統合科学財団所属の、科学研究を目的とした艦。天体物理学や宇宙工学など、あらゆる事柄の基礎研究から製品の開発までを行える設備を揃えている。

艦首には、ステルス護衛戦闘空母CV-417「ケフラヴィーク」がドッキングされ、艦を護衛する。

データ

全長▶約3,000m（護衛空母、冷却フィン含まず）

運用質量▶約22,500万t

エンジン▶オーテック／センチネル インパルス・ドライブ・クラスター

フォールド・エンジン▶オーテック／新中州／ゼネラル・ギャラクシー 超大質量用フォールド・システム・クラスター

設備▶実験用大型反応炉／各種実験プラント／各種宇宙観測機器

エキセドル・フォルモが、プロトデビルンの分析を行うために使用した。

▲実験用超重力場発生装置、物質=エネルギー変換炉など、研究設備も充実しており、様々な現象を素早く分析できる。

農場艦サニーフラワー

艦体上部が牧畜目的の人工草原、下部が農産物の栽培プラント兼備蓄倉庫となっている艦。ソーラーパネルを装備しており、太陽光発電が可能である。

◀人工草原となっている艦上部はドーム型。牧場のみならず、一般市民用のキャンプ施設や動物公園などもある。

艦体は一切武装を備えていないため、防御用としてステルス護衛空母が艦首にドッキングされている。

データ

全長▶約4,850m（ソーラーパネル、護衛空母含まず）

運用質量▶約320,000万t

瞬間最大加速▶0.55G

エンジン▶オーテック／センチネル インパルス・ドライブ・クラスター

フォールド・エンジン▶オーテック／新中州／ゼネラル・ギャラクシー 超大質量用フォールド・システム・クラスター

設備▶植物栽培プラント／同プラント維持用人工太陽システム／動植物研究所／作物備蓄倉庫／リゾート施設

ミルキーロードと直結している、サニーフラワーのエントランス。

▲後方から見たサニーフラワー本体。名称通り、向日葵のような外観を有するのが特徴となっている。

マーク・トウェイン号

マクロス7船団に所属する娯楽船の一種で、全長は約300m。バナナワニ園や流れるプールなどが内部に設置されている。

◀船体側面はステンドグラスに覆われているほか、下部には派手なイルミネーションが取り付けられている。

◀▼レトロ・フューチャーなデザインが特徴的。豪華客船のイメージを出すためか、スラスターの左右に「飾り」の推進パドルを設置。

▼側面からみた船体。後部（右側）が出入口・駐車デッキとなっている。

Fire Bomberも、マーク・トウェイン号内でコンサートを開いた。

マクロス7船団護衛艦

移民船団の航海を守る 護衛艦隊の戦艦群

▲護衛戦闘空母　CV404 浦賀

艦体解説

未知の世界である銀河に漕ぎ出す超長距離移民船団には、不測の事態に対応できるだけの戦力が要求された。しかも、複数の非戦闘艦を擁する大規模移民船団の場合、必要とされる護衛戦力も必然的に大きくなり、さまざまな艦艇が船団に組み込まれた。2040年代には護衛戦闘空母やステルス空母、ステルスフリゲートなど主に護衛を任務とする艦艇が、マクロス7船団をはじめとする移民船団に編成されている。各艦艇はいずれも第一次星間大戦時の統合軍艦艇から発展したもので、単独でのフォールド航行が可能となり、ステルス性能や艦載機運用能力も強化されている。これらの艦艇で編成された護衛艦隊によって、移民船団は守られていたのである。

2045年にバロータ軍と遭遇したマクロス7船団では、激しい戦闘が幾度となく繰り広げられ、護衛艦隊は必死の防戦を強いられた。しかし、結果的にはかなりの被害が出ることになった。

移民船団の護衛だけでなく、未探査宙域に先行する調査船団の戦力として運用されることもあった。バロータ星系第4惑星に派遣された特務調査部隊もそうした艦隊のひとつである。

判明している主な艦名

- 護衛戦闘空母　浦賀／BRANPTON
- ステルス空母　舞鶴／グァンタナモ／モモイ
- ステルスフリゲート　ボロネーゼ／スターゲイザー

サイズ比較

EXTRA REPORT 関連事項

第5世代巨大移民船団での運用

2050年代末に航海を行っていたフロンティア船団にも、マクロス7船団での戦闘を生き抜いた浦賀、舞鶴といった艦艇が配備されていた。居住艦を中心に防衛ラインを形成する運用法も大きく変わっていない。

F

▲ウラガ級二段式水宙両用空母

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶マクロス7船団護衛艦

ウラガ級護衛戦闘空母

2段式甲板が特徴のステルス戦闘空母で、65〜75機の艦載機を運用する性能を有する。また、巡洋艦クラスの戦闘能力を誇り、小規模艦隊の旗艦を務める機能も備えている。新鋭艦の部類に入り量産コストも高いため、マクロス7船団への配備は他に比べて少数にとどまる。船団中核艦に連結した防衛ステーションとして運用される艦もあり、リゾート艦リビエラのCV404「URAGA（浦賀）」、アミューズメント艦ハリウッドのCV406「BRANPTON」などが同型艦として挙げられる。

●データ
全長▶約550m
運用重量▶25,000t
戦闘時瞬間最大加速▶1.75G+
エンジン▶ゼネラル・ギャラクシー インパルス・ドライブ・エンジン
フォールド・エンジン▶オーテック／新中州 フォールド・システム（重力場制御システム付属）
標準武装▶ビフォーズ 対艦対空ビーム砲／ビフォーズ レーザーファランクスCIWS／ビフォーズ 対空高機動ミサイルシステム他多数

▲艦体形状は新マクロス級バトル7にやや似ている。艦尾にはメインノズルや格納式ゲート、ドッキングシステムなどが配されている。

高い艦載機運用能力とバランスの取れた総合性能を有しており、哨戒任務もこなす移民船団護衛艦隊の要として活躍した。

グァンタナモ級ステルス空母

アームド級宇宙空母の設計を発展させたステルス艦で、アドバンス・アームド級とも呼称される。アームド級と同じく、戦闘機ドックに推進機関と戦闘用装備を追加したシンプルな構造が特徴で、生産性に優れている。さらに、40〜45機の艦載機を搭載することが可能で、マクロス7船団では主力空母として運用されていた。また、ウラガ級と同様、中核艦の防衛ステーションを務める場合もあり、農場艦サニーフラワーにはCV299「グァンタナモ」がドッキングしている。

●データ
全長▶約352m
運用重量▶9,500t
戦闘時瞬間最大加速▶1.45G+
エンジン▶ゼネラル・ギャラクシー インパルス・ドライブ・エンジン
フォールド・エンジン▶オーテック／新中州 フォールド・システム（重力場制御システム付属）
標準武装▶ビフォーズ レーザーファランクスCIWS／ビフォーズ 対空高機動ミサイルシステム

▲ARMD362 舞鶴

▲菱形の艦体構造が特徴で、4面の甲板を備える。また、艦首と艦尾メインノズル下部は大型ドックになっており、艦載機の展開能力に優れている。

船団からはぐれたシティ7の位置が判明した際には、同級のARMD375「モモイ」が救援として派遣されたが、シビルとの交戦で中破した。

ノーザンプトン級ステルスフリゲート

移民船団護衛艦隊の主力を担うフリゲート艦で、機動力とステルス性能に優れている。配備数は非常に多く、戦闘力強化型や偵察型、早期警戒型などの改装艦も存在する。移民船団においては外縁の第1次防衛ラインの戦力として運用され、その内側の第2次防衛ラインを上記2種の空母群が担うケースが多い。さらに、移民船団の航路上を先行して監視を行う小艦隊「パイロットフィッシュ」や、物資確保用の惑星を探索する別働艦隊として運用されることもある。

●データ
全長▶約252.5m
運用重量▶約1,200t
戦闘時瞬間最大加速▶1.95G+
エンジン▶ゼネラル・ギャラクシー インパルス・ドライブ・エンジン
フォールド・エンジン▶オーテック／新中州 フォールド・システム（重力場制御システム付属）
標準武装▶ビフォーズ 対艦対空ビーム砲、ラミントン 対空レーザー砲、ビフォーズ 対艦ミサイルシステム他

▼▶前衛艦隊の「ボロネーゼ」や、バロータ第4惑星への突入作戦を単艦で遂行した「スターゲイザー」が同級として知られている。

菱形の艦体構造と直線的なフォルムによって、ステルス性の向上を図っている。艦中央上部がブリッジで、その真下の開口部がノズルとなっている。

マクロス7船団輸送機

▲大型輸送機

パトル7内に保管されていた大型輸送機は、地球人の身柄を拉致しようと企んだバロータ軍に悪用された。

統合軍のバートン大佐が、シビルを誘拐するためにバリア発生装置を積載した小型の輸送機を運用している。

民間用、軍事用を問わず 多数生産された輸送機群

▼小型輸送航空機

機体解説

マクロス7をはじめ、数々の大型宇宙艦艇で構成される第37次超長距離移民船団(マクロス7船団)には、その広大な艦艇内や、艦艇と艦艇の間を行き来する移動手段が不可欠であった。艦艇間の行き来は、画期的な交通システム「ミルキーロード」の構築により、宇宙でも車輌での移動が可能となったが、航空機や輸送機といった移動・運搬手段も重用されていたのである。確認されているものでは、物資コンテナを搭載できる大型の宇宙用輸送機、バリア発生装置を運ぶ小型輸送航空機、可変戦闘機(以下VF)を懸架して運搬する輸送機などが民間・軍事の場で利用されていた。

Mechanic Sheet
メカニックシート
マクロス7船団輸送機

運用記録

バトル7内に格納されていた大型輸送機は、バロータ軍の行った民間人誘拐未遂事件の際、ミレーヌや民間人を閉じ込めた物資コンテナを輸送するために使用された。だが、バトル7から出航する寸前、熱気バサラの搭乗するVF-19改が駆けつけ、ピンポイント・バリアを駆使して輸送機の外壁を破壊、人質を救出している。一方、統合軍所属と見られる小型の輸送航空機は、ヘリポートを甲板に備えた航空機タイプで、バリア発生装置を搭載できた。シビルの身柄を捕獲するためにバリア発生装置を搭載して出撃し、発生装置によるシビル確保をサポートしている。

バトル7から出航する大型輸送機。バロータ軍は、輸送機を乗っ取り、人質を閉じ込めたコンテナを運び出そうとした。

シビルを捕らえようとしたバートン大佐が、バリア発生装置を載せた小型輸送航空機を出撃させている。

大型輸送機

▼底面から見た輸送機。胴体部のメインウイングに動力機関を各1基ずつ搭載しているのがわかる。尾翼も推進機関部と推測される。

▼サイドから見た輸送機と、尾翼部のアップ図。凹凸の少ない、フラットな機体構造となっている。輸送と飛行能力に特化しているため、武装は施されていない。

▼内部構造

荷物やコンテナを積み込む際には、底部装甲が垂直に降ろされる構造となっていた。内部はVFも十分に収納できるほどのスペースを有している。

▼コンテナ固定軸

機体内部に設置されている、コンテナ固定用パーツ。前後に2基、左右に2基あり、コンテナを四方から挟み込む。

VF-19改のピンポイント・バリアを腕部先端に集めて輸送機の外壁を破壊したバサラは、固定軸も同様に破壊し、コンテナを確保した。

小型輸送航空機

大きさは10m前後と見られる本輸送機は、機体の胴体上部に小型のヘリや車輌を搭載して運用することが想定されていた。大きく後方に突き出た尾翼により、高速飛行時の安定性が保たれていた。

▼バリア発生装置

輸送機が搭載していたバリア発生装置。枝先とその中心軸に設置された発生器からバリアを形成し、対象物を360度包囲する。

関連事項 EXTRA REPORT

VF運搬用輸送機

マクロス7内を移動するために生産されたと見られる航空機の一種。2基のローターを備えたVTOL式の小型機で、垂直離陸・着陸が容易であったと見られる。底部のフックでVFを掴み、運搬する方式であった。

VF-19改、VF-11MAXL改、VF-17Dの3機を輸送する際に利用されている。輸送中、パイロットたちは機体を降り、輸送機内部で待機した。

▲輸送機としては小型であるが、最大13tまでのバルキリーを吊り下げて輸送できる大出力を有していた。

輸送機の内部。コクピットの後方がVFパイロットの待機室で、20～30人ほどが過ごせるスペースがある。

▲▶バトロイドモードのVFの肩部をマニピュレーター式のフックで掴み、吊り下げる方式。

マクロス5船団

居住可能な惑星ラクスを発見した ゼントラーディ人の移民船団

艦体解説

第35次超長距離移民船団として出航したマクロス5船団は、マイクローン化したゼントラーディ人で構成される移民船団である。旗艦のマクロス5（都市船部シティ5と戦闘艦部バトル5）のみならず、船団内の艦艇にも「ネオ ノプティ バガニス bis」や「ステルスフリゲート ゼントラン仕様」など、ゼントラーディ系艦船特有の外観を有するものが多かった。なお、同船団は居住可能な惑星ラクスへの移民を開始した直後、バロータ軍の襲撃を受けて壊滅した。

判明している艦名

- マクロス5
- バトル5
- ネオ ノプティ バガニス bis
- ステルスフリゲート ゼントラン仕様

主要クルー

マクロス5船団長

サイズ比較

SDF-1
マクロス5
ネオ ノプティ バガニス bis
バトル5
ステルスフリゲート ゼントラン仕様

▶マクロス5

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶マクロス5船団

Sheet 13 A

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶マクロス5船団

マクロス5

新マクロス級5番艦であり船団の中枢を担うマクロス5は、ゼネラル・ギャラクシー社と系列傘下の企業グループが主体となって建造された。移民居住船であるシティ5と超大型可変万能ステルス宇宙攻撃空母バトル5は、基本設計・スペックはマクロス7とほぼ同様であり細部においても同等の構造を持ちながら、ゼントラーディの技術に通じたゼネラル・ギャラクシー社製のパーツを多用しているため、ゼントラーディ系艦船特有の外観を持つ部分が方々に見られる。ちなみに、マクロス5船団の総司令官もゼントラーディ人が務めていた。

居住可能な惑星ラクスを発見し、移民を開始したマクロス5と船団の艦船。船団にはマクロス5の同型艦が複数随伴していた。

●データ
全長▶約7,770m
全幅▶約3,885m
全高▶約2,130m(アンテナ、タワー等含まず)
運用重量▶約77億7777万トン
搭乗員▶住民約30万人(船団総数)
主動力▶OTMマクロス熱核反応エンジンマトリックス
主推進器▶OTMマクロスヒートパイルクラスターシステム
フォールド・エンジン▶OTMマクロスフォールドエンジンクラスターシステム

▶青空ホログラム他、街並みの基本構成はシティ7とほぼ同様。ただ、都市群のビルは超大型の団地といった雰囲気のシンプルなものが多い。

バトル5

超大型可変万能ステルス宇宙攻撃空母であるバトル5は、バトル7と同様に強攻型に変形(トランスフォーメーション)可能。変形後の両腕部に相当するステルス宇宙空母部分は、非常時には切り離し各個独自に運用でき、フォールド航行も可能である。また、船体下部に備えられた全長695m、全備重量250万tのガンシップは、バトル5変形後はガトリングバスターキャノンとして手持ち射撃が可能。さらに単艦での独自運用、バスターキャノンの発射が可能となっている。なお、バトル5もシティ5と同様に、細部のディテールはゼントラーディ系艦船特有の外観を持っている。

◀初代マクロス艦よりひとまわり大型のバトル5。内部に居住区は持たないが、ステルス宇宙空母部、主艦体部に合計約700機もの各種艦載機を搭載可能である。

▼機能的にはバトル7とほぼ同等の性能を誇るバトル5。しかし、[illegible]体側部やガンシップを備える船体下部など、デザイン的にはバトル7との違いが見られる。

通常はシティ5艦首部にドッキングしているバトル5。非常時には分離し、超大型可変万能ステルス宇宙攻撃空母として機能する。

●データ
全長▶1,510m
全幅▶370m
全高▶333m(アンテナ等含まず)
運用全備重量▶777万トン
主動力▶OTMマクロス熱核反応エンジンマトリックス
主推進器▶OTMマクロスヒートパイルクラスターシステム
フォールド・エンジン▶OTMマクロスフォールドエンジンクラスターシステム
武装▶大型連装誘導ビーム砲/対艦大型反応弾頭ミサイルランチャー/近接高機動マイクロミサイルファランクス各多数

ステルスフリゲート（ゼントラン仕様）

ゼントラーディ人のみで構成されたマクロス5船団で用いられた、ゼントラン仕様のステルスフリゲート。マクロス7船団で用いられたタイプと構造・性能面での違いはほとんどなかったが、ゼントラーディ用の装備を追加しているため、ブリッジなどの形状が異なるほか、マクロス7船団で運用されたタイプよりも重量が約110t増加していた。艦は通常タイプのほか、ステルス構造を活かした早期警戒タイプや偵察型などのバリエーションが存在する。

ステルスフリゲート（写真奥）は、マクロス5船団の艦艇の中でも最も小さい部類にカテゴライズされる。マクロス5船団では、母艦であるマクロス5を護衛する役割を持っていた。

レーザーセンサー

艦体底部に設置されているレーザーセンサー。敵艦の位置を把握するためなどに用いられた。

ブリッジ

ブリッジのアップ図。ドーム状の部分がブリッジ本体で、その周囲に複数のアンテナやレーダーを設置している。

◀側面
底部中央にレーザーセンサーを、上部にブリッジを備えている。ブリッジには艦尾に届くような長尺のアンテナが設置されているのが特徴だ。

データ

全長	▶約250m
運用慣性重量	▶1,310t

▲上部
艦上部から見たステルスフリゲート。ゼントラン仕様である本艦は、マクロス7船団のタイプと比較して、全体的に丸みを帯びたフォルムとなっている。

EXTRA REPORT

関連事項

マクロス7船団のステルスフリゲート

マクロス7船団において用いられたステルスフリゲートは、ノーザンプトン級に分類されている。こちらも船団の防衛ラインには欠かせない戦力として、大量に配備されている。

バロータ第4惑星に突入した「スターゲイザー」などが代表的な艦である。

マクロス5船団のステルスフリゲートと同様、母艦の護衛用に大量配備されている。

▲ステルスフリゲート（マクロス7船団仕様）
直線的なフォルムはゼントラン仕様とは異なるものの、その構造自体はほぼ同じだと言える。

ステルスフリゲートのブリッジ部。連絡路を通じて他の艦へと移動できる。

ブリッジの内部構造を示した図。ブリッジ内は3層に分かれており、最上部が艦長席となる。左図のように、前方に複数のディスプレイを表示でき、戦況が確認できる仕組みであった。

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶マクロス5船団

ネオノプティ·バガニス bis

中型艦隊の指揮用として建造されたネオノプティ·バガニスbisは、第一次星間大戦ではブリタイ·クリダニクの乗艦としても用いられたノプティ·バガニス級の改修タイプである。地球側の技術を様々な箇所にフィードバックし、新たに組み立て直された本艦は、エンジン部分の改造をはじめ、ブリッジの増設やアンテナ類の追加などが行われている。これにより、ノプティ·バガニス級が元来持つ優れた耐久性を維持しつつ、より運用性が良好な艦として生まれ変わっている。

マクロス5船団の戦力として、バトル5などのサポートに就いている。だが、惑星ラクスでは他の艦と同様、無残な姿で発見された。

▶側面
艦体上部に、ブリッジをふたつ設置しているのが特徴。前方のブリッジがメインで、後方のブリッジがサブとなっている。

▼後部
艦を後方から見た図。左右に見えるパーツはスラスターノズルで、艦の推進力を支えている。また、底部に複数のアンテナが設置されているのがわかる。

●データ
全長▶約4,000m
運用慣性重量▶1,890万t

◀地球側の技術が反映された結果、従来のノプティ·バガニスに比べ、艦全体が一回り大きくなっているのが特徴である。艦首底部にもアンテナ類が増設された。

EXTRA REPORT

関連事項

マクロス5市民が収容されたドーム

プロトデビルンの拠点、バロータ第4惑星内に建造されていたドーム。人間を生体のまま保存できるカプセルが山型に設置されており、バロータ軍に捕らわれたマクロス5船団の市民たちが収容されていた。

カプセルが設置されたドームの全景。上部にあるのはスピリチア吸収装置である。

▲ドーム底部

バロータ第4惑星に辿り着いたマクロス7船団の一行が装置を発見している。

◀マクロス5の市民たち
カプセルに入れられていたマクロス5の市民たち。バサラの歌声で正気を取り戻すも、ゲペルニッチによって再びスピリチアを吸い取られてしまった。

◀カプセルユニット
カプセル部分の拡大図。カプセルは成人1人が収容できる大きさとなっていた。

クァドラン・キルカ

主要パイロット
エミリア・ジーナス

機体解説

クァドラン・キルカは、ゼントラーディ婦人士官用機動戦闘倍力服であるクァドラン・ローの改造機で、出力と武装を強化したタイプとされる。機体構造を大きく見直して武装や高機動ノズルを増設し、原型機譲りの高機動戦闘能力と火力の増強を両立させている。また、原型機と比較して20%ほどの性能向上を実現しており、一説にはクァドラン・シリーズ最強の機体とも言われる。エミリア・ジーナスの乗機が知られ、彼女の機体にはスモークの噴射装置が装備されていた。

データ

所属▶――
全高▶調査中
全備質量▶調査中
エンジン▶調査中
推力▶調査中
最大速度▶調査中
標準武装▶イン・ブラスター／大口径モーター・キャノン／サブ・ガン／腕部3連ガトリング砲×2／高機動ミサイルランチャー×4

サイズ比較

VF-1J
クァドラン・キルカ
ヒト

開発系譜図

クァドラン・ロー ▶ クァドラン・キルカ

孤高の歌姫が駆った クァドラン・ローの改造機

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶クァドラン・キルカ

機体解説

クァドラン・キルカは、高級機種として知られるクァドラン・シリーズの中でも、特に確認されている数が少ない機体である(近代の運用の実績に関しては、サウンドフォースと接触したエミリア・ジーナス搭乗機程度しか残されていない)。第一次星間大戦の時点で、ヴィンテージ級の機体である本機は、そもそも大量生産されておらず、実戦には数機が投入されたのみであるとも言われている。

エミリア・ジーナスは、彼女が辺境惑星で歌の修行をしていた際に、ブルーとグレーのカラーリングの本機を移動用に使用していた。プロトデビルンの襲撃を受けた際には、熱気バサラのVF-19改 ファイヤーバルキリーと共闘し、歌の力でガビグラゴを撃退するものの、機体は大破している。

異常スピリチアを感知したプロトデビルンたちの攻撃を受けて応戦し、エミリアの歌エネルギーでプロトデビルンを怯ませた。

ガビグラゴによって引き起こされた洪水の流れを麓の村から逸らすために囮となり、突撃するガビグラゴを受け止めて大破した。

機体構造

腰部を省略した胴体に四肢と巨大なバックパックを加えた基本的な機体構成はロー型と同じだが、本機は各部ユニットを大型化することで機内容積を確保し、性能強化に必要な様々な装備を追加している。それに伴い各部の形状も変更されており、原型機とは大きく異なるフォルムとなっている。

熱気バサラのVF-19改に迫るエミリアのクァドラン・キルカ。当時の可変戦闘機の中で屈指の性能を誇るVF-19改にも引けを取らない機動を見せつけた。

大型機ゆえに推力が高く、一方で小回りも効く、空戦向けの機体である。熱気バサラとのランデブー時はVF-19改の周囲で縦横無尽に高速機動を行った。

▲頭部
センサーフェイスは可動構造を有する。頭部上の突起はアンテナで、肩の積層部は高圧噴射器。

◀バックパックは左右のミサイル倉が大きく張り出した形状となっている。また、背面中央には後方センサーが配されている。

▲機体上部の2連アンテナは前部がペリスコープセンサーに変更されている。

▼バックパックや肩部裏、腰関節側部など、機体各所に高機動ノズルが追加されている。

改造によって原型機のロー型に比べて大型化しているが、高機動ノズルを各部に増設することで優れた機動性を維持している。

武装

原型機と同様に、高い機動性で格闘戦を展開するという戦闘スタイルを継承していたと考えられる。本機の各所に搭載された固定武装は、基本的には原型機であるクァドラン・ローを踏襲しており、胸部に大型の火器、腕部にガトリング砲、背部、脚部にミサイルポッドという配置となっている。胸部の大型砲は、メイン・ブラスター、大口径モーター・キャノン、それにサブ・ガンという複数の火器による構成となっており、格闘戦で肉薄した敵機を確実に仕留められる火力を与えている。

バックパックに大量に搭載されたミサイルは、同時に本機の弱点でもあり、ガビグラゴとの交戦時には、敵機の放つ衝撃波によってミサイルポッドが誘爆している。

エミリア機は色とりどりの煙幕を噴出する機構を備えていたが、これが正規の装備だったかどうかは不明である。

A メイン・ブラスター
胸部左側には短砲身のメイン・ブラスターを装備する。本機の武装の中では最も大型の火器で、射界もさほど広くないことから、中距離帯の射撃戦に用いられたと考えられる。

B 大口径モーター・キャノン
胸部右側はロー型の中口径速射インパクト・キャノンから、大口径モーター・キャノンに換装されている。機外に突き出した2本の砲身のうち、長いものが本武装である。

C サブ・ガン
大口径モーター・キャノン上部にはサブ・ガンが配されている。3種類の火器で構成される胸部武装がロー型との大きな相違点と言える。

胸部にはデストロイドのガンクラスターの様に、複数の大型火器を搭載。エミリア機とガビグラゴとの対戦時には使用されていないため、威力は未知数である。

ゼントラーディ用の機動兵器の常として、高い頑健さを誇る。機体が半壊した後も、機動性を維持したまま戦闘を継続することができた。

D ガトリング砲
前腕部のガトリング砲は、ロー型の空対空高回転三砲身レーザーパルス・ガンとほぼ同じ形態の火器で、運用法も同様だったと見られる。

E ミサイル
バックパックと脚部にはミサイルランチャーを備える。脚部ランチャーは高機動ノズルの増設に伴い、膝関節部から足首に移されている。

▶ミサイル

▶展開時

ハッチ展開シークエンス
胴体部にパイロットが搭乗し、前面装甲がハッチを兼ねるコクピット周りの構造は、ロー型から変更されていない。ハッチの展開構造も原型機と同じで、頭部と肩部の装甲と胸部内側のコネクターパネルが開閉する。

エミリア機はガビグラゴが放った衝撃波によってハッチの一部を破壊されたが、エミリアは有視界で機体を操り唄い続けた。

A 両肩のハッチが上部に展開する
B その後、中央胴体のハッチが上部に浮き上がる
C 胸部のコネクターパネルが[illegible]に倒れる
D 肩部のハッチが後方へ
E 胴体のハッチはさらに上部へ

VT-1C

民間用に改修された VF-1の派生機

機体解説

VT-1Cは、VF-1シリーズから派生した民間用VFである。退役したVF-1シリーズを軍が民生用に改装し払い下げたもので、2030年前後には相当数のVF-1がVT-1Cに改装されて出回っていたという。機体の主な改装点は武装解除と動力系のデチューン、保安機器の充実である。惑星ゾラで用いられていた機体は、現地の状況に合わせ、標準ガンポッドを改造した「銀河クジラ捕獲用モリ」発射機(ハープーンガン)を装備している。

グラハムの家に保管されていた機体をバサラが持ち出し、銀河クジラと相対した。だが、クジラが放った衝撃波によって機体は全壊してしまった。

データ

所属▶民間
全長▶13.88m
全幅▶14.78m(主翼展張時)
重量▶13.75t(背部、脚部スーパーパーツ装備時)
エンジン▶新中州重工·P&W·ロイス FF-2001 熱核タービンエンジン
最大速度▶調査中
航続距離▶無限
武装▶ハープーンガン型ガンポッド
※データはファイター形態時のもの

サイズ比較

VF-1J
VT-1C

開発系譜図

VF-1 ▶ VT-1 ▶ VT-1C

主要パイロット

熱気バサラ
グラハム・ホイリー

Illustration by Hidetaka Tenjin

運用記録

惑星ゾラでも、民生用として複数機のVT-1Cが導入されていたようで、熱気バサラが辿り着いたゾラの港町の倉庫内にも、過去に捕鯨用として運用されていたとおぼしきVT-1Cが保管されていた。これらの機体に目を付けた銀河クジラの密漁団は、ゾラ市街地を内偵し、民間企業や個人所有の機体を強奪することで戦力の増強を図っていた。

ゾラの漁師グラハム・ホイリーが保有する機体は、彼が妻マリア・ホイリーと共に搭乗していた機体を形見として保管していたものであるが、カスタム化によりスーパーパーツ装備状態ならば単機での大気圏離脱も可能となっている（オリジナルのVF-1はスーパーパーツ装備状態でも大気圏離脱は不可能だった）。熱気バサラは銀河クジラに会うためにこの機体を持ち出しているが、特に不具合もなく運用できていたのを見ると、事前にグラハムがメンテナンスし燃料も入れていたものと推測される（銀河クジラに立ち向かう際、予備機として用いるつもりだったと思われる）。

銀河クジラとの接触で命を失った妻マリアの形見として、グラハムが機体を大切に保管していた。

港の倉庫に保管されていたVT-1Cを強奪する密漁団のメンバー。機体のセキュリティ・プログラムも容易に解除し、持ち去った。

ファイターモード／武装

民生化にあたり大型のキャノピーに換装されており、ファイター形態での良好な視界を確保している。宇宙空間での運用を想定し、機体上部、エンジン側面に燃料タンクを兼ねたスーパーパーツを装備しているほか、主翼端に各2基の推進機を備える。

▶ファイターモードでは、底部にハープーンガン型のガンポッドが設置される。この形態でも使用は可能となっていたようだ。

▲グラハム・ホイリーが保管していた機体

◀ゾラの港に保管されていた機体

▼ガンポッド

ガンポッドの砲口に、鋭利な先端を持つモリを設置する機構となっていた。

ガウォークモード

ゾラの捕鯨用VFは、ファイターモードで大気圏離脱／突入を行い、バトロイドモードで捕鯨を行うのが基本的な運用方法であり、中間形態であるガウォークはさほど活用されていない。ゾラの未開地などを移動する際に使用される程度であるという。

バサラが搭乗したVT-1Cグラハム機は、ファイター形態からバトロイド形態に変形し、銀河クジラに「歌」を聴かせている。

▲▶ガウォーク形態では、機首の両端にセンサーが露出した状態となっている。また、機体上部には、アンテナが伸びているのがわかる。

バトロイドモード

民生用に改修された本機だが、バトロイドへの変形機構はそのまま残されている。民生用の機体であるため、バトロイドの頭部にセットされていたレーザー機銃は外されており、背部・脚部に装備されているスーパーパーツも、ミサイルなどの武装類はセットされておらず、純粋に大気圏離脱用のブースターおよび増槽として使用されている。また本機は通常のVF-1に比べ、機首（バトロイドの股間部）が短くなっているが、これは機首に内蔵されていた戦闘機用のレーダー、センサー類を外し、民生向けの整備が容易な機器類と外装に換装されているためである。

主武装であるハープーンガンは、ガンポッドの炸薬を利用し、ワイヤー付きハープーンを射出する。ゾラでの捕鯨は、大型の母船あるいは複数の艦船、VFがこうしたハープーンを銀河クジラに打ち込み、ワイヤーで牽引してクジラの推進を停止させる方法が主流であるようだ（クジラを停止させる推力のない小型機の場合、ワイヤーでの牽引でクジラの推進ベクトルを変え、ゾラへ落下させるものと推察される）。

▶円形の大型センサー・カメラを備えた頭部が出現する。また、頭部を挟み込むようにして、センサーパーツがレイアウトされている。

▲背面に装着されたブースターは、燃料タンクと噴射部だけのシンプルな構造となっている。

銀河クジラの密漁を生業とする密漁団に、民間用の機体が奪取されている。

関連事項

EXTRA REPORT

密漁団に奪取されたVT-1C

ゾラの港町に保管されていたVT-1Cは、バサラが同惑星を訪れた際、銀河クジラの密漁団によって奪取されている。その後、同機体が密漁団に運用されたところは確認されていないが、彼らは奪取したVFを独自に改良して使用していたことから、VT-1Cも同様の扱いを受けたものと思われる。

密漁団が銀河クジラ捕獲のために運用していたVA-3C改。主翼のパイロンにハープーンガン型のガンポッドを備えている。

関連事項

EXTRA REPORT

2040年代のVF-1

最初期のVFであるVF-1シリーズは、メンテナンスに手がかかることなどから、2040年代に入る頃には完動品の数は激減していたと言われている。とはいえ、熱気バサラが放浪していた2040年代中頃でも、VF-1は民生用や作業用、あるいは辺境惑星の守備隊の配備機など、まだそこかしこで運用され続けていたようである。なお、グラハムと妻、マリア・ホイリーが搭乗していた機体は、元々は軍から払い下げられた機体であり、頭部のレーザー機銃が残されていたほか、スーパーパーツも軍用のものに近い形状となっていた（おそらくは銀河クジラを狩るのに必要な火力を求め、原型機に近い仕様の機体を入手していたのだろう）。のちにバサラが搭乗した際にはVT-1Cの外観となっていたが、これはなんらかの事情で大破したこの機体を、VT-1Cのパーツを用いてグラハムがレストアしたものと思われる。

マリア・ホイリーの搭乗していたVT-1C。ガンポッドこそハープーンガンに改修されているものの、本体・スーパーパーツ共にVF-1に近い仕様で、腕部スーパーパーツにはミサイルも確認できる。

上はバサラが訪れた辺境の惑星で運用されていたVF-1。一部の機体はスーパーパーツを装備している。右は作業用に改修されたVF-1で、マクロス7船団にて運用されていた。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-5000

惑星ゾラの空を守る 新星インダストリー初の可変戦闘機

機体解説

スターミラージュのペットネームで呼ばれるVF-5000は、VF-1バルキリーを基本にゼントラーディの技術を取り入れて設計された新星インダストリー製の可変戦闘機である。傑作機VF-1の設計に改良を加えることで低い生産コストに比して良好な性能を獲得した本機は、VF-4ライトニングⅢに代わる統合軍の主力機として2020年代後半から運用が行われた。だが、既存の設計概念からの脱却を果たしていなかったが故に、2030年のVF-11サンダーボルトの登場を契機に第一線から退くこととなる。しかし、コストパフォーマンスの高さから惑星ゾラなどの辺境では2047年頃でも運用が続けられている。

データ

- **所属**▶統合軍
- **全長**▶14.03m
- **全高**▶調査中
- **空虚重量**▶8,300kg
- **エンジン**▶新星／P&W／ロイス FF-2015 RB熱核タービン×2
- **最大速度**▶M2.85+
- **航続距離**▶無限(大気圏内)
- **上昇限度**▶衛星軌道上(ブースター使用時)
- **武装**▶対空パルスレーザー砲×1／ガンポッド×4／マイクロミサイルポッド×4 他

※データはファイター形態時のもの

サイズ比較

VF-1J
VF-5000

開発系譜図

VF-4 ▶ VF-5000 ▶ VF-11

主要パイロット

パトロール隊隊長
ライザ・ホイリー

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-5000 スターミラージュ

運用記録

VF-5000の開発は、新中州重工とストンウェル・ベルコム社の共同計画に沿って2011年に始められた。しかし、翌2012年には両社の航空機開発部門が合併して新星インダストリーとなったため、本機は同社が手がけた初めての可変戦闘機として完成することになった。その基本コンセプトは大気圏内での高機動性とステルス性にあり、可変攻撃機(VA)の支援と制空戦闘に主眼を置いて設計されていたと言われる。なお、ここで解説するのは2040年代後半に惑星ゾラの自治政府で雇用されたG型のパトロール隊仕様機である。武装は致死性の低いものに変更されているが、機体の基本性能に軍用との大きな差異はない。

ゾラの銀河パトロール隊に所属したVF-5000の部隊は治安維持に従事し、VFを持ち出して銀河クジラの密猟を行う集団の検挙にもあたった。

銀河パトロール隊は、辺境の惑星の軍備とはいえ運用には十分な設備を保有しており、本機の性能を十全に発揮させていたと言える。

標準装備

対空パルスレーザー砲

頭頂部に対空・自衛用のパルスレーザー砲を1門備える。複座機のT-G型(右図)は頭部ユニットの構造が大きく異なり、レーザー砲も2門となっている。

▲G型

▲T-G型

ショックガンポッド

惑星ゾラのパトロール隊の機体はショックガンポッドと呼ばれる特殊武装を装備。これは粘着弾で目標の自由を奪う武器で、弾着の衝撃によるダメージ効果もある程度は期待できる。形状はVF-1のガンポッドに酷似しており、銃身先端上部に照準センサーを備え、尾部のフィンはファイター形態時の整流板となる。

コクピット

コクピット構造はVF-1から大きく変わっていないが、窓枠のないキャノピーと着座位置の高いシートによってパイロットの視界を広げる設計がなされている。また、キャノピー投影型HUD(ヘッド・アップ・ディスプレイ)や後方に30度傾けられたシートなど、操作性への配慮が見られる。

◀エジェクション・シート(前)

▲スロットル・レバー

▲エジェクション・シート(後)&サイドスティック

▲操縦桿

ファイターモード

VF-5000のファイター形態は、ブレンデッド・ウィング・ボディ構造によって大気圏内の空力特性を向上させると同時に、直線的な平面構成を多用してステルス性を高めている点が特徴である(レーダー反射を抑制するステルス塗装も併用されていたと言われる)。また、可変翼機構が採用されており、VF-1の設計が生かされていることがうかがえる。

大腿部のバルーン弾は特殊樹脂のレスキュー・キャッチャーで、対象を包んで保護する機能を持つ。なお、拘束用としても使用可能である。

▶VF-1の発展形にあたるが、独自のカラーリングによって異なる印象を持った外観になっている。なお、左主翼とコクピット後方のエンブレムは、惑星ゾラの銀河パトロール隊のものである。

▼機首には流体制御式回頭ノズルとセンサーシステムが装備されている。また、機体下面のインテークは、宇宙空間では内部に推進剤を収納し、カバーが閉じる構造となっている。

◀エンジン出力は各12,500kgで、バーニアスラスターはP&W HMM-3Aが採用されている。なお、高度3万m以上ではM4.73オーバーの最高速を誇る。

ガウォークモード

偶然の産物として生まれ、VF-1の変形パターンに取り入れられたガウォーク形態は、当然ながらVF-5000の変形機構にも継承されている。ただし、前述したように本機は飛行性能に重きを置いた機体だったこともあり、ガウォーク形態の重要性が高かったとは言えないだろう。ゾラのパトロール隊の場合は、密漁団の取り締まりが、主に銀河クジラが回遊する衛星軌道付近で行われるため、ガウォーク形態での運用機会はそれほどなかったようである。

ゾラ星は本来のどかな移民惑星で、パトロール隊の地上任務もVFを用いるほど大規模なものは少なかった。そのため、ガウォーク形態も着陸時などに限られた。

高機動戦闘はファイター、接近戦はバトロイドという運用の区別が明確になされていたため、ガウォークは変形時の中間形態というケースが多かった。

◀左図はT-G型のガウォーク形態だが、構造は他の型式機もまったく同じである。なお、時空共振スピーカーユニットが装着されている場合には、回転させて空気抵抗を減らす。

▼ガウォーク形態のリアビューでは、バトロイド形態時背部のノズルブロックが確認できる。ここからも、VF-1から改良された変形機構の一部を知ることができる。

▼ガウォーク形態の機能はVF-1に準じているが、変形機構はより複雑になっている。腕部の構造などにそうした相違点が見られる。

バトロイドモード

VF-5000がVF-1の設計を踏襲していることは、外観にベース機の印象を残すバトロイド形態からもうかがい知ることができる。ただし、垂直尾翼を挟んだ前腕部の2層構造や内蔵式のマイクロミサイルポッドといった独自の構造が盛り込まれており、運用性の向上にも繋がっている。また、軍とは違って犯罪者の拘束を主な任務としていた惑星ゾラの銀河パトロール隊にとっては、目標の無力化や捕縛に適したバトロイドはきわめて有用な形態だったと言えるだろう。

ゾラに横行した銀河クジラの密漁団はVFを用いるケースがほとんどだったため、パトロール隊もバトロイドを使ってこれを阻止する必要があった。

パトロール隊は犯罪者を生きたまま確保する戦法を厳守し、そのためにショックガンポッドを用いたバトロイドによる接近戦を行うことが多かった。

パトロール隊が運用したG型にもマイクロミサイルポッドは装備されているが用いられたミサイルはショック弾タイプで、誘導性能は高いが威力は低い。

▼前腕部と脚部外側に計4基のマイクロミサイルポッドを内蔵している。また、ステルス性を高めるため、関節や接合部は直線的なデザインで設計されている。

▲G型の指揮官仕様機はフェイスパーツのゴーグル部が小さいのが特徴。前腕部の下に見えるのはファイター形態時の垂直尾翼で、変形時に折り畳んだ尾翼を前腕の分割パーツで挟む構造となっている。

▶VF-5000 スターミラージュ

大気圏内外両用ブースターパック

惑星ゾラのパトロール隊が運用していたVF-5000スターミラージュには、オプションパーツとして大気圏内外両用ブースターパックが用意されていた。このブースターパックは、マイクロミサイルランチャーを先端に備えた単発式のブースターと脚部プロペラントタンク兼マイクロミサイルポッドで構成されており、非装着時に比べ、宇宙、地上双方での機動性・機体制御能力が大幅に向上する。銀河クジラ対策を主とするパトロール隊にとっては欠かせないパーツで、隊長機、一般機に関わらず本ブースターパックを装着し、出撃していた。

宇宙空間を飛行するブースター付のスターミラージュ。パトロール隊は本ブースターパックを出撃時の標準装備としていたようだ。

大気圏から離脱を図るライザ搭乗のスターミラージュ。ブースターパックを搭載することで、大気圏離脱も容易に行えたようである。

ブースターパックを装備したまま、大気圏内に突入するスターミラージュ部隊。ブースターパックは突入時の衝撃に耐えうる構造となっていた。

ブースターパック本体

着彩部分がブースターパック本体。先端にショック弾タイプのミサイルを装備する。後方には大型のスラスターノズルと、その周囲にラムジェットインテークを設置する。

プロペラントタンク兼マイクロミサイルポッド

プロペラントタンク兼マイクロミサイルポッドとして機能する脚部パーツ。両脚の外側に1基ずつ設置されている。

ファイターモード

ブースターパック装着時のスターミラージュ。機体中央にブースター本体が設置されているのがわかる。

▶ラムジェットエンジンの採用によって、ブースター本体はシンプルな形状となった。

▼機体上部に備えた2基の支持プレートによりブースターパックが設置されている。

▲▶大気圏内での運用を想定していた機体のため、宇宙での運用時はブースターパックの装備が必須であった。脚部にもプロペラントタンク兼マイクロミサイルポッドを装備する。

バトロイドモード

◀▲ブースターパック装着時のバトロイド形態では、ブースターの先端が突き出た形状となる。また、バトロイド形態では、支持プレートが引き込まれるため、ブースターパックは機体に密着する。

M メカニックシート
VF-5000 スターミラージュ

VF-5000G 一般機

機体解説

スターミラージュには、単座型のG型と複座型のT-G型の2種があるが、G型の中にも隊長機、一般機の2タイプが存在する。ライザ・ホイリーら、パトロール隊の一般隊員が運用した一般機は、隊長機とフェイスゴーグルの形状が異なっている。性能面における違いはほとんどなかったと見られ、大気圏内外両用ブースターパックや時空共振スピーカーシステムを設置することが可能となっていた。

大気圏内外両用ブースターパックを装着したG型の一般機は、銀河クジラを保護するために密漁団の牽制を行っている。

一般機の頭部に設置されたフェイスゴーグルの拡大写真。センサーやレーザー・パルスガンの位置などは隊長機と共通している。

バトロイドモード

◀▼フェイスゴーグルが大型となっているのが一般機の特徴。3基のレンズを内蔵する。

◀ブースターパックを装着した一般機。VF-1の流れを汲む基本設計により、安定性に優れた機体となっている。頭部のカラーリングが一部異なる機体も確認されている。

VF-5000T-G

VF-5000T-Gは、VF-5000の複座タイプで、パトロール隊が運用していた。複座型への改修でコクピット部が広くなっているほか、単座型では1基であった頭部のレーザー・パルスガンが2基となっており、戦闘能力が強化されている。銀河クジラ対策や対密漁団戦でも少数ながらその姿が確認されている。

銀河クジラの保護と密漁団対策のため、T-G型も大気圏内外両用ブースターパックを装着して出撃している。使用しているガンポッドはG型と共通である。

ファイターモード

▶コクピットがG型よりも大きく、2名のパイロットが余裕を持って座ることができる。後部座席では操縦補助などを行うと見られる。(図は大気圏内外両用ブースターパック装備時)

バトロイドモード

T-G型の頭部には、2基のレーザー・パルスガンが設置。また、フェイスゴーグルの形状もG型と異なる。

レーザー・パルスガンの基部が見える頭部後方。形状は異なるが、変形機構はG型と同様である。

▲▶ガウォーク形態となったT-G型。変形機構や性能面において他のタイプとの違いはほぼない。図のように、肩部の上に時空共振スピーカーを装備することができる(スピーカーユニットはG型にも装備可能)。

ガウォークモード

▶VF-5000 スターミラージュ

変形シークエンス（ファイター形態→ガウォーク形態）

VF-1の強化発展型として開発され、惑星ゾラの銀河パトロール隊にも配備されたVF-5000 スターミラージュは、変形シークエンスにおいてもVF-1の流れを汲むものとなっている。だが、パーツレイアウトなど機体細部はVF-1と大きく異なっているため、新たな要素が加えられている。中でも、ファイター形態からガウォーク形態に変形する際に、腕部パーツによって尾翼を挟み込む機構などは本機ならではのものと言える。

▶VF-1と外観は似ているが、細部構造においては全面的にリニューアルが図られた。

1 脚部の変形

A 両脚曲げて下ろす
B 2次元ノズル開いて足を形成

2 腕部の変形

A 腕の関節、少し伸びてロックはずれる
B 肩、少しせり上がる
C 腕の下面パーツが、肩の旋回時に主翼の収容部に引っかからない位置まで持ち上がる
D 肩を回転させて基本ポジションへ

3 腕部変形の詳細

A 垂直尾翼を折り曲げる
B 腕の下部パーツをヒンジで斜めに上げ、上部パーツとの間に隙間を作る
C この隙間からはみ出すように垂直尾翼を畳む
D 尾翼の上に重なるように、腕の下部パーツを畳み、上下を合わせる
E 手首がせり出す

肩関節の防弾パネルが中からせり出す

可動ヒンジ

4 ガウォーク形態へ

A 推進ノズルせり出す
B 脚下部のブースターリングが少し動き、足が地面と水平に

畳んだ垂直尾翼

畳んだ垂直尾翼

ガンポッドを腕に持ったガウォーク形態（図は訓練用の複座型VF-5000T-G）。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-5000 スターミラージュ

変形シークエンス（ガウォーク形態→バトロイド形態）

VF-5000Gのバトロイド形態は、背部ブロックが両翼部と推進ノズルの3つのパーツに分割された、特殊な構造となっている。これらのパーツ群はバックパックに備えた2基の回転ヒンジによって接続、可動する方式であり、ガウォーク形態からの変形時に使用された。また股関節部にも、脚部の屈伸やひねりといった細かな挙動を実現するヒンジが2基設置されており、バトロイド形態時の運動性を確保していた。

1 各部の変形

▼全身

インテークカバー閉じる

▼後方①

自在ヒンジ

自在ヒンジ

機体下面から外れて腰パーツと一体で回転

▶後方②

A バックパック部を後ろに引き出す
B 頭部を土台ごと上に
C 胸パネルがせり上がり、前方へスライドしつつ折れ曲がる
D 腰全体が回転して脚部下へ
E 主翼が収納部ごと下に曲がる
F バックパック部、下に曲がる
G コクピットカバーせり出す

▼側面

頭部土台

バックパック■回転ヒンジ

主翼収納部回転ヒンジ

▼側面（ファイター時）

時空共振スピーカーユニット

惑星ゾラのパトロール隊と密漁団との最終決戦時には、パトロール隊のVF-5000全機に時空共振スピーカーユニットが装備された。

▼ファイターモード（VF-5000G）

▼ガウォークモード（VF-5000T-G）

▲ガウォークへの変形時には、ユニットが90度回転する。

時空共振スピーカーユニット
銀河クジラとのコミュニケーションを模索するゾラの科学者ローレンスの要請により、クジラの反応をうかがうために取り付けられた。

◀▼バトロイドモード（VF-5000G）

2 バトロイド形態へ

A 頭部180度回転して前を向く
B 主翼畳む
C 脚部少し左右に開く

パトロール隊母艦

治安維持任務を支援する パトロール隊の多目的艦

艦体解説

統合軍に協力する形で惑星ゾラの治安維持に従事した銀河パトロール隊は、VF-5000 スターミラージュを主力機として運用すると同時に、それをサポートする艦[illegible]を併用して密漁団の取締りなどの任務にあたった。このパトロール[illegible]母艦は水上航行が可能で海洋面積が広い惑星ゾラでの運用に適していただけでなく、大気圏内外の航行能力も有していた。ただし、戦闘艦としては小型で非力であったため、VFの運用を支援する補助艦艇という役割が本艦の意義だったと言える。

データ

所属	調査中	乗員数	調査中
全長	調査中	エンジン	調査中
全高	調査中	標準武装	調査中
空虚重量	調査中		

サイズ比較

Mechanic Sheet
メカニックシート
パトロール隊母艦

運用記録

銀河辺境の第67惑星宙域に位置する惑星ゾラでは、銀河クジラと呼ばれるエネルギー体が衛星軌道に1年周期で回遊してくる。その時期には銀河クジラの捕獲を図る密漁団が横行し、ゾラ自治政府の銀河パトロール隊はその取り締まりに追われることになる。パトロール隊母艦が運用されるケースは、主に衛星軌道上での密漁船団の逮捕時で、VF各機に随伴して後方から支援を行った。戦闘に加わることは少なかったが、逮捕した容疑者の収容や負傷者が出た場合の応急処置と搬送など、VFだけでは対応しきれない作業に携わっている。2047年に熱気バサラがゾラを訪れた際にも、衛星軌道上での密漁団取り締まりに出動し、逮捕した密漁者を護送した。また、宇宙に放り出され、隊員のライザ・ホイリーに救助されたバサラを収容し、隊本部まで搬送している。

パトロール隊に出動がかかり、それが大規模な検挙活動に及ぶ場合、VFに随伴して現場に赴く。VFと同様に単独での大気圏離脱と再突入能力を有する、汎用性の高い艦艇だった。

パトロール隊のVFが密漁団を無力化し、母艦は確保した容疑者を収容して本部まで連行する。隊の主力はあくまでVFであり、母艦は裏方に近い存在であったと言えよう。

機体構造

本艦は地球製と言われているが、構造は統合軍艦艇などと大きく異なり、平面と曲面を組み合わせた独特のフォルムを有している。これは、水上艦としての設計が取り入れられているためと見られる。

▲艦首上部にブリッジ、艦尾に上部4基下部2基の推進機関を備える。また、両舷の翼状ユニットは着水時には折り畳まれる。

◀翼状ユニットのラインが水上航行時の喫水線となる。なお、平時はパトロール隊本部に隣接する港湾部に接岸されていた。

艦内治療室

任務中に負傷者が出た場合に備え、艦内には治療室が設けられ、医師も乗艦していた。本格的な医療行為は難しいものの、患者の状態を診断する機器が備えられ、治療カプセルによる延命処置が可能となっている。ちなみに、バサラも一時はこの治療室に収容された。

▲艦内治療室

▲▶治療カプセルは治療室中央に置かれる。これは透明なカプセルに満たした薬液に患者を浮かべるもので、安静が必要な場合に用いられた。

パトロール艇

広大な海を有するゾラでは公民問わず船舶が盛んに用いられ(ボート兼用のオート3輪なども普及していた)、パトロール隊も通常の警らには高機動小型艇を運用した。しかし、凶悪化する密漁団に対しては力不足となるケースもあったようだ。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VA-3C改 INVADER

機体解説

可変戦闘機(VF)とデストロイド双方の特性を持つ、統合軍の可変攻撃機(VA) ――その代表的な機体であるVA-3 インベーダーは、運用性の高さから複数の派生機を生んだ。中でも、このVA-3C改は惑星ゾラの銀河クジラの密漁団によって運用された異色の機体として知られる。その体内から宇宙船を動かすためのエネルギーが採取できる銀河クジラの捕獲という特殊な用途のため、本機にはモリの射出機構を追加したガンポッドが装備されるなど、目的に合わせた改修が施されている。また、[illegible]型機の特徴である耐弾性とサバイバビリティの高さも受け継いでおり、VFとの戦闘も可能であった。

データ

※データはアタッカー時のもの

全長▶16.20m
空虚重量▶13,280kg
エンジン▶新星/P&W/ロイスFF-2020AG×2
巡航速度▶M2.2+
武装▶パルスレーザー砲×2/多目的ガンポッド/ハイマニューバミサイル×6/マイクロミサイル×12 他

開発系譜図

VA-3C ▶ VA-3C改

サイズ比較

VF-1J
VA-3C改

銀河クジラの密漁団が運用したVA-3シリーズの改造機

▶VA-3C改 インベーダー改

運用記録

VAは地上制圧用の機体として量産され、VA-3シリーズも移民船団などに広く普及していた。中でもこのVA-3C改は、惑星ゾラの密漁団がブラックマーケットに流れた機体を入手、改造を施した機体と言われる。密漁団は惑星ゾラの軌道付近を回遊する銀河クジラを獲物とし、大型母船を中心に本機を運用して密漁を行っていた。その規模と練度は軍隊に匹敵したとも言われ、密漁を阻止しようとした惑星ゾラのパトロール隊を翻弄した。

密漁団が保有したVA-3C改は数の上でもパトロール隊を凌駕しており、取り締まりに当たった部隊は苦戦を強いられた。

標準武装

密漁団は銀河クジラの捕獲だけでなく、治安部隊などとの戦闘も想定していた。そのため、本機は捕鯨用装備と通常武装の両方を備えている。前者は銀河クジラを捕獲するためのワイヤー付きのモリで、ガンポッドが射出装置を兼ねている。また、後者には両腕部に内蔵されたパルスレーザー砲とマイクロミサイルランチャーが挙げられる。なお、原型機VA-3は武装搭載量の多さが特徴のひとつだったが、VA-3C改が外装式のミサイルなどを用いたケースは確認されていない。

戦闘ではガンポッドを使用する場面も多く見られた。機体数も多かったため、攻撃力でパトロール隊を圧倒することも多かった。

水中銃に似た形状のガンポッドは、銃身の大半がモリの射出装置になっており、ガトリングガンの銃口はグリップ前部に位置している。

マニピュレーター中央がパルスレーザー砲の砲口で、主翼パーツに隠れた前腕部の外側にマイクロミサイル発射口を備えている。

コクピット

VA-3シリーズには、電子戦機のEVA-3Aのように複座型の機体も存在するが、VA-3C改は一般的なバリエーションと同じく単座型となっている。コクピットは機首部に位置し、前方の視認性に優れる。なお、軍用のVA-3シリーズは地上攻撃用のFCS（Fire Control System／射撃管制装置）を搭載しているが、本機も同様のものを装備していたかどうかは不明である。

バトロイド時のコクピットハッチは後頭部の真下に位置している。

アタッカー形態ではコクピットが機首前縁に位置するため、後方の視認性は良くなかった。

バトロイド時のコクピットブロックは、頭部直下の胴体内に収納された状態になり、頭部に当たる部分は複合センサーとなる。

関連事項 EXTRA REPORT

全領域で運用された、VA-3M

VA-3シリーズには、水上航行や水中潜行が可能なVA-3Mも存在する。全領域攻撃機であるこの機体は、一部の特務部隊に配備されたほか、2050年代末に航海中であったマクロス・ギャラクシー船団などでも運用されたと言われている。

アタッカー形態(左)では、飛行艇の特性を有しており、主翼下ポッドは方向舵付きのフロートを兼ねる。ガウォーク形態(中央)では、機体後部を脚として展開して腕部を変形させている。バトロイド形態(右)は腕部の構造が他のバリエーションと異なっている。

アタッカーモード

VFのファイター形態に相当するVA-3シリーズのアタッカー形態は、統合戦争以前の艦上攻撃機(A-6 イントルーダー)に近い機体形状を有している。本機も基本的なフォルムに変更はなく、他のバリエーションと比べると主翼下ポッドの形状や接続方式が異なる程度である。また、VA-3シリーズは大気圏内、特に低高度での安定性と機動性を重視した設計がなされている。ただし、密漁団は宇宙空間で活動することがほとんどだったため、本形態の性能が発揮されることは少なかった。

アタッカー形態で小型船に随伴し、銀河クジラの群れに接近を図った。このように移動に用いられるケースが多かったと見られる。

密漁団のVA-3C改は宇宙空間での運用が主だったことから、機体上部にロケットブースターを装備していた(写真はバトロイド形態)。

◀丸みを帯びたフォルムがアタッカー形態の特徴である。エンジンは双発で主翼根元に位置している。なお、図はオプション未装着の状態。

▼主翼中央にバトロイドの腕部ユニットを配した独特の構造を有する。主翼下ポッド側面のハッチがマイクロミサイルの発射口になっている。

▲機体左右のエアインテーク下部にプロペラントタンクを装備する場合もある。これは宇宙空間での運用時に限り、大気圏に突入する際に投棄される。

▼安定性を重視しているため、主翼の後退角は小さい。また、機体後部に配された水平尾翼や垂直尾翼が特徴的である。

フォールド・ブースター装備

密漁団はフォールド航行で惑星ゾラの衛星軌道に侵入し、密漁を行っていた。VA-3C改もフォールド・ブースターを装備し、母船に随伴することが多かった。

VA-3C改がフォールドブースターを装備していたことから、密漁団が豊富な資金を持っていたことがうかがえる。

▼フォールド・ブースターはパイロン1基のみで機体上部に装着される。

バトロイドモード

VA-3シリーズは航空機としての性能はもちろんのこと、地上戦を想定していたことからバトロイド形態の防御力も重視されている。VFシリーズとは異なる変形構造が採用されており、バトロイド形態はゼントラーディの戦闘ポッドに近いフォルムを持つ。VA-3C改のバトロイドも同様で、ヘッドユニットの複合センサーの形状などを除いて構造は他のVA-3シリーズと共通している。密漁団は主に本形態で運用しており、パトロール隊VFとの交戦でも安定した性能を示している。

バトロイドではガンポッドだけでなく腕部のパルスレーザー砲の射界も広く取れるため、柔軟な戦闘が可能だった。

出力や機体の強度も高く、パトロール隊が用いたショックガンポッドの粘着弾が直撃しても、完全に動きが停止することはなかった。

▶脚部は水平尾翼がスネから突き出した独特の構造で、垂直尾翼が立体的に折り畳まれて足となる。

◀特徴的な外観のバトロイド形態。シールドとなる主翼外側には密漁団のマークが描かれている。

▼主翼内側の前後フラップが折り畳まれて肩部となる。脚部後面は接合部がそのまま露出している。

◀エンジンブロックが胸部を構成し、主翼付け根のサブインテークからノズルにかけての両ブロックが背部に移動してバックパックとなる。

連携行動による戦法

密漁団はVA-3C改を大量に投入してパトロール隊を圧倒し、銀河クジラを捕獲する際には複数機から連続して銛を発射、動きを止める戦法を用いた。各機の連携行動については高いレベルにあったと言える。

一斉に銛を放つ密漁団のVA-3C改。カリバの統率力に支えられた連携はパトロール隊をも凌駕していた。

Mechanic Sheet メカニックシート

▶VF-22S シュトゥルムフォーゲルII

D7 Sheet 02 A

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-22S

主要パイロット

ガムリン・木崎

サイズ比較

VF-1J

VF-22S

特殊作戦用として蘇った ゼントラーディ系技術採用機

機体解説

AVF(Advanced Variable Fighter)開発を巡る「スーパー・ノヴァ計画」での競合試作において、YF-19に敗れたYF-21であったが、アクティブステルス能力、ペイロード能力が評価され、特殊作戦機VF-22Sとして少数が制式採用された。YF-21からの主な改修点として、その最大の特徴である脳波操縦システムBDI(Brain Direct Image)の大幅な簡略化と、それに伴う手動操縦システム対応コクピットへの換装が挙げられる。これらの変更により、莫大なコストの削減と、機器の簡略による軽量化に成功した。なお、ペットネームの「シュトゥルムフォーゲル」は、ドイツ語でウミツバメなどの海鳥を意味する。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶統合軍
全長▶19.62m
全高▶4.04m
全幅▶15.36m
空虚重量▶9,340kg
エンジン▶新中州重工/P&W/RR FF-2450B熱核バーストタービン×2
最大速度▶M5.07(高度10,000m)/M22(高度30,000m以上)
推力▶41,200kg(大気圏内)/65,200kg(大気圏外)
標準装備▶エリコーン AAB-7 対空ビーム砲×1/モーゼル REB-22 レーザービームガン×2/ヒューズ/GE GV-17L ガンポッド×2/ビフォーズ BML-02S マイクロミサイルランチャー×4/ヒューズ PBS-03F ピンポイント・バリア・システム×1/スタビライザー兼シールド×2

開発系譜図

YF-21 ▶ VF-22S

VF-22S シュトゥルムフォーゲルII

運用記録

マクロス7船団とプロトデビルンとの戦役が終結した翌年の2047年、行方不明となっていた熱気バサラ捜索のため、マクロス7船団のガムリン・木崎大尉がVF-22Sで惑星ゾラに向かっている。同機のカラーリングは、バロータ戦役時の乗機VF-17Sに近い、濃いグレーの地に黄色のラインであった。ガムリン大尉はゾラを訪れた直後、惑星軌道上におけるゾラ駐留部隊と宇宙クジラ密漁団との戦闘に参加。無数の密漁団のVA-3部隊を、ガンポッドと腕部レーザービームガンで瞬時に無力化していく。大尉の乱入は、低致死性兵器しか装備していないゾラ星パトロール隊のVF-5000部隊にとって、またとない応援であった。この事件においてVF-22はガムリン大尉機しか確認されていないが、同時期にダイヤモンドフォースの僚機もVF-22に機種転換していたと推察される。

マクロス7船団での運用が知られ、ガムリン・木崎を隊長とするダイヤモンドフォースが制式採用したと推測される。マックス艦長やミリア市長による運用も確認されている。

標準武装

マクロス7船団では、バロータ戦役の際、船団内の工場艦でライセンス生産されたVF-22Sがごく少数導入されていた。ダイヤモンドフォースのVF-22も、引き続き工場艦で生産されたものが配備されていたようで、機体の仕様および基本的な武装は先行導入型から変更されていない(ダイヤモンドフォースの僚機に関しては、S型ではない仕様の機体が配備された可能性はある)。武装は、YF-21から受け継がれたGV-17Lカートレス・ガトリング・ガンポッドと、機体上面(バトロイド形態時は両前腕に配置)のレーザービームガン2門、それに頭部の対空ビーム砲1門、加えて機体内のウェポンベイにマイクロミサイルを装備するのが標準的な仕様となる。

エリコーン AAB-7 対空ビーム砲

他機種の頭部レーザー機銃と同系列の装備。ブレード型であるため固定式のアンテナに見えるが、基部には可動域があり射角も広い。主にファイター/ガウォーク形態での対空牽制に用いられる。

ヒューズ/GE GV-17L ガンポッド

YF-21と同系のカートレス式ガンポッドで、2門が標準装備されている。手持ちで使用しない時は、大腿部パネル(ファイター形態では下部パネル)に固定された状態で運用された。

ガムリン大尉機は、かつての乗機VF-17に近い、濃いグレーで塗装された。マックス機やミリア機同様、マクロス7の工場艦で生産されたようだ。

ミサイルやビームでの攻撃を想定した純粋な戦闘機であるが、ミリア機がサウンドブースターを追加装備して運用したように、武装以外の拡張性能も有していたと見られる。

ファイターモード

高機動形態で、ガムリン大尉は通常の宙間移動や惑星ゾラからの離脱などに使用した。フォールド・ブースターもこの形態で使用する。原型機であるYF-21に匹敵する高い機動性を秘めているが、脳波操縦システム(BDI)は簡略化されており、あくまでパイロットの補助用として機能する程度となった。このことから、YF-21ほどの能力を引き出すのは極めて難しいとされる。

メインスラスターは、YF-21と同様に三次元推力偏向ノズルが採用されており、高い機動力を誇る。

▲手脚を効率よく収納するレイアウトにより、極めて薄い胴体となった。手脚ユニット同様、大型の主翼は形状の変化が可能で、優れた飛行性能を生み出した。

▲他の可変機と比べてフラットな下部。下部パネル内に、形状をある程度変化できる手脚ユニットがコンパクトな形で収まっている。

コクピット

先行導入されていたマックス機と同様、コクピットはマニュアル操縦を主とし、補助として脳波操縦システムを備えた仕様となっている。脳波操縦用に、シートには脳波操縦用無接点コネクタを備える。バトロイドモードでは、キャノピーがカバーで覆われる一方、操縦席が後方に90度回転し、操縦席周りのレイアウトも変更される。

バトロイド時のコクピット内部。キャノピー部分には周囲の景色が投影される。

ガウォークモード/バトロイドモード

低空飛行/ホバー走行用のガウォーク、格闘戦闘形態のバトロイド共に、YF-21と同じ変形システムを受け継いだ。クァドラン・ローなどのゼントラーディ系バトルスーツと似たスタイルや、脚部に主機関を搭載しない点もYF-21と同様となっている。相違点と言えば、操縦システムの変更に伴うメインカメラやキャノピーの形状程度であり、それ以外のシステムや機体特性はほぼそのまま継承された。なおガムリン大尉はバロータ戦役当時は、ファイターモードで戦闘の中心まで突貫し、その後バトロイドにて周囲の敵機を撃墜するという戦法を得意としていたが、ゾラでの対密漁団戦でも同様の戦法を採り、周囲を制圧。本機のバトロイドの格闘戦性能の高さを証明した。

独自調査を行っていたため、ガムリン大尉はゾラの海岸にVF-22Sを駐機した。その際、即応性の高いガウォーク形態をとっていた。

▶下部パネルを展開、腕部と脚部を露出させたガウォーク形態。四肢ユニットは、OTM採用の形状変更素材によって膨張し、大径となる。

▶ガウォーク形態の底部。メインノズルの偏向プレートを閉じ、胴体下面のホバーノズルに推力を集中させている。

◀VF-1のように胴体が二つ折りにされ、機首が下を向いた構造が見て取れる。

▲足部裏面の補助ノズルが目立つ、下からのアングル。脚部付け根のユニットは、機首や背部を繋ぐ背骨のような役割がある。

対密漁団戦ではバトロイド形態で奮戦。ガンポッドや前腕部レーザービームガン、マイクロミサイルを駆使して密漁団を足止めした。

▶頭部の二段ゴーグル式カメラが、YF-21との相違点。背部ユニットの形状は、ゼントラーディのバトルスーツに近い。

キャッチャーボート

グラハムが運用した 宇宙“捕鯨”船

グラハム・ホイリーが、銀河クジラを捕獲するために所有していた宇宙船で、単独での大気圏突入・離脱が可能である。

主要パイロット

グラハム・ホイリー

艦体解説

銀河クジラの捕獲を目指すグラハム・ホイリーが、宇宙への航行手段として用いたのがキャッチャーボートである。巨人化したグラハムに合わせた大きさの漁船と、ブースターを設置した大型の宇宙船がドッキングしたような構造で、大気圏の離脱・突入が行えた。銀河クジラの捕獲用として、漁船船首に捕鯨砲「ハープーン」を備えているほか、宇宙船部分にはフォールド・システムを搭載しており、フォールドも可能な多機能船となっている。

パイロットは宇宙服を着用して出撃する必要がある。非航行時は、グラハム邸に隣接する波止場に停泊している。

熱気バサラが惑星ゾラを訪れた際も、グラハムは二度にわたりキャッチャーボートで出撃。銀河クジラの捕獲を目指した。

CATCHER BOAT

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶キャッチャーボート

運用記録

銀河クジラの捕獲を狙うグラハムの所有船として、キャッチャーボートは何度も宇宙と惑星ゾラを往復していた。グラハムは本船の大気圏離脱機能、フォールド機能を駆使して銀河クジラの出現場所に移動。その後、船後方のブースターを切り離した高機動形態へと移行し、捕鯨活動の前線基地として用いていた。だがその途中で、銀河パトロール隊や密漁団の妨害を受けることもあった。

グラハムは宇宙服を着用して捕鯨活動を行った。通常は単身銀河クジラにモリを打ち込んだが、船首のハープーンを使うこともあった。

大気圏離脱形態

▶大気圏離脱時には、漁船部分に備えたキャビンのハッチを閉じ、捕鯨砲を格納する。これにより本船は加速に特化する。この際、パイロットはキャビン内部に入った状態となる。

高機動形態

▶宇宙船後方のブースター部分が切り離されることで、高機動形態となる。この形態では船の機動性・運動性が大幅に向上する。

機体構造

グラハムが所有するキャッチャーボートは、宇宙船の上方に小型の漁船がドッキングしたような特殊な構造となっている。漁船部分が船のコントロールを、宇宙船部分が船の出力やフォールド・システムの起動を担うなど、銀河クジラ捕獲に特化した性能、形状である。

宇宙船部分の大型ブースターを用いることで、水上から宇宙へと超高速で飛び立つことが可能であった。

▶パイロットは、漁船後方に設置された舵をコントロールする。

▼側面から見たキャッチャーボート。海での停泊時には、漁船部分のみが海上に浮かんでいる。

▶大型のブースターを、宇宙船部分後方に2基備えている。船尾中央には発進用のスクリューを備える。

▶高機動形態となったキャッチャーボートの後方。魚群探知器など、重要な機関が集中的に設置されている。

大気圏からの離脱が完了した後、ブースター部分を切り離して高機動形態となったキャッチャーボート。

キャビン

グラハムが船をコントロールするキャビンは可動式で、ハッチが中央から前後に展開する構造となっている。

各種装備

キャッチャーボートには、銀河クジラ捕獲を目的として、多彩な装備が設置されている。武装としては、漁船船首には捕鯨砲「ハープーン」を備え、船からもクジラにダメージを与えることができた。その他、航行用にフォールド装置を備えるほか、クジラの探索用に魚群探知器や無線用アンテナも設置されるなど、シンプルな外観に似合わず多機能となっている。

A ハープーン

銀河クジラ用の巨大なモリを発射できる捕鯨砲「ハープーン」。砲軸が回転式のため射程範囲も広く、船に乗ったまま銀河クジラに接近した際などに使用された。グラハムが携帯しているモリを流用することができる。

▼ハープーン引き込みシークエンス

1. 捕鯨砲ハッチ開く
2. 捕鯨砲引き込む
3. ハッチを閉じる
4. ショック・ウェーヴ・ヘッド（キャビン先端）が上に上がる

B 漁業無線／魚群探知器

宇宙船の船首には、複数の魚群探知器が集中的に設置されているほか、底部のスキッドにも備えられた。また、宇宙船後方にあるアンテナは、漁業無線を受信できる。

C スキッド

宇宙船の底部に3基備えられているパーツ。低重力衛星着陸脚と推測されるが、その用途は定かでない。

D フォールド・システム

宇宙で運用できるフォールド航行用の装置。銀河クジラへの急速接近を可能とした。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-19P

惑星ゾラの銀河パトロール隊に導入された。これは現在確認できる数少ない運用例のひとつである。

旧式のVF-5000を運用してきたパトロール隊にとっては待望の新鋭機で、カラーリングも差別化が図られた。

機体解説

次期全領域可変戦闘機(AVF)として傑出した性能を見せたYF-19は、ピーキーな機体特性を緩和して安定性を向上させることで、一般パイロット向けの制式採用機VF-19シリーズへと発展した。そのバリエーションのひとつがVF-19Pである。本機は固定武装の強化に主眼を置いた改良がなされ、機体は一般量産機のVF-19F エクスカリバーよりも、先行試験用改造機のVF-19改(通称 ファイヤーバルキリー)に近い構造を有している。また、ピンポイント・バリア・システムやアクティブステルスなど、YF-19に導入された各種の新技術は本機にも継承され、VF-19系列機の名に恥じぬ高性能を備えていた。

主要パイロット

熱気バサラ

サイズ比較

VF-1J
VF-19P

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶18.47m
全高▶3.94m
全幅▶14.87m
空虚重量▶調査中
エンジン▶調査中
最大速度▶調査中
推力▶調査中
標準装備▶マウラー REB-30G対空レーザー機銃/マウラー REB-23半固定レーザー機銃×2/マイクロミサイル 他多数

開発系譜図

▶ ▶ VF-19P

AVFの血統を受け継いだVF-19系列機

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-19P エクスカリバー

運用記録

VF-19シリーズの配備は高コストやパイロット養成の難しさから少数に留まり、VF-19Pも運用されたケースをほとんど確認できない。貴重な一例が、惑星ゾラの銀河パトロール隊用に、スピーカーユニット装備の改修が施された1機である。同機は、その折にゾラを訪れていた熱気バサラが乗り込み、パトロール隊と密漁団の交戦の中で銀河クジラとのセッション(コミュニケーション)を試みた。密漁団が反応弾を使うという想像以上の激戦だったが、機体は無事に帰還した。事件後は、マクロス7のレイ・ラブロックにレンタル料を請求するように告げ、そのままバサラが操縦してゾラを去っていった。

パトロール隊に搬入されたばかりで隊員の試乗すら済んでいなかった機体を、居合わせたバサラが勝手に持ち出した。

白クジラに歌を聴かせようとするバサラが操り、パトロール隊と密漁団がしのぎを削る戦場の真っ只中でクジラに相対した。

ファイターモード／武装

時空共振スピーカーユニット

パトロール隊に協力する科学者ローレンスが銀河クジラとのコミュニケーションを実現するため、パトロール隊のVF-19Pの両肩部に合計8基のスピーカーを装備した。マクロス7船団のDr.千葉が提唱した歌エネルギー理論が採り入れられている。

バトロイド形態では、スピーカーユニットは両肩部に位置する。サウンドブースターのようにサウンドエナジーを伝えるのではなく、純粋に音を発するシステムのようだ。

バサラの歌に対して当初は無反応だった白クジラだが、スピーカーから伝わるバサラの思いが通じたのか、密漁団との激戦の最中に突如として唄いだす。

操縦方法

操縦システムは通常のVF-19を踏襲するものだが、搭乗したバサラはギターを抱えたままこれを操縦した。バサラの愛機・VF-19改がギター型コントロールスティックを搭載した特殊な機体であったことが、その理由であろう。とはいえ、バサラのギターはVF-19Pと接続されているわけではない。あくまでギター本体で物理的にスティックを操作することにより、ナーバスなVF-19Pのコントロールを実現している。

ファイターモード／武装

ファイター形態はVF-19系の前進翼のシルエットを継承するが、VF-19SやVF-19Fでは廃されたカナード翼を備え、また機体下部にはベントラルフィンが設けられている。本機の特徴はこのベントラルフィンと、時空共振スピーカーユニットであろう。またホワイトを基調としたカラーリングであるものの、そのシルエットはバサラがかつて駆っていたVF-19改を想起させる。VF-19系の特徴である運動性の高さを誇るが、それゆえに扱いが難しい側面もある。惑星ゾラの銀河パトロール隊では、導入を検討していく段階にあったが、バサラが持ち出したことで計画は中断した可能性もある。

▶VF-19SやVF-19Fのデルタ翼ではなく、前進翼を採用している。隊ではゾラ内での使用も想定しているため、大気中での運用を意識した結果なのかもしれない。

▼ファイター形態の特徴として、機体上部の時空共振スピーカーユニットが挙げられる。周囲の肩部形状はVF-19改に酷似している。

ガウォークモード

ガウォーク形態の構造もVF-19改とほぼ同じで、機首から主翼の部分はファイターの構造を残したまま脚部を変形させ、腕部を主翼部前方に展開させる。なお、バサラが搭乗した機体はファイターで大気圏離脱を行ったのち、すぐにバトロイドへと変形したため、ガウォークはほとんど用いていなかった。

事件が一段落し、ライザ・ホイリーやガムリン・木崎とともにクジラの墓場付近に着陸した際に、ガウォークを用いた程度だった。

◀▲胴体上部から主翼をまたぐようにして展開される腕部や、胴体後部に露出するヘッドユニットなど、VF-19系列機に共通するガウォークの特徴が見られる。左図ではVF-19改のランチャーポッドに似た形状のガンポッドを携行しているが、バサラは使用しなかったようだ。

バトロイドモード

VF-19Pはその用途上、特にセンサー機能の強化が図られた。その結果である前面の大半を透過バイザーとしたモニターヘッドユニットが、ほかのVF-19系の機体とは一線を画すバトロイド形態の特徴となっている。また、後頭部と側面に3門のレーザー砲を装備する点は、バサラの愛機・VF-19改を連想させる。白い銀河クジラとのコミュニケーションを図る際には、バトロイド形態で群れの前に立ちはだかった。その後、密漁団の反応弾に対して白クジラが散布した花粉を浴び、機体が真っ赤に染まる。その姿は、かつてバサラが運用していたVF-19改をほうふつとさせるものであった。

バサラはバトロイドで白クジラに接近し、周囲の戦闘や白クジラから伸びる触手を物ともせずにひたすら唄い続けた。

白クジラが放出した花粉で覆われたフェイスプレートは、マニピュレーターで拭うと、「顔」のように見えたという。

白クジラの赤い花粉を浴びたのはバトロイド形態の装甲面だけであり、他形態では白いパーツが残るツートーンカラーとなった。

▲バトロイドの基本構造はVF-19FやVF-19改と同じで、脚部補助翼や肩部スピーカーユニットに違いが見られる程度である。

▲白クジラが放出した花粉を浴び、機体は赤一色に染まった。

◀コクピットブロックを胴体内に収納する構造は系列機と共通で、大型の背部に特徴が表れている。

◀図はバトロイドを側面から見たもので、腕部は省略されている。脚部の方形スリットはミサイル発射口。

密漁団艦艇

密漁団の本部となる母艦。銀河クジラ獲りだった父の遺志を継いだカリバの船だけあって、捕獲用の設備も充実している。

艦長

カリバ

▶密漁団母艦(カリバ船)

機体解説

植物性の構造を持つ星間物質で構成されたエネルギー体「銀河クジラ」。その巨大生命体が惑星ゾラ周辺宙域を回遊する時期には、同時に大規模な密漁団が出没する。高額で闇取引される銀河クジラの捕獲を目論む密漁団は、密漁を取り締まるパトロール隊との交戦も想定し、武力を所持。銀河クジラ捕獲用の巨大モリだけでなく、対空パルスレーザー砲、対空ミサイルランチャーを備え、さらには反応弾までも入手した母艦(カリバ船)を中心に、充実した武装を持つ艦艇を多数擁した。その全戦力は、VF部隊を持つパトロール隊を凌駕するものだったとも言われている。

多数の艦艇のほか、統合軍の機体を改造したVA-3C改インベーダー改も運用した密漁団。軍隊のように組織化されており、銀河パトロール隊を苦しめた。

白い銀河クジラ捕獲に執念を燃やすカリバは母船で特攻を仕掛けたが、同宙域にいたグラハム・ホイリーに阻止された。

銀河クジラの捕獲を目論む
大規模密漁団の艦艇群

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶密漁団艦艇

運用記録

2047年、惑星ゾラ周辺宙域に現れた密漁団は、数度に渡りパトロール隊と交戦しつつ、銀河クジラの捕獲を試みた。しかし、白い銀河クジラによる妨害や偶然惑星ゾラに居合わせた熱気バサラらの横槍を受け、その目標を達成することはできなかった。

密漁団頭目のカリバは、意思を持って密漁の邪魔をする白い銀河クジラを敵視。白い銀河クジラを排除して密漁を円滑にするために、反応弾も準備していた。

密漁団母艦(カリバ船)

大型の密漁団母船は、銀河クジラの捕獲を前提としつつ、対艦戦も想定したと思われる独特の武装を持つ。構造的には銀河クジラも収容可能な筒状の大型格納庫と、中央に張り出したブリッジ部が核となり、巨大モリ、対空パルスレーザー砲、対空ミサイルランチャーといった武装のほとんどは、格納庫外周に設置されている。その特異な外観は、同時期の統合軍艦艇には見られないものだった。

Ⓐ対空パルスレーザー砲 Ⓑ対空ミサイルランチャー

銀河クジラへの攻撃と、対艦戦も想定したと考えられる大型の対空パルスレーザー砲、対空ミサイルランチャーも2基装備。

Ⓒ巨大モリ/自動発射装置

銀河クジラ捕獲時に使用する巨大モリ。船体の翼部が巨大モリの弾倉となっており、モリは4基の発射装置へと自動的に装填される。さらにブリッジ右舷の自動発射装置にも同型のものが装填されている。

Ⓓバトロイド用フォールドグリップ

艦体の外周部には、フォールド航行時にVFのバトロイドがつかまるグリップが設置されている。

Ⓔ威嚇用砲塔

威嚇用砲塔。砲撃手が透明のキャノピーに覆われた銃座に配置される。小型の密漁団所有船の砲塔とほぼ同型のものだ。

Ⓕ格納庫

大型の格納庫。筒状の船体中央部が8分割されている。通常時、格納庫入口は左右にスライドする扉で閉じられている。

▼壁面

Ⓖブリッジ

右舷に巨大モリが装填されたブリッジ。カリバは様々な計器が並ぶこのブリッジ内から、密漁団を指揮する。なお、同船の巨大モリ発射装置には、ほぼ同型の反応弾も装填可能となっている。

▶正面 ▶側面

密漁団小型艦艇

密漁団が擁する艦艇の多くは、密漁団所有船、密漁団偽装船のように小回りの利く小型艦艇であった。しかし、銀河クジラの捕獲補助、あるいはパトロール隊との交戦を想定していたためか、それらはおしなべてレーザー砲やミサイルで武装されていた。

一部の密漁団小型艦艇は、密漁団母船に先駆け惑星ゾラや周辺宙域に潜伏。母船との合流を待たずに、銀河クジラの捕獲を試み、パトロール隊と交戦した。

密漁団偽装船

▼通常時はゾラの海上を漂泊し、漁船の体を成している密漁団偽装船。惑星ゾラには、同様の偽装船が多数入り込んでいたようだ。

▼▶密漁団偽装船の水面下の一部は、本来の船体がむき出しになっている。正体を現すと、下部にレーザー砲やミサイルランチャーを備えた小型艇となり、密漁団として幅広く活動する。

密漁団所有船

▲▶船体両舷にモリを装備し、上面中央部にはキャノピーに覆われた銃座を備えた密漁団所有船。銀河クジラの捕獲補助をメインとする船と考えられる。

◀▼船体両舷に可動式のモリ発射装置を備えた密漁団所有船。艦首部に備えられたレーザー砲5門は、パトロール隊との交戦も想定した武装だろう。

惑星ゾラの乗り物

自然と調和した惑星で使用された 陸・海の移動手段

◀水陸両用オート三輪

エルマ・ホイリーが使用していた水陸両用車で、座席は3つ。バサラは後部の荷台に乗ることが多かった

機体解説

銀河の辺境にある惑星ゾラは、地球人とは異なる種族である「ゾラ人」が住んでいた。彼らは接触を図ってきた地球人を受け入れ、友好な関係を築いたが、その技術力に関しては、積極的に採り入れることをしなかった。自然との共生を好むゾラ人は、環境破壊の危険性を孕む高度な文明化を選ばず、住環境の工業化・機械化を必要最低限に留めていたのである。ゾラの人々が日常生活で使っていた漁船や乗用車などは、地球側から見れば「レトロ」な産物に過ぎなかった。だが、彼らのスローライフを支える移動手段としては十分だった。

舗装されていない道を走行する水陸両用オート三輪。後部の積載スペースは広く取られており、かなりの荷物を運搬できる。

漁船やポンポン船は小型で、近海での操業用となっている。その航行スピードも非常にゆったりとしたものとなっていた。

主要使用者
エルマ・ホイリー

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶惑星ゾラの乗り物

運用記録

ゾラの乗り物はゾラ人の足となっていただけでなく、ゾラを訪れた旅行者の移動手段ともなっていた。一人旅を続けていたFire Bomberのメンバー、熱気バサラも、ポンポン船を使ってゾラの街を訪れている。また彼は、密漁団とパトロール隊の衝突に巻き込まれ、負傷したところをエルマに助けられた縁で、彼女の運転するオート三輪を利用することが多かった。

水陸両用オート三輪の荷台やルーフトップで、バサラがその歌声とギターを熱く披露することもあった。

過度な開発が行われていないゾラの穏やかな街の風景に、レトロなデザイン・機構の漁船はフィットしていた。

水陸両用オート三輪

3輪タイプのアンフィビアン（水陸両用車）。荷台には、人間なら8〜9人程度が乗ることが可能。路上走行時の時速は最大30km程度であったとされる。

水上走行に移行すると、後部からスクリューが出現・稼動し、推進力を得ていた。だがその速度は鈍重である。

◀操縦席（フロント側）
ハンドルはV字にカーブしたタイプで、基部にメーターが設置されている。フロントの窓は2枚に分かれた構造だ。

▼▶操縦席（シート側）
中央のシートにまたがって車体を操縦する。シートにはシフトレバーやエンジンのスターターが備えられていた。

◀上面
クラッチペダルを持つマニュアル車である。車体の両サイドに設置された方向指示器は木製であった。

▶後方
車体リアには、ナンバープレートが設置されている。底部に見えるのは水上走行用の舵とスクリューである。

車両群

ゾラの人々が所有していた陸上用の乗用車で、操縦機構などは水陸両用オート三輪と共通している。2種ともいわゆる「街乗り」に適した小型サイズで、3〜4人乗りだった。

ゾラの街で見られた乗用車。買い物など、日常生活の足として使われていた。

ライザのバイク

銀河パトロール隊に所属する、ライザ・ホイリーが運用していた単座式のバイクで、チェーンを持たない機構である。通信機を備えており、関係各所への連絡がスムーズに行えた。

▲通信機

VT-1Cを奪取しようとした密漁団を発見、負傷者が出たことをパトロール本部に伝えた。

漁船

漁業や移動手段として用いられた、ゾラではスタンダードなタイプの漁船。操縦席が車両群と同じバータイプのものと、円状ハンドルタイプの双方があったようだ。

バサラは蒸気を主動力とするポンポン船を使ってゾラの街に足を踏み入れている。

▶ポンポン船

▶ポンポン船操縦席

▲▶漁船

マクロス7

マクロス7船団の守護を担った、超大型ステルス攻撃宇宙空母

長距離航行性や超長距離砲の主砲の射撃精度は要塞モードが勝る。一方で強攻型は、各部に配された推進器により、近接戦闘での機動力に優れている。

●艦長
マクシミリアン・ジーナス

●主要クルー
エキセドル・フォルモ

▲バトル7（強攻型）

機体解説

バトル7は、新マクロス級移民船7番艦「マクロス7」の戦闘区画にあたる、バトル級超大型可変万能ステルス宇宙攻撃空母である。トランスフォーメーションによって運用性の向上を果たした第一世代型マクロス艦のコンセプトを受け継ぐと同時に、都市宇宙船の機能を切り離し戦闘艦としての性能のみを追求することで、突出した戦闘力を獲得している。また、第一世代型マクロス艦よりも一回り大きなサイズでありながら、強力なアクティブステルス機能によるステルス性能も付与されている。さらには膨大な艦載機搭載能力を誇った本艦は、実戦においても優れた総合戦闘力を発揮し、移民船団の防衛戦力の要として活躍したのである。

データ
■データは要塞モード時のもの

所属▶統合軍
全長▶約1,510m（強攻型時全高1,172m）
全備重量▶約7,770,000t（空虚重量約5,280,000t）
搭載兵装▶OTEC製艦首超重砲システム／1 OTEC ゼネラル・ギャラクシー製ステルス[illegible] [illegible]
搭載機▶戦闘機450機、攻撃機250機、爆撃機[illegible]機、[illegible]80機、輸送機18機、連絡機12機

サイズ比較
SDF-1
バトル7

艦種系譜
バトル7

Illustrated by Hidetaka Tenjin

運用記録

バトル7は、新マクロス級移民船7番艦マクロス7を構成する戦闘艦として2038年に進宙し、第37次超長距離移民船団の中枢であるシティ7に随伴した。本艦は、船団に随伴する統合宇宙軍の指揮と、移民船団全体の航行管理を行う重要な艦でもあった。2045年にマクロス7船団がバロータ軍と遭遇すると、護衛艦隊の中心となって船団の防衛に当たるが、プロトデビルンとの最終戦闘で大破している。

EXTRA REPORT

関連事項

武装及びガンシップとの比較

大口径エネルギービーム砲や小口径ビーム・ファランクス、大・中型対艦反応弾頭ミサイル、近接防衛用ミサイルといった武装を無数に備える。それらはステルス化のため内蔵式となっている。

▲バトル7強攻型とガンシップの対比図。ガンシップだけでも通常の戦艦を超えるサイズであることがわかる。

強攻型

バトル7の強攻型（通称「BIG-M」）は、主砲を撃つために急遽考案されたSDF-1 マクロスの同形態とは異なり、設計段階から取り入れられた形態である。この形態では、内蔵された武装が全て展開され、高い近接戦闘能力が発揮される。また、ガンシップ（マクロス・キャノン）を手持ちで射撃可能となり、射角を自在に変化できるようになる。そのため、対艦隊戦などの大規模な戦闘では、主に本形態で運用された。

空母モード

通常の航行形態にあたる空母型は、ステルス面構成の艦体形状が特徴である。これは本艦があまりにも大型のため、アクティブステルス機能だけではステルス化が困難だったことから、ステルス性を補うための形状である。また、同形態は2段式の飛行甲板によって、優れた艦載機展開能力を発揮した。

ガンシップ

変形

戦闘力向上のためにトランスフォーメーションを取り入れたバトル7は、第一世代型マクロス艦よりも高度な変形構造を有する。ただし、変形には時間を要するため、タイミングの見極めが重要だった。

変形シークエンス

1. トランスフォーメーション開始
2. 腕部と脚部の変形
3. トランスフォーメーション完了

中央胴体　ガンシップ　脚関節　腕関節

Illustration by Hidetaka Tenjin

マクロス7

機体解説

バトル7は、新マクロス級超長距離移民船団の防衛部隊の中核を担う艦にふさわしい火力、防御力、艦載機搭載量を誇る、超大型可変万能ステルス宇宙攻撃空母である。その運用の中枢となるブリッジは、かつてのSDF-1のやや手狭とも言えたブリッジから大きく様変わりしており、艦の隅々にまで指示を行き渡らせるのみならず、周囲の艦船とも密な艦隊行動が取れるキャパシティを与えられている。また、バトル7の1,500mの巨躯には複数の艦載機のカタパルトが設置されており、複数の部隊が平行して運用できたのも強みであった。なおバトル7は通常、都市艦であるシティ7(全長約6km)とドッキングしており、合体時の全長は約7,770mにも達する。

▲バトル7(空母モード)

宇宙の大海原に分け入った
可変ステルス空母

バトル7 ブリッジ

新マクロス級移民船マクロス7の戦闘艦バトル7は、SDF-1 マクロス同様に変形機構を有する巨大艦であり、戦艦形態の空母モードから、主砲マクロス・キャノン発射時の人型形態である強攻型へとその姿を変える。ブリッジの配置はそれぞれの形態で異なり、空母モード時では通常艦のように甲板上の高所に位置し、強攻型ではいわゆる人の頭部にあたる位置に移動する。ただし、ブリッジ内部はどちらの形態においても形状を変えることはなく、四層構造のままである。

メインブリッジ
▼カタパルト

ブリッジ構造

▲側面
▲上方

Ⓐメインブリッジ

艦長席
オペレーター席

ⒷⒸⒹ
第2～4階層

▼マックス用コンソール

▶主砲引き金

バトル7 格納庫／カタパルト

バトル7のブリッジ前部は、精鋭部隊専用のカタパルトとなっている。カタパルト下はそのまま格納庫となっており、中には管制室や消火システムなどが備わっている。バロータ戦役当初、このカタパルトからは金龍率いるダイヤモンドフォースが出撃していたが、のちにドッカー率いるエメラルドフォースが使用するようになった。

ダイヤモンドフォース格納庫

格納庫発進シークエンス

❶格納状態
❷カタパルトにプラズマ発生
❸ポール部分発光（濃色部分）
❹機体浮上
❺ゲートオープン
❻カタパルト上昇
❼ガイドライン投影
❽発進

通常VF格納庫

バトル7は、VF-11 サンダーボルト、VF-17 ナイトメア、VF-19 エクスカリバーなどを艦載機として搭載。艦載機用の格納庫、及びカタパルトを備える。カタパルトは複数あり、スクランブル時の各機発進を円滑に行うことができる。

マクロス7

バロータ戦役を戦い抜いた 新マクロス級7番艦

艦長
マクシミリアン・ジーナス

市長
ミリア・ジーナス

艦体解説

第37次超長距離移民船団の旗艦マクロス7は、新マクロス級移民船の7番艦にあたり、バトル級可変ステルス攻撃宇宙空母のバトル7と、都市艦シティ7の2艦で構成されている。自力航行とフォールドが可能な宇宙構造物としては、2040年代の時点で最大級を誇った。マクロス7船団の中心となり航海に臨んだ本艦は、やがてバロータ軍やプロトデビルンとの戦いに巻き込まれてしまう。なお、本項では主にシティ7を解説する。

旗艦として、マクロス7船団を率いると同時に、市民たちの生活の中心として機能したが、戦いによって損傷を強いられた。

通常はバトル7とシティ7がドッキングした状態で航行するが、戦闘時に必要と判断された場合にはバトル7が切り離される。

データ

所属 ▶ 地球統合軍
全長 ▶ 約7,770m（パワープラント 約0.8km、シティ7 約5km）
全備重量 ▶ 約77億7777万t（出発時）
乗員数 ▶ 約35万人（2045年現在）
主動力 ▶ OTMマクロス縮退炉エンジンマトリックス
主推進機関 ▶ OTMマクロスヒートパイルクラスターシステム
フォールド・エンジン ▶ OTMマクロスフォールドエンジンクラスターシステム

サイズ比較

マクロス7

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶マクロス7

運用記録

2038年に地球を発ったマクロス7は、2045年にバロータ軍と遭遇し、交戦状態に陥った。さらに、シティ7が敵に強制フォールドさせられ、一時的に船団とはぐれる事態にも見舞われる。しかし、度重なる戦いを切り抜け、航海を続けた。

艦体構造

マクロス7の特徴はバトル級と都市宇宙船が連結した構造にある。これは戦闘区画と居住区画を明確に分けることで移民船の機能分化を図ったもので、新マクロス級移民船に共通する構造である（艦によって細部に差異は存在する）。また、この艦体構造はアイランド・クラスター級にも受け継がれた。

▶平面図（シェルを取り去った状態）

▶シェル上面図

◀シティ7のドームは上から見ると卵型で、表面には、[illegible]と呼ばれる[illegible]が張り巡らされている。

▶上は真上から見たシェル。下はシェル[illegible]の正面[illegible]面。シェル内側には[illegible]が投影できる。

▶シティ7のドームを[illegible]する[illegible]で[illegible]することができるが、通常は[illegible]で固定されている。

▼正面図

▶バトル7とシティ7の両方がフォールド機関を有し、動力パイプを[illegible]システムを連動させることもできる。

▲側面図

▲後面図

シティ7

シティ7は全長約6kmにも及ぶ超大型宇宙船で、船体の大半を占めるドームの内部に居住空間が構築されている。また、移民惑星に到着した際には海洋浮遊都市として機能するように設計されている。

[illegible]

▶シティ7底部

▲バトル7を分離させたシティ7単独の状態。シェル背面には[illegible]システムを備えたパルンバ、[illegible]センターなど突出したビルのカバーが配されている。

◀底面にはバトル級2隻を収容、整備可能なバキューム・ドックを有し、2基の防衛シャッターを備える。

▼アクショ

シティ7の表底、先端ドッキングベイに接続されているのが、船団有数の[illegible]アクショ。[illegible]を備えていた。

◀船首はバトル7とのドッキングシステムを有したパワープラントで、上下に伸びたフィンは[illegible]システムである。

運用記録

Fz-109は2045年のマクロス7船団との接触においても当初からバロータ軍の主力として運用され、F型はその中で前線指揮を担っていた。特に、マクロス7の殲滅を任されたギギルが搭乗したF型は、一般兵が搭乗したA型に比べ優れた性能を発揮した。同機はギギルが独断専行した末にダメージを負ってしまうことも多かったが、初戦ではダイヤモンド・フォースのVF-17D（ガムリン機）に対し、スピリチア吸収システムを使用し戦闘不能に陥れる戦果を挙げている。

ガウォークモード

Fz-109は通常のVFと同じ3形態の変形構造を有している。だが、主戦場が宇宙だったためか、ガウォーク形態の運用機会は少なかった。

脚部 足裏

ファイターモード

Fz-109のF型は一般仕様のA型に比べてエンジン推力が向上しており、大気圏内巡航速度もA型のM4.2+からM4.5+まで上昇している。ギギルはマクロス7船団の防衛ラインの最深部まで一気に突貫し、その後バトロイド形態での格闘戦を行うという戦法を得意としていたが、これを可能にしていたのは、本機の強靭な推力であったと言えよう。

武装

武装の搭載量に余裕のあったVF-14をベース機としているFz-109は、機体各所に豊富な武装を内蔵している。F型は頭部と肩部に各2基のレーザーガンを装備しているほか、胸部に大口径ブラスターを装備している。また、肩部のマイクロミサイルランチャーは、A型の4基から8基（片側4基）に増設されている。機体底部の内装兵器庫にも中型ミサイルを多数搭載するなど、火力面が強化されている。更に本機を特徴付ける武装が、バトロイド形態の頭部に装備された、スピリチア吸収システムである。敵機に肉薄し、パイロットに一定時間光線を照射することでスピリチアを奪うこの装備は、発動時に機体が無防備になるという弱点を持つが、本機の持つ高い機動性と豊富な武装は、そうした無防備になる瞬間を可能な限り減らすことに貢献していた。

▶ミサイル搭載時

▼▶中型ミサイル

▲開閉パターン

コクピット

コクピットの基本レイアウトは地球側のVFと大きく変わらないが、細部の形状は異なる。また、F型は操縦桿の配置や構造などがA型とは異なっている。

◀キャノピー部

バトロイドモード

統合軍側VFのバトロイド形態に比べ、Fz-109の同形態は頭部と肩部が大きい異質なフォルムを有している。F型では上半身に4基のレーザーガンが装備されているのが特徴であった。

EXTRA REPORT 関連事項

エルガーゾルンの原型機

プロトデビルンがエルガーゾルンのベース機として用いたとされる、バロータ3198XE第4惑星特務調査部隊のVF-14については、詳細な資料が発見されていない。VF-14はダンシング・スカル隊で運用されていた細身の機体が有名であるが、関係者の証言によれば、特務調査部隊のVF-14は、エルガーゾルンと似た重厚なシルエットの機体で、独自に改良された仕様であったことが推測される。

一般機(Fz-109A)

機体解説

バロータ軍の主力機として用いられたFz-109の一般機(Fz-109A、以下A型)は、ギギルらが搭乗した指揮官機(Fz-109F、以下F型)と比較すると、頭部、肩部、胸部のレーザー砲などがオミットされているか、もしくは砲門数が抑えられている。機体の外殻やコクピットの構造も、F型とは若干、異なっていた。これらはA型が生産性を重視した機体だったためと見られるが、スピリチア吸収装置の標準装備や、ファイター、ガウォーク、バトロイドの3形態をスムーズに移行できる可変システムなど、プロトデビルンの優れた技術がフィードバックされており、機体性能を引き上げている。結果、原型機となるVF-14からは大きくスペックが向上し、統合軍の主力機であるVF-11C サンダーボルトを圧倒して見せた。

[illegible]

[illegible]

バトロイドモード

四肢が大きく、威圧的なシルエットが特徴。マニピュレーターも、内側に湾曲した獣のようなフォルムとなっている。また、機体サイズも統合軍製VFに比べ大きく、格闘戦でも力を発揮した。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

武装 コクピット

A型には、肩部のマイクロミサイルランチャーと脚部のミサイルランチャーをはじめ、胸部にレーザー機銃と大口径ブラスター、脚部の装甲内には多量のガンポッドといった、多彩な武装が備えられた。こうした武装を巧みに使い分けることで統合軍のVFを翻弄し、スピリチア吸収装置の有効範囲まで速やかに接近したのである。また、スクリーンを正面、上方、側面に計5面備えたコクピットには、スピリチア吸収装置専用のコンソールが備えられるなど、プロトデビルン独自の改良が加えられている。

[illegible]

[illegible]

▲肩部
F型に設置されていた肩部先端のレーザー砲はオミットされた。中央のマイクロミサイルランチャーはA型にも装備されている。

▲頭部
F型では側頭部に設置されていたレーザーガンがA型では外され、シンプルなフォルムとなっている。

大口径ブラスター
レーザー機銃

▲胸部
右胸にレーザー機銃、左胸にはブラスターを装備。レーザー機銃はF型、A型共に装備されているが、A型の砲口は2門と、F型より1門少なくなっている。

▼コクピット(シート側 ディスプレイ側)

Fz-109のA型は、F型とは別々となっていた操縦桿と各種レバーがひとつにまとめられ、シンプルな操作体系となっている。シートやケーブルも簡略化されており、量産を考慮した構造と見える。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶Fz-109 エルガーゾルン

運用記録

Fz-109は、バロータ軍の主力機として大量に配備され、マクロス7船団を襲撃した。A型は主に編団で連携しながら行動し、頭部に設置されたスピリチア吸収装置を用いて、統合軍兵士の戦闘意欲を次々と奪い去っている。F型に比べてエンジン、推力面では劣っていたようで、VF-17D ナイトメアなど、マクロス7船団の高性能機体には撃破されてしまうことも多かった。だが、Az-130A パンツァーゾルンが主力機として大量配備されるまで、バロータ軍には欠かせない基本戦力であり続けた。

[illegible]

ファイターモード

細長い機首と、バトロイドモードでの重厚な外観とは異なるフラット形状を持つファイター形態。機体後部の3次元ベクタードノズルを駆使することで、高い旋回能力を獲得している。戦場ではミサイルランチャーの一斉射により、敵VFの接近を阻んだ。

▲▼F型とはキャノピーの形状が異なる [illegible]

ガウォークモード

機体の最後方に脚部がレイアウトされているため、脚部が主翼よりも後ろ側から展開されるのが特徴である。この形態では、ガンポッドを主武装として戦闘を行うことが多い。だが、バトロイド、ファイター形態に比べて使用頻度は低くなっていた。

◀ [illegible]

▲▶脚部が最後方にあるため、[illegible]

関連事項

EXTRA REPORT

VF-14 バンパイア

Fz-109のベース機となった統合軍製VFが、VF-14 バンパイアである。メガロード01に搭載されたVF-4 ライトニングの後継機と言われており、その外観や基本構造などを受け継いでいる。統合軍のバロータ星調査部隊が運用したとの記録があり、バロータ星に潜入した際に機体がプロトデビルンに奪取され、Fz-109へと改修されたと見られる。

統合軍[illegible]していたVF-14 バンパイア。相当数が配属されていた。

▶VF-14 バンパイア

[illegible]

▲ミリア ファリーナ・ジーナス搭乗機

▶マクシミリアン ジーナス搭乗機

▶Fz-109 エルガーゾルン

ガンポッド

バトロイド形態時の主武装として用意されていたのが、マニピュレーターで把持するガンポッドである。非戦闘時は脚部のホルスターに内蔵されている大型の重火器であり、その連射性能と取り回しの良さから重宝された。このほか、形状が異なる2丁の火器をドッキングすることで威力を強化できる重ブラスターも確認されている。これは試作であったため、使用された回数は少なかった。

ガンポッド

◀後方

◀側面

◀ストック

ホルスター

▶マガジン

◀接続状態

脚部

試作ブラスター

▼側面

▲後方

脱出ポッド

Fz-109は機体が制御不能となった場合に備え、コクピットが脱出ポッドとなる機構を持っていた。

◀側面

▼対比図（人間）

◀着陸部

変形シークエンス（ファイター形態➡ガウォーク形態）

Fz-109は、他のVFと同様、ファイター、ガウォーク、バトロイドという3つの形態を持つ。ファイター形態からガウォーク形態への可変機構はシンプルなもので、脚部、腕部の変形が主である。

1 脚部の変形

2 脚部・腕部・主翼の変形

3 肩部の変形➡ガウォーク形態へ

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶Fz-109 エルガーゾルン

変形シークエンス(ファイター形態➡バトロイド形態)

丸みを帯びた特異な機体フォルムを持つFz-109は、ファイター形態からバトロイド形態への変形において他のVFと大きく異なる機構を採用していた。ファイター形態の機体後部が前方に起き上がって胴体部となるほか、機首も取り付け軸を中心に回転して背部を形成する仕組みであった。また、機首先端が頭部へと移行する機構も、2つのヒンジを用いた複雑なシステムを採用しており、本機の特徴ともなっている。

1 腕部・脚部の変形

2 腕部・胴体部の変形

3 胴体部・背部の変形

4 腕部・肩部・脚部の変形

5 頭部・肩部・腕部・脚部の変形

シティ7航空機・車両

市民の治安を守る都市宇宙船の装備

◀シティポリスマシン
シティ7の警察機関であるシティポリスが運用したティルトローター機で、飛行モードとリトロイドモードへの変形機構を有する。[illegible]用で、ローターを[illegible]した[illegible]用も存在する。

機体解説

マクロス7船団では、治安を守るためにシティポリスと呼ばれる警察機関が置かれ、専用の装備を運用して職務にあたった。そのひとつが、小型可変機のシティポリスマシンで、変形による汎用性が特徴の多目的機であった。移民船団が巨大化し、払い下げの可変戦闘機（VF）やデストロイドが一般市民にも普及していた当時にあっては、警察機関にもこのような高度な装備が必要とされたのである。

シティポリスマシンはパトカーや[illegible]と連携し、シティ7[illegible]の[illegible]を担った。

変形機構を有したシティポリスマシンは、飛行[illegible]

シティ7航空機・車両

運用記録

シティポリスの職務は防犯や犯罪捜査といった一般的な警察機関の役割と同じで、シティポリスマシンは平時にはシティ7内外のパトロールにあたった。しかし、重大な暴力活動には火器を装備して対応する場合もあり、バンパイア事件に端を発するバロータ軍のシティ7潜入では迎撃に運用された。また、シティ7に来襲したプロトデビルン シビルに初接触したパトロール機のパイロットが犠牲になるケースもあった。

シティ7内で活動するバロータ軍に対応すべく運用されることもあったが、[illegible]性能差は[illegible]被害を被った。

◀▼コクピット

◀▲機首が球状コクピットになっており、[illegible]コクピットはアームにて[illegible]した状態に固定される。

▲▶ハンドル

シティポリスマシン

2基のダクトファンを有するティルトローター機(回転翼を傾けることで垂直離着陸を行う機体)。VTOLモード、高速飛行モードの飛行形態と機体後部を展開した3輪パトロイドモードに変形が可能である。また、飛行モードで腕部のみを変形させて展開することもでき、携行火器を運用できる。

▼高速飛行モード

▲脚部を収納し、高速での飛行に特化させた形態。機首下部に[illegible]サーチライトを備える。

▼通常飛行モード

▲▼機体上部に[illegible]ライトを備える。また、機体尾部に付属する各種制御用の[illegible]は全[illegible]。

◀▼3輪パトロイドモード

◀脚部[illegible]を90度下方に向け、脚部を展開して3輪走行型となる。ダクトファンの支柱は折り畳まれる。

統合軍装甲車/装甲戦闘車

統合軍が運用した装甲車で、ひとつは車体上部にレーダードームを備えた高速6輪車、もうひとつは履帯駆動の装甲戦闘車である。前者はプロトデビルンとの最終戦闘でバトル7からの退艦に用いられた。

▼装甲車

▲▼両輪の側面から前面にかけてはサイドアーマーを装備。車体側面と後部に[illegible]を備える。ただし、武装は[illegible]。

▼装甲戦闘車

▲4連装砲塔やドーザープレートを備える装甲車両で、履帯は[illegible]対となっている。歩兵戦闘車と考えられる。

◀車体上部のレーダードームは車輪を超える直径の[illegible]で、基部を介して接続される。

▲レーダー基部

パトカー

シティポリスで使われたパトカー。バンパイア事件やテロリストによるシティオフィスジャックなど、さまざまな事件で治安維持に奔走した。

▲▶曲線的な外見。[illegible]ライトを備え、前面には「POLICE」の文字が記されている。

シティ7内を疾走するパトカー。[illegible]、シティポリスの機動力で活動を支えた。

Illustrations by Hidetaka Tenjin

VF-19改

宇宙を震わせた超時空のサウンドユニット

機体解説

プロトデビルンとの戦いが激化する中、熱気バサラとその愛機VF-19改は、民間協力隊サウンドフォースとして、統合軍に協力することとなった。同隊の編成直後、その専用装備として配備されたのが、サウンドブースターである。サウンドブースターは、プロトデビルンへの対抗手段となりうる「歌エネルギー」を、より効率的な「サウンドエナジー」へと增幅・変換するシステムを装備した機体であり、VF-19改と合体し、時空共振サウンドエナジースピーカーを展開することでその真価を発揮する。なおこれは、あくまでサウンドエナジーを発振するための装備であり、VF-19改の機動性を向上させるものではない。また本装備には武装も施されていない。

サイズ比較

主要パイロット

熱気バサラ

VF-19改 エクスカリバー "熱気バサラスペシャル"

VF-19改 エクスカリバー用サウンドブースター

マクロス7特殊技術班(通称プロジェクトM)によって開発されたサウンドブースター1号機。左右のボディにはサウンドオーラ増幅発振システム、■端部には時空共振型サウンドエナジー発振システムが搭載されている。主動力は2基の巡航■熱核ジェットエンジン(VF-11用のエンジンを改装したもの)であるが、これに加え2基の化学燃料ロケット・モーターを装備している。このロケット・モーターは、先行しているバサラの元に速やかに移動するためのもので、ジェットとロケットが同時稼動時の最大飛行速度は大気圏内でマッハ7を超える(幸い本機は無人機であるため、このような無茶な加速も可能であった)。ロケット■燃料は約3分で全燃するが、実際の運用時は、燃料が尽きるほどの■離を飛行することはなかったようだ。

データ

全長▶[illegible]
全幅▶[illegible]
空虚重量▶[illegible]
標準離陸重量▶[illegible]
エンジン▶[illegible]
推力▶[illegible]
補助エンジン▶[illegible]
機体設計強度▶[illegible]
最高速度(標準大気内高度10,000m)▶[illegible]
最大速度(標準大気内高度10,000m)▶[illegible]
最高度最大速度▶[illegible]
離着陸距離▶[illegible]
実用上昇限度▶[illegible]
海面上昇率▶[illegible]
戦闘行動半径(大気内)▶ほぼ無制限
乗員▶[illegible]
武装▶[illegible] サウンドエナジー発振システム、大出力サウンドエナジー直接増幅システム×2

サウンドブースタードッキングシステム

▼VF-19改 肩部前面　▼ドッキングシステム　▼サウンドブースタードッキング時

▲肩当てパネル裏側　▼VF-19改 背面　▲ドッキングシャフト

Ⓐドッキングシステム
Ⓑドッキングシャフト

サウンドブースターセット時

VF-19改がサウンドブースターとドッキングした状態。ブースターの装着により歌エネルギー、通称サウンドビームの照射が可能となる。バサラ機用サウンドブースターは大出力のサウンドエナジーコンバーターを2基装備しているため、サウンドエナジーの増幅発振を非常に高いレベルで行える。しかしながら、システム起動には最低でも10万チバソングという高出力のサウンドエナジーが必要であり、Fire Bomberのボーカリストである"アニマスピリチア"＝熱気バサラだからこそ可能な機体運用であった。

主に対プロトデビルン戦において運用された。ガビル&グラビル襲来の際に初めて実戦投入され、プロトデビルンに対抗できる高い性能を示した。これはパイロットである熱気バサラの歌エネルギーを十二分に発揮できるキャパシティを備えた機体であることの証明でもある。

サウンドブースターシステムOPENモード

サウンドブースターシステムCLOSEモード

バトロイド時コクピット▶

◀▲ファイター・ガウォーク時コクピット

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-19改 エクスカリバー “熱気バサラスペシャル”

オプション装備

「歌エネルギー」の実証機となった本機だけに、通常のVFには搭載されないようなスピーカーユニットを各所に装備している。オプション兵装にも、サウンドエネルギーコンバーターを装備したサウンドブースターのみならず、超大型のスピーカーポッド量射装置「ガンポッドγ」が用意されるなど、バサラの歌を聴かせるための装備が充実していた。

肩部スピーカーユニット

ガンポッドγ

セキュリティロック▼

発射展開シークエンス

1

2

3

4

5

6

仮装形態(VF-1)

バサラとミレーヌが出演したドラマ「リン・ミンメイ物語」では、戦闘シーンを撮影するため、バサラの乗機であるVF-19改をVF-1に仮装した。この形態では、劇中の設定を再現するため、機体上部と脚部にスーパーパーツが装備されている。

Az-130A

バローダ軍が独自改良したFz-109の姉妹機

●データ

●データはアタッカー形態時のもの

所属▶バローダ軍
全高▶[illegible]
全長▶[illegible]
全幅▶[illegible]
空虚重量▶[illegible]
エンジン▶[illegible]
最高速度▶[illegible]
エンジン推力▶[illegible]
武装▶[illegible]

●サイズ比較

VF-14
Az-130A

●開発系譜図

VF-9 ▶ VF-14 ▶ Az-130A

機体解説

地球統合軍製のVF-14 バンパイアを回収、バローダ軍が独自に改良を加えた可変攻撃機がAz-130A パンツァーゾルンである。丸みを帯びたフォルムが特徴の機体であるが、基本のフレーム構造や変形システムはほぼ原型機のままであり、同じくVF-14を原型としたFz-109 エルガーゾルンの姉妹機と言える。一部兵装変更の上、主翼の再設計やエンジン推力の向上が図られており、大気圏内での空戦性能はFz-109やVF-17 ナイトメアを凌ぐほどの性能を発揮した。

●主要パイロット

バローダ軍兵

Illustration by Hidetaka Tenjin

マクロス7船団航空機

マクロス7船団で運用された多彩な航空機群

チルト式のダクテッドファンを4基備えた、大型の輸送ヘリ。

▼輸送ヘリ

◀報道ヘリ

機体解説

西暦2038年に地球を出発し、銀河系を航行していたマクロス7船団。船団を構成する約1,000隻の艦には、軍人・民間人を含めて100万人以上が暮らしていたとされる。その艦と艦との移動には宇宙空間ハイウェイ「ミルキーロード」が整備されていたが、艦内の飛行や惑星での運用を想定し、多種多様な航空機が開発・運用されていた。その中でも、チルト式のダクテッドファンを用いたヘリコプターは複数が生産されており、物資・人員の移動のみならず、巨人サイズのゼントラーディ人の運搬や、報道用に特化した機体が確認されている。

マクロス7船団航空機

輸送ヘリ

大気圏内での物資輸送用に用いられたヘリコプターで、大型のチルト式ダクテッドファンを4基設置しているのが特徴である。このダクテッドファンは可動式で、進行方向にダクテッドファン部を傾けることで、高速飛行が可能だった。本体はコクピットとフレーム組みのシンプルな構造で、物資の輸送時にはコンテナごと機体底部に設置する。エキセドルの輸送時には、頭部と胴体を吊り下げるコードとモニターを備えた専用ユニットを底部に設置した。

エキセドルの目覚めと共に出現した謎の遺跡が「プロトカルチャー」に関するものだと考えたエキセドル。彼は自らその遺跡を調査するため、輸送ヘリを運用した。

▼チルト式ダクテッドファンを90°傾けた高速飛行モード。発生した推力が全て進行方向に向かうため、飛行スピードが向上する仕組みだった。

エキセドル輸送ユニット装着時

▼▶エキセドル輸送用のユニットを装備した状態。ユニットに備えられた多数のワイヤーが、エキセドルの胸と頭部に設置される。

◀上方からヘリを見下ろした図。エキセドル輸送用のユニットは機体中央部のジョイントに設置されているのがわかる。

◀▶ワイヤー類とエキセドルのアップ図。ワイヤーは、エキセドルを懸架できる優れた耐久力を持っている。

報道ヘリ

TV局所有のヘリコプターで、2基のチルト式ダクテッドファンによって推力を生み出している。報道・取材用の機器を多数設置しているのが特徴で、コクピット下と機体底部にそれぞれ可動式のカメラとマイクを、機体上部に電波送信・受信用アンテナを備えていた。こうした機構により、迅速な情報収集とTV局への素早い情報発信が可能となっており、重大事件発生の際に多用された。

◀機体後方から見た図。尾翼にもダクテッドファンを備えた構造によって、優れた旋回性能を発揮している。

Fire Bomberが行ったゲリラライブを取材する際に運用され、TV番組「Coffee Break」にて、ライブの様子が生中継された。

EXTRA REPORT

関連事項

TV局が用いた航空機、航宙機

マクロス7船団に情報や娯楽を提供しているTV局では、報道ヘリ以外にも、その用途に応じた多彩な航空機、航宙機を保有していた。TV飛行船は、大型のディスプレイを2基装備したタイプで、重要な情報を広く伝えたり、広告用途にも使われたようだ。また、宇宙での撮影用に、小型の宇宙艇の中に編集スタジオを備えたスタジオ船なども保有し、幅広い環境での取材・撮影に対応した。

テレビ特番「リン・ミンメイ物語」のクライマックスとなる「ミンメイ・アタック」の撮影を行うため、複数のスタジオ船と多数のカメラが用いられた。

▼スタジオ船
細長く突き出た船首の先端にコクピットが設置されていた。胴体部にスタジオ設備があり、監督などスタッフが撮影を見守っていた。

▼TV飛行船
ディスプレイは左右両側に設置された。機体側面には「MBS TV」の文字が描かれているのがわかる。

▶機体前部には、地上を歩く通行人の注目を集めるように、絵も描かれている。

VF-11MAXL改

プロトデビルンに敢然と立ち向かった歌姫の写し身

機体解説

[illegible]

主要パイロット

ミレーヌ・フレア・ジーナス

データ

[illegible]

開発系譜

VF-11 ▶ VF-11MAXL ▶ VF-11MAXL改

サイズ比較

Mechanic Sheet

メカニックシート

VF-11MAXL改　ミレーヌ専用機

運用記録

歌の軍事利用を企図した統合軍は、極秘計画「プロジェクトM」を立案。その一環として、歌を武器とする可変戦闘機の開発に着手した。その結果、新中州重工とマクロス7特殊技術部の手によって誕生したのが、VF-19改、VF-17T改、VF-11MAXL改の各機である。これら3機は、ロックバンドFire Bomberのメンバーをパイロットに起用したサウンドフォースに配属され、本機VF-11MAXL改は、ベーシストのミレーヌ専用機として運用された。Dr.千葉が開発したサウンドエネルギーシステム、サウンドブースターを追加装備した本機は対プロトデビルン戦の切り札として奮闘し、最終決戦ではサウンドバスター作戦の中核を担う見事な活躍を見せた。

標準装備

レーザー通信システム

頭部には大きな改修が加えられており、特殊合金一枚板から叩き出した女性的なフェイス・プレートが特徴である。また、頭部レーザー機銃は装備されず、レーザー通信システムのみを備える。

▲VF-11MAXL改　▲VF-11C

ランチャーポッド

VF-19改と同じく、スピーカーポッドを射出するランチャーポッドを装備している。機体サイズに合わせてVF-19改のものよりも小型化されており、銃口など各部の形状も異なっている。

▲ランチャーポッド

コクピット

コクピットは他のサウンドフォース専用機と同じくサウンド・スティックコントロール（スティックはベースギター型）が採用されているが、原型機が違うためコクピット構造はやや異なる。なお、シートはのちにサウンドエナジー変換バックパック組み込みタイプに変更されている。

▲シート&コントロールスティック

ファイターモード

VF-11MAXL改のベースとなったVF-11MAXLでは、主機をVF-16の次世代型熱核バーストタービンエンジンに換装し、翼形状の変更によって耐久性と空力特性の向上が図られた。本機のファイター形態はその設計を受け継いでおり、ウイングレットを備えたクリップトデルタ翼が最大の特徴となっている。また、次世代エンジンの装備によってスーパーパーツなしでも高い宇宙航行能力を発揮する。

ガウォークモード

唄うことを第一とするサウンドフォースの性質上、VF-11MAXL改は戦闘中にガウォーク形態を用いるケースは少なかった。ファイターで移動してバトロイドに変形して唄う、というプロセスの一部としては見られたが、同形態をメインに戦う場面はほとんどなかった。しかし、惑星ラクスで行動した際には移動手段として同形態を頻繁に用いており、その特性は生かされていたと言える。また、同形態に限らないが、本機はVF-17Dと比較すると上昇力と機動力に優れ、武装と強度は劣っている。

バトロイドモード

VF-11MAXL改のバトロイド形態は、女性を模した外観が最大の特徴と言える。このデザインはミレーヌの要望によるもので、フェイス・プレートと胸部、臀部、脚部の外板プレートは超高級スポーツカーのカロッツエリアに特注して製作されたものだった。それだけに完成度は高く、本機を芸術品の域に達していると評する者もいたという。そうした外観の評価は別にしても、本機が特殊戦機に匹敵する性能を有していたことは事実で、対プロトデビルン戦においてそれを実証している。

▼スピーカーCLOSE時

▶VF-11MAXL改　ミレーヌ専用機

サウンドブースターセット時

サウンドブースターは、歌エネルギーを3次元空間で効率良く引き出すサウンドエネルギーシステム（サウンドエナジー変換システム）の効果を増幅する装置である。サウンドフォース専用機の追加装備として、Dr.千葉を中心とするマクロス7特殊技術班によって開発が進められ、マクロス7船団が惑星ラクスに滞留した際に実用化された。

サウンドブースターシステムOPENモード

サウンドイメージ増幅装置とサウンドエネルギー発振システムを搭載した2基のパネルが、可動アームによって180度回転し機体の左右に展開される。

▲サウンドブースター

▲ドッキングシステム

サウンドブースターシステムCLOSEモード

新コクピット

サウンドエナジー変換システムの完成に合わせて、各サウンドフォース専用機のコクピットは同システム対応型に換装され、VF-11MAXL改のコクピット構造も大きく変化した。従来のコクピットからの大きな改修点はサウンドエナジー変換バックパックが組み込まれたシート周りで、前面コンソールなどそれ以外の構造はほぼ変更されていない。この改修を機に、サウンドフォース各機が発揮する歌エネルギーは飛躍的に増大することとなった。

▼コクピット（ファイター／ガウォーク形態時）

▶エネルギー変換バックパック

▼コクピット（バトロイド形態時）

フォールド・ブースター

VF-11MAXL改をはじめとするサウンドフォース専用機は、2040年代初頭のスーパー・ノヴァ計画で実用化が図られたフォールド・ブースターを用いての単独フォールド性能を有していた。ただし、バロータ軍やプロトデビルンに狙われるマクロス7船団からサウンドフォースが離れるわけにはいかず、このフォールド・ブースターが運用されることはほとんどなかった。数少ない運用例としては、辺境惑星に向かったバサラを捜索した際に用いたケースが挙げられる。

⚠関連事項　EXTRA REPORT

VF-11MAXL改の変形機構

VF-11MAXL改の変形機構は、原型機であるVF-11のそれを踏襲しているが、主翼が幅広のデルタ翼となったため、バトロイドへの変形時には主翼部が大きく移動し、背部ユニットを構成する行程が加わっている。またVF-11はバトロイドへの変形時、露出した頭部が180度回転するが、VF-11MAXL改ではその行程はなく、代わりに頭部が露出した後、フェイスガードが展開する。

❶ 機首とその後方が展開し、胸部・腰部を構成していく。
❷ 胸部ユニットが前開し、頭部が露出する。
❸ フェイスガードが展開。
❹ 主翼が折り畳まれ変形が完了。

FBz-99G

機体解説

FBz-99Gは、崩壊したマクロス5船団の機体をベースとして、バロータ軍が独自の改造を加えた大型可変戦闘機である。その原型は2042年から配備が始まったノースロム社製の可変戦闘爆撃機VAB-2シリーズのティプロ、ゼントラーディ人パイロット用改修機と推定される。地球統合軍が培ってきた開発技術とプロトデビルンの未知の技術が融合した本機は、多数の兵器を搭載しており、原型機のコンセプトに沿って進化した機体であった。

テータ

※データは最終戦闘時のもの

- **所属** ▶ バロータ軍
- **全長** ▶ 19.18m
- **全高** ▶ 22.95m（バトロイド時）
- **全幅** ▶ 37.81m
- **空虚重量** ▶ 22,600kg
- **エンジン** ▶ 新中州重工/ダイムラー FF-2200G×4 ロイス/ダイムラー FR-60C熱核ロケットエンジン×2（バトロイド時機動補佐用）
- **巡航速度** ▶ M3.8+（大気中）
- **推力** ▶ 52,500kg×4（FF-2200G）、24,600kg×2（FR-60C）
- **武装** ▶ スピリチアスパーク砲×1、スピリチア吸収ビーム砲×1、対空ビーム砲×4、パルスビーム砲×2、マイクロミサイルランチャー×22、ロータリーミサイルランチャー×2、背部ミサイルランチャー×2 他

主要パイロット

ガビル

開発系譜図

VAB-2D ▶ FBz-99G

サイズ比較

VF-11
FBz-99G

統合軍戦闘爆撃機をベースとした
指揮官用大型可変戦闘機

Illustration by Hidetaka Tenjin

FBz-99G ザウバーゲラン

運用記録

FBz-99Gは2045年12月頃、バロータ軍の可変戦闘機部隊の指揮官機として戦場に姿を現した。以降、数度に渡りマクロス7船団を急襲し、サウンドフォースやダイヤモンドフォースらと交戦。その圧倒的な火力で船団の戦闘機部隊を苦しめた。なお、確認された機体は現在のところプロトデビルンのガビル専用機のみであることから、同機は指揮官クラスのパイロットに与えられた高級機であり、機体数はそれほど多くなかったものと推測される。

ファイターモード

「戦闘爆撃機モード」とも呼ばれる形態。元々ステルス爆撃機として設計されたVAB-2Dの豊富なペイロードを利用し、無数のビーム砲とミサイルランチャーを装備している。複数の[illegible]カレーザーを同時に発射できるだけの出力は、プロトデビルンの未知の技術によるものと推測される。

機体構造

武装

Ⓐ スピリチアスパーク砲

Ⓑ 隠顕式対空ビーム砲

Ⓒ マイクロミサイルランチャー

Ⓓ パルスビーム砲

Ⓔ ロータリーミサイルランチャー

コクピット

バトロイドモード

「重バトロイドモード」とも呼ばれる形態。パイロットの[illegible]、戦場では主にこの形態でドッグファイトを行っていた。非常に大柄で、VF-19のバトロイド形態の約1.5倍の頭頂高を誇る。両腕部内にパルスビーム砲を内蔵しているためか、VFの基本兵装であるガンポッドは装備していない(元々ガンポッドの運用が想定されていないとも推察されるが、あるいは操縦者のガビルの"美学"によりガンポッドを携行していないのかもしれない)。可動するメインノズルを利用し、空中静止や垂直上昇などのガウォーク的な立体機動も可能であった。

変形シークエンス(戦闘爆撃機形態➡重バトロイド形態)

シティ7民間車両

マクロス7船団で利用された船内外兼用車両

● 主要使用者
レイ・ラブロック

▼トレーラー型シャトル
[illegible]

▶トラック
[illegible]

▲大型トレーラー
[illegible]

機体解説

マクロス7船団では、船団内の各艦を行き来するために宇宙艇の機能を備えた車両が主な交通手段となっていた。その種類は実に多彩で、大型車から小型二輪車まで、用途に応じた様々な車両が利用されていた。ここで解説する民間用貨物型と宇宙用バイクもその一部であり、これらが宇宙空間ハイウェイ「ミルキーロード」を行き交う様は、マクロス7船団の盛んな都市活動を物語っていると言えるだろう。

▲宇宙用バイク
[illegible]

● 主要使用者
レックス

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶シティ7民間車両

運用記録

船内外兼用車両は、宇宙艇などと共にマクロス7船団の交通を担った。用途に合わせて車両をレンタルできるショップも存在し、Fire Bomberのレイ・ラブロックは、熱気バサラのVF-19改と共に船団内を移動するためトレーラー型シャトルを借りることもあった。一方、宇宙用バイクは熱気バサラと懇意にしていた女性バイカー集団「Teamレックス」が愛用、メンバーによってそれぞれタイプの異なるバイクが確認されている。

トレーラー型シャトル

窓が無い密閉式の牽引車とトレーラーを組み合わせた船内外兼用車両。Fire BomberはこのシャトルでバサラのVF-19改を運んだが、スリースターのライブではFz-109 エルガーゾルンがレンタル車に突っ込み、大破している。

カーゴ部分

▼展開時

カーゴ内部

◀コンソールパネル

▶エレベーター

キャビン

▲コンソール

大型トレーラー／トラック

大型トレーラーはスリースター～シティ7間などで利用されていたもので、トラックはFire Bomberのライブ機材を運ぶためにスタッフが用いた。貨物車ひとつを取っても多種多様な車両が存在していたのがわかる。

▶大型トレーラー

◀トラック

宇宙用バイク

Teamレックスのバイクは操縦性を重視したヨーロピアンタイプ（前傾姿勢で乗る形式）で、トレーラー型シャトルに車載されていた一般用は、スクータータイプである。

▼レックス用

▼ミク コレット用

▼ハーマン ティム用

▲▶一般用

シティ7民間車両

Fire Bomberのプロデューサー・アキコが所有していたスポーツカー。

▼アキコのスポーツカー

▼ミレーヌのオープンカー

▲ガムリンのスポーツカー

宇宙空間を走行できる ミルキーロード対応型車両

機体解説

複数の大型艦艇で編成された第37次超長距離移民船団マクロス7(マクロス7船団)では、人々が移動に乗用車を用いた。この時代に使われていた標準的な乗用車は、宇宙空間ハイウェイ「ミルキーロード」にも対応しており、艦内の移動だけでなく、艦と艦との移動にも使われた。民間人が所有する乗用車も大半がミルキーロード対応型となっており、その利便性は非常に高いものとなっている。

主要使用者

ミレーヌ・ジーナス　ガムリン木崎　北条アキコ

運用記録

マクロス7船団内では、商業用、民間用、軍事用として多数の車両が使われた。民間用はスポーツカータイプ、ワゴンタイプなど、そのデザインや機能も多彩で、単なる移動手段ではなく、ひとつの文化として成立していたようである。

船内では通常のエンジン、宇宙空間ではロケットエンジンを使用する方式となっている。また底部にVTOL用のスラスターノズルを備えるのが特徴である。

ミレーヌのオープンカー

フェリーニ社製のオープンカーで、マクシミリアン・ジーナスが、娘のミレーヌの誕生日にプレゼントしたもの。軽量小型なライトウェイトスポーツカー。

◀正面

▼後部

▲▶車体各所に宇宙空間用のバーニアを設置。また、雨天時や宇宙空間ではキャノピーでシート部を覆う。

[illegible]タイプであったミレーヌの愛車として、シティ7を駆け回る姿が確認されている。

ガムリンのスポーツカー

ガムリン・木崎が愛用するスポーツカーで、ガルウイング方式を採用している。車内には後方確認用のモニターも設置。

ガムリンがプライベートの足として使用。ミレーヌとのデートにも用いた。

▼底部
底部に設置されている円形のパーツは、飛行用のスラスターだ。

内部構造

天井部やバックミラー、ダッシュボード部分にモニターを設置。後方や周囲の状況を瞬時に確認できるシステムが組まれている。

◀ステアリング

▼天井部

▶ドア

◀車内

アキコのスポーツカー

北条アキコが所有するスポーツカーで、仕事とプライベート両方で利用した。小型で小回りの利くタイプとなっている。

▲底部

▶後部

売れっ子プロデューサーの移動手段として重用された。

スポーツカー

4～5人乗りのスポーツカー。モニターと車載電話を備えた仕様である。

◀車内
この時代の乗用車は左ハンドルが主流で、本車両も左側に設置されている。

ワゴン

6～7人が搭乗できるタイプで、荷物の運搬にも適している。こちらも様々なタイプが運用されていた。

レイ・ラブロックが所有するワゴン車。Fire Bomberの移動手段でもあった。

◀ワゴンB

▶ワゴンB内部

◀ワゴンC内部

◀ワゴンA

▼ワゴンA内部

▲ワゴンC

関連事項

EXTRA REPORT

スピリチア吸収装置付きワゴン

プロトデビルンが人類のスピリチアを奪うために使用した改造車両。専用のスピリチア吸収装置を装備している。

座席からスピリチア吸収装置が露出する仕組みで、ミレーヌらのスピリチアを狙った。

▼吸収装置

VF-17T改

機体解説

Fire Bomberのレイ・ラブロックとビヒーダ・フィーズが搭乗するサウンドフォースの特殊仕様機が、このVF-17T ナイトメア改（以下、VF-17T改）である。複座型練習機のVF-17T ナイトメアをベースに改造が施された本機は、サウンドフォース専用機として必要なサウンド・ジェネレーターや大気圏内用スピーカー・システムなどを標準装備していた。さらに、本機に搭載されたサウンド・ジェネレーターは同時期のバサラ機やミレーヌ機のものに比べて大出力かつ大容量で、2機に問題が生じた際にはこれをカバーすることを想定した設計であった。また、VFとしての基本性能はベース機であるVF-17Dとほぼ同等だったが、頑強な機体構造によって優れたサバイバビリティを誇る機体でもあった。

バサラとミレーヌを支えた サウンドフォースの要

データ

所属▶地球統合軍
全長▶16.13m
全高▶[illegible]（バトロイド時全高15.65m）
空虚重量▶[illegible]kg
エンジン▶新中州/P&W/ロイスFF-2100[illegible]×2
エンジン推力▶[illegible]kg×2
補助エンジン▶高機動バーニアスラスター P&W HMM-6D
最高速度▶M4.0+（標準大気圏内高度10,000m時）、M21+（高度30,000m以上時）
大気圏上昇限度▶[illegible]
武装▶内蔵式スピーカー・システム、スピーカーガンポッド標準装備、[illegible]×2、内蔵式マイクロミサイルランチャー×4

開発系譜図

VF-17D ▶ VF-17T ▶ VF-17T改

主要パイロット

レイ・ラブロック
ビヒーダ・フィーズ

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-17T ナイトメア改

運用記録

ゼネラル・ギャラクシーとマクロス7特殊技術部によって改造が行われたVF-17T改は、サウンドフォースの隊長に任命されたレイの乗機とされ、ビヒーダも同乗した。前線では、フォーメーションを指示すると同時にバサラ機とミレーヌ機をサポートすることが多く、精神操作を受けたバロータ軍兵士やプロトデビルンに効果を示すボーカルの2機に比べ、目立った戦果は挙げていない。だが、バロータ星系第4惑星への突入作戦をはじめとする激戦の中にあって陣の一角を守り続けるなど、サウンドフォースに欠かせない機体であった。対ゲペルニッチ戦でも陣で唯一無傷に帰還し、サバイバビリティの高さを証明した。

標準装備

サウンドフォース専用機への改造にあたり、多目的ガンポッドがスピーカー・ガンポッド(ランチャーポッド)に換装され、頭部レーザー機銃が廃された。ただし、ベース機のVF-17Tの固定武装である中口径レーザービーム砲と内蔵式マイクロミサイルランチャーは装備されたままとなっている。

▲スピーカー・ガンポッド

▶中口径レーザービーム砲

コクピット

コクピットは複座式で、前席がレイ用のキーボード型のサウンド・スティックコントロール、後席がビヒータ用のドラム型のサウンド・プレートコントロールという2種類の操縦系を採用している。基本的には前席のレイが操縦を担当したが、後席から機体制御も可能である(サウンド・プレートの設計は難航したと言われる)。また、のちにサウンドエナジー変換バックパックが組み込まれたシートへと改装されている。

◀サウンド・スティックコントロール

▶サウンド・プレートコントロール

ファイターモード

VF-17T改のファイター形態は、VF-17シリーズの特徴であるステルス性を重視したフォルムを踏襲しており、ベース機とほぼ同じ形状である。また、各種装備の追加によって機体重量が増大しているが、エンジンをVF-17Sと同じ改良型のFF-2100Xに換装することで機動性を確保している。

ガウォークモード

VF-17シリーズは肘部にレーザービーム砲を備えることから、ガウォーク形態でも腕部を折り畳んだ状態で運用されるケースが多い。VF-17T改は肘部のレーザービーム砲を使用したケースはなかったが、系列機同様、ガウォーク形態では腕部を折り畳んだまま運用されることがほとんどだった。スピーカー・ガンポッドを用いる際には腕部を展開する必要があるが、本機がガンポッドを使用するケースは少なく、サウンドフォースにおいてはガウォーク形態の必要性自体が他形態に比べて低かったとも考えられる。

バトロイドモード

バトロイド形態は、サウンドフォース専用機に共通する人間の顔のようなフェイス部と、VF-17シリーズから受け継いだ重装甲が特徴である。機体設計強度も+33.5G/−18.0Gと高く、サウンドフォース専用機の中でも突出した強度を誇った。また、バトロイドに変形して初めて胸部の内蔵スピーカー・システムが機能することから、この形態で戦闘に参加、つまり演奏することがほとんどだった。

▼VF-17T改

▼VF-17D

VF-17T改

バサラとミレーヌを支えたサウンドフォースの要

機体解説

サウンドフォースの専用機として改造されたVF-17Tナイトメア改は、機体内に搭載されたサウンドジェネレーターにより、単機でサウンドエナジーを生み出すことが可能であった。しかしながら同機の投入の時点でバロータ軍との戦闘が激化していたこともあり、VF-17T改は常に追加装備であるサウンドブースター3号機が帯同する形で運用されていた。サウンドフォースのバックアップを担当していたVF-17T改は、サウンドエナジーを発生させる機会は少なかったが、バロータ軍との最終決戦において大破した僚機を守るため、VF-17T改のコパイロット、ビヒーダ・フィーズがドラミングのみでサウンドエナジーを発生させる姿が目撃されている。

サイズ比較

主要パイロット

レイ・ラブロック

ビヒーダ・フィーズ

Illustration by Hidetaka Tenjin

▶VF-17T ナイトメア改

サウンドブースターセット時

VF-17T改は、サウンドブースター3号機とドッキングできる。その際には、時空共振型サウンドエナジー発振システムや2基の大出力サウンドエナジー変換増幅システムが使用可能となり、重量増加で機動性は低下するものの、VF-17S並みの水平速度を発揮できる。また、サウンドエナジー変換増幅システムの出力は3機の中で最も大きい。

サウンドブースターシステム OPENモード

▼▶双胴式のエンジンナセルを機間から分割されて機体に接続し、1基は機首部と共にサウンドエナジー発振システムのスピーカーとして働く。また、ブースター側のエンジン4基は本体の推進補助として稼働する。

▲サウンドブースター

サウンドブースターシステム CLOSEモード

ドッキングシステム

新コクピット

サウンドエナジー変換システムが完成、搭載されたことにより、レイとビヒーダの乗るVF-17T改の複座式コクピットも、他のサウンドフォース機と同じく、システムの運用に対応したタイプへと改修された。基本的なレイアウトに関しては改修前と同じだが、シートの背もたれにあたる部分がエネルギー変換バックパックを備えた仕様となっており、取り外しも可能となっている。また、その分離構造自体はVF-19改、VF-11MAXL改のものと共通の規格を採用していた。

コクピット全景

▶後方から見た新コクピット。システムの搭載により、シート形状が大きく変わっている。前席にあるサウンド・スティックコントロールの支持アームも確認できる。

サウンドエネルギー変換バックパックの基本的な構造はVF-19改やVF-11MAXL改のものと同じだが、細部は異なっておりサイズもやや大きい。

前席(レイ・ラブロック専用席)

後席(ビヒーダ・フィーズ専用席)

統合軍艦艇をベースとした バロータ軍の大規模艦隊

…であるマクロス7船団を狙い続けた。

◀艦隊旗艦宇宙空母

艦体解説

かつてプロトカルチャーを壊滅に追いやったものの、バロータ星系に封印されたプロトデビルン。復活した彼らはバロータ星系調査団と護衛のブルーライノセロス隊、さらにバロータ星系に植民を開始していたメガロード13の乗員などを洗脳して操り、バロータ軍を編成した。戦闘可能な人員だけでも数十万人規模とも言われるバロータ軍は、統合軍艦艇をベースに改修した大小500隻の艦船で、大規模な艦隊を編成。艦隊旗艦宇宙空母に常駐するゲペルニッチを最高司令官とし、プロトデビルンが生きるために必要とする生体エネルギー「スピリチア」の奪取に乗り出した。

AD.2045年、マクロス7船団と遭遇した彼らは、工作員を派遣するなど小規模な作戦行動を開始。のちにマクロス5船団をも取り込んで大規模化した艦隊は、惑星ラクスにおいてマクロス7船団との大規模な艦隊戦を展開した。

サイズ比較

SDF-1

判明している艦種

- ▶艦隊旗艦宇宙空母
- ▶護衛フリゲート艦

バロータ艦隊

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶バロータ艦隊

艦隊旗艦宇宙空母

もともとはバロータ星系移民を大規模な外敵から守るために設計、建造された、シティ7の半分ほどもある超大型艦隊指揮戦闘空母。単艦で大規模な艦隊に匹敵する攻撃力、戦艦並みの機動力と加速能力を備え、単独で小規模の(と言っても1,000隻以上となる)ゼントラーディ艦隊を壊滅する能力がある。

10ギガトンクラスの反応弾頭24個を搭載した対艦隊用超大型反応弾頭ミサイル8基を主力兵装とし、マクロス・キャノン8門を主砲として装備。他にも多数のビーム砲や近接ミサイル・ファランクスを各所に備えている。また、可変戦闘機を500機以上運用可能であり、これは通常規模の正規宇宙空母2～3隻に相当する。

●データ
全長▶[illegible]m
運用質量▶[illegible]
艦船最大加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
搭載武装▶対艦隊用超大型反応弾頭ミサイル×8、他多数
搭載機▶400～500機程度

新鋭巨大空母

バロータ軍が戦争最終局面で投入した新型の宇宙空母。バロータ軍は各戦闘艦に可変戦闘機を搭載していたが、最終的には専用空母の必要性を認め、急遽建造されたのが同艦である。

1,000mを超える大型艦であり、反応ミサイルランチャーや大口径ビーム砲、近接ミサイル・ファランクスなどを多数装備した同艦は、空母ながら重巡洋艦クラスの火力を有している。なお、200機程度の可変戦闘機を搭載運用するが、両舷に4基ずつの開閉式スクランブル・カタパルトデッキを備え最大24機の可変戦闘機を同時に射出することが可能であり、搭載数全機200機を展開するまで20分程度しかかからない。

●データ
全長▶[illegible]m
運用質量▶[illegible]
艦船最大加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
搭載武装▶反応ミサイルランチャー、他多数
搭載機▶可変戦闘機160～200機程度

ギギル艦

「ギギル艦」として知られるこの突撃艦は、標準戦列艦艦の設計を基に総合性能の強化を図った艦である。エネルギー転換装甲を重装し、大型ビーム砲を装備するが、運用重量が原型艦の倍以上になり、当初予定していた原型艦用エンジンの強化型では満足な速力を確保できなくなった。また、要求される出力も増大したため、新規設計のエンジンを採用した結果、原型艦の3倍を超える運用重量の大型艦となっている。優れた性能を有しているが、標準戦列戦艦の10倍以上という高コスト故に生産数は少なく、バロータ軍の保有数は12隻だったとされる。

艦隊を率いるギギル艦。小規模艦隊の指揮艦としても用いられ、バロータ軍の[illegible]として運用された。マクロス7船団においては先鋒として投入された。

●データ

全長▶[illegible]m
標準質量▶[illegible]
最高加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
武装▶大口径収束型ビーム砲×2、ミサイル×多数
搭載機▶60〜80機程度

◀艦首マーク

▼▶艦後方の上半部が格納庫区画で、艦尾開放部は格納庫のオープン式ゲートである。格納庫区画の下側がエンジン区画となっている。

ブリッジ

上がブリッジ内部の設定。下が操艦室を示した図。正面に投影型の大型スクリーンと、その前面に艦長席が位置し、両側に複座式のオペレーター席が並んでいる。

▲艦体は多面体構成のステルス形状で、武装はほとんどが内蔵式となっており、艦側面中央に大口径砲のレンズ部が露出している。

◀艦内に艦載機発進口を、前上部にイージスヘッドと呼ばれる索敵センサーを配している。また、艦体前方上下に位置するフィン状の構造物も格納庫である。

標準戦列戦艦

バロータ軍の主力艦として運用される量産型戦艦で、バロータ軍艦艇に共通する板状に配したエネルギー転換装甲を特徴としている。大量生産によって生産コストが抑えられており、運動性能なども同時期の地球側艦艇の平均的な水準に等しい。一方、当初のバロータ軍が専用空母を保有していなかったこともあって、本艦には最大40機程度の可変戦闘機を運用できる性能が付与されており、2〜3隻が共同作戦を行うことで正規空母に相当する艦載機展開能力を発揮した。なお、バロータ軍は57隻の標準戦列戦艦を保有していたと言われている。

マクロス7船団と交戦するバロータ軍標準戦列戦艦。小規模艦隊を構成する戦力として[illegible]運用[illegible]旗艦[illegible]機動[illegible]用いられた。

●データ

全長▶800m
運用質量▶16万t
最高加速▶調査中
エンジン▶調査中
フォールド・エンジン▶調査中
武装▶主砲×2、副砲×多数、対艦大型ミサイル×多数
搭載機▶30〜40機程度

◀艦首の艦載機発進口や艦体後部の形状は、突撃艦に継承された設計を窺わせる。

◀艦首艦載機発進口は左右開閉式となっている。また、艦体前面すべてが板状装甲の装甲で覆われている。

▶艦尾の開放部は、上下開閉シャッターを備えた格納庫ゲートで、下がエンジン区画の推進ノズル。

武装

A B C D

A 主砲

主砲は発射口が艦体側面の中央部左右に設置しており、偏向フィールドでビームを曲げて照射を行う。

B 副砲

艦体前部左右に4基ずつの副砲を備える。発射方式や発射口の突出した構造は主砲と同じである。

C ミサイル

艦底の下部ハッチ内の[illegible]ミサイル発射管で、1基につき9発の対艦大型ミサイルを内蔵する。

D カタパルト

艦前部上部VF/VA-109エルガーゾーン[illegible]の可変戦闘機用カタパルトで、艦前部から前方に射出する構造。

VF-22S

スーパー・ノヴァ計画から生まれた YF-21の制式採用機

機体解説

次期全領域可変戦闘機（AVF）開発計画「スーパー・ノヴァ計画」で開発されたYF-21を原型とする機体で、コンペティションでYF-19に敗れながらも高性能を示したYF-21の基本設計を忠実に受け継いでいる。一方で、原型機の特徴のひとつでもあったBDI（Brain Direct Image）システムは大幅に簡略化されており、有視界の手動操縦に対応したシステム変更がされている。また、ほぼ同時期に制式採用されたVF-19 エクスカリバーに比べて大型なことから武装搭載量に優れ、VF-19を凌ぐポテンシャルを持つとも言われる。バロータ軍との戦いで運用されたマクロス7船団のマクシミリアン・ジーナス（マックス）とミリア・ファリーナ・ジーナス専用のVF-22Sは、パイロットのネームバリューとそのカラーリングから、特に有名である。

データ
※データはファイター形態時のもの

全長▶19.62m
全幅▶15.36m
空虚重量▶9,340kg
エンジン▶新中州重工／P&W／ロイス FF-2450B熱核タービンエンジン×2
エンジン推力▶[illegible]
補助エンジン▶高機動バーニアスラスター P&W HMM-6J
最高速度▶M5.07（高度10,000m）、M22+（高度30,000m以上時）
大気圏上昇能力▶[illegible]
武装▶[illegible] BMM-24 [illegible] B-21A×4 [illegible] ハワード BP 140×2

サイズ比較

VF-1J
VF-22S

主要パイロット

マクシミリアン・ジーナス
ミリア・ファリーナ・ジーナス

開発系譜図

VF-11 ▶ YF-21 ▶ VF-22

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-22S シュトゥルムフォーゲルII

運用記録

VF-22はVF-17 ナイトメアに代わる特務作戦用の機体として少数の生産が承認され、2042年に制式採用された。マクロス7船団でも試験的にライセンス生産が行われ、マックス専用機として2機(1機は予備機)が工場艦で生産された。同機は「オペレーション・スターゲイザー」における敵拠点深部への単独突入など作戦時のコールサインは「ブルーゲイザー」。作戦の記録的な運用がなされた。また、予備機には最終決戦でミリア・ファリーナ・ジーナスが搭乗している。

標準武装

VF-22Sの武装はYF-21と同様で、固定武装として対空レーザー砲塔1基と半固定式のビーム砲2基を装備している。また、機体下面の収納式ウェポンベイには、高機動マイクロミサイルクラスターを始め、各種兵器パレットを収納できた。

▶多目的ガンポッド ハワードBP-14D

コクピット

操縦系のBDIシステムが簡略化されたことに伴い、コクピット構造も一般的なVFに近いシステムに変更された。なお、本機のBDIシステムはサブコントロールシステムとして機能し、高いGのかかる空戦機動時に火器制御やチャフ、スモークの使用などを補助した。

▼バトロイド時

▲ファイター ガウォーク時

ガウォークモード

VF-22はエンジンブロックと[illegible]が独立したYF-21の機体設計が踏襲され、ガウォーク形態もエンジンブロックが本体側に残る独特の構造を受け継いでいる。この構造はメインエンジンの推力の効率的な使用を可能にしており、従来のVFの同形態に比べて機動性に優れる。ただし、マックス機が運用されたケースでは高速戦闘を行うことが多かったため、ガウォーク形態を用いる場面はほとんどなかった。これは通常であればガウォーク形態を用いるような地形においても、ファイター形態のままでの高速移動を可能としたほどのマックスの高い技量によるところが大きい。

▶マックス機

▶ミリア機

ファイターモード

YF-21と同型のエンジンを搭載したVF-22Sは、原型機と同等の出力を有している。さらに本機の場合、BDIシステムの[illegible]略化と[illegible]センサー類の排除による軽量化がなされており、それによってファイター形態の水平飛行速度と機動性能が向上している。無論、その性能を十全に発揮するためには、パイロットの強靭な体力と高度な操縦技術が必要となる。

▼ミリア機

▲マックス機

▶三次元可変ベクタードノズル

バトロイドモード

BDIシステムを介して自分の身体を動かすようにバトロイド形態を操ることが可能であったYF-21とは異なり、BDIシステムを簡略化したVF-22は従来のVFと同じく基本的にはマニュアルで操縦した。BDIシステムの簡略化には、コスト削減やメンテナンス性の向上といったメリットもあるが、その背景には無人兵器の制式採用を狙うAI兵器推進派の圧力――ゴーストX-9を撃墜したYF-21の採用が、無人機不要[illegible]を引き起こす可能性を危惧していた――があったとされる。結果、BDIシステムを制限された本機だが、ゼントラーディ系技術の導入によって、高い格闘戦能力を発揮したYF-21のバトロイドの特性は受け継がれている。

◀マックス機

▶ミリア機

運用記録

C型はB型の実戦配備と並行して開発が進められ、2040年になってようやく第一線の部隊への配備が開始された。本機の代表的な配備先として、第37次超長距離移民船団（マクロス7船団）が挙げられる。なお、同船団が地球を出航した2038年の時点ではB型が主力機だったことから、航海の途中でC型の量産と配備が始まったと考えられる。また、2045年に発生したバロータ軍との戦闘では、C型がマクロス7船団の戦力の中核を担っていた。しかし、バロータ軍のVFの性能と物量には敵わず、大きな被害を出している。

標準武装

C型は固定武装の後方対空パルスレーザー砲1基と、B型とは異なるガンポッドを標準装備している。また、脚部ウェポンベイには大型ミサイルを搭載可能で、「オペレーション・スターゲイザー」では敵拠点の中枢を攻撃するための反応弾が装備された。

▼多目的ガンポッド

コクピット

コクピットの構造はB型と同じで、シート正面にメインディスプレイと左右に各種補助機器が配されている。また、VF-11はコクピットブロックが脱出ポッドとして機能する。

ファイターモード

VF-11Cのファイター形態の特徴として、他のVF-11シリーズ同様、カナード前翼と可変式主翼による高い機動性が挙げられる。また、大気圏外で運用される場合は、基本的に専用のスーパーパーツを装備する。大気圏外用とは別に、大気圏内用スーパーパーツも開発され、特殊作戦などに用いられた。なお、バロータ軍との戦闘においては、本来の機動性を発揮することなく撃墜されることも多かった。これは、マクロス7船団のVF部隊の練度が低かったためとも考えられる。

バトロイドモード

バトロイド形態の構造にB型からの変更は見られない。キャノピーカバーが変更された程度で、機体そのものの性能に限れば（アビオニクスの更新によって総合的な性能は向上しているが）、B型とほぼ同じである。ただしC型では、標準装備のガンポッドから銃剣が取り除かれており、この仕様変更はB型のガンポッド（GU-15）が高コストだったことに起因しているとも考えられる。これによってC型の近接戦闘能力はB型に比べると低下している点は否めず、実際にマクロス7船団における運用でもバトロイドで近接格闘戦を行ったケースはほとんど確認されていない。バトロイドは主に、乱戦時にガンポッドなどの射界を広く確保するために用いられることが多かったようだ。

C型での再量産にあたって改修が施されたスーパーパーツは、コストダウンのためかマイクロミサイルランチャー（HMMM-Mk6）の射出口が左右それぞれB型用の4基から2基に減らされている。これによりB型のスーパーサンダーボルトに比べて連射速度が劣るものの、基本性能に大きな違いはなかったと考えられる。

レドーム装備型

VF-11は搭載重量の大きさが特徴のひとつで、任務に応じた様々なオプションパックを装備できた。レドーム装備型はその一例で、本機が電子戦や偵察用の機体として運用できるだけの汎用性を有していたことを示している。また、レドーム装備機には、スーパーパーツやガンポッドも装備されており、標準装備機ほどではないが実戦にも耐えうる仕様だったと思われる。

▶VF-11改 サンダーボルト ジャミングバーズ専用機

運用記録

VF-11改を運用したジャミングバーズは、[illegible]

ファイターモード

時空共振型スピーカーシステムを搭載した大気内外両用スーパーパーツを搭載したファイター形態。このパーツは標準固定装備であり、サウンドフォース機用のサウンドブースターのようにパーツのみでの飛行はできない。パーツの強制排除は可能。

▲大気圏内用スーパーパーツ

バトロイドモード

サウンドブースターを開放する必要性から、ジャミングバーズによるこの機体の運用は「ファイターモードで前線まで移動、その後バトロイドモードに変形し、フォーメーションを組む」という流れが基本となっている。そのため本機がガウォークモードで運用されることは非常に稀であった。ファイターモードからバトロイドへの変形は、原型機のVF-11同様スーパーパーツを装備したままでも可能で、かつ短時間で変形を終えることができた(変形時間の短縮は、ガウォーク形態を経由しないため、腕部・脚部が同時にバトロイドに変形できたことも一因であった)。スーパーパーツのエンジンは、搭乗者の生命維持を優先した結果、緊急時に安定した加速で最大推力で離脱できるチューンとなっている。スーパーパーツ装備時の本機の燃料搭載量は、最大で5分間の最大推力での機動を行えたが、これは戦場からマクロス7へと帰還するのに十分であった。

サウンドブースター OPEN時

コクピット(ファイター時)

▶後部座席

▲キャノピーOPEN時

コクピット(バトロイド時)

VF-17

ステルス性能を追求した特殊作戦用重VF

主要パイロット

ガムリン木崎
金竜

データ

※データはファイター形態時のもの

全長▶15.63m
全幅▶14.11m
空虚重量▶13,950kg
エンジン▶[illegible]
エンジン推力▶[illegible]
補助エンジン▶[illegible]
巡航速度▶[illegible]
実用上昇限度▶[illegible]
武装▶[illegible]

サイズ比較

開発系譜図

VF-14 ▶ VF-17 ▶ VF-171

機体解説

VF-17はゼネラル・ギャラクシー社が開発した特殊作戦用の可変戦闘機で、「ナイトメア」のペットネームを持つ。敵拠点へのピンポイント攻撃など、当時の主力機であるVF-11 サンダーボルトでは困難な任務を想定して開発された機体で、通常装備のままでも、スーパーパーツと各種兵装を装備したVF-11を上回る戦闘力を有する。また、その運用目的からステルス性能が重視されているが、機体設計には高精度のアクティブステルス技術（YF-19、YF-21にて実用化）が未だ導入されていないため、外形は多面体ステルス構成となっており、「ステルスバルキリー」とも呼ばれる。シリーズ中でもっとも生産機数の多い標準的なタイプがVF-17D（D型）で、D型以上の性能を求めた改修機として、VF-17S（S型）が開発された。なおマクロス7船団では、VF-17はダイヤモンドフォース専用機として運用されている。

運用記録

VF-17の開発はゼネラル・ギャラクシー社が担当を行った。最初期のA型は予定していたエンジンの開発が間に合わず、出力不足のFF-2005Eを搭載したため少数の生産に留まり、そのアビオニクスを改良したB型も量産には至らなかった。この間に機種転換訓練用の複座機T型が開発された。VF-17が本来の性能を獲得したのは、C型に予定していたエンジンを搭載したD型からで、続いてここで紹介するチューン機のS型が開発された（各型合計の生産可能数は718機）。

標準装備

任務の性質上高い攻撃力が要求されたVF-17は、豊富な武装を有している。それらはステルス性を維持するために全てが内装式とされ、ガンポッドもファイター形態では機内に収納される。

コクピット

VF-17はステルス機としての機体形状の制限からキャノピーが小さく、それを補うためにコクピット内部の足元にスクリーンを配置していた。また、スロットルレバーをコクピット外枠に配するなど、内部のレイアウトも通常のVFとは異なっていた。

ファイターモード

ファイター形態はステルス性を重視した機体形状のために空力特性に劣り、大気圏内での運動性は高くなかった。しかし、新型の熱核タービンエンジン（FF-2100X）を有しており、宇宙では高い性能を発揮した。また、S型はエンジンが改良されており、D型より10%ほど推力が向上している。

ガウォークモード

VF-17はファイター形態での空力特性が低く、特に超低空での格闘空戦能力に劣っていた。そのため、大気圏内では主にガウォーク形態で運用され、高速戦用と格闘戦用の2種類のガウォーク形態で対処するように設計されている。こうした仕様はVF-17のみに見られるもので、本機の特殊性を表していたと言える。

バトロイドモード

VF-17はペイロード確保のために機体の大型化を図り、同時にバトロイド形態のエネルギー転換装甲も強化していた。こうした設計によってアーマード・バルキリーに匹敵する耐弾性を獲得しており、バトロイド形態では高い格闘戦能力を発揮した（設計にはVF-14バンパイアで得た大型機の開発ノウハウが活かされたと言われる）。また、マクロス7船団のダイヤモンドフォースに配備された機体には出力を20%向上させる改修が施されており、船団で運用された他のVFとの差別化が図られていた。

▲頭部

▲腰部

▲脚部

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-17 ナイトメア

VF-17S(ミリア機)

機体解説

ダイヤモンドフォース隊長の金龍がスピリチアを吸収され戦線を離脱した際、その乗機をシティ7の市長であるミリア・ファリーナ・ジーナスが赤く塗り直すよう指示し、自身の乗機としたもの（のちに再度塗り直され、ガムリンの乗機となる）。コールサインも金龍の「D1」を継承している。かつてエースの名を欲しいままにした彼女は、扱い技量が要求されるVF-17Sを難なく乗りこなしバロータ軍と渡り合った。

主要パイロット

ミリア・ファリーナ

バトロイドモード

ファイターモード

フォールド・ブースター

VF-17は、AVF開発計画時に設計されたVF用フォールド・ブースターを用い、単独でフォールド航行を行う能力を有していた。当時の同装備は未成熟で長距離での使用は危険と判断されていたが、ダイヤモンドフォースがこれを使用し、航行を成功させている。

レドーム装着タイプ

機体上部に大型のレドームを装備した、VF-17の早期警戒・管制・索敵タイプ。シティ7がバロータ軍によって強制的にフォールドさせられた際、その行方の手がかりとなる痕跡を探索するため、ダイヤモンドフォースの各機が使用した。

フォールド・ブースター

機体解説

優れたステルス性能と高い攻撃力が共存したVF-17 ナイトメアは、装備を追加せずとも大気圏外での運用が可能である。だが、プロトデビルンなどの強敵に対応する目的で、さらなる武装強化と航続距離の延伸を可能とするスーパーパーツがオプションとして用意されていた。この装備は、マイクロミサイルランチャーを設置したウェポンコンテナと、大口径ビーム砲を備えたエアインテーク付きブースターで構成されている。これらを装備した状態でもファイター、ガウォーク、バトロイド3形態への変形は可能で、VFとしての優れた汎用性は保たれたままとなった。

スーパーパーツ

ファイターモード

ウェポンコンテナとして設置された2基のミサイルランチャーは主翼下部に、ビーム砲は機体上部にレイアウトされた。また、ブースターの増強によって、機体全体のボリュームが通常時に比べ増している。

◀エアインテーク付きブースター [illegible]

バトロイドモード

バトロイドモードでは、大口径ビーム砲が肩部上に、マイクロミサイルランチャーは脚部にレイアウトされる。これにより、単機でも複数の敵に対応することが可能となった。

◀マイクロミサイルランチャーが露出した状態。ミサイルを全て発射した後はデッドウェイトとなるため、切り離し機構が備わっている。

▶サイドから見た図。スーパーパーツの装備によって、特に脚部が膨らんだフォルムとなり、重厚な印象を受ける。

運用記録

スーパーパーツは、ガムリン木崎率いるダイヤモンドフォース隊所属のVF-17に装備された。「オペレーション・スターゲイザー」では、プロトデビルンの眠る岡部に急襲を仕掛け、マイクロミサイルランチャーの一斉射などでガビルに迫った。また、ゲペルニッチとの最終決戦でも使用され、その高い攻撃力でマクロス7船団の防衛に尽力している。パーツを装備運用した回数は少ないものの、重要な局面では欠かせないVF-17の「切り札」であったと言えるだろう。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-17 ナイトメア

変形機構

　ステルス性能を得るために特殊なフォルムとなっているVF-17は、その変形機構にも独自の発想が加えられていた。特にファイター形態においてその独自性が顕著に現れており、まず通常のVFでは機体下部中央に設置されることが多い両腕部が機体上部にレイアウトされている。また、脚部が機体に対して90度回転する機構を有し、できるだけ機体がフラットになるような工夫がなされていた。これにより、機体の特性であるステルス性能を遺憾なく発揮したのである。

1 ファイターから脚部の変形

2 ガウォークの完成

A 腕部を左右に展開。レーザービーム砲がせり出す
B 脚部下ろす

2 脚部・機体後部・頭部の変形

3 腕部・胸部の変形

4 頭部・腕部・胸部・主翼の変形

5 バトロイドの完成

▶VF-19 エクスカリバー

運用記録

「シャロン・アップル事件」の影響などで「スーパーノヴァ計画」は一時的に凍結された。しかしのちに再開され、YF-19がコンペに勝利、「VF-19 エクスカリバー」として制式採用されることになった。本機は複数のバリエーションが生産されたことでも知られるが、本格的な量産体制に移行したのはF型の開発以降と思われる。マクロス7船団では2045年から逐次生産が進められ、当初はエメラルドフォースの専用機として配備されることとなった。なお、隊長機のS型はドッカー大尉が運用し、「E1」のコールサインで呼ばれた。

標準装備

武装の基本的な配置はYF-19と同じで、ピンポイント・バリア・システムも搭載されている。なお、S型はヘッドユニットに連装式の対空レーザー機銃2基（計4門）が増設されており、F型よりも高い火力を持つ。

▲多目的ガンポッド

▶後方対空ビーム砲
後方対空レーザー機銃

コクピット

コクピット構造はYF-19のものをほぼ踏襲しており、足元の内壁がスクリーンとして機能する点も同じである。また、高性能AIの支援によって操縦性の向上が図られている。

ファイターモード

ファイター形態の最大推力はYF-19よりも高く、原型機を上回る最高水平飛行速度を発揮した。その一方でスロットルのレスポンスが抑えられており、高機動性能をあえて低下させることで一般パイロットでも扱えるようにバランスが調整されていた。S型ではエンジンが新星 P&W ロイス製FF-2550Xに換装されており、新星 P&W ロイス製FF-2550Jを搭載したF型に比べて大気圏内飛行速度が向上している点も特徴である。

ガウォークモード

VF-19シリーズの変形機構はYF-19のそれをほぼ同じ形で受け継いでおり、本機のガウォーク形態の構造も原型機とほとんど違わない。重力下におけるホバー移動に代表されるガウォークの運用法も同様で、マクロス7船団が惑星ラクスに不時着した際には、エメラルドフォース所属のVF-19も本形態を度々用いている。ただし、他の形態に比べると使用頻度は低かったようである。

バトロイドモード

VF-19はピンポイント・バリア・システムの採用によって装甲の簡略化が可能となったことから、大型の機体でありながら軽量で、機動性と防御力の両立に成功している。バトロイド形態はその特性がもっとも顕著に表れており、エメラルドフォースでも本形態が多用されたようだ。特に、混戦が多かったバロータ軍との戦いでは、状況に応じて柔軟な対応が可能となる本形態を用いることがほとんどだった。

▶VF-19 エクスカリバー

大気圏内外両用ブースター

VF-19エクスカリバーには、オプションとして大気圏内外両用ブースターが用意された。これは、機体上面のブースターユニットとナセル側面の武装コンテナで構成される装備である。原型機のYF-19でも同様の部位に追加装備が開発されていたが、それとは形状やサイズが異なっている。アクティブステルス技術の進歩で外装ユニットの形状制限が緩和されたことや、ブースターユニットの基本性能の向上が求められたことなどが再設計の理由とされる。

ブースターユニット

武装コンテナ

バトロイド時レイアウト

ファイターモード

バトロイドモード

マクロス7船団

100万人規模の移民を支える 総合的機能を有した大型艦群

▲海洋リゾート艦リビエラ

●サイズ比較

艦体解説

2038年に地球を出航したマクロス7船団は、長期の宇宙航行を想定した生活環境の総合的な向上・改善がなされた移民船団である。同船団においては100万人規模とも言われる移民の生活を支えるべく、生産、研究、娯楽などに特化した機能を持つ6つの大型艦が随行し、その中核をなしている。海洋リゾート艦、工場艦、農業艦、アミューズメント艦、研究実験艦、統合軍司令部艦はそれぞれ全長約6,300～3,500mという巨大なもので、船団の中心的な居住地となっているシティ7にも匹敵する大きさである。なお、6つの艦はそれぞれ固有の機能を有しているものの、前線に立つことは想定しておらず、戦闘能力はないに等しい。そのため船団の後部に位置しているだけでなく、各艦の艦首や船体前部にはステルス護衛戦闘空母、あるいは護衛用フリゲート艦がドッキングして艦の護衛にあたっている。

●随伴している艦名

- ▶海洋リゾート艦リビエラ
- ▶工場艦スリースター
- ▶農業艦サニーフラワー
- ▶アミューズメント艦ハリウッド
- ▶研究実験艦アインシュタイン
- ▶統合軍司令部艦ヒギンヒル

6つの艦と[illegible]キーウェイと呼ばれる宇宙空間の交通網で結ばれ、容易に行き来ができる。

海洋リゾート艦リビエラ

巻き貝のような特異な外観を有し、中央部には直径3,600mにおよぶ人工海洋を湛える大型艦。人工海洋で養殖、飼育された新鮮な海洋生物を移民艦隊に供給しているほか、海洋設備の一部を高級レジャー施設として開放しているため「リゾート艦」とも呼ばれている。10km以上続く海岸の一部には高級リゾート「リビエラ」が広がり、ホテルやカジノ、別荘などが立ち並び海水浴客でにぎわっている。ちなみに、「リゾート」という性格上からか、配属されている軍の女性オペレーターは美人ぞろいであるとも言われている。

▲艦首には陸奥級 [illegible] SV404 URAGA [illegible]

●データ

全長▶約8,300m（衝角を含まず）
排水量▶[illegible]
乗員数▶約100,000人
亜光速最大速度▶[illegible]
エンジン▶オーデック [illegible] インパルス・ドライブ・クラスター
フォールド・エンジン▶オーデック [illegible]
設備▶リゾート施設、マリンパーク、水族館、海洋生物研究所等

工場艦スリースター

大型反応炉を中心に各種コンビナート、工場群、工場職員のための団地ブロックなどが組み合わされている大型工場艦。実用一点張りの設計がなされたため、もともと反応炉や加工ブロック、タンク、推進システムなどがむき出しで配置されていたが、頻繁な設備の改造増築にともない、ますます雑然とした外観となりつつある。移民艦隊が必要とする様々な製品を産み出す本艦は、宇宙塵や小惑星、航路近くの恒星系より回収した資源を精製加工し、小さい物は日用雑貨から、大きい物は可変宇宙戦闘機、宇宙戦艦まで作り出す能力を持っている。

●データ

全長▶約5,500m（双胴フォルム含まず）
排水量▶約59億5,000万t
乗員数▶約150,000人
亜光速最大速度▶[illegible]
エンジン▶オーデック [illegible] インパルス・ドライブ・クラスター
フォールド・エンジン▶オーデック [illegible]
設備▶[illegible] 超大型タンク等

マクロス7船団 護衛艦

移民船団の航海を守る 護衛艦隊の戦艦群

▲護衛戦闘空母　CV404 浦賀

艦体解説

未知の世界である銀河に漕ぎ出す超長距離移民船団には、不測の事態に対応できるだけの戦力が要求された。しかも、複数の非戦闘艦を擁する大規模移民船団の場合、必要とされる護衛戦力も必然的に大きくなり、さまざまな艦艇が船団に組み込まれた。2040年代には護衛戦闘空母やステルス空母、ステルスフリゲートなどおもに護衛を任務とする艦艇が、マクロス7船団をはじめとする移民船団に編成されている。各艦艇はいずれも第一次星間大戦時の統合軍艦艇から発展したもので、単独でのフォールド航行が可能となり、ステルス性能や艦載機運用能力も強化されている。これらの艦艇で編成された護衛艦隊によって、移民船団は守られていたのである。

判明している主な艦種

- 護衛戦闘空母　艦艇：BRANPTON
- ステルス空母
- ステルスフリゲート　ボロネー級／スターゲイザー

サイズ比較

EXTRA REPORT 関連事項

第5世代巨大移民船団での運用

2050年代末に航海を行っていたフロンティア船団にも、マクロス7船団での戦闘を生き抜いた浦賀、静岡といった艦艇が配備されていた。居住艦を中心に防衛ラインを形成する運用法も大きく変わっていない。

F

▲ウラガ級二脚式水宙両用空母

ウラガ級護衛戦闘空母

2段通甲板が特徴のステルス戦闘空母で、65～75機の艦載機を運用する性能を有する。また、巡洋艦クラスの戦闘能力を誇り、小規模艦隊の旗艦を務める機能も備えている。新鋭艦の部類に入り量産コストも高いため、マクロス7船団への配備は他に比べて少数にとどまる。船団中枢艦に連結した防衛ステーションとして運用される艦もあり、リゾート艦リビエラのCV404「URAGA（浦賀）」、アミューズメント艦ハリウッドのCV406「BRANPTON」などが同型艦として挙げられる。

●データ
全長▶約550m
運用重量▶[illegible]
戦闘時最高最大加速▶1.75G+
エンジン▶[illegible]
フォールド・エンジン▶[illegible]
標準武装▶[illegible]

グァンタナモ級ステルス空母

アームド級宇宙空母の設計を発展させたステルス艦で、アドバンス・アームド級とも呼称される。アームド級と同じく、戦闘機ドックに推進機関と戦闘用装備を追加したシンプルな構造が特徴で、生産性に優れている。さらに、40～45機の艦載機を搭載することが可能で、マクロス7船団では主力空母として運用されていた。また、ウラガ級と同様、中核艦の防衛ステーションを務める場合もあり、農場艦サニーフラワーにはCV299「グァンタナモ」がドッキングしている。

▲ARMD362 [illegible]

●データ
全長▶約352m
運用重量▶[illegible]
戦闘時最高最大加速▶1.45G+
エンジン▶[illegible]
フォールド・エンジン▶[illegible]
標準武装▶[illegible]

ノーザンプトン級ステルスフリゲート

移民船団護衛艦隊の主力を担うフリゲート艦で、機動力とステルス性能に優れている。配備数は非常に多く、戦闘力強化型や偵察型、早期警戒型などの改装艦も存在する。移民船団において最外縁の第1次防衛ラインの戦力として運用され、その内側の第2次防衛ラインを上記2種の空母群が担うケースが多い。さらに、移民船団の航路上を先行して監視を行う小艦隊「パイロットフィッシュ」や、物資確保用の惑星を探索する別働艦隊として運用されることもある。

●データ
全長▶[illegible]
運用重量▶[illegible]
戦闘時最高最大加速▶1.95G+
エンジン▶[illegible]
フォールド・エンジン▶[illegible]
標準武装▶[illegible]

マクロス7船団輸送機

民間用、軍事用を問わず
多数生産された輸送機群

▲大型輸送機

▼小型輸送航空機

機体解説

マクロス7をはじめ、数々の大型宇宙艦艇で構成される第37次超長距離移民船団（マクロス7船団）には、その広大な艦艇内や、艦艇と艦艇の間を行き来する移動手段が不可欠であった。艦艇間の行き来は、画期的な交通システム「ミルキーロード」の構築により、宇宙でも車輌での移動が可能となったが、航空機や輸送機といった移動・運搬手段も使用されていたのである。確認されているものでは、物資コンテナを搭載できる大型の宇宙用輸送機、バリア発生装置を運ぶ小型輸送航空機、可変戦闘機（以下VF）を懸架して運搬する輸送機などが民間・軍事の場で利用されていた。

マクロス5船団

居住可能な惑星ラクスを発見した ゼントラーディ人の移民船団

艦体解説

第35次超長距離移民船団として出航したマクロス5船団は、マイクローン化したゼントラーディ人で構成される移民船団である。旗艦のマクロス5（都市船部シティ5と戦闘艦部バトル5）のみならず、船団内の艦艇にも「ネオ・ノプティ・バガニス bis」や「ステルスフリゲート ゼントラン仕様」など、ゼントラーディ系艦艇特有の外観を有するものが多かった。なお、同船団は居住可能な惑星ラクスへの移民を開始した直後、バロータ軍の襲撃を受けて壊滅した。

判明している艦名

- マクロス5
- バトル5
- ネオ・ノプティ・バガニス bis
- ステルスフリゲート ゼントラン仕様

主要クルー

マクロス5船団長

サイズ比較

▶マクロス5

マクロス5

新マクロス級5番艦であり船団の中枢を担うマクロス5は、ゼネラル・ギャラクシー社と系列傘下の企業グループが主体となって建造された。移民居住船であるシティ5と超大型可変万能ステルス宇宙攻撃空母バトル5は、基本設計・スペックはマクロス7と基本同様であり細部においても同等の構造を持ちながら、ゼントラーディの技術に通じたゼネラル・ギャラクシー社製のパーツを多用しているため、ゼントラーディ系艦船特有の外観を持つ部分が方々に見られる。ちなみに、マクロス5船団の総司令官もゼントラーディ人が務めている。

[illegible]

●データ
全長▶約2,720m
全幅▶[illegible]
全高▶[illegible](アンテナ、タワー等含まず)
運用重量▶[illegible]
乗員▶[illegible]
主動力▶OTMマクロス熱核反応エンジンマトリックス
主推進系▶OTMマクロス/ヒートパイルクラスターシステム
フォールド・エンジン▶OTMマクロスフォールドエンジンクラスターシステム

[illegible]

バトル5

超大型可変万能ステルス宇宙攻撃空母であるバトル5は、バトル7と同様に強攻型に変形(トランスフォーメーション)可能。変形後の両腕部に相当するステルス宇宙空母部分は、非常時には切り離し各個独自に運用でき、フォールド航行も可能である。また、船体下部に備えられた全長695m、全備重量250万tのガンシップは、バトル5変形後はガトリングバスターキャノンとして手持ち射撃が可能。さらに単艦での独自運用、バスターキャノン発射が可能となっている。なお、バトル5もシティ5と同様に、細部のディテールはゼントラーディ系艦船特有の外観を持っている。

[illegible]

[illegible]

●データ
全長▶1,510m
全幅▶[illegible]
全高▶[illegible](アンテナ等含まず)
運用全備重量▶[illegible]
主動力▶OTMマクロス熱核反応エンジンマトリックス
主推進系▶OTMマクロス/ヒートパイルクラスターシステム
フォールド・エンジン▶OTMマクロスフォールドエンジンクラスターシステム
武装▶[illegible]ミサイルランチャー/近接防御用マイクロミサイルファランクス砲多数

ステルスフリゲート(ゼントラン仕様)

ゼントラーディ人のみで構成されたマクロス5船団で用いられた、ゼントラン仕様のステルスフリゲート。マクロス7船団で用いられたタイプと構造・性能面での違いはほとんどなかったが、ゼントラーディ用の装備を追加しているため、ブリッジなどの形状が異なるほか、マクロス7船団で運用されたタイプよりも重量が約110t増加していた。艦は通常タイプのほか、ステルス構造を活かした早期警戒タイプや偵察型などのバリエーションが存在する。

[illegible]

レーザーセンサー

艦体底部に設置されているレーザーセンサー。敵艦の位置を把握するためなどに用いられた。

ブリッジ

[illegible]部分がブリッジ本体で、その側面に複数のアンテナやレーダーを設置している。

◀側面

[illegible]

データ

全長▶[illegible]250m
[illegible]▶[illegible]310t

▲上部

[illegible]

EXTRA REPORT

関連事項

マクロス7船団のステルスフリゲート

マクロス7船団において用いられたステルスフリゲートは、ノーザンプトン級に分類されている。こちらも船団の防衛ラインには欠かせない戦力として、大量に配備されている。

[illegible]「スターゲイザー」などが代表的な艦である。

[illegible]

▲ステルスフリゲート(マクロス7船団仕様)

[illegible]ゼントラン仕様とは異なるものの、その構造自体はほぼ同じだと言える。

ステルスフリゲートのブリッジ部。[illegible]他の艦へと移動できる。

ブリッジの内部構造を示した図。[illegible]

ネオノプティ・バガニス bis

中型艦隊の指揮用として建造されたネオノプティ・バガニスbisは、第一次星間大戦ではブリタイ・クリダニクの乗艦としても用いられたノプティ・バガニス級の改修タイプである。地球側の技術を様々な箇所にフィードバックし、新たに組み立て直された本艦は、エンジン部分の改造をはじめ、ブリッジの増設やアンテナ類の追加などが行われている。これにより、ノプティ・バガニス級が元来持つ優れた耐久性を維持しつつ、より運用性が良好な艦として生まれ変わっている

▶側面

▼後部

●データ
全長 ▶ 約4,000m
[illegible] ▶ 1,880万t

関連事項

マクロス5市民が収容されたドーム

プロトデビルンの拠点、バロータ第4惑星内に建造されていたドーム。人間を生体のまま保存できるカプセルが山型に設置されており、バロータ軍に捕らわれたマクロス5船団の市民たちが収容されていた。

EXTRA REPORT

▲ドーム底部

◀マクロス5の市民たち

◀カプセルユニット

クァドラン・キルカ

●主要パイロット
エミリア・ジーナス

機体解説

クァドラン・キルカは、ゼントラーディ婦人士官用機動戦闘倍力服であるクァドラン・ローの改造機で、出力と武装を強化したタイプとされる。機体構造を大きく見直して武装や高機動ノズルを増設し、原型機譲りの高機動戦闘能力と火力の増強を両立させている。また、原型機と比較して20%ほどの性能向上を実現しており、一説にはクァドラン・シリーズ最強の機体とも言われる。エミリア・ジーナスの乗機が知られ、彼女の機体にはスモークの噴射装置が装備されていた。

●データ
所属▶
全高▶調査中
全備重量▶調査中
エンジン▶調査中
推力▶調査中
最大速度▶調査中
標準武装▶ [illegible] モーターキャノン/ [illegible] 高機動ミサイルランチャー×2

●サイズ比較

●開発系譜図
クァドラン・ロー ▶ クァドラン・キルカ

孤高の歌姫が駆った クァドラン・ローの改造機

Illustration by Hidetaka Tenjin

▶クァドラン・キルカ

機体解説

クァドラン・キルカは、高級機種として知られるクァドラン・シリーズの中でも、特に確認されている数が少ない機体である。近代の運用の実績に関しては、サウンドフォースと接触したエミリア・ジーナス搭乗機程度しか残されていない。第一次星間大戦の時点で、ヴィンテージ級の機体である本機は、そもそも大量生産されておらず、実戦には数機が投入されたのみであるとも言われている。

エミリア・ジーナスは、彼女が辺境惑星で敵の偵察行をしていた際に、ブルーとグレーのカラーリングの本機を移動用に使用していた。プロトデビルンの襲撃を受けた際には、熱気バサラのVF-19改 ファイヤーバルキリーと共闘し、歌の力でガビグラゴを撃退するものの、機体は大破している。

機体構造

腰部を省略した胴体に四肢と巨大なバックパックを加えた基本的な機体構成はロー型と同じだが、本機は各部ユニットを大型化することで機内容積を確保し、性能強化に必要な様々な装備を追加している。それに伴い各部の形状も変更されており、原型機とは大きく異なるフォルムとなっている。

▲頭部

武装

原型機と同様に、高い機動性で格闘戦を展開するという戦闘スタイルを継承していたと考えられる。本機の各所に搭載された固定武装は、基本的には原型機であるクァドラン・ローを踏襲しており、胸部に大型の火器、腕部にガトリング砲、背部、脚部にミサイルポッドという配置となっている。胸部の大型砲は、メイン・ブラスター、大口径モーター・キャノン、それにサブ・ガンという複数の火器による構成となっており、格闘戦で肉薄した敵機を確実に仕留められる火力を与えている。

A メイン・ブラスター

B 大口径モーター・キャノン

C サブ・ガン

D ガトリング砲

E ミサイル

▶ミサイル

▶展開時

ハッチ開閉シークエンス

胴体部にパイロットが搭乗し、前面装甲がハッチを兼ねるコクピット周りの構造は、ロー型から変更されていない。ハッチの開閉構造も原型機と同様で、頭部と肩部の装甲と胸部内側のコネクターパネルが開閉する。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VT-1C

運用記録

惑星ゾラでも、民生用として複数機のVT-1Cが導入されていたようで、熱気バサラが辿り着いたゾラの港町の倉庫内にも、過去に捕鯨用として運用されていたとおぼしきVT-1Cが保管されていた。これらの機体に目を付けた銀河クジラの密漁団は、ゾラ市街地を内偵し、民間企業や個人所有の機体を強奪することで戦力の増強を図っていた。

ゾラの漁師グラハム・ホイリーが保有する機体は、彼が妻マリア・ホイリーと共に搭乗していた機体を形見として保管していたものであるが、カスタム化によりスーパーパーツ装備状態ならば単機での大気圏離脱も可能となっている（オリジナルのVF-1はスーパーパーツ装備状態でも大気圏離脱は不可能だった）。熱気バサラは銀河クジラに会うためにこの機体を持ち出しているが、特に不具合もなく運用できていたのを見ると、事前にグラハムがメンテナンスし燃料も入れていたものと推測される（銀河クジラに立ち向かう際、予備機として用いるつもりだったと思われる）。

ファイターモード／武装

民生化にあたり大型のキャノピーに換装されており、ファイター形態での良好な視界を確保している。宇宙空間での運用を想定し、機体上部、エンジン側面に燃料タンクを兼ねたスーパーパーツを装備しているほか、主翼端に各種姿勢制御用推進機を備える。

▲グラハム・ホイリーが保管していた機体

◀ゾラの港に保管されていた機体

▼ガンポッド

ガウォークモード

ゾラの捕鯨用VFは、ファイターモードで大気圏離脱・突入を行い、バトロイドモードで捕鯨を行うのが基本的な運用方法であり、中間形態であるガウォークはさほど活用されていない。ゾラの未開地などを移動する際に使用される程度であるという。

バトロイドモード

民生用に改修された本機だが、バトロイドへの変形機構はそのまま残されている。民生用の機体であるため、バトロイドの頭部にセットされていたレーザー機銃は外されており、背部・脚部に装備されているスーパーパーツも、ミサイルなどの武装類はセットされておらず、純粋に大気圏離脱用のブースターおよび増槽として使用される。また本機は通常のVF-1に比べ、機首（バトロイドの股間部）が短くなっているが、これは機首に内蔵されていた戦闘機用のレーダー、センサー類を外し、民生向けの整備が容易な機器類と外装に換装されているためである。

主武装であるハープーンガンは、ガンポッドの炸薬を利用し、ワイヤー付きハープーンを射出する。ゾラでの捕鯨は、大型の母船あるいは複数の艦船、VFがこうしたハープーンを銀河クジラに打ち込み、ワイヤーで牽引してクジラの推進を停止させる方法が主流であるようだ（クジラを停止させる推力のない小型機の場合、ワイヤーでの牽引でクジラの推進ベクトルを変え、ゾラへ落下させるものと推察される）。

関連事項 EXTRA REPORT

密漁団に奪取されたVT-1C

ゾラの港町に保管されていたVT-1Cは、バサラが同惑星を訪れた際、銀河クジラの密漁団によって奪取されている。その後、同機体が密漁団に運用されたところは確認されていないが、彼らは奪取したVFを独自に改良して使用していたことから、VT-1Cも同様の扱いを受けたものと思われる。

関連事項 EXTRA REPORT

2040年代のVF-1

最初期のVFであるVF-1シリーズは、メンテナンスに手がかかることなどから、2040年代に入る頃には完動品の数は激減していたと言われている。とはいえ、熱気バサラが放浪していた2040年代中頃でも、VF-1は民生用や作業用、あるいは辺境惑星の守備隊の配備機など、まだそこかしこで運用され続けていたようである。なお、グラハムと妻、マリア・ホイリーが搭乗していた機体は、元々は軍から払い下げられた機体であり、頭部のレーザー機銃が残されていたほか、スーパーパーツも軍用のものに近い形状となっていた（おそらくは銀河クジラを狩る際に必要な火力を求め、原型機に近い仕様の機体を入手していたのだろう）。のちにバサラが搭乗した際にはVT-1Cの外観となっていたが、これはなんらかの事情で大破したこの機体を、VT-1Cのパーツを用いてグラハムがレストアしたものと思われる。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-5000

惑星ゾラの空を守る 新星インダストリー 初の可変戦闘機

機体解説

スターミラージュのペットネームで呼ばれるVF-5000は、VF-1バルキリーを基本にゼントラーディの技術を取り入れて開発された新星インダストリー製の可変戦闘機である。傑作機VF-1の設計に改良を加えることで低い生産コストに比して良好な性能を獲得した本機は、VF-4ライトニングIIIに代わる統合軍の主力機として2020年代後半から運用が行われた。だが、既存の設計概念からの脱却を果たしていなかったが故に、2030年のVF-11サンダーボルトの登場を契機に第一線から退くこととなる。しかし、コストパフォーマンスの高さから惑星ゾラなどの辺境では2047年時点でも運用が続けられている。

データ

サイズ比較

VF-1J
VF-5000

開発系譜図

VF-4 ▶ VF-5000 ▶ VF-11

主要パイロット

パトロール隊隊長
ライザ・ホイリー

STARMIRAGE

VF-5000 スターミラージュ

運用記録

VF-5000の開発は、新中州重工とストンウェル・ベルコム社の共同計画に沿って2011年に始められた。しかし、翌2012年には両社の航空機開発部門が合併して新星インダストリーとなったため、本機は同社が手がけた初めての可変戦闘機として完成することになった。その基本コンセプトは大気圏内での高機動性とステルス性にあり、可変攻撃機(VA)の支援と制空戦闘に主眼を置いて設計されていたと言われる。なお、ここで解説するのは2040年代後半に惑星ゾラの自治政府で運用されたG型のパトロール隊仕様機である。武装は致死性の低いものに変更されているが、機体の基本性能に軍用との大きな差異はない。

標準装備

対空パルスレーザー砲

頭頂部に対空・自衛用のパルスレーザー砲を1門備える。複座機のT-G型(右図)は頭部ユニットの構造が大きく異なり、レーザー砲も2門となっている。

▲G型

▲T-G型

ショックガンポッド

惑星ゾラのパトロール隊の機体はショックガンポッドと呼ばれる特殊武装を装備。これは麻痺弾で目標の自由を奪う武器で、弾丸の衝撃によるダメージ効果もある程度は期待できる。形状はVF-1のガンポッドに酷似しており、銃身先端上部に照準センサーを備え、尾部のフィンはファイター形態時の整流板となる。

コクピット

コクピット構造はVF-1から大きく変わっていないが、窓枠のないキャノピーと着座位置の高いシートによってパイロットの視界を広げる設計がなされている。また、キャノピー投影型HUD(ヘッド・アップ・ディスプレイ)や後方に30度傾けられたシートなど、操作性への配慮が見られる。

◀エジェクション・シート(前)

▲スロットル・レバー

▲エジェクション・シート(後)&サイドスティック

▲操縦桿

ファイターモード

VF-5000のファイター形態は、ブレンデッド・ウィング・ボディ構造によって大気圏内の空力特性を向上させると同時に、直線的な平面構成を多用してステルス性を高めている点が特徴である(レーダー反射を抑制するステルス塗装も併用されていたと言われる)。また、可変翼機構が採用されており、VF-1の設計が生かされていることがうかがえる。

ガウォークモード

偶然の産物として生まれ、VF-1の変形パターンに取り入れられたガウォーク形態は、当然ながらVF-5000の変形機構にも継承されている。ただし、前述したように本機は飛行性能に重きを置いた機体だったこともあり、ガウォーク形態の重要性が高かったとは言えないだろう。ゾラのパトロール隊の場合は、密漁団の取り締まりが、主に銀河クジラが回遊する衛星軌道付近で行われるため、ガウォーク形態での運用機会はそれほどなかったようである。

バトロイドモード

VF-5000がVF-1の設計を踏襲していることは、外観にベース機の印象を残すバトロイド形態からもうかがい知ることができる。ただし、垂直尾翼を挟んだ前腕部の装甲構造や内蔵式マイクロミサイルポッドといった独自の構造が盛り込まれており、運用性の向上に繋がっている。また、軍とは違って犯罪者の拘束を主な任務としていた惑星ゾラの銀河パトロール隊にとっては、目標の無力化や捕縛に適したバトロイドはきわめて有用な形態だったと言えるだろう。

VF-5000 スターミラージュ

大気圏内外両用ブースターパック

惑星ソラのパトロール隊が運用していたVF-5000スターミラージュには、オプションパーツとして大気圏内外両用ブースターパックが用意されていた。このブースターパックは、マイクロミサイルランチャーを先端に備えた単発式のブースターと脚部プロペラントタンク兼マイクロミサイルポッドで構成されており、非装着時に比べ、宇宙、地上双方での機動性・機体制御能力が大幅に向上する。銀河クジラ対策を主とするパトロール隊にとっては欠かせないパーツで、隊長機、一般機に関わらず本ブースターパックを装着し、出撃していた。

宇宙空間を飛行するブースター付のスターミラージュ。パトロール隊は本ブースターパックを出撃時の標準装備としていたようだ。

大気圏から離脱を図るウィザ標準のスターミラージュ。ブースターパックを搭載することで、大気圏離脱も容易に行えるようである。

ブースターパックを装備した状態で大気圏内に突入するスターミラージュ隊機。ブースターパックは突入時の衝撃に耐えうる構造となっていた。

ブースターパック本体

機首部分がブースターパック本体。先端にショック弾タイプのミサイルを装備する。後方には大型のメインスラスターノズルと、その両側にラムジェットインテークを設置する。

プロペラントタンク兼マイクロミサイルポッド

プロペラントタンク兼マイクロミサイルポッドとして機能する脚部パーツ。両脚の外側に1基ずつ設置されている。

ファイターモード

ブースターパック装着時のスターミラージュ。機体中央にブースター本体が設置されているのがわかる。

▶ラムジェットエンジンの採用によって、ブースター本体はシンプルな形状となった。

▼機体上部に備えた2基の支持プレートによりブースターパックが設置されている。

▲▶大気圏内での運用を想定していた機体のため、宇宙での運用時はブースターパックの装備が必須であった。脚部にもプロペラントタンク兼マイクロミサイルポッドを装備する。

バトロイドモード

◀▲ブースターパック装着時のバトロイド形態では、ブースターの先端が突き出た形状となる。また、バトロイド形態では、支持プレートが引き込まれるため、ブースターパックは機体に密着する。

M メカニックシート

▶VF-5000 スターミラージュ

VF-5000G 一般機

機体解説

スターミラージュには、単座型のG型と複座型のT-G型の2種があるが、G型の中にも隊長機、一般機の2タイプが存在する。ライザ・ホイリーら、パトロール隊の一般隊員が運用した一般機は、隊長機とフェイスゴーグルの形状が異なっている。性能面における違いはほとんどなかったと見られ、大気圏内外両用ブースターパックや時空共振スピーカーシステムを設置することが可能となっていた。

大気圏内外両用ブースターパックを装着した[illegible]

一般機で使用し[illegible]フェイスゴーグル[illegible]レーザー・バルスガン[illegible]隊長機と共通している。

パトロイドモード

◀▼フェイスゴーグルが[illegible]型となっているのが一般機の特徴。[illegible]

◀ブースターパックを装備した一般機。VF-11の流れを汲む基本設計により、安定性に優れた機体となっている。頭部のカラーリングが一般機と異なる機体も確認されている。

VF-5000T-G

VF-5000T-Gは、VF-5000の複座タイプで、パトロール隊が運用していた。複座型への改修でコクピット部が広くなっているほか、単座型では1基であった頭部のレーザー・バルスガンが2基となっており、戦闘能力が強化されている。銀河クジラ対策や対密漁団戦でも少数ながらその姿が確認されている。

銀河クジラの[illegible]T-G型も大気圏内外両用ブースターパックを装備して出撃している。[illegible]

ファイターモード

▶コクピットがG型よりも大きく、2名のパイロット[illegible]。[illegible]大気圏内外両用ブースターパックも装備可。

パトロイドモード

[illegible]

レーザー・バルスガン[illegible]G型と同様である。

時空共振スピーカーユニット

▲▶ガウォーク形態となったT-G型。変形機構や性能面において他のタイプとの違いはほぼない。図のように、機体の上に時空共振スピーカーを搭載することができる。スピーカーユニットはG型にも搭載可能。

ガウォークモード

変形シークエンス（ファイター形態→ガウォーク形態）

VF-1の強化発展型として開発され、惑星ゾラの銀河パトロール隊にも配備されたVF-5000 スターミラージュは、変形シークエンスにおいてもVF-1の流れを汲むものとなっている。だが、パーツレイアウトなど機体細部はVF-1と大きく異なっているため、新たな要素が加えられている。中でも、ファイター形態からガウォーク形態に変形する際に、腕部パーツによって尾翼を挟み込む機構などは本機ならではのものと言える。

1 脚部の変形

2 腕部の変形

3 腕部変形の詳細

4 ガウォーク形態へ

VF-5000 スターミラージュ

変形シークエンス(ガウォーク形態→バトロイド形態)

VF-5000Gのバトロイド形態は、背部ブロックが両翼部と推進ノズルの3つのパーツに分割された、特殊な構造となっている。これらのパーツ群はバックパックに備えた2基の回転ヒンジによって接続、可動する方式であり、ガウォーク形態からの変形時に使用された。また股関節部にも、脚部の屈伸やひねりといった細かな挙動を実現するヒンジが2基設置されており、バトロイド形態時の運動性を確保していた。

1 各部の変形

▼全身

インテークカバー

▼後方1

回転ヒンジ

▶後方2

▼側面

▼側面(ファイター時)

時空共振スピーカーユニット

惑星ゾラのパトロール隊と密漁団との最終決戦時には、パトロール隊のVF-5000全機に時空共振スピーカーユニットが装備された。

▼ファイターモード(VF-5000G)

▼ガウォークモード(VF-5000T-G)

時空共振スピーカーユニット

◀▼バトロイドモード(VF-5000G)

2 バトロイド形態へ

パトロール隊母艦

治安維持任務を支援する パトロール隊の多目的艦

艦体解説

統合軍に協力する形で惑星ゾラの治安維持に従事した銀河パトロール隊は、VF-5000スターミラージュを主力機として運用すると同時に、それをサポートする艦艇を併用して宇宙海賊の取締りなどの任務にあたった。このパトロール隊母艦は水上航行が可能で海洋面積が広い惑星ゾラでの運用に適していただけでなく、大気圏内外の航行能力も有していた。ただし、戦闘艦としては小型で非力であったため、VFの運用を支援する補助艦艇という役割が本艦の真髄だったと言える。

データ

所属▶調査中
全長▶調査中
全高▶調査中
基準重量▶調査中
[illegible]▶調査中
エンジン▶調査中
標準武装▶調査中

サイズ比較

Mechanic Sheet

メカニックシート

パトロール隊母艦

運用記録

銀河辺境の第67惑星宙域に位置する惑星ゾラでは、銀河クジラと呼ばれるエネルギー体が衛星軌道に1年周期で回遊してくる。その時期には銀河クジラの捕獲を図る密漁団が横行し、ゾラ自治政府の銀河パトロール隊はその取り締まりに追われることになる。パトロール隊母艦が運用されるケースは、主に衛星軌道上での密漁船団の逮捕時で、VF各機に随伴して後方から支援を行った。戦闘に加わることは少なかったが、逮捕した容疑者の収容や負傷者が出た場合の応急処置と搬送など、VFだけでは対応しきれない作業に携わっている。2047年に熱気バサラがゾラを訪れた際にも、衛星軌道上での密漁船取り締まりに出動し、逮捕した密漁者を護送した。また、宇宙に放り出され、隊員のライブ・ホイリーに救助されたバサラを収容し、隊本部まで搬送している。

機体構造

本艦は地球製と言われているが、構造は統合軍艦艇などと大きく異なり、平面と曲面を組み合わせた独特のフォルムを有している。これは、水上艦としての設計が取り入れられているためと思われる。

艦内治療室

任務中に負傷者が出た場合に備え、艦内には治療室が設けられ、医師も乗艦していた。本格的な医療行為は難しいものの、患者の状態を診断する機器が備えられ、治療カプセルによる延命処置が可能となっている。ちなみに、バサラも一時はこの治療室に収容された。

▲艦内治療室

パトロール艇

広大な海を有するゾラでは公民問わず船舶が盛んに用いられ（ボート[illegible]のオート3輪なども[illegible]していた）。パトロール隊も通常の警らには高機動小型艇を運用した。しかし、凶悪化する密漁団に対しては[illegible]不足となるケースもあったようだ。

VA-3C改 INVADER

Illustration by Hidetaka Tenjin

機体解説

可変戦闘機（VF）とデストロイド双方の特性を持つ、統合軍の可変攻撃機（VA）――その代表的な機体であるVA-3 インベーダーは、汎用性の高さから複数の派生機を生んだ。中でも、このVA-3C改は[illegible]の銀河クジラの密漁団によって運用された異色の機体として知られる。その体内から宇宙船を動かすためのエネルギーが採取できる銀河クジラの捕獲という特殊な用途のため、本機にはモリの射出機構を追加したガンポッドが装備されるなど、目的に合わせた改修が施されている。また、原型機の特徴である耐弾性とサバイバビリティの高さも受け継いでおり、VFとの戦闘も可能であった。

データ

●データはアタッカー時のもの

- 全長▶16.20m
- 空虚重量▶13,290kg
- エンジン▶新星 P&W CH-3FF(X)20AG×2
- 最高速度▶M2.7
- 武装▶パルスレーザー砲×2、多目的ガンポッド、ハイマニューバミサイル×6、マイクロミサイル×12 他

開発系統図

VA-3C ▶ VA-3C改

サイズ比較

VF-1J
VA-3C改

銀河クジラの密漁団が運用したVA-3シリーズの改造機

VA-3C改 インベーダー改

運用記録

VAは地上制圧用の機体として開発され、VA-3シリーズも移民船団などに広く普及していた。中でもこのVA-3C改は、惑星ゾラの密漁団がブラックマーケットに流れた機体を入手、改造を施した機体と言われる。密漁団は惑星ゾラの軌道付近を回遊する銀河クジラを獲物とし、大型母船を中心に本機を運用して密漁を行っていた。その規模と練度は軍隊に匹敵したとも言われ、密漁を阻止しようとした惑星ゾラのパトロール隊を翻弄した。

標準武装

密漁団は銀河クジラの捕獲だけでなく、治安部隊などとの戦闘も想定していた。そのため、本機は捕獲用装備と通常武装の両方を備えている。前者は銀河クジラを捕獲するためのワイヤー付きのモリで、ガンポッドが射出装置を兼ねている。また、後者には両腕部に内蔵されたパルスレーザー砲とマイクロミサイルランチャーが挙げられる。なお、原型機VA-3は武装搭載量の多さが特徴のひとつだったが、VA-3C改が外装式のミサイルなどを用いたケースは確認されていない。

コクピット

VA-3シリーズには、電子戦機のEVA-3Aのように複座型の機体も存在するが、VA-3C改は一般的なバリエーションと同じく単座型となっている。コクピットは機首部に位置し、前方の視認性に優れる。なお、軍用のVA-3シリーズは地上攻撃用のFCS（Fire Control System　射撃管制装置）を搭載しているが、本機も同様のものを装備していたかどうかは不明である。

関連事項

EXTRA REPORT

全領域で運用された、VA-3M

VA-3シリーズには、水上航行や水中潜行が可能なVA-3Mも存在する。全領域攻撃機であるこの機体は、一部の特務部隊に配備されたほか、2050年代末に航海中であったマクロス・ギャラクシー船団などでも運用されたと言われている。

アタッカー形態(左)では、飛行艇の特性を有しており、主翼下ポッドは方向舵付きのフロートを兼ねる。ガウォーク形態(中央)では、機体後部を脚として展開し、推進器を変形させている。バトロイド形態(右)は脚部の構造が他のバリエーションと異なっている。

アタッカーモード

VFのファイター形態に相当するVA-3シリーズのアタッカー形態は、統合戦争以前の艦上攻撃機（A-6 イントルーダー）に近い機体形状を有している。本機も基本的なフォルムに変更はなく、他のバリエーションと比べると主翼下ポッドの形状や接続方式が異なる程度である。また、VA-3シリーズは大気圏内、特に低高度での安定性と機動性を重視した設計がなされている。ただし、密漁団は宇宙空間で活動することがほとんどだったため、本形態の性能が発揮されることは少なかった。

フォールド・ブースター装備

密漁団はフォールド航行で惑星ゾラの衛星軌道に侵入し、密漁を行っていた。VA-3C改もフォールド・ブースターを装備し、母船に随伴することが多かった。

バトロイドモード

VA-3シリーズは航空機としての性能はもちろんのこと、地上戦を想定していたことからバトロイド形態の防御力も重視されている。VFシリーズとは異なる変形構造が採用されており、バトロイド形態はゼントラーディの戦闘ポッドに近いフォルムを持つ。VA-3C改のバトロイドも同様で、ヘッドユニット部の複合センサーの形状などを除いて構造は他のVA-3シリーズと共通している。密漁団は主に本形態で運用しており、パトロール隊VFとの交戦でも安定した性能を示している。

連携行動による戦法

密漁団はVA-3C改を大量に投入してパトロール隊を圧倒し、銀河クジラを捕獲する際には複数機から連続して銛を発射、動きを止める戦法を用いた。各機の連携行動については高いレベルにあったと言える。

VF-22S

特殊作戦用として蘇った ゼントラーディ系技術採用機

●主要パイロット

ガムリン木崎

●サイズ比較

機体解説

AVF（Advanced Variable Fighter）開発を巡る「スーパー・ノヴァ計画」での競合試作において、YF-19に敗れたYF-21であったが、アクティブステルス能力、ペイロード能力が評価され、特殊作戦機VF-22Sとして少数が制式採用された。YF-21からの主な改修点として、その最大の特徴である脳波操縦システムBDI（Brain Direct Image）の大幅な簡略化と、それに伴う手動操縦システム対応コクピットへの換装が挙げられる。これらの変更により、莫大なコストの削減と、機器の簡略による軽量化に成功した。なお、ペットネームの「シュトゥルムフォーゲルII」は、ドイツ語でウミツバメなどの海鳥を意味する。

●データ ●データはファイター形態時のもの

所属▶統合軍
全長▶19.62m
全高▶[illegible]
全幅▶[illegible]
空虚重量▶[illegible]
エンジン▶[illegible]
最大速度▶[illegible]
推力▶[illegible]
標準装備▶[illegible]

●開発系譜図

YF-21 ▶ VF-22S

Mechanic Sheet

メカニックシート

VF-22S シュトゥルムフォーゲルII

運用記録

マクロス7船団とプロトデビルンとの戦役が終結した翌年の2047年、行方不明となっていた熱気バサラ捜索のため、マクロス7船団のガムリン木崎大尉がVF-22Sで惑星ゾラに向かっている。同機のカラーリングは、バロータ戦役時の乗機VF-17Sに近い、濃いグレーの地に黄色のラインであった。ガムリン大尉はゾラを訪れた直後、惑星軌道上におけるゾラ駐留部隊と宇宙クジラ密猟団との戦闘に参加。無数の密猟団のVA-3部隊を、ガンポッドと頭部レーザービームガンで瞬時に無力化していく。大尉の乱入は、非致死性兵器しか装備していないゾラ星パトロール隊のVF-5000部隊にとって、またとない応援であった。この事件においてVF-22Sはガムリン大尉機しか確認されていないが、同時期にダイヤモンドフォースの僚機もVF-22に乗機転換していたと推察される。

標準武装

マクロス7船団では、バロータ戦役の際、船団内の工場艦でライセンス生産されたVF-22Sがごく少量導入されていた。ダイヤモンドフォースのVF-22も、引き続き工場艦で生産されたものが配備されていたようで、機体の仕様および基本的な武装は先行導入型から変更されていない(ダイヤモンドフォースの僚機に関しては、S型ではない仕様の機体が配備された可能性はある)。武装は、YF-21から受け継がれたGV-17Lカートレス・ガトリング・ガンポッドと、機体上面(バトロイド形態時は両前腕に配置)のレーザービームガン2門、それに頭部の対空ビーム砲1門。加えて機体内のウェポンベイにマイクロミサイルを装備するのが標準的な仕様となる。

エリコーン AAB-7 対空ビーム砲

他機種の頭部レーザー機銃と同系列の装備。ブレード型であるため固定式のアンテナに見えるが、基部には可動域があり射角も広い。主にファイター、ガウォーク形態での対空牽制に用いられる。

ヒューズ/GE GV-17L ガンポッド

YF-21と同系のカートレス式ガンポッドで、2門が標準装備されている。手持ちで使用しない時は、大腿部パネル(ファイター形態では下部パネル)に固定された状態で運用された。

コクピット

先行導入されていたマックス機と同様、コクピットはマニュアル操縦を主とし、補助として脳波操縦システムを備えた仕様となっている。脳波操縦用に、シートには脳波操縦用無接点コネクタを備える。バトロイドモードでは、キャノピーがカバーで覆われる一方、操縦席が後方に90度回転し、操縦席周りのレイアウトも変更される。

サブモニター

バトロイドモード

ファイターモード

ガウォークモード/バトロイドモード

低空飛行、ホバー走行用のガウォーク、格闘戦闘形態のバトロイド共に、YF-21と同じ変形システムを受け継いだ。クァドラン・ローなどのゼントラーディ系バトルスーツと似たスタイルや、脚部に主機関を搭載しない点もYF-21と同様となっている。相違点と言えば、操縦システムの変更に伴うメインカメラやキャノピーの形状程度であり、それ以外のシステムや機体特性はほぼそのまま継承された。なおガムリン大尉はバロータ戦役当時は、ファイターモードで戦闘の中心まで突貫し、その後バトロイドにて周囲の敵機を撃墜するという戦法を得意としていたが、ゾラでの対密猟団戦でも同様の戦法を採り、周囲を制圧。本機のバトロイドの格闘戦性能の高さを証明した。

ファイターモード

高機動形態で、ガムリン大尉は通常の宙間移動や惑星ゾラからの離脱などに使用した。フォールド・ブースターもこの形態で使用する。原型機であるYF-21に匹敵する高い機動性を秘めているが、脳波操縦システム(BDI)は簡略化されており、あくまでパイロットの補助用として機能する程度となった。このことから、YF-21ほどの能力を引き出すのは極めて難しいとされる。

キャッチャーボート

グラハムが運用した 宇宙"捕鯨"船

[illegible]

●主要パイロット
グラハム・ホイリー

艦体解説

銀河クジラの捕獲を目指すグラハム・ホイリーが、宇宙への航行手段として用いたのがキャッチャーボートである。巨人化したグラハムに合わせた大きさの漁船と、ブースターを設置した大型の宇宙船がドッキングしたような構造で、大気圏の離脱・突入が行えた。銀河クジラの捕獲用として、漁船船首に捕鯨砲「ハープーン」を備えているほか、宇宙船部分にはフォールド・システムを搭載しており、フォールドも可能な多機能船となっている。

[illegible]

[illegible]

CATCHER BOAT

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-19P

機体解説

次期全領域可変戦闘機（AVF）として傑出した性能を見せたYF-19は、ピーキーな機体特性を緩和して安定性を向上させることで、一般パイロット向けの制式採用機VF-19シリーズへと発展した。そのバリエーションのひとつがVF-19Pである。本機は固定武装の強化に主眼を置いた改良がなされ、機体は一般量産機のVF-19F エクスカリバーよりも、先行試験用改造機のVF-19改（通称「ファイヤーバルキリー」）に近い構造を有している。また、ピンポイントバリア・システムやアクティブステルスなど、YF-19に導入された各種の新技術は本機にも継承され、VF-19系列機の名に恥じぬ高性能を備えていた。

主要パイロット

熱気バサラ

サイズ比較

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶地球統合軍
全長▶[illegible]
全高▶[illegible]
全幅▶[illegible]
空虚重量▶調査中
エンジン▶調査中
最大速度▶調査中
推力▶調査中
標準装備▶マウラー RÖB-30G対空レーザー機銃、マウラー RÖB-23改固定レーザー機銃×2、マイクロミサイル、他多数

開発系譜図

VF-19 ▶ VF-19 ▶ VF-19P

AVFの血統を受け継いだ VF-19系列機

VF-19P エクスカリバー

運用記録

VF-19シリーズの配備は高コストやパイロット養成の難しさから少数に留まり、VF-19Pも運用されたケースをほとんど確認できない。貴重な一例が、惑星ゾラの銀河パトロール隊用に、スピーカーユニット装備の改修が施された1機である。同機は、その頃にゾラを訪れていた熱気バサラが乗り込み、パトロール隊と密漁団の交戦の中で銀河クジラとのセッション（コミュニケーション）を試みた。密漁団が反応弾を使うという想像以上の激戦だったが、機体は無事に帰還した。事件後は、マクロス7のレイ・ラブロックにレンタル料を請求するように告げ、そのままバサラが操縦してゾラを去っていった。

ファイターモード／武装

時空共振スピーカーユニット

パトロール隊に協力する科学者ローレンスが銀河クジラとのコミュニケーションを実現するため、パトロール隊のVF-19Pの両肩部に合計8基のスピーカーを装備した。マクロス7船団のDr.千葉が提唱した歌エネルギー理論が採り入れられている。

操縦方法

操縦システムは通常のVF-19を踏襲するものだが、搭乗したバサラはギターを抱えたままこれを操縦した。バサラの愛機・VF-19改がギター型コントロールスティックを搭載した特殊な機体であったことが、その理由であろう。とはいえ、バサラのギターはVF-19Pと接続されているわけではない。あくまでギター本体で物理的にスティックを操作することにより、ナーバスなVF-19Pのコントロールを実現している。

ファイターモード／武装

ファイター形態はVF-19系の前進翼のシルエットを継承するが、VF-19SやVF-19Fでは廃されたカナード翼を備え、また機体下部にはベントラルフィンが設けられている。本機の特徴はこのベントラルフィンと、時空共振スピーカーユニットであろう。また、ホワイトを基調としたカラーリングであるものの、そのシルエットはバサラがかつて乗っていたVF-19改を想起させる。VF-19系の特徴である運動性の高さを誇るが、それゆえに扱いが難しい側面もある。惑星ゾラの銀河パトロール隊では、導入を検討していく段階にあったが、バサラが持ち出したことで計画は中断した可能性もある。

ガウォークモード

ガウォーク形態の構造もVF-19改とほぼ同じで、機首から主翼の部分はファイターの構造を残したまま脚部を変形させ、腕部を主翼部前方に展開させる。なお、バサラが搭乗した機体はファイターで大気圏離脱を行ったのち、すぐにバトロイドへと変形したため、ガウォークはほとんど用いていなかった

バトロイドモード

VF-19Pはその用途上、特にセンサー機能の強化が図られた。その結果である前面の大半を透過バイザーとしたモニターヘッドユニットが、ほかのVF-19系の機体とは一線を画すバトロイド形態の特徴となっている。また、後頭部と側面に3門のレーザー砲を装備する点は、バサラの愛機・VF-19改を連想させる。白い銀河クジラとのコミュニケーションを図る際には、バトロイド形態で群れの前に立ちはだかった。その後、密漁団の反応弾に対して白クジラが散布した花粉を浴び、機体が真っ赤に染まる。その姿は、かつてバサラが運用していたVF-19改をほうふつとさせるものであった。

密漁団艦艇

▶密漁団母艦(カリバ船)

艦長
カリバ

多数の艦艇のほか、統合軍の機体を改造したVA-3C改インベーダー改も運用した密漁団。軍隊のように組織化されており、番犬パトロール隊を悩ました。

白い銀河クジラ捕獲に執念を燃やすカリバ母艦で執拗を仕掛けたが、同宙域にいたグラハム・ホイーラーに阻止された。

銀河クジラの捕獲を目論む大規模密漁団の艦艇群

機体解説

植物性の構造を持つ星間物質で構成されたエネルギー体「銀河クジラ」。その巨大生命体が惑星ゾラ周辺宙域を回遊する時期には、同時に大規模な密漁団が出没する。高額で取引される銀河クジラの捕獲を目論む密漁団は、密漁を取り締まるパトロール隊との交戦も想定し、武力を所持。銀河クジラ捕獲用の巨大モリだけでなく、対空パルスレーザー砲、対空ミサイルランチャーを備え、さらには反応弾までも入手した母艦(カリバ船)を中心に、充実した武装を持つ艦艇を多数擁した。その全戦力は、VF部隊を持つパトロール隊を凌駕するものだったとも言われている。

▶密漁団艦艇

運用記録

2047年、惑星ゾラ周辺宙域に現れた密漁団は、数度に渡りパトロール隊と交戦しつつ、銀河クジラの捕獲を試みた。しかし、白い銀河クジラによる妨害や偶然惑星ゾラに居合わせた熱気バサラらの横槍を受け、その目標を達成することはできなかった。

密漁団母船のカリバは、長期に渡って密漁の常習をするために銀河クジラを捕獲。白い銀河クジラを排除して密漁を円滑にするために、反応弾も準備していた。

Ⓕ格納庫

大型の格納庫。筒状の船体中央部が8分割されている。通常時、格納庫入口は左右にスライドする扉で閉じられている。

▼壁面

Ⓖブリッジ

右舷に巨大モリが装填されたカリバ。カリバは様々な計器が並ぶこのブリッジ内から、密漁団を指揮する。なお、同船の巨大モリ発射装置には、ほぼ同型の反応弾も装填可能となっている。

密漁団母艦(カリバ船)

大型の密漁団母船。銀河クジラの捕獲を前提としつつ、対艦戦も想定したと思われる独特の武装を持つ。構造的には銀河クジラも収容可能な筒状の大型格納庫と、中央に張り出したブリッジ部が核となり、巨大モリ、対空パルスレーザー砲、対空ミサイルランチャーといった武装のほとんどは、格納庫外周に設置されている。その特異な外観は、同時期の統合軍艦艇には見られないものだった。

Ⓐ対空パルスレーザー砲
Ⓑ対空ミサイルランチャー

銀河クジラへの攻撃と、対艦戦も想定したと考えられる大型の対空パルスレーザー砲。対空ミサイルランチャーも2基設置。

Ⓒ巨大モリ・自動発射装置

銀河クジラ捕獲時に使用する巨大モリ。船体の舳部が巨大モリの弾倉となっており、モリは4基の発射装置へと自動的に装填される。さらに、ブリッジ右舷の自動発射装置にも同型のものが装備されている。

Ⓓバトロイド用フォールドグリップ

船体の外周部には、フォールド航行時にVFのバトロイドがつかまるグリップが設置されている。

Ⓔ威嚇用砲塔

威嚇用砲塔。砲撃手が透明のキャノピーに覆われた銃座に配置される。小型の密漁団所有船の砲塔とほぼ同型のものだ。

▶正面　▶側面

密漁団小型艦艇

密漁団が有する艦艇の多くは、密漁団所有船、密漁団偽装船等のように小回りの利く小型艦艇であった。しかし、銀河クジラの捕獲補助、あるいはパトロール隊との交戦を想定していたためか、それらは押しなべてレーザー砲やミサイルで武装されていた。

一部の密漁団小型艦艇は、密漁団母船に先駆けて惑星ゾラや周辺宙域に潜伏。母船との合流を待たずに、銀河クジラの捕獲を試み、パトロール隊と交戦した。

密漁団偽装船

▼通常時はゾラの海上を航行し、漁船の体を成している密漁団偽装船。惑星ゾラには、同様の偽装船が多数入り込んでいたようだ。

▼▶密漁団偽装船の水面下の一部は、本来の船体がむき出しになっている。正体を現すと、下部にレーザー砲やミサイルランチャーを備えた小型艇となり、密漁団として幅広く活動する。

密漁団所有船

▲▶船体両舷にモリを装備し、上面中央部にはキャノピーに覆われた銃座を備えた密漁団所有船。銀河クジラの捕獲補助をメインとする船と考えられる。

◀▼船体両舷に可動式のモリ発射装置を備えた密漁団所有船。艦首部に備えられたレーザー砲は、パトロール隊との交戦も想定した武装だろう。

惑星ゾラの乗り物

自然と調和した惑星で使用された 陸・海の移動手段

◀水陸両用オート三輪

機体解説

銀河の辺境にある惑星ゾラは、地球人とは異なる種族である「ゾラ人」が住んでいた。彼らは移動を図ってきた地球人を受け入れ、友好な関係を築いたが、その技術力に関しては、積極的に取り入れることをしなかった。自然との共生を好むゾラ人は、環境破壊の危険性を孕む高度な文明化を選ばず、住環境の工業化・機械化を必要最低限に留めていたのである。ゾラの人々が日常生活で使っていた船舶や乗用車などは、地球側から見れば「レトロ」な乗物に過ぎなかった。だが、彼らのスローライフを支える移動手段としては十分だった。

主要使用者

エルマ・ホイリー

バトル級を発展させたフロンティア船団の中核

機体解説

マクロス・フロンティア船団の中枢を担うバトル級ステルス可変戦■空母重改装型で、略称および船体番号は「BATTLE25/MF25-01」。平時は都市船のアイランド1にドッキングしており、新マクロス級25番艦(アイランド・クラスター級とも分類される)「マクロス・フロンティア」の戦闘区画として運用される。移民船団の規模拡大に伴って戦闘・指揮能力の向上が求められたことから、本艦には初期のバトル級を超える重改装が施されており、指揮能力や火力、艦載機運用能力などすべての面において性能が強化されている。強攻型と要塞艦の変形構造も有し、2050年代の新統合宇宙軍が保有する戦闘艦の中でも屈指の戦闘力を誇った。

サイズ比較

SDF-1　バトル・フロンティア

データ

所属▶新統合軍
要塞艦時／全長▶1681m（アンテナ等含まず）　**全幅**▶521m
強攻型時／全高▶1186m　**全幅**▶747m
全備重量▶16550000t
主動力▶熱核反応エンジンマトリックス
主推進器▶OTMマクロスヒートパイルクラスターシステム
高機動ブースター▶核パルスロケットエンジンマトリックス
フォールドシステム▶OTMマクロスフォールドエンジンクラスターシステム
兵装▶ガンシップ・アドバンスタイプ×1／連装誘導対艦重ビーム砲×12／単装重ビーム砲×24／近接ビームファランクス多数／対艦用反応弾頭ミサイルランチャー多数／近接防御用マイクロミサイルファランクス多数
艦載機▶可変戦闘機、可変爆撃機、偵察機、輸送機など最大合計約750機搭載可能

開発系譜図

▶ バトル・フロンティア

艦長

新統合軍司令

▲バトル・フロンティア（強攻型）

マクロス・フロンティア

Illustration by Hidetaka Tenjin　CG Works by Masato Takahashi

マクロス・フロンティア

運用記録

2041年に第55次超長距離移民船団の護衛艦として地球を発ったバトル・フロンティアは、銀河中心宙域への航海の只中にあった2059年にバジュラと遭遇。本艦はその状況において、頻発する戦闘に対応するために護衛艦隊の指揮を執った。バジュラと交戦しながらの超長距離フォールド作戦では、船団を襲撃するバジュラ群を主砲で掃討し、フォールドの糸口を作った。また、バジュラ母星の戦闘でも護衛艦隊を率いてバジュラとギャラクシー船団に相対し、バトル・ギャラクシーを撃沈するなどの戦果を挙げている。

超長距離フォールド作戦において、空母形態で主砲のマクロス・キャノンを発射するバトル・フロンティア。

バトル・フロンティアの戦闘ブリッジ。バジュラ母星の戦闘では、参加全部隊の中枢として機能した。

関連事項

EXTRA REPORT

政府機能も司った移民船団の頭脳

平時におけるバトル・フロンティアは、武官の最高位にある新統合宇宙軍派遣艦隊司令が管轄し、艦長が艦の運行を担った。しかし、船団の最高権力者はあくまで大統領であり、緊急時には政府機能が移設された。大統領が本艦から船団全体の指揮を執ることもあった。どのような事態であっても、本艦の最終的な権限は大統領が握っていたのである。ハワード・グラスの跡を継いだレオン・三島も、バジュラ母星における戦闘などの重要局面ではブリッジに籍を移し、戦況を見守っていた。

バトル・フロンティアから指揮を執るハワード・グラス大統領(左)と艦長(右)。

レオン・三島はバジュラ母星の戦闘を指揮している最中に、S.M.Sの糾弾を受けて失脚した。

強攻型

機動戦闘を要する緊急の場面で運用される強攻型は、ステルス性維持のために内蔵されていた全兵装と、腕部によるガンシップの使用が可能となる。また、強攻型への変形所要時間は初期のバトル級より短縮されている。

バジュラ母星の戦闘では、ガンシップを失いながらも近接戦闘に持ち込み、バトル・ギャラクシーを撃沈した。

◀同形態時には主反応炉が戦闘出力で稼動し、主要ブロックの強化型エネルギー転換装甲が機能する。

◀脚部外殻に超小型反応弾を用いた核パルスロケットブースターを備え、緊急時の姿勢制御などで高い機動性を発揮する。

主補の熱核反応エンジンで稼動するピンポイント・バリアや全周防御スクリーンを備え、防御力にも優れる。

要塞艦

要塞艦はトランスフォーメーションにも転用されるブロック構造の艦体を特徴とするステルス空母である。艦体は戦闘指揮空母(強攻型胴体)、ステルス中型空母×2(同腕部)、中型突撃戦艦×2(同脚部エンジンブロック)、重砲撃艦(ガンシップ)の計6隻で構成される。

船団内外からバジュラに襲撃された事件では、アイランド1から分離し、空母型で外部からのバジュラを迎撃した。

◀基本的な艦体構造は初期のバトル級に準じ、ブロック構造による高い生存性を誇る。また、各ブロックを個別の艦艇に分離して宇宙機動艦隊を構成し、作戦行動をとることも可能である。

アイランド1とドッキングしたまま、ガンシップを展開する空母型。この状態でも主砲の発射は可能となっている。

▲艦後部に片側4基の主熱核反応エンジンと片側10基の補助熱核反応エンジンを備え、運用重量の増加を出力強化で補っている。

武装

バトル・フロンティアは、ガンシップ・アドバンスタイプの超大口径ビーム砲「マクロス・キャノン」を主装備とする。ガンシップは艦内に超大容量エネルギーキャパシターと急速エネルギーチャージ用の大出力反応炉、補助エネルギーチャージ用熱核タービンエンジンを備え、単体での連続射撃が可能である。さらに、バトル・フロンティアの主動力炉からエネルギーを供給すれば連射速度を向上させられるが、砲身や粒子加速器システムを冷却する必要から回数には制限が課せられる。そのほか、副砲に複数の重ビーム砲を備え、多数の近接ビームファランクスや反応弾頭ミサイルランチャー、近接防御用マイクロミサイルファランクスを有する。そのため、同時期の艦艇の中でも突出した火力を有していた。

マクロス・キャノン(メガ・マクロスキャノンとも呼ばれる)は一射でバジュラ群を殲滅するほどの威力を誇った。

連装誘導対艦重ビーム砲を連射しながら前進する強攻型。砲塔の下方には補助飛行甲板が位置している。

ビーム砲塔

中央ブロック(戦闘指揮空母)の胸部と肩部に計12基の連装誘導対艦重ビーム砲を、エンジンブロックに計24基の単装重ビーム砲を装備している。これらは艦体分割時の武装としても使用される。

ガンシップ・アドバンスタイプ

ガンシップ・アドバンスタイプは、艦の大半がマクロス・キャノンの構造部で構成されているため、乗員区画は極端に狭い。また、単艦でのフォールド航行も可能である。全長655m、運用重量300万t。

マクロス・キャノン発射時には艦体が上下に展開して砲身が露出する。

ステルス中型空母

強攻型腕部のステルス中型空母は改装によって格納容積が拡大されており、最大で約750機の艦載機を搭載できる。また、飛行甲板は強化型エネルギー転換装甲で構成されている。

艦橋

初期のバトル級以上の指揮管制能力を要求されたバトル・フロンティアは、改装時に艦橋部に巨大なC4コントロールホールを増設している。これにより、本艦はフロンティア船団の航行管制や護衛艦隊の指揮を一括で管理できる能力を獲得している。また、ランカ・リーの歌がバジュラに対して効果があると判明したのちは、ブリッジ下部に彼女が唄うためのステージが設営された。バジュラ母星での戦闘においては、このステージをシェリル・ノームが使用している。

中央に球形モニターが設置されたコントロールホールは、従来の艦艇や初期のバトル級のブリッジとは構造が大きく異なっている。

CIC

艦橋部のC4コントロールホール。CIC(戦闘指揮所)やCDC(統合司令室)と呼ばれる場合もある。球形モニターを基点に3段のオペレーター席を扇状に配置した構造で、最上段中央に司令席が位置する。船団全体のフォールド航行から無人機の制御まで、あらゆる管制を司った。

◀司令席側から見たC4コントロールホール。球形モニターを取り囲むように多数のモニターがレイアウトされている。

◀司令席は3つのシートを備え、中央の席に派遣艦隊(フロンティア宇宙軍)司令が座る。

船団の状況や戦局を立体的に一望できる球形モニターが特徴で、指揮管制能力の大幅な向上を実現している。

ランカ・リー／シェリル・ノーム特設ステージ

ランカの歌を利用した超長距離フォールド作戦に備えて設けられた特設ステージ。高指向性のフォールド波アンプが設置されており、正面を3重のピンポイント・バリアで防護されている。

バジュラ母星の戦闘直前にシェリルが楽屋として利用した部屋。室内には鏡台が置かれた。

艦橋部特設ステージの設営には、当時ランカのマネージャーを務めていたグレイス・オコナーも立ち会った。

Illustration by Hidetaka Tenjin

マクロス・フロンティア

大規模移民船団を構成する重要拠点

◀バトル・フロンティア(要塞艦)

艦長

新統合軍司令

艦体解説

マクロス・フロンティア船団は、地球から55番目に出航した超長距離移民船団である。新マクロス級のそれよりも大型化した都市船アイランド1に多数の環境艦が連結された、アイランド・クラスター級に属する艦船群であり、新マクロス級と比較して人員の輸送数や各艦の運用性は大幅に上回っていた。船団の中心となっているのは、全長約15kmに及ぶアイランド1で、主居住区として機能していた。このほか、護衛用として艦首部に設置されているバトル・フロンティアをはじめ、農業・リゾート艦、工業艦、居住艦など多数の環境艦から構成されており、居住民が問題なく宇宙を航行しながら生活できるシステムとなっていた。

主居住区となるアイランド1には、渋谷やサンフランシスコなど、かつての地球上の主要都市を再現したエリアがある。

居住民の衣食住を保証するバイオプラント機能は、アイランド2以降の環境艦が担っており、中にはリゾート専用の艦もある。

運用記録

移住可能な惑星を求め地球を出発したマクロス・フロンティア船団は、2059年、未知の生物バジュラとの戦争状態に陥る。以降の戦いで、船団は資源の大半を失うものの、民間軍事プロバイダーS.M.Sの奮戦もあり、居住可能なバジュラ母星へと辿り着いている。母星の成層圏を舞台とした最終決戦においては、アイランド1はギャラクシー船団支配下のバジュラクイーンの砲撃を受けるが、人類と和解したバジュラ群が盾となることで直撃を免れ、決戦後は無事に惑星上に降下している。

データ(アイランド1)

所属▶マクロス・フロンティア船団
全長▶約15km　**重量**▶調査中
全高▶2,000m（地表部からドーム頂上まで）
重力環境▶0.75G　**人口**▶約500万人

サイズ比較

SDF-1
アイランド3
マクロス・フロンティア

アイランド1　艦体構造

アイランド1は、全長15km、地表部からドーム頂点までの距離は2km強にも及ぶ巨大な人工島。船団総人口の約半数がここに暮らす。居住区の地下に位置するエリアには、各種ライフラインやプラント群などが敷設されていた。

アイランド1自体は武装を備えておらず、艦首のバトル・フロンティアや周囲の護衛艦が非常事態に対応した。

▼アイランド1

▼バトル・フロンティア

▲フロンティア船団マーク
マクロス・フロンティア船団のマーク。銀河系を意識したデザインで、「FRONTIER」の文字もあしらわれている。

三面図

▲正面

◀上面

▲側面

◀ドーム開放時

楕円形の形状を持つ。ほぼ左右対称形だが、ドームシェルの形状などが左右で異なり、完全な左右対称形ではない。艦の外縁にアンテナや接続部を集中的に設置しているのがわかる。ドームシェルは艦前方を軸として展開する。

アイランド1　設備

アイランド1の外縁部は、バトル・フロンティアやマクロス・クォーターといった戦艦類が設置できる構造であった。後方には環境艦との接続部があり、アイランド2以降の艦が連結できるシステムとなっている。天蓋の透明ドームには血管のようにチューブ式のリニアモーター鉄道網が巡らされている。異性勢力による襲撃などの緊急時には、アイランド1の前部に接続されている「ドームシェル」部が降下し、透明ドーム部を強固な装甲で覆う仕組みとなっている。アイランド1のフロンティア大統領府ビルは、緊急用の地下通路によって、アイランド1艦首部に設置されるバトル・フロンティアと接続されており、緊急時には政府の機能はバトル・フロンティアの艦橋に移動する。なおバジュラ母星での決戦時、マクロス・クォーターに搭乗していたS.M.Sクルーらによって、大統領代行レオン・三島の背任が暴かれるという一幕があったが、このとき三島はバトル・フロンティアの艦橋で船団の指揮を取っていたため、抵抗・逃亡の余地なく逮捕され、船団への混乱は最小限に留まった。

アイランド1は、フロンティア船団を牽引するティアドロップ型の人工島。艦首にはバトル・フロンティアを、内部には大統領府を備えた船団の最重要拠点である。

A　B　C　D

A バトル・フロンティア

艦首に設置されるフロンティア船団の新統合軍護衛艦隊旗艦。新統合軍の司令部としても機能した。

B マクロス・クォーター

艦の左後方に接続されている、S.M.S所属の母艦であり基地。VF-25などが搭載されている。

C 鉄道網

天蓋部のフレームには、艦内を移動するための鉄道網が張り巡らされている。

D 環境艦接続部

艦後方に、アイランド2以降の環境艦を接続する。緊急時は切り離すことも可能である。

ドームシェル

右図はドームシェルを展開した通常航行時で、下図はドームを完全に閉鎖したシェルダウン時。シェルダウンが続いて宇宙からの入光が減ると、バイオプラントに悪影響が及ぶ。

▶ドーム開放時

◀シェルダウン時

アイランド3

船団の閉鎖系循環システムを支える環境艦と呼ばれる艦艇の一種で、ゼントラーディ用の農業・リゾート艦である。全長8km。ゼントラーディサイズで街が形成されているほか、牧場などを備える。アイランド1からはフロンティアメトロを使って移動する。

◀俯瞰図

▲アイランド3の全景。内部の仕様にかかわらず、環境艦の形状は半円筒形で統一されている。

◀拡大図
通常時はアイランド1と同様、恒星光を採り入れる構造。緊急時には装甲殻が展開される。

▶内部

◀▲アイランド3内部とその俯瞰図。農業用にも使われる貯水区画と平地、山地がバランス良く配置されている。

Illustration by Hidetaka Tenjin

可変攻撃宇宙空母としての機能を集約した、400m級のマクロス艦

機体解説

マクロス・クォーター級多目的ステルス宇宙戦闘機動空母は、マクロス・フロンティアに駐留する民間軍事プロバイダーS.M.Sが装備する可変攻撃宇宙空母である。「比較的小型で、かつ機動性に優れる(可変攻撃宇宙空母)」をコンセプトに、フロンティア船団の八州重工とL.A.I社が設計を担当、建造もフロンティア内のドックで行われた。最大80機のVFやデストロイドを搭載可能な空母／強襲揚陸艦としての能力、重量子反応砲として使用可能なガトリング式バスターキャノンがもたらす大火力、大出力反応エンジンクラスターによる高機動性、そして強攻型への変形で達成された近接格闘戦能力など、400m級でありながら「マクロス」の名を持つに相応しい総合性能を獲得している。

データ

※データは要塞艦時のもの

所属▶S.M.S
全長▶472m
全幅▶178m
全高▶96m
運用慣性重量▶16.5万t
全備重量▶26.5万t(本体15.2万t)
動力系▶反応エンジンクラスター
標準装備▶ガンシップ(ガトリング式バスターキャノン)／ビーム砲塔／火器多数
キャリアー(ARMD-L)▶全長約254m／全備重量5.6万t
ガンシップ(ARMD-R)▶全長約227m／全備重量4.8万t
移動砲台艦(BASTER-L、R)▶全長約129m／全備重量約8,855t

サイズ比較

開発系譜図

艦長

マクロス・クォーター

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶マクロス・クォーター

運用記録

マクロス・フロンティアのドックで建造されたマクロス・クォーターは、完成後、S.M.Sに引き渡された。この際、「特務作業艦」として登録されている(新統合宇宙軍に編入される場合は「小型機動戦闘空母」扱いとなる)。通常はアイランド1左舷の専用桟橋に係留されており、S.M.Sの中央司令所兼基地施設として機能した。また、S.M.Sの立場上、出撃には大統領府の依頼や新統合軍司令部の許可が必要である。代表的な出撃例が、レーダーシステム全面改装後の2059年5月1日に実施されたマクロス・ギャラクシー救出作戦で、以降もその戦闘能力を期待され、対バジュラ戦に出撃。フロンティア船団を離れた時期もあったが、バジュラ母星の攻防戦では、バトル・ギャラクシーとバジュラ群を相手に熾烈な戦闘を繰り広げた。

単独フォールドは当然のこと、戦闘艦と空母の能力を併せ持ち、大気圏内外と水中での運用が可能な万能艦である。

関連事項 EXTRA REPORT

分離合体機構

マクロス・クォーターは、5隻の艦艇で構成された複合艦である。これは変形の簡易化を目的とした機構で、それぞれに反応エンジンやフォールド・エンジンを搭載しているため、各艦単独や艦隊としての運用も可能であった。

変形時や合体時はブリッジで全構成艦がモニタリングされる。

艦中央と両脚がセンター・ハル(A)、左舷が空母ARMD-L(B)、右舷がガンシップARMD-R(C)、右背面部が移動砲台艦BASTER-R(D)、左背面部が移動砲台艦BASTER-L(E)

強攻型

マクロス艦の象徴である、人型近接格闘形態の強攻型。全高316mと比較的小型だが、「マクロス・アタック」などの対艦白兵攻撃が可能で、艦艇などの大型目標に対して絶大な威力を発揮する。飛行甲板を転用したシールドやピンポイント・バリアにより、高い防御力を有する。

各部に反応エンジンを搭載しているため、腕部や脚部も絶大な出力を有する。ナイト級バジュラ空母の口をこじ開けたこともあった。

▶背部ノズルを含め、直立状態での推進器は下方を向いているが、脚部自体を偏向させることで進行方向を調整可能。

▶ビーム砲塔は胸部と肩部に分散配置。これにより攻撃範囲が広くなり、防空能力も強化されているようだ。

▲空母ARMD-LとガンシップARMD-Rは腕部で保持されている。全高は316m、全幅164m、前後長79.2mである。

要塞艦

戦闘艦と空母の機能を併せ持つ空母型で、係留時やフォールドを含めた航行時など、通常はこの形態で運用される。舞鶴など同サイズのグァンタナモ級ステルス空母と比較して、戦闘能力や機動性は当然のこと艦載機数でも勝るなど、艦のサイズ以上の能力を持つ。

空母型でも重量子反応砲は発射可能。デフォールド直後に主砲を使用したこともあった。

▶艦の上部には艦橋やビーム砲塔、ガンシップや飛行甲板などの重要部が集中配置されている。全長472m。

▼強攻型時の腕部や大腿部など、構成艦同士を連結する部位が見て取れる。艦体下部には兵装はほとんど設置されていない。

この形態でアイランド1の専用桟橋に係留される。桟橋自体も空母型に対応した形状をしている。

武装

本艦の兵装の最大の特徴は、重量子反応砲として使用できるガトリング式バスターキャノンを標準装備していることである。装備形態はバトル7などのバトル級可変ステルス攻撃宇宙空母と同じくガンシップ式で、マクロス・クォーター自体の小型化と火力の両立に貢献している。ガンシップの艦首にはエネルギー転換重装甲を採用しており、ピンポイント・バリアとの併用で、強攻型時には剣状の白兵戦用兵装としても使用できた。これと空母ARMD-L飛行甲板転用のシールドを併用することで、高い近接格闘能力を発揮した。

センター・ハルからのエネルギー供給により、重量子反応砲モードとなるガトリング式バスターキャノン。低出力での連射や、白兵戦用兵装としても使用可能。

ビーム砲塔

肩部や胸部には砲塔が設置されている。対空防御などにも使用された。

ARMD-R(ガンシップ/ガトリング式バスターキャノン)

マクロス・クォーターの主兵装となるガトリング式バスターキャノン。主砲としてだけではなく、ピンポイント・バリアを展開することで格闘兵器としても使用可能。

ARMD-L(空母)

VFやデストロイドを搭載する空母としてだけではく、強攻型ではピンポイント・バリアを展開することで甲板をシールドに転用できるほか、マクロス・アタックにも使用される。なお、バスターキャノン発射時には背部に懸架される。

戦闘艦としての機能

機動性や攻撃力、防御力、さらには強攻型での近接格闘能力など、あらゆる面で新統合軍の一般的な戦闘艦を超える戦闘能力を持つ。

艦載デストロイドとビーム砲塔などによる強力な対空防御網を展開可能で、高い防御力の一端を担っている。

空母としての機能

空母機能はARMD-Lが司っている。VFなどを最大80機まで搭載でき、内部にハンガーデッキも持ち、正規空母に匹敵する運用能力を持つ。なお、飛行甲板には0.5Gの重力場が形成される。

カタパルトは標準的な電磁式で、アングルドデッキのものを含めて3基が設置されている。

近接格闘攻撃「マクロス・アタック」

強攻型のマクロス・クォーターは近接格闘攻撃として「マクロス・アタック」を行うこともあった。この攻撃は、SDF-1 マクロスの「ダイダロス・アタック」と同じく、ピンポイント・バリアとデストロイドを使用する。

攻撃は、ARMD-Lの艦首にピンポイント・バリアを集束させ、敵艦に突入させることから始まる。

敵艦を内部から破壊する攻撃方法で、自身より遥かに巨大な艦をも一撃で撃沈可能。

突入後、ARMD-Lからデストロイド隊がポップアップミサイルを発射。敵艦を内部から破壊する。

艦橋

第一世代マクロス艦やバトル級と同様、艦橋構造物が強攻型の頭部となる。S.M.Sの中枢で中央司令室も兼ねるほか、バジュラ母星戦ではランカ・リー用のステージも設けられた。

周囲にはシャイアンII用の装甲シェルターが設置され、防護に役立てられた。

上部にはレーダーを持つ。ギャラクシー救出作戦直前に全面改装されていた。

搭載機

S.M.Sの母艦だけあって、制式化前の最新VFを運用試験の名目で艦載機として配備している。危険な小惑星の排除といった「作業用」としてVBも装備しており、艦載兵器のバリエーションも多い。

VB-6 ケーニッヒモンスターやクァドラン・レアも配備。反応兵器も常備していた。

▶可変戦闘機
正規軍は未装備の最新可変機VF-25。数十機を配備している。

◀デストロイド
対空防御やマクロス・アタックで使用されるシャイアンII。

Mechanic Sheet
メカニックシート
マクロス・クォーター

Sheet 01 B

ブリッジ

マクロス・クォーターのメインブリッジは艦橋構造物(強攻型時の頭部)のガラス部に面した位置に配され、従来のマクロス艦のそれを踏襲した構造となっている。規模も旧来のマクロス艦と同等だが、艦のサイズに見合ったものだったと言える。ここでは、艦長以下最大6名のクルーが艦の運行と艦載機部隊の管制に携わった。

ブリッジ内はSDF-1よりも広く、初期のバトル級よりは狭い。正面にはホログラムモニターを展開することも可能。

バジュラ母星の戦闘においては、ブリッジ下部のスペースにステージが設けられ、そこでランカ・リーが唄った。

▼ブリッジ内出入口

ブリッジと艦内を繋ぐ出入り口。キャプテンシートの後方、艦内ステータス管理用コンソールの左側に位置している。

メインブリッジ

▼配置図

上図左からキャプテンシート(A)、管制用コンソール(B)、操舵用コンソール(C)、索敵・レーダー手用シート(D)、艦内ステータス管理および通信・火器管制用コンソール(E)である。

A キャプテンシート

ジェフリー・ワイルダー

キャプテンシートには艦長のジェフリー・ワイルダー大佐が座る。艦とS.M.S部隊全体の統括を担った。

◀▲キャプテンシートに大型のコンソールはなく、シートのアームレスト左にパネルを備えるのみである。艦長の役割が重要な意思決定に特化していることを物語る構成だ。

B 管制用コンソール

キャサリン・グラス

コンソールの構造は操舵用と同じだが、こちらは航空戦隊の管制などを担当する。新統合軍から出向したキャサリン・グラス中尉が受け持った。

C 操舵用コンソール

正面上部にメインモニター(上端左右が警告専用エリア)、中央にサブモニター付操舵輪を備える。ボビー・マルゴ大尉が担当する。

ボビー・マルゴ

BC 変形時操舵士サポートパーツ

強攻型への変形時に操舵士と管制士の身体を固定するサポートユニット。

◀▲床から展開され、ガードバーが後ろから回り込む。

D 索敵用ブリッジシート

索敵用に、半球形のホログラムディスプレイを備えている。

◀モニターパネル

モニカ・ラング

索敵・レーダー手用シート。モニターパネルを備える点以外、シートの構造はオペレーター用と同様である。モニカ・ラング曹長が担当。

E オペレーター用コンソール

艦内ステータス管理(向かって右)と通信・火器管制(左)を担当するオペレーター席は、ホログラムディスプレイを備える。パネルが下に倒れ、ホログラムが展開される。

◀ホログラムディスプレイ

▼コンソールグラフィック

ラム・ホア　ミーナ・ローシャン

コンソールの構造。艦内ステータス管理をミーナ・ローシャン曹長、通信・火器管制をラム・ホア軍曹が担当。

Mechanic Sheet

メカニックシート

マクロス・クォーター

艦内設備

S.M.S所属の特務作業艦という特殊な位置づけにあり、純戦闘艦と空母の特性を兼ね備えるマクロス・クォーターは、艦内設備も多彩で充実していた。複数の艦載機を運用するための2層式の格納庫や、乗員用の各区画などがそれにあたる。また、女性隊員が多いS.M.Sの事情を反映し、艦内には洒落たカフェもあったという。

各設備は艦内で完結しており、単艦での作戦行動を可能としている。パイロットの訓練なども艦内で行われた。

格納庫全体図

エマージェンシー用シャッター
エレベーター
エレベーター
バトロイド メンテナンススペース
VF-25
2層式エレベーター
スーパーパーツ換装スペース

格納庫①

可変戦闘機(VF)用の格納庫区画。床面に下部デッキへのエレベーターを、天井にアームクレーンなどを備える。

格納庫②

格納庫内バトロイド・パワードスーツ用メンテナンススペース。向かって右手はシャッターで、艦外へのスロープが続く。

◀▲バトロイドを固定する整備スポット。上は足元から伸びる台座付きのアームで、中段のステップがクレーン状に上方へ伸び、上部台座も上にスライドする構造となっている。

ブリーフィングルーム(通常時／非常時)

作戦前のブリーフィングのほか、乗員の待機や休息にも利用する部屋。上段にはU字テーブルとバーカウンターテーブル、下段に6人掛けのテーブルが設けられている。壁面には大型モニターが配され、エマージェンシーコールにも用いられる。カウンター奥にアルコールが置かれ、平時は照明が落とされているなど、軍艦らしからぬ施設である。

通路

艦内に張り巡らされた各通路。天井や壁面にはケーブルが露出しており、強攻型への変形時に封鎖される隔壁が配されている場合もある。

クォーター内 乗員私室

S.M.Sのマクロス・クォーター乗員に与えられる艦内私室のひとつ。簡素な造りで、収納式の2段ベッドの対面には、引き出し式の机とポップアップ式の椅子、ロッカーが設けられている。また、ドアの反対側の壁面にはモニターがある。

早乙女アルトとミハエル・ブランに与えられた私室がこの形式の部屋で、オズマ・リーなどには個室が与えられていた。アルトが街で倒れこんでいたシェリルを保護したこともあった。

▶ロッカー
壁面の机右に設けられた埋め込み式のロッカー。衣類や私物を収めるためのもので、ロッカーの扉の内側には鏡がある。

バジュラ

人類を襲った超時空生命体

▶バジュラ(大)
初めてマクロス・フロンティア船団を襲撃したバジュラで、6本足と背部に備えた大型のビーム発射器官が特徴である。

アイランド1の天蓋に陣取り、砲撃を行うバジュラ(大)。機動力・火力共に優れるバジュラは、度々防衛線を突破し、船団に被害をもたらしていった。

▼バジュラ(小)
バジュラの中では小型で、可変戦闘機と比べてひとまわり小さい。頭部にミサイル、ビーム砲を持ち、バジュラ(大)1体に随伴する形で行動する。

機体解説

西暦2059年、マクロス・フロンティア船団を襲撃し、未曽有の危機に陥れた生命体がバジュラである。バジュラは、腸内細菌から発せられるフォールド波によって別個体と繋がれたネットワーク生物で、最上位個体の「クイーン」がネットワーク内のバジュラを統括しているとされている。そのため、各個体の身体に個別の脳がないのが特徴であった。また、ビーム砲やミサイル状の兵装、エネルギー転換装甲などを持ち、最新鋭の可変戦闘機すら破壊してしまう戦闘力を有した。

VF-25Fと格闘するバジュラ(大)。生物であるバジュラは、格闘戦でも機敏な動きを見せるため、背後に取り付かれても臨機応変に対応できた。

バジュラ本星での最終決戦では、第117大規模調査船団の生き残りである、ランカ・リーの歌声により、バジュラの能力は大きな影響を受けた。

バジュラを攻撃したものや、テリトリーを侵したものに対して攻撃的となるほか、フォールド波に反応し、集まる習性を持っている。

Mechanic Sheet
メカニックシート
バジュラ

運用記録

バジュラは、西暦2040年に人類と初遭遇し、2048年には第117大規模調査船団を壊滅させるなど、移民船団に猛威を振るっていた。2059年には、バジュラの力を利用しようとしたグレイス・オコナーの暗躍でマクロス・フロンティア船団を襲撃する。その後グレイスにより最上位個体が掌握されるが、ランカ・リーのフォールド波を伴う歌声で正気に戻ったバジュラは人類に加勢し、グレイスの野望は潰えた。

高い機動性を誇り、また群れをなして行動するバジュラは、フロンティア船団との初遭遇時に新統合軍のVF-171部隊を圧倒した。

最終決戦時、グレイスの支配を脱したバジュラは、フロンティア船団側に協力し、バトル・ギャラクシーのバリアを打ち破った。

バジュラ(大)

大気圏内外の双方で活動でき、加えて自力でのフォールド航行能力も持つタイプ。大気圏内では背部から4枚の羽を伸ばして飛行する。背中から伸びる長大な突起物から放つ重量子反応ビームが主兵装で、加えて生体組織を機関砲やミサイルのように放つ。また体内から強力な妨害電波を発し、誘導兵器などを無効化する能力も確認されている。

フロンティア船団との初遭遇時、防衛線を突破した1匹のバジュラ(大)がアイランド1内に突入し、市街に甚大な被害をもたらした。

▼▶二足歩行形態(右)と、大気圏内で見せた飛行形態(下)。ビーム砲のほか、ミサイルのような攻撃性物質を放つ。

バジュラ(小)

バジュラ(大)と共に行動する小型タイプ。長い尾の先端は鋭利な刃を持つブレードとなっており、格闘戦で威力を発揮した。

◀後方から見たバジュラ(小)。尾の先端に大型のブレードを備えているのがわかる。

バジュラ(小)は移動時には尾が青く発光する。彼方から無数に飛来するその光は、新統合軍兵士を恐怖させたという。

頭内に生体ビーム砲、生体ミサイルを内蔵しており、小型ではあるが強力な火力を誇る。

バジュラ(第二形態)

バジュラの幼生(第一形態)が、羽化もしくは脱皮することにより変異した存在。最大で3m程度の大きさにまで成長する。まだ成体になる前の形態だが、触覚から放つエネルギー弾と強靭な尾で、武装した歩兵部隊と十分に渡り合える戦闘力を誇る。

2059年8月25日、アイランド1にバジュラ(第二形態)が大量発生し、多数の犠牲者を出した。

あい君

ランカ・リーがグリフィスパークの丘で拾い、自室で飼っていたペット。その実態はバジュラの幼生体であった。

あい君はランカに拾われたのち、幼生形態から中間の形態を経て、第二形態へと変化していった。

▲幼生形態

◀中間形態

バジュラクイーン

バジュラの中でも最上位に位置する"女王"で、全てのバジュラを統括する存在と推察される固体。卵生生物であるバジュラを産み落とす母体のひとつであり、バジュラ(大)やバジュラ(小)などの大本となる、バジュラの幼生を無数に産んでいる。2059年、マクロス・フロンティア船団とバジュラとの間に勃発した一連の武力衝突、いわゆるバジュラ事件では、バジュラクイーンはギャラクシー船団のグレイス・オコナーの支配下に置かれ、クイーンが持つ他のバジュラとのネットワークを掌握される。バジュラ母星でのマクロス・フロンティア船団とギャラクシー船団との最終決戦でグレイスと融合したバジュラクイーンは、体内のフォールド・クォーツを用いて次元断層を生み出し戦局を優位に運ぶ。しかしS.M.Sの早乙女アルトらにより、グレイスらの企みは阻止された。

▼ネットワーク生物であるバジュラの頂点に立つ生命体で、バジュラ本星に存在する。ここからから全てのバジュラに指示が出されると言われる。

バジュラ本星内に存在していたバジュラクイーンは、グレイス・オコナーと一体化した。

頭や手、羽を備えるバジュラクイーンの中枢部。この姿を見たプロトカルチャーが、これをモデルに人類の監視装置「鳥の人」を生み出したとされる。

グレイスが融合するクイーン頭部を切除・撃破することでバジュラ母星で戦闘は決着した。

ナイト級バジュラ空母

宇宙戦艦クラスの大型バジュラで、全身に無数の砲門を備える。体内にはフォールド・リアクターを備えており、胴体部が展開して露出する口腔部から、要塞砲クラスの出力のビームを放つ。また体内には無数のバジュラ(大)、(小)が棲んでおり、艦載機のように運用される。ナイト級はマクロス・フロンティア船団と幾度か単独で戦闘を行っているが、ガリア4に眠っていたバジュラ艦隊は、より巨大なビショップ級バジュラ空母を中核に、複数のナイト級空母が周囲に展開するという陣容で、フロンティア船団と交戦した。

◀▼各所に小型の対空砲を持つナイト級。グレイスが操った際にはピンク系に体色が変化した(下図)。

ビショップ級内の準女王からの指示により、ナイト級はコントロールされるシステムとなっていた。

大出力ビームを放とうとするナイト級。胴体部が上下に展開し、口腔部が露出している。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶バジュラ

バジュラ準女王

バジュラクイーンに進化する前の状態とされる固体で、体色は異なるものの、長く伸びた尾などにクイーンと共通するフォルムが見られる。バジュラクイーンと同様にバジュラの卵を産むことができる上位個体であり、フォールド・クォーツの生成も可能とされる。2059年8月頃、ガリア4のSDFN-4グローバルの残骸内に巣くっていた準女王の率いる大規模なバジュラ艦隊が、マクロス・フロンティア船団と交戦している。

準女王の棲むガリア4が破壊されたことで、準女王麾下の膨大な艦隊がフロンティア船団へ進軍した。

ビショップ級バジュラ空母の内部でバジュラを指揮。またランカ・リーを捕らえ、何かを伝えようとした。

◀▼バジュラ準女王の中枢部。頭部には2連装のビーム砲、腕部先端には鋭利なクローを持ち、高い攻撃力を誇る。

▲▶後方から見たバジュラ準女王の中枢部(上)と、フレキシブルな構造となっている巨大な尾の先端の一部(左)。

ビショップ級バジュラ空母

ビショップ級は、ナイト級の更に数十倍の大きさを誇る、要塞クラスの固体である。ナイト級と同様、体内外に多数の標準型戦闘バジュラを住まわせている。また、2059年8月にマクロス・フロンティア艦隊が遭遇したビショップ級は、体内に準女王が棲んでいた。準女王は、宇宙空間を旅して次の移住先の惑星を探す個体であるとされるが、この"旅"の際に、準女王を護衛するための個体がこのビショップ級だと推察される。

◀▼フロンティア船団との戦いでは、その巨体故に艦隊旗艦であることを見抜かれ、集中攻撃で劇破された。

◀▶移動要塞として機能するビショップ級。ナイト級と共に優れたフォールド能力を持つ。

EXTRA REPORT
関連事項
プロトカルチャーとバジュラ

一説によれば、プロトカルチャーはバジュラクイーンの姿をモデルに「鳥の人」を創造し、またナイト級やビショップ級などの大型バジュラを元に、ゼントラーディの宇宙戦艦や宇宙要塞を設計したとされる。ゼントラーディ大型砲艦の主砲なども、大型バジュラのビーム砲を模倣したものと考えられている。やがてプロトカルチャーの技術は監察軍の墜落宇宙船を通じて人類にも伝わり、マクロスやグランド・キャノンなどの兵器に転用されたが、ルーツを同じくする技術が二つの陣営に伝播していった事実は、一種の皮肉を感じさせる。

プロトカルチャーの遺物「鳥の人」。その遭遇から半世紀後、人類は原型であるバジュラクイーンと対面する。

マクロス・フロンティア民間車両

▶街宣車

フロンティア行政府が広報のために利用した街宣車。車体上面にスピーカーを備えたワンボックスカーで、街頭テレビを補助するかたちで使われた。

▶オズマ・カー

S.M.Sスカル小隊のオズマ・リーがプライベートで愛用したスポーツカー。リアドアパネルのブリスターフェンダーが特徴となっている。

▼ケーブルカー

アイランド1内のサンフランシスコや渋谷、北京など地上の各エリアに敷設されていた路面電車。船団の中でも、特にレトロなデザインである。

SHIBUYA MARKET STREET

機体解説

マクロス・フロンティア船団の環境を構築する上でテーマとなったのが、「文化の多様性の維持」と「意図的な利便性の制限」である。それ故、都市宇宙船アイランド1の街並みは、21世紀初頭の地球を模してデザインされた。自然と、その都市部で用いられる民間車両も先進的なデザインが避けられ、懐古的な景観に合わせたものが多くなっていた。ここで解説するのは、2059年の当時にフロンティア船団で利用されていた民間車両の一部である。それらは都市宇宙船の交通システムを形作り、人々の足としてその生活を支えていたのである。

車の運転が趣味であったオズマは、クラシックなスポーツカーを改造して愛用。早乙女アルトをS.M.Sに連れてきた時もこの車だった。

シェリル・ノームにアイランド1の案内をしたアルトは、移動に路面電車を使った。また、この路面電車はランカ・リーが日常の移動手段としても利用している。

フロンティア船団で利用された民間の交通手段

Mechanic Sheet
メカニックシート
マクロス・フロンティア民間車両

運用記録

フロンティア船団の民間車両は、アイランド1を網羅する鉄道の路線と併用されるかたちで使われた。特に勾配が強いサンフランシスコ・エリアなどでは、これらの車両が重宝されたようだ。だが、バジュラの襲来でアイランド1に被害が出ると交通が麻痺し、その利用は次第に困難となった。

路面電車や自家用車で賑わいを見せるサンフランシスコ・エリアの道路。交通システムはよく整備されていた。

オズマ・カー

ハッチバックタイプのスポーツカーで、20世紀末の地球で人気を博したイタリア車「ランチア・デルタ」がモチーフ。フロンティア船団の乗用車の中でも特に懐古趣味的だったと言える。

▼車内

左ハンドルのマニュアル車。線画右は後部座席、線画左下はメーターパネルである。

主要操縦者

オズマ・リー

◀▼オズマの乗機と同じ黒と白、黄色でカラーリングされ、上面にはオズマのパーソナルマークが描かれている。ボンネットに開けられたエアスクープが特徴。

街宣車

フロンティア行政府の街宣車は、バジュラの襲撃に伴う統制モードの告知などに利用された。主に緊急時での出動が多かったと見られる。

▲▶車体の上面に7基のスピーカー、側面に大型のスクリーンを備える。運転席側と車体後部のサイズが異なり、特殊な車両であることがうかがえる。

ケーブルカー

1両編成で運行される低速の公共交通機関。19世紀末からアメリカ・サンフランシスコで運行していたケーブルカーがモチーフとなっている。

◀▼レトロなデザインを売りにすることで、一般市民の足としてだけでなく、観光資源としての役割を果たした。

▶後方

▲▶側面

▲前方

古めかしいデザインで、細部に至るまで旧時代のケーブルカーの意匠が再現されている。内部には2列のロングシートを備えた。

停留所もあるが、走行中のケーブルカーに駆け込む人々も多かったと見られる。

リムジン

政府要人やVIPが利用したリムジン。イギリスの高級車メーカー「ベントレー」の車種をモチーフとする。また、特殊セラミックなどで構成された装甲リムジンも存在したと言われる。

ツアーでフロンティア船団を訪れたシェリルのためにリムジンが用意されていた。

同型のリムジンは、ハワード・グラスやレオン・三島といった行政府の要人も用いた。

▲▶リムジンタイプで、バンパーや窓枠にはメッキ塗装が施された。装甲リムジンの場合、対戦車ライフルの直撃にも耐えたとされる。

▼車内

運転席と後部座席の間にはガラス製の間仕切りがある。また、間仕切りと後部座席の窓にはカーテンを備える。

乗用車

アルトの兄弟子、早乙女矢三郎がアイランド1内の移動に使った乗用車。4ドアタイプの高級セダンで、20世紀末のセダンタイプに多く見られたベーシックなデザインが踏襲されている。

◀▼窓枠やホイール外周にメッキを施し、高級感が漂うデザインとなった。矢三郎が美星学園にアルトを訪ねた際に用いた。

ランカの乗った車

映画出演で一躍有名となったランカが仕事場の移動に使った乗用車(ベクタープロモーションの所有車であるかは不明)。1950年代を彷彿とさせるクラシックなデザインであった。

▲▶逆三角形に配置された片側3つのヘッドランプや、大きく膨らんだリアフェンダーが特徴。ほとんどの場合、エルモ・クリダニクも同乗して移動した。

VF-25S

有人機の限界を超えてバジュラに対抗した人類の「救世主」

機体解説

パイロットという枷を負う有人機の限界を様々な新技術によって乗り越えた新世代の可変戦闘機——それが民間軍事プロバイダー S.M.Sが運用するVF-25 メサイアである。本機は新式の操縦装置エクステンダーギア・システムにより操縦性と生存性を向上させ、ISC(Inertia Store Converter)通称「イナーシャル・バッファー」によってコクピットを中心にかかるGを軽減することで、パイロットの肉体的限界ゆえに機体本来のポテンシャルを発揮させることが困難、という2040年のAVF開発計画で指摘された問題を克服している。また、出力や武装、センサー類などの総合性能も飛躍的に向上しており、2050年代末期の主力機VF-171を歯牙にもかけないほどの高性能を示した。なお、本機のS型はVFの伝統に則った指揮官機仕様で、通信指揮機能の強化、搭載AIへの作戦指揮補佐用プログラム導入など高性能化が図られ、高い戦果を残している。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶S.M.S
全長▶18.72m
全高▶4.03m（主脚含まず）
全幅▶15.50m（主翼展開時）
空虚重量▶8,450kg
機体設計最大荷重▶27.5G+
エンジン▶新星インダストリー／P&W／RR社製 FF-3001Aステージ II 熱核タービンエンジン×2
宇宙空間最大推力▶1,620kN+×2
最高速度▶M5.0+(高度10,000m)
標準武装▶ラミントンES-25A 25mm機銃　マウラー ROV-25 25mmビーム砲　換装式×2／マウラー ROV-127C 12.7mmビーム機銃×4／ハワードGU-17A 新型ガンポッド58mm×1／エネルギー変換装甲SWAGシステム一式／ピンポイント・バリア・システム一式／アクティブステルス・システム一式／チャフ&フレアー&スモークディスチャージャー・システム一式

主要パイロット

サイズ比較

開発系譜図

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet

VF-25S メサイア

運用記録

VF-25は、新星インダストリーとゼネラル・ギャラクシーが共同開発したYF-24 エボリューションをベースとして、マクロス・フロンティア船団内の新星インダストリー工廠とL.A.I社が独自に開発した機体である。YF-24の発展機は他の移民船団にも存在し、本機は正しくはVF-25/MF25の型式番号で呼ばれる。2057年、M55NGC6909球状星団内の恒星系第3惑星メサイア025において浦賀級宇宙空母「上海Ⅲ」を軌道上ベースとして原型機の初飛行を実施。2059年の時点でフロンティア船団に駐留するS.M.Sによって試験運用が進められていた。同年、フロンティア船団がバジュラと遭遇すると、本機はスカル小隊等を編成して実戦に投入された。

VF-25Sはスカル小隊隊長オズマ・リー少佐の乗機として運用され、S.M.S部隊の中核を担った。

指揮官機であったため、アーマードパック(APS-25A/MF25)を装備して出撃することが多かった。

標準装備

マウラー ROV-127C 12.7mmビーム機銃

バトロイド形態時のモニターヘッドブロックには、連装ビーム機銃を備える。射角を制限されるがファイター形態でも発射可能で、後方警戒などに用いられる他、長距離レーザー通信のデバイスとしても機能する。なお、S型は4連装、G型は単装、その他は2連装となっている。

ハワードGU-17A 新型ガンポッド58mm

主武装には新型のハワード社製ガトリング・ガンポッドを採用。従来機のガンポッドに比べやや大型で、射撃時には前部銃身の装甲板が展開する構造となっている。また、ファイター形態では、機体下部のエンジンナセル間に位置する両脚部の取り付け支持架に装着される。なお、バジュラとの交戦によって対バジュラ用装備の開発が進み、のちにMDE弾頭に対応した改良型のGU-17Vに換装されている。

AK/VF-M9 アサルトナイフ

バトロイド時の接近戦用武装として、ガーバー・オーテック社のアサルトナイフを装備する(全長1.65m、通常はシールドブロックに収納)。超硬合金製で、ピンポイントバリアの併用も可能。

ファイターモード

ファイター形態はVF-1 バルキリーの流れを汲むフォルムで、ブレンデッドウィング・ボディ構造と可変後退翼を採用している。また、主翼を完全に損失しても、亜音速を維持する限り飛行が可能という優れた空力性能を持つ。なお、高機動戦闘を旨とする同形態はISCユニット(T021)の恩恵を最も強く受ける形態であり、最大で27.5Gの加速度軽減を120秒間維持できる。その間の機動力は無人機に匹敵する。

機体各部に配した高機動スラスターや可変ノズルの推力軸変更によって卓越した運動性を発揮した。

▶機首先端に統合レーダー AA/AS/SF-06ユニット、コクピット前方の中央アビオニクス・ベイにISCユニットを内蔵。最高機密のISCユニットは自爆装置で厳重に守られている。

▲胴体前縁のスリットは、そこから空気を吸い込むことで境界層制御を行い、翼面及び胴体の空気抵抗を軽減するためにも使用される。

◀X字型に配された垂直尾翼とベントラルフィンが特徴で、1枚が失われても残り3枚で機体制御が可能。垂直尾翼後方には各種アンテナやレーダーが内蔵されている。

◀主翼付け根の固定銃座には、ビーム機銃ないしはガトリング機関砲を選択装備できる。また、主翼下部に追加兵装用可変パイロンの取り付けピボットを各3基備える。

ガウォークモード

搭載された統合フライトコンピュータはエクステンダーギアと連動して機体を制御する機能を持つ。パイロットの脳電流からその無意識運動を測定し、思考の延長線上で操縦できる(コンセプトはYF-21のBDIシステムに近い)ため、機体の一部だけを変形させて空力制御を行うといった複雑な操縦も可能で、ガウォーク形態もそれ自体の利点を求めて運用されるだけでなく、機動の一環で利用されるケースが見られた。

オズマはバジュラとの近接格闘戦において、バトロイドからガウォークに変形して至近距離の攻撃を回避するといった高等技術を用いた。

ホバリングを用いた地表面の高速移動やファイターからの急制動といったガウォーク特有の機能は、VF-25Sにおいても健在であった。

▲VF-25のガウォーク形態は、VFの元祖であるVF-1 バルキリーに似たオーソドックスな構成となっているが、操縦方法をはじめ、内面は大幅に進歩している。

▲本形態では左腕部シールドが使用可能となる。機体上面の髑髏のマーキングはオズマのパーソナルマーク。

バトロイドモード

機体にはリニア・アクチュエーターと呼ばれる新開発の変形機構が採用されている。これは変形駆動系の大半を非接触構造の電磁式に置き換えた改良システムで、変形に要する時間が在来機の2/3に短縮された。また、脆弱な機構を廃したことで故障率とメンテナンス性が改善され、バトロイド形態の耐久性向上にも繋がっている。結果、本機のバトロイド形態は高い白兵戦性能を獲得しており、前述のアサルトナイフの装備と合わせて積極的な近接戦闘を視野に入れていたことがうかがえる。事実、バジュラとの交戦では白兵戦が頻繁に発生し、互角に渡り合っている。

バジュラとの戦闘では機体に組み付かれるケースも多く、バトロイドによる白兵戦が頻繁に確認されている。

バジュラによる兵器の無効化が判明した際には、オズマ以下スカル小隊のVF-25はアサルトナイフ1本でバジュラに立ち向かっている。

◀従来の防御装備だけでなく対光学兵器用気化装甲も採用されており、総合的な防御力に優れる。

▼バトロイド時には胴体後部が背部に折り畳まれ、主翼の大半をウィング・グローブに収納、保護する。

▲同形態ではコクピットとアビオニクス(特にISCユニット)の保護が優先されており、電子機器が集中したコクピットブロック周辺を胴体に収納する構造が採られている。

バトロイド時掌部

Illustration by Hidetaka Tenjin

宇宙駆ける救世主がまとった重装の衣

MESSIAH

VF-25S

機体解説

VF-25は設計段階から性能拡張モジュールによる多用途化が想定され、専用の追加装備が同時開発された。そのひとつが、重戦闘攻撃機としての性能を付与するAPS-25A/MF25 アーマードパックである。機体の大半を保護するこの装備は、第2世代型の強化型エネルギー転換装甲ASWAGで構成されており、未装備時の数倍に相当する総合強度を実現している。最大効率作動時には宇宙重巡洋艦の装甲に匹敵するとも言われ、装甲に内蔵された大容量キャパシターによって、短時間であれば全ての形態でエネルギー転換装甲が使用可能となっている。一方、搭載された多数の武装は、単機で宇宙巡洋艦クラスの火力となる。これらの武装を効率的に運用するため、識別した敵を全自動で攻撃する「ハルマゲドンモード」や、一部の武装を敵の自動排除に割り振る攻撃支援モードなどのシステムが設定されている。

データ(アーマードパック)

型式番号 ▶ APS-25A/MF25
開発 ▶ 新星インダストリー社
標準運用重量 ▶ 40t（ロケット燃料15t、ミサイルなどの重量含む）
VF-25標準出撃重量(アーマードパック装備時) ▶ 約52t
最大加速 ▶ 約11.5G+（VF-25の機体エンジンも最大推力で併用）
メインブースターエンジン ▶ SLE-7A/A（五菱重工製)×4
ブースターエンジンの合計最大推力 ▶ 2,940kN
高機動バーニアエンジン ▶ SLE-1B（五菱重工製)×10
武装 ▶ 可動式ラミントンマイクロミサイルCIWSランチャーポッドHMM-5A×2 ／ラミントン近接マイクロミサイルランチャーポッド2重装填タイプ(脚部用)×4 ／ハワード200mm対装甲用高初速ロケット弾15連装ポッド×2 ／ ROV-22 22mmビーム機銃×4 ／オットー／センチネル57mm対艦対空両用速射ビーム旋回砲塔(自律射撃可能)×2 ／八洲重工 ビーム砲／強化型エネルギー転換装甲／ピンポイント・バリア／エネルギー供給用大容量キャパシター複合ユニット C-207×2 ／複合センサーアンテナ(ASSA-021A)

※必要に応じて更に4～8基の通常弾頭あるいは反応弾頭の大型対艦ミサイルの追加装備が可能。
※マイクロミサイルの弾頭は対バジュラ用MDE弾頭に、速射ビーム砲はMDE粒子ビーム砲に換装可能。

主要パイロット

オズマ・リー

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶VF-25S メサイア

アーマードパック

運用記録

APS-25A/MF25は本体のVF-25と同じく、マクロス·フロンティア船団に駐留する民間軍事プロバイダー S.M.Sによって試験運用が進められた。ただし、高性能な反面、VF-25の専用追加装備の中では最も高コストであったことから、運用は小隊長クラスの機体に限られた。代表的な運用例としてはスカルリーダーのVF-25S（オズマ機）が挙げられ、オズマの卓越した操縦技術もあって対バジュラ戦で高い戦果を残した。また、任務内容によっては小隊員レベルの機体に使用許可が下りる場合もあり、一部の戦闘でアルト機が運用している。なお、「なるべく使い捨てはするな、持ち帰れ。ただし迷うならためらわず捨てろ」とはアーマードパックの運用に際したオズマの訓示だが、そう語った彼自身がもっとも本装備の強制排除廃棄率が高かったと伝えられている。

VF-25のみの小隊編成では、小隊長機がアーマードパックを、その他がスーパーパーツを装備するケースが多かった。

アーマード装備のオズマ機はバジュラとの戦いにおいて獅子奮迅の活躍を示し、本装備の高い性能を実証した。

ファイターモード

アーマードパックはチューンされた化学燃料ロケットエンジン4基を備えるが、全備重量がノーマル機の数倍にもなるため、ファイター形態の総合的な加速·運動性能はノーマル機と同程度にとどまっている。ただし、パイロットの技量によってはノーマル機以上の機動性を発揮することも可能だった。

▶機首ブロック用のパーツ(APS-25A/P-011)も存在するが、柔軟性が失われるというオズマの意見で導入は見送られた。その代わり、本体の大半がアーマーによってプロテクトされるため、ピンポイント·バリアを機首部に集中して対応した。

▼下面はバトロイドの脚部装甲パーツで防護される。また、ビーム旋回砲塔はファイター時には機体前方を向く。

▲主翼も装甲パーツ内に収納される。エンジン側面の翼状ユニットはフェイズドアレイレーダー内蔵の装甲放熱板である。

オズマほどの腕ならば、アーマードパック装備機を軽戦闘機のように操ることも可能だった。

バトロイドモード

バトロイド形態ではヘッドユニット以外がアーマードパックに保護され、高い防御効果を得ている。また、主要武装が機体前面に向くことから、効率的な火力の展開が可能となる。そのため、対多数の戦闘や敵中枢への集中攻撃など、多くの戦闘局面でバトロイドが運用された。

VF-25の専用追加装備で最も火力に優れたパックであり、VF-25の基本性能と相まって高い戦闘力を発揮した。

アーマードパックを装備した状態でも格闘戦をこなせるだけの機動性は確保されている。

▶ノーマルのVF-25Sの華奢なフォルムから一転して重厚な外観となる。各パーツは損害や残弾の度合に応じて部分的に除去することも可能。

◀主翼に装着されるパーツは変形シークエンスに従って背部に移動する。そのため、背面もかなりのボリュームとなっている。

ガウォークモード

APS-25A/MF25の特筆すべき点は、アーマードパックを装備したまま全形態への変形が可能なことにある。ガウォークへの変形も同様で、機能が阻害されることはない。ただし、ガウォーク形態はトップヘビーとなり、しかも機体の中心軸から離れた部位に重量のあるブースターユニットが配されるため、初期には重力下でのガウォーク形態での高速機動でバランスを崩すパイロットも少なくなかったという。なお、空間機動においては、巡航時にプロペラントを節約して推進することがパイロットの腕の見せ所となるため、本形態のモーメント制御を機動変更に利用するパイロットもいたという。

アーマードパックに搭載された全武装の同時斉射は、バジュラの一群を瞬時に殲滅するほどの威力を有していた。

重装甲化によって高い耐弾性を獲得しており、バジュラの攻撃が直撃しても一部のパーツが破損する程度で済む。

ギャラクシー艦救出作戦において、オズマはガウォークを巧みに用い、速度を落とすことなく交差戦闘を行っている。

重力下で運用されるケースはきわめて稀で、宇宙空間での急制動や反転といった変則機動に活用されることが多かった。

オズマはガウォークのシールドにピンポイント·バリアを展開してバジュラに体当たりする荒っぽい運用も行っている。

▶バトロイド時に肩上部に移動するマイクロミサイルランチャーポッドは、ガウォークでは機体上部に残ったままとなる。

▼背部や主翼パーツの配置はファイターからガウォークに変形しても変更はない。なお、垂直尾翼はファイター、ガウォーク両形態で折り畳まれる。

15tものロケット燃料を内蔵しているとはいえ、最大推力では約2分しかもたない。

武装

A 可動式ラミントンマイクロミサイルCIWSランチャーポッドHMM-5A×2（肩部／胸部）

バトロイドの胸部と肩部にあたる部位には、CIWSシステム制御のマイクロミサイルランチャーポッドを計4基備える（装弾数は胸部が最大20発、肩部が38発）。

B ラミントン近接マイクロミサイルランチャーポッド2重装填タイプ（脚部用）

脚部パーツ側面には近接攻撃用のマイクロミサイルランチャーが2基ずつ配されている。ミサイル弾は2重装填式で、一斉射分の装弾数は各16発となっている。

C 複合センサーアンテナ（ASSA-021A）

装甲化によって使用不能となるVF-25本体のセンサー機能を補うため、装甲化された複合センサーアンテナを増設している（各部には赤外線センサーやモニターカメラも備える）。

D ハワード200mm対装甲用高初速ロケット弾15連装ポッド×2（背面ユニット）

主翼部パーツに装備された2基のロケット弾ポッドは、ファイター形態で機体前方に向く。そのため、主にファイター時の強行突破などで用いられた。

E オットー／センチネル57mm対艦対空両用速射ビーム旋回砲塔（背面ユニット先端）

主翼部パーツ側面には速射ビーム旋回砲塔2基を装備。エネルギー転換装甲と同じく本体反応炉出力をアーマードパックの内蔵キャパシターでチャージして稼動する。

▶VF-25S メサイア

スーパーパーツ

機体解説

オズマ・リーが運用したVF-25S メサイアに、スーパーパーツ(SPS-25S/MF25)を追加した仕様。装備されているスーパーパーツは、VF-25Fをはじめ、VF-25シリーズに用意された共通のもので、性能に違いはない。化学反応ロケットエンジンと燃料タンク、武装と追加装甲ユニットで構成されており、機体各部を覆うようにして設置された。その加速性能は驚異的で、最大で30G程度までの急加速が可能となっている。

燃料やミサイルを使い切ってデッドウェイトとなった場合、パイロットは各ユニットを任意に切り離すことができた。

運用記録

VF-25Fはスーパーパーツを装着して出撃するのが標準であったが、オズマ・リーが搭乗するS型は、スーパーパーツより防御力に優れるアーマードパックを装備する機会が多かった。そのため、スーパーパーツを装着しての出撃は少なく、フロンティアの外殻に潜むバジュラを撃墜する際にその姿を確認されているのみである。

スカル小隊でバジュラの迎撃に出たが、暴走するバジュラの攻撃でコクピットを破壊され、オズマは負傷した。

データ

型式番号 ▶ SPS-25S/MF25
開発 ▶ 新星インダストリー社
標準運用重量 ▶ 28t(ロケット燃料約15トン、マイクロミサイルポッドなどの重量を含む)
初期最大加速 ▶ 約15G
メインブースターエンジン ▶ SLE-7A(五菱重工製)×4
サブブースターエンジン ▶ SLE-3A(五菱重工製)×1
ブースターエンジンの合計最大推力 ▶ 2,940kN
高機動バーニアエンジン ▶ SLE-1C(五菱重工製)×10(ASSA-021A)
武装 ▶ ビフォーズマイクロミサイル3連装ランチャーCIMM－3A×2/ラミントン近接マイクロミサイルCIWSランチャーポッド　HMM－5A×2/インテーク装甲ユニット(可動式マイクロミサイルCIWSコンテナユニット×2含む)×2/主マニピュレーター用追加装甲ユニット×2/エンジンブロック追加装甲ユニット×2/股関節部装甲ユニット×1/尾部ブースターユニット×1

※マイクロミサイルの弾頭は対バジュラ用MDE弾頭に換装可能

ファイターモード

▶メインブースターユニットは主翼基部に設置されている。スーパーパーツ自体は使い捨てを想定しており、製造コストは抑えられた。

▼インテークやエンジンナセルに装甲パネルが追加され、アーマードパックほどではないが生存性が高められている。

▼燃料が減るに従い加速性能が高まり、機体限界を超える加速を可能としている。

ガウォークモード

ガウォーク形態でもスーパーパーツの特性は活かされる。だが、その制御は困難となるため、パイロットに高い能力が求められた。

バトロイドモード

▶胸部、股関節部、脚部などを追加装甲パネルで覆うことで、格闘戦での防御性能が向上している。

◀バトロイド形態では、主翼の移動と共にメインブースターユニットが背部にレイアウトされる。

武装

▶メインブースターユニットの交換式ウェポン・ベイと、可動式のコンテナユニットに武装が設置された。

Ⓐラミントン 近接マイクロミサイルCIWS ランチャーポッド HMM-5A

インテーク装甲ユニット内のコンテナユニットに、マイクロミサイルCIWSランチャーポッドを装備。一度に大量のミサイルを発射することが可能で、敵機の迎撃や撹乱に使用された。

Ⓑビフォーズ マイクロミサイル 3連装ランチャー CIMM-3A

メインブースターユニットの前方には、交換式ウェポン・ベイが配置されている。通常はミサイル3連装ランチャーを装備するが、戦況に応じてビーム砲やMDE弾頭に換装することもできた。

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶VF-25S メサイア

変形シークエンス

VF-25も他のVFと同様、ファイター、ガウォーク、バトロイドの3段変形が可能となっているが、その可変システムは抜本的に見直されている。その最たるものがリニア・アクチュエーターシステムの採用で、これまでの機械的なアクチュエーターとは異なり、変形駆動の大半を電磁式としている。これにより、変形に要する時間を従来のVFの2／3以下に短縮することができた。また、変形機構の大幅な省略に繋がり、故障率も大幅に低下する結果となっている。

ファイター形態➡ガウォーク形態

VF-25Sのファイターからガウォークへの変形（写真はアーマードパック装着時）。電磁駆動の採用によって変形がスムーズとなっている。

ファイター形態➡バトロイド形態

1

COCKPIT

2

A 腕部を展開、90度下方へ下ろす
B 脚部を展開、90度下方へ下ろす

COCKPIT

3

A キャノピー部分が下方へスイング
B 機首先端が下方に折れる

COCKPIT

4

A 頭部がポップアップする
B 機首部分を胴体の接続部を軸にスイング
C 機首先端を90度に折る

COCKPIT

5

COCKPIT

5'

A 先端を折った機首部を、胴体パーツとの接続部を軸に回転させる

COCKPIT

6

A 腰部パーツが折り畳まれ、機首部に近づく

COCKPIT

7

COCKPIT

7'

A 背部に回り込む主翼が内側に折れる
B 機首裏側と腰部パーツがドッキング

COCKPIT

8

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-171

VF-17から発展した
多目的重可変戦闘機

機体解説

特殊任務用の重可変戦闘機VF-17ナイトメアの改修機にして2050年代に新統合軍の主力VFとなったのが、VF-171 ナイトメアプラスである。コストなどの問題から配備がままならないVF-19やVF-22に代わり、VF-11の後継機として配備が進んでいる。VF-171が目指したのは単なる高性能化ではなく、信頼性の高い低出力エンジンの採用によって原型機の欠点だった操縦性の改善がなされていたほか、操縦系アビオニクスの更新によってパイロットの負担が大幅に軽減されるなど、一般パイロットでも扱いやすい機体となった。これらの改修はデチューンとも捉えられるが、原型機譲りの耐久性やペイロードを持つうえ、2050年代末時の最終生産型では第三世代型アクティブステルス・システムを装備しており、その総合性能は元になったVF-17を凌駕している。

2046年に初飛行したVF-171は、2050年代に新統合軍の主力VFとして広く配備された。ただし軍は無人機を重視しており、戦闘の機会は少なかった。

戦闘爆撃機のVB-171や偵察哨戒用のRVF-171のほか、ミハエル・ブランの姉、ジェシカ・ブランも搭乗していた狙撃銃装備機(写真)、RVF系と思われる電子戦型や無人戦闘機指揮型なども実用化されている。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属 ▶ 新統合軍
全長 ▶ 15.65m
空虚重量 ▶ 12,150kg
エンジン ▶ 新中州重工/P&W/ロイス FF-2110A熱核タービンエンジン(初期型)×2
宇宙空間最大推力 ▶ 445.9kN×2
最高速度 ▶ M3.5+(高度10000m)/M21以上(高度30000m以上)
標準武装 ▶ マウラー REB-22ビーム砲×2/エリコーンAAB-7Bビーム砲×2/ガンポッド ハワードGU-14B×1/ビフォーズBML-02Sマイクロミサイルランチャー×2/SWAGエネルギー転換装甲システム(SWAG/RA155)/フレア&チャフディスペンサーシステム一式

サイズ比較

VF-1J
VF-171

主要パイロット

オズマ・リー
(統合軍在籍時)

開発系譜図

VF-17 ▶ VF-171 ▶ VF-171EX

VF-171 ナイトメアプラス

運用記録

統合軍の有人主力機として採用され、各移民星にも配備されたVF-171であったが、採用直後の状況下においては、無人機AIF-7Sで十分に対処できるケースが増加していたため、戦闘任務に投入されることは少なかったようだ。だが2048年、第117次大規模調査船団をバジュラが襲撃した事件では、VF-171によって編成される護衛部隊は、驚異的な能力を有するバジュラに対し、なすすべなく壊滅している。この事件の実態は政府によって伏せられた(公式には「フォールド断層に巻き込まれた遭難事故」とされた)こともあってか、VF-171の主力機としての能力への問題点が指摘されることはなかったようだ。だが2059年、バジュラがフロンティア船団を襲撃する事件が勃発し、船団を守るために投入されたVF-171は、やはりバジュラに対して有効な戦力となりえず(これは機体の性能のみならず、戦闘を無人機に頼っていたことによるパイロットの練度不足も一因だったが)、対バジュラを想定して改修されたVF-171EXナイトメアプラスEXの投入を待つこととなる。

2048年には第117調査船団に配備。当時、統合軍に所属していたオズマ・リーらが搭乗したがバジュラには敵わなかった。

標準装備

主力武器であるガンポッドは、ハワード社のGU-14Bもしくはゼネラル・ギャラクシー MC-17Cを装備。原型機となるVF-17は、ステルス性向上のため、ファイター形態ではガンポッドを脚内に収納していたが、VF-171では、状況に応じて、機体下部中央に懸下することも可能であった。また多目的重可変戦闘機として開発されたVF-171は、哨戒任務や狙撃任務など、様々な状況に対応した追加装備も開発されていった。

標準的な武装のVF-171。主翼外側から、対空ミサイル×1、6連装ロケットポッド、短射程ミサイル×3を装備。

▶各主翼下に3箇所(計6箇所)の装備懸架用ステーションを、エンジンナセル部には機体内兵器搭載システムコンテナを持つ。

無人機を無力化されたためバジュラに立ち向かったが、パイロットの練度不足もあって苦戦した。

機首延長や主翼後縁の形状変更などが施されたが、コクピットを含む原型機の基本構造は継承している。

ファイターモード

基本的構造は、原型機VF-17のそれをほぼそのまま継承した。機首の延長、主翼下兵装ステーションの活用などによりステルス性が低下したように見えるが、2059年時の最終生産型ではVF-19と同級の第三世代型アクティブステルス・システムASS PS155を装備し、ステルス性は向上している。

スクランブルの際には、ファイター形態で、電磁カタパルトによって発艦。前線にいち早く向かう。

▲機銃
コクピット両脇の機銃で、ドッグファイト時に多用された。基部が可動するため、他の形態でも使用可能。

アクティブステルス能力が向上したことや、迎撃任務増加のためか、主翼下にミサイル類を装備することも多い。

ガウォークモード

本機の変形機構は、原型機であるVF-17のものをほぼ踏襲しており、機体上面にレイアウトされた腕部・脚部ブロックが、それぞれ機体側面と機体下面へ移動することで、ガウォーク形態となる。なおVF-17のガウォーク形態には、通常のものに加え、腕部ブロックを機体上面に配したまま、肘部に収納された2門の中口径ビーム砲を露出させる「高速戦用モード」が備わっていたが、VF-171はこのモードは有しておらず、肘部ビーム砲自体も削除されている。

空戦中に変形を行うVF-171。主翼下に懸下されたミサイル他の武装は、ガウォーク、バトロイド両形態でも使用可能である。

▲YF-21などの斬新な設計で知られるゼネラル・ギャラクシー製としては無難な形状で、腕の自由度も高い。

バトロイドモード

ガウォーク形態同様、VF-171のバトロイド形態への変形機構も、原型機であるVF-17に準じている。ただし、VF-17よりも機首が延長されている関係で、バトロイドへの変形時には、機首の先端部(バトロイドの股間部に位置する)が機体内部に折り畳まれる機構が追加された。なおVF-171ではファイター形態での空力特性を向上させるために、前述の機首の延長に加え、脚部エンジンブロックの厚みを減らすなどの設計変更が行われており、バトロイド形態ではVF-17よりも全体的に細身のプロポーションとなっている。後に開発されたVF-171EX用のアーマードパックが、VF-17用のスーパーパーツとは全く異なる設計だったのは、こうしたプロポーションの変更も影響していたと思われる。一方で本機にはVF-17では未搭載だったピンポイント・バリアも導入されており、耐弾性および白兵戦能力は、VF-17よりも大きく向上している。

ハワードGU-14Bガンポッドを撃つVF-171。堅実な設計のGU-14Bだったが、MDE弾頭の完成まではバジュラ相手には火力不足であった。

▲背部中央や脛部には補助スラスターらしいノズルが見える。

▲機首の延長に伴い、股間部の形状が変更された。頭部はVF-17Dを踏襲している。

バトロイド形態での白兵戦では、ピンポイント・バリア・パンチでバジュラを撃破したこともある。

関連事項

EXTRA REPORT

RVF-171

VF-171の機体上部にレドーム、下部に大型センサーを搭載した派生型であるRVF-171は、偵察や哨戒、前線での航空管制などを担う機体で、平時でも船団の周囲を哨戒飛行している。

長距離偵察時には、フォールド・ブースターを2基装備する。

マクロス・ギャラクシー

バトル・ギャラクシーのブリッジ。艦の中核となるため、防衛用として大量の火砲が設置されている。

▼バトル・ギャラクシー（要塞艦）

▼艦底部

VF発進用のカタパルト・デッキや、可変機能を持つこの攻撃空母が、マクロス・ギャラクシー船団を守る大きな盾となっている。

民間主導で開発された圧倒的技術力を誇る宇宙移民船団

艦体解説

マクロス・ギャラクシーは、ゼネラル・ギャラクシー社が建造費の大半を提供して完成した、新マクロス級としては第21番目の移民船団である。歌姫シェリル・ノームの出身地としても知られる本船団は、マクロス・フロンティア船団の数年前に出航し、本艦メインランド以下、ステルス攻撃空母のバトル・ギャラクシー、戦闘艦カイトスや空母ダルフィムなどで編成されている。サイバネティクスやインプラント技術など、銀河系でも屈指の最先端技術が導入され、乗員も大半がサイボーグ化（インプラント化）している。そのため、船団自体もサイボーグに最適化された電脳世界となっていた。

マクロス・ギャラクシーの本艦、メインランド。特殊なフォルムを持つこの艦を中心として、マクロス・ギャラクシー船団が編成されている。

ギャラクシー船団を護衛するために配備された、戦闘艦カイトス（中央）、空母ダルフィム（左）。同型の艦が複数見られた。

判明している艦名

- ▶本艦メインランド
- ▶戦闘艦カイトス
- ▶ステルス攻撃空母バトル・ギャラクシー
- ▶空母ダルフィム

データ

※データはバトル・ギャラクシーのもの

全長▶1681m（要塞艦・アンテナ含まず）
全高▶1186m（強攻型）
全幅▶521m（要塞艦）／747m（強攻型）
全備重量▶1655万t
エンジン▶熱核反応エンジンマトリックス
推進機関▶OTMマクロスヒートパイルクラスターシステム
標準装備▶ガンシップ・アドバンスタイプ／連装誘導対艦重ビーム砲×12／近接ビームファランクス／対艦用反応弾頭ミサイルランチャー／近接防御用マイクロミサイルファランクス

サイズ比較

SDF-1
バトル・ギャラクシー
メインランド

Mechanic Sheet
メカニックシート
マクロス・ギャラクシー

運用記録

西暦2059年、51番目の超距離移民船団であるマクロス・ギャラクシー船団は、船団出身の歌姫シェリルを派遣するなどして、後発のマクロス・フロンティア船団との交流を深めていた。だが、バジュラの急襲により船団の大半が別の宙域にフォールドし、行方不明となっている。バトル・ギャラクシーは、バジュラを操るグレイス・オコナーによって接収され、マクロス・フロンティア船団との決戦で運用された。

グレイスは、バトル・ギャラクシーの内部にランカ・リーを拘束。その歌の力を戦闘に利用しようとした。

強攻型

バトル・ギャラクシーは、要塞艦から人型である強攻型への変形が可能である。この形態では、ステルス性能が優先される要塞艦時にウエポンベイに収納されている全ての兵装が使用可能な状態となった。可変戦闘機(以下、VF)部隊や戦艦を容易に撃破できるほどの戦闘力を保有している。

バトル・フロンティアと格闘戦を繰り広げたが、マクロス・アタックを受けてマクロス・キャノンと左腕が破壊された。

バジュラに総攻撃をかけたマクロス・フロンティア船団に対し、マクロス・キャノンを発射して大きな損害を与えた。

バトル・ギャラクシー

要塞艦と強攻型の2形態に変形可能な、大型ステルス万能可変宇宙空母。6隻の艦で構成されるなど、バトル・フロンティアと共通の構造を持つが、内装や電子機器類は異なっているようだ。

▲ガンシップ
要塞艦では前方底部に設置されている大型火砲。強攻型では本体からエネルギーが供給されるマクロス・キャノンとなり、最大出力と連射性が向上する。

▲強攻型における関節の可動域は広く保たれている。

◀▶背面から見た強攻型。脚部にカタパルト・デッキが見え、脚部の底にスラスターを有する。

導入技術

ギャラクシー船団の乗員の大半は、情報や感覚をインプラントによって管理しているため、船団の本艦メインランドには通信施設や娯楽施設はなく、牧場施設や海洋養殖艦は合成食料生産プラントに改装されている。その結果、船団全体の生産力が増し、VF-27などの生産・開発が可能となったのである。

本艦のメインランド。フロンティア船団の居住区・アイランド1とは、構造や設備を含めて全く異なるシステムとなっているようだ。

▶カイトス

◀▲防衛用に配備されていたデネブ級重巡洋艦。バジュラにはほぼ無力で、バジュラ空母に撃破された。

▶ダルフィム

◀▲空母ダルフィム。バジュラの攻撃によって危機に瀕していたが、マクロス・クォーターに救出された。

EXTRA REPORT

関連事項

ギャラクシー船団の艦載機

マクロス・フロンティア船団との戦いで出撃した艦載機が、無人機AIF-9V ゴーストである。無人機であることを活かした驚異的な高機動性によって、新統合軍機VF-171EXを圧倒し、S.M.SのVF-25小隊などを苦しめている。

▶ゴースト
圧倒的な機動性能を発揮するAIF-9V。「ブイナイン」の通称を持つ。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-25F

S・M・Sの麒麟児が受け継いだ アタッカー仕様のVF-25バリエーション

機体解説

VF-25メサイアは、YF-24エボリューションを元にマクロス・フロンティア船団が独自に開発した可変戦闘機（以下VF）であり、そのカスタムバージョンのひとつが、このVF-25F（F型）である。VF-25のうち民間軍事プロバイダーS.M.Sが試験運用を行った先行試作機は、様々な要求を満たすためF型に限らず細部に改良が施されており、カスタム機としての側面も有していた。なお、このカラーリングはS.M.Sの早乙女アルト准尉が運用した機体で、VF小隊においてアタッカーの役割を果たした機体として知られている。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶S.M.S
全長▶18.72m
全高▶4.03m（主脚含まず）
全幅▶15.50m（主翼展開時）
空虚重量▶8,450kg
機体設計最大荷重▶27.5G
エンジン▶新星インダストリー／P&W／RR社製FF-3001AステージⅡ熱核タービンエンジン×2
宇宙空間最大推力▶M1620kN+×2
最高速度▶M5.0+（高度10000m）
標準武装▶25mm機銃（ラミントンES-25A）／25mmビーム砲（マウラーROV-25）換装式×2／12.7mmビーム機銃（マウラーROV-127C）×2／新型ガンポッド58mm（ハワードGU-17A）×1／エネルギー変換装甲SWAGシステム一式／ピンポイント・バリア・システム一式／アクティブステルス・システム一式／多目的ディスチャージャー（MDP／S-02）

開発系譜図

VF-19 ▶ VF-24 ▶ VF-25

サイズ比較

VF-1J
VF-25F

主要パイロット

早乙女アルト

Mechanic Sheet

メカニックシート

VF-25F メサイア

運用記録

VF-25は2059年の時点でS.M.Sによる試験運用がほぼ完了し、量産段階に移行しつつあった。ただし、新統合軍には配備されておらず、S.M.Sが残る性能評価試験と並行して運用を継続していた。当初はこのカラーリングの機体はスカル小隊のヘンリー・ギリアム大尉によって運用されていたが、フロンティア船団への初めてのバジュラ襲撃で彼が戦死した後、残された機体を早乙女アルト准尉が受け継ぎ、スカル小隊4番機(コールサイン「スカル4」)を担った。同機はギャラクシー船団救援作戦で失われるが、同じ仕様の機体が再びアルトに与えられ、スカル小隊の一角を支えた。

戦死したギリアムの機体にまだ学生のアルトが乗り込み、ランカ・リーを救っている。

シェリル・ノームのガリア4公演では単機で護衛を務めた。その際、テムジンのクァドラン・レアと一騎討ちを演じ、これを撃破している。

標準装備

標準武装として、胴体部に固定銃座2基(ラミントンES-25A 25mm機銃とマウラーROV-25 25mmビーム砲を選択装備、混成も可)と、頭部のマウラーROV-127C 12.7mmビーム機銃2基の固定武装2種を装備。携行武装には、ハワードGU-17A 新型ガンポッド58mmを装備している。

▲ハワードGU-17A 新型ガンポッド58mm

ガンポッドは射撃時に排熱のため図のように下部装甲板の展開も可能。後にMDE弾頭に対応したGU-17Vに改良された。

◀マウラーROV-127C 12.7mmビーム機銃

ヘッドモニターブロック側部の12.7mmビーム機銃はバリエーションによって搭載数が異なり、F型では左右に1門ずつとなる。また、この武装は長距離レーザー通信機能も備えている。

▼AK/VF-M9 アサルトナイフ

シールド内部にはガーバー・オーテック製アサルトナイフを収納。全長1.65mで、バトロイドのマニピュレーターで扱う。

コクピット

VF-25は操縦系にエクステンダー・ギアシステム(以下EX-ギア)を制式採用した初の可変戦闘機で、加速度を軽減するISCの効果と合わせて操縦性の向上を実現している。コクピットはEX-ギアをインターフェイスとする構造で、EX-ギア装着者が搭乗するとパイロットの自動認識とシートの調整が行われる。また、機体の操縦支援コンピュータとメモリ・チップには、EX-ギアが学習したパイロットの操縦データが共有される。なお、通常は単座だが、後部パネル下に予備シートを備え、EX-ギア未装着のパイロットでも予備シートからの操縦が可能となっている。

パイロットがコクピットに搭乗するとEX-ギアがシートモードに変形し、パイロットにとって最適な角度で固定される。

パイロットがEX-ギアを装着していれば、コネクトスレイブ機能を用いて機外からの遠隔操縦も可能となっている。

ガウォークモード

VF-25が運用されたフロンティア船団は航行中であったため、本機が惑星上に展開する局面はほとんどなかった。だが、アイランド1内でのバジュラとの戦闘の際には、ガウォーク形態が頻繁に用いられている。本機のエンジン(FF-3001A)は従来のVF用エンジンに比べても突出した出力を誇り、空力特性に劣るガウォークでも高度を維持することが容易であった。そのため、重力下での飛行時にガウォークに変形することも多く、ドッグファイトの最中にファイターからガウォークに切り替えるといった運用法が見られた。

アルトがギリアム機に搭乗した際には、ガウォークのままアイランド1内でバジュラの追撃をかわし、両腕部を失いながらもランカを助けた。

Dバルスバーストによって遭難したアルト機は、航法系がホワイトアウトして飛行不能となったため、ガウォークでガリア4の密林を移動した。

ガリア4におけるVF-27とのドッグファイトでは、クルビット(機動方法のひとつ)からガウォークに変形して敵の後背を取る機動を見せた。

◀ガウォークでは腕部が展開し、シールド(アーマードパックと同じ第2世代型エネルギー転換装甲材が用いられている)が使用可能となる。

▼足首に内蔵されたノズルの付け根には、ノズル角度制御用/サスペンションアクチュエーターが装備されている。

▶脚部を展開すると、内側の未装甲部分が露出する。なお、腕部を収納したままでもガウォークとしての運用は可能である。

ファイターモード

VF-1直系のシンプルなデザインが特徴のファイター形態では、主翼や尾翼による空力制御に加え、様々な機構を用いて機体制御が行われる。機首上部のボーテックス・コントローラーによる方向制御や、BLC境界コントロール、可変ノズルによる推力軸変更、さらには高機動スラスターやエアブレーキを使った制御を併用する(一部は大気圏内飛行時のみの機能だが、VF-25は大気圏内飛行特性も重視されていた)。この複雑な挙動で生じるGをISCで軽減することで、VF-25は無人機に迫る高機動を可能としていた。なお、F型はバリエーションの中でもピーキーな仕様で、それだけにパイロットの操縦技術が色濃く反映されたと言われる。

VF-25Fのファイター形態の優れた大気圏内飛行性能は、ガリア4における空戦でも発揮された。

▶ブレンデッドウィング・ボディと可変後退翼が機体構造の特徴として挙げられる。また、単体での大気圏離脱と突入が可能で、大気圏突入時には主翼を折り畳む。

▶機首レドームにはL.A.I社製の耐熱複合素材LC-212が用いられている。また、機首の下部左右にはAPN-2000アンテナが配されている。

▶主翼先端や機首など、機体各所に高機動スラスター(P&W HMM-9)のノズルを配している。また、主翼前面にはアクティブステルス・アンテナが内蔵されている。

▲可変ノズルは上下左右に角度を変更可能で、基部周囲にスラストリバーサーを、先端にバトロイド用の接地圧モニターと環境モニターを備える。

▶エンジンポッド外側のバルジはエア/ダイブブレーキとして機能し、内側に多目的ディスチャージャー(MDP/S-02)を装備する。

バトロイドモード

バトロイド形態はリニアアクチュエーターの採用による非接触構造化により、耐久性が向上している。さらに、機体外装に複合素材を用いて応力外殻構造としたことで、内部フレーム構造が簡略化され、軽量化にも成功していた。これらは、複雑な動作を必要とするバトロイドの性能の向上にも寄与しており、F型を含めたVF-25は従来のVFに比べて格闘戦性能が上がっている。また、VF-25はエネルギー転換装甲(SWAG)と対光学兵器用気化装甲を併用して防御力を強化している。後者は機体に高エネルギーが照射された場合、装甲表面のパッシブステルスコーティング剤が瞬時に気化してそれを拡散させるというもので、ビーム機銃程度の攻撃なら効果を30%ほど減衰させると言われる。本機がビーム機銃と実体弾機関砲を換装可能な点も、実用化されつつある同装甲への対策という意味を持っていたのである。

動きが制限される狭い場所ではバトロイド形態が有効で、ギャラクシー船団救援作戦でバジュラ空母内に潜入した際には同形態で深部に進攻している。

アサルトナイフを用いた白兵戦は敵性パワードスーツに対しても有効で、ガリア4ではテムジンのクァドラン・レアをナイフの一撃で無力化した。

▶アルト機は白地に赤と黒のラインマーキングが施された独自のカラーリングが特徴。ヘッドユニットのカメラ部カバーは横に長いバイザー状となっている。

▲手首部

▶背部にはファイター胴体後部ユニットと、主翼を収納したウィング・グローブが位置する。なお、主翼が失われてもバトロイドの挙動にはほとんど[illegible]はない。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-25F

機体解説

VF-25は、従来の主力VFと同様、任務に応じて機能拡張モジュールを換装できる高い汎用性を持つ。代表的なモジュール、SPS-25S/MF25(いわゆるスーパーパーツ)は、化学反応ロケットエンジンと燃料タンク、各種武装、追加装甲パネルなどのユニットからなる。燃料·武装を満載した状態でも通常のVF-25を上回る加速性能を有し、またある程度機体が軽くなった状態ならば、瞬間的に30G(機体設計限界強度の倍)近い加速度を発揮できる。ただし、最大加速時は約120秒で燃料を使い切るため、効果的な運用には相応の技量が要求される。なお、各ユニットはデッドウェイトとなった時点で廃棄することを想定しているため、製造コストは抑えられている。

アーマードパックAPS-25A/MF25は、重装甲と火力の増強を図るモジュールで、全形態でのエネルギー転換装甲の使用が可能となり、重巡洋宇宙戦艦に匹敵する火力も兼ね備える。ただし、性能に応じたコストの高さを誇るため、S.M.Sでの運用に当たっては艦長などの現場指揮官の許可が必要となった。

スーパーパーツの装着によって高速進出能力が大幅に向上し、武装の強化と生存性の向上も実現される。

バジュラとドッグファイトを演じるスーパーパーツ装備のアルト機。その加速性能を活かして前衛を務めた。

アーマードパックは重戦闘攻撃機の特性を付与するモジュールで、ノーマル状態と同等の機動性も確保される。

「救世主」のまとう2領の鎧
高機動·重武装の機能拡張モジュール

VF-25F メサイア

スーパーパーツ

運用記録

SPS-25S/MF25は、多用途化を目的としたVF-25専用性能拡張モジュールのひとつとして開発が進められ、フロンティア船団においては同船団の独自仕様に基づいて生産と配備が行われた。S.M.Sでは一般機の標準装備として運用され、スカル小隊においてアタッカーの役割を担ったアルト機も、基本的にスーパーパーツを装備して運用された。

武装

スーパーパーツの武装はメインブースターユニットの交換式ウェポン・ベイと可動式コンテナユニットに配される。

A ラミントン 近接マイクロミサイル CIWSランチャーポッド HMM-5A

胸部装甲ユニットに付随するコンテナユニットには、近接マイクロミサイルCIWSランチャーポッド(ラミントン HMM-5A)を装備している。

B ビフォーズ マイクロミサイル 3連装ランチャー CIMM-3A

メインブースター前部の交換式ウェポン・ベイには本武装のほか、強行偵察ユニットやビーム砲、反応弾頭ミサイルコンテナなどを装備可能。

データ

- **型式番号** ▶SPS-25S／MF25
- **開発** ▶新星インダストリー社
- **標準運用重量** ▶28t(ロケット燃料約15トン、マイクロミサイルポッドなどの重量を含む)
- **初期最大加速** ▶約15G
- **メインブースターエンジン** ▶SLE-7A(五菱重工製)×4
- **サブブースターエンジン** ▶SLE-3A(五菱重工製)×1
- **ブースターエンジンの合計最大推力** ▶2,940kN
- **高機動バーニアエンジン** ▶SLE-1C(五菱重工製)×10
- **武装** ▶ビフォーズマイクロミサイル3連装ランチャーCIMM-3A×2／ラミントン近接マイクロミサイルCIWSランチャーポッド HMM-5A×2／インテーク装甲ユニット(可動式マイクロミサイルCIWSコンテナユニット×2含む)×2／主マニピュレーター用追加装甲ユニット×2／エンジンブロック追加装甲ユニット×2／股関節部装甲ユニット×1／尾部ブースターユニット×1

※マイクロミサイルの弾頭は対バジュラ用MDE弾頭に換装可能

ファイターモード

◀メインブースターユニットは可動式ノズルを備え、稼動には基本の特殊燃料だけでなく、本体エンジンからのエネルギー供給も補助的に用いられる。

▲エアインテークやエンジンナセルが装甲パネルで保護されるため、耐弾性も向上する。但し、総合的な防御性能はアーマードパックには及ばない。

▲メインブースターユニットは主翼基部を挟み込んで装着される。前部の交換式ウェポン・ベイにはビーム砲やマイクロミサイルポッドを装備可能。

ガウォークモード

スーパーパーツで加速性能が向上する反面、それを御するガウォークの機動が重要となる。

バトロイドモード

▶バトロイド時には胸部や股関節部、脚部などが装甲パネルで覆われた状態となる。

▲変形時、メインブースターユニットはウィング・グローブとともに背部に移動する。CIWSランチャーポッドは肩部上方にアームで保持される。

アーマードパック

運用記録

APS-25A/MF25は本来、小隊長クラスにしか使用許可が下りない装備である。だが、アルト機はガリア4の反乱直後に発生したフロンティア船団へのバジュラ襲撃とバジュラ母星における戦闘で、同パックの使用を許可された。特に後者では、ブレラ・スターンのVF-27γ ルシファーと共闘し、グレイス・オコナーの打倒を果たした。

バジュラ母星の戦闘ではVF-27γと共にバジュラ・クィーンに肉薄し、グレイスが支配した頭部を撃破した。

データ

- **新型式番号** ▶APS-25A/MF25
- **開発** ▶新星インダストリー社
- **標準運用重量** ▶40t(ロケット燃料約15t、ミサイルなどの重量含む)
- **VF-25標準出撃重量(アーマードパック装備時)** ▶約52t
- **最大加速** ▶約11.5G+(VF-25の機体エンジンも最大推力で併用)
- **メインブースターエンジン** ▶SLE-7A/A(五菱重工製)×4
- **ブースターエンジンの合計最大推力** ▶2,940kN
- **高機動バーニアエンジン** ▶SLE-1C(五菱重工製)×10
- **武装** ▶可動式ラミントンマイクロミサイルCIWSランチャーポッドHMM-5A×2／ラミントン近接マイクロミサイルランチャーポッド2重装填タイプ(脚部用)×4／ハワード200mm対装甲用高初速ロケット弾15連装ポッド×2　ROV-22 22mmビーム機銃×4／オットー／センチネル57mm対艦対空両用速射ビーム旋回砲塔(自律射撃可能)×2／八洲重工 ビーム砲・強化型エネルギー転換装甲・ピンポイント・バリア エネルギー供給用大容量キャパシター複合ユニット C-207×2／複合センサーアンテナ(ASSA-021A)

※必要に応じて更に4～8基の通常弾頭あるいは反応弾頭の大型対艦ミサイルの追加装備が可能。
※マイクロミサイルの弾頭は対バジュラ用MDE弾頭に、速射ビーム砲はMDE粒子ビーム砲に換装可能。

EXTRA REPORT 関連事項

フォールド・ブースター

VF-25はAVF以降の機体に準じた単独フォールド性能を有し、スーパーパーツとフォールド・ブースターの併用が可能である。アルト機はシェリル・ノームのガリア4慰問に同行する際にこれを用いた。

フォールド・ブースターを装備するアルト機。形状は従来のフォールド・ブースターとほぼ同じである。

シャトルに随伴するアルト機。フォールド後ブースターは切り離されるが、再度使用されることもある。

ファイターモード

同パック装備時には15～20分程度の戦闘機動が可能とされる。なお、船団へのバジュラ奇襲の際には反応弾の使用も許可された。

▲スーパーパーツと同型のエンジンにチューンを施したものを搭載し、ノーマル機と同等の加速・運動性能を長時間維持することを重視している。

ガウォークモード

アーマードパックを装備したアルト機のガウォーク形態。アドバンスドタイプの新型エネルギー転換装甲で保護され、ノーマル状態の数倍に相当する強度を誇る。最大効率作動時には重巡洋宇宙戦艦に匹敵する。

ガウォークに変形して制動をかけるアルト機。部分的にパーツを排除することも可能で、このアルト機はエンジンポッドを外している。

バトロイドモード

ミサイル発射時

肩部と脚部のミサイルを一斉発射するアルト機。火力が前面に集中するバトロイド形態では、こうした運用が多く見られた。

◀アーマード装備アルト機のバトロイド形態。バジュラ母星の戦闘では本装備に加え、クラン・クランのVF-25GからSSL-9B ドラグノフ・アンチ・マテリアル・スナイパーライフルを譲り受けて戦った。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-27

サイボーグを機体の核とする新機軸のVF

機体解説

サイバネティクスの分野で他を凌駕したマクロス・ギャラクシー船団は、サイボーグによる運用を前提とした可変戦闘機(VF)の開発を進めた。VF-27はその設計コンセプトを体現する機体であり、YF-24エボリューションの設計をベースに独自の発展を遂げている。慣性制御システムISC(Inartia Store Converter)や新世代型ステージII熱核反応タービンエンジン、さらにサイボーグパイロットを前提に最適化された操縦システムなど、従来のVFとは一線を画す機構が多く盛り込まれている。なお、ここで紹介するVF-27γは、本機を限界までチューンしたカスタム機である。

データ

※データはファイター時のもの

所属▶調査中
全長▶18.8m
空虚重量▶12,080kg
エンジン▶新中州/P&W/RR/MG FF-3011/C ステージII熱核反応タービンエンジン(宇宙空間最大推力1377kN)×4
高機動スラスター▶P&W HMM-9
大気内最大速度▶M5.2+(高度10,000m)
標準武装▶マウラー ROV-20 20mmビーム機銃×1/ラミントンES-25A 25mm高速機関砲(マウラー ROV-25 25mmビーム機関砲とどちらか選択装備)×2/センチネルHBC/HS-35B 35mm重ビーム機関砲×2/BGP-01βビームガンポッド/ビームグレネード×1/ビフォーズBML-04B 内蔵式マイクロミサイルランチャー×4

サイズ比較

VF-1J
VF-27

開発系譜図

VF-19
▼
YF-24
▼
VF-27

主要パイロット

ブレラ・スターン

運用記録

VF-27はマクロス・ギャラクシー可変戦闘機開発工廠(通称「ガルド・ワークス」)が設計と製造を担当。2057年12月11日に機動空母「カトマンズIII」を母艦として原型機の初飛行が実施された。ただし、ギャラクシー船団が関連情報の開示を拒んでいたため、新統合軍は2059年の時点で本機を制式機とは認めず、試作機「YF-27」として扱っている。また、フロンティア船団を中心とする対バジュラ戦において、ブレラ・スターン少佐率いるアンタレス小隊(一説にはギャラクシー船団第52戦闘航空団)が新統合軍ギャラクシー特別派遣部隊として戦線に加わり、突出した性能を見せ付けた。なかでも、ブレラ機(コールサイン「アンタレス1」)はS.M.SのVF-25 メサイアを凌ぐ高性能を誇示している。

ブレラ機はバジュラ母艦内で早乙女アルトと遭遇したが、この時点では正体不明機、アンノウンとして扱われた。

最終決戦ではアルトのVF-25Fと共闘して敵の中枢を強襲し、バジュラクィーンの撃破に成功している。

標準装備

マウラー ROV-20 20mmビーム機銃

ファイター形態時の後方警戒用とバトロイド形態時の補助武装として、モニターヘッドブロックに20mmビーム機銃1基を備える。さらに、主翼付け根に25mmビーム機銃(25mm高速機関砲との選択式)や、主翼エンジンポッドに35mm重ビーム機関砲(ミニガンポッドとの選択式)などの多彩な内蔵武装を有し、基本武装だけでも高い火力を誇っている。

BGP-01β ビームガンポッド/ビームグレネード

ビームガンポッドは大出力のビームグレネードとしての機能も有する新型の武装である。また、のちに対バジュラ用に強化され、重量子反応ビーム(MDE粒子ビーム)仕様に改装されている。

コクピット

サイボーグパイロットの脳神経と機体のセントラルコンピュータを光学回路で直結する操縦システムを採用し、機体制御時のタイムロスを軽減している。なお、コクピット内には手動操縦用の機器も備えられているが、非常時にしか用いられない。

▼ファイター時

ファイターモード

主翼にエンジンポッドを備えるファイター形態の特徴的な外観は、本機の高い機動性能を表している。メインエンジンのFF-3011/Cは、単体の最大推力ではVF-25のFF-3001Aにやや劣るが、それを4基搭載することでVF-25を上回る性能を得ている。また、4基をフル稼働させた余剰出力で、本形態でもピンポイント・バリアやエネルギー転換装甲が使用可能となっている。さらに、それらを利用すれば機体の耐熱限界をカバーでき、短時間ならばマッハ9以上の大気圏内最高速度を発揮できる。ブレラ機の場合はさらに、エンジンレスポンスや最大推力の向上など、設計限界までチューンされており、扱いやすさを犠牲にした高性能機となっている。

ゴーストX-9を超える有人戦闘機を目指したVF-27は、その開発目標に違わぬ優れた機動性能を有している。

スーパー・フォールド・ブースターに対応しており(上面に装備)、単体でのフォールドが可能となっている。

▲機首には4枚の高機動カナードを装備する。また、有視界操縦が不要なことから、コクピットはエネルギー転換装甲製のキャノピーで保護されている。

▶巡航モードでは、エンジン4基のうち本体側2基のみを用いる。また、大出力ゆえに主翼のほぼ全面が冷却システムとなっている。

ガウォークモード

ガウォーク形態の特徴は、展開した脚部エンジンの3枚翼可変ノズルが生み出す柔軟な機動性にある。このノズルの基部にはスラストリバーサーが組み込まれており、急減速も容易である。さらに、水平方向への推力を有する主翼部のエンジンによって、双発式のVFでは難しい複雑な機動も可能となっている。無論、その性能はISCの耐G機能や、サイボーグパイロットと機体のリンクで得られる高い処理能力に支えられていることは言うまでもない。

他の機体と同じく、ガウォーク形態は重力下での運用に適しており、ガリア4で極秘任務に携わっていた際に用いられた。

フロンティア船団を去ろうとしたランカ・リーに同行した際にも、ガウォークを用いている。なお、このケースでは機外からの遠隔操作が行われた。

◀同じようにYF-24をベースとするVF-25よりも大型で、脚部が細長い点が特徴となる。また、機首や腕部、脚部のフォルムをはじめとする機体外観も大きく異なる。

バトロイドモード

VF-27は、同じくYF-24を基にするVF-25と姉妹機の関係にあり、それはVF-25に共通するリニア・アクチュエーターの変形機構にも表れている。非接触構造の電磁式変形システムを採用したことで変形時間の短縮と脆弱性の克服を実現した本機は、バトロイド形態においてもVF-25と同等かそれ以上の格闘戦性能を発揮した(YF-21で採用されたBDIシステムから発展した脳波操縦システムを備えることで、反応速度においてはVF-25を凌駕していたと見られる)。また、大型化による機内容積の増大は搭載武装にも影響しており、スーパーパーツ装備のVF-25に匹敵する火力を有していた。特にブレラ機は、前述の改修に加えて搭載AIの処理能力向上やメモリーバンクの容量拡大などの性能強化も図られており、他の追随を許さない性能を示した。また、のちにバジュラの進化に合わせ武装強化が施された(マイクロミサイルと25mm機関砲がマイクロ・ディメンション・イーター技術を応用したMDE弾頭に換装された)。

VF-25と同じく格闘戦用のナイフを装備しており、バジュラ母艦に捕らわれたランカのカプセルを切り離して救出する際に用いている。

バトロイド形態でビームガンポッドを用いる際には、両腕で保持して射撃を行うことが多かった。ただし、速射を行うケースでは片腕で保持した。

単機でバジュラの母星に接近したブレラ機は、バジュラの大群に包囲されながらも、高い機動性能を発揮して互角以上に渡り合った。

▲バトロイド形態ではエンジンポッドを含めた主翼が背部に折り畳まれるため、全体的なシルエットはスーパーパーツ装備のVF-25の同形態に近いものとなる。

▲腰部や上腕部の形状にはVF-25との共通点が見られ、同じYF-24系列機であることがうかがえる。また、ビームガンポッドのサイズはバトロイドの全高と大差なく、いかに巨大な武装かがわかる。

▲格闘戦用ナイフは左腕部シールドの先端から展開する構造が採られている。なお、主翼部エンジンポッドは、全周可動ノズルによって推力偏向が可能である。

VF-27β(指揮官機)

機体解説

YF-24エボリューションをベースとしたVF-27ルシファーは、マクロス・ギャラクシー船団が主力機として開発・運用していた可変戦闘機(VF)で、限界まで性能をチューンしたブレラ・スターンのVF-27γのほか、標準仕様のVF-27βが確認されている。サイボーグパイロットを前提とした操縦システムや、機体を保護する管制制御システムISC(Inartia Store Converter)などを搭載しており、S.M.Sが運用した最新鋭機、VF-25 メサイアと双璧をなす機動・戦闘性能を獲得していた。また、サイボーグパイロットが搭乗して操縦するだけでなく、電子的に機体とリンクされているパイロットが外部から遠隔操作することも可能となっている。のちにバジュラの死骸から採取されたフォールド・クォーツを用い、武装強化を図っている。

4発のエンジンや機首に備えた4基の高機動カナードなどにより、VF-25よりも一回り大きい機体ながら高い機動性を実現している。

ISCの搭載により、20Gを超える高機動時となっても、サイボーグパイロットの安全性を確保することができた。

運用記録

VF-27は、西暦2057年に原型機が初飛行を行い、その後2059年に繰り広げられた対バジュラ戦において運用が確認されている。対バジュラ戦では、フロンティア船団の新統合軍ギャラクシー特別派遣部隊にブレラのVF-27γを中心としたVF-27の部隊(アンタレス小隊/ギャラクシー船団第52戦闘航空団)が加入した。そのほか、グレイス・オコナーが自ら搭乗した記録もある。

ブレラ機(写真中央)と共に行動するアンタレス小隊所属のVF-27β。バジュラに対しても果敢に戦闘を行った。

スーパーパーツ装着時のVF-25アルト機を追撃するギャラクシー船団所属のVF-27β。

ファイターモード

肉眼による有視界戦闘は想定していないため、キャノピーは装甲に覆われている。但し、透過キャノピーに交換し、非サイボーグが搭乗することも可能だった。

▲カラーリングがブレラ・スターンモデルとは異なる。

▶ファイター形態でもピンポイント・バリアやエネルギー転換装甲の使用が可能。

ブレラのVF-27γ同様、機体底部にガンポッドを設置することが可能である。

ガウォークモード

細長く延びた脚部が特徴のガウォーク形態。脚部に備えた2基のエンジンに全周可動式のノズルを3基持ち、本形態での優れた制御性能を確保している。

▲脚部エンジンの全周可動式ノズルにはスラストリバーサーが装備されており、加速・減速を容易としている。

▼優れた機体制御能力を持つため、その活動範囲は広い。

▲変形には電磁式変形システムを採用。スムーズな変形が可能となった。

Mechanic Sheet
メカニックシート

VF-27 ルシファー

バトロイドモード

VF-27β指揮官機には、スーパーパーツ装着時のVF-25と同程度の火力が搭載されている。ブレラのVF-27γと同様、BGP-01βビームガンポッド／ビームグレネードを装備しており、高い戦闘力を誇っていた。また、バジュラ対策のためにマイクロ・ディメンション・イーター（MDE）テクノロジーを使った兵装強化が図られ、マイクロミサイルや25mm機関砲の弾種をMDE弾頭に変更、ビームガンポッドも重量子反応砲に強化・改装されている。

複数のVF-27βがバジュラに対してビームガンポッドを発射。その破壊力でバジュラを釘付けにした。

バトロイド形態時に露出する頭部。頭部には武装として20mmビーム機銃を1基備えている。

◀▼主翼が折り畳まれる構造がVF-27のバトロイド形態の特徴。標準装備としてビームガンポッドのほか複数の火器に加え、左腕部のシールド先端にナイフなどを設置。近接戦闘にも対応した。

コクピット

コクピットはサイボーグパイロット用に設計・開発されており、YF-21に搭載されたBDIシステムをベースとしたものである（本機の開発元は通称「ガルド・ワークス」と言われている。その名の通り、BDIシステムの構築に関わった惑星エデンのYF-21開発主任兼パイロットだったガルド・ゴア・ボーマンの関係者が本機体の開発に多数参加している）。

▼ファイター時のコクピット。サイボーグパイロットは多数の機器によってシートに固定された状態となる。

◀サイボーグパイロットの脳に直接情報を送るため、ディスプレイなどの機器はオミットされている。

▲サイボーグパイロットと機体のセントラルコンピューターを直結したことで、極めてスムーズな操縦と状況判断が可能となっていた。

関連事項
EXTRA REPORT

AIF-9V

マクロス・ギャラクシー船団が運用したゴースト（無人機）が、AIF-9Vである。新統合軍が投入したAIF-7Sの次世代機であり、無人機の特徴である圧倒的な機動性能は本機にも受け継がれている。バトル・ギャラクシーに搭載されており、グレイス・オコナーに操られ、フロンティア船団との最終決戦に投入されている。

「ゴーストV9（ブイナイン）」との通称を持つ。AIF-7Sと同様のサイズであった。

▶機首などにセンサーを備えており、リアルタイムで移り変わる戦場を逐一確認することができた。

◀かつて開発中止となったゴーストX-9を踏襲したフォルムとなっている。武装にはガンポッドとミサイルを装備。

▼小型かつシンプルな形状の無人戦闘機ながら、その機動性能によって高い戦闘力を誇る。

Mechanic Sheet メカニックシート

▶VF-171EX ナイトメアプラスEX

F Sheet 03 A

Illustration by Hidetaka Tenjin / CG works by Masato Takahashi

VF-171EX

バジュラ戦に対応したVF-171の改修機

●主要パイロット

早乙女アルト

機体解説

バランスの取れた性能と優れた操縦性を兼ね備えたVF-171 ナイトメアプラスでも、驚異的な能力を有するバジュラには対抗できなかった。その状況を打破すべくVF-171を改修した機体が、このVF-171EXである。本機はEX-ギア(エクステンダーギア)・システムの導入と対バジュラ兵器の装備、アビオニクス類やエンジンの換装などによって、バジュラと互角に戦えるだけの性能を獲得している。ただし、機体設計強度限界までチューンが施されているため、EX-ギア・システムを採用しても扱い難い機体となっている。本機はバジュラとの交戦状態に陥ったマクロス・フロンティア船団で生産され、最終局面となったバジュラ母星の戦いで戦果を挙げた。

●データ ※データはファイター形態時のもの

全長▶15.52m

空虚重量▶12,950kg

エンジン▶新中州重工/P&W/ロイス社製、FF-2550F熱核タービンエンジン×2

大気圏外最大推力▶67.5t×2

バーニアエンジン▶P&W、HMM-6B

最高速度▶M4.3+(高度10,000m、機体外部兵装無しの状態)/M21以上(高度30 000m以上)

標準武装▶ビフォーズAMG-30/30mm重機関砲(強装徹甲弾使用)×2/エリコーンAAB-9Aビーム砲×2/内蔵式ビフォーズBLM-02Sマイクロ・ミサイルランチャー(MDE弾頭に換装済み)×2セット/ガトリング・ガンポッド ハワードGU-14B改(MDE弾頭対応改良型)×1/中射程対空ミサイル ビフォーズAAMM-05D(TV/赤外線/レーダー誘導)×1/センチネルFXA-60A高速徹甲ロケット6連装ポッド×1/短射程高機動対空ミサイル L.A.I/AAMS-02A(赤外線誘導)3連装×1/対空母用大型対艦ミサイル センチネルAVM-11R(反応弾頭装備)4連装×1(装甲ミサイル・キャニスターはピンポイント・バリア併用にてバトロイド時に盾として機能する)/対バジュラ用MDE粒子反重力砲/30mmMDE機関砲マトリックス 新星インダストリー/L.A.I社マクロス・フロンティア工廠製AVPAGC/MEDC30-EX-A×1(バトロイド時は手持ちで運用可能)/SWAGエネルギー転換装甲システム(SWAG/RA155EX)/フレア&チャフディスペンサーシステム一式、他

●開発系譜図

VF-171

▼

VF-171EX

●サイズ比較

VF-1J

VF-171EX

▶VF-171EX ナイトメアプラスEX

運用記録

VF-171EXは、フロンティア船団のゼネラル・ギャラクシー工廠とL.A.I社が共同で修正設計を行い、同船団内で生産が進められた。実戦配備の時期は、マクロス・クォーターの脱走事件の前後だと見られる。生産数が限られていたことから、VF-171のパイロットから選抜された精鋭に優先して配備されていった。対バジュラ戦の終盤に投入された本機は、バジュラ母星の戦闘などで活躍した。

マクロス・クォーターの脱走事件ではVF-171EXが配備された新統合軍第4中隊が追撃隊として派遣された。

主に指揮官機で運用されるアーマードパックや、電子戦用のイージスパックの装備も可能。

ファイターモード

ベースとなったVF-171は、原型機のVF-17よりも低出力だが信頼性の高いエンジン(FF-2110A)を搭載し、一般的なパイロットでも扱える仕様になっていた。これに対してVF-171EXはエンジンをVF-19用のFF-2550Fに換装し、機動性能を向上させている。その結果、本機はVF-17やVF-171を超える性能を獲得しており、ファイター形態の機動性にも優れている。しかし、VF-171の基本設計が対応していないためにISC（Inertia Store Converter）は導入されておらず、高機動時の性能ではISC搭載機に及ばなかった。それ故、VF-25 メサイアを知る者からは間に合わせの機体と評された。

▶アーマードパック装備ファイター形態の底面。エネルギー転換装甲プロテクターが各部に装着されている。

▶アーマードパック(AAS-171EX)を装備したファイター形態のアルト機。

◀白い機体色は新開発の対ビーム用気化コーティング塗装で、赤のラインはアルト機のパーソナルカラー。

フル装備時には豊富な兵装を運用可能で、火力に優れる。機体上部のMDE粒子反重力砲が主武装となる。

▲追加装備がない状態のファイター。本機はL.A.I社製試作スーパーフォールド・ブースターを主翼上に装備可能。

両翼下に3基ずつ兵装ステーションを備えている。

ガウォークモード

原型機のVF-17は、高速戦用と格闘戦用の2種類のガウォーク形態を持つ特異な機体であった。しかしVF-171およびVF-171EXは、高速戦モードの主武器であった肘部のレーザー砲塔が廃されたこともあり、通常のガウォークモードを備えるのみである。本機の基本的な仕様はVF-171に準じるが、出力強化やアビオニクス類の更新（ECM性能向上、VF-25と同型の索敵レーダー AA/AS/SF-06統合センサー・マトリクスへの変更）などにより、総合的な性能向上を実現している。また、脚部周りに推進器が複数追加されるアーマード装備は、ガウォーク形態での推力偏向を得意とするパイロットから好評を博したという。

▼ノーマル状態のガウォークはVF-171とほとんど外見上の違いはなく、原型機のVF-17に比べると細身となっている点が特徴と言える。

▲アーマードパック装備のガウォーク形態。脚部プロテクターには複数の小型ブースターロケットエンジンが内蔵されている。

ファイターからガウォークに変形して急激に速度を落とし、オズマ機の背後を取るアルト機。ドッグファイトではよく用いられた機動である。

アルト機とオズマ機の戦闘では、ガウォーク同士の正面戦闘が発生している。高速で直線的な機動をガウォークで行うことは珍しいケースと言える。

バトロイドモード

VF-171EXはエネルギー転換装甲をSWAG/RA155EXに変更、VF-171と比較して約20%の装甲強度の向上を実現している。さらにVF-19クラスの熱核タービンエンジンを装備したことで出力が大幅に増加し、バトロイド形態での格闘戦性能は非常に優れたものとなった。重VFであるVF-17を原型とするVF-171は、耐弾性や機体強度の面で評価が高く、主力機としての総合性能はVF-17より上とも言われた。本機はVF-171で抑えられた性能をVF-17以上に高めることで、バジュラとも互角に戦えるだけの近接戦能力を獲得していたのである。無論、EX-ギアによる耐G性能の強化と操縦性の向上も、高性能化の要因であることは言うまでもない。

◀▼アーマードパックを装備したアルト機のバトロイド形態。頭部はベース機とは異なり、バイザー部が2列になっている。

◀▼前腕部の特徴的な形状はファイターの尾翼を備えるため。また、両前腕部には追加兵装ステーションが設けられている。

バジュラ母星の戦闘は乱戦となり、バトロイドの柔軟な近接戦闘能力が発揮された。特にアルト機(コールサイン「サジタリウス1」)は、多くの戦果を挙げた。

Mechanic Sheet

メカニックシート

VF-171EX ナイトメアプラスEX

VF-171EX(一般機)

機体解説

VF-171EX(一般機)は、「一般機」の名称こそ付いているが、性能的には早乙女アルトの乗った小隊長機と差異はない。VFは伝統的に、頭部のレーザー機銃の数が多いなど、見た目にわかり易い"小隊長用機"が生産されていたが、本機では一般機と小隊長機に形状的な違いはない(早乙女アルトの場合は、機体をパーソナルカラーで塗装して差異を出していたようだが)。これは本機が、機数を揃えることを急務としていたため、細かなバリエーション機を用意する余裕がなかったためだと思われる。実戦においてVF-171EXは、フロンティア船団配属の新統合軍パイロットの中でもVF-171の扱いに習熟した者に優先して配備されたこともあり、それなりに高い戦果を残した。

バジュラ母星の戦闘では攻撃部隊の主力VFとして運用され、対バジュラ戦闘能力を発揮した。

MDE重量子反応砲はバトロイド時には携行兵装として運用が可能で、ガンポッドに代わる主武器として優れた攻撃力を発揮した(通常のガンポッドも腰部に装備している)。

コクピット

「とにかくバジュラと互角に戦える性能の機体を」ということを主眼に置き、性能の向上が第一とされてきた本機は、改修プランが提示された段階で、ベテランですら扱いの難しい機体となることは明白であった。そこで本機には、新統合軍の制式採用機では初めて、EX-ギアシステムが標準装備されることとなった。機体の改修によって生じた扱いづらさを、肉体への負担を軽減し感覚的な操作も可能なEX-ギアシステムの導入で、なんとか押さえつけようとした苦肉の策であった。一方で本システムの採用は、新兵の訓練期間を従来の30%にまで短縮できたというデータもある。

VF-171EXのコクピット内部。構造はシンプルで、シートに変形したEX-ギアの一部が確認できる。

優れた脱出機構でもあるEX-ギアシステムの搭載は、パイロットの生存性の向上にも繋がったという。

ファイターモード

本機の外観は、カラーリングを除けば改修元であるVF-171ナイトメアプラスから変化はないが、標準装備である対バジュラ戦用標準兵装パックが機体の左右にセットされるため、シルエット的には大きく変化している。

主要パイロット

マルヤマ

ジュン

▶対バジュラ戦用標準兵装パックを装備した一般機のファイター形態。機体に入るラインはグレーとなっている。

ガウォークモード

一般機のガウォーク形態。ガウォークモードも原型機からの外観上の変化はない。ガウォークへの変形はMDE重量子反応砲と装甲ミサイル・キャニスターが腕部に付いたまま行われる。

▶実戦では、地上戦や空戦時の機動変更などにガウォーク形態が活用された。

バトロイドモード

バトロイド形態では、左腕部の装甲ミサイル・キャニスターは、ピンポイント・バリアを併用することで、強固なシールドとして機能する。感覚的な操縦が行えるEX-ギアシステムの搭載は、バトロイド形態での格闘戦のレスポンスの向上に繋がったとされる。

ピンポイント・バリア・システムを装備しており、バジュラとの戦闘ではピンポイント・バリアを腕部に展開して格闘戦を行った機体も確認されている。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶VF-171EX ナイトメアプラスEX

標準装備

VF-171EXは、MDE弾に対応した兵器を装備することで、バジュラに対抗できる戦闘力を獲得している。固定兵装に加え、機体各所の兵装ステーションに装備される対バジュラ戦用標準兵装パック、さらに腕部の追加兵装ステーションにもMDE弾を使用する兵器が搭載される。

バジュラ母星の戦闘では、攻撃部隊の機体にディメンション・カッターと呼ばれる大型MDE弾が装備された。

▼対バジュラ用MDE重量子反応砲／30mmMDE機関砲マトリックス AVPAGC/MEDC30-EX-A

▲新星インダストリー／L.A.I社マクロス・フロンティア工廠製。バトロイド時には腕部で保持が可能。

▼ハワードGU-14B改

追加武装搭載位置

Ⓐ対バジュラ用MDE重量子反応砲／30mmMDE機関砲マトリックス AVPAGC/MEDC30-EX-A
Ⓑ対空母用大型対艦ミサイル センチネルAVM-11R 4連装
Ⓒ中射程対空ミサイル ビフォーズAAMM-05D
Ⓓセンチネル FXA-60A 高速徹甲ロケット6連装ポッド
Ⓔ短射程高機動対空ミサイル L.A.I/AAMS-02A 3連装

RVF-171EX

機体解説

外観上はVF-171から変化のないVF-171EXは、無改造でVF-171用の電子戦用イージスパック(AP-SF-01+)を装備することが可能であった。神出鬼没のバジュラに対しては、周辺宙域の哨戒任務は欠かせないものであり、推力向上型のVF-171EXの配備は、むしろ哨戒部隊で歓迎されていたという。イージスパックの装備時は、対バジュラ戦用標準兵装パックは主翼下の各種ミサイルに限られるが、本機の配備時、多くの哨戒部隊ではバジュラとの戦闘を避けるよう通達が徹底されていたため、特に問題はなかったようである。

右のRVF-171EX(ルカ・アンジェローニ機)は、RVF-171EXに、さらにゴースト誘導システムを装備させた、特別仕様の機体となる。このゴーストは、S.M.Sでルカ・アンジェローニが運用していたQF-4000を引き続き使用していた模様。ゴーストはバジュラ母星への強行偵察などに使用された。なおRVF-171EXルカ機は、ルカ・アンジェローニのパーソナルカラーであるグリーンのラインが機体の各所に施されている。

最終決戦に備え、MDE弾を装備するRVF-171EX。機体下面の長大なレーダーパネルは、着陸時は写真のように折り畳まれる。

ルカ機が運用するゴーストは、自律型の無人機という利点を活かし、最終決戦の舞台であるバジュラ母星の偵察にも活用された。

ファイターモード

RVF-171EX(ルカ・アンジェローニ機)のファイター形態。イージスパックは大型のレドームと機体下面に装備された大型レーダーパネルで構成される。

主要パイロット
ルカ・アンジェローニ

ガウォークモード

RVF-171EXのガウォーク形態。機体下面の大型レーダーパネルは機体後方へ移動している。小回りの良さを活かし、強行偵察任務に活用された。

▼機体下面の大型レーダーパネルは、この形態でも前方に展開することが可能。

バトロイドモード

イージスパック装備時でも、バトロイドへの変形が可能となっている。主兵装は通常弾頭のハワードGU-14B改であるため、バジュラと交戦できる火力はなかった。

▶イージスパックのセンサーシステムは全て背面にマウントされた状態となる。

VF-25G

若き天才が駆るVF-25狙撃戦仕様機

主要パイロット

ミハエル・ブラン

ランカ・リーはVF-25Gに搭乗し、ガリア4でゲリラパフォーマンスを行っている。彼女の活躍により、反乱部隊は戦意を失った。

データ

※データはファイター形態時のもの

全長▶18.72m
全高▶4.03m（主脚含まず）
全幅▶15.50m（主翼展開時）
空虚重量▶8,450kg
機体設計最大荷重▶27.5G
エンジン▶新星インダストリー／P&W／RR社製FF-3001AステージⅡ熱核タービンエンジン×2
宇宙空間最大推力▶1,620kN+×2
最高速度▶M5.0+（高度10000m）
標準武装▶25mm機銃（ラミントンES-25A）／25mmビーム砲（マウラー ROV-25）換装式×1／SSL-9B ドラグノフ・アンチ・マテリアル・スナイパーライフル×1／エネルギー変換装甲SWAGシステム一式／ピンポイント・バリア・システム一式／アクティブステルス・システム一式／チャフ・フレアー・スモークディスチャージャー・システム一式／スナイパーパック

サイズ比較

VF-1J
VF-25G

開発系譜図

YF-24 ▶ VF-25 ▶ VF-25G

機体解説

オプション装備によって多様な性能を発揮するVF-25 メサイアの中でも、狙撃戦に特化したバリエーションがこのVF-25G（G型）である。G型はスナイパーパック（別称ロングレンジパック）と呼ばれる長距離支援パックを装備した機体で、実体弾ライフルによる超長距離精密射撃を基本的な運用コンセプトとしている。そのため、本機には狙撃をサポートする様々な装備が導入されており、これまで難しいとされていた可変戦闘機（VF）の性能と長距離射撃能力との両立を実現した。VF-25の試験運用を行っていたS.M.Sでは、スカル小隊に所属するミハエル・ブラン少尉（コールサイン「スカル2」）がブルーのG型を乗機とし、彼自身の狙撃の才能もあり、高い戦果を残している。

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet メカニックシート

▶VF-25G メサイア

運用記録

実体弾による狙撃は、対光学装甲や電子戦装備の進歩する中にあって、有効性を増していた。しかし、長射程の大型火器を用いる狙撃はペイロードが限られるVFには適さず、成功例は少なかった。また、狙撃適性を有するパイロットが少なかったことも、その原因と考えられる。

VF-25Gは基礎性能の高さによって狙撃能力を獲得した数少ない機体だったが、VF-25の試験運用を行っていたS.M.Sでも、ミハエル・ブラン少尉（ミシェル）が使用していたのみとされる。また、彼が行方不明になった後、バジュラクィーンとの最終決戦において、同機にはクラン・クラン大尉が搭乗した。

小隊長のオズマ・リー少佐が出撃しないケースでは、代わってミシェル機がスカル小隊の指揮を執った。

ガリア4の反乱ではランカ・リーを乗せガリア4に急行した。この際、フォールドスピーカーを装備している。

標準装備

スナイパーパックを構成する武装としてG型は、SSL-9B ドラグノフ・アンチ・マテリアル・スナイパーライフルを標準装備している。また、VF-25の基本装備であるアサルトナイフと、固定武装の胴体部25mm機銃/ビーム砲、頭部の12.7mmビーム機銃1基を備える。

狙撃を戦闘の主体とする機体だが、バジュラに対してナイフを用いた格闘戦を挑むケースもあった。

▲SSL-9B収納状態

上はスタビライザーフィンを閉じた収納状態。55mm超高速徹甲弾のSP-55Xを用い、装弾数は通常マガジンで12+1発。

◀SSL-9B ドラグノフ・アンチ・マテリアル・スナイパーライフル

G型のセミ・フルオートマチックライフル。銃身には8基の精密射撃用スタビライザーフィンを備え、上部には展開式の光学サイトを持つ。

コクピット

G型のスナイパーパックでは、EX-ギアにガンナーユニットと呼ばれる機構を増設し、パイロットの射撃タイミングを学習させることで射撃精度の向上を図っている。

AIによる全自動射撃も可能だが、精密狙撃には照準システムを介した手動制御を要する。

コクピット内部の構造自体は他のVF-25系列機と変わらず、G型独自の仕様はEX-ギアに集約されている。

負傷したミシェルに代わりシェリル・ノームが後部予備シートから操縦したこともある。

ファイターモード

ISC（Inertia Store Converter、通称「イナーシャル・バッファー」）の加速度軽減によって発揮される高い機動性がVF-25の特徴であり、G型もその性能を確保している。ただし、G型は狙撃を主とする運用コンセプト上、ファイター形態の機動性よりも射撃精度が重視されていた。そのため、戦闘でファイター形態が用いられたことは少なく、同形態は主に長距離移動や偵察任務で運用された。それでも、本機が狙撃戦仕様VFの成功例として挙げられるのは、VFとしての機動性を損なうことなく長距離射撃能力を獲得していたためである。ISCの効果は外装オプションを含めた機体全体に及ぶため、大型の携行武装を装備した状態でも高い機動性を発揮できた。その点においても、本機は狙撃戦仕様のVFという要求を満たしていたと言える。

ファイターの機動性能は他のVF-25系列機に劣らず、運用機会こそ少なかったが優れた性能を示した。

ガリア4の反乱ではL.A.I社から極秘裏に提供された新型フォールド・ブースターを運用して事態に対処した。

◀スナイパーパックの装備はSSL-9Bを除いてすべて内装機器で、スーパーパーツなどと干渉しないため、基本的には併用して運用された。

▲▼スーパーパーツ装備

▶機首レドームの前部アビオニクス・ベイには、FCS精密射撃管制ブースター（FCF-21b）を内蔵する。

▶右はノーマル装備のG型のファイター形態。SSL-9Bは他のVFのガンポッドと同じように機体下面中央にマウントされる。

◀▲ランカがガリア4でパフォーマンスを行った際に使用したフォールドスピーカー。翼下に2基ずつを装備した。

ガウォークモード

G型の主兵装であるSSL-9Bはグリップにダイレクトコントロール用トリガーを備え、マニピュレーターを介してグリップ内の制御回路とFCS精密射撃管制ブースター（FCF-21b）を直結することで射撃精度を向上させている。そのため、腕部を展開できるガウォーク形態でも狙撃は可能であった。しかし、機体安定性の面でバトロイドに劣っており、本機の運用スタイルにおいては必要性が低かったとも言える。それでも、実戦においては様々なケースでガウォークが用いられていた。

ガリア4において、滞空中のガウォークでVF-27 ルシファーを狙撃するという離れ業を見せている。

◀スーパーパーツ装備

▲インテーク装甲ユニットのマイクロミサイルCIWSランチャーによって、近接戦闘の火力を補っていた。

◀ノーマル装備のガウォーク形態。機体上部に露出するレーザー機銃を除けば、VF-25系列機との外観上の差はほとんどない。

バトロイドモード

G型の本領はバトロイド形態での精密射撃にあった。ヘッドブロックは長距離狙撃に適した高精度型単眼式カメラを搭載したものに換装されており、さらに安定した射撃姿勢を取れるバトロイドは狙撃を行う上で不可欠な形態であった。そのため、同形態はもっとも運用されるケースが多く、VF部隊の連携においては戦場の後方に位置し、RVF-25から外部射撃管制データを受け取った上で、狙撃で僚機を支援する戦法が採られた。また、SSL-9Bに用いられるSP-55Xは、リニアドライバーを併用することで初速が7,490m/s（通常発射では6,200m/s）に達し、デストロイドなどに用いられる厚さ300mmのGFS-a2複合装甲を貫通するほどの威力を発揮した。その火力による敵戦力の切り崩しが、アタッカーの活躍を支えていたのである。

バトロイドによる狙撃はミシェルの卓越した技術もあって非常に精度が高く、僚機の危機を幾度となく救った。

バトロイド時にはマニピュレーターを用いてSSL-9Bの弾倉交換が可能。なお、35連発のドラムマガジンも装着できた。

▼▶スーパーパーツ装備

◀スーパーパーツ装備時のバトロイド背面。ブースターユニットによって高い推力を獲得しているが、高機動戦闘を行うことは少なかった。

▶SSL-9Bを携行したノーマル装備のバトロイド。足元にまで届くSSL-9Bの銃身と機体の対比から、その大きさが見て取れる。

◀VF-1Aを彷彿とさせる単眼式の頭部がG型の特徴である。ミシェル機はブルーにホワイトのラインが入ったカラーリングが施されている。

射撃方法

前述の通り、G型は狙撃の際にバトロイドで射撃姿勢を取ることで精度を高めている。それを補助するため、スナイパーパックには機体を固定するためのアンカーシステムが組み込まれている。

◀高精度型単眼式カメラを内蔵した頭部ユニット。RVF-25に近い形状となっている。

狙撃行動の前には、機体を固定するために小惑星などに向けてアンカーが発射される。

SSL-9Bのスタビライザーフィンと光学射撃サイトを展開し、FCF-21bと連動して照準を定める。

アンカーが固定物に突き刺さると、ワイヤーを巻き機体をそこに移動させ、射撃姿勢を取る。

発射から弾着までのタイムラグを計算に入れた目標未来位置に向けて狙撃を行う（これはスナイパーの能力に依存する）。

2050年代の主力を担った 新統合軍無人戦闘機

GHOST

AIF-7S

有人可変戦闘機の支援を目的に配備が進められたが、一方で無人機の台頭によるパイロットの能力低下という問題を招いた。

機首に備えたカメラアイ兼センサー。戦況を判断する重要機器だが、ジャミング波によってその機能を阻害される危険もある。

機体解説

「ゴースト」の名を冠した無人戦闘機は、有人戦闘機の支援という運用目的から始まり、やがては有人戦闘機を凌ぐ性能を獲得した。AIF-7Sも、2050年代当時の新統合軍主力可変戦闘機(以下VF)であるVF-171 ナイトメアプラスを凌駕する機動性を有していた。本機はゴーストX-9の機体設計をベースとして、セントラル・コンピュータにQF-3000シリーズの半自律型人工知能の性能向上型が組み込まれており、高性能と安定した運用性を実現している。

人的損害を考慮する必要がなく運用が容易だったことから、移民船団でも積極的に運用された。

母艦や管制機から遠隔操縦され、母機からの攻撃指示を元に機体側のコンピュータが処理を行う。

データ

所属 ▶ 新統合軍
全長 ▶ 9.85m
空虚重量 ▶ 5,700kg
機体設計最大荷重 ▶ 24.5G
エンジン ▶ 新中州／P&W／ロイス FF-2038A熱核タービンエンジン×2(推力55,000kg+×2)
最大速度 ▶ M5.0+(高度10,000m／主に大気摩擦熱による制限)
戦闘上昇限度 ▶ 地球クラスの惑星では単独で衛星軌道に進出可能
標準武装 ▶ 25mmビーム砲(マウラーROV-25)×2／マイクロ・ミサイルランチャー×2／多目的ミサイル・ランチャー×2

サイズ比較

開発系譜図

Mechanic Sheet
メカニックシート
AIF-7S ゴースト

運用記録

AIF-7Sの開発はゼネラル・ギャラクシー社によって2040年代初頭から始められた。2044年に惑星エデンのニューエドワーズ基地実験センターで原型機の初飛行が実施され、2045年には量産と配備が開始された。本機はパイロット保護機構を必要とせず、それ故に生産と維持に要するコストがVF-171の3分の1程度だったことから、多くの移民船団や最前線で主力航空兵力として運用された。

フロンティア船団とバジュラとの初遭遇では迎撃隊として派遣されたが、ジャミングによって無力化された。

偵察や調査任務にも積極的に用いられており、バジュラの母星を発見するなど、大きな成果を挙げている。

機体構造

X-9の設計を流用した極超音速リフティングボディ構造が特徴で、機首にマイクロ・ミサイルランチャー2基と25mmビーム砲1基を、後部に多目的ミサイル・ランチャー2基を装備している。

X-9をベースとしているため、高機動性能はVF-171以上と言われる。また、フォールド・ブースターの装備も可能。

◀機体上部に2基のエンジンポッドを備える。主翼やカナード、フィンは機動制御と排熱に用いられる。

▼機体下面には4基のハードポイントを備える。また、機体にはフェーズCの高機動迷彩塗装が施されている。

センサー

機首上部に複合カメラセンサーが装備されており、戦闘行動を補助する。

運用法

汎用支援戦闘機として量産されたAIF-7Sは、配備当初からパトロールや迎撃任務に運用され、有人機に取って代わる実績を積んでいった。また、フロンティア船団ではL.A.I社などの研究によって対ジャミング性能の向上が図られ、バジュラとの戦闘で運用された。

母艦側のコンピュータには、ゴースト本体がCGによって表現され、その行動がリアルタイムで確認できた。

母艦からの遠隔操作

遠隔操縦による運用と管制は母艦のオペレーターが担当し、最終的な攻撃許可も母艦側から与えられる。一方、細かな機体制御や攻撃シークエンスは機体側コンピュータが独自に行う。

上写真は、ピンクのCGで表現されたゴーストが、円球状に発生したジャミング波によって行動を阻害されている状態を示している。

特定機からの遠隔操作

前線管制機能を有するVFからの制御も可能で、S.M.Sではルカ・アンジェローニのRVF-25がAIF-7SシリーズであるQF-4000を運用した。また、本機はX-9と同じ自律空戦プログラムを搭載していた。

ルカ機に運用されたQF-4000は戦場で様々な役割を果たした。

▲QF-4000

EXTRA REPORT

関連事項

ゴーストの系譜

無人戦闘機・偵察機であるゴーストは、2000年代初頭から統合軍航空戦力の一角を担い続けていた。時代を経るにつれて徐々に発展し、有人機と同じく、ゴーストは統合軍や新統合軍の主力機として認識されている。

西暦2008年(統合戦争)

ZERO

▶QF-2200D-B
マヤン島事変において、重武装化したVF-0 フェニックスの追加ブースターとして装着された現地改修機。

▶QF-2200D-A
人員不足を解消するために統合戦争末期に運用された。地球の技術に基づく機体で、小型軽量でステルス性も有する。

西暦2009年(第一次星間大戦)

▶QF-3000E
熱核反応エンジンの搭載によって全領域運用能力を獲得した無人戦闘爆撃機。

M

OTMが導入された機体で、統合軍の高性能機と低コスト機を組み合わせる編成方針により、VF-1 バルキリーと共に運用された。

西暦2040年(シャロン・アップル事件)

▶X-9
有人機に代わる主力機を目指してAVFに並行して開発された完全自律型AI搭載機。

PLUS

「シャロン・アップル事件」でシャロンに制御を奪われ、YF-21と戦闘を行った。

西暦2059年

F

▲AIF-9V
自律型AIを搭載したAIF-9Vが、ギャラクシー船団で運用された。

RVF-25

S.M.Sの耳目となった、VF-25の電子戦装備機

データ

※データはファイター形態時のもの

所属 ▶ S.M.S
全長 ▶ 18.72m
全高 ▶ 4.03m（主脚含まず）
全幅 ▶ 15.50m（主翼展開時）
空虚重量 ▶ 8,450kg
機体設計最大荷重 ▶ 27.5G
エンジン ▶ 新星インダストリー／P&W／RR社製 FF-3001AステージⅡ熱核タービンエンジン×2
宇宙空間最大推力 ▶ 1620kN+×2
最高速度 ▶ M5.0+（高度10000m）
標準武装 ▶ 25mm機銃(ラミントンES-25A)／25mmビーム砲(マウラー ROV-25)換装式×2／新型ガンポッド58mm（ハワードGU-17A）×1／エネルギー変換装甲SWAGシステム一式／ピンポイント・バリア・システム一式／アクティブステルス・システム一式／チャフ・フレアー・スモークディスチャージャー・システム一式／イージスパック改(AP-SF-01+)

サイズ比較

VF-1J
RVF-25

開発系譜図

RVF-25

主要パイロット

ルカ・アンジェローニ

機体解説

VF-25 メサイアは多用途化を前提とした設計がなされており、各種オプションを装備することにより、様々な戦術的役割に対応可能となっている。その中でもRVF-25は、「イージスパック」と呼ばれる電子偵察パックを装備した電子戦用のバリエーションとして知られている。マクロス・フロンティア船団に駐留するS.M.Sで運用された本機は、対バジュラ用にL.A.I社が改良を加えたイージスパック改を装備し、あらゆる電磁妨害を無効にすると共に広範囲に亘る索敵活動を可能とするほどの性能を有していた。グリーンに塗られたこの機体は、電子戦の天才と称されたルカ・アンジェローニ准尉の乗機として、S.M.Sの戦力展開の要となり、バジュラとの戦いで大きな役割を果たした。

前線で戦闘を行うことは少なかったが、高度な管制能力を活かし3機のゴーストを遠隔操作し、攻撃任務にあたらせた。

高度な電子戦装備を搭載しており、早期警戒や管制などの任務に就いた。また、イージスパック改は随時改良が施され、フォールド通信システムなども搭載された。

Illustration by Hidetaka Tenjin

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶RVF-25 メサイア

運用記録

イージスパック改(AP-SF-01+)は、ヒューズ社がVF-25用の電子戦装備として開発したイージスパックに、L.A.I社が対バジュラ用の改良を施したものである。S.M.Sに提供されたイージスパック改は、スカル小隊3番機のルカ機(コールサイン「スカル3」)に装備された。ただし、このイージスパック改は新統合軍公式のシステムではなく、バジュラとの戦いに対応するために逐次改修が加えられていった。ルカ機はこの装備を駆使して前線での管制を担当し、S.M.Sの戦果を支えた。

ルカ機はスカル小隊の一員として戦う一方で、S.M.Sの航空戦隊全体を管制する重要な役割を担った。

RVF-25はギャラクシー船団救援作戦においてバジュラ艦の内部に囚われたが、早乙女アルトにより回収された。

標準装備

RVF-25はヘッドブロックが換装されているため、VF-25頭部の12.7mmビーム機銃は装備しない。一方、58mmガンポッドとアサルトナイフ、胴体部の25mm機銃/ビーム砲は、他のバリエーションと同じく標準装備となっている。

VF-25としての標準的な戦闘力は有しているが、早期警戒や索敵こそが本領であり、ゴーストとの連携を駆使して戦うことが多かった。

ルカ機は直接バジュラと交戦するケースは少なかったが、戦闘を行う際には他のVF-25と同様ガンポッドを主兵装とした。

ガンポッドはギャラクシー船団救援作戦においてバジュラ艦に囚われた際に、機体を拘束する触手を破壊するためにも用いられている。

コクピット

電子戦に特化したRVF-25だが、コクピットの構造自体は他のVF-25系列機と同じで、エクステンダーギアによる高い操縦性と生存性を特徴としている。なお、コクピット内部は全天周囲モニターとなっている。

基本は単座式で、優れた管制機能を有している反面、パイロットにはそれを使いこなせるだけの高い情報処理能力が要求される。

各種情報はコクピット正面のメインモニターに表示され、タッチパネルで処理を行う。電子戦機能の多くがメインコンソールに集中している。

コクピットの外にはコネクトスレイブの有線接続端子があり、機外からの操縦も可能。

ファイターモード

早期警戒機や索敵機としての運用を主眼に置くRVF-25は、実戦では後方からの支援がほとんどで、ファイター形態で運用されることが多かった。勿論、本機も高機動時の加速度を軽減するISC(Inertia Store Converter、通称「イナーシャル・バッファー」)を装備しており、VF-25の特徴である優れた機動性を確保していた。また、機体各部にはイージスパック改を構成する各種電子戦装備が設置され、本機のファイター形態における特徴的な外観となっている。特に、上部の円盤型全周警戒電磁波/フォールド波センサー(DSAF-03)と、下部のフォールド波フェイズドアレイレーダーパネル(ESF-1000)は、システムの根幹を担う装備である。本機はこれらの装備によって広範囲に亘る索敵活動を可能としており、数光時離れた対象でさえほぼリアルタイムで検知できた。その性能とファイター形態の機動力を駆使することで、本機は戦場の動静を把握したのである。

ギャラクシー船団救援作戦で前線管制を行うルカ機。宇宙空間では上部レドームの円周部分が展開される。

S.M.Sでは大気圏内で運用されるケースがほとんどなかったため、基本的にスーパーパーツが装備された。

▲機首レドーム内に統合センサー(VGA-14A)と、コクピット前方の中央アビオニクス・ベイに電子戦システムブースターユニット(AE-35改)を装備する。これもイージスパック改のシステムの一部である。

▶フェイズドアレイレーダーパネルは使用時に機体下方に展開される。また、必要に応じて切り離すこともできる(上部レドームも同様)。

▼▶スーパーパーツ装備

スーパーパーツはVF-25の各タイプで共通だが、ルカ機のものにはのちに試作のフォールド通信誘導システムが装備された。

当時の新統合軍主力機であるVF-171を凌駕する性能を有していたが、バジュラとの戦闘では被弾する場面もあった。

ガウォークモード

大気圏内でバジュラとの戦闘が発生することが少なかったため、本形態は主に宇宙空間における機動時の制動などに用いられた。ただし、バックアップを主任務とするRVF-25が直接戦闘に参加するケースは少なく、ガウォークに変形すること自体が稀であった。

ガリア4から生還したシェリル・ノームたちを救助するため、ガウォークでバジュラとの間に割って入るルカ機。数少ないガウォークでの運用例である。

◀スーパーパーツ未装備のガウォーク形態。フェイズドアレイレーダーパネルが左腕部シールド裏に折り畳まれているのがわかる。

▶スーパーパーツ装備

スーパーパーツ装備時には、追加武装によって火力が増強される。アサルトナイフはシールド内部に収納される。

バトロイドモード

バトロイド形態における最も特徴的な部位が、他のVF-25系列機とはまったく異なる外観を持つヘッドブロックである。これはカバーの内側に各種高性能センサーを納めたユニットで、対空レーザー機銃の代わりに高精度センサーアンテナを装備している。この仕様が示すように、RVF-25は非常に優れた情報処理能力を有している。その性能はフリゲート艦に匹敵するとも言われ、2,048の目標を同時識別し、そのうち128の目標に対して同時に長/中距離ミサイルの誘導補助を行えるほどだった。こうした機能が示すようにRVF-25の真価は前線での管制や電子戦で発揮された。

▶電子戦機のため、F型などとは頭部の形状が異なっている。レーザー機銃も高性能アンテナに換装されている。

シェリルたちの救助に向かった際の戦闘ではバジュラにガンポッドを破壊されて窮地に陥るが、ガリア4から帰還したアルトのVF-25Fによって難を逃れた。

◀レドームは背部に移動し、スーパーパーツを装備している場合はブースターユニットに挟み込まれた状態となる。この状態でレドームは展開できない。

◀▲スーパーパーツ装備

スーパーパーツの構成は他のVF-25系列機と同じだが、ワンポイントのカラーリングが機体色と同じグリーンとなっている。ヘッドブロックの赤い部分にカメラアイが配されている。

▶58mmガンポッド(ハワードGU-17A)を携行したノーマル状態のバトロイド。頭部および背部レドーム以外の仕様はF型に準じている。

QF-4000 ゴースト

攻撃兵器誘導用の管制制御プログラムが改編されたルカ機は、AIF-7Sに連なる無人戦闘機ゴーストQF-4000を最大6機まで同時に遠隔操作できた。さらに、S.M.S管理下にあった「シモン」「ヨハネ」「ペテロ」の3機のQF-4000には、ゴーストX-9と同種の自律空戦プログラム(通称「ユダ・システム」)が搭載されていた。ただし、その機能はあくまで非公式なものであった。

ルカ機はバジュラクイーンとの最終決戦でユダ・システムを起動している。

▼ルカ機が運用した3機は、新統合軍のAIF-7Sとはカラーリングが異なる。

バジュラの撹乱に対抗するため、フォールド通信誘導システムが搭載された。

▶ゴーストX-9をベースとした設計で、極超音速リフティング・ボディ構造が採られている。

▼機首にはS.M.Sのマーキングが確認できる。実質的にルカ機専用の装備として運用された。

デストロイド

機体解説

統合戦争時に実用化されたADR-03-MkⅢ シャイアンの再設計機が、シャイアンⅡである。シャイアンの外見をほぼそのまま引き継いだシャイアンⅡだが、変更点も多い。具体的には、熱核反応炉への換装(原型機はガスタービンエンジン)、武装の近代化と増設、宇宙空間戦用ロケットモーターの強化およびバーニアエンジンの増設などである。また、一部パーツは流用されているものの内部構造は一新されており、性能が大幅に向上した。配備先としてマクロス・フロンティア船団護衛の新統合軍とS.M.Sが知られ、アイランド内戦闘や艦上の装甲シェルターからの対空攻撃、マクロス・アタック時のミサイル攻撃などに用いられた。

足部ローラーにより走行安定性に優れるほか舗装面を傷めにくいため、移民船内でも運用しやすかった。

▲シャイアンⅡ

フロンティア船団が採用した シャイアンの再設計機

データ

所属▶新統合軍
全高▶9.87m
主機▶クランス・マッファイMT901熱核反応炉
主機出力▶3550SHP
副機▶GE EM12A燃料発電機
副機出力▶573kW
標準武装▶GE製 30mm6銃身ガトリング砲×2/マウラー P8G-17 荷電粒子ビーム砲×2/ビフォーズ AA/AS-SAM-22対空近接ミサイル4連装ランチャーMk.16×2他

開発系譜図

シャイアンⅡ

作業用マニピュレーターを装備したワークスは、災害時に火災の消火活動なども行っている。

サイズ比較

VF-1J
シャイアンⅡ
デストロイド・ワークス
ヒト

シャイアンII

ADR(アンチエアディフェンスロボット＝対空迎撃型)に区分される原型機のシャイアン同様、シャイアンIIも対空攻撃を主任務としたデストロイドである。しかしシャイアンIIは、単なるシャイアンの強化型に留まらない性能を有す。宇宙空間戦対応能力を付与する推進器や補助バーニア、宇宙艦艇の甲板上での高速移動をも容易とする磁気吸着システム付きローラーなどにより運用領域を拡大しているほか、荷電粒子砲の搭載によって対ハードターゲット火力が増強されるなど、多用途性にも秀でている。このような多用途性は、ある程度だがSDR(スペースディフェンスロボット＝宙間迎撃／近距離防御型)やMBR(メインバトルロボット＝戦闘型)など他機種の代用となることを示し、フロンティア船団にシャイアンII以外のデストロイドがほとんど見られなかったのも頷けよう。また、足部ローラーにより、整地区域が多いアイランド内部での運用に適していたことも、フロンティア船団の新統合軍に採用された一因であると考えられる。

原型機同様、艦上では脚部保護のため装甲シェルター内で対空攻撃を行うほか、艦側から遠隔操縦も可能なようだ。

アイモ記念日のパレードにおいてグラス大統領の警護のために同行していたほか、美星学園で行われたランカ・リーのライブの護衛も務めていた。

武装

腕部主軸火器の異機種並装化や連装ミサイルランチャー、対人用の股間部機銃など、シャイアンIIの武装はMBR型並みに充実している。これらの火器はそれぞれ弾道特性や弾速、誘導能力の有無などが大幅に異なっているため、複数の異なる兵装を同時に運用可能な火器管制装置が搭載されていると思われる。また、シャイアンII単独での敵機捕捉や火器照準・誘導などのため大型のレーダーポッドを装備する。

❶ビフォーズ AA／AS-SAM-22対空近接ミサイル4連装ランチャーMk.16

両肩にビフォーズ社製の対空近接用ミサイル4連装ランチャーを搭載。マクロス・アタック時に用いられたことで知られる。

❷レーダーポッド

❸マウラーPBG-17　荷電粒子ビーム砲

ガトリング砲と並列装備された前腕部のマウラーPBG-17荷電粒子ビーム砲。シャイアンII用としては最大の火力を持つが、任務上ガトリング砲が多用されたためか使用例は知られていない。火炎放射器に換装可能なほか、式典などで使用する祝砲を装備した機体も存在した。

艦上に配備される場合は、艦載火器と共に対空防御コンプレックスを構成する。写真はマクロス・クォーター上のシャイアンII部隊。

❹GE製 30mm6銃身ガトリング砲

シャイアン用を上回る火力と連射性をうかがわせるガトリング砲を持つシャイアンIIだが、耐弾性は高くなく、バジュラによって撃破された。

デストロイド・ワークス

シャイアンIIをベースとした作業用デストロイドが、ワークスである。火器やレーダーポッドなど戦闘用装備の排除、精密作業も可能な五本指マニピュレーターへの換装が、主な改修点となっている。また戦闘用ではないため、目立ち易い橙系と警告色で塗装されたほか、肩に警告灯が設置された。軍用機ベースの大パワーと高精度マニピュレーターがもたらす作業性ゆえに重宝され、様々な重作業に投入された。

軽装化されたものの出力は原型機と同等であり、数十t級の大重量物すら運搬可能。バジュラの残骸回収にも投入された。

EXTRA REPORT

関連事項

ZERO

デストロイド シャイアン

シャイアンIIの原型機となったデストロイドADR-03-MkIIIシャイアンは、統合戦争でも運用された最初期のデストロイドである。ガスタービンエンジンに代表される既存技術の採用や、ビーム兵器の非搭載などにより、高信頼性かつ安価という特徴を持ったシャイアンは、試作デストロイドの03シリーズで唯一量産され、04シリーズへの過渡期的存在となっていった。

VB-6

デストロイド・モンスターの設計を受け継いだ可変爆撃機

通常は機首に「眼」を模したマークとシャークマウスがペイントされているが、ランカが搭乗した際は、彼女をモチーフとしたノーズアートが施された。

●主要パイロット

カナリア・ベルシュタイン

機体解説

「自力で飛行、高速展開可能なデストロイド・モンスター」という仕様要求に沿って開発された可変爆撃機(VB)、その代表がこのVB-6 ケーニッヒモンスターである。本機は、HWR-00-MkⅡ モンスターのコンセプトを受け継ぎつつ、シャトル、重ガウォーク、デストロイドの各形態への変形機構を付与した機体で、4連装レールガンや3連装重ミサイルランチャーといった大火力の兵器が装備され、可変戦闘機(VF)や可変攻撃機(VA)を遥かに凌駕する攻撃力を有している。なお、マクロス・フロンティア船団に駐留するS.M.Sでは、独自の仕様変更が施された機体が運用されており、ここで紹介する写真は、全てS.M.S仕様機のものである。

●データ　※データはシャトル形態時のもの

所属 ▶ S.M.S. 新統合軍
全長 ▶ 29.78m
全高 ▶ 6.77m
全幅 ▶ 24.42m
空虚重量 ▶ 101.90t
エンジン ▶ 新中州/P&W/ロイスFF-2025BX×2、新中州／ビガース 電磁プラズマロケットエンジン・レールガン複合システム×4
エンジン推力 ▶ 31,700kg（宇宙空間最大推力）×2、26,500kg×4
補助エンジン ▶ 高機動バーニア・スラスター P&W HMM-6B
巡航速度 ▶ M1.7+（標準大気圏内高度10,000m時）/M3.2+（高度30,000m以上時）
武装 ▶ 新中州／ビガース 320mmレールガン4連装×1、ライセオン／新中州 対地対艦重ミサイルランチャー3連装×2／対空対地機銃ターレット×1（シャトル形態時は半固定式）／対空対地近接小型高機動ミサイル速射ランチャー×2

●開発系譜図

HWR-00-MkⅡ ▶ VB-6

●サイズ比較

VB-6
VF-1J

Illustration by Hidetaka Tenjin

VB-6 ケーニッヒモンスター

運用記録

2030年に始まったVB-6の開発は、当初ノースロムとグラマンの合同設計チームによって進められた。その後、HWR-00-MkⅡの設計を担当した新中州重工と、当時の設計主任だったケーニッヒ・ティーゲル博士の協力を得て、可変機構の搭載に伴う機体強度の低下といった問題の解決に成功。2032年には量産試作機が処女飛行を迎え、生産がスタートした。完成した機体の多くは特務部隊などに配備され、2040年にはフロンティア船団のS.M.Sに3機(うち1機はパーツ状態の予備機)が納入された。2059年の時点においてもS.M.S所属機は様々なバージョンアップにより第一線で活躍し、戦闘任務に加え、小惑星や宇宙塵などの爆破除去作業なども行っている。

S.M.Sでは、VF-25メサイアなどの護衛を受け、強襲攻撃や支援を行うケースが多かった。

ランカ・リーの歌を用いたバジュラへの攻撃「ランカ・アタック」では、ランカも搭乗した。

標準兵装

VB-6の武装は、4連装320mmレールガンと両腕部の3連装重ミサイルランチャー 2基、対空対地機銃ターレット1基、対空対地近接小型高機動ミサイル速射ランチャー 2基となっている。原型機のHWR-00-MkⅡに比べ武装が増設された。

◀3連装重ミサイルランチャー
通常は対地対艦ミサイルを装填するが、多弾頭弾や反応弾頭ミサイルも発射可能。

◀320mm4連装レールガン
自己誘導型砲弾により、射程100km以上でも精密射撃が可能で、反応弾も使用できた。

▶対空対地機銃ターレット
シャトル形態時には機首部に半固定式となり、他2形態時には近接防御に用いられる。

コクピット

HWR-00-MkⅡが3名の乗員を必要としたように、VB-6もパイロットと爆撃兼砲撃手2名の計3名で操縦される。しかし、S.M.Sのカナリア・ベルシュタイン少佐のように高い操縦技術を有するパイロットであれば、EX-ギアを用いて1人でも全ての操作が可能であった。

◀コクピット全景。
大型機のため内部はかなり余裕を持ったレイアウトになっている。

前席がメインのパイロットシートで、単座で運用される場合には後部シートは使われない。

▶前部パイロットシート
シートはVF-25の技術を転用したEX-ギア対応型に改装され、単座での運用を可能にしている。

シャトルモード

VFやVAのファイター形態に相当するシャトル形態は、リフティングボディ構造により高い飛行性能を有する。小型化される以前は、その巨体を飛ばすこと自体が難航したが、レールガンの超電磁カタパルトをプラズマロケットに転用するというケーニッヒ博士のアイディアによってこの問題を解決した。このプラズマロケットは離陸時や高加速時に用いられるのみで、通常は4基の熱核タービンエンジンで推力を得る。

また、S.M.S仕様機は装甲材質の変更による軽量化によって機動性が改善されており、大気圏内最高速度も若干ながら向上している。

新機構により高い加速性能を獲得したが、通常のVFの2倍以上の機体サイズのため、機動性は低かった。

機体全体に亘って重装甲が施されており、対空機銃程度ではダメージを受けなかった。

「ランカ・アタック」においてランカ・リーを搭乗させた際には、主にシャトル形態で後方に位置した。

▲旧世代のスペースシャトルに似た形状が特徴で、機首フェアリングには高機動バーニアを内蔵し、脚部は動翼として機能する。

▼電磁プラズマロケットエンジン・レールガン複合システムは、機体後部に4基のノズルを備え、シャトル形態でのみ推力機関として機能する。

▶機体下面はリフティングボディを構成する平面的な形状で、重ガウォーク形態時にレールガン基部を覆う後部上面装甲が位置している。

重ガウォークモード

HWR-00-MkⅡのフォルムを受け継いだ重ガウォーク形態は、全ての武装が使用可能となる点と、脚部で機体を固定することにより射撃時の反動を抑えられるという点から、その攻撃力を最大限に発揮できる。ただし、本機は武装の全てが実体弾であるため装弾数に限りがあり、継戦能力に不安を抱えている。

また、他機種と比較して、圧倒的に高い搭載能力を持ち、S.M.Sのカナリア機では爆弾倉にフォールド・ウェーブ増幅装置やフォールド・ウェーブ解析装置が搭載されたこともあった。

ギャラクシー船団救援作戦では、残存艦ダルフィムの甲板に重ガウォークで着艦、バジュラ群に対してレールガンを発射している。

重ガウォークは本来接地した状態での運用を想定した形態ではあるが、空間戦闘で用いられるケースもあった。

バジュラ母星での戦いでは、左脚を破壊されながらもバトル・ギャラクシーのガンシップに不時着し、レールガンで艦橋を破壊した。

▼機体後部にはレールガンの給弾ユニットとドーザーブレード状の可動装甲が配置されている。後者は重ガウォークでの射撃時に接地し、反動を抑える支持脚として用いられる。

▶細部に違いは見られるが、フォルムと機体構造はデストロイド・モンスターのそれに準じている。小型化に伴い、レールガンの砲身はベース機よりも短くなっている。

▶逆関節構造の脚部は、シャトル時の主翼部が変形して構成され、つま先部分は歩行時には可動する。脚部エンジンによる高速ホバリング移動も可能となっている。

デストロイドモード

デストロイド形態とは、VFのバトロイド形態に相当するモードで、人型に変形したことにより近接戦闘能力が大幅に向上している。さらに、同形態では腕部に新設されたパワーアームを用いた格闘戦が可能な点も特徴である。

S.M.S配備機はアビオニクスとセンサー類が最新のものに更新されており、通常の量産機よりも操作性に優れていた。加えて、装甲がVF-25のアーマードパックと同じエネルギー転換装甲と軽複合装甲に変更され、ピンポイント・バリア・システムも搭載されていることから、量産機を上回る耐弾性を獲得している。

▶デストロイドモード/上半身
デストロイド時には機首フェアリングが腰部に移動する。また、パワーアームを展開するため、腕部ユニットの向きが重ガウォーク時と逆になる。

バジュラ母星の戦いで左脚を破壊されたのちも、デストロイドに変形して戦闘を継続し、耐久性の高さを証明した。

▲脚部が重ガウォークからさらに展開して伸長し、レールキャノンのユニット全体が背部に移動。ヘッドユニットが露出し、デストロイドに変形する。なお、本形態でも全ての武装が使用可能である。

▲背部に位置するレールガンユニットはデストロイドでも発射可能。射撃時には脚部のスラスターを用いて姿勢制御を行う。

マクロス・フロンティア艦艇

1,000万人規模の移民を守る 新統合軍の艦船群

◀舞鶴

4面の飛行甲板を持ち、艦載機の運用性能に優れる宇宙空母舞鶴。浦賀と同様に、2040年代に多く運用されたものの同型艦である。

艦体解説

アイランド・クラスター級移民船を中心として、1,000万人を超える人口を抱えて銀河を旅した第55次超長距離移民船団マクロス・フロンティア(通称フロンティア船団)には、新統合軍の大規模な護衛艦隊が随伴した。主力として高火力の新型宇宙巡洋艦を擁しつつ、一方で舞鶴、浦賀ら旧来の艦船も多く運用していた艦隊は、2050年代としては標準的な武装を有していた。だが、対バジュラ戦においては苦戦を強いられ、船団防衛には最新鋭の装備を有する民間軍事プロバイダーS.M.Sとの共同戦線を張ることとなった。

▲浦賀

基本構造はマクロス7船団などで運用された旧来艦と同様だが、メーカーや建造時期により武装、探知機などに多少の差があった。

宇宙巡洋艦を中心とする護衛艦隊。複数の非戦闘艦を擁する移民船団を守るため、必然的に護衛艦隊の編成も大規模なものとなった。

各艦船の能力は決して低くはなかったものの、謎の宇宙生物バジュラの圧倒的な戦闘力の前に辛酸を舐めるケースも多かったようだ。

サイズ比較

SDF-1

舞鶴

浦賀

ステルスフリゲート

Mechanic Sheet
メカニックシート
マクロス・フロンティア艦艇

運用記録

西暦2059年、バトル・フロンティアを旗艦とし、多数の宇宙艦艇を有した新統合軍の艦隊がフロンティア船団の護衛にあたった。対バジュラ戦において戦力不足の感が否めなかったものの、S.M.Sと共に奮闘してバジュラとの最終戦を戦い抜き、フロンティア船団のバジュラ母星への移民を成し就げた。

新統合軍が船団護衛のために派遣した護衛艦隊だが、その指揮権はフロンティア大統領に与えられていた。

練度や士気、さらに装備面でも問題を抱えていたため、対バジュラ戦において劣勢に立たされることが多かった。

ヴァンタナモ級護衛宇宙空母 舞鶴

ヴァンタナモ級護衛宇宙空母。シンプルな船体構造を持つ量産に適した標準型ステルス宇宙空母で、多数建造された同型艦が新統合軍の主力空母として活躍。VF-11クラスの機体ならば最大で70機程度を搭載可能である。

データ
- 全長 ▶352m
- 全高 ▶71.2m(アンテナ含まず)
- 全幅 ▶111m(アンテナ、ビーム砲含まず)
- 運用重量 ▶9,500t
- 武装 ▶30mmビーム砲CIWS×14/30mmビーム連装砲CIWS×2

▲▶中央部に艦載・整備スペース、艦首と艦尾に発着用大型ドックを備え、VFの母艦として運用される。

▲艦体の後部には菱形状の艦載機用推進剤タンクが設置されており、その外装はステルス処理が施されている。

ウラガ級二段式水宙両用空母 浦賀

ヴァンタナモ級の上位艦として建造された、ウラガ級二段式水宙両用空母。舞鶴を遥かに超える艦載機の運用能力を有する。大気中、宇宙空間のほか、水上での行動も可能な多目的空母である。

かつては小規模艦隊の旗艦を務めることもあった総合性能の高い艦だが、配備は少数に留まっていたようだ。

データ
- 全長 ▶550m
- 運用重量 ▶25,000t

◀▲新マクロス級バトル7に似た形状で、広い飛行甲板を持つ500m級の艦体。基本構造はマクロス7船団などで運用された艦と同様だったようだ。

ノーザンプトン級宇宙駆逐艦 ステルスフリゲート

高速性とステルス能力に長けたノーザンプトン級宇宙駆逐艦。2045年の時点で9,000隻以上が建造されていた新統合軍で最も量産されている宇宙艦であり、2059年においても継続して量産されている。

データ
- 全長 ▶252.5m
- 全幅 ▶85.6m
- 全高 ▶64.5m
- 運用重量 ▶1,200t
- 武装 ▶72mmビーム砲塔×2/連装58mmビーム砲塔×4/20mm連装ビームCIWS×18/対艦ミサイルランチャー×4

艦艇としては小型で軽武装のステルスフリゲートだが、機動性、ステルス性に優れ、多数が艦隊に組み込まれた。

▶基本設計は30年以上改良されていないが、エンジン、センサー、武装などは順次改良されたものを搭載。特にビーム砲塔などの武装面での改良が目立つ。

▼菱形の艦体構造と独特の直線的なフォルムによって、高いパッシブステルス能力を持つ。

◀艦尾形状の変更や底部武装の追加など、建造工場、建造時期により細部に変更が加えられている。

宇宙巡洋艦 ステルスクルーザー

新統合軍に多数配備され、主力艦艇として運用されている宇宙巡洋艦。ステルス性と共に、ノーザンプトン級より大きく向上した火力を併せ持つ。

護衛艦隊の艦艇中、唯一の新型艦。高い速力と火力を誇る。

▲艦体は速力の保持とともに、ステルス性を考慮した形状となっている。

▼ノーザンプトン級とほぼ同サイズながら、武装面では同級を凌駕した。

▲艦首から艦尾にかけて多数のビーム砲塔を備える。その高火力をもって護衛艦隊の要として活躍した。

名機の血統に連なる、「クァドラン」シリーズの改良機

原型機の徹底した改修により、さらに高い機動力と火力を獲得。その性能は最新型のVFに匹敵するほどであった。

2059年における新統合軍所属のゼントラーディ兵の多くが、このクァドラン・レアを使用していたとされる。

●主要パイロット

クラン・クラン

ネネ・ローラ

ララミア・レレニア

テムジン

機体解説

第一次星間大戦で使用されたゼントラーディ女性兵士用バトルスーツであるクァドラン・ローは、優れた性能と信頼性から高い評価を受けた。その往年の名機に改修を施した再生産タイプが、このクァドラン・レアである。本機は最新技術の投入によって、エンジン出力の向上や武装の追加、センサー類やアビオニクスなどが大幅に強化されている。また、パイロットの生命保護を重視した改修が加えられている点も、原型機からの大きな変更箇所として挙げられる。複数あるバージョンのうち、この「レア/56」と呼ばれる最新タイプは移民船団や移住惑星などに配備され、中でもS.M.Sのピクシー小隊のクラン・クラン大尉の乗機が特に知られている。

●データ

所属▶S.M.S／新統合軍
全高▶16.85m（ビーム砲の砲身含まず）
全備重量▶35.5t（パイロット(体重約7.5トン、耐Gパイロットスーツ・生命維持装置など着用して8.5トン程度)、推進剤、超高機動マイクロミサイル、インパクト・ビームカノンなど標準兵装装備時の出撃時重量）
空虚重量▶16.72t
主機▶キメリコラ・ゼネラル・ギャラクシー熱核コンバータFC-2055μ×2
標準装備▶ビフォーズAA-55／QD55mm中口径速射インパクト・カノン×2／マウラーLPG-30／3R30mm空対空高回転三砲身ガトリングレーザーパルス・ガン／ビフォーズ近接用超高機動ミサイルランチャーポッド×4／ビフォーズAA-76／QD対艦用インパクト・カノン×1他

●サイズ比較

●開発系譜図

Illustration by Hidetaka Tenjin

運用記録

第一次星間大戦以降、クァドラン・ローは統合軍の戦力として運用されたが、生産用工場衛星の機能停止などから徐々に稼動機が減少していった。2030年代になると、保全部品を用いて稼働率を維持しなければならない状態となっていた。しかし、ゼントラーディ女性兵士を中心に生産の継続を望む声が強く、それを受けた統合軍は2035年にゼネラル・ギャラクシー社に再生産プランを委託。翌年から設計と改良が始められ、同時にかつてロー型を生産したキメリコラ工場衛星のレストアも進められた(これは特殊な製造工程を要する同機の生産ラインを新規構築するよりも、コストが抑えられたためである)。修復された工場衛星は「キメリコラ=レア工廠」と命名され、惑星エデンのラグランジュⅣで2040年から生産を再開。以降、同工廠で生産された機体は「クァドラン・レア」と呼ばれた。その後も細部に改良が施されながら生産は続けられ、2059年の時点ではレア/56タイプが運用されていた。同時期にフロンティア船団に駐留したS.M.Sでは、ゼントラーディ系のピクシー小隊などが本機を運用、特に同小隊長のクラン大尉が搭乗した真紅の機体は多大な戦果を残した。

クァドラン・レア3機で構成されるピクシー小隊は、スカル小隊と並ぶS.M.Sの主戦力として活躍し、クラン機はその中核を担った。

女性パイロット専用だった原型機とは異なり、本機には男性パイロットも搭乗可能で、ガリア4に駐留する第33海兵部隊にも配備されていた。

機体構造

基本的な機体構造は原型機から受け継いでいるが、アクチュエーターが高効率化されたことなどから腕部と脚部が細身になっている点など、機体の随所に形状の変化が見られる。また、武装や機材の追加などで重量が増加しているが、エンジン出力の向上によって原型機と同等以上の機動性を維持していた。さらに、アクティブ・ステルス機能が追加されるなど、人類の最新技術を導入することで原型機にはなかった性能も獲得している。

◀クラン機

▲正面
機体形状はロー型に通じるが、腕部と脚部が細くなっているため、よりスマートな印象を与えるフォルムとなっている。

▼背面
メインノズル周りの形状やバックパック右側に装備された2基のドロップ式補助推進剤タンクなど、機体背面には原型機からの改修点が多く見られる。

高機動を特徴とするバトルスーツだが耐久性にも優れており、バジュラとの近接戦闘にも耐えうる性能を有している。

メインエンジン

クァドラン・レアに搭載されたキメリコラ/ゼネラル・ギャラクシー熱核コンバータFC-2055μは、機体サイズと比較しても高い出力を誇る。この主機によって、クァドラン・レアは通常時で22.5G、最大で25G超の加速力を発揮するが、キメリコラ慣性制御システムの慣性中和機能によってパイロットへの負荷を18G程度にまで軽減することが可能となっていた。しかし、それでも高負荷のため、パイロットは特殊耐Gスーツを着用した。

本機の機動性は最新鋭VFのVF-25シリーズにも匹敵し、技術と経験の差こそあれ、クラン機は早乙女アルトのVF-25Fをも圧倒した。

大気圏内でも優れた機動性を発揮し、惑星ガリア4の反乱ではテムジン機がアルトのVF-25Fと激しいドッグファイトを演じた。

◀テムジン機

メインエンジン
背部バックパックの中央に、エンジン2基のメインノズルを備える。

高機動バーニア
脚部末端など機体各部に高機動バーニアスラスターが多数装備されている。

▲一般機

標準武装

クァドラン・ローは複数の内蔵武装による高い火力を有していたが、クァドラン・レアでは背部に対艦用インパクト・カノンが追加され、攻撃力の強化が図られている。また、ミサイルランチャーポッドなどの固定武装も、VFやデストロイド用装備の開発ノウハウを持つビフォーズ社とマウラー社の製品に変更されている。なお、アビオニクス系の更新によってフォールド航行のナビゲーション機能を追加、フォールド・ブースター(新中州重工/L.A.I FAB-1000)を用いた単独フォールドが可能であった。

新たに装備されたインパクト・カノンを除き、武装の配置は基本的に原型機と同じだが、その中身は刷新されており火力が向上している。

惑星ガリア4に駐屯する海兵隊の一部が反乱を起こした際は、反乱部隊の機体に奪取した反応兵器を搭載した。

ビフォーズ AA-76/QD 対艦用インパクト・カノン
バックパック左側に可動式の長砲身インパクト・カノン(ビーム砲)を装備する。ヌージャデル・ガーの背部キャノンに近い兵装である。

ビフォーズ AA-55/QD 55mm中口径速射インパクト・カノン
胸部には2門の55mm中口径速射インパクト・カノンを備える。背部のインパクト・カノンに比べて口径は小さく射角も狭いため、補助武装として用いられた。

ビフォーズ 近接用超高機動ミサイルランチャーポッド
バックパック左右と膝外側の計4箇所にミサイルランチャーポッドを内蔵している。数十発の高機動ミサイルを同時に発射できる。

マウラー LPG-30/3R 30mm空対空高回転三砲身ガトリングレーザーパルス・ガン
腕部に装備されたガトリングレーザーパルス・ガンは、原型機の同系武装に比べて砲身が長く、機外に突き出た構造となっている。

コクピット

コクピットにはエネルギー転換装甲が採用され、簡易コールドスリープ機能も追加されている。また、操縦系統の重要回線は2系統化されものを正副2重の4回線で確保し、サバイバビリティの向上が図られている。それに加え、操縦系には部分的にBDIシステムが導入されている。

コクピット内にかかる負荷に耐えるため、高機動戦闘に対応したゼントラーディ女性パイロットでも特殊耐Gスーツを着用する必要がある。

コクピットの基本構造は原型機から大きく変わっていないが、パイロット保護の機能にスペースを割いたため、内部は非常に狭い。

メインスクリーンがパイロットの顔の正面に位置する構造で、照準表示などは原型機に比べて洗練された方式となっている。

▲胴体部のほぼ全てをコクピットが占める。図はクァドラン・ローのものだが、レア型も基本的に同じ構造である。

EXTRA REPORT

関連事項

クァドラン・レアを使用した部隊

レア型の生産によってクァドランシリーズを存続させた新統合軍だったが、そもそもが複雑な構造で量産に向かなかったこともあり、本機の生産数はVF系列機ほど多くなかったと見られる。また、機動性と火力を両立し、強行偵察などの特殊任務に適した性能から、配備先はゼントラーディ兵で構成された海兵隊が主であった。本機も原型機と同じく、軍全体から見れば非常に珍しい機体だったのである。

▼ピクシー小隊

S.M.Sでクァドラン・レアを運用する小隊。クラン・クラン大尉が隊長を務める。VF部隊と連携した作戦行動のほか、偵察なども担当したと言われる。

グレーのカラーリングが施された一般機には、ネネ・ノーラとララミア・レレニアが搭乗した。仕様は隊長(クラン)機と同じである。

▼新統合軍第33海兵部隊

2059年の時点で惑星ガリア4に駐屯していた部隊。星間大戦時の経緯から隊内での対立が絶えず、新統合軍の鼻つまみ者と評された。

右はテムジン機で、一般兵用のグレーの機体とは異なり緑を基調としたカラーリングが施されている。

マクロス・フロンティア車両

サイズ比較

VF-1J

ヒト

トレーラー

ベアトリーチェ

車両解説

マクロス・フロンティア船団のアイランド1は、天蓋部のチューブライナーや地表の路面電車、そして地下鉄など、鉄道網が非常に発達しており、一般的移動手段となっている。また、鉄道は大量輸送にも適しているのだが、目的地に直接アクセスしにくいほか、ゲリラ的攻撃やテロに対して脆弱という安全保障上の問題も抱えている。このため相対的重要性を減じているとはいえ、車道と自動車も欠くべからざる存在であり、軍もアイランド内における高速展開や輸送のために装輪車両を保有している。その代表が、装輪装甲車ベアトリーチェやトレーラーなどである。

全幅が大きく複線車道を塞いでしまうデストロイドと異なり、車幅が狭いベアトリーチェは高火力を速やかに展開できるメリットがある。

軽量かつ高速で火力に秀でるベアトリーチェは緊急展開戦力として期待されたようだが、バジュラ相手にはまったく無力だった。

▲▼ベアトリーチェ

Mechanic Sheet
メカニックシート
マクロス・フロンティア車両

ベアトリーチェ

ベアトリーチェはマクロス・フロンティア船団で採用されている8輪式装輪装甲車(戦闘偵察車)で、105mm速射砲搭載の砲塔が特徴である。耐弾性は低いが、17～18tと軽量なうえ、出力350馬力の水素ガスタービンエンジンにより80～100km/hの路上速度を発揮する。このように機動性と火力を併せ持つベアトリーチェは、デストロイドなどの重兵器が出動するほどではないレベルの事態収拾などに運用されていると考えられる。

空気清浄装置や酸素ボンベを装備し、宇宙空間でも機密性を保持できる。しかし防御力は低く、襲来したバジュラに粉砕された。

FRONT

TOP

REAR

SIDE

トレーラー

マクロス・フロンティア船団護衛の新統合軍が装備する大型トレーラー。デストロイド運搬用と思われ、10m級のデストロイドにも対応した非常に大きな荷台を持っている。これは、デストロイドの足回りが構造上、直接歩行での高速長距離移動に不向きなためと考えられる。フロンティア船団への最初のバジュラ襲撃の直後、バジュラ残骸の回収と移動に使用された車両も、このトレーラーであった。

デストロイドなど大型兵器の運搬を想定しており、アイランド1内での戦闘で倒されたバジュラの死体の輸送などにも用いられた(写真奥)。

FRONT

SIDE

数十tクラスの大重量物を運搬する都合上、接地圧低減などのため24個ものタイヤを持っている。右図は荷台にデストロイド級の大型物を搭載したもので、機密保持や運搬物保護などのため、荷台はシートで覆われるのが普通である。

EX-ギア

VFとパイロットを繋ぐ 多機能強化服

機体解説

西暦2050年代に実用化されたEX-ギア(EG-01M/MP)は、VFの操縦席機能と多機能強化服(パワードスーツ)としての機能を併せ持つ装備である。VFのインターフェイスの改良および標準装備化による脱出時のサバイバビリティの向上を主な目的として開発されたEX-ギアは、基本的にVF-25メサイア、VF-171ナイトメアプラスなどに採用された軍用の装備であるが、インプラントなどによる身体能力強化を行う「機装強化兵」の研究開発が禁止されていたフロンティア船団においては、民間軍事プロバイダーが所持するものや、パイロット訓練用として使用された民間規格のものも確認されている。なお、EX-ギアの基本的構造は軍用規格、民間用規格共に専用インナーの上に装着する外骨格ユニットという型式であり、出力や武装以外の基本的な機能面では大きな差異はない。

▶民間用EX-ギア

装着経験者

早乙女アルト / ミハエル・ブラン / ルカ・アンジェローニ
オズマ・リー / ヘンリー・ギリアム / シェリル・ノーム

サイズ比較

VF-1J
民間用 EX-ギア
ヒト
軍用 EX-ギア(飛行時)
軍用 EX-ギア(基本型)

開発系譜図

▶ 軍用EX-ギア ▶ 民間用EX-ギア

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶EX-ギア（エクステンダーギア）

軍用EX-ギア

民生において「作業用軽パワードスーツ」として既にポピュラーであったメカニズムを、多機能強化服として進化させたものが軍用EX-ギア（軍規格EGP-03/05）である。脚部ホバーユニット、専用ヘッドギアなど各種デバイスが充実しているほか、民間用より200%ほど出力が高く、作動時間も延長されている。また、可変戦闘機のインターフェイスとして高度な自己学習機能を持ち、パイロットの操縦の癖などを覚え、そのデータを操縦プログラムに反映させることによって可変戦闘機を「着ている」感覚で、高速かつ精密に制御可能とする。なお、軍用EX-ギアの開発は、新星インダストリー/L.A.I社によるものである。

フロンティア船団においては、VF-25を主力機とする民間軍事プロバイダーのS.M.Sが軍用EX-ギアを採用した。

●データ

所属▶新統合軍/S.M.S　他
対象身長▶150～225cm（オプションで拡張可能）
全備重量▶約75kg程度（フル装備時）
最大飛行速度▶約500km／時（大気内）
駆動動力源▶燃料電池HR-3UTGハイパーエネループ×2あるいは×3
標準武装▶サバイバルナイフ／軍制式サブマシンガン他

◀パワーハンド掌部

▶ホバーユニット

◀▲プロテクターや脚部ユニットの占有面積が広く、専用ヘッドギアを通常の飛行用ヘルメットの上に装着するため、民間用よりもひと回り大きいサイズとなる。

▼エンジンユニット

◀▲背部に接続されたモーターグライダー式飛行ユニット。折り畳み式の翼とL.A.I社製のEX-ギア用化学ロケットエンジン（VSR-02A）2基により、高度な飛行性能を発揮する。

▲グライディング・ホイール

収納式のグライディング・ホイール。4つの車輪はインホイールモーターを内蔵しており、整地上なら最大55km／時での走行が可能である。なお意匠は異なるが、民間用の構造も同様のものだ。

▼EX-ギア用マシンガン

サバイバルナイフのほか、武装として掌部に対応したマシンガンを備える。銃身の下にはグレネード・ランチャーも備えられている。

民間用EX-ギア

民間用PS/ML-21規格のEX-ギアは、万能型の実用タイプで、軍用規格との互換性を持っている。そのため、民間用でありながらVFとの接続が可能であり、訓練学校などで使われていることが多い。ただし、高品質の部品を使用しているため、非常に高価なものとなっているようだ。民間用PS/ML-21規格のEX-ギアは、複数の宇宙作業機・航宙機メーカーにより製造されているが、カラーリングやオプションなどに差異はあるものの、基本構造に大きな違いはない。

ちなみに民間用EX-ギアには、安価かつ軽量で機動力のある地上専用スポーツモデルや、飛行に特化したフライトモデルなどもあるようだ。

美星学園高校航宙科パイロット養成コースでは、訓練用としてPS/ML-21規格のEX-ギアが使用されていた。

パワーハンドを使った細かい作業は習熟が難しく、着用したシェリル・ノームもその制御に四苦八苦した。

●データ

所属▶美星学園高校航宙科　他
対象身長▶150～225cm（オプションで拡張可能）
全備重量▶約50～55kg（フル装備時）
最大飛行速度▶約280km／時（大気内）
駆動動力源▶燃料電池HR-4UTGハイパーエネループ×2あるいは3
標準武装▶サバイバルナイフ

▶パワーハンド掌部

▶パワーハンド腕部

◀▲パワーハンドや脚部などの形状が軍用と異なり、インナースーツの露出部も比較的多い民間用EX-ギア。飛行パックやサバイバルキットなどをフル装備した際の重量は少ないものの、基本的な機能も軍用のものと同様である。

▲エクステンダーケース

EX-ギア収納運搬用のエクステンダーケース。犯罪に転用されかねないという危険性を持つこともあってか、ケース側面にはセキュリティに配慮したコマンドパネルが取り付けられている。

◀意匠は異なるが軍用と同様の構造を持ち、高度な飛行性能を発揮するモーターグライダー式飛行ユニット。なお、折り畳み式の翼は、3つの段階を経て大きく展開される。

充分な飛行性能を持っているが、美星学園高校航宙科の訓練では、離陸時にカタパルトも使って加速することが多かったようだ。

▲エンジンユニット

◀▲EX-ギア用化学ロケットエンジンを搭載したエンジンユニット。軍用と比べると、最大推力はやや劣る。

マクロス・フロンティア

▶バトル・フロンティア（要塞艦）

新天地を目指した超大型空母

戦闘時には都市船であるアイランド1から分離。戦闘指揮を行うだけではなく、船団の中核として戦闘を行う。

ステルス中型空母が分かれ"両腕"を形成するなど、トランスフォーメーション時は、バトル・フロンティアの構造がよくわかる。

機体解説

バトル・フロンティアは、マクロス・フロンティア級超長距離宇宙移民船団の中枢である超大型都市宇宙船アイランド1と接続される、大型万能ステルス多目的可変空母である。普段はアイランド1の航法ブリッジとして機能しているが、必要時には分離して戦闘を行う。バトル・フロンティアは、一般的なバトル級攻撃宇宙空母とほぼ同型であるが、全長は約200m拡大され、運用質量も倍化している。これは付随する新統合軍宇宙艦隊のみならず、船団全体の規模が格段にスケールアップしたことに対応し、航法管制能力向上のためのC4コントロールセンターが増設されたことと、アイランド1の反応炉や生命維持システムに異常が生じた際のバックアップのために、主反応炉をさらに大出力のタイプに換装されたことが影響している。

バトル・フロンティアを切り離してもアイランド1には予備の航法ブリッジがあり、航行に支障をきたすことはない。

移民船団の規模拡大に伴い、バトル級ステルス可変戦闘空母の性能向上が求められ、重改装が施されてきた。

データ

所属▶新統合軍

要塞艦時／全長▶1681m（アンテナ等含まず）　**全幅**▶521m

強攻型時　全高▶1186m　**全幅**▶747m

全備重量▶16550000t

主動力▶熱核反応エンジンマトリックス

主推進器▶OTMマクロスヒートパイルクラスターシステム

高機動ブースター▶核パルスロケットエンジンマトリックス

フォールド・システム▶OTMマクロスフォールドエンジンクラスターシステム

兵装▶ガンシップ・アドバンスタイプ×1／連装誘導対艦重ビーム砲×12／単装重ビーム砲×24／近接ビームファランクス多数／対艦用反応弾頭ミサイルランチャー多数／近接防御用マイクロミサイルファランクス多数

艦載機▶可変戦闘機、可変爆撃機、偵察機、輸送機など最大合計約750機搭載可能

サイズ比較

SDF-1　バトル・フロンティア

開発系譜図

▶ バトル・フロンティア

艦長

新統合軍司令

Mechanic Sheet
メカニックシート
マクロス・フロンティア

運用記録

西暦2041年、第55次長距離移民船団の護衛艦として地球を出発したバトル・フロンティアは、銀河中心宙域においてバジュラと遭遇したことにより、船団の中核として護衛任務を担った。バトル・ギャラクシー救出作戦に端を発した第二次バジュラ遭遇戦では、マクロス・キャノンを用い、優れた戦闘能力を示している。一方、マクロス・ギャラクシー船団は密かにバジュラを制御下に置く計画を侵攻していたが、これを察知したレオン・三島が同計画を乗っ取り、バジュラ本星へと侵攻していく。だが、バジュラ・クイーンのネストまで迫ったところで、ギャラクシー船団幹部がバトル・フロンティアを乗っ取り、三島とグラス大統領らを殺害。インプラント技術を用いてバトル・フロンティアとバジュラクイーンと融合させ、バジュラの支配を行おうとした。

バジュラ本星へと辿り着いたバトル・フロンティア。それは本来の目的とは異なる終着地であった。

要塞艦

要塞艦は、双胴型の空母の艦底にガンシップがドッキングしたような構造であり、戦闘指揮空母(強攻型胴体)、ステルス中型空母×2(腕部)、中型突撃戦艦×2(脚部)、重砲撃艦(ガンシップ)の合計6隻によって構成される。その特異な艦形とアクティブステルスを組み合わせてステルス化を行っているため、ステルス性能を低下させる船体各部に備えられた対艦ビーム砲などの兵装は、収納式となっている。

マクロス・キャノンは、同船団で最高の火力を誇る武器。一撃でバジュラ大型艦やバジュラ群を一掃するほどの威力であった。マクロス・キャノンは要塞艦時でも使用可能である。

◀要塞艦の下部に接続されているガンシップは、バトル・フロンティアから分離し、単独でも行動可能な戦闘艦で、艦首に強力な超大口径ビーム砲であるマクロス・キャノンを備える。艦全体がバトル・フロンティアの主武装であるマクロス・キャノンの射撃システムと冷却システム、エネルギーキャパシター、エネルギーチャージ用の大出力反応炉で占められており、「ガンシップ・アドバンスタイプ」と呼ばれる。

▶ガンシップ単独でも主砲の連射が可能であるが、マクロス・キャノンのエネルギー消費は膨大で数回の発射が限界となる。一方、強攻型時には艦全体が巨大な銃として「手持ち」運用される。バトル・フロンティアと接続することでエネルギー供給を受け、連射性能が向上する。

ガンシップ

強攻型

バトル・フロンティアは、マクロスタイプの変形システムを持ち、トランスフォーメーションによって、全高1000m以上の巨大な人型形態(強攻型)へと変形する。変形後は、ステルス性の維持のために内蔵されていた全兵装が展開され、要塞艦型の下部に接続されているガンシップは手持ちの銃として使用する。また、近接戦闘にも対応するなど、同時代を代表する戦闘艦としての能力すべてが使用可能になる。強攻型へのトランスフォーメーションに要する時間は、初期のバトル級よりも短縮されており、速やかに強攻型での戦闘に移行することができる。

初期のバトル級を踏襲するシルエットだが、火力をはじめとするすべての面において強化がなされている。

▼艦橋部

艦橋部のC4コントロールホール。戦闘からフォールド航行まで、あらゆる船団全体の制御を行う中枢部。

◀"両腕"を構成するのはステルス中型空母。それぞれ最大750機の艦載機を収納できる。また飛行甲板は強化型エネルギー転換装甲で構成され、盾の役割を果たす。

▶まるで巨大な銃のようなガンシップは、全長655m、運用重量300万tの巨大な艦。強攻型時には手持ちの武器となり、主武装のマクロス・キャノンを発射する。実行された記録こそないが、強攻型の伝統である近接攻撃「マクロス・アタック」は、本艦でも行える。

バジュラ・クィーンとの融合を果たすバトル・フロンティア。バジュラの女王となり、バジュラを掌握しようとした。

アイランド1

マクロス・フロンティア船団の中核を担うマクロス・フロンティアは、通常、戦闘艦バトル・フロンティアと、涙滴型の都市船アイランド1が合体した状態を指す。実際の運用では、更にこれに多数の環境艦が連結され、多数の乗員が不自由のない日常生活を送りつつ、航海を続けていくことが可能となっている。アイランド1の大きさは全長約15kmにも及び、その潤沢な敷地内には、渋谷やサンフランシスコなど、かつての地球上の主要都市を再現したエリアが複数存在している。また、船団の大統領府も置かれ、船団の主居住区として機能していた。

バジュラ事件においては、アイランド1は幾度かバジュラの侵入を許し、都市部に被害を出すこととなった。また、事件の後期には、フロンティア船団の支配を目論むギャラクシー船団の残党がアイランド1内に潜伏し、一斉蜂起による船団掌握を試みるという一幕もあった。こうした内外の脅威にさらされつつも、アイランド1はバジュラ本星へと辿り着き、和解したバジュラより譲られたバジュラ本星へ入植を開始することとなる。

▶バトル・フロンティアがドッキングした状態のアイランド1。他の新マクロス級の都市型移民居住艦と同様、艦上部には非常時に備えての防護シェルを持つ。

▲防護シェルを下ろした状態。巡航時にはシェルの内面には"空"のホログラム映像が投影されているが、他の画像を写すこともできる。

バジュラ本星の海上に着水したアイランド1。手前の地上では、入植者により新たな都市が築かれつつある。

▶生態系艦
アイランド1とフロンティアメトロで接続される環境艦(図はアイランド3)。内部には、様々な環境が再現されており、用途に応じて湖や山脈などの地形も形作られている。

設備

アイランド1の地表部に築かれた都市区画は、第一次星間大戦で地上が壊滅する前の、1980～2000年代初頭にかけての地球の主要都市を再現した町並みとなっている。これらの町並みには、船団の住民たちの心理的圧迫を和らげ、景観の新鮮さを保つために、定期的に各ブロックの建物の入れ替えが行われる。サンフランシスコ地区では市内の交通手段として路面電車が採用されるなど、公共機関も元になった都市を再現している。なお、アイランド1の都市区画は階層式となっており、最上層の地表部に居住できるのは、船団の行政部や、軍部、宇宙航行、生態系管理などの要職に就いている者とその家族に限られており、大多数の一般市民はそれより下の階層に居住している。ちなみに、右で紹介している深・秋葉原地区(ディープ・アキバとも呼ばれる)は、一般居住区よりも更に深い階層に築かれていることからその名が付いたという。

アイランド1地表部を見渡す高台からの景色。未来的な超高層ビルと20世紀の都市群の景色が入り混じった町並みとなっている。

サンフランシスコ地区の町並み。都市部の移動には、路面電車などのほか、小回りの効くジャイロバイクも多用されている。

▼深・秋葉原(ディープ・アキバ)
秋葉原の町並みを再現した商業区画。各種電化製品のほか、玩具、フィギュアなどのサブカルチャーにも強い地区として知られる。大手玩具メーカー、ダイナム超合金のショールームでは、時折アイドルを招いたイベントなども行われている。

▼渋谷
渋谷地区を再現した区画で、ファッションビルや映画館、レコードショップなど、若者向けの商業施設が立ち並んでいる。深秋葉原地区はちょうどこの渋谷地区の下層に位置している。

EXTRA REPORT
関連事項
ジャイロバイク

都市区画内での移動には、電車、自動車などの他に、電動立ち乗り二輪車(ジャイロバイク)もよく利用されている。下図は宅配などに利用される商用タイプで、車体前面に"岡持ち"を固定することが可能。また、郊外の自然公園などでも観光客向けにジャイロバイクを貸し出している。

▶搭乗時

Mechanic Sheet
メカニックシート
マクロス・フロンティア

星道館

アイランド1の高台に築かれた、艦内最大の多目的ホール。そのネーミングや外観から察するに、かつて日本の東京にあった日本武道館をイメージした施設であると思われる。フロンティア船団を訪れた銀河の妖精、シェリル・ノームによる「シェリル・ノーム ザ・フロンティアコンサート」の会場となった。場内は天井が高く、EX-ギアを装着したスタッフによる演舞が行えるほどの空間を持っている。また大規模なホログラム投影装置も備えており、前述のEX-ギアによる演舞と共にライブを盛り上げていった。シェリルのコンサートの際には、フロンティア船団がバジュラに襲撃されたことで、公演は途中で中断。会場が高台にあったため、観客の避難は困難を極めた。これにより同会場は、災害時の退避マニュアルの徹底的な見直しをすることになったという。

ホログラム映像の管理が容易な屋内施設の強みを生かし、大規模なホログラム映像がステージ全面に展開された。

上図は星道館の外観。屋根の形は真上から見ると星型になっている。右上は館内イメージ。すり鉢状になっておりステージを囲むように観客席が設けられている。高い天井も同ホールの特徴である(右図)。

EX-ギアを着用したアルトと共に会場の中空を飛ぶシェリル。広い空間を持つ星道館ならではのパフォーマンスだ。

観客席側からステージを望むイメージ。ステージ上に投影されるホログラム映像は、館内の制御室で集中制御されており、ライブの進行と共に千変万化する。

湾岸ライブ会場

アイランド1地表部、横浜地区の湾岸エリアに築かれたコンサート会場で、シェリル・ノームによるリベンジライブの舞台となった。シェリルは会場中央の海上にしつらえられたコンビナート風のステージにてパフォーマンスを行いつつ、その様子を海上各所のスクリーンに投影、観客はそれらを岸辺に設けられた席から観賞するというスタイルとなっていた。

なお、このリベンジコンサートの最中、フロンティア船団は大規模なバジュラの攻撃を受け、アイランド1内部に兵隊バジュラが侵入したことで、コンサートは再び中断される。しかし、シェリル・ノームは海上にとどまり続け、偶然観客として会場にいた、のちの超時空シンデレラ、ランカ・リーと共に歌を唄い続ける。その様子はフロンティア市街に中継され、不安に駆られる市民たちを勇気付けることとなった。

会場側からコンサート会場を望む景色。コンサート会場となった横浜地区の湾岸部は、華麗な夜景で知られることもあり、コンサートは夜からの開演となった。

観客席側からステージを望む景色。コンサート開幕時、ステージ周囲の海上にウォータースクリーンが展開し、シェリルの映像が映し出された。

▼コンサート船

ライブステージ。コンビナート風の建物の周囲にホログラムの「帆」を展開することで、帆船のような外観となる。また帆にはパフォーマンスが投影される。

コンサート会場をバジュラが襲撃するも、S.M.Sのバルキリー部隊らに防衛され、シェリル、ランカはライブを続けた。

上図は昼間の会場付近。左図はスタッフ用のバックステージ。海中に敷設されており、ガラスの天蓋を通して海が見える。

Illustration by Hidetaka Tenjin / Rendering Support by Satelight CG Team

S.M.Sの中核となる ステルス強襲航空戦艦

開発系譜図

マクロス・クォーター

ガンシップ(ARMD-R)に装備された連射バスターキャノンは、高出力の量子反応砲モードのほか、低出力での連射モードや艦首にピンポイントバリアを集束しての近接戦闘武器としても用いることができる。

機体解説

軍事コンサルタント企業、S.M.Sが運用する万能型宇宙戦闘空母シリーズ。民間企業であるS.M.Sが保有を許された戦闘艦として最大、最強のものである。新統合政府規約では各自治移民惑星や移民船団は独自の新型兵器の開発・装備を禁じられている。当然のことながら、新統合政府、新統合軍は、移民惑星、移民船団の護衛を務める責を負うこととなる。しかし実際には、爆発的に広がっていく人類の版図をカバーするには兵員や装備が絶対的に不足していた。新統合政府は、特定の民間企業に移民惑星、移民船団などの護衛任務を主体とした軍事業務を委託して対応した。幾つも軍事プロバイダーが創設されたが、S.M.Sはその中でも最大の規模を誇る大手である。S.M.S創設には新統合軍が様々な援助を行っていて、創設時の人員の多くは新統合軍から転入した者である。S.M.Sと新統合軍の結びつきは強く、VF-25などの最新兵器の試験運用が委託されたり、また強力な重量子砲を備えたマクロス・クォーター級の運用も特別に許可されている。

データ

※データは要塞艦時のもの

所属 ▶ S.M.S
全長 ▶ 472m
全幅 ▶ 178m
全高 ▶ 96m
運用慣性重量 ▶ 16.5万t
全備重量 ▶ 26.5万t（本体15.2万t）
動力系 ▶ 反応エンジンクラスター
標準装備 ▶ ガンシップ(ガトリング式バスターキャノン)、ビーム砲塔、火器多数
キャリアー（ARMD-L） ▶ 全長約254m／全備重量5.6万t
ガンシップ(ARMD-R) ▶ 全長約227m／全備重量4.8万t
移動砲台艦(BASTER-L、R) ▶ 全長約129m／全備重量約8,855t

サイズ比較

マクロス・クォーター

艦長

ジェフリー・ワイルダー

マクロス・クォーター

運用記録

S.M.S発注のマクロス・クォーターの設計は惑星エデンの八州重工艦船技術研究所と新星インダストリー艦船設計本部で行われた。実際の建造は、地球より比較的近い配備場所が予定されている艦は惑星エデン衛星工場群で行われた。地球より遥かに遠方の移民惑星あるいは移民船団では、送られた設計図を元に現地での製造が行われた。マクロス・クォーターシリーズは基本設計は同一であるが、配備される場所、用途によって武装や艤装、搭載艦載機などの細部は異なる。塗装も、標準はグレーとホワイトを基調とした大気圏内外両用標準迷彩であるが、移民星の地上配備を主任務とする艦はデザートイエロー迷彩に塗装されるなど、バリエーションがある。フロンティア船団配備のマクロス・クォーターは、フロンティア船団内で建造された。起工は2005年12月で2006年6月にセンター・ハル部分が進宙。その後、艤装工事を行い、ARMD-L、ARMD-RならびにBASTER-R、BASTER-Lとのドッキング作業が行われ、2007年3月から実用運用試験が開始された。アイランド1の左舷中央付近にS.M.S専用の桟橋が設けられており、ここにマクロス・クォーターの整備ドックがある。

S.M.Sの母艦としてだけではなく、対艦戦や要塞攻略において欠かせない戦力となる。

高い運動性を活かし、残骸を利用したサーフィンスタイルでバジュラ本星へ突入した。

> **関連事項** EXTRA REPORT
>
> **分離合体**
>
> マクロス・クォーターは、中央ブロック、両腕部ブロック、両脚部ブロックの5ブロックから構成されており、各ブロック毎に非常用のエネルギー系統、生命維持システムなどが独立。ひとつのブロックのダメージが、他に影響を及ぼさないように考慮されている。また各ブロックを交換することにより迅速に修理・再出撃が可能である。
>
> 両腕部と背面のユニット、本体の5ブロックはそれぞれ単独で行動可能である。

要塞艦

マクロス・クォーターの設計基本コンセプトは「比較的小型で機動性に優れた万能宇宙戦闘空母」である。たとえばマクロス7艦隊が遭遇したプロトデビルンなどの敵に対応するには、アイランド1先端部にドッキングしているバトル・フロンティアでは小回りが効かない。かと言って移民船団に随伴する新統合軍の標準型宇宙巡洋艦や汎用宇宙空母では歯が立たない。本艦はそういった事態を想定し、設計が進められた。小型大出力で連射可能なバスターキャノンや大加速を可能とする艦船用反応エンジン、艦船用エネルギー変換重装甲システムなど軍事機密に属する機構が多数、新統合軍技術本部から試験運用という名目で供与された。

全長約402m、全備重量約16.5万トン(ガンシップ、キャリアー含む)。フォールド航行が可能なのはもちろん、単独で惑星上への降下、大気圏航行、水上水中航行まで可能。高出力の反応エンジンクラスターを船体後部左右に備え標準型宇宙巡洋艦を遥かに凌ぐ加速性能がある。艦の右舷前方にはガンシップ(ARMD-R)、左舷前方にはキャリアー(ARMD-L)が、センターハル(中央船体)の上方左右にはバスターキャノン砲台部(BASTER-R／L)の各ブロックがドッキングしてマクロス・クォーターを形成している。BASTER-R、Lの両砲台艦はセンター・ハルとドッキング時はバスターキャノン砲塔ならびに補助推進エンジンとして機能する。

ガンシップ(ARMD-R)

艦首に速射バスターキャノン装備。大容量のエネルギーキャパシターを内臓しており5~6回の最大出力連射が可能。エネルギーを絞れば10回以上の連射が可能。以後はエネルギーチャージの速さによるが、クォーター本体とドッキングしている場合は本体からのチャージが行われるので連続射撃が可能(ガンシップ単体ではチャージに時間がかかる)。ガンシップ艦首にはエネルギー転換重装甲が施されておりピンポイント・バリア併用展開可能で「ダイダロス・アタック」も行える。ガンシップ上甲板には12基のミサイルランチャーが組み込まれており、対艦ミサイル、迎撃ミサイルなど多数を保有している。

移動砲台艦(BASTER-L)

センターハル

移動砲台艦(BASTER-R)

キャリアー(ARMD-L)

戦闘機、爆撃機、攻撃機、偵察機、デストロイドなど合計60~80機を艦載可能(機種により艦載機数が変わる)。艦首部下方のバルジにはケーニッヒモンスター専用の格納庫がある。キャリアー甲板には0.5G程度の人工重力場を発生させることが可能で効率的に整備作業が行える。艦載機昇降用のエレベーター3基が備えられている。艦体底部にはセンター・ハル腕部とのドッキングシステムがある。キャリアーの飛行甲板部分は強攻型変形時にはエネルギー転換装甲により「楯」として機能する。キャリアー先端部にピンポイント・バリアを集中させ、いわゆる「ダイダロス・アタック」を敢行することが可能。

強攻型

マクロス・クォーターはトランスフォーメーションを行い、巨大人型兵器として運用される。その際には右腕部分にはガンシップをドッキング装着し、3連装ガトリング式バスターキャノンを連射可能となる(ガンシップの反応炉に加えてマクロス・クォーターからのエネルギー供給も可能となるため。またバスターキャノンの強制冷却もセンター・ハルのシステムに連結され強化される)。3砲身を展開して、1砲身の大出力バスターキャノンとして射撃することも可能であるが、膨大なエネルギーを消費することと、冷却のために射撃回数は制限される。左腕にはキャリアーをドッキング装着し「盾」として使用する(飛行甲板部分が新式のエネルギー転換重装甲になっている)。この両腕はマクロス・クォーターの大出力腕部アクチュエーターにより駆動されるが、機動戦闘時にはガンシップ、キャリアーの各所に設置された高機動用核パルスロケットモーターによって大加速で振り回すことが出来る。腕部の両肘関節部にはエネルギー転換装甲の小型の「楯」が組み込まれている。

強攻型となったマクロス・クォーターは、強力な火器と人型兵器としてのメリットを併せ持つ。

武装

標準武装としてクォーターカノン(4砲身型重量子砲)×8、対艦ミサイル、対空ミサイルランチャー多数。デストロイド・ポッド(デストロイドを個別に艦外に射出あるいは、半砲台として使う専用ハンガー)多数。武装は、艦によって差異があり、多数のビーム砲塔を増設した重攻撃型や水中ミサイル、ロケット爆雷ランチャーなどを装備した水上・水中戦強化型などが存在する。

艦橋部

上図の艦橋は、第二次バジュラ遭遇戦を経て、対バジュラ用に改修されたもの。外観的にはブリッジ左右のアンテナ部の形状変更が目を引く。

クォーターカノン

強攻型時の両肩などに、合計8門装備されたクォーターカノン。空母タイプバジュラの装甲を貫くほどの威力があり、対バジュラ戦の重要な武器となった。

マクロス・アタック

マクロス・クォーターが近接戦闘時に行う「マクロス・アタック」は、ARMD-L艦首にピンポイント・バリアを集束、対象の装甲を貫き、内部でデストロイド隊を展開して攻撃する戦法である。これは、かつてSDF-1 マクロスが行った「ダイダロス・アタック」と同様の戦法であり、急遽考案されたものだったが、新統合軍、S.M.Sにも受け継がれている。

▲▶強攻型

速射バスターキャノン

ARMD-R艦首に装備された速射バスターキャノンは、要塞艦時でも使用可能。フォーメーション・ビッグ・ウェンズデー発動時に用いられ、血路を切り開いた。

ARMD-R(速射バスターキャノン)は、他船団のS.M.Sが使用するマクロス・クォーター級にも数多く装備されており、同艦を代表する武装となっている。

> **関連事項** EXTRA REPORT
>
> **マクロス・クォーターのバリエーション**
>
> マクロス・クォーターは、他の船団のS.M.Sにも導入されている。各船団によって武装や装備は異なるものの、基本的な構成に違いはない。バジュラ本星の戦闘に到着したS.M.S増援部隊にも、数多くの同型艦が確認されている。
>
> バジュラ本星に出現したS.M.S・新統合軍の連合艦隊。塗装の違いが目を引く。
>
> マクロス17、マクロス23船団所属のS.M.Sをはじめ、多くの艦が増援に現れた。

AIF-9V

ギャラクシーが発展させた ゴーストX-9の末裔

ギャラクシー幹部に制圧されたフロンティア船団と、S.M.Sとのバジュラ本星における決戦に投入され、S.M.Sの早乙女アルト搭乗のYF-29と交戦した。

データ

所属 ▶ マクロスギャラクシー船団
全長 ▶ 11.35m
空重量 ▶ 5,840kg
機体設計最大荷重 ▶ 24.5G
エンジン ▶ 新中州／P&W／ロイス／GG　FF-2038C＋熱核タービンエンジン×2(推力57,200kg+×2)
最大速度 ▶ M5.0＋(高度10,000m／主に大気摩擦熱による制限)単独衛星軌道進出可能。
セントラルコンピュータ ▶ MG／GG製　モデルOMEGA／2055-ND3(フライト／ファイアコントロール統合・完全自立型)タイプ、階層プログラミング／自己学習型
固定武装 ▶ 25mmビーム砲(マウラーROV-25改)×6／20mmビーム砲(マウラーROV-20)×2／マイクロ・ミサイルランチャー(ビフォーズBML-04B)×4／多目的複合兵装搭載ポッド×2／BP-01α55mmビーム砲(基本的にはVF-27用ビームガンポッドと同じものであるが、反応炉の出力が小さいためビームグレネード機能は省略されている)／機体下面にハードポイント×4／大型反応弾頭対艦ミサイル、偵察パック、フォールド・ブースターなどを装備可能

開発系譜図

QF-3000E ▶ X-9 ▶ AIF-9V

サイズ比較

VF-1J
AIF-9V

機体解説

新統合軍の汎用無人戦闘機AIF-7Sをマクロス・ギャラクシー船団が独自に改良した機体で、同船団の主力無人汎用戦闘機として多数が配備されていた。基本設計はAIF-7Sから大きな変更はないが、エンジン出力の向上、武装の強化など全般的な性能がアップしている。本機のAIシステムには、新統合軍規約により制限されているはずの高度な自律判断機能が搭載されており(かつてのゴーストX-9に搭載されていたAIと同タイプとされる)、母艦からの指示が受けられないジャミング下においても、自律判断による戦闘続行が可能となっている。本機は新統合軍の識別コードでは、AIF-9Vの型式名で登録されているが、ギャラクシー船団内では「ゴーストV-9/MG」の名称で呼ばれていたとされる。

GHOST

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶AIF-9V ゴースト

運用記録

AIF-9Vは小型軽量の機体であるが、有人用の装備を積んでいないため、機体内のペイロードが大きく、機内には大量の推進剤とマイクロミサイルが納められている。また機首上部中央には大型で大出力のBP-01αビーム砲が増設、その左右には内蔵式のマイクロ・ミサイルランチャー各2基(計4基)と、25mmビーム砲各3基(計6基)、加えて機体下部左右にも20mmビーム砲が追加されており、重VFにも相当する武装を誇る。また、機体後部に増設されたエンジンポッド前部は、多目的複合兵装ポッドとなっている。クリップド・デルタ翼の主翼は自在に可動し、宇宙空間での機体の重量移動、大気内での高速機動の際には、主翼が最適の位置に移動する。また上下に折り畳んだり、迎え角を最大90度まで変えることも可能である。

AIF-9Vは■千機が生産されたとされ、そのうち256機がバトル・ギャラクシーに配備された。バトル・ギャラクシー配備機は、バジュラ本星での最終決戦に投入されたが、兵装、プロペラント全てが消耗した時点で特攻・自爆を行うようプログラムが組まれていたため、全機が失われている。

VF-27γSPに3機のAIF-9Vが随伴し、クイーン・フロンティアに迫るYF-29の迎撃に当たった。

グリーンに輝く機首先端には統合モニターシステムとセントラルコンピューターなどのアビオニクスを搭載。

▶VF-27用に開発された高出力のビーム砲を機首に装備(ただし、機体の反応炉の出力がVF-27より少ないためビームグレネードモードは省略されている)。ビーム砲による空力特性の変化に合わせて、機首にX字型に4枚のカナードが装備されている。

新鋭機YF-29に搭乗した早乙女アルトだが、無類の機動性を誇るAIF-9Vと連携するVF-27γSPには苦戦することとなった。

関連事項 EXTRA REPORT

民生用VF-1

ゴーストと並び、第一次星間大戦において統合軍機動部隊の主力となっていたVF-1だが、大戦後に主力機がVF-4に交代すると、多くのVF-1は一線を退き、民間への払い下げ品として、"第2の人生"を送っていた。2059年頃には、VF-1用の交換パーツも入手困難となっており、中にはオブジェやコンサートの大道具といった具合に、VF-1の外観のみが活用されたケースもあったという。

ランカ・リーのコンサートにて使用されたVF-1。ホログラムではなく、一応、本物のVF-1が運び込まれていた模様。

フロンティア船■の美星学園では、校舎の屋上にVF-1が飾られていた。

関連事項 EXTRA REPORT

新統合軍、S.M.Sのゴースト

2059年にバジュラと遭遇したフロンティア船団の新統合軍には、AIF-9Vの元となったAIF-7Sが配備されていた。しかし初遭遇戦において、バジュラの発生させる電磁バーストがAIF-7Sの電子機器を容易に無力化できることが判明したため、以降、AIF-7Sは対バジュラ作戦に投入されなくなる。その後、L.A.I社によって、対ECM性能を強化した改良機QF-4000が作られた。同機は民間軍事プロバイダーS.M.Sに試験的に配備され、RVF-25の随伴機として運用された。

▼AIF-7S

▲2059年当時、第一線で活躍する高性能機であったが、相性の悪いバジュラ相手には、その真価を発揮できなかった。

AIF-7Sは、元々はVF-171ナイトメアプラスの支援用として新統合軍が2045年頃より量産・配備を行っていた機体である。

中型ボドルザー■要塞を巣とするバジュラの掃討戦において、RVF-25の随伴機として投入されたQF-4000。

◀QF-4000

掃討戦参加時のRVF-25の機体下面には、ジャミング装置が装備され、バジュラによる電子機器やゴーストへの干渉を防いでいた。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-25F/TW1

機体解説

YF-24の基本設計を基に開発されたVF-25メサイアは、最新鋭のマルチロール可変戦闘機であったが、未知の敵であるバジュラ相手には劣勢を強いられていた。そこで新星インダストリー・マクロス工廠は、マクロス・ギャラクシーからもたらされた重量子ビーム砲の小型化技術により、VF-25に搭載可能なビーム砲を開発した。しかし小型化されたとはいえ、仰角俯角の確保時、巨大な連装ビーム砲は操縦性に悪影響を及ぼしてしまう。この操縦性の低下を強大な推力で制御し、同時に高機動性を与えることを目標に開発された追加装備が、トルネードパックである。このパックを装備したVF-25は、対バジュラ用試作重量子ビーム砲稼動実証機VF-25F/TW1、通称"トルネードバルキリー"として実戦に投入されていった。

あらゆる戦況で
真価を発揮した新装備

主要パイロット

早乙女アルト

データ ※データはファイター形態時のもの

所属▶S.M.S
全長▶18.72m（冷却ユニット伸張時20.12m）
全幅▶17.05m
全高▶4.50m（連装ビーム砲身水平位置、砲塔上部まで　着陸脚含まず）
空虚重量▶10,070kg
最高速度▶M4.0+（それ以上の加速も可能であるがビーム砲塔部分の強度、耐熱限界のため）
標準装備▶連装重量子ビーム砲(TW1-HPC／M25)×1／2.25mm機銃(ラミントンES-25A)×2／58mmガトリングガンポッド(ハワードGU-17A)×1／マイクロミサイルランチャー(ビフォーズBLM−02S)×10／宇宙空間用大型マイクロミサイルポッド(LLM−03A)

サイズ比較

VF-1J
VF-25F/TW1

開発系譜図

VF-25 ▶ VF-25スーパーパーツ装備 ▶ VF-25F/TW1

VF-25F/TW1 トルネードバルキリー

運用記録

トルネードバルキリーは、マクロス・ギャラクシー船団救援の任務に際し投入された。しかしその際、予期せぬバジュラのフォールドにより、宇宙空間からアイランド1での大気圏内戦闘に移行することとなった。懸念された大気内戦闘であったが、自己学習型空戦コンピュータはメインエンジンの可変ノズル駆動、翼端エンジンポッドの旋回、そして機体各所の高機動スラスターの推力を用い、補助的に可動翼を併用して瞬時に空力変化を補正。これにより巨大な砲塔による空力損失を補って余りある機動性を獲得し、スーパーパーツ装備による大気圏内運用時のVF-25を凌ぐ空戦機動性を発揮した。

S.M.S隊長オズマ・リーの計らいにより、新人パイロットの早乙女アルト准尉へ優先的にトルネードパックが支給された。

早乙女准尉による運用は良好な記録を残したと見え、その後はミハエル・ブランのVF-25Gにもトルネードパックが装備された。

標準装備

TW1-HPC／M25重量子ビーム砲

ビフォーズ・マクロス・フロンティア工廠製試作連装重量子ビーム砲と、駆動用反応炉・パワーコンデンサー・冷却ユニットを組み合わせている。最大出力でのビーム連続照射時間は5秒以下、ビーム発生ユニットの寿命は300秒である。

巨大な連装ビーム砲は、宇宙空間では周囲をカバーする旋回式砲塔として十分な性能を発揮した。しかし、大気圏内では空気抵抗が増し操縦の妨げとなるため、主翼のエンジンポッドなどで機動性を確保しないと運用しにくい。

マイクロミサイルランチャー BLM-02S

TW1-WCA主翼補強固定ユニットに、左右それぞれ3基内蔵している。また大気圏外仕様では、翼下に宇宙空間用大型マイクロミサイルポッドLLM-03Aを装備できる。

58mmガトリングガンポッド ハワードGU-17A

重量子ビームガンポッドが開発中であったが、実戦に間に合わなかったため在来型のガトリングガンポッドを装備する。弾丸は対バジュラ用高速徹甲弾を使用している。

ファイターモード

長大な砲身をもつ連装ビーム砲は、大気圏内では砲身を旋回させると空力的なバランスが崩れ、乱流が発生し操縦が非常に困難になる。そこでファイターモードのトルネードパックは、主翼部と翼端に回転式支持架を設けた連装のエンジンポッドを装備し、両翼端の大推力エンジンを回転可動させることで、砲身を旋回・上下させることなく機体全体の向きを変え、ビーム砲を敵に向けることを可能としている。また、このエンジンは宇宙空間だけではなく、大気圏内での姿勢制御にも活用され、従来の航空機の概念を覆す機動を実現した。

両翼端の回転式エンジンポッドと、脚部のベクタードノズルを組み合わせることで、驚異的な機動が可能となった。このデータはYF-29の開発に活かされることになる。

アイランド1内では、推力による姿勢制御というコンセプトが想定以上の成果を見せ、市街地でのバジュラとの高速戦闘時にもそのポテンシャルを発揮した。

▼大気圏内仕様

◀上面に連装ビーム砲ユニットを装備する。両翼に装備されるのはTW1-TJR機動ロケット／ジェットポッドで、D-30R1ジェット／ロケット併用エンジンを各ポッドに2基搭載している。

▼大気圏外仕様

▼エンジンポッド先端に推進剤補助タンク兼大気内突入用フェアリングを装着している。翼下には大型マイクロミサイルポッドを装備できる。

ガウォークモード

トルネードパックとのマッチングに優れているのが、ガウォークモードである。トルネードパックの回転式エンジンポッドは、フレキシブルな機動を可能とするガウォークモードの特性を底上げし、特に大気圏内で優れた特性を発揮した。また連装ビーム砲の旋回射撃は、大気圏内では音速以下に限定されており、極超音速では砲身は機首前方方向でロックされ固定砲となってしまう。そのため、大気圏内で連装ビーム砲を活用する際には、特にガウォークモードで戦闘を行うことが適していたと考えられる。

ガウォークモードでのホバリング時は、翼端のエンジンポッドも併用する。強力なビーム砲使用時でも、姿勢が乱れることはない。

両翼端のエンジンポッドを失った状態での姿勢維持は難しいが、ガウォークモードなら限定的ながらホバリングで対応できる。

アイランド1内の戦闘では、両翼の推進補助パーツを失いながらも戦闘を継続したガウォークモードを主体とし、連装ビーム砲を活用しつつ戦い抜いている。

▶大気圏内仕様

◀大気圏内仕様では、ファイターモードと同様に推進剤補助タンク兼大気内突入用フェアリングがない。脚部には、TW1-CFT脚部コンフォーマル推進剤タンクを装備している。

◀大気圏外仕様

▲フェアリングおよび翼下のマイクロミサイルポッドを搭載している。ビームユニット後部の「尾」は宇宙空間用の冷却用ユニットである。

バトロイドモード

バトロイドモードでは、トルネードパックの主要パーツである主翼ユニットと上面部の連装ビーム砲ユニットが背面に配置され、正面からのシルエットはノーマル機に近い。一方、明らかにノーマル機と異なるのが、肩部の連装ビーム砲である。バトロイドモードでもその威力を発揮することが可能だが、ほかのモードに比べると射撃範囲は限定されてしまう。また、胸部や腰部には増加装甲を装備しておらず、この点には連装ビーム砲の運用を主眼においたトルネードパックと、全形態での強化を狙ったスーパーパーツおよびアーマードパックとの方向性の違いが垣間見える。

ランカを救出するため、バトロイドモードでアサルトナイフをふるう。長大なビーム砲と、背面に巨大なユニットを装備するが、VF-25の格闘戦性能の高さは失われていない。

アイランド1内の戦闘では、連装ビーム砲の運用から格闘戦まで、大気圏内戦闘での有益な実証データの獲得に成功した。本機のコンセプトの有用性は、YF-29が証明することになる。

バトロイドモードの主武装はガンポッドである。本来は重量子ビームガンポッドの搭載が予定されていた点は、YF-29のプロトタイプであることを物語る。

▶大気圏内仕様

◀大気圏内では、一部パーツを排除する。主翼ユニットと連装ビーム砲が背面側に装備され、正面はノーマルなVF-25という印象となる。スリムなVF-25のシルエットと、背面のボリュームが対照的である。

▼大気圏外仕様

▲大気圏外では、ビーム生成中枢と反応炉の冷却に大気を利用できないため、ビームユニット後部の冷却ユニットを展開する。バトロイドモードでは、特に「尾」のように見える。

VF-171／デストロイド
マクロス・フロンティアを支える 新統合軍機動兵器

バトロイドモード

ファイターモード

バジュラ戦役後期で見られた、アーマードパックAAS-171キットを装備したVF-171。この他L.A.I社製スーパーフォールド・ブースターの装備も可能であった。

バジュラと格闘戦を行うVF-171。初期の遭遇戦以降、火力を向上させたVF-171だったが、近接戦では機動力に勝る兵隊バジュラに苦戦した。

▲VF-171ナイトメアプラス
特殊作戦機VF-17をベースに、一般パイロット向けに改修した機体。マクロス・フロンティアにも多数が配備されたが、バジュラに対しては苦戦することとなった。

▶デストロイド・シャイアンII
統合戦争当時に運用されていたデストロイド・シャイアンをベースに再設計した機体。新統合軍のみならず、民間軍事プロバイダーS.M.Sにも配備されていた。

シャイアンIIはS.M.Sのマクロス・クォーターにも配備され、対空砲座代わりに対空迎撃任務を担当した。

▶デストロイド・ワークス
シャイアンIIから武装を撤去した作業用デストロイド。フロンティア船団では新統合軍だけでなく、民間でも広く使用されている。

第一次バジュラ遭遇戦後バジュラの遺骸の運搬作業を行うワークス(写真左上)。

機体解説

2059年のフロンティア船団が経験した「バジュラ戦役」において、同船団の主力有人機動兵器は、VF-171ナイトメアプラスとデストロイド・シャイアンIIであった。これらはいずれも、過去に一定の評価を得た機体をベースに再設計を行った、堅実な性能の機体である。ただし、フロンティア船団が遭遇したバジュラは、機動兵器としては規格外の性能を誇るものであり、堅実なだけの機体では十分な対応が行えるものではなかった。結果、戦役初期の新統合軍は、民間軍事プロバイダーであるS.M.Sの支援に頼ることで、暫定的に戦況を維持しつつ、対バジュラ兵器である「インプラント弾」の開発を急ぐこととなる。

サイズ比較

VF-1J　VF-171　シャイアンII　ワークス

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶VF-171 ナイトメアプラス／デストロイド(シャイアンⅡ／ワークス)

運用記録

前述のように、バジュラに対して苦戦を強いられた新統合軍機動兵器群であったが、幸い、バジュラの装甲は人類側の通常兵器でも対応しうるものであり(バジュラは一定の戦闘経験を経ることで、群れ全体の防御力が強化されていく、との仮説もあったが、少なくとも本戦役ではそうした兆候は見られなかった)、戦役の中盤ではVF-171に大型ミサイルや反応弾を装備させ、質・量で優れるバジュラを、火砲の厚みで押すことで、かろうじてパワーバランスは保たれていった。

バジュラとドッグファイトを演じるVF-171。中にはバジュラとの格闘戦を禁じ、遠距離からのミサイル攻撃に徹した部隊もあったという。

VF-171の機動力はバジュラに圧倒されており、容易に機体に接近され、撃墜される事例が珍しくなかった。

アイランド1内に侵入した兵隊バジュラを迎撃するデストロイド部隊。だが、機動の鈍いデストロイドは、格好の的であった。

VF-171 ナイトメアプラス

スーパー・ノヴァ計画で選ばれた新統合軍の主力戦闘機VF-19が諸事情により量産、配備が進まなかった(政府が移民惑星や移民船団への配備を調整した、機体価格が高額だった、乗りこなせるパイロットが不足していた等の理由が囁かれているが真相は不明)ことから、老朽化したVF-11の代替機として考案されたのがVF-171である。

VF-171は、VF-17をベースとして開発された多目的重可変戦闘機で、VF-17の弱点であった高い製造コストを引き下げるとともに、十分な機内容積を生かしてアビオニクスなどを最新のものに更新し、性能の向上を図った。

初飛行は2046年に行われ、優れた汎用性と扱いやすさから急速に量産配備が進み、事実上の主力機として移民星、移民船団で活躍していった。フロンティア船団で運用されているのは、新統合軍標準仕様ブロックⅡ(2055年度アップデート版)であるが、一部の機体は2059年にフロンティア船団が独自にアップデートしたブロックⅢFに改修作業が完了している。このブロックⅢFはセンサー、アビオニクス類をVF-25用に開発されたAA/AS/SF-06統合マトリックスに更新し、エンジンをFF-2550F熱核タービンエンジンに換装したもので、さらに強力な機体に仕上がっている(おそらくはコストとの兼ね合いでEXシステムの搭載は見送られた)。

VF-171のアーマードパックは、胸部・脚部の増加装甲と、右腕部の専用武装(大口径砲と30mm機関砲の複合兵装パック)からなる。

大量の兵器を積載し飛行するVF-171。第三世代型アクティブステルス・システムにより、機外に兵装を装備しても高いステルス性を保つ。

データ

全長▶15.65m
空虚重量▶12,950kg
エンジン▶新中州重工／P&W／ロイス社製FF-2250F熱核タービンエンジン×2
大気圏外最大推力▶67.5t×2
バーニアエンジン▶P&W HMM-6B
最高速度▶M4.3+(高度10,000m、機体外部兵装無しのクリーンな状態)／M21以上(高度30,000m以上)
開発▶ゼネラル・ギャラクシー／マクロスFゼネラル・ギャラクシー工廠(3M改修設計)
標準武装▶ビフォーズAMG-30/30mm重機関砲×2／エリコーンAAB-9Aビーム砲×2／内蔵式ビフォーズBLM-02Sマイクロミサイルランチャー×2／ガトリング・ガンポッド ハワードGU-14B改×1
※この他、主翼部・追加兵装用ステーション×5に中射程対空ミサイル ビフォーズAAMM-05D／センチネルFXA-60A高速徹甲ロケット6連装ポッド 短射程高機動対空ミサイル L.A.I/AAMS-02A 3連装パック／対艦ミサイル センチネルAVM-11R(反応弾頭装備可能)4連装パック等を組み合わせての運用が可能。また主翼下兵装ステーションには最大2基の大型対艦反応弾頭ミサイルを装備可。

ガウォークモード

▲対バジュラ戦においては、ファイター形態での機動戦は捨て、武器を取り回しやすいガウォーク形態で格闘を挑む者もいたという。

デストロイド・シャイアンⅡ

対空攻撃を主任務としたデストロイドで、アイランド1などの一般区画に侵入したバジュラの迎撃などに当たった。火力自体はバジュラを撃墜しうる威力を誇るものの、高機動で飛び回るバジュラに対して命中させることができず、弾幕を張って牽制する程度の働きしかできなかったとされる。

2059年初頭、フロンティア船団のコンサート会場を襲撃したバジュラを、ガトリング砲で迎撃するシャイアンⅡ。

第二次バジュラ遭遇戦において、マクロス・クォーターがバジュラ大型艦にマクロス・アタックを試みた際には、甲板上にシャイアンⅡが配備され、一斉砲撃を行った。

デストロイド・ワークス

デストロイド・シャイアンⅡをベースとした作業用デストロイド。火器やレーダーポッドなどの戦闘用の装備は排除され、腕部には精密作業用のマニピュレーターが左右1対装備されている。バジュラ戦役においては、破壊された瓦礫の撤去や、撃墜されたバジュラの残骸の回収などの作業で活躍をした。船団政府からは、バジュラに対し有効打を与えられないVF-171やシャイアンⅡよりも、よっぽどコストに見合った働きをしてくれる、などとも言われていたという。また戦役後には、移住の始まったバジュラ本星にて、住居ブロックの施設などに活躍した。

バジュラ戦役後、バジュラ本星での住居施設作業に従事するワークス(写真中央)。

EXTRA REPORT 関連事項

民間用デストロイド・ワークス

ワークスは、船団内で民間の土木用重機としても運用されていた。土木機器メーカーも、掘削機や削岩機など、ワークスのマニピュレーターに対応した作業用オプションを開発していたという。

2059年開催の超時空重機展より。右側に掘削機を手にしたワークスが見える。

マクロス・ギャラクシー船団

バジュラの総攻撃を受け、船団は壊滅。生き残ったわずかな艦が、マクロス・フロンティア船団と合流した。行方不明となった旗艦、バトル・ギャラクシーはこの戦闘で失われた可能性もある。

◀ギャラクシー難民船

▲双胴宇宙空母ダルフィム

▲デネブ級巡洋艦

バジュラの襲撃を生き延びた大型空母

艦体解説

第21次新マクロス級超長距離移民船団「マクロス・ギャラクシー船団」は、民間企業ゼネラル・ギャラクシー社がスポンサーとなり、サイバネティクスやインプラントといった最新技術を導入、乗員の多くがインプラント化されるなど、数ある移民船団の中でも屈指のハイテクノロジー船団である。船団旗艦はバトル・ギャラクシーであるはずだが、船団がバジュラと交戦した後、マクロス・フロンティア船団と合流を果たした際には行方不明となっていた。

Mechanic Sheet
メカニックシート
マクロス・ギャラクシー船団

運用記録

突如襲来したバジュラの総攻撃により、マクロス・ギャラクシー船団は壊滅的な状況に陥った。襲撃からわずかな時間で護衛艦の1/3を失い、メインランドも崩壊しつつある中、マクロス・ギャラクシーはマクロス・フロンティア船団にSOSを発信。だが、フロンティア政府は、これを悪質なサボタージュとし、黙殺を決定する。フロンティア船団を来訪していたシェリル・ノームに雇われたS.M.Sの活躍により、わずかに生き残った難民船が救出されると、ギャラクシーを襲っていたバジュラたちは突如としてフォールドを開始し、フロンティア船団への襲撃を開始した。

シェリルは故郷を救いたい一心から、自費でS.M.Sを出撃させる。マクロス・クォーターの基本使用料は、1億2000万クレジットであった。

生き残ったギャラクシー上層部の意識集合体(ブレイン)はフロンティア船団に紛れ込み、「フロンティア制圧作戦」を開始しようとする。

艦艇構成

メインランドと旗艦バトル・ギャラクシーを中心として、護衛用の宇宙空母ダルフィムやデネブ級巡洋艦などで編成。難民船として使用された艦も、本来は護衛艦として使用されていたものだろう。バジュラの襲撃によりメインランドや旗艦は失われ、生き残った艦艇はマクロス・フロンティア船団に編入された。

フロンティア船団に拿捕されるギャラクシー潜状船団の中には大型の空母の姿もあった。

ギャラクシー船団の供与技術

マクロス・ギャラクシー船団では、乗員たちのインプラント化が活発に行われており、これは船団上層部による意識支配の手段にもなっていた。インプラント弾はこの技術を転用したもので、フォールド・ジャミングによりバジュラ間の集合意識的なつながりを寸断した上でインプラント弾を打ち込むことで、バジュラの制御を行う計画であった。ギャラクシー船団の技術を奪取したフロンティア政府が反攻作戦「ヒプノシス」にて初めて実戦に投入し、結果として大半のバジュラを支配下に置くなど、想定されていた成果を実現するに到った。

▲ジャミング装置
マクロス・フロンティア船団内でも、総合機械メーカーL.A.Iの協力でフォールド波の研究が行われており、独自にジャミング装置を完成させていた。

インプラント弾はバジュラの強固な外殻を避け、関節部を狙って打ち込まれていたが、個体によっては外殻を貫いていたこともあった。

インプラント弾を撃ち込まれたバジュラには、体色に変化が表れていた。インプラント弾の影響は神経系統だけにとどまらない可能性もある。

関連事項

上層部に意思を奪われた兵士たち

グレイスやブレラたちマクロス・ギャラクシー船団の工作員たちは、インプラント技術によって体の大半を機械化されている。一般人と違い、彼らは船団上層部の命令を実行するための存在であり、その行動は全て上層部に制御されている。個人の意思は奪われているが、インプラント端子が破壊されることで自我を取り戻す場合もある。

◀ブレラ・スターン

制圧作戦実行のため、暗躍する工作員たち。その多くはブレラと同様、ロングコートにサングラスという服装であった。

VF-27γSP

インプラント技術を活用した VFの究極形

機体解説

VF-27γSP、通称「スーパールシファー」は、ブレラ·スターンの乗機VF-27γルシファーに、マクロス·ギャラクシー船団のガルドワークス工廠によって開発された追加パーツを装着した機体である。機体背部にマウントされる汎用無人偵察戦闘機「ゴブリンII／QF-5100D」と、機体各所に追加された装甲、追加兵装、予備推進剤タンクから構成されている。ゴブリンIIの出力により、スーパーパーツ追加重量分の損失を補って余りある運動性能をもたらしている。

データ

※データはファイター時のもの

所属▶調査中
全長▶18.8m
空虚重量▶12,080kg
エンジン▶新中州／P&W／RR／MG FF-3011/C ステージII熱核反応タービンエンジン（宇宙空間最大推力1377kN）×4
高機動スラスター▶P&W HMM-9
大気内最大速度▶M5.2+（高度10,000m）
標準武装▶マウラー ROV-20 20mmビーム機銃×1／ラミントン ES-25A 25mm高速機関砲（マウラー ROV-25 25mmビーム機関砲とどちらか選択装備）×2／センチネルHBC/HS－35B 35mm重ビーム機関砲×2／BGP-01βビームガンポッド/ビームグレネード×1／ビフォーズBML-04B 内蔵式マイクロミサイルランチャー×4

▶ゴブリンII/QF-5100Dブースターウェポンユニット

データ

全長▶8.02m
全幅▶5.83m
空重量▶4,120kg
機体設計最大荷重▶25.5G（VF-27用スーパーパーツ用に補強改装後）
主機▶新中州/P&W/ロイス FF-203C熱核タービンエンジン×2（推力宇宙空間最大515kN×2）
最大速度▶M5.2+（高度10,000m、主に大気摩擦熱による制限）
固定武装▶マイクロミサイルランチャー（ビフォーズBLM-04B）×6

主要パイロット

ブレラ·スターン

開発系譜図

VF-27γSP

サイズ比較

VF-1J
VF-27γSP

Mechanic Sheet

メカニックシート

VF-27γSP ルシファー

運用記録

シェリル・ノームの護衛任務に就くブレラ・スターンの乗機として、マクロス・フロンティア船団へ搬送された。ランカを保護する場合など、状況によってはS.M.Sと共闘を行うこともあったが、パイロットであるブレラの意思はマクロス・ギャラクシー船団の幹部によってインプラント制御が行われており、バジュラ本星での戦闘ではYF-29追撃のために用いられている。バジュラ本星での戦闘においては、開発中のスーパーパーツを装着。VF-27γ単体でも優れた性能を有する機体であったが、同装備により同時代の最新鋭機であるYF-29に迫るポテンシャルを発揮している。

マクロス・フロンティア船団にバジュラが襲来した第二次バジュラ遭遇戦以降は、S.M.Sスカル小隊と共に作戦に参加。

バジュラ本星侵攻に際しては、自らの意思を喪失した状態のブレラが、スーパーパーツ装備状態でYF-29を急襲した。

武装

VF-27γのスーパーパーツの装備による武装面の強化は、ゴブリンⅡ搭載の内蔵ミサイル程度であり、目立った武装強化が行われたわけではない。これはVF-27γが装備するBG-01βビームガンポッド／ビームグレネードをはじめ、武装面ですでに優れた性能を発揮しているためと考えられ、スーパーパーツは主に機動性と装甲強化を主眼に開発が行われている。YF-29との交戦においては、随伴するゴーストV9のサポート、サイボーグパイロット制御による複雑な機動などにより、最新鋭装備を誇るYF-29に匹敵する能力を発揮している。

BG-01βビームガンポッド/ビームグレネードは、大型バジュラの外骨格を貫くほどの威力を持つ。

ゴブリンⅡに搭載されるミサイルは、一般的なビフォーズBLM-04Bマイクロミサイルランチャーである。

コクピット

サイボーグパイロットによる操縦を前提として開発されているため、パイロットの脳細胞と機体のセントラルコンピュータを光学回路で直結する操縦システムを搭載。それにより、パイロットがまるで手足のように機体の制御を行うことが可能である。そのため有視界によるコントロールは不要であり、キャノピーはエネルギー転換装甲で覆われている。手動操縦を行うシステムも搭載されているが、手動では本機のポテンシャルを発揮することはできず、あくまでシステムにトラブルがあった際の緊急用として搭載されている。

キャノピー部を覆うエネルギー転換装甲の下には、通常のキャノピーも装備されている。

パイロットが機体とリンクし、その視点はまるで機体が自分の体のように感じられていると言われる。

ファイターモード

ファイター時の上面に装備されるゴブリンⅡ/QF-5100Dは、ゴーストQF-4000シリーズの最新バージョン、AIF-7Sとほぼ同時期に開発された機体である。AIF-7Sが主に宇宙空間用であるのに対し、ゴブリンⅡは大気内での使用を重視した機体で、上半角の付いた主翼には動翼を備える。双胴型であり、大気内飛行用のインテークを持つ。大気内では大気を推進剤、冷却材として使えるので航続性に優れ、母機であるVF-27γから分離し、長時間の偵察飛行を可能としている。一方、本体のステルス性維持のため、兵装は原則として内蔵した6基のマイクロミサイルランチャーのみとなっている。特殊任務用として設けられた2基の機外装備搭載用の取り付けパイロンは、機体内構造材の強化を行うことで、VF-27接続用支持架を兼ねる。

ゴブリンⅡ/QF-5100D
ブースターウェポンユニット

▶VF-27γ
（ノーマル装備）

腕部ポッド（左右セット）
肩部追加装甲（ピンポイント・バリア・ブースター内蔵）

エンジンナセル追加ポッド（左右セット）

VF-27γは、サイボーグパイロットを前提とした操縦システムなどにより、ノーマル時でも優れた機動性能を発揮した。

ゴブリンⅡに搭載される反応タービンエンジン2基はそれぞれ推力515kNに達する強力なもので、性能向上の要因となった。

ガウォークモード

VF-27γのガウォーク形態は、脚部エンジンの3枚式可変ノズル、主翼部エンジン、サイボーグパイロットを前提とした思考制御により、VF-25では不可能であった複雑な機動を実現した。また、状況によってはゴブリンⅡを射出するという臨機応変な対応も可能であった。ゴブリンⅡは母機と分離することで脳波操縦による遠隔操縦が可能であり、パイロットはゴブリンⅡを自分の「眼」、「耳」として使用できる。

▶VF-27γ
（ノーマル装備）

バトロイドモード

VF-27γのスーパーパーツは、バトロイド時において、その構成パーツであるゴブリンⅡ（とその支持架）に加えて、肩部保護パーツ、上腕部保護・追加武装パーツ、推進剤タンク・追加武装パーツのすべてを確認できる。肩腕に装備された保護パーツは、エネルギー転換装甲Ⅱ製で、特にファイター時、バトロイド時における機体の脆弱な部分を保護することを目的としている。一方、エンジンナセル部の追加ユニットもエネルギー転換装甲Ⅱ製で、マイクロミサイルランチャーなど武装も備えているが、主に宇宙空間用の推進剤タンクとしての役割を持ち、VF-27γの宇宙空間での推進時間を大幅に延長している。これらエネルギー転換装甲Ⅱ製増加パーツの稼働エネルギーは、すべて機体側から供給される。

肩部追加装甲（ピンポイントバリヤーブースター内蔵）

バトロイド形態時での肩関節部を保護するための追加パーツ。VF-27はピンポイント・バリア発生システムを備えているが、バトロイド戦闘時において、特に腕部でのピンポイント・バリアを展開する場合が多いことから、バリア発生システムのブースターユニットを内蔵している。

腕部ポッド（左右セット）

腕部外側に取り付けられる追加装甲、武装パーツで、マイクロミサイルランチャー1基を内蔵する。

エンジンナセル追加ポッド
（左右セット）

エンジンナセルを囲むような形状で、前部にマイクロミサイルランチャー2基を備える。後部は宇宙空間用の推進剤タンクとなっている。エネルギー転換装甲Ⅱ製で、稼働エネルギーは機体本体から供給される（他のパーツも同様）。

▲VF-27γ
（ノーマル装備）

バトロイドモードでは、武装の柔軟な運用も可能。対艦用グレネードモードにより、バジュラクィーンクラスでさえも単機で撃破する。

スーパーパーツは、「使い捨て」装備ではないが、必要とあれば爆発ボルトにより一瞬で追加パーツを排除して身軽になることも出来る。

アイランドⅠ内でバジュラを迎撃するVF-27γ。脚部3枚式可変ノズルにより、バトロイド時においても複雑な機動制御を実現する。

EXTRA REPORT

⚠関連事項

ゴーストV9

マクロス・ギャラクシー船団にて使用される無人機であり、正式名称はAIF-9V。新統合軍が用いるAIF-7Sの次世代機であり、一般的な有人機では到達できない圧倒的な機動性を有している。バジュラ本星の戦闘では、VF-27γスーパールシファーとともに3機が随伴機として出撃し、YF-29に襲いかかった。

YF-29に襲いかかる3機のV9。通常の機体なら瞬時に撃破できるV9だが、YF-29のポテンシャルの前に、逆に撃墜されていく。

2機を撃墜されたV9は、なおも残った1機がYF-29を追うが、パージしたYF-29のスーパーパーツからミサイルを発射するという奇策で撃墜された。

Illustration by Hidetaka Tenjin

さらなる鍛錬を経た古強者の剣

機体解説

S.M.Sにて運用される兵器は、その任務の性質上、マクロス・クォーター級宇宙空母からVF、デストロイドに至るまで、幅広く網羅している。2059年頃のS.M.Sは、最新鋭機であるVF-25の配備を進めていたが、一部の部隊ではVF-19のモンキーモデルであるVF-19EFなど、一世代前の機種が依然使用されていた。また兵器の運用に融通が利くS.M.Sにおいては、時に他の企業や一個人が「持ち込み」した機体が運用された例もあったという。

データ

※データはファイター形態時のもの

所属▶S.M.S
機体システム開発▶新星インダストリー S.M.S技術部／ヤン・ノイマン研究室
全長▶18.62m
空虚重量▶8,755kg（強化改造による重量増加分を、新素材を使って軽量化することで相殺しており、重量はほぼ変わっていない）
エンジン▶FF-2500E/ISAMUチューン
推力▶697.5NT×2（宇宙空間瞬間最大。約10%程度の推力増強が行われているとされるが、推力増加より反応性の向上を主眼とした改造とされる）
補助エンジン▶高機動バーニア・スラスター、P&W HMM-6J
巡航速度▶マッハ5.6（標準大気圏内高度10,000m）/マッハ25.5+（高度30,000m）
離着陸距離▶0m（VTOL可）
戦闘上昇限度▶無制限（地球クラスの惑星なら衛星軌道までの進出可能）
海面上昇率▶69,000m/分
戦闘行動半径（大気内）▶ほぼ無制限
乗員▶1名
機体設計強度▶プラス57.5G、マイナス36G
標準武装▶マウラー REB-30G レーザー機銃×1／ハワードGU-15ガンポッド×1／ハワードPBS-05F戦闘機搭載用ピンポイント・バリア・システム×1／L.A.I社製スーパー・フォールド・ブースターに対応。

サイズ比較

VF-1J
VF-19EF/A

開発系譜図

VF-19 ▶ VF-19 ▶ VF-19EF/A

主要パイロット

イサム・ダイソン

▲VF-19EF/A "イサム・スペシャル"

VF-19EF/A

VF-19EF/A "イサム・スペシャル"

運用記録

VF-19EF/A、通称"イサム・スペシャル"は、2059年当時、S.M.Sに所属していたイサム・ダイソンの専用機である。2040年に実施されたスーパー・ノヴァ計画において、YF-19のテストパイロットを務めるという輝かしい経歴を持つイサムは、この当時、新統合軍を離れ、S.M.Sに入隊していた（統合軍内での昇進によるデスクワークの増加を嫌い、1パイロットとして生きる道を求めた、と言われている）。

S.M.Sに移ったイサムは、乗機としてVF-19Aを望んだが、その当時のVF-19シリーズは配備に制限がかけられていたため、S.M.S内にもデチューン版のVF-19EFが少量配備されているだけで、VF-19Aを配備するのは不可能に近かった。

これを不満としたイサムは、新星インダストリーのVF開発顧問となっていた旧知のヤン・ノイマン博士と接触を図る。当初イサムは、VF-19Aの部品の横流しを依頼したようだが、ヤン博士は応じず、その代案として彼は「開発から20年近く経つVF-19の改良と延命のための試作機の開発」を目的とした、「VF-19ADVANCE」計画を新星インダストリー社に提出する。この計画書には、「完成した機体は、S.M.Sのイサム・ダイソンに"委託"してテストを行う」という一文が、さりげなく盛り込まれていた。

機体解説

当時の新星インダストリー社は、慣性制御機構ISCを搭載した次世代VF、YF-24の開発を進めていたが、「VF-19ADVANCE」計画をヤン博士のプライベートプランとして黙認した。そのため開発費は潤沢ではなかったが、イサムがS.M.Sで稼いだ給料の大半をつぎ込み補填したとされる。

計画の概要はVF-19EFをYF-19に改造し、さらに高性能を目指すというものであった。なお同機に搭載された統合空戦プログラムは、イサムのたっての希望により、YF-19（3号機）に搭載されていた統合空戦プログラム「ARIEL」のオリジナル版が実装された。

VF-19EF/Aのエンジン推力は、一部パーツの交換と制御プログラムの改良により戦闘推力で10%近く向上し、レスポンスも良くなっているとされる（搭載アビオニクスもVF-19シリーズの最新版に換装されているとのことであるが、詳細は未公開）。

完成したVF-19EF/A "イサム・スペシャル"は、ニューエドワーズ基地の標準塗装が施され、かつてのYF-19とほぼ同一の外観となっている。

外観自体はYF-19とほぼ同一であり、原型機の特徴である前進翼もそのままになっている。後に非公開で行われた比較試験では、エンジン最大推力に大きな差があり、ISCを装備したVF-25には及ばないものの、大気内ではVF-25を凌ぐ空戦機動を発揮し、関係者を驚かせたという。

▼上面

2059年、バジュラ本星での戦いに投入されたVF-19EF/A。戦場を奔放に飛び回る姿が多数のパイロットに目撃されている。

▲VF-19EF/A（スーパーパーツ装備）三面図。同機のスーパーパーツは、VF-25用のものを一部改造して取りつけたもの。S.M.S連合軍がバジュラ本星に突入した際に確認されている。本機は、予備機を含め2機が生産されたとされる。

▲底面

スーパーパーツの装備は、大気圏外での推力の増強と、武装の強化を図ったもの。なお、S.M.Sフロンティア支部で運用されていたVF-19EFにはEX-ギアシステムが搭載されていたとされるが、本機にはEX-ギアシステムは未搭載である。

▲側面

VF-25A メサイア

S.M.S内において配備の進む最新鋭VF。S.M.Sフロンティア船団支部所属のスカル小隊のように、各隊員が思い思いのパーソナルカラーでVF-25を塗装している部隊もあるが、多くは右図のようなグリーンのカラーリングである。マクロス・クォーターにも多数が配備され、クォーターがフロンティア船団を離脱した後、機動部隊の中核として活躍。最終決戦まで最前線で戦い続けた。

[3DCGモデル出典：マクロス30 銀河を繋ぐ歌声]

◀VF-25Aの頭部の形状はVF-25Gと共通。レーザー機銃もG型同様1門である。

マクロス・クォーター内格納庫にて待機中のVF-25A。なお格納庫内は整備の利便性などのため、重力が保たれている。

最終決戦に向け、整備が進められるVF-25A。高性能な機体であったが、ギャラクシー船団の制御下にあるバジュラとの戦いでは、多数の損耗を出したとされる。

スーパーパーツを装備したVF-25A。スカル小隊によるシェリル・ノーム救出作戦のバックアップとして投入された。

デストロイド・シャイアンII

新統合軍などでも運用されている砲撃戦用デストロイド。S.M.Sで運用されているものも性能的には統合軍仕様と変わりはない。マクロス・クォーターでは、甲板各所の砲座に配備され、対空防衛を担った。マクロス・クォーターの必殺技とも言える「マクロス・アタック」においては、敵心臓部に突入後、クォーターの各所からシャイアンIIの砲座を展開し、一斉射撃を行う。

マクロス・クォーターが重戦艦バジュラにマクロス・アタックを敢行した直後の甲板の様子。各部からシャイアンIIが現れ、直後に全弾射撃を行った。

EXTRA REPORT

関連事項 PLUS

YF-19

2040年代のスーパー・ノヴァ計画において新生インダストリーが開発した機体で、有人戦闘機としての限界を超える加速・機動性能を誇る。そのため量産型のVF-19Aでは、統合空戦プログラムにパイロット保護のためのリミッター機能が加えられた。スーパーパーツ未装着時のVF-19EF/Aは、YF-19と瓜二つの外観を持つ。

YF-19の設計主任ヤン・ノイマン（2040年当時）。スーパー・ノヴァ計画後は新星のVF開発顧問として辣腕をふるったとされる。

◀イサム・ダイソン（2040年当時）

EXTRA REPORT

関連事項

VF-19用ブースター

VF-19には追加装備として、大気圏内外用ブースターが用意されていた。この装備は、機体上面の大型ブースター2基と、機体底面に装着する武装コンテナからなり、マクロス7船団においてプロトデビルンとの交戦時に投入され、十分な戦果を残したことが確認されている。とはいえ、2059年当時には既にエンジン推力の面で旧態化しており、VF-19EF/Aでの使用は見送られたものと思われる。

▶推力と武装の大幅な強化を主眼とした大気圏内外両用ブースターを装備したVF-19。

7

▲スーパーパーツ装備のVF-25。主翼の大型ブースター2基が、VF-19EF/Aの大気圏外用装備として流用された。

Illustration by Hidetaka Tenjin

戦いを鎮める 聖なる剣

YF-29

機体解説

YF-29デュランダルは、バジュラとの決戦を想定して開発された機体である。本機の開発は、2048年に第117次大規模調査船団がバジュラの襲撃を受けた事件を契機に、マクロス・フロンティア船団とL.A.I社が中心となって行われた。最大の特徴は、バジュラの体内にのみ存在する高純度のフォールド・クォーツを用いたデバイス、フォールド・ウェーブシステムである。これにより亜空間からのエネルギー供給が可能となり、4基の高出力熱核反応エンジンと相まって、本機は圧倒的な機動性能を獲得した。同時に付加機能としてフォールド・ウェーブの制御が可能となり、実戦ではバジュラ間のコミュニケーションへの干渉に成功した。

主要パイロット

早乙女アルト

データ ※データはファイター形態時のもの

所属▶マクロス・フロンティア船団

全長▶18.73m

全幅▶14.15m（主翼展開時）

全高▶3.88m（主脚含まず）

空虚重量▶15,620kg（宇宙空間装備含まず）

エンジン▶新星／P&W／RR FF-3001／FC1 ステージⅡ熱核タービンエンジン(宇宙空間最大推力2105KN)×2／新星インダストリー／LAI／RR FF-3003J／FC1 ステージⅡ熱核タービン・ラムジェット複合エンジン(宇宙空間最大推力1470KN)×2（大気内高速モード時はラムジェットモードに切り替えて推力増加可能）

エンジン推力▶(FF-3001/FC1)2,105KN+×2 (FF-3003J/FC1)1,470KN+×2

最高速度▶M5.5+（高度10,000mにおける耐熱限界速度、短時間ならM10以上まで加速可能）

標準装備▶ラミントンES-25A 25mm機銃×2／ハワード/L.A.I HPB-01A重量子ビームガンポッド×1／TW2-MDE/M25 隠頭式連装MDEビーム砲×1／ビフォーズMBL-02S マイクロミサイルランチャー×12

サイズ比較

VF-1J

YF-29

開発系譜

YF-29

▶YF-29 デュランダル

運用記録

YF-29は、2057年の時点でほぼ設計が完成していたが、機体の中核となるフォールド・クォーツの確保が困難だったことから開発は難航し、試作は一時中断された。しかし、2059年マクロス・フロンティア船団がバジュラと遭遇したことで、一定量のクォーツの確保に成功する。さらにVF-25の機体構造を流用するなどして建造は急ピッチで進められ、バジュラ本星での戦いに投入された。この時はバジュラとの戦いを根絶するべく、フォールド・ウェーブを応用してバジュラとの交信が試みられた。また、その過程で発生したバジュラとの戦闘でも、その性能を遺憾なく発揮している。

S.M.Sの早乙女アルト准尉が機体を拝領。シェリル・ノームとランカ・リーの歌をフォールド・ウェーブに乗せ戦場に届けた。

バジュラとの激戦の末、機体は大破。戦闘後に機体は回収されたものの、パイロットの早乙女アルトはいまだ行方不明である。

標準装備

ハワード/L.A.I HPB-01A 重量子ビームガンポッド
マクロスキャノンと同じ作動原理で、重量子をビーム化し照射するビーム兵器。MDEほどではないが、バジュラには有効な武装である。

TW2-MDE/M25 層頭式連装MDEビーム砲
VF-25F/TW1のMDEビーム砲の改良小型版。空間を切り取るという究極の破壊力をもつため、空母クラスにも通用する。

ガーバー・オーテックAK/VF-M9 アサルトナイフ
シールド内に格納された格闘武器で、VF-25と共通の装備。表面にピンポイント・バリアを展開することで、バジュラの装甲をも容易に切り裂く威力を発揮する。

コクピット

VF-25をはるかにしのぐ性能ゆえに、在来型のISC（慣性制御システム）、T021ではパイロットにかかるGを緩衝しきれない。そのため改良型のT022が搭載されている。T022は瞬間最大30Gの加速度を相殺可能となっている。

キャノピーはフォールド・クォーツによってコーティングされている。徹底した対バジュラ仕様といえよう。

ファイターモード

VF-25F/TW1の「空力に頼らない高機動戦闘機」という新概念を継承したYF-29は、メインエンジンの2/3ほどの出力の外翼エンジンポッドを回転させることで、空力を無視したかのような高機動を実現した。主翼は強度を確保するためにVF-25のような可変翼ではなくYF-19を思わせる前進翼を採用。機首にはカナードを有している。さらに熱核エンジン4基（外翼のエンジンは大気内音速以上でラムジェットモードに切り替えられ、推力が増大）の合計出力はスーパーパックを装備せずとも、強力なビーム兵器の稼動を実現した。

▲本機はフォールド・ウェーブシステムによって、ファイター形態でもピンポイント・バリアを展開できる。その防御力はバジュラ本星での乱戦にて遺憾なく発揮された。

VF-25を凌駕するだけではなく、スーパーパック装備型のVF-27と互角に渡り合うほどのポテンシャルを発揮。バジュラ本星での戦いは、YF-29の優秀性を実証した。

▼機首ブロック横には、カナードが緩い上半角で取り付けられている。これは機首の向きを空力的に偏向するために用いられる。

無数のバジュラが存在する戦場をかいくぐり、バジュラクイーンの元へ到達する。単機でたどり着けたのは、YF-29の驚異的な機動性があってのことだろう。

▲開発スピードを上げるべく、VF-25の機体構造が一部流用された。だが別機体といえるほど変更が加えられた結果、加重限界はVF-25の30.5Gから40.0Gへと向上した。

ガウォークモード

変形機構はVF-25を継承しており、ガウォーク形態のスタイリングも大きく変わることはない。だがフォールド・ウェーブシステムの恩恵を受けたメインエンジンと外翼の回転式エンジンポッドが、VF-25以上のポテンシャルと、常識を覆す機動性を実現した。またVF-25F/TW1が行ったアイランド1内での戦闘の実証データが、本機開発の指針となった。

VF-25同様、脚部メインエンジンを使用してホバリングを行う。さらに外翼のエンジンポッドを使用することで、より多彩な軌道での飛行を見せる。

シェリルを掌に乗せて、教会ステージへと向かうYF-29。戦闘機ではできないフレキシブルな運用という、ガウォークの特徴を活かしている。

ガウォーク状態でMDEビーム砲とマイクロミサイルポッドを展開。さながら高速機動する移動砲台のように、広い範囲に攻撃を行うことができる。

シェリルとオズマの救出のために降下するYF-29。降下中でも回転式エンジンポッドを駆使することで、高速離脱を行える。

バトロイドモード

バトロイド形態での強度も向上したVF-25の構造を引き継ぎつつ、高出力化したエンジンスペックに対応させるため、基本構造フレームから大幅な強化が行われている。この際にエネルギー転換装甲も、装甲の厚さが2倍（稼働時の総合強度は4倍程度）とされ、アーマードパック装備時のVF-25以上の装甲強度を獲得した。また背面のMDEビーム砲はバトロイド時でも使用可能で、脚部に片側4基ずつ装備されたMMP3／M25マイクロミサイルポッド、メイン武装のガンポッドと、兵装を最大に駆使できる形態といえる。

頭部側面には、対バジュラ用強化徹甲弾を装備したラミントンES-25Aを装備。

光を帯びてバジュラクイーンの元へ向かうYF-29。武装を捨て、敵意がないことを表す。機体がまとっている粒子の正体は謎であり、フォールド・クォーツが呼び起こした奇跡だったのかもしれない。

ファイター時には機体後部に装備されているシールド。これはVF-25用シールドの強化型で、エネルギー転換装甲を積層化したもの。

▲本体のシルエットは、基本構造を踏襲するVF-25に近い。だが赤を基調としたカラーリングや、MDEビーム砲、胸部のフォールド・クォーツ増幅装置によって、大きく印象が異なっている。

▲背部はMDEビーム砲が展開状態になる。主翼は回転式エンジンポッド部分から折りたたまれているが、可変翼のVF-25と比較して圧倒的にボリュームアップしている。

シェリルとランカに敬礼を行い、最終決戦へと飛翔するYF-29。人間の動きをトレースできるしなやかな可動機構と、高度なモーションプログラムの賜物といえる。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶YF-29 デュランダル

劇F Sheet 04 B

スーパーパーツ

運用記録

VF-25と同様に、YF-29には宇宙空間用装備として、試作型ながらスーパーパーツが用意された。これは両主翼のフォールド・ウェーブ・プロジェクター+武装ユニット、内翼後端部に装備される化学ロケットブースター、外翼エンジンポッド前部に取り付ける高機動／推進剤パック(大気圏外時)、積層エネルギー転換装甲製シールドにより構成される。このスーパーパーツを装備したYF-29は、早乙女アルト中尉の手により、バジュラ本星にて初陣を飾った。

まだ機体自体も試作段階ではあったが、YF-29の特性に期待を託し、バジュラ本星での最終決戦に投入された。

連装ビーム砲など、豊富な武装でバジュラ群と戦闘を展開。純粋な戦闘能力も、これまでのVFを凌駕する。

▼大出力フォールド・ウェーブ・プロジェクター

両翼端に装備された武装ユニットに内蔵。宇宙空間や低速飛行時には花弁のように展開し、フォールド・ウェーブを増幅させる。

▼YF-29専用スーパーパーツ

YF-29用スーパーパーツは、機動性の向上とフォールド・ウェーブの増幅という点に力が注がれ、増加装甲はシールドのみに留まる。

▼隠頭式連装MDEビーム砲

トルネードバルキリーでトライアルされた旋回式ビーム砲。本機収納時には機体と一体化するなど、さらなる熟成が図られた。

▼重量子ビームガンポッド

マクロス・ギャラクシー由来の技術により、従来のガンポッドよりも高性能化。トルネードバルキリーの時点から採用が模索されていた。

ファイターモード

YF-29用スーパーパーツの構造面の特徴として、高速モード状態、すなわち格納状態の主翼先端部への武装ユニットの装備が挙げられる。このユニットは主翼の一部を形成するなど、VF-25用オプションとはコンセプト自体が異なる。ユニットに内蔵されたフォールド・ウェーブ・プロジェクターは稼働時に花弁のように展開し、フォールド・ウェーブによるバジュラとのコミュニケーション能力を増幅する装置として機能する。これはランカ・リーのフォールドソングにより、バジュラとの戦闘を停止させる目的のために応用された。このようにYF-29用スーパーパーツは、単なる高機動パーツではないことがうかがえる。

▼大気圏内仕様

◀▲エンジンポッドをカバーするような宇宙空間用推進剤ポッドは、大気圏内ではパージされる。またフォールド・ウェーブ・プロジェクターは、極超音速では収納状態となる。

▼大気圏外仕様

▲▶外翼エンジンポッド前方に宇宙空間用推進剤ポッド(高機動スラスター付属)を追加し、エンジン4基用の推進剤を備える。フォールド・ウェーブ・プロジェクターは展開状態。

Mechanic Sheet
メカニックシート
YF-29 デュランダル

ガウォークモード

回転式エンジンポッドなど、YF-29は機体構造自体にトルネードバルキリーのコンセプトが継承されており、スーパーパーツによってその特性は底上げされる。複雑な機動や空中停止を可能とするガウォーク形態との相性がよく、シチュエーションを問わない活躍を実現した。また、隠頭式連装MDEビーム砲のおかげで旋回射撃の自由度が高く、脚部マイクロミサイルやスーパーパーツのフォールド・ウェーブ・プロジェクターも展開可能と、装備を最も効率的に使用できる形態でもある。なお連装ビーム砲は、その構造上大気圏内での旋回使用が音速以下に限定されるため、本形態での運用が最も適していたと考えられる。

ガウォーク形態は、フォールド・ウェーブ・プロジェクターを展開しつつ、全武装を効率的に使用できる。

急速な軌道の変更など、宇宙空間でもガウォーク形態のメリットは多い。バジュラ本星到達前にも、本形態が活用された。

▼大気圏内仕様

◀ファイター同様、外翼エンジンポッド前方の宇宙空間用推進剤ポッドは排除されている。また空気抵抗を考慮し、フォールド・ウェーブ・プロジェクターも収納状態である。

▶フォールド・ウェーブ・プロジェクターが展開状態となる大気圏外仕様。エンジンポッドをカバーするような、宇宙空間用推進剤ポッドを装備している。前部の高機動スラスターは、特にガウォーク形態で活用されたと思われる。

▲大気圏外仕様

バトロイドモード

VF-25用の各種オプションが、増加装甲方式の傾向が強いことに対し、YF-29用スーパーパーツは機動性と機体特性の底上げを重視している。このため、ブースターや武装コンテナが後方に集中するバトロイド形態は、ノーマル装備のシルエットと大差ない印象を受ける。なお装甲の強化という点においては、そもそも機体全体の加重限界がVF-25の27.5Gから32.5Gに引き上げられており、基本構造フレーム自体に大幅な強化が施されている。また、エネルギー転換装甲の装甲厚もVF-25比で2倍(稼働時の総合強度は4倍程度)とされる。これにより、ノーマル装備のYF-29ですら、スーパーパーツ装備のVF-25以上の装甲強度を獲得しているのである。唯一増加装甲と呼べるものが、積層エネルギー転換装甲製シールドであり、通常のシールドに接続する形で装備される。

▶前方からのシルエットと比較すると、後方はパーツが集中するために大幅にボリュームアップした印象となる。

▶大気圏内仕様

▼大気圏外仕様のファイター、ガウォークと異なり、フォールド・ウェーブ・プロジェクターは格納される。

フォールド・クォーツがもたらした有り余る出力により、大気圏内においても重武装は負担にならない。

▶大気圏外仕様

四肢の可動範囲を阻害するような増加パーツはないため、格闘戦性能の低下は特に見られなかった。

バジュラ

時空を跳梁する 未知なる生命体

超重兵隊バジュラはかなりの巨体を誇る個体ではあるが、大気圏内では4枚の大型の羽根を用いて飛行することも可能である。

重機動兵隊バジュラはフロンティア船団とバジュラとの遭遇戦において、ランカ・リーを拉致するが、S.M.Sの早乙女アルトのVF-25Fにより、ランカは救助される。

機体解説

西暦2040年に人類と初遭遇したバジュラは、各個体の体内に希少な鉱石「フォールド・クォーツ」を持ち、この鉱石の発するフォールド波によって、個体間の通信や、生体フォールド航行を行う未知の生命体である。フォールド・クォーツ由来の高次空間能力から「超時空生命体」とも呼ばれる。バジュラの群れの全体は、フォールド・ネットワークを介し、最上位の個体であるバジュラクイーンによって統括されている。また、クイーンに次ぐ個体であるバジュラ準女王は、女王から巣別れし、数十万匹単位の個体からなる「宇宙戦闘集団」を率い、宇宙を放浪している。

▼超重兵隊バジュラ

▲重機動兵隊バジュラ

サイズ比較

VF-1J
機動兵隊バジュラ
重兵隊バジュラ
超重兵隊バジュラ
重機動兵隊バジュラ

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶バジュラ

運用記録

2059年、フロンティア船団は、バジュラとの数度の遭遇戦を経験する。やがてフロンティア船団に潜伏していたギャラクシー船団幹部は、インプラント技術によるバジュラの支配を試みるが、S.M.Sおよびランカ·リー、シェリル·ノームの2人の歌姫の尽力により計画は頓挫し、人類はバジュラと和解する。

重機動兵隊バジュラ

データ
全長▶40〜50m
推定体重▶30〜50t

比較的数が少なく、バジュラ部隊の指揮官的な働きをしたり(バジュラは全個体が共通意識を持つため、段階的な指揮系統は存在しないが)、単独で偵察などの特務を行うこともある。ひとつのバジュラクイーンを中心とする宇宙戦闘集団あたり数百匹程度が存在する。かなり大型の個体だが、羽による大気内での機動能力は非常に高い。追尾機能を持つ生体マイクロミサイルを体内で生成し、最大10発前後を発射する。生体フォールド航行で長距離を移動可能。

▶頭部
頭部周辺には、小ぶりの衝角と無数の触覚を持つ。複数ある目はオレンジ色に輝く。

▲胸部
フロンティア船団の第二次バジュラ遭遇戦の際には、1体の重機動兵隊バジュラが胸部内にランカ·リーを収納し、巣に帰還しようとした。この器官の本来の機能は不明だが、幼生などを保護する嚢ではないかと推測される。

重兵隊バジュラ

データ
全長▶25〜30m
推定体重▶20〜30t

集団あたり数千から数万匹規模で存在する個体で、体躯に見合わぬ高い機動性を持つ。身体は強靱な生体エネルギー転換装甲で覆われる。衝角は生体重ビーム砲で、宇宙巡洋艦の主砲並みのビームを連射する。自動追尾機能を持つ生体マイクロミサイルを体内で生成し、最大20発程度発射。生体フォールド航行は近距離に限られる。

インプラント弾でコントロールされている時には体色が変化している。

超重兵隊バジュラ

データ
全長▶100〜150m
推定体重▶250〜350t

バジュラのネスト周辺を警護するための重戦闘用バジュラで、重兵隊バジュラより生体エネルギー装甲強度がはるかに上で、また背部に宇宙巡洋艦の主砲クラスのエネルギーの生体重ビーム砲を連装で備える。宇宙戦闘集団あたり数百程度が存在する。見かけは鈍重だが6本脚で敏捷に歩行し、大気内では羽を広げて飛翔する。

▲▼インプラント弾を撃ち込まれている状態の超重兵隊バジュラ。

この個体はフロンティア船団との初期の遭遇戦には参加していなかった模様で、後のバジュラ準女王との戦闘において、初めて確認された。

インプラント弾によって操作された状態の超重兵隊バジュラは体表が緑色になっている。S.M.Sのクァドラン·レアと格闘戦を行った。

機動兵隊バジュラ

データ
全長▶15〜20m
推定体重▶4〜5t

もっとも個体数の多い戦闘用バジュラで、重兵隊バジュラへ生長変態してゆく途中の中間形態と推定されている。長い尾部が高効率の生体重力場推進器になっており、VF-25に匹敵する機動能力を持つ。羽根を持たないが大気内でも高い飛行能力を持ち、また、長い脚で地上を高速移動する。胴体上部の結晶構造組織からパルスビームを連射する。生体フォールド航行は近距離に限られる。

▶バジュラ

重戦艦バジュラ

宇宙戦闘集団の中で旗艦クラスに相当する個体で、集団あたり10～20前後が存在する(バジュラは基本的には全個体が共通意識を持つため段階的な指揮系統は存在しない)。無数の機動兵隊バジュラ、重兵隊バジュラによって周辺空域や体内を守られており、背の3連装生体重量子ビーム砲はマクロス・キャノンに匹敵する攻撃力を持つ。また背面以外にも多数の3連装生体重ビーム砲塔を備える。強靱な生体エネルギー転換装甲を有する上にフォールド・バリアを備え、外部からの攻撃エネルギーをフォールド空間に逃がして遮蔽する。生体重量子ビーム砲や、フォールド・バリアなど膨大なエネルギーを消費するため、体内には多数のフォールド・クォーツが埋め込まれたクォーツタワーがいくつも存在する。生体フォールド航行で超長距離を移動可能。

データ
全長▶3,000～4,500m
推定体重▶20～65億t

◀マクロス・キャノンの直撃すらしのぐ、非常に強固なフォールド・バリアを備えている。

2059年にマクロス・フロンティア船団を襲った個体は、マクロス・クォーターによるマクロス・アタックでバリアへのエネルギー供給を断たれた後、バトル・フロンティアのマクロス・キャノンで撃破されている。

駆逐艦バジュラ

加速性、機動性に優れた小型の戦闘艦形態バジュラ。宇宙戦闘集団あたり数百匹程度存在する。上部前方に強力な生体ビーム砲を1門備えるほか、自衛用の小口径ビーム砲多数、生体マイクロミサイル数十発を持つ。生体フォールド航行で超長距離の移動が可能。

データ
全長▶200～300m
推定体重▶1.5～2万t

サイズ比較

サイズはマクロス・クォーターに近く、高い機動性が特徴。同じ艦艇型でも、巨大な重戦艦バジュラとはサイズや個体数が異なっている。

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶バジュラ

バジュラ準女王

全長10〜20kmクラスの移動要塞型の巣(ネスト)の中に存在する。この巣は、多重の生体エネルギー装甲で守られている上に生体重量子ビーム砲を4〜6門備えており、重戦艦バジュラ数体に匹敵する戦闘力を持つ。準女王は、各種多数のバジュラ集団を率いて宇宙空間を放浪し、適当な惑星を見つけると着陸、バジュラ·ネストを建造する。バジュラ·ネストの中で、最終的には全長数十〜数百kmを超える女王バジュラに成長する。ゼントラーディ軍の基幹艦隊移動要塞は、バジュラ·ネストの構造を模したものと言われているが、そのためかバジュラは、放棄された(あるいはバジュラの攻撃で破壊された)基幹艦隊移動要塞を仮の巣として利用していることがある。

●データ
全長▶300〜500m
推定体重▶0.5〜1万t

自分たちの母であり、未来をつなぐ準女王を身を呈して守る小型バジュラたち。早乙女アルトはこの戦いで、バジュラたちが仲間を守る姿を目の当たりにした。

VFが単機で攻撃するには巨大だが、ブレラ·スターンに脆弱な首を狙われ、一撃で葬り去られた。

▼尾

尾は産卵管である一方、先端部からは重量子ビームの刃を形成し、戦闘に用いることも可能。そのビームは、VF-25F アルト機の装甲を容易に貫いた。

EXTRA REPORT 関連事項

バジュラのネスト

2059年、マクロス·フロンティア船団と交戦したバジュラのネストは、ゼントラーディの中型ボドルザー級要塞を利用したものだった。若いバジュラ準女王は、母星を巣立つとこのような残骸を利用し、バジュラのコロニーを形成。やがて新たなクイーンへと成長を遂げる。

かつてゼントラーディが使用していた要塞で、第一次星間大戦にも同タイプの要塞が確認されている。この要塞は約半世紀前にバジュラに滅ぼされ、そのまま巣となった。

ネストの中でバジュラ準女王が籠る中枢部。マクロス·キャノンの直撃すら防ぐフォールド·バリアを展開する。

準女王から生まれた数万匹単位のバジュラが生息するネスト。フォールド燃料をエサにして繁殖し、成長を続ける。

幼生(アイ君)

卵から孵化した直後のバジュラ幼生。全身を緑色の羽毛で包まれており、地球産のリスに似ている。この幼生が脱皮して、甲殻類のような装甲を持つ全長2〜3mの多目的小型バジュラに成長する。これらの多目的バジュラが、何らかの刺激(ホルモンあるいは、フォールド·ウェーブによる刺激などが考えられている)によって、重兵隊バジュラや、重戦艦バジュラなどに分化して成長していくのか、あるいはそれらのバジュラは最初から特異な形態で生まれて成長していくのか、まだ不明なことが多い。

アイ君が成長した姿。背中には4枚の羽根が生え、飛行能力を得ただけではなく、人の言葉を理解し反応するなど、知能的にも成長を遂げていた。

初期形態

ランカはバジュラの幼生だと気づかず、「アイ君」と名付けて育てていた。アイ君は人間の中で暮らしていたためか、シェリルを救うために命をかけるなど、人への愛情を抱いている。それはバジュラが本来持つ、仲間意識の一端かもしれない。

愛玩動物のように飼われていたが、腸内にフォールド菌を有するランカの歌に反応するなど、日常生活の中でもバジュラとしての本能を見せていた。

小型だがフォールド·バリアを展開する力はすでに備わっており、宇宙空間へ投げ出されたシェリルとオズマを救った。

特殊部隊用EX-ギア

特殊な任務に対応した軍用EX-ギアのバリエーション

EX-ギアの特性を、戦闘・工作用のパワードスーツとしての観点から改良。特殊部隊仕様として、少数が生産された。

通常のEX-ギアと比較し、駆動音の消音化が徹底され、サイボーグ戦士も気づかぬ隠密行動が可能となっている。

機体解説

潜入破壊工作など、特務に対応した軍用EX-ギアのバリエーション。このタイプのEX-ギアは存在自体が一般には公開されていない。潜入任務用に光学、音響センサー系が強化されているほか、運動性向上のため複合素材を多用し、軽量化が行われている。また、関節ジョイント、駆動用アクチュエーターの改良で作動音は極めて静かなものとなり、ホバーユニット、グライディング・ホイールなどのオプションも静音対策が施された特注品を使用している。ボディ表面には迷彩塗装が施されているが、これはシール状のもので、作戦によって短時間で塗装の変更(貼り替え)が可能である。システムの軽量化に伴い、飛行速度はやや向上しているが、通常の軍用EX-ギアと比較して倍以上の調達コストを要する高価な装備である。

データ

所属▶新統合軍　特殊工作部
対象身長▶150~225cm(オプションにて装着者にフィッティング可能)
最大飛行速度▶約550Km/時(大気内、飛行ユニット装着時)
駆動動力源▶燃料電池HR-3UTGハイパーエネルーブ×2あるいは3
標準武装▶サバイバルナイフ/軍用サブマシンガン/対サイボーグ用ライフル他

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶特殊部隊用EX-ギア

運用記録

バジュラの襲撃によって壊滅状態に陥ったマクロス・ギャラクシー船団は、一隻の避難民船を残して壊滅した。避難民船はマクロス・フロンティア船団に合流・吸収されたが、その隙に避難民にまぎれ、ギャラクシー船団のサイボーグ兵士工作員が多数潜入していた。

彼らの目的はフロンティア船団の乗っ取りであったが、その動きはかねてからレオン・三島がキャッチしていた。ギャラクシー船団上層部がフロンティア船団への制圧作戦を開始すると、三島はギャラクシー船団工作員の鎮圧を指示。優れた戦闘能力を持つサイボーグ兵士への対抗作として三島は、対サイボーグ兵士用に組織された特殊EX-ギア部隊を配備していた。特殊部隊の活躍により、グレイス・ゴドゥヌワ大佐を含む工作員たちを、瞬く間に鎮圧した。

ギャラクシー船団による制圧作戦を察知し、迅速に鎮圧を行った特殊部隊。フロンティア船団のネットワークに介入していたギャラクシー船団上層部すらも、この行動は察知できなかったようだ。

制圧作戦の実質的な指揮官であったグレイスも完全に裏をかかれ、抵抗する間もなく特殊部隊に捕縛されている。

標準装備

本来EX-ギア・システムは、VF-25など次世代の可変戦闘機に対応するパイロットスーツシステムとして開発された。だが、特殊部隊用EX-ギアは、EX-ギアのもうひとつの特徴である「戦闘用パワードスーツ」としての側面を強調する改良がなされている。装備には、L.A.I社の協力のもと、インプラント技術を応用して対サイボーグ兵士用の武装が施されているのも大きな特徴である。フロンティア船団では、かねてからインプラント技術の脅威を想定していたと考えられる。

対サイボーグ用の銛ランチャー。インプラント技術を元に開発されたもので、サイボーグ兵士の動きを封じる。

対サイボーグライフル

標準軍用ライフルをマクロス・ギャラクシーのサイボーグ兵士に対抗するために強化したもの。貫通力を増すために、専用の弾頭コーティングを施した強装弾を使用する。前下方に、グレネードランチャーや銛ランチャーを装着可能。

飛行ユニット

通常、EX-ギアのバックパックは、緊急脱出用の飛行ユニットとしても機能するが、特殊部隊用EX-ギアはその飛行能力を生かし、特殊作戦に用いる。一般的な軍用EX-ギアとの性能差はわずかだが、本体の軽量化により飛行能力が若干向上した。本体と同様のシールによる迷彩が施されている。

EX-ギアの飛行能力を生かし、高所での作戦活動や潜入が可能となった。短時間ながらホバリングも可能であり、幅広い作戦に対応する。

通路など、狭い場所での作戦行動に際しては、ウイングは折り畳まれる。ミッションによっては、バックパックを装備せずに行動を行うこともあった。

関連事項

EXTRA REPORT

EX-ギアのバリエーション

次世代可変戦闘機のコクピットシステムとして開発されたEX-ギアは、コクピットユニットの一部を兼ねた耐Gスーツである。従来の耐Gスーツの性能を上回るだけでなく、生存率も向上。構造的にはパワードスーツと呼べるもので、飛行ユニットによる移動範囲の拡大や、身体能力の向上を実現する。

▼民生用と共通の規格

軍事用として開発されたEX-ギアだが、共通規格の民生用簡易版EX-ギアが普及。システムに習熟していれば、短期間で軍用への対応も可能。

早乙女アルトが通う美星学園パイロットコースでも、民生用EX-ギアが用いられている。

ギリアムのVF-25をアルトが操縦できたのも、民生用EX-ギアの普及が大きな理由である。

▼パワードスーツとして戦闘にも対応

EX-ギアの腕部や胸部等を形成する各部ユニットは、対弾性を備えた装甲としても機能。飛行能力や身体能力の拡大により、戦闘にも対応する。

軍用のEX-ギアを装着したオズマは、サイボーグ兵士のブレラと互角の戦闘を展開した。

ブレラの銃弾を浴びるオズマ。負傷したが致命傷は負っておらず、優れた防御力を証明した。

Mechanic Sheet メカニックシート

▶クァドラン・レア／VB-6ケーニッヒモンスター

MF Sheet 05 A

Illustration by Hidetaka Tenjin

VB-6

今なお息づく名機たちの血脈

機体解説

第一次星間大戦で使用されたクァドラン・ローは、空士型(ミリア型)と呼ばれ、反射神経と耐G能力を特に強化された女性ゼントラーディ兵士向きの高機動空戦ポッド／強化服であった。これに最新技術で改修を施した再生産タイプがクァドラン・レアである。最新タイプは「レア／56」で、S.M.Sピクシー小隊ほか、幅広く配備されている。

データ

所属 ▶ S.M.S／新統合軍

全高 ▶ 16.85m（ビーム砲の砲身含まず）

全備重量 ▶ 35.5t（パイロット体重約7.5トン、耐Gパイロットスーツ・生命維持装置など着用して8.5トン程度、推進剤、超高機動マイクロミサイル、インパクト・ビームカノンなど標準兵装装備時の出撃時重量）

空虚重量 ▶ 16.72t

主機 ▶ キメリコラ/ゼネラル・ギャラクシー 熱核コンバータFC-2055μ×2

標準装備 ▶ ビフォーズ AA-55/QD55mm中口径速射インパクト・カノン×2／マウラー LPG-30/3R30mm空対空高回転三砲身ガトリングレーザーパルス・ガン／ビフォーズ 近接用超高機動ミサイルランチャーポッド×4／ビフォーズ AA-76/QD対艦用インパクト・カノン×1／他

サイズ比較

VF-1J　クァドラン・レア

開発系譜図

クァドラン・ロー ▶ クァドラン・レア

主要パイロット

クラン・クラン

機体解説

ケーニッヒモンスターは、デストロイド・モンスターの攻撃力を活かすべく、自力で高速展開が可能というコンセプトのもとに開発された可変爆撃機(VB)である。モンスターの攻撃力をそのまま継承しつつ、シャトル、重ガウォーク、デストロイドへの変形機構を採用し、VFの火力を大きくしのぐ可変爆撃機が誕生した。

主要パイロット

カナリア・ベルシュタイン

データ

※データはシャトル形態時のもの

所属 ▶ S.M.S／新統合軍

全長 ▶ 29.78m

全高 ▶ 6.77m

全幅 ▶ 24.42m

空虚重量 ▶ 101.90t

エンジン ▶ 新中州/P&W/ロイス FF-2025BX×2／新中州/ビガース 電磁プラズマロケットエンジン・レールガン複合システム×4

エンジン推力 ▶ 31,700kg（宇宙空間最大推力）×2／26,500kg×4

補助エンジン ▶ 高機動バーニア・スラスター P&W HMM-6B

巡航速度 ▶ M1.7+（標準大気圏内高度10,000m時）／M3.2+（高度30,000m以上時）

武装 ▶ 新中州/ビガース 320mmレールガン4連装×1／ライセオン/新中州 対地対艦重ミサイルランチャー3連装×2／対空対地機銃ターレット×1（シャトル形態時は半固定式）／対空対地近接小型高機動ミサイル速射ランチャー×2

開発系譜図

HWR-00-MkII ▶ VB-6

サイズ比較

VB-6　VF-1J

クァドラン・レア

運用記録

クァドラン・ローの生産を行っていたキメリコラ工場群は、戦争による破壊や老朽化が進み、2030年には保守部品の確保も難しい状況であった。この状況にジェネラル・ギャラクシー社は、2036年からキメリコラ工場衛星を惑星エデンのラグランジュポイントまで曳航して修理したのち、製造プログラムをアップデート。この工場衛星群はキメリコラ=レア工廠と称され、以後ここで生産された機体はクァドラン・レアタイプと呼ばれている。

マクロス・フロンティア船団のS.M.Sピクシー小隊に配備された機体は、バジュラとの戦闘にも投入された。クラン・クラン大尉の搭乗する深紅のクァドラン・レアは、バジュラ本星での戦闘でも活躍するなど、多大な戦果を残している。

スカル小隊の駆るVF-25とともに、S.M.Sの主戦力として活躍。その機動性はVF-25にも匹敵すると言われ、VFとの連携を行うことも珍しくはなかった。ミッションによってはクァドラン・レアが優位となる状況もあったと考えられる。

標準兵装

クァドラン・ローはミサイルランチャーポッドやガトリングレーザーパルス・ガンをはじめ、多彩な内蔵武装が特徴であったが、クァドラン・レアでも基本的なコンセプトを継承される。ただし、武装の製造メーカーは、VFやデストロイド用の装備で実績があり、部品の調達も容易なビフォーズ社やマウラー社に変更されている。また、クァドラン・ローとの最大の違いは背部に対艦用のインパクト・カノンが追加されていることで、さらなる攻撃力の強化が図られている。

バックパック左側に装備された折り畳み式のビフォーズAA-76/QD対艦用インパクト・カノン。クァドラン・レアの武装の中では、最大の威力を誇る。

バックパックに内蔵されたビフォーズ近接用超高機動ミサイルランチャーポッド。武装はほぼ原型機と同様の配置だが、生産メーカーは一新されている。

コクピット

機体外観はローと似通っているが、内部は一新されている。レアではゼントラーディ時代には軽視されていたパイロットの生存性が重視され、コクピット周囲はエネルギー転換装甲化され、コールドスリープ機能を持つ予備生命維持装置が装備された。

コクピットの基本構造は原型機と同様。パイロット保護機能をはじめ、追加装備によって内部はさらに狭くなっている。

機体構造

クァドラン・ローからの追加装備で、機体重量、推進剤使用量、エネルギー使用量も増加したが、反応炉のコンパクト化と出力向上、外部推進剤タンクの追加などで対応している。S.M.Sでは、単機での超長距離偵察、航路確認業務を行うために、往還用フォールド・ブースター対応型の最新バッチを導入。S.M.Sでは機体納入後に、フォールド通信救難ビーコン発信器の取り付け、予備生命維持装置の強化をはじめ、通信、索敵装置なども独自部品で強化し、一部アビオニクスのプログラムをカスタマイズして総合性能を向上させている。

バジュラ本星での戦闘では、バジュラに打ち込まれたインプラント弾を破壊するミッションにも対応。

機動性の高いバトルスーツという特徴を生かし、近接戦においても優れた戦闘能力を発揮した。

バリエーション

クァドラン・レアの継続生産によって、同系統は存続することになり、おもにゼントラーディ系の兵を中心に構成された統合軍海兵隊などへ配備された。S.M.Sピクシー小隊にも、3機が配備されている。配備数はVFと比較すると少数である。

ピクシー小隊に配備された機体には、ネネ・ローラとララミア・レレニアが搭乗。グレーのカラーリング以外、仕様はクラン機と同じものである。

VB-6ケーニッヒモンスター

運用記録

VB-6可変重爆撃機は、2030年に初飛行した機体であり、以降30年近く活躍しているベテランの機体である。その間、幾度かVB-7の開発計画が持ち上がったが、膨大な開発経費と開発の難しさから頓挫している。また、2050年代においては、そもそも可変重爆撃機の需要はそれほど大きくはなく、またVB-6の性能が現在でも必要充分であることから、後継機はまだまだ必要とされていないという結論に至った。

開発には、かつてモンスターに携わったケーニッヒ・ティーゲル博士、新中州重工が参加。

速やかに圧倒的な攻撃力を前線に展開することが可能なVB-6は、打撃力を担う重要な機体。

標準兵装

VB-6の武装は、4連装320mm大口径レールガンと、腕部の3連装重大型ミサイルランチャー2基、対空対地機銃ターレット1基、対空対地小型ミサイル連射ランチャー2基であり、開発から2050年代後半まで大きな変更はない。だが使用する砲弾、ミサイルは常に改良が加えられ、多様な戦闘状況に対応した、豊富なバリエーションを誇っている。対地、対艦用の通常弾、反応弾頭弾が標準だが、対空用マイクロ・ミサイルクラスター弾頭、対潜ロケット爆雷、はては広域消火弾などまでもが開発されている。

S.M.Sでは、マクロス・クォーター級小型万能機動空母を中核とした可変戦略システムを構築したが、VB-6もそのシステムの一環として組み込まれた。

代表的な武装である新中州/ビガース320mmレールガン4連装レールガン。自己誘導型砲弾により、射程100km以上でも精密射撃が可能である。

コクピット

S.M.S仕様のVB-6は、その投入される戦況の苛烈さゆえに、細かい改修を受けている。特にコクピット周辺とエンジンブロックは新中州重工での組み立て時にエネルギー転換装甲IIに交換され、大幅に強度が増しており、パイロットと機体の生存性は非常に高い。

パイロット1名と爆撃砲手2名が標準の乗員だが、カナリア・ベルシュタイン少佐のように、高い技量があれば1人でも操縦可能だ。

シャトルモード

本機のファイター形態と言えるシャトル形態では、リフティングボディ構造の併用により大気圏でも高い飛行能力を実現。レールガンの超電磁カタパルトをプラズマロケットに転用することで、小型化に成功した。

絶対的な機動性という点ではVFに劣るものの、圧倒的な攻撃力を高速展開するという目的は達成している。

デストロイドモード

VFのバトロイドに当たるモードで、かつてない巨大な人型兵器になる。腕部のライセオン/新中州 3連装対地対艦重ミサイルランチャーを始め、いくつかの武装は使用不能となるが、腕部のパワーアームを使用可能となる。主に近接戦闘を意識した形態だが、VB-6に求められる目的が砲撃能力であったため、用いられる機会は少ない。

重ガウォークモード

デストロイド・モンスターをほうふつとさせる形態で、全武装の使用が可能となる。特に主力兵器のレールガンを最大の威力で使用できるため、戦場では重ガウォークモードで使用されるケースが多く確認されている。

レールガン

最大威力での射撃時には、「足場」が必要となり、アイランド1のドームを利用したこともある。

バリエーション

S.M.S使用機は、カタログ仕様は同一だが、機体納入後独自にチューンされ、最大出力が5%以上向上している。独特のマーキングも特徴的である。

ギャラクシー船団の救出に向かった第二次バジュラ遭遇戦では、スポンサーであるシェリルのノーズアートが描かれた。

以降の戦闘時においてもシェリルノーズアートは採用され、いくつかのバリエーションが確認されている。

クイーン・フロンティア

人類の傀儡にされた バジュラの女王

バジュラの生体組織とマクロス・フロンティアとの融合は艦の奥深くまで及んでいる。

データ　※データは観測よりの推定

身長▶1558m(角先端まで)
体重▶4380万t
動力▶熱核反応エンジンマトリックス＋フォールド・クォーツ次元エネルギー変換
移動能力▶OTMマクロスヒートパイルクラスターシステム＋バジュラ重力制御推進
フォールド能力▶バジュラ生体フォールド器官クラスター
武装▶ガンシップ・アドバンスタイプ変異バジュラフォールド・クォーツ増幅タイプ生体対艦重ビーム砲多数

ギャラクシー船団幹部たちはクイーンの全身とリンクし、その行動を完全に掌握、クイーンの巨体を自らの肉体のごとくに操っていた。

機体解説

マクロス・ギャラクシー船団の幹部である三位一体の頭脳強化型サイボーグユニット「ブレイン」により、指揮・操縦系中枢を乗っ取られたマクロス・フロンティアがクイーンバジュラと物理的に融合することによって誕生した怪物が、このクイーン・フロンティアである。元来、活発に活動しないクイーンバジュラだが、マクロス・フロンティア由来の強力な推力とマクロス・キャノン他の武装、更に全方位バリア+ピンポイント・バリアによる防御能力を与えられ、未曾有の強大な兵器となっている。

主要クルー

ギャラクシー船団幹部
(ブレイン)

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶クイーン・フロンティア

運用記録

2059年のバジュラ戦役の末期、マクロス・ギャラクシー船団幹部(通称ブレイン)とその特務部隊によって、マクロス・フロンティアは占拠された。ブレインは、インプラント技術の応用により、マクロス・フロンティアとバジュラクイーンを融合させ、超時空生物バジュラとバトル級攻撃宇宙空母の双方の特徴を持った兵器を生み出した。無数のバジュラを支配し、S.M.Sと新統合軍の連合艦隊を真っ向から相手するクイーンフロンティアだったが、ギャラクシー船団を離反したブレラ・スターンのVF-27の特攻によりブレインが破壊され、クイーンは支配から解放される。更にS.M.Sの早乙女アルト少尉によるクイーンとの接触が成功し、クイーンはいずこかへとフォールドした。

インプラントネットワークの支配から解放されたブレラは、フロンティア司令室に特攻し、ブレインを討った。

早乙女少尉と接触したクイーンは、直後に少尉を巻き込み、フォールド航行で戦場を離れた。その行方は不明である。

異常体

ギャラクシー船団のインプラント技術によって支配されたクイーン。バトル・フロンティア(強攻型)を包むようにバジュラの生体組織が融合しており、頭部には巨大な角、肩部には無数の巨大な鉤爪付きの触腕を持つ。また左手の空母部分は分厚い生体装甲組織が積層している。

マクロス・キャノン

本来の砲身が生体組織によって、さらに長砲身化している。先端部にはエネルギー増幅・収束用のフォールド・クォーツも生成されている。そのエネルギーは、融合前の数十倍の出力を持つとされ、地表から衛星軌道上の艦隊を一撃で消滅させる威力があった。

両脚部に付着した大量の生体組織は反応炉部分を保護すると共に、反応炉からのエネルギー変換を行っている。

通常体

ブレラ・スターンの特攻により、インプラント支配から解放された状態。表面を覆う生体組織も本来の色味に戻っている。S.M.Sの早乙女少尉との接触で、人類の真意を理解し、いずこかへフォールドしたとされる。

フォールド・クォーツを装備したYF-29でクイーンの周囲を"舞った"早乙女少尉は、クイーンとのコミュニケーションに成功する。

融合前のバジュラクイーン(写真左)。それ単体、バトル級空母に匹敵する大型の個体であった。

EXTRA REPORT

関連事項

クイーンバジュラ

本来のクイーンは、全長数十~数百kmにも達する巨大なバジュラで、バジュラネスト内に棲息する。胴体の大半は地下に存在し、惑星の地殻エネルギーを取り込む。クイーンが自ら移動することはまれで、巣別れのときに移動するのみだとされる。クイーンはフォールド能力、空間歪曲能力に優れるが、直接的な戦闘能力は少ない。

ネストは複合ハニカム構造の強靭なエネルギー転換装甲であり、その上フォールド・バリアも展開可能という堅牢な要塞となっている。またネストの構造体にはフォールド・クォーツが規則的に埋め込まれており、これらはフォールド波の増幅、フィルターとして機能し、クイーンと他のバジュラ間のフォールド・ネットワークを支援する。

巨大なバジュラネスト。ゼントラーディの大要塞は、プロトカルチャーがネストを参考にしたとの説もある。

YF-25 フロンティア船団による VF-25の開発試作モデル

PROPHECY

機体解説

新統合軍本部が開発した最新鋭機YF-24エボリューションの設計データを元に、マクロス・フロンティア船団にて、L.A.I社の主導で開発された試作機。機体の変形機構や性能試験、EX-ギアによるコントロールテストなどを目的として、数機が製造された。本機の試験で得られたデータを元に、諸々の問題点を修正した制式採用機VF-25メサイアの生産が行われることとなった。

データ

※データはファイター形態時のもの

項目	値
所属	S.M.S
全長	調査中
全高	調査中
全幅	調査中
空虚重量	調査中
エンジン	調査中
最高速度	調査中
標準武装	25mmビーム砲(マウラーROV-25)×1

開発系譜図

サイズ比較

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶YF-25 プロフェシー

運用記録

数機が生産されたYF-25は、惑星メサイア025にて試験飛行が行われた。YF-25のカラースキームの中で最も有名なオレンジと白の塗装の機体は、このメサイア025での試験で運用された機体である(なお、試験に使用された3機のYF-25には、それぞれ001、002、003の機番が付けられた)。試験飛行の終了後、YF-25はEX-ギアシステム搭載機への機種転換用訓練機として運用されることとなり、S.M.Sフロンティア支部など、VF-25の実戦耐用試験が行われている現場に送られた。なお、S.M.Sフロンティア支部にて運用された機体は、メサイア025の試験飛行に参加していた003号機であった模様。

YF-25にもガンポッドなどのVF-25の標準装備は装着可能であるが、本機が実戦に投入されたとの記録は確認されていない。

S.M.Sフロンティア支部のマクロス・クォーター内格納庫にて、VF-25に混じって駐機中のYF-25(右上)。

ファイターモード

コクピットは各種試験におけるデータ採取の効率を考慮し、複座式となっている。双方の座席がEX-ギアシステムに対応していたため、訓練時に後席に着座した教官が、機体のバランスを適宜補正できる点が好評であったという。図はメサイア025での試験飛行に参加した機体のうち、001号機。

◀テスト機であるためカラーリングは派手なものになっている。尾翼には新統合軍のマークも見える。

ガウォークモード

パイロットの手足の動きを機体モーションに反映できるEX-ギアシステムの搭載は、ガウォーク形態でのホバー機動時のスムーズな重心移動に貢献したとされる。本機の変形機構には特に修正すべき箇所がなく、そのまま制式採用機VF-25に継承された。

▶ガンポッド装備のガウォーク形態。腕部のシールド内には、一応アサルトナイフも内蔵されている。

バトロイドモード

YF-25の頭部は多方向からの情報を記録するため、各種センサー類、カメラが大型のクリアシールドで覆われた、独特の形状をしている。頭部右側には通信アンテナ、左側には小口径レーザー機銃を搭載する。

▶バトロイドモード。複座のコクピットは胴体内に収納されており、外観は頭部とカラーリング以外にVF-25と差異はない。

関連事項
EXTRA REPORT

ダイナム超合金の変形玩具

大手玩具メーカー、ダイナム超合金は、S.M.Sが運用する様々な可変戦闘機の変形玩具を送り出し、大ヒットを飛ばしている。同社の製品は、カラーリングや細部のディテールに至るまで、実機そっくりに再現されているため、L.A.Iのイメージ戦略の一環として、同社から機体の設計データなどを供与されているのではないかと噂されている。

ダイナムの新製品、YF-25プロフェシー。まだ十分に情報が露出していなかった当時の製品化で話題となった。

▲こちらは2059年に銀河100万店舗を達成したファミリーマートとダイナム超合金がコラボレーションした製品、VF-25Fm(ファミリーマートVer.)。

マクロス・クォーター級空母

フロンティア支部の応援に現れた S.M.S支部の母艦

バジュラ母星での決戦においては、S.M.Sの各船団支部から、多数のマクロス・クォーター級が、フロンティア支部の応援に現れた。

連合艦隊に参加していたマクロス・クォーター級は、マクロス17やマクロス23所属艦以外にも赤、緑、グレーのカラーの艦が確認されている。

▲マクロス23所属マクロス・クォーター

データ

※データは要塞艦時のもの

- 所属 ▶ S.M.S
- 全長 ▶ 472m
- 全幅 ▶ 178m
- 全高 ▶ 96m
- 運用慣性重量 ▶ 16.5万t
- 全備重量 ▶ 26.5万t(本体15.2万t)
- 動力系 ▶ 反応エンジンクラスター
- 標準装備 ▶ ガンシップ(ガトリング式バスターキャノン)/ビーム砲塔/火器多数
- キャリアー(ARMD-L) ▶ 全長約254m/全備重量5.6万t
- ガンシップ(ARMD-R) ▶ 全長約227m/全備重量4.8万t
- 移動砲台艦(BASTER-L、R) ▶ 全長約129m/全備重量約8,855t

サイズ比較

1200m
800m
400m
0m
SDF-1
東京タワー
マクロス・クォーター

機体解説

マクロス・クォーター級多目的ステルス宇宙戦闘機動空母は、民間軍事プロバイダーS.M.Sが各船団に派遣している護衛艦隊の中枢を担う艦である。重量子反応砲としても運用可能なガトリング式バスターキャノンを持ち、また約80機のVF/デストロイドの運用が可能、さらには「強攻型」への変形機能も有するなど、同時代の同クラスの艦艇の中では、あらゆる面で抜きん出た戦闘力を誇る。

開発系譜図

? ▶ マクロス・クォーター

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶マクロス・クォーター級空母

運用記録

2059年、マクロス・フロンティア船団はインプラント技術を用い、未知の生命体バジュラの群れを支配下に置くことに成功する。これに対し、S.M.Sフロンティア支部のジェフリー・ワイルダー艦長は、知的生命体であるバジュラの支配は銀河条約違反であると新統合軍に告発し、フロンティア船団の制止を試みた。この告発を受け新統合軍とS.M.S本部は、連合艦隊をフロンティア支部の応援として送り込む。艦隊にはS.M.S各支部から多数のマクロス・クォーター級空母が合流し、先陣を切って突入したそれらの艦は、次々と決戦の舞台であるバジュラ母星に上陸していった。その後、連合艦隊は複数のマクロス・クォーター級による、クイーン・フロンティア(クイーンバジュラとバトル・フロンティアの融合体)への重量子反応砲の一斉砲撃を行う。だが直後に、クイーンバジュラがインプラントの支配を脱し、長距離フォールドで退避したため、砲撃は命中しなかった。

S.M.Sフロンティア支部の応援に現れた新統合軍艦艇の中には、ウラガ級戦闘空母も見られたが、クイーン・フロンティアの砲撃で撃沈した。

クイーン・フロンティアへ一斉砲撃を準備するマクロス・クォーター級。後方の空には新統合軍のグァンタナモ級宇宙空母の姿も見える。

マクロス17所属マクロス・クォーター

S.M.S各支部に配備されたマクロス・クォーター級は、いずれも基本構造は共通しており、本体である高速巡洋艦センターハルと、ガトリング式バスターキャノンを装備したARMD-R、強襲揚陸艦と空母を兼ねたARMD-L、それに移動砲台艦BASTER-L、BASTER-Rの5隻の艦艇が合体して運用され、また人型に似た強攻型への変形機構も備える。マクロス17船団のS.M.S支部に所属するマクロス・クォーター級は、全体的に迷彩塗装が施されているのが特徴である。

◀▲▼強攻型の肩、脚に相当するブロックなど、各所に砲塔が追加装備されている。

マクロス23所属マクロス・クォーター

マクロス23船団のS.M.Sに配備されたマクロス・クォーター級。ブルーとホワイトの塗装が特徴的だが、艤装はフロンティア支部のマクロス・クォーターとほぼ共通している。バジュラ母星での決戦では、マクロス17所属マクロス・クォーターと共に、惑星表面に上陸を果たした後、クイーン・フロンティアへの砲撃を行った。

重量子反応砲を構えるマクロス23所属マクロスクォーター。足元には、同艦所属のケーニッヒモンスターも見られる。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-2SS

機体解説

VF-2SS バルキリーIIは、VF-XX ゼントラーディアン・バルキリーをベースとして開発された可変戦闘機である。関節駆動部などにゼントラーディ系パワードスーツの技術を取り入れることで構造上の脆弱性を克服した機体で、同時期に運用されていた大気圏内専用の主力VF、VF-2JA イカロスに比べてひと回り小さなサイズとなっている。また、SAP（スーパー・アームド・パック）を標準装備とすることで火力と機動性の向上が図られており、宇宙空間での戦闘において優れた性能を発揮した。本機はVF-2JAと並ぶ主力機として地球統合軍の宇宙戦力を支え、マルドゥーク軍との戦闘でも多数が投入されている。

対マルドゥーク戦の主戦力となった
宇宙用可変戦闘機

データ

※データはファイター形態時のもの

所属 ▶ 地球統合軍
全長 ▶ 調査中
全幅 ▶ 調査中
空虚重量 ▶ 調査中（全備重量19,100kg）
エンジン ▶ タカチホフ熱核反応タービン×2
エンジン推力 ▶ 25,600kg（通常推進時）×2
補助エンジン ▶ 調査中
巡航速度 ▶ 調査中
武装 ▶ 対空レーザー機銃／ガンポッド／スクアイアー／ウォーレン製RG-022レールガン×1（SAPに搭載）／ミサイルランチャー×2（SAPに搭載）

サイズ比較

VF-1J
VF-2SS

開発系譜図

▶ ▶ VF-2SS

主要パイロット

シルビー・ジーナ
ネックス・ギルバート
エイミー・ロッタ
九條沙織
ナスターシャ・トート

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶VF-2SS バルキリーⅡ

運用記録

2090年前後の地球統合軍は、VF-2SSとVF-2JAの2種類の主力機を配備し、宇宙と地上の防衛体制を整備していた。VF-2SSは主に大気圏外に配備され、歌による防衛網「ミンメイ・ディフェンス」の中核を成す戦力として活躍した。しかし、歌が通用しないマルドゥーク軍との戦いでは苦戦を強いられ、防衛戦に投入された本機も多くが失われた。本機は戦闘時にはSAPを装着し、さらにネックス機は専用ガンポッドを装備していた。

マルドゥーク軍偵察部隊がムーン・フェスティバルを襲撃した際には、ネックス・ギルバート大尉がフェアリー・リーダー隊を率いて本機で迎撃に当たっている(本来の小隊長はシルビー・ジーナ中尉)。

2度目の大規模戦となった月付近の戦闘では、ファイアーウルフ隊やホワイトオックス隊などのVF-2SS部隊が投入されたが、甚大な被害を受けた。

ムーン・フェスティバルではフェアリー・リーダー隊によるデモンストレーション機のアクロバット飛行が披露された。

標準装備

固定武装として頭部側面にターレット式の対空レーザー機銃2門を備える。また、スクアイアーと呼ばれる支援防御兵器を運用することも多い。これは、母機に随伴して完全自動制御で攻撃を行うシステムで、2門のビーム砲が装備されている。火力の大半を標準装備のSAPに依存しており、本体の武装はいたってシンプルである。

◀頭部機銃

▲スクアイアー

ガンポッド

レールガン方式の折り畳みガンポッドをSAP左腕部ユニットに収納している。また、ネックス機は大型の専用ガンポッドを装備しており、右脚部に収納されていた。

▶一般機用

▶ネックス用

コクピット

コクピットを覆うキャノピーはフレームがなく、視認性が高い。操縦桿はアームレストと一体化した左右同型のグリップ状の構造で、人差し指と親指の位置に計4つのトリガーを備える。また、シート後部が非常用コンテナになっており、人1人が乗れるほどのスペースが確保されている。

マルドゥーク軍に囚われた神崎ヒビキを救出するためにシルビー機が敵艦に潜入した際には、コクピットの後部に彼を乗せて脱出を図った。

▲ファイター時
上はファイター形態時のコクピット。計器は前面に集中している。

▶バトロイド時
バトロイド時でもシートの周りの構造はそれほど大きくは変化しない。

ファイターモード

VF-2SSは宇宙空間での運用を主体として開発された機体で、機体構造にもその設計思想が表れている。主翼は面積が小さく、エンジンナセルは外側に張り出しており、航空機としての空力を犠牲にしてもVFとしての構造と性能を優先したことがうかがえる。本機のベースとなったVF-XXも特異な形状を持つ宇宙空間用の機体で、その発展型にあたるVF-2SSが宇宙空間での戦闘に重点を置いていたのは当然の流れだったと言える。

SAPによる推力と機動性の増強もあって宇宙空間における機動性は高く、シルビー機はマルドゥーク艦内で軽快な機動で敵の追撃を振り切っている。

▶基本構成はVF-1シリーズに近いが、脚部エンジンナセルが外側に配置されているため印象は大きく異なる。

◀エンジンナセルの先端が突き出した外形が特徴。底面にはバトロイドのバックパックユニットが見える。

▶エンジンナセル内側に見えるのは腕部ユニットで、左右に分かれて収納されている。

▲機首底面に垂直翼を備える独特の構造で、尾翼は機体の上下に2枚ずつ配置されている。

ガウォークモード

宇宙空間での運用を想定したVF-2SSにおいて、重力下で真価を発揮するガウォーク形態は使用する局面が少ないと考えられる。しかし実際には、艦艇などの巨大構造物を足場にした戦闘や構造物内部への侵入など、ガウォーク形態が用いられるケースも多かった。関節部の強度向上が施された本機はガウォーク形態の信頼性も高く、実戦ではパイロットの機転によって様々な局面に活用された。

マルドゥーク軍前衛艦隊旗艦サーライドの艦内に潜入したシルビー機は、ガウォーク形態を用い狭い艦内を移動した。

宇宙空間でも艦艇内部のように擬似重力を発生させている場所もあるため、ガウォークの機動性が発揮されるケースも多かった。

専用の着艦設備がない場所などでは、ガウォーク形態で着陸することもあった。

◀ガウォークでは、主翼下にスライドした腕部と脚部が展開され、バックパックが背面に回る変形機構を有していることがわかる。

▲背部サブユニットは変形時に180度回転して上下が逆となり、バックパックに接する。

バトロイドモード

ゼントラーディの技術ノウハウが取り入れられたVF-2SSだが、バトロイド形態は旧来のVFと同じフォルムを有している。頭部は連装ターレットを有する形状で、その他の部位にもかつてのVFシリーズからの設計思想をうかがわせる点が多い。

本機はVF-XXをベースとした高い性能を有する人型戦闘兵器であるが、マルドゥーク軍との戦いにおいては、近接戦闘を得意とする敵バトルスーツに圧倒される場面も少なからず確認された。

▲頭部

マルドゥーク軍機動兵器との格闘戦では劣勢を強いられたが、ネックス機のように目ざましい戦果を上げる機体も少なからずあった。

◀サブユニットとバックパックは背部に位置し、バトロイド形態時の主推進器ともなる。

▶ファイターの胴体が中心から前後に折り畳まれてバトロイドの上半身を構成する。コクピットのキャノピーは装甲で覆われ、主翼は背部に収納される。

カラーバリエーション

胸部のラインがグリーンに塗られている機体は男性パイロット、イエローは女性パイロット用であった。また、シルビーやネックスのようにエースパイロットはレッドやブルーといったパーソナルカラーで塗られることもあった。これ以外にも、ムーン・フェスティバルに参加した赤いボディや茶色いボディの機体など、多様な機体色のバリエーションが存在したようだ。

▼男性パイロット用

▲ネックス専用

▲女性パイロット用

Illustration by Hidetaka Tenjin

VF-2SS

新世代の地球統合軍主力機
マルドゥークに立ち向かった

●データ	※データはファイター形態時のもの
所属	地球統合軍
全長	調査中
全幅	調査中
空虚重量	調査中(全備重量19,100kg)
エンジン	タカチホフ熱核反応タービン×2
エンジン推力	25,600kg (通常推進時)×2
補助エンジン	調査中
巡航速度	調査中
武装	対空レーザー機銃/ガンポッド/スクアイアー/ウォーレン製RG-022レールガン×1 (SAPに搭載) /ミサイルランチャー×2 (SAPに搭載)

●主要パイロット

シルビー・ジーナ
ネックス・ギルバート
エイミー・ロック
九條沙織
ナスターシャ・トート

機体解説

ゼントラーディと地球の技術を融合した地球統合軍の主力機、VF-2SSバルキリーIIには、総合的な性能の向上を目指しSAP(スーパー・アームド・パック)システムと呼ばれる強化装備が用意されていた。機体制御用バーニアと推力強化用の高機動ノズル、さらに大型レールガンと複数のミサイル・ポッドで構成されており、通常時に比べて空中戦能力と機動性能は飛躍的に向上した。装着時でも各形態に変形できるその運用性の高さから、西暦2080年代には機体の標準装備となっている。

VF-2SS バルキリーII

SAP(スーパー·アームド·パック)システム

運用記録

バルキリーIIは、マルドゥーク軍との一連の戦役において、主力機動兵器として活躍した。戦いは、火星〜地球圏までの宙域を舞台としていたため、バルキリーIIも基本的にはSAPシステム装備で投入されている。記録には、小型艦を撃沈しているバルキリーIIも見受けられるが、戦闘の帰趨は両軍艦隊の砲撃戦によって決着することとなり、バルキリーIIは、実際の戦況にはさほど影響は与えられなかったという。

無線誘導式の支援防御兵器、スクアイアーと共に運用することで、さらにその戦闘力は高まった。

ファイターモード

▶ファイター形態でのSAPシステム装着時。機体上部から延びているのは、通信用のアンテナである。

▼ファイター形態では、レールガンが機首の上に、ミサイル·ポッドが底部にレイアウトされる。

▲SAPシステムにも推力を発生するスラスターが装備されているのがわかる。これにより、機動性も向上した。

5面図

◀正面 ▶背面 ◀上面 ◀側面 ▶底面

SAPシステムを装備したファイター形態での5面図。装備時でも機体はフラットに保たれているほか、頭部のビーム機銃も使用できるようになっていた。また、主砲となるレールガンは機首から少し右にレイアウトされた。

ガウォークモード

▶ファイター形態では底部に設置されていたミサイル·ポッドは、設置されている腕部の展開と共に可動する。

▶小型ミサイル
▼ミサイル

ミサイル·ポッドは主力両端に2基、機体上部に1基、腕部、脚部に各2基備える。

▼腕部

▲ミサイル·ポッドの内部にガンポッドを収納することが可能となっている。

バトロイドモード

▼▶バトロイドモードでレールガンを使用する際は、右図のようにSAPシステムを頭部に覆い被せるようにして設置した。SAPシステムの各所に機体制御用のバーニアが設置されているため、機体の運動性能も高く保たれた。

▶フェイスオープン時
レールガン非使用時には、SAPシステムを背部にスライドした状態となる。ガンポッドやビーム機銃は使用できる。

変形シークエンス(ファイター形態➡バトロイド/ガウォーク形態)

VF-2SS バルキリーIIのファイター、ガウォーク、バトロイドの可変シークエンスを示した図。腰ブロックが各形態で異なるレイアウトとなるほか、機体上部のバックパックやポッドがスライド、回転を繰り返すのが特徴である。

ファイター➡バトロイド

1 機首·頭部などの変形

バトロイド時の腰ブロック

A 機首がスライド　B 頭部が展開する
C 主翼基部がスライド

2 機首、主翼などの変形

A 機首折れる　B 背中のポッドがスライド
C 腕部90度回転　D バックパック回転
E 主翼畳む

3 各部の変形

A 背部のポッド90度回転
B 手部が出る
C 主翼畳む
D つま先開く

4 バトロイドモード

A 頭部が起き上がる

ファイター➡ガウォーク

1 胸部の変形

A 胸部カバーがスライド

2 胸部·脚部の変形

A 脚部ブロック下へ
B 脚部を逆関節に
C つま先を開く
D 胸部カバーがスライドして元の位置へ

ファイター時の腰ブロック

ガウォーク時の腰ブロック

3 腕部の変形

A 手部が出る
B 腕部が90度回転

4 機体上部の変形

A バックパック回転
B ポッドがスライド

5 ガウォークモード

▲正面図

A ポッドが180度回転
B 主翼、上に折れる

SNNバルキリー

戦場を駆ける報道の眼

主要パイロット

神崎ヒビキ　デニス・ローン

データ

所属	SNN	エンジン	調査中
全長	調査中	推力	調査中
全高	調査中	最大速度	調査中
全幅	調査中	標準武装	なし
空虚重量	調査中		

開発系譜図

? ▶ SNNバルキリー

サイズ比較

VF-1J
SNNバルキリー

SNN本社ビル内に配備されているSNNバルキリー。マルドゥーク軍と統合軍の戦闘が発生した際、上層部の許可を得たレポーターが同機に搭乗し、戦闘空域へと急行した。

SNNバルキリーはファイターモードで運用されることがほとんどだったが、マルドゥーク艦への肉薄時や、敵艦内通路を移動する際にはガウォーク形態に変形した。

機体解説

SNN(スクランブル・ニュース・ネットワーク)テレビが所有する複座型社用機SNNバルキリーは、軍用機であるバルキリーの技術を転用した民間用可変機である。武装を持たずバトロイドモードへの変形機構も有していないものの、高速移動を重視して設計された機体は軍用機よりも軽量で、後退角を持つ固定翼と尾翼部から伸びる前進翼を立体的に組み合わせた独自の形状の主翼により、安定した高速移動を可能にした。さらに、大型のブースターを装着することで単独での大気圏外への進出も可能となっている。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶SNNバルキリー

運用記録

統合軍対マルドゥーク軍戦の取材のため最前線に派遣されたSNNバルキリーは、軍用機に勝るとも劣らない飛行性能の高さを見せ、撃墜されることなく戦闘の模様を記録している。なお、2度に渡り最前線を取材したSNNの芸能レポーター・神崎ヒビキは、最初の取材ではSNN本社ビル所属の機体に搭乗して敵艦内に侵入。2度目の取材でも月支局の機体に搭乗し、敵艦内に乗り付けるという大胆な取材を敢行した。

コクピット

複座となっているコクピット。操縦者が搭乗する前席にはコントロールスティックやマニピュレーター用スティック、各種計器などを設置。カメラマンが搭乗する後席には、複数のモニターディスプレイとコントロールスティックなどが設置されている。

▶前席

▲キャノピー開放時

◀後席

ファイターモード&ブースター

機体形状の最適化や軽量化などにより、空中および宇宙で安定した高速移動が可能となっている飛行形態。SNN本社ビルから宇宙に向かう際は、このファイターモードの尾部に大型ブースターを装備して一気に大気圏を離脱する。なお、ヒビキは交戦の模様を取材する際も、宇宙空間における長時間の高速航行を維持するためブースターを装備したままの機体を運用していた。

Ⓐ大型カメラ

▲▶主翼の形状は中央に空間がある結合翼となっている。[illegible]定翼の翼面にはSNNのロゴマークがあり、両翼には大型カメラがセットされている。

▲機体後部に装備された白いブースターは3基の大型ノズルを搭載。SNNバルキリーに膨大な推力を与え、SNN本社内カタパルトから大気圏外への単機での脱出を可能とする。

宇宙への射出を控え、大型ブースターを設置してSNN本社ビルのカタパルトに待機するSNNバルキリー。

ガウォークモード

脚部推進器を展開し、ホバリングや低空での低速移動を行うモード。VF-1シリーズのような腕部マニピュレーターは用意されていない。ヒビキはデニスを乗せての取材時と、マルドゥークの歌巫女イシュタルを送り届ける際にマルドゥーク艦に侵入しているが、どちらの場合も狭い場所への侵入や着陸に向いているガウォークモードを活用した。

後席にイシュタルを乗せて敵艦に向かったSNNバルキリー。敵艦内に着艦する際はガウォークとなった。

▲脚部推進器をホバリング用に展開したガウォーク形態は、着艦時など限定的な状況で使用された。変形後は翼端が折畳まれ、大型カメラは[illegible]端部に横付けされる形となる。

ギガメッシュ

近接戦闘に優れた マルドゥーク軍の 主力機動兵器

重装備で知られる機体だが、大気圏内と宇宙空間の双方で統合軍のバルキリーに勝るとも劣らない高い機動性を発揮した。

機体解説

マルドゥーク軍の主力機動兵器であるギガメッシュは、巨人族を洗脳し操るマルドゥークが操縦するバトルスーツであり、前線に立って戦う勇猛な指揮官フェフ用の真紅の機体と、一般兵士用の青い機体が確認されている。同機体は多数の小型ミサイルを内蔵しているほか、肩部にある伸縮自在のウイングカッターや機体各所に装備された射出可能なクローといった特殊兵装が施されており、特に機動兵器との近接戦闘で高い戦闘力を誇った。

▶ギガメッシュ（フェフ用）

主要パイロット

フェフ

データ

所属▶マルドゥーク
全高▶調査中
全備質量▶調査中
エンジン▶調査中
推力▶調査中
最大速度▶調査中
標準武装▶調査中

サイズ比較

開発系譜図

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶ギガメッシュ

運用記録

統合軍との緒戦においてマルドゥーク軍の艦隊指揮官を務めたフェフは、同戦闘中に連れ去られた歌巫女イシュタルを取り戻すため奇襲攻撃を敢行。イシュタルの奪還には失敗したが、彼が搭乗したギガメッシュは統合軍のVF-2JAイカロスを軽くあしらっている。また、ムーン・フェスティバルを監視していたマルドゥーク軍は、アイドル歌手のウェンディ・ライダーを地球の歌巫女であると解釈し、その捕獲を画策。シルビー・ジーナと共にVA-1SSメタルサイレーン(レプリカ)に搭乗した彼女を捕獲すべく、ギガメッシュ(一般兵士用)を出撃させた。

VF-2JAと交戦したフェフのギガメッシュ。一度は動きを封じられたが、特殊兵装のウイングカッターを用いてVF-2JAの腕を破壊した。

ギガメッシュ(フェフ用)

第3先遣艦の艦隊指揮官であり勇猛な戦士でもあるフェフの専用機。赤いカラーリングの機体は一般兵士用と比べ若干大きく、頭部をはじめとする機体各所の形状のほか、小型ミサイルやウイングカッターといった専用武装についても一般兵士用の機体とは異なっている。

▲各種センサーを搭載した頭部は、兜と、バイザーのような形状のフェイスカバーで覆われている。

▲戦闘時にはフェイスカバーを降ろし、頭部正面のセンサー部分を保護することができる。

◀推進器側面に備え付けられたウイングカッターのほか、伸縮自在のクローが手、膝、踵に備えられており、2枚のカッターと計12本のクローを縦横無尽に張り巡らせることが可能である。

◀▼両腕部にも多数の武装を備えるギガメッシュ。鉤爪のような5本の指のうち、中3本は伸縮自在のクローになっており、肘部には特殊な形状の小型ミサイルを多数搭載している。

▼コクピット

胸部のカバーによって二重に保護されている、非常にコンパクトなコクピット。機体の操作は操縦シートの両脇に設置されたコントロールアームで行う。なお、二重のカバーを開放した際は、操縦シートをせり出させることも可能である。

ギガメッシュ(一般兵士用)

「近接戦闘に優れた機動兵器」という機体のコンセプトはフェフ機と同様だが、外装や武装などが全体的に簡略化されている、一般兵士用のギガメッシュ。カラーリングも真紅のフェフ機とは異なり、基本的に青で統一されているようだ。

統合軍の最新鋭機VA-1SSメタルサイレーン(レプリカ)を追跡し容易く捕獲したことから、一般兵士用のギガメッシュも非常に高い性能の機体だったと思われる。

◀▼小型ミサイル発射時は、前腕部を前方にスライドさせる。なお、ミサイルは両腕で計100発ほどが搭載されている。

▲特徴的な形状をした一般兵士用の機体頭部。その形状ゆえに、フェフ機のようなフェイスカバーは持たない。

◀▼ウイングカッターや背部の推進器など、フェフ機と比べコンパクトにまとめられた機体。一般兵士用であるためか、両膝部のクローや右襟のセンサーなどが省かれている。

VF-2JA

大空を翔る 大気圏内用可変機

ICARUS

機体解説

大気圏内での運用を目的として開発された可変戦闘機。ゼントラーディ系技術を取り入れた宇宙用のVF-2SSとは異なり、地球の技術体系のみで開発された機体である。また、熱核エンジンも大気圏内用が使われており、VF-2SSと比べサイズがひとまわり大きい。基本装備はガンポッドのみだが、指揮官機や有事の際は主翼下にミサイルポッドを装備することで火力の増強が可能である。

歌巫女イシュタルを追って地球に潜入したマルドゥークの戦闘ポッドと、ネックス・ギルバート大尉が率いるVF-2JA部隊が海上で交戦。その後、カルチャーパークに現れた残存部隊も本機が制している。

地球の制空権を握る機体として、マルドゥーク軍の侵攻部隊と交戦。しかし圧倒的戦力差によって次々と破壊されていった。

カルチューンプラザでマルドゥーク軍のギガメッシュを拘束したネックスだったが、格闘性能では劣り、腕を破壊されてしまう。

主要パイロット

ネックス・ギルバート

データ

所属 ▶ 地球統合軍
全長 ▶ 調査中
全幅 ▶ 調査中
エンジン ▶ 熱核エンジン
エンジン出力 ▶ 調査中
武装 ▶ ガンポッド／ミサイルポッド

サイズ比較

20m
15m
10m
5m
0m
VF-2JA
ヒト
VF-1J

開発系譜図

?
▼
VF-XX
▼
VF-2JA

Mechanic Sheet
メカニックシート
VF-2JA イカロス

ファイターモード

戦闘機のフォルムはVF-2SSと大きく異なり、高い機動性を引き出すために大気圏内での空力特性に優れた設計が成されている。

▼カナード■やベントラルフィンなど、最高速度を犠牲に機動性を重視している。

▲ファイター時のコクピット。正面にHUD、両サイドにバックミラーを持つ。

▼センサードームである機首は長く伸び、鶴首状になっている。

バトロイドモード

バトロイド時も十分に空戦可能であり、ファイター時から変形に要する時間は短い。そのため可変機構を十分に活かした空戦を展開でき、可変機としての優れた運用性を誇っている。

◀バトロイド時のコクピット。キャノピーは装甲で覆われ、正面にディスプレイがくる。

◀頭部には連装ターレットを備えており、VF-2SSと共通の形状が見て取れる。

▲▼二連装式のミサイルポッドを装備したネックス機。一般機と形状・カラーリングに違いはない。

ガウォークモード

移動速度と機動性のバランスに優れ、建築物など障害物の多い地上での主役と言える形態である。下図はミサイルポッドを装備した状態。

▶主翼は前進翼となる。なお、■を展開させないままでの運用も可能。

▶足底のメインノズルのほか、逆関節になった脚部裏側からサブノズルが開く。

◀▲カラーリングは指揮官機、一般機ともに共通でバリエーションはない。ガンポッドは腕にマウント可能。

変形シークエンス(ファイター形態➡バトロイド/ガウォーク形態)

ファイター➡バトロイド

1 カナード、ベントラルフィン、エアインテークが閉じる。機体下面の両脚が下方に降りる。

2 両腕が肩部を軸に90度下がり、左右に開く。

3 胴体部が前後に折れ、脚部が下りる。頭部が180度回転しながら起き、機首部が胴部へ収納されるようにスライド。

4 垂直尾翼と主■が畳まれ、下方にスライドしたバックパックが■を固定する。

ファイター➡ガウォーク

1 カナードが閉じバックパックがせり上がる。垂直尾翼を畳み、脚部が展開。

2 バックパックと主翼が垂直尾翼の上に180度回転して重なり、■は前進翼のように前方へ可変。

3 デフレクターが後ろにスライドし、腕部が展開。

マルドゥーク軍艦艇

エリンシェが乗艦していたサーライドをはじめ、旗艦はマルドゥーク軍の「歌」を生み出す艦となっていた。

マルドゥーク軍の戦闘艦として、地球統合軍との戦闘の最前線へ多数の大型戦艦が送り込まれている。

▲マルドゥーク軍艦隊旗艦

◀マルドゥーク軍大型戦艦

歌の力で破壊を繰り返した
マルドゥークの戦艦群

●主要クルー

イングス　フェフ

●サイズ比較

艦隊旗艦
大型戦艦
斥候艦
中型艦
SDF-1

艦体解説

全ての星々を破壊することこそが平和への唯一の道である――この理念を持つ独裁者イングスが率いる、マルドゥーク軍。彼らはイングスの理念を実行に移すため、多数の兵器を開発・運用しており、バリエーション豊かな戦艦群を生み出した。150kmにも及ぶ全高を持つ母艦をはじめ、4,000m級の艦隊旗艦、2,500m級の大型戦艦、斥候艦隊が運用した斥候艦など、用途に応じて多種多様な艦艇を開発している。その大半が戦闘能力や戦闘メカ・戦闘ポッドの運用能力、さらにフォールド機能を備えており、あらゆる破壊活動を可能とする移動拠点となった。

地球へ侵攻を仕掛けたマルドゥーク軍本隊。マルドゥーク母艦の周辺に大型戦艦、中型艦、艦隊旗艦などで構成された艦隊が配備され、その防衛を担っている。

マルドゥーク軍の艦隊を発見した地球統合軍は、艦の形状などからゼントラーディ軍の残存部隊と判断。だが、のちにその実態と戦力に驚かされることになる。

マルドゥーク軍艦艇

運用記録

マルドゥーク軍艦隊はまず、大型、中型戦艦などで編成された30隻の部隊で地球へ侵攻を仕掛けた。この戦いでは、イミュレーター(歌巫女)であるイシュタルの歌などで、統合軍の歌による攻撃「オペレーション・ミンメイ」を破っている。その後も彼らは統合軍と一進一退の艦隊戦を続けるが、イシュタル、フェフの離反などにより、敗北を喫している。

フェフが所属する斥候艦隊のイミュレーターとして、イシュタルは戦場に出撃。その歌でマルドゥーク軍の兵士を操った。

自軍の犠牲を厭わないイングスに憤慨したフェフは、マルドゥーク軍の離脱を決意。イングスの乗る母艦を攻撃、破壊した。

艦体構造

▲艦首
艦隊旗艦の後方部。その特異な構造は、ゼントラーディ軍がかつて運用していたノプティ・バガニスなどと共通した意匠を持つことがわかる。

▶機首内部に主砲が格納されており、使用時には底部が展開し、砲が出現する。

艦隊旗艦が主砲を発射する様子。発射されたビームは、一度の攻撃で統合軍艦艇を撃破する威力を持つ。

▶大型戦艦
大型戦艦の後方上部に突き出ているのはブリッジ部で、センサー類が集中的に取り付けられている。背部には4基のスラスターノズルを備える。

艦に備えられた砲塔を一斉射し、統合軍艦隊を牽制する大型戦艦。

中型戦艦

▲2,000m級の戦艦で、丸みを帯びたボディが特徴。艦表面の各所に多数の砲塔を備える。主に大型戦艦に帯同する形で運用された。

統合軍との戦いに出撃する中型艦。マクロスキャノンの主砲を浴びて撃破された。

斥候艦

▲斥候艦隊に所属するフェフなどが指揮を執っていた戦艦。内部にギガメッシュなどを格納している。サイズは中型戦艦よりも小さい。

▲一般艦

フェフ専用の艦は、単独で行動することもあった。パープルのカラーが特徴的。

グラーベ

▲軍の母艦に搭載されている小型艦。艦底に多数の砲塔を備える。

地球人の歌に汚染された旗艦サーライドに制裁を与えるために出撃した。

艦底からビームを一斉射するグラーベ。エリンシェの乗る艦隊旗艦を闇に葬った。

マルドゥーク軍母艦

マルドゥーク軍を率いるイングスが運用している超大型艦。そのサイズは全高150kmにも及び、マルドゥーク軍艦の中でも圧倒的な巨大さを誇る。戦艦というよりも移動要塞のようなフォルムを持ち、艦フロントに設置された赤い「目」のような主砲から、強大なビームを放つことができる。

主砲からビームを放つ母艦。射線上の艦を一瞬にして消滅させる破壊力を持ち、統合軍艦隊の一部もその犠牲となった。

▲まるでひとつの「山」のような、特異なフォルムの艦である。他の艦と同じようにフォールド機能を持っている。

連絡艇

▼艦と艦の移動に使う連絡用の小型艇。戦闘能力はなかったと見られる。

フェフの部隊が地球側から身柄を奪取したイシュタルを、艦隊旗艦サーライドへ送り届けるために運用した。

Illustration by Hidetaka Tenjin

VA-1SS

データ

- **所属**▶地球統合軍
- **全長**▶調査中
- **全幅**▶調査中
- **エンジン**▶調査中
- **エンジン出力**▶調査中
- **武装**▶ガンポッド／ビーム砲／ミサイル／プラズマ・スピア／他

サイズ比較

VF-1J　VA-1SS

主要パイロット

ネックス・ギルバート

開発系譜図

▶ VA-1SS

高い性能を誇り、既存の主力機だけではなく、マルドゥーク軍兵器をも凌駕した。

第4の形態を持つ次期主力可変戦闘機

機体解説

地球圏の守護者を標榜する統合軍が威信を懸けて開発した最新鋭の可変戦闘機が、このVA-1SS メタルサイレーンである。ファイターとガウォーク、バトロイドの3形態に加え、第4の形態にあたるガンドロイドへの変形機構を有する点が最大の特徴である。また、プラズマ・スピアをはじめとする多彩な武装による高い火力と、従来の主力機を大きく上回る推力を誇り、次期主力機にふさわしい性能を獲得している。マルドゥーク軍による地球侵攻の最中にロールアウトした本機は、ネックス・ギルバート大尉の乗機として最終防衛ラインの攻防戦に投入され、大きな戦果を挙げた。

VA-1SS メタルサイレーン

運用記録

次期主力機として開発が進められたVA-1SSは、2091年のムーンフェスティバルで試作型のプロトタイプ(レプリカとも言われる)が一般公開された。また、マルドゥーク軍の主力が地球圏に到達した際には、月付近の最終防衛ラインにおける戦闘に投入されている。同機はこの戦闘で活躍したが、ネックス大尉には別の任務が与えられたため、戦線から後退している。

ムーンフェスティバルではコンパニオン役のウェンディ・ライダーを乗せて会場から飛び立つ演出に用いられ、月面でデモ飛行を行った。

マルドゥーク軍機動兵器を圧倒する性能を示した。

敵艦隊への突入を図ったバルゼー艦隊旗艦グロリアの下に急行。撃沈された同艦の爆発に巻き込まれそうになったが、難を逃れている。

標準武装

バトロイド時の接近戦能力の強化のためプラズマ・スピアが装備された。また、ガンポッドやビーム砲、内蔵式ミサイルなどによる高い火力を誇った。

プラズマ・スピアによって、マルドゥーク軍のバトルスーツにも劣らない接近戦性能を獲得している。

バトロイド時に主翼を上方に可動させ、主翼に装備したガンポッドで前方の敵機を攻撃することも可能。

▲ガンポッドは使用時に銃身が前後に展開してグリップが引き出される。

◀肩部ビーム砲は可動式で、前方に向けて射撃を行うこともできる。

▶プラズマ・スピアは先端部に電磁プラズマを発生させる接近戦用武装。

コクピット

コクピットはVF-2SS バルキリーⅡなどのものを進化させた構造で、アームレストと一体化した操縦桿や箱状のペダルといった共通する構造に加え、ドーム状多目的ディスプレイなどの新システムも導入されている。

バトロイド時にはコクピット上部がキャノピーごと胸部中央に露出し、有視界戦闘が可能となる。

▲ファイター／ガウォーク時
シート前方には多目的ディスプレイが配され、その前縁に補助ディスプレイが設けられている。

▶バトロイド時
シートが直立状態に変形し、ヘッドレスト上部パネルが展開しパイロットの身体を固定する。

ファイターモード

ファイター形態は主翼面積が大きくプラズマ・スピアが機首の一部となる構造が特徴である。プラズマ・スピア部にカナードを配する一方で、主翼後縁には小型バーニアが装備されている。このことから、大気圏内外での運動性向上が設計コンセプトのひとつにあったとも考えられる。

ネックス機は最終防衛ラインの戦闘に参加した際、後方の艦からファイター形態で戦場に出撃し、バルゼー艦隊が展開する宙域に急行した。

交戦中のネックス機はバトロイド形態を採ることが多かったが、ファイターでミサイルを緊急回避するといった機動も見せている。

▶VF-2SSやVF-2JAイカロスに比べて主翼の面積が広く、フォルムも大きく異なる。

◀ファイター形態では、ガンポッドは折り畳んだ状態で主翼下部にマウントされる。

▼エアインテーク横にはビーム砲を装備しており、前方に対する補助武装として機能する。

▲主翼後縁に各2基の小型バーニアを備え、噴射時にはユニットが開いてノズルが露出する。

▲プラズマ・スピアは機首下部に密着するようにして装着される。

関連事項

EXTRA REPORT

プロトメタルサイレーン

プロトタイプはシルビー・ジーナ中尉がパイロットを務めた。武装はなく、後部座席が増設されている。

デモ飛行中にマルドゥーク軍偵察部隊の襲撃を受けて捕獲されかけたが、ネックスたちの救援によって事なきを得た。

◀シルエットはメタルサイレーンと同じである。プラズマ・スピアは装備せず、武装もダミーだったと思われる。

◀単座式だが、ムーンフェスティバルでは後部座席が増設された。

◀▲基本的な仕様は制式採用機に準じていたと考えられ、高い機動性を発揮した。

ガウォークモード

VA-1SSの基本的なユニット配置や変形構造は、主翼部とバックブースター、ヘッドカバーを除けばVF-2SSに近い。そのため本機のガウォーク形態はVF-2SSに近い構造となっているが、変形時にプラズマ・スピアが腕部に装着されるため格闘戦にも対応可能となる。

最終防衛ラインの戦闘ではガウォーク形態はあまり用いられなかったが、敵機に後ろを取られた際にガウォークで急制動をかけて攻撃に転じている。

▲ガウォーク時には主翼先端部が90度上に起き上がった状態となる。

▶プラズマ・スピアは機首から右腕の前腕部に装着される。

◀後方から見たガウォーク。同形態では機体後部のトレーサーパネルが展開する。

バトロイドモード／ガンドロイドモード

バトロイド形態の特徴としては、プラズマ・スピアの装備による接近戦能力の向上と、有視界戦闘を想定したコクピット配置が挙げられる。さらに、本機はガンドロイドと呼ばれる形態を採ることが可能で、宇宙空間でも優れた格闘戦能力を発揮した。この形態は「純攻撃型」ともされ、ミサイルをはじめとする各種武装を最大限に使用することが可能で、突出した攻撃力を発揮した。

実戦においても優れた接近戦能力を示し、武装を用いずにマルドゥーク軍の戦闘ポッドを破壊するほどのパワーを見せた。

ネックス機は敵艦隊に突入したグロリアの下に向かう際にガンドロイドへと変形し、大推力を活かして敵中突破を図った。

最終防衛ラインの攻防戦終盤には、単機で敵艦内に侵入、ミサイルやビーム砲をフルコントロールして敵艦を撃沈している。

▶バトロイドモード

▶ガンドロイドモード

▲VF-2SSやVF-2JAに比べてマッシブなフォルムが特徴のバトロイド形態。目に当たる部分はカメラスリットとなっている。

▶主翼は90度後方に移動して下方に折り畳まれる。また、腰部ビーム砲も収納される。

▲ガンドロイド形態では、バトロイド時に開いていた腰前部の装甲板が閉じる。

▶ガンドロイドでは、主翼や脚部側面のブースターノズルが展開され、推力を最大限に発揮できるようになる。

変形シークエンス(ファイター形態➡ガウォーク形態➡バトロイド形態➡ガンドロイド形態)

1

◀ファイターからの変形。脚部が展開し、腕部が左右に開く。

▼肩が機体外側に回転して移動し、上腕部が引き出される。

◀脚部変形の詳細。脛部が外側に90度回転し、つま先とかかとが伸びて開く。

2

◀腕部が前に出て、主翼先端とトレーサーパネルが変形する。機首のスピアを右腕に装着し、ガウォーク形態へ。

3

▼ガウォークからバトロイドへの変形。胴体が前後に折れて頭部が露出、腰部が下方に移動する。

▲主翼と脚部を変形してバトロイド形態へ。

4

◀バトロイドからガンドロイドへの変形。頭部を収納し、ヘッドカバーが閉じる。ビーム砲も展開される。

▲大腿部関節がわずかに収納されて足が閉じ、ノズルカバーが開く。

◀主翼からガンポッドを取り外し、小型バーニアの展開後、主翼が上がり、ガンドロイドへ。

マルドゥーク軍兵器

マルドゥークに従えられた ゼントラーディ系兵器群

機体解説

遭遇する異民族を次々と制圧していた戦闘民族マルドゥークは、ゼントラーディをその尖兵として利用した。同時に、マルドゥークは鹵獲したゼントラーディ軍の兵器を改良し、自軍の戦力として構築した。2091年の地球侵攻時に投入されたこれら巨人兵士用の機動兵器群は、マルドゥーク軍がゼントラーディを戦力の基幹に据えていたことを物語っている。

◀ゼントラーディ用パワードスーツ
マルドゥーク軍によって運用された、ゼントラーディ巨人兵士用パワードスーツ。ヌージャデル・ガーの系列機と見られ、随所に共通点が確認できる。

◀メルトランディ用パワードスーツ
マルドゥークに支配されたメルトランディが運用したパワードスーツ。かつてのメルトランディ軍系兵器とは大きく異なるシャープな外観が特徴である。

▲指揮用戦闘ポッド
指揮官クラスのゼントラーディ兵士が運用する、マルドゥーク軍戦闘ポッド。通常仕様の戦闘ポッド(右)から性能が強化され、形状も異なっている。

▲戦闘ポッド
マルドゥークに支配されたゼントラーディ兵士用の戦闘ポッド。かつてのゼントラーディ軍の戦闘ポッドの発展型とも推察されるが、詳細は不明。

◀可変戦闘メカ
統合軍との最終決戦に投入された、マルドゥーク軍可変戦闘兵器。人型(バトロイド)と戦闘機(ファイター)の2形態に変形が可能な新鋭機である。

サイズ比較

ゼントラーディ用パワードスーツ
メルトランディ用パワードスーツ
戦闘ポッド
VF-1J
指揮用戦闘ポッド

運用記録

地球に侵攻したマルドゥーク軍は、艦載機動兵器を主力として統合軍と交戦した。歌巫女(イミュレーター)の歌による戦意高揚効果とオペレーション・ミンメイの無力化もあって、統合軍を圧倒している。イングス艦隊による地球攻撃でも、これらの機動兵器群は統合軍に甚大な被害を与えた。

マルドゥーク軍はゼントラーディと同じく物量による人海戦術を用いた。その主力となったのは戦闘ポッドで、損害を出しながらも統合軍を圧倒している。

可変戦闘メカ

イングス艦隊に配備されていた、マルドゥーク軍の機動兵器。ビームキャノンやミサイル、ビームグレネードといった豊富な武装を有する。

▼▶バトロイド形態の頭部と背面。戦闘機形態の機首ユニットが折れ曲がって背部に位置する。

◀グレネード

▶戦闘機型

先端にビームキャノンとビームグレネードを備える右腕部は、前方に向けることが可能。また、脚部付け根にはビームガン、ミサイルポッドを備える。

▲ミサイルポッド

EXTRA REPORT
関連事項
小型艇

フェフの手引きでマルドゥークを離れたイシュタルが、地球降下の際に用いた小型艇。

パワードスーツ(ゼントラーディ用)

ヌージャデル・ガーとよく似た構造のパワードスーツ。武装は背部のプラズマキャノンと胸部のインパクトキャノンで、プラズマキャノンは上下に可動する。

通常部隊での運用のほか、イシュタルを捜索するためにフェフが編成した奇襲部隊にも少数が投入された。

◀腕部の先端には、5本指のマニピュレーターを備える。

◀背部のスラスターカバー内にはノズルが設置されていた。

◀▲背部から頭部に向けてプラズマキャノンが設置された。

パワードスーツ(メルトランディ用)

マルドゥーク軍に捕獲されたメルトランディ軍のパワードスーツと推察される。携行式のビームランサーとミサイルランチャー、インパクトキャノンを備える。

▲マニピュレーターは3本指だが、武器の運用には支障はなかった。

◀▲スラスターポッドが左右に張り出した構造はクァドラン・ローに近い。

指揮用戦闘ポッド

ゼントラーディ兵士用戦闘ポッドの指揮官仕様機。武装としてレーザー砲やとミサイルを装備し、武装とセンサーは通常仕様機に比べて高性能なものが搭載されている。

▶ミサイル発射口
機体後部の突起に誘導式ミサイルを内蔵しており、ハッチが展開して発射態勢をとる。

▲▼ミサイル

◀スタビライザーらしき突起物を備えるなど、通常の戦闘ポッドとは構造が異なる。

戦闘ポッド

マルドゥーク軍の主力機動兵器として運用されたゼントラーディ兵士用の戦闘ポッド。空間戦闘を重視した設計の機体だが、重力下飛行も可能で大気圏内でも運用された。

▲内部
機体の上半分がコクピットスペースになっており、パイロットはうつ伏せの状態で操縦を行う。

◀▶シンプルな形状で、機体側部のユニットは回転構造を有する。右は機体上部のコクピットハッチを開放した状態。

◀▲▶ミサイル発射口

デストロイド

改修された地球統合軍の二足歩行兵器

▲モンスターII
超大型の陸上非軌道兵器。大型キャノン、中型キャノンをはじめ、ミサイルポッドを装備した重武装のデストロイドで、その砲撃力は極めて高い。

▶ファランクス(改)
近接防御用として開発されたデストロイド。原型機は大気圏外用であったが、本機は火力や装甲を増強し、あらゆる環境下での運用が可能となった。

▶ディフェンダーEX
対空迎撃用のデストロイド。腕部の代わりに設置されたレールガンが主武装である。そのほか、腰部に複数の火器を備え、迎撃能力を高めている。

▶トマホークII
重装破撃型のデストロイドで、ビームキャノンをはじめ、火力の充実した機体。原型機であるトマホークに比べ、機動性能が向上している。

機体解説

地球統合軍は、可変戦闘機(VF)のほかにも、オーバーテクノロジーを利用した二足歩行兵器、デストロイドを数種類開発していた。機動性に優れたオールマイティタイプのVFに比べ、デストロイドはそれぞれ近接防御型、遠距離砲撃型など特定の能力が付与されているのが特徴である。また、大型の火器を装備したタイプが多いため、ローラータイヤやリニアレールを設置して機動力を確保していた。西暦2091年に姿を現した異星人「マルドゥーク」の侵攻に対しても、デストロイドがマクロス・シティに緊急配備されている。

サイズ比較

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶デストロイド

運用記録

西暦2091年、マルドゥーク軍の侵攻に際して、複数のデストロイドが出撃した記録が残されている。中でもモンスターII、トマホークII、ファランクス(改)、ディフェンダー EXといったデストロイドがマクロス･シティの統合本部ビル周辺などに配備され、マルドゥーク軍の迎撃と拠点防衛を担った。デストロイド単体では目立った活躍はなかったが、マクロス･シティに大きな被害が出ることを阻止している。

統合本部ビル前に配備されたデストロイド部隊。大気圏外から襲来するマルドゥーク軍を迎撃する役割を担った。

迫り来る大量のマルドゥーク軍部隊に対し、デストロイド部隊は迎撃を開始。だが、この戦いで多数のデストロイドが破壊された。

モンスターII

デストロイドの中でも最も大型の機体であるモンスターIIは、背部から背負う形で大型キャノン砲を6門、腕部の代わりに中型キャノン砲を8門装備。さらに、ミサイルポッドを2基設置し、高い迎撃能力を得ていた。

砲塔基部
大型キャノンの砲塔基部正面図。左右に3基ずつ砲が設置されているのがわかる。

▲地上ではホバークラフト走行、宇宙艦の甲板上においてはリニアシステムによって機動性能を得ていた。だが、その運動性能は鈍重であり、単独で遠距離を移動することはなかった。

◀長距離砲撃用の移動砲台として機能しているモンスターII。モンスター同様、頭部先端にある「目」のマーキングが特徴。

▲足裏
足裏にはリニアレールを備える。

ファランクス(改)

近接防御用の機体で、その特徴は、4基設置された大型のミサイルポッドである。それぞれ独立して可動し、あらゆる範囲に攻撃が可能となっていた。走行方式にはローラータイヤを採用する。

◀大腿部
大腿部の側面には、グレネードランチャーを装備。計4基のグレネードを一斉射することが可能で、ミサイルの迎撃などに効果を発揮した。

▶腹部
腹部先端中央には小型の砲塔を備える。可動式で、牽制などに用いられたと見られる。

ディフェンダー EX

腕部に大型のレールガンを4門備えた対空迎撃用機。腰部にも複数の火器を備えている。頭頂部に設置されたセンサーとカメラにより、優れた探知能力を獲得した。

◀センサー
頭頂部に設置されたセンサーで、回転機構を持つ。その中央部にアンテナが設置されているほか、カメラも複数装備されている。

▶武装
腰部に装備された2種の火器。左腰がミサイルポッドで、3基のミサイルを装填できる。右腰は2連装タイプの実弾砲である。

トマホークII

肩部のビームキャノンを主武装とする機体で、腕部にビームキャノンとレールガンを2門ずつ、その他ガトリングガンやグレネードを装備する。足裏にはローラータイヤを配していた。

◀脚部
膝の側面にグレネードを格納しており、使用時にはカバーがせり出す構造であった。左右計4基のグレネードを搭載できる。

▶レールガン先端
ビームキャノンの下部に設置されたレールガンの砲口。長尺のレールを用いることで、弾丸を高速で射出できるシステムとなっていた。

統合軍兵器

可変戦闘機の変化と発展の 狭間で生み出された兵器群

▼ガウォークロイド

VFの一形態であるガウォーク形態に特化した局地戦仕様。優れた対空性と機動能力を持ち、近接戦闘を得意とする機体である。

▲VF-XX

ゼントラーディアンバルキリーと呼ばれるVFで、その名の通り、ゼントラーディ専用機として開発された機体。

機体解説

西暦2090年代の地球統合軍は、巨大砲艦マクロスキャノンや旗艦ヘラクレスなどで編成された大艦隊を擁しただけでなく、VF-2SS バルキリーIIやVF-2JA イカロスといった可変戦闘機(VF)を前線に配備し、主戦力としていた。マルドゥーク軍との戦いでも、こうした戦力が惜しげもなく投入されたほか、VFの派生機ガウォークロイドやVF-2SSの原型機VF-XX(ダブルエックス)といった機種がサポート用として、また数種のヘリが後方支援用として運用されている。

VFとデストロイド以外の兵器は、物資等の運搬に使われるものが多かった。

ガウォークロイド等を投入することで、統合軍はその戦力に厚みを加えた。

開発系譜図(VF-XX)

VF-XX ▶ VF-2SS

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶統合軍兵器

運用記録

VFの派生・発展機であるガウォークロイド、VF-XXは、VF-2SS バルキリーⅡの原型機であり、グロリアの艦長バルゼー指揮下の統合軍防衛艦隊で運用が確認されている。モンスターⅡなどのデストロイドと共に、VF-2SS部隊のサポートを行ったが、VF-2SS部隊すら甚大なダメージを受ける状況下では、目立った戦果を残すことはできなかった。

グロリアを旗艦とした統合軍防衛艦隊は、月付近でマルドゥーク軍と交戦。だが、防衛線を突破され、地球への降下を許してしまった。

ガウォークロイド

VFにおけるガウォーク形態とデストロイドの要素をミックスした、非変形タイプの機体。遠距離移動には向かないが、多彩な砲撃兵器を備え、近接戦闘や拠点爆撃にその性能を発揮する。

◀底部から見た図。非変形タイプだが、VFのガウォーク形態とほぼ同様のフォルムだ。

▲機体後方を俯瞰した図。スラスターが機体上部、主翼下、脚部膝裏に設置され、優れた機体制御能力を生み出した。

武装

6連装ミサイルポッド
主翼両端に設置された6連装式のミサイルポッド。発射時にはカバーが展開される構造だ。

◀発射時
▲ミサイル

大型ミサイルポッド
肩ブロックに設置されたミサイルポッドで、本機中、最も大型のミサイルを計10発搭載できる。

◀発射時
▼ミサイル

ビーム砲
機首先端に設置されたビーム砲。砲軸は可動式で、左右から迫る敵を射撃することが可能である。

▲脚部裏

グレネード・ディスペンサー
グレネード発射装置で、腕部用は小型タイプ、脚部用は弾頭が4分割する多弾頭タイプを発射する。

◀拡大図

▼腕部グレネード

▼脚部グレネード

VF-XX

VF-2SS バルキリーⅡの前身となったとされるゼントラーディ用の機体。関節の駆動部にゼントラーディ系パワードスーツの技術を転用し高い運動性を有するのが特徴である。

▶バトロイド

VF-XXのバトロイド形態。VF-2SSと基本構造は共通だが、若干丸みを帯びたフォルムとなっている。ガンポッドも曲線を多用した特異なラインである。

統合軍ヘリ

統合軍が後方支援機として用いた2種のヘリコプター。救急ヘリは負傷者の搬送や緊急時の人員輸送に、複数のサーチライトを備えたジェット・ヘリは、デストロイドの運搬にも使われた。

▲救急ヘリ

▼ジェット・ヘリ

◀底部から延びるワイヤーに、モンスターⅡなどのデストロイドを懸架することができた。

▲ツインローター式の大出力エンジンを備え、高速移動が可能となっている。

救急ヘリは、マルドゥーク軍との交戦で負傷した兵士を病院まで搬送している。

関連事項

EXTRA REPORT

シャトルライナー

地球から月への移動に用いられた、民間用のシャトルライナー。単独での大気圏離脱能力を有していたと見られる。

▼後方部に設置されたブースターによって大気圏離脱能力を実現したと見られる。客室は、長く伸びた機首部分に設けられている。

シャトルライナーの客室部。神崎ヒビキとイシュタルが月へ向かう際に使用した。

統合軍艦艇

未知の異星人を迎え撃った 統合軍が誇る大艦隊

▲マクロスキャノン(主砲発射態勢)

統合軍はマルドゥーク軍との戦闘において、ミンメイ・ディフェンス、マクロスキャノンを切り札として作戦を展開したが、どちらも決定打とはならなかった。

艦体解説

ゼントラーディとの戦争から約80年。地球にて栄華を誇っていた人類は、統合軍旗艦ヘラクレス、戦艦グロリア、6,000m級の巨大砲艦マクロスキャノンといった巨艦を艦隊の中心に据え、歌の力を利用したミンメイ・ディフェンスを用いて地球を防衛する態勢を整えた。しかし、統合軍首脳部は異星人との戦闘における歌の効果を過信しており、その現状に問題意識を持つ者は少数派であった。様々な艦艇を有しながらも結果的に弱体化した統合軍の凋落振りは、マルドゥーク軍の襲撃により浮き彫りにされることとなった。

サイズ比較

SDF-1
マクロスキャノン
7000m 5000m 3000m 1000m 0m

Mechanic Sheet
メカニックシート

▶統合軍艦艇

運用記録

マルドゥーク軍との緒戦、統合軍は木星付近にデフォールドしてきた敵艦に対し火星軌道上に前線を形成。第17、18巡洋駆逐戦隊を迎撃に向かわせた。敵をはぐれゼントラーディ艦隊と認識していた統合軍はオペレーション・ミンメイを展開したが、敵の歌巫女の歌によって効果は無に等しいものとなり、作戦は瓦解。旗艦ヘラクレスを失う結果となった。

マルドゥーク軍の侵攻は凄まじく、第2戦は地球を背にしての戦いとなった。グロリアを旗艦とした防衛艦隊にはマクロスキャノンが4隻配属されており、戦闘の形勢は次第にマクロスキャノンを中心とした防空砲撃戦へと移行。統合軍はマクロスキャノンの砲撃により敵艦の半数以上を消滅させたものの、新たな敵艦隊が周辺宙域に出現し防衛線は崩れた。結果的に統合軍はマルドゥーク軍の圧倒的な戦力に打ちのめされ、マクロス・シティの上空に到達した敵に対し、地球存亡をかけた最終決戦を挑むこととなった。

統合軍はミンメイ・ディフェンスの力を過信するあまり、ヘラクレスを失うなどの被害を被った。だが、事態を深刻に受け止めた者は少なかったようだ。

旗艦グロリアを中心として、背水の陣で敵に臨んだ統合軍の防衛艦隊。しかし、圧倒的な数のマルドゥーク軍により防衛線は突破された。

マクロスキャノン

肩部分の砲身一門がブリタイ艦一隻分という超弩級砲艦。主砲発射時は変形する。確認されている6隻のうちバルゼー艦隊に配備された4隻は敵に大打撃を与えたが、敵の第2波の前に轟沈。残りの2隻は奇襲用にリザーブされていた。

◀ブリッジ

バルゼー艦隊に配備された4隻は、その砲撃で敵の第1波の60%を消滅させた。残りの2隻は地球に到達した敵主力への攻撃に回されたが、そのうちの1隻は急遽指令を受けた連合軍のエースパイロット、ネックス・ギルバートが艦長を務めた。

ヘラクレス

「地球統合軍の誇り」と呼ばれた統合軍旗艦。はぐれゼントラーディ艦隊と認識されていた小規模のマルドゥーク艦隊との緒戦で、あえなく撃沈された。

▶ブリッジ

戦線に投入された途端に敵の攻撃に晒されたヘラクレス。その様子はSNNのデニスとヒビキにより撮影されていた。

Mechanic Sheet

メカニックシート

▶統合軍艦艇

グロリア

機体解説

グロリアは、地球統合軍第12艦隊の旗艦で、対マルドゥーク戦を前線指揮したバルゼー提督の乗艦である。ゼントラーディ系の外観を持つ艦が多いが、それらとは異なるフォルムの数少ない統合軍艦艇だった。軍上層部がマルドゥークの情報を隠蔽する中、ムーンフェスティバルで模擬砲撃を実施しプロパガンダの一翼を担ったが、マルドゥーク軍との戦闘で撃沈された。

月で行われたムーンフェスティバルでは、他の統合軍艦艇と共に艦砲射撃のデモンストレーションを行い、その威容を見せつけた。

艦橋内は伝統的な統合軍宇宙艦艇のものに近く、多数のコンソールやモニターが配置されている。オペレーターは女性ばかりだった。

対マルドゥーク戦では、劣勢を強いられる中、敵の地球接近を阻止するため突撃を敢行。だが、マルドゥーク軍の猛攻に耐えられず撃沈された。

●艦長

バルゼー

▲統合軍の一般的艦艇となっていたゼントラーディ系艦とは違い、宇宙戦闘機にも似たシャープな意匠が特徴的。白系のカラーリングも同時期の統合軍艦艇にはほぼ見られないもので、艦艇の中でも異彩を放っていた。

◀▼艦尾だけでなく側面や艦底などに推進器が配置されていることから、機動力を重視した艦と思われる。艦尾の推進器は特に大型だった。

▶ブリッジ
艦橋後部に配置された2基の球形構造物は、三次元レーダードームである。

▲統合軍艦載ビーム砲
統合軍艦艇の共通装備と思われる、連装ビーム砲塔。非使用時は艦内に収納、使用時のみ展開するなど、技術的にはゼントラーディ系に近い。

統合軍標準戦艦

機体解説

ゼントラーディ系艦艇と共に、地球統合軍に広く配備された宇宙戦艦。有機的なシルエットからゼントラーディの艦のように見えるが、地球とゼントラーディの技術を投入、融合させた新設計艦である。第12艦隊などに配備され、対マルドゥーク戦に投入されたが、圧倒的な敵戦力の前に多数が失われた。

第2戦闘グループの第17、18駆逐戦隊には未配備だったようで、第12艦隊のものが対マルドゥーク戦に投入された。

技術融合で誕生した強力な新型艦だったようだが、マルドゥーク軍の前に次々と撃沈されていった。

▼ゼントラーディ艦に酷似したスタイルを持つ。艦首上の突起が艦橋、甲板中央の6つの半球構造物はビーム砲となっている。

▼船腹にはビーム砲と思われる半球状構造物8基を、艦尾下部構造物にもミサイルランチャーと思しきスリットを4つ配置。

▲艦尾にはメインスラスターのノズルが配置された。艦尾周囲に配置された構造物3基は、補助推進器と見られる。

Mechanic Sheet
メカニックシート
▶統合軍艦艇

SDF-1 マクロス

機体解説

SDF-1 マクロスは、第一次星間大戦ではボドル基幹艦隊を撃破した殊勲艦である。戦後は地球の象徴的モニュメントとなっていたが、常に稼働体制が敷かれ、戦闘艦としての機能は失われていない。マルドゥークの歌巫女イシュタルは、マクロスがマルドゥークを導く伝説の「アルスの舟」だと考えていた。マルドゥーク戦の最終局面で起動するが、交戦の末、艦体の大部分を失っている。

カルチューンプラザと統合軍ビルの間に位置。時折主砲がエネルギー暴走を起こし、「マクロス警報」が出された。

対マルドゥークの最終戦において、エクセグラン司令とシルビー・ジーナ中尉の独自判断で起動された。

地上では上半身相当部しか露出していないが、下半身部分も健在で、昔日の面影を強く残している。腕部相当部に接続されている艦はアームド級。

夕暮れに染まるマクロス。地球人とゼントラーディ人の共存を示す重要なモニュメントであり、街を外敵から守るための最終兵器としても機能した。

単独でマルドゥーク母艦に挑んだが返り討ちに遭い、マクロスは艦橋を残して失われた。

主砲発射シークエンス

主砲は艦首と腕部艦、脚部増設ユニットを併用したものに改修されている。システムの起動、チャージの開始、エネルギー出力の上昇、目標との距離修正と照準が行われた後、主砲は発射される。

▼マクロスブリッジ

初期からあった機構かは不明だが、マクロスの艦橋は脱出装置として機能する。艦橋単独での大気圏内飛行も可能だった。

ブリッジ後部。艦橋機能は主に前面にあり、後部や側部には通信機器やレーダーなどのシステム系が集中しているようだ。

小型艦艇回収救助艦

機体解説

航行不能となった小型艦を回収するための艦艇で、タグボート兼救助艇の一種と考えられる。宇宙で自力航行不能となった艦は、慣性飛行を続けるか、重力に引かれての天体落下、重力安定宙域での座礁といった憂き目を見るため、回収艦は重要な意味がある。宇宙での行方不明者捜索にも用いられた。

回収作業や救助を担当するためか、宇宙で目立つ白のカラーリングを採用するほか、突起物を中心に航行灯を多く設置。

艦艇の回収・牽引だけでなく、人員の救助・収容も行う必要性からか、艦体はスペース重視の箱型となっている。

▼箱型の艦体が特徴的。艦首上面の構造物が回収作業ブリッジ、艦体後方の右側にあるのがメインブリッジである。艦首手前バルキリーから、本艦のサイズがうかがえる。

小型艦回収が主任務のため比較的小型だが、それでも旧来の海上空母並みのサイズがある。

VF部隊フェアリーリーダーの3人が、隊長のシルビー中尉を捜索、回収するために使用した。

▼ブリッジ
回収作業以外で用いられるメインブリッジ。右側にフィン状の複合アンテナを持つ。左側はレーダードームと思われる。